
癒しの手

双葉 司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

癒しの手

【Nコード】

N1843Q

【作者名】

双葉 司

【あらすじ】

魔法の時代が終わったと考えられていたアンドーラの第一王女セシーネは、傷を瞬時に治してしまう不思議な力《治療の技》の持ち主だった。祖母の王太后はセシーネに施療院を設立し、その院長に就任するようにとの遺言を残してこの世を去る。

セシーネの父の国王ジュルジス3世はその遺言に頭を悩ませるが、王室付魔術師のガンダスの助言を入れ、結局施療院の設立を決断する。

《治療の技》を広めたいセシーネだったが、医学の師の従医長のべ

ンダーも《治療の技》の師ケンナスも《治療の技》には慎重だった。そして、大部分の人たちは魔法とも不思議な《治療の技》とも無縁の生活をしていた。

王太后の遺言（前書き）

主人公が不思議な力《治療の技》を発揮して周囲の人たちを体の傷だけではなく心の傷も癒していく物語です。

最初の舞台は中世のヨーロッパ風ですが、次第にアラブとインドのミックスしたような国も登場します。

長い大河小説になりそうです。主人公の成長もお楽しみください。

王太后の遺言

(序)

後世の歴史家たちのアンドーラ王国のジュルジス2世の王妃でジュルジス3世の母でもあるエレヌ・エンガム・チェンバースの評価は、低いものはジュルジス3世を生んだだけというものから、最大級のものはジュルジス2世と共にアンドーラ王国の繁栄の基礎を築いたと幅広いが、王国への貢献の一つとして施療院の設立を挙げたものは、数少ない。それは、建設物の価値基準とも似ていて、建設せよと命じた人物に重きをなすか、建物の設計をした人物を讃えるべきか、それとも実際に建設に汗を流した人々こそ名を残すべきだと主張するかの違いであろう。

だが、王立施療院の発案者は紛れもなくジュルジス2世の王妃エレヌ・エンガム・チェンバースその人であった。しかし、その建立の日を見ることはなかった。なぜなら、その提案は遺言書という形でなされていたからである。

国母エレヌ王太后は自分の死後のことを事細かに遺言に残していた。その中に施療院の建立とその院長の座にジュルジス3世の長女セシーネ王女がつくように指示された項目があった。

当初、国王ジュルジス3世は亡き母の遺言書なるものにいたく機嫌を損ねていた。国王は王太后の死後初めてその遺言書なるものを目にしたのだ。彼は実の母親からその死後について何の相談も受けていなかった事実には内心の怒りを隠せなかった。母を失った悲しみよりも、亡き母の最後の意思表示ともいえるそのやり方に腹をたてていた。それは葬儀の式次第から始まり、遺産の分与も小さな指輪の一つまで誰に贈るか指定してあった。その長文の中で数行が、施療院の建立という記述に費やされていた。

そもそも、国母とも称される王太后の葬儀は国家行事の一つである。その遺産の処分についても法律の分野であり、ましては、施療

院の建立は国家の政策といってもいい事柄である。国家にも影響を及ぼす遺言書を残すとは、政治好きな王太后らしかつた。

葬儀や遺産については故人の意思を尊重にするようにと指示をした国王も、施療院の建立には戸惑いを隠せなかった。病気やけがの治療をする施療院の必要性は十分承知していた。だが、問題は《治療の技》だった。《治療の技》が国王を躊躇させていた。切り傷を跡形ともなく瞬時に直してしまうその技は当時、ただ《治療の技》と名付けられていただけで、魔術なのかそうでないのかさえ確かなことはわかっていなかった。そして、厄介なことにその不思議な技の使い手が、世継ぎである王太子とその妹、第一王女であるということにあつた。その事実が国王にいつもの決断力を失わせていた。

いわゆる魔術と称するものが教会の管轄下にあるとは考えていなかった国王は、《治療の技》も同様に教会の分野ではないと思ひ、教会の司祭たちにそれについて意見を求めることはなかった。そして、國務卿をはじめ国政を司どる閣僚たちも国母の遺言という法的な根拠が曖昧な事柄に積極的な発言をすることもなかった。従ってせつかくの国母の提案も日の目をみることもなく、日々の雑事に埋もれて忘れ去られるはずだったが、思いもかけぬところから国母の提案に賛同者が出た。

いつもの決断力はどこへやら、珍しくぐずぐずと優柔不断な国王を説き伏せたのは、以前《治療師》のケンナスを見つけてきた王室付魔術師のガンダス・ローウィック博士だった。その当時、アンドーラで唯一、魔術の使い手でもあつたガンダスは、魔術について魔術を使えない他の者たちから尋ねられると答弁に使う論法で国王の説得を試みた。

「《治療の技》が一人にしかできなければ、人々はそれを不思議に思い、怪しんだり怖れたりするでしょう。ですが、陛下、《治療の技》を使えるものが百人いや、千人いたらいかがでしょう。《治療の技》は不思議でも何でもなく、人々は当たり前のことと思うものです」

今はなき王太后の反対を振り切ってガンダスを王室付魔術師に任命した国王は苦笑いをし「ガンダス、そのような詭弁で私を言いくるめようとするな」

「詭弁ではございません。確かに初めて《治療の技》を見たものは驚き、中には恐れたりするものもありましょう。それが、日常茶飯事に見るようになれば、人々はそれを自然なことと受け入れるようになるのです。ましては、その技を使えるものが大勢おれば、特別なことと考えなくなりましょう」

「それはどうであろうな。」と国王は相変わらず煮え切らない。

「陛下、ならばなぜこの私を王室付魔術師に任命なさったのですか？ 魔術や《治療の技》がこの世に存在するとお考えになったのではないのですか？」

「そう、私を責めるな、ガンダス。確かに、そなたのいう通りかもしれない。《治療の技》を使えるものが大勢おれば人の見る目も変わってくるかもしれん。だが、《治療の技》を使えるものが。他にもいると思うか？」

「探せば、他にもおるはずです」

「そなたならそのようなものを見つけられるであろうな」とガンダスの不思議な能力を知っていた国王は幾分か期待を込めてたずねた。「必ずや、見つけて参りましょう」とガンダスは国王に請け負った。そのようなわけでガンダスは、《治療の技》を使える《治療師》を探す旅に出たのだった。

よくよく考えて見れば、《魔術師》のガンダスの存在自身が不思議だったが、国王は、それについて周囲のものたちに異論を許さなかった。国王の重臣たちも「政治」には口を挟まないガンダスを容認していた。当時のアンダーラでは《魔術師》は微妙な存在で、ガンダス自身も自分のおかれた立場をよくわかっていて、ある時期、まるで道化のようにふるまっていたことすらある。だが、国王はガンダスの魔術の力でなく、その豊かな学識と深い洞察力を買っていた。国王が表だってガンダスの助言を聞くということはなかったが、

《治療の技》に関しては、ガンダスは自分の領分だと思い、珍しく自分から面会を求めてきた。王太后の遺言に頭を悩ませ、勅命を発してその遺言を無効にしようかとさえ考えていた国王は、ガンダスの密かな提案にうなずいた。

そして、ガンダスも何の勝算もなく国王に約束した訳ではなかった。ガンダスには不思議な力を見抜く眼力が備わっていた。

だが、ガンダスの《治療師》を探す旅で見つけたのは何人かの《治療師》になりそうな《治療の才》のある子供たちだけだった。その報告を受けて国王は、「ガンダス、千人は見つからなかったな」といつて笑った。確かに《治療師》を探すのは国王の勅命である。しかし、世間の人々の「魔法」に対する反応を熟知していたガンダスは慎重だった。ガンダスは旅の間、魔術師とは名乗らず、国王に仕えている学者と称していた。まあ、ガンダスはアンドーラ王立大学の博士号を持つ身分でもあるから、身分偽称ではないが、やはり魔術師と名乗れないことは本意ではあった。

しかし、意外なことに国王は、治療院の設立を決定した。国王の心境がどのように変化したかは、正式な記録には残っていない。

国王が決意した以上、それは国家事業である。ただ、この事業に關しては、慎重を期する必要があった。不思議な《技》を使う《治療師》をどう扱うべきか、国民たちの反応が気になる国王であったが、ガンダスの助言を入れると、第一王女セシーネが王太后の遺言通り王立治療院院長に就任することを決定した。だが、この決定には、セシーネの兄であるエドワーズ王太子が不満を申し立てた

「僕にだって《治療の才》はあります」

王太子の主張に国王は、片方の眉を上げただけだった。そして、王位継承者第一位の申し立てをあっさり却下した

「王太子、王太子の役目は、病人やけが人の治療ではなからう。まあ、ばあさんの遺言はセシーネにやらせろということだな」と国王は、セシーネの院長の就任が王太后の遺言であることを強調した。

エドワーズは、内心の喜びを隠してすました顔をしているセシー

ネをにらみつけ、再び、国王に問いただした

「では、僕の役目とは何ですか」

エドワーズの質問に、国王は意外なことを言った。

「まあ、結婚することであるうな」

エドワーズは国王の言葉に当惑気だったが、セシーネの頭の中は、これで《治療の技》を思う存分使えるという思いでいっぱいだった。エドワーズの結婚なんてどうでもよかった。それに婚約者がいるということは、いずれ結婚することでもあった。しかし、エドワーズは、父親の国王に食い下がった

「いえ、そうではありません。そうではなくて、施療院というか、《治療師》というか、つまりセシーネはまだ子供じゃありませんか」
セシーネは自分を子供扱いする兄に抗議した

「子供じゃないわ、お兄さま、いえ、王太子殿下、私だって、宣誓式で忠誠の誓いをいたしましたの、お忘れになった？それにケンナス先生のおかげでずいぶん腕をあげたのよ」

エドワーズはセシーネの言葉に納得していなかったが、国王は厳かに自分の世継ぎであるエドワーズ王太子にこう告げた。

「王太子、余の決定に不満があるようだったら、自分が国王になってから、自分を院長なり何なりに任命すればよかるう」

これでエドワーズも引き下がるしかなかった。しかし、セシーネに「セシーネ、施療院の院長になるという事は《治療の技》を見せびらかす事ではないぞ」と釘を刺すの忘れなかった。

(1)

セシーネが《治療師》のケンナスから《治療の技》を学び始めた頃、兄の王太子エドワーズも一緒だった。最初はむしろエドワーズの方が熱心だったし、二人の教育のため、従医長のカルーン・ベンダー博士の提案で造られた図や人体模型で身体のいろいろな器官の名称やその機能を覚えたのもエドワーズの方が早かった。だが、羊の「解剖」で、エドワーズはつまずいた。

その「解剖」での彼の役目は、従医長のベンダーが切り取った内臓や肉を秤で計測することだった。エドワーズは、羊の血だらけのもも肉を秤に乗せ、錘で重さを量りながらぼやいた。

「まるで、肉屋にでもなつた気分だな」

ただ、眺めているだけのセシーネは、無邪気に兄に尋ねた

「ニクヤつてなんなの？お兄さま」

エドワーズに代わり、治療師のケンナスが教えた

「人が食べる肉を売る商人のことですよ、王女さま」

「王女さまはやめて、ケンナス先生。セシーネと呼んで下さいな」
セシーネは何度か頼んだことをもう一度、口にした。

ケンナスは、はにかんだように微笑んでうなずいた

「わかりました、セシーネ」

それ以来、ケンナスは、彼女の師匠として振る舞う時には、セシーネ王女をセシーネとよぶようになった。

そして、王太子のエドワーズは、解剖にそして医学にも興味を失った。彼自身他の王太子としての勉強すなわち次期国王としての勉学に忙しくなつたからでもあつたが……

アンドーラ王国とつて幸いなことに《治療の才》はセシーネの方が力は強かつた。次期国王が《治療の技》に長けているよりも、もっと必要なことがあるにはあつた。そして、当然のように第二王位継承者であるセシーネは、従医長のベンダーと治療師のケンナスからは医学と薬学を学んでいった。それについては、色々意見を国王や王太后に述べるものもいたが、国王は取り上げなかった。

《治療師》という呼び方は国王が名付け、国王自ら、ケンナスにこう告げた

「ケンナス、そなたは医師ではない、これからは《治療師》ケンナスと名乗るように」

当時のアンドーラの法律では、大学の医学部を卒業しなければ、医師と名乗る事はできなかった。だが、ケンナスは独学で医学を学んでいた。その見識については、従医長のカールン・ベンダー博士

が保証し、また、ケンナス自身も《治療の技》に頼ることは危険で、むしろ、医学の知識が必要だと国王や王太后を説いた。ケンナスはアンドーラの最も権威のある二人の前で悪びれず

「どんなケガでも病でも治せる訳ではございません。薬を使う時もございます。むしろそちらの方が多うございます」と言った。

王太后は幾らか疑わしげではあったが、従医長のベンダーの助言もあって、《治療師》ケンナスは、エドワーズとセシーネの《治療の技》の教師となった。国王としてあるいは父親としてジュルジス3世の望みは、幼いエドワーズとセシーネがナイフでお互いを切り合つては、その傷をふさぐような事態は避けたかっただけだった。

ケンナスはエドワーズとセシーネの二人に彼の許しなしに《治療の技》を使うことを禁じ、これは国王陛下の命令だといった。どこと行って特に人目を引くような所もない平凡な感じの男にしか見えないケンナスをエドワーズは、不審そうに見つめ、小さい胸を精一杯そらせると「勅命と言うんだよ」

ケンナスは

「ええ。そう思って下さい。約束ですよ、いいですね」

エドワーズとセシーネはケンナスにとりあえず約束した。年長者には、礼儀正しく接するように王太后から、きつく言い渡されていた。ケンナスは、二人にこう付け加えた。

「間違つて傷をつなげると、とんでもないことになりますから」

「どうなるの？先生」とセシーネは無邪気に訊ねたが、エドワーズは相変わらず不審なようだった。ケンナスは

「指が曲がる向きが違っていたら困るでしょう、こんなふうに」

ケンナスは人形の人差し指をナイフで切り取ると、のりで甲と手の平と向き変えてつないで見せた。

「ちゃんと握れませんか」

エドワーズは目を丸くして「本当にそんなこともできるのか？切れた指をつなげることも」

「ええ、私のいう通りにして下されば、出来るようになるかもしれ

ません」

「出来ないかもしれないのか」

エドワーズは落胆し《治療師》に興味を失いかけていたが、セシーネはケンナスに尋ねた。「でも、先生は出来るんでしょう?」

ケンナスは、はにかんだように微笑んだ。「ええ、指ではありませんけどね」

「何をつないだの?先生」

ケンナスは自分の左腕の肘と手首の中ほどを右手で切るような仕草を試みせ、「腕をここから」

エドワーズもセシーネもそれには驚き、

「すごい!本当か」

とエドワーズは敬意のこもったまなざしでケンナスを見つめた。

こうして、二人はケンナスから一日、一時間だけ《治療の技》を学ぶことになった。

むろん、父である国王は、王太子と第一王女の二人を《治療師》なぞにするつもりはなく、互いに切り傷をつけあつては治療する二人の危険な遊びを止めさせられれば、それだけでよかった。

だが、国王の思惑とは別に《治療の技》を禁じられたセシーネの体調が悪くなった。元々、病弱だった王女が熱を出したのだった。数日、セシーネの高熱が続き、従医長のベンダーは、セシーネの診察をした後、思いあまり、《治療師》のケンナスに相談した。セシーネの病状を聞いたケンナスは

「ひよつとしたら、《力》が溜まっているからかもしれない。説明が難しいのですが《治療の力》が体に溜まるところになった時があります」

ベンダーは、国王に進言し、そして《治療師》ケンナスの言葉通り、セシーネの熱は、ケンナスが、自らナイフで傷つけたケンナスの腕の傷をふさぐと、数時間後に平熱に下がった。

この深刻な事実で国王は、ため息をつき、他に治療法はなかったのかと従医長と《治療師》に問いただした。ベンダーは顔をふせ、

ケンナスは、返答に躊躇した。国王は二人に「かまわぬ、有り体に申せ」と促した。

国王に促され、ケンナスは確實ではございませんかと前置きしてから、《治療師》独特の診察法について説明した。ケンナスはそれを《見立て》と呼んでいた。《見立て》をすると《治療の力》が若干、放出されるのではないかと、また、《治療の技》は本人自身には効かないことなどを語った。国王は、再び重いため息をついた。

だが、ケンナスの言うところの《見立て》はセシーネの発熱に効果があった。その前に、エドワーズがこっそり隠れて《治療の技》を使っていないことも慎重かつ厳重に調べられた。

そして、ケンナスの授業は、セシーネとエドワーズと別々に行われこととなった。セシーネはエドワーズがケンナスからどのような教えを受けたかはあまり興味がなかった。4才のセシーネにとって《治療の技》を学ぶことは、遊びの延長線だった。《見立て》をし、人体図で病に冒されている箇所を指摘すればよかった、祖母の王太后の病気を発見するまでは……

国母と尊称されたエレーヌ王太后を看取った後、キルマ・パラボン侯爵夫人は女官長を辞し、表向きは、王太后の遺言となっていたが、国王の密命を帯びて救貧院の院長の職に就いた。文官の定年制からいえば、とうにその時期をこえたキルマにとって損のない処遇だった。

救貧院は亡くなった王太后が王太子妃時代に彼女の発案で困窮者の救済を目的に設立されたが、聖徒教会の修道院だった建物と修道女によって成り立っていた。先王と現国王と二代に渡って女官長をつとめたキルマにとって救貧院の院長の職務をこなすことなどたやすいことだった。そして、国王から密かな命を受けたという事実がキルマの自負心をくすぐって彼女は王都の外れに位置する救貧院で機嫌良く過ごしていた。

その平穩が破られたのは、王室付魔術師ガンダスがみすばらしい一団を引き連れて救貧院に現れた時だった。キルマにしてみれば、ガンダスはいつも厄介の種だった。それは、魔術師という肩書きは職業なのか、身分なのかそれとも人種なのか分類は定かでないが、魔術師と名乗るガンダスの気まぐれな言動は、キルマの計算を狂わせた。今回も突然、見るからに身分の高いとは到底思えない一行を連れてきてその面倒を見るようにとキルマに半ば命令口調で押し付けようとした。キルマは当初それを断ろうとしたが、ガンダスは、これは勅命なのだと言目をつぶってみせた。国王の威光をかさにかけることは、キルマは嫌いでなかったが、その逆は不愉快だった。「ガンダス、軽々しく勅命などというのは、どうかと思えますね」「キルマ夫人、お前さんは今、どんな職に就いている?」「救貧院の院長を拝命しておりますが」「だったら、彼らの面倒を見るのはお前さんの役目であろうて、彼らが裕福に見えるか?」

キルマは、彼らが餓えて死にそうにも見えないと言い返そうと思っただが、ガンダスが何を企んでいるか探るのは、彼らを預かり、彼らから聞き出した方が手っ取り早いと計算し、ガンダスの申し出をしづしづ承知した。

「わかりましたよ、ガンダス。食事と休む場所の世話は、いたしますが、彼らが、何か面倒を起こしたら、責任はあなたにとっていただきますよ、いいですね」そしてキルマはかれらとガンダスが何日も体を洗っていないような臭いをさせていることを思い出し「それから、ここに居るのなら、体は清潔にしてもらいます」と付け加えた。

「お前さんなら、そういうだろうと思っただよ」とガンダスはわけありげにニヤリとした。

しかし、子供たちも混ぜていたガンダスの連れたちは、何のためかこの王都にやってきたかそして、ガンダスの正体さえも、その答えは要領を得なかった。キルマはまた、ガンダスにしてやられた

という腹立たしい思いだったが、それを人前で口に出すほど愚かではなかった。そして、当事者の彼らさえ、自分たちがなぜガンダスここに連れられてきたのかよくわかっていなかった。

結局、キルマがその理由を知るのは、ガンダスが今度は、近衛兵たちに先導されて第一王女たちとともにやってきた後だった。

ガンダスの見つけ出した子供たちが、救貧院にいと叔父のランセル王子から聞かされたセシーネは早速、ガンダス、《治療師》ケンナス、従医長のベンダーとともにそして、これは国家事業だと言いつのるランセルも加わって救貧院に向かった。

騎乗の近衛兵たちの後にセシーネたちを乗せた馬車が救貧院の門を過ぎ、玄関に横付けされた。玄関にはセシーネも知っている人物が馬車を出迎えた。女官長だったキルマ・パラボン侯爵夫人だった。セシーネはキルマの登場に緊張をしたが、ランセルはセシーネを制し馬車から飛び降り、元女官長に近づくと

「まだ、いたのか？キルマ」

「わたくしは、ただ、国母さまの命に従っているだけでございます、殿下」

「ご苦労なこつたな」

ランセルの元女官長に対する皮肉っぽい口調にセシーネは内心驚いたが、無表情をよそおった。ランセルは

「客人たちはどこかな？キルマ」

「お客様をもてなすようにはうかがってはおりませんが……」

「ガンダスが連れてきた連中のことさ。彼らは別にただの食事にありつこうとここに来たわけではない。大事な用があつてはるばるとこの美しい王都にやって来た。案内してもらおうか」

ランセルが院長室で彼らに会うとキルマに命じた。キルマは、一緒に出迎えた灰色の修道服を着た中年の小太りの修道女に彼らを呼んでくるように言いつけた。院長室に入ると、ランセルは、露骨に

キルマを追い払おうとした

「君は、お恵みを求めてやって来る連中の面倒でも、みにいったらどうだ、ん？」

ランセルの言葉にキルマは、細くギスギスした顔をこわばらせ、少し背筋を伸ばしたようにセシーネには思えた。

「わたくしは、国母さまから、救貧院の院長に任命されました。いくら殿下でも勝手なことをされては困ります」

「母上はもう死んだんだ。君だって葬儀には出たんだろう？まあ、世の中はいろいろ変わってくるのさ。俺たちが何をするか詮索するより、自分の仕事に戻るんだな。心配するな、君のこの部屋を少しの間、借りるだけさ」とランセルはキルマに行けとばかり手を振り、渋々院長室を出ていくキルマに追い打ちをかけた。

「施しをする奴らが、王家領のものか確かめておくんだな」

キルマは振り返りもせず、足早に立ち去った。

「あいつ、俺たちに対する礼も忘れていやがる」

セシーネは、ランセルのキルマへの態度に不審を抱いた。元々“第三王子”は、言葉遣いは乱暴だったが、これをランセル王子は武官風なのだといっていたが、セシーネは「叔父さまは、キルマが嫌いなのか」と尋ねてみた。ランセルはそれには答えず

「豪勢なもんじゃないか、え？」と院長室を見回し「ここは初めてか？セシーネ」

「この部屋は初めてよ、叔父さま」

確かにランセルの言う通り、玄関から通ってきた廊下比べると、院長室の中は贅沢な家具調度が備えられることがセシーネにもわかった。先ほどの修道女に案内され、男たちが院長室に入って来た。ランセルが「子供たちは？」と訊ねると修道女が「連れて参りましたよるか？殿下」

「いや、後で会おう。あの子たちの面倒をよく見てやってくれ。大事な子たちなんだ、アンドーラの将来にとってな」

修道女は、にっこりと肯き「かしこまりました、殿下」と膝を折

る高位に対する正式な礼をすると院長室を出ていった。室内には、セシーネたちと、貧しい身なりをした男たちが残された。ランセルは、落ち着かなげに部屋の隅に寄り添って立っている男たちを見やり、声を掛けた。

「氣を楽にしてくれたまえ。君たちは、全員、兵役義務を果たした、善良なアンドーラ王国国民であることはわかっている。階級章を見ての通り俺は、ランセル少佐だ」

セシーネは、この時ややっと叔父が軍服なのかわかった。アンドーラでは、見知らぬ男たちが親しくなる話題の一つが兵役だった。ランセルの言葉に男たちの一人が思いきったように少し前に進み出ると

「自分は伍長でありました」と軍隊式に敬礼をした。ランセルも敬礼を返し、

「アンドーラ王国のためご苦労であった。だが、今回、ここに集まってもらったのは兵役についてはない。ついで言うとなんは国王陛下の二番目の弟という有り難くない身分でもある」

男たちは再び落ちつなげにそわそわし始めた。

「先ほども言ったが、氣を楽にして聞いてくれ。俺はあまり礼儀作法にうるさくないんだ。まず、連れの紹介からさせてもらおう。まず、こちらはガンダス。税収役人のように見えるが、実は王室付魔術師だ」

文民服を着たガンダスが苦笑いしながら彼らに大げさにお辞儀をした。ランセルは続けて、従医長のベンダー博士、治療師のケンナスと紹介すると元伍長が怪訝そうに

「治療師？」他の男たちも互いの顔を見回した。ランセルは

「治療師については、今、紹介が終わったら、説明しよう、後、こちらがケンナスの弟子で治療師見習いのセシーネ。ケンナスの弟子でよかったかな？」

「ベンダー先生にも、色々教わっています」セシーネは、殿下と付け加えようかと迷ったが、余計なことはいわない方がいいかと口を

つぐんだ。ランセルはきびきびと尋ねた

「君たちは？とりあえず名前を聞こうか」

まず、元伍長が、

「自分は、セルベックであります」と名乗り、続いて男たちはそれぞれ名前を名乗った。それにランセルは一人一人に肯いて答え、その後、治療師について説明をした。《治療の技》については省略した。セルベックたちはまだ納得がいかないようだったが、セルベックがおずおずと

「つまり、医者ということありますか？」と、どうやら、セルベックは《治療の才》がある子供の親たちの代表をかって出たようだった。

ランセルが、正確に言うのと前置きし、《治療師》は医者とはよべないかもしれない。法的には、王立大学の医学部を卒業し博士という学位を取らない医師と名乗れず、また、学位とは、軍隊で言う階級みたいなもので、学士が下士官なら、博士は士官みたいなものだ。今度、新しい法律が出来、《治療師》も医師のように病気やけがの治療が出来るようになること、《治療師》はそう言った治療がうまいんだといった。

「絵のうまい奴が絵描きになるみたいなものだ、諸君たちと一緒に来た子供たちは病人の手当がうまいんだ」

男達はまだ怪訝そうだった。セシーネは《治療の技》を見せればいいのに思ったが、黙っていた。カルバントスと名乗った男が

「それがどうしてわかるんで？」

「ガンダスには、それがわかるんだな、何しろ魔法使いだからな」「魔術師と呼んでほしいですな、殿下」とガンダスが訂正した。ベンダーがよろしいでしょうか、殿下と断ってから、実際に《治療の技》を見せた方が早いではないでしょうかと言った。

「陛下には、ご許可をいただいております」とベンダーは付け加えた。《治療の技》を知らない人間には《治療の技》を見せるには慎重を期す必要があった。

セシーネは《治療の技》を自分にさせてほしいと思ったが、ランセルたちは何もセシーネには言わなかった。ふいにガンダスが空中からナイフを取り出しケンナスに手渡した。セルベック達がぎよつとしたが、ガンダスのちよつとした「手品」になれていたベンダーは落ち着き払って自分の服の袖をめくると、ケンナスに「頼む」と言った。セシーネは少しがっかりした。セシーネは傷を治すことも出来たが、ナイフを使わずに体に傷をつけることも出来た。これは《治療の技》を逆に掛けるだけでよく、エドワーズには出来ない技の一つだった。

セルベックたちが怪訝そうに見守る中、ケンナスがナイフでベンダーの腕を切りつけると2インチほどの切り傷から血がにじみ始めた。ベンダーが、平然と傷口を、息をのんでいるセルベックたち一人一人に見せた。よろしいですかなと言うと、ケンナスは《治療の技》でゆっくりとベンダーの傷をふさぎ始めた。セルベックたちは目を見張り、中には口に手を当てるもの、あえぐものもいた。ケンナスが傷をふさぎ終わると、ベンダーは男たちに腕を見せた。一人が傷跡もないと呟くと、ベンダーが、それが《治療の技》の不思議な所だと言った。セルベックは小声でガンダスに魔法ですかい？と聞いた、「人は説明の出来ない不思議なことがあると、魔法と言いたがるものじゃよ。だが、魔法は不思議でも何でない。」とガンダスはいつも繰り返している事を言った。

「あなたにはそうだろうな、ガンダス。アンドーラ王国は、魔法を法的に認めている国でもある。今度は《治療の技》を合法と認めるわけだな」とランセル。セルベックはどういう事なのか自分にはわからないとつぶやいた。ガンダスはセルベックに

「お前さんには、太陽が毎朝、東から昇り西に沈むことの説明がつくかね？それを魔法とは呼ぶかね？」

セルベックは首を振った。ガンダスは、続けた

「お前さんたちの一緒にここに来た子供たちは《治療の才》がある。つまり、今このケンナスがやって見せたようなことができるんじゃない

な」

セルベックたちはまた、目を見張った。

ベンダーが、わたしには、こういう傷の治し方はしません。縫い合わせます。今ぐらいの深さだと縫わなくても、治りますがとなぜかベンダーは苦渋に満ちた表情を浮かべた。セシーネはふとベンダー先生は自分に《治療の才》がないことを残念がっているのかしらと思った。ケンナスは

「わたしは事故を防ぎたいだけで」

「事故？」とランセル

「ええ、子供たちが勝手に今みたいなことをして大けがをされては困ります。《治療の技》は何でも治せると言うわけではありません。また、《治療の才》があっても、どの程度なのかもわかりません。普通の医学を学ばせるおつもりでいたほうがいいでしょう。どの病気にどんな薬がいいとか、傷口を糸で縫う方法も教えます。ただ、向き不向きはあります」とケンナス、セルベックが

「向き不向きとは？」と、

「こういったことは好きでないとな、そういうことだろう、ケンナス？」とランセル。ケンナスは肯いた。ランセルは「とりあえず、一年間こちらのケンナスに預けてくれ。悪いようにはしない。文字の読み書きとか、そうだ、算術も教えよう。むろん《治療の技》もな」ランセルがそう言うのと、ケンナスがその前に子供たちに会いたいと言ったが、セルベックは、

「こつちのお嬢ちゃんにも同じようなことが出来るんですかい？」

セシーネは当然よと言おうとしたが、代わりにケンナスが多少のことは出来ると答えた。ケンナスの言葉にセシーネは不満だった。ケンナス先生たちは《見立て》ばかりさせるんだもの。《治療の技》を試す機会なんて滅多にないのに……

もう少し詳しい話を聞きたい、親たちから頼まれた以上自分には責任があるというセルベックにガンダスが、取りなすように

「親たちが王都まで来られませんでしたから、殿下」

ランセルが殿下はやめてくれ、じゃないとあんたを閣下と呼ぶぜ、俺は王子という身分にうんざりしているんだといった。

ベンダーが咳払いをした。

ランセルは、「セルベック、君は責任感が強くて結構だが、子供たちに会ってから改めて詳しい話をしよう。《治療の技》は俺だつてよくわからない。問題は費用つまり、金だろう。」

セルベックは、それほど楽な暮らしをしているわけではないんで申し訳なさそうに言った。わかっているさとランセルは

「陛下だって、民の暮らしを楽にしたいとは考えてはおられる。この《治療師》という制度もその一つだな」

そういう難しいことはわかりませんが……というセルベックに、ランセルはとりあえず子供たちに会おう、子供たちの話も聞きたいと言った。

ガンダスとセルベックが子供たちを呼びにいつている間、ランセルはケンナスに子供たちの前ではあれはやめておいた方がいいだろうな、まねをすると困るからなといい、そして、セシーネの方を向いて

「セシーネもわかっているだろうな、見せびらかしたりするな」と念を押した。セシーネはそんなことはしないと答えたが、品よく答えた。

「わかりましたわ、殿下」

ランセルは眉を上げただけだった。

子供たちがぞろぞろと院長室に入って来た。セシーネが数えるところちようど十人いた。予想していたより大きい、しかも女の子は一人だけねとセシーネは思った。セルベックが子供たちに行儀よくするんだと言った。ランセルが笑って

「君は新兵の訓練をしていたのか？セルベック」

「いえ、工兵でした。親父が、木工師でしたから、あの少佐殿」

「物覚えがいいな、君は」とランセルはきよろきよろしている子供たちに

「さて、君たちの名前から聞くところか」

ベンダーが《治療師》について説明すると、ただ、子供たちの中で、一番の年少らしい少年が尋ねた

「ケガや病気を《魔法》で直すってこと？」

ガンダスはおもむろに

「《魔法》とは、ちょっと違うな。魔法使いになりたいのか」

少年は熱心にうなずいたが、ランセルは

「俺もなりたかったがなれなかった。残念だな。ところで、こちらにいるケンナスがアンドーラ王国でただ一人《治療師》と名乗っているいい人物なんだ、今のところはな。君たちもなってみたいかな？」

さっきの少年が

「魔法使いのほうがいいや」

「ガンダス、この子は、なれそうか、《魔法使い》か《魔術師》に？」

「さあ、たぶん無理でしょうな」

少年はがっかりしたようだった。

「他は、どうだ？」

ランセルの質問にベンダーが遮った、

「よろしいでしょうか？」

ランセルが肯くとベンダーは

「《治療師》はなりたいか、なりたいとかではなく、《治療の才》があるかどうかで決まります。まずは、ケンナスが申し上げた事故を防ぐことから始めたらいかがでしょう」

「それもそうだな。でも、ベンダー、この子たちの気持ちも確かめておきたいんだ。中にはいやだというものいるかもしれない」

まあ、しばらく様子を見ましようとガンダスがいい、子供たちを院長室から連れ出した。

その後、セルベックや他の父親たちと話し合った結果、このまま半年間救貧院に滞在し、ケンナスの指導を受けることに決まった。

この話し合いは、ランセルが主導権を握り、セシーネは口を挟むことはなかった。

こうして、王立施療院の設立の第一歩が踏みだされた。ただ、この時のセシーネ王女は、これで思う存分《治療の技》を使えるという事ぐらいに単純に考えていた節がある。だが、この国家事業には、《治療の技》や医学以外の見識が必要だった。それは政治だった。この方面のセシーネ王女の才はまだ、未知数だった。

それからのセシーネの日課は、午前中は施療院の予定となっていて救貧院で《治療の技》について学び、王宮で施療院の設立・運営について勉強することとなった。これは、誰に指示された訳ではなく、ケンナスは救貧院に泊まり込んでしまい。またベンダーも朝の診察がすむと救貧院にいつてしまうので必然的にそうだったのである。《治療の技》に関していえば、ケンナスもベンダーも、医学や薬学の知識を含めて《治療の技》と呼びたがっていた。

薬草学では、救貧院で薬草園の管理をしていたモリカが役に立った。モリカは、小柄でぼつちやりした中年の女性で

「そう、贅沢なお薬はあまり使えませんでしたからね、王女さま」と礼儀正しくはあったがセシーネの薬学の欠点を指摘した。

「王女さまは止めてくださる？モリカ先生」

モリカは、怪訝そうに

「先生？」と繰り返した。そこでセシーネはモリカにこう説明した。亡くなった祖母の王太后から人にものを教わる時は、先生と呼ぶようにといわれていたこと、また、年長者に対して礼儀正しく接するようにいわれていることなど手短かに話した。そして自分のことはセシーネと呼んで欲しいといった。モリカは戸惑ったような顔をして「そうおっしゃるなら、そういたしますけど、私だって教えていただきたいことがございますけど」

《治療の技》のことなら、ケンナス先生に伺った方がよいと思うとセシーネは言ったが、モリカはそれもあるんですがと言いよどみ

「ここに残っている病人のことなんですが、どうなさるおつもりか、
うかがっていらしゃる？」

「陛下が？」

モリカは心配そうにうなずいた。無慈悲に追い出したりはしないとセシーネは請け負った。

救貧院については、移転か廃止かまだ決まっていなかった。

「お父さまが嫌いなのは、働くことが出来るのに働かない者たちなの。勤勉と質素という言葉がお好きなの」

そして、もう一度、自分をセシーネと呼んでくれとモリカに頼んだ。これは、謙虚というだけでなく、他の理由もあることをモリカに教えた。

「魔女狩り？今時そんな事する者が？」と、モリカは目を丸くして驚いた。

「むろん、アンドーラではないの、よその国ですけどね」

モリカは首を振り、誰もあなたのことを魔女だなんて思ってもいませんよと言った。セシーネがにっこりと微笑むとモリカも微笑み返した。

セシーネはどうやら、モリカとはうまくやっていけそうだと思った。だが、自分のことを魔女だと思っている人々もいることも知っていた。

病人たちの処遇については、セシーネは、その日の夕食の食卓で、父の国王に確認をした。王家では十二歳の誕生日を過ぎると夕食は国王と同席するのが習慣となっていた。国王は、あそこに残っているのは、他に行く当てのない者たちばかり、どのみち、施療院は病人の治療をするところだと答えた。そして、どっちが熱心なんだと聞いた。

「どっちって？お父さま」

「ベンダーとケンナスが、病人たちの治療にさ」

ケンナス先生は、見習たちの教育に忙しいのでベンダー先生かな

とセシーネが答えると、国王はやはりなとつぶやいた。

「ところでお願いがあるの、お父さま」

「解剖か？危なさそうなのがいるのか？」

エドワーズが、食事中にそういう話は止めて下さいと抗議をした。セシーネが、王宮の薬品室にある薬のことだというと国王はすかさず、すでに許可は与えた、ただ書類が必要になるといった。結局、書類かとセシーネはため息が出そうになった。

エドワーズが

「セシーネ、何の話だ？薬がどうしたんだ？」

「聞きたい？」

「ああ、聞きたいね、もったいぶるなよ」

セシーネは、何にでも口を挟みたがる兄に何か言っただけでやろうかと考えたが、結局、王位を継ぐのは兄の王太子だし、また、その日が早く訪れないようにとも思った。セシーネは、兄に薬や薬草の中には古くなる薬効が薄れるものもあるとだけ答えた。セシーネは、口に入れた肉をかみながら、救貧院で出されている粗末な食事のことを考え始めていた。

あれでは、治る病気も治らないわ。確かに贅沢は出来ないかもしれないが、安い肉を手に入れる方法があるはずだわ。薬も大事だけど、食事も大事だわ、いえ、肉ではなくても魚なら、安いかしら。だいたいキルマは何を食べているのかしら？

「セシーネ！」

エドワーズの大声でセシーネは、はっとした。

「何？お兄さま」

「だから、イザベルが、お前に会いたがっているんだ。最近、態度悪いぞ、セシーネ」

「イザベルに？そうかしら？お母さまもそう思う？」

たずねられた王妃は微笑んだだけだった。セシーネは国王である父に尋ねた

「お父さまもそう思う？陛下」

国王は、おもむろに、ここでは「陛下」は付けなくていいと言いな

ながら、
「エドワーズ、セシーネはどう態度が悪いんだ？」

「僕を馬鹿にするんです」

「そんなことしてないわよ」セシーネは言い返した。

「それが、態度が悪いと言っているんだ。ふん、自分より、僕に『治療の才』がないからと言って馬鹿にしただろう」

「してないわよ。お兄さまには、医学的知識が欠けているといっただけでしょ

う」
エドワーズは悔しそう顔をした。国王は穏やかに

「セシーネ、そうなのか？」

「ええ、お父さま、そうなの。わたしだってまだまだと思うのだけど、お勉強しなくちゃならないことがいっぱい。だから、お兄さま、申し訳ないんですけど、イザベルには、お兄さまから、よろしくお伝え下さいませ」

「セシーネ、なんで、イザベルをさけるんだ？」とエドワーズ。

「だから、忙しいの。それに、わたくしの婚約者じゃありませんから」

エドワーズがセシーネをにらみつけた。それにかまわず、セシーネは続けた

「わたくしとちがって、医学にはあまり興味がないでしょう？イザベルは」

セシーネは、「イザベル」を強調して言った。エドワーズはもう一度、セシーネをにらみつけた。

王妃が、礼服のことですけどとすかさず話題を変え、それに国王の妹のメレデイス王女が応じた。

セシーネにはイザベルの魂胆が、わかっていた。兄のエドワーズ王太子の婚約者イザベル王女は、メエーネの現国王の弟のランガルク公爵の一人娘だった。セシーネが聞いたところでは、メエーネの国王自身には、娘に当たる王女はなく、姪を溺愛しているというこ

とだった。セシーネは、イザベルが好きでも嫌いでもなかった。セシーネは自分より一歳年上のイザベルがなんだか子供っぽいように思えたし、妹も弟もいないイザベルが、しきりにセシーネに「お姉さま」と呼んで欲しがっていることも知っていた。そんなことよりは、お母さまを「お母さま」と呼ぶべきだし、とセシーネは思った。セシーネは亡くなった祖母の王太后をイザベルが何て呼んでいたか思い出そうとしていた。メレディスが、セシーネに話しかけてきた。「こういうことには、興味がないの？セシーネ」

「そうでもないんだけど。わたしにはよくわからないの。でも、あのドレスは、あまり好きじゃないの」

「そうでしょう、時代遅れよ」

エドワーズがどのドレス？とたずねたが、国王が

「ご婦人たちにはご婦人たちにしかわからない話があるのさ。特にドレスに関してはな」

そう言うのと、椅子から立ち上がった。王妃を始めセシーネたちも立ち上がった。夕食が終了した合図だった。

国王と王妃が食堂（普段の食事をする部屋を国王はそう呼んでいた）を出ると、給仕役の侍従たちが、テーブルの皿をかたづけ始めた。セシーネはふと、あることに気がつき、皿を持った侍従たちの後をつけ始めた。その後をエドワーズが追いかけてきた。

「セシーネ、イザベルのことだけど」

「だから、何なの？お兄さま」セシーネは、立ち止まり振り返った。「今、ちよつと忙しいの。ごめんなさい」また、歩き始めたセシーネに

「いったい、どこ行くつもりだ？部屋はあっちだろう」とエドワーズは指さした。

いいから、ほつとおいてとセシーネは、いつもは通らない廊下を歩き始めた。勝手にしろと言い捨ててエドワーズが立ち去った。セシーネは、侍従たちを見失わないように後をつけたが、途中で侍従の一人が、何かご用でしょうか、王女さま？と訊ねた。セシーネは、

厨房はどっち？と聞き返した。どういうご用で？再び訊ねたが、セシーネは、少し考え、

「司厨長に会いたい。どこに行けば会えるの？教えなさい」

司厨長からは、あまりセシーネの満足のいく答えは返ってこなかった。王家の食卓に乗せているのはほとんど、王家領から運ばれているものばかりだと、ただ、晩餐会だと少し違つと、少し困惑気味に答えた。セシーネは晩餐会など、どうでもよかつた。知りたいは別のことだつた。少々、落胆気味にセシーネは自分の部屋に戻つた。

変わった王女だと、また、王宮で働いているものたちの噂になるかもしれないとセシーネは思ったが、祖母が亡くなつた今、誰がとがめるといふのだ。わたしは、必要なことをしているだけだとセシーネは自分に言い聞かせた。ただ、肉を安く手に入れる方法があるはずだと、自分を励ますように机の上に乗っていた各種の書類を調べ始めた。

だが、次の日の朝、朝食の席で、エドワーズが、昨夜のセシーネの行動を話題にした

「セシーネ、厨房にいつて何してたんだ？」

セシーネは、司厨長においしかつたと伝えたかつただけだと答えた。実際、司厨長には、最初にそう言つた。エドワーズの追求は終わらず、再び、それだけのためにわざわざ厨房に行つたのかと訊ねたが、セシーネは、お兄さまこそ人の行動を見張るようなまねをしてと腹立たしく、少し尖つたような声で、悪い？とつつかかつた。

「やめなさい」と国王。セシーネはすかさず謝つた。

「ごめんなさい、お父さま」

「謝るようなことがあるのか？セシーネ」と国王は、優しく訊ねた。「エレー又たちの前で、少しお行儀が悪かつたわ」

「そうだな」と国王はうなずいた。話題にされたせいエレー又王

女が急に

「わたしも、お姉さまと一緒にいきたい」とせがんだ。

エレーヌはセシーネやエドワーズの妹で、今の王妃ヘンリッタが生んだ最初の王女だった。父である国王は、セシーネとエドワーズを生んだミンセイヤ王妃が病死した後、再婚し、そのことが、王太子の内心の不満ではあった。

国王は、エレーヌにやはり、優しい口調で

「エレーヌはどこに行きたいんだ？」

「だから、お姉さまといっしょのところ。えーっと、キュウなんとか」と口の周りをミルクで汚したエレーヌが、フォークで皿のオムレツをつつきながら言った。王妃は小声で行儀悪いと叱り、エレーヌ王女は口をとがらせた。国王の次弟であるヘンダース王子の息子のリングゲート王子が、声を張り上げた。

「僕も、行きたい」

国王が、チラツとリングゲートを見ると、あわててリングゲートは「陛下」と付け加えた。ヘンダースが国王に代わって、

「セシーネは、お勉強しに救貧院に行っているんだ。二人ともお勉強が好きならこんなにはいいことはない」

エレーヌもリングゲートもなにやら不服そうだった。セシーネも、遊びに行っているのではないの、お勉強が大変よと言った。実際、学ぶべきことはいくらでもあった。

しかし、ヘンダース王子が、セシーネが厨房で何をしたか知りたいたと、再び話題にした。セシーネはすました顔で、さっき言った通りよ、今朝のこのオムレツもおいしいわと品よくその片割れをフォークで口に運んだ。ヘンダースは疑わしげな目つきで、セシーネを見ていたが、リングゲートが、ミルクをこぼしそうになったのに気をとられ注意を息子の行儀作法に向けた。

セシーネが調べた救貧院の報告書によると、救貧院には、王家領からかなりの食用肉が運ばれているはずだった。しかし、たまたま救貧院での食事を目にしたことがあるセシーネには、その食用肉が

救貧院の供給される食事に使われているかは、なはなはだ疑問に思えた。だが、セシーネも確証はなかった。

朝食を何とか無難に済ますと、セシーネは、日課となっている救貧院に向かった。いつしよに行きたいとねだったエレーヌとリングエートは同行しなかった。そのことにセシーネはほっとしていた。

やるべきことと抱いた疑念は晴れなかった。セシーネは絶対調べると、心の中で誓った。

セシーネを乗せた馬車が救貧院に到着すると、例によって救貧院長のキルマが出迎えた。馬車を降りるとセシーネは、頭の中にある疑念を悟られないようになるべく明るい声で、おはようとキルマに声をかけた。痩せて骨張ったキルマは、「王女さま」と言いながらセシーネに自分より高位に対する礼をしたが、セシーネには、キルマのそれには心がこもってないように思えた。セシーネは、キルマが、セシーネが王女ではなく魔女だと言っているように感じられた。あるいは、この救貧院を取り上げられるのが怖いのだろうか？ともセシーネはふと思った。

確かに、父でもあるアンドーラ国王ジュルジス三世は、救貧院の廃止かあるいは改革を考えてはいた。しかし、キルマが救貧院の院長という職に満足しているとはセシーネには思えなかった。

むしろ、キルマが女官長に戻りたがっているはずだと、セシーネの叔母で今、キルマに代わって女官長を拝命したメレディス“第四王女”が、セシーネにそつと教えてくれた。

メレディスの語ったところによると、キルマは自分の娘と当時の王太子であった現国王を結婚させようと躍起だったが、王太子は、セシーネの母ミンセイヤと結婚した。セシーネを生んだミンセイヤが亡くなると、再び、野望を抱き、すでに結婚していた娘の離婚まで企て、国王が現王妃のヘンリッタと再婚して、その野望は潰えたかのようにだが、今度は、王妃のヘンリッタをつらく当たることでその無念を晴らしていたと。セシーネはそれ以上聞きたくはなかった

が、メレデイスはかまわず話を続けた。

メレデイスは、ミンセイヤの死にも疑問があるとまで言った。母の顔が記憶にないセシーネは、複雑な思いだった。

王女という身分に生まれたセシーネにとつて、娘を王妃にしたがったキルマの野望とやらが陳腐に感じられた。父である国王は、王家の一員全てに王国と王家に対しての忠誠と奉仕を要求し、自らもそれを国務に精力を傾けることによつて果たしていた。セシーネは十二歳の誕生日にそれを痛感した。

セシーネは、キルマと共に出迎えたモリカにおはようございますとにこやかに声をかけた。モリカもにっこりと挨拶を返した。いっしょに救貧院の建物に入りながら、昨夜、夕食の席で確かめた救貧院にいる病人の処遇や薬品のことについての国王の内諾を告げた。キルマは案の定、わたくしは何も聞いておりませんと言った。セシーネは、聞いておりませんではなく、伺っておりませんでしょう、おまけに王女さまとか殿下とかを付け加えるのを忘れているわと心の中でつぶやいた。セシーネはキルマが女官長時代から第一王女の自分にあまり敬意を払っていなかったことを思い出していた。しかし、無邪気そうに

「書類とか署名とか、そういった手続き上の面倒くさいあれこれがあるんでしょう。わたくしは、よくわかりませんが…。ところで、ケンナス先生はどちらかしら？」

ガンダスが見つけた子供たちにあつて以来、ケンナスは救貧院に泊まり込んでいた。アンドーラ王国でただ一人、治療師と名乗っているケンナスは、王家に多大な恩義を感じていた。

気むずかしげな様子で黙ったままのキルマに代わつて、モリカが今朝はお出かけになりましたと答えた。

「困ったわ、何か先生から伺つてらっしゃるかしら？」

モリカが、特に何もといい、セシーネが救貧院の薬草類の保管状況を調べたどうかしらと提案した。キルマが何故そんなことをするのかと訊ねた。

「あら、調べなきやわからないでしょう、どんな薬草があるとか、
どれが、どんな病気に効くとか、いろいろと、ねえ、モリカ先生？」
モリカが、チラッとキルマを見て、

「わたくしに先生はお止め下さい」とキツパリと言った。キルマが
「ベンダーはどうしました？」

セシーネは、わたしはあなたの侍女じゃないと言いたかったが、
ここは我慢と思い直し

「ベンダー先生は、何か別のご用が出来て、こちらに来られなかつ
たの。そうだ、これ」と持参した薬品類のリストをキルマに差し出
し「王宮にある、お薬の一覧表、忘れるところだったわ」

だが、キルマはセシーネが毒蛇でも差し出したような顔をして、
受け取るうとしなかった。代わりに、モリカがおずおずと手を差し
延べた。セシーネはリストをモリカに手渡した。それを受け取った
モリカが

「院長、いかがでしょう、ちょうど薬草の保管庫を整理しようと思
っていたところで、王女さまにも手伝わっていただくとこのは
？今日はお天気もいいですし」

院長のキルマは重々しく、いいでしょうと言った。

救貧院の薬草保管庫は、救貧院本館の建物と薬草園を挟んで救貧
院の東側に建っていた。モリカと並んで、薬草園の小道を歩きな
がら、セシーネは時々立ち止まっては、栽培されている薬草や花を
指さし、その名前や効用について質問をした。モリカはいやがらず
的に確に答えてくれた。又、モリカが、建物沿いに歩かずわざとこ
の小道を選んだことにも、セシーネは気がついた。

石造りの薬草保管庫は、セシーネが想像していたよりも大きい建
物だった。セシーネがそのことを言うと、モリカは十分すぎるくら
い大きいと笑った。これも大きな錠前のかかった大きな青銅の扉の
前で、モリカは鍵を取り出すと

「この扉は少し重たいですよ、王女さま」

「王女さまはやめてくれませんか？そうでないとおなたを先生と呼ぶ

わよ。わたしの名前は、セシーネよ」

「しかし……」

「それなら、第一王女として命じるわ。わたしをセシーネと呼びなさい、いいですね。但し」と区切り

「キルマ院長の前ではそうしなくてもよろしい」

モリカは驚いたように目を見開いたが、やがてわかりましたと肯き、セシーネも解ってくれてうれしいと答えた。

モリカとついてきた見習修道女二人も加わって全員で、重たい青銅の扉を開けると、ひんやりした空気に混ざって薬草のいろんなにおいがセシーネの鼻を突いた。放れた入り口から春の日光の光で、建物の中が照らされた。モリカに続いて、中に足を踏み入り、セシーネが見渡すと、建物の中は中二階が造られ、向かって左に中二階あがる木製の階段があった。ちよつとここで待つて下さいとモリカが断り、階段を二階へと上っていった。二人の見習修道女も後に続いた。待つている間、セシーネは目を凝らし、一階に積み上げられているこれも木箱に書かれている文字を読もうとした。モリカが戻ってきて、こちらへどうぞと中二階に案内した。モリカたちが、中二階の窓を開け放したのからだろう、中二階は階下より明るかった。壁際と部屋の中程に棚があり、棚板の上には籠が整然と並べられていた。セシーネが、モリカに階下にある木箱の中身について聞いた。だと、あれは、薬草や薬ではないとモリカは答えた。

「では、何なの？」

「古い記録とかそのようなものですね」

セシーネは、内心しめたと感じたが顔には出さず、病人の記録とかがあるかと聞いた。多少はあるはずだがあまり参考になるかどうかとモリカは言った。

それから、一時間ほど、手分けして棚の籠の中を調べたり、籠を外に持ち出したし中身を日に干したりした。セシーネの分担は、二人の見習修道女が運び出した籠の中の薬草を干すことだった。セシーネは王女扱いしないモリカに好意を持った。

突然、少し甲高い子供の大声がした。「おい、モリカっているか？」
仕事に熱中していたセシーネは、思わず飛び上がり、籠を落とす
そうになった。声がした方を振り返ると少年が立っていた。再び「
おい、モリカ！」
モリカは、大声で叫んでいた少年に振り向き
「なんですか、あなたは？」と問いただした。
「あなたがモリカか？院長さまが呼んでいるぜ、俺は頼まれたんだ、
院長さまに」

モリカが、キョロキョロと物珍しそうに眺めている少年に
「院長は何ておしゃつたの？」と問いただすと
少年は、呼んでこいって、俺は頼ませただけだと言った。モリカ
は眉を寄せ、何のご用かしらと小首を傾げたが、セシーネは、ここ
は、大丈夫だからと受けおつた。モリカは躊躇したが、少年が早く
してくれよ、怒られるのは嫌だとせかした。

モリカと少年が立ち去った後もセシーネは作業を続けた。日当た
りのいい建物の横で籠の中の薬草を包んでいる粗布ごと取り出し粗
布の結び目をふりほどいてみると、少年が戻ってきた。ぶらぶらと
辺りの様子を見ながらセシーネに話しかけた。

「あんたはいいよな」

セシーネは無視して、地面の上に粗布の包みを広げた。二人の見
習修道女は建物の中だった。

「ふん、貴族なんだろう？あんた、道理でお高く止まっていやがる」
セシーネは、しゃがみ込んで、薬草を粗布いっぱい広げながら
「貴族じゃないわ」正確にはねとセシーネは心の中でつぶやいた。
「じゃ、金持ちの子なんだろう？」

セシーネは立ち上がり、スカートを払いながら、少年の方を向いた
「何が言いたいのか？さつきわたしがいいとか言っていたけど」

「だって、俺たちは、平民で、貧乏な小作人の子供だからな」

「それで？」とセシーネは自分の服を見下ろした。自分なりに考え
て、なるべく質素な服を選んだつもりだが、少年の目には上等な服

に見えただろうと思った。ダブダブの洗い古しの服を着た赤毛の少年は、セシーネより背が低かった。十歳くらいだろうとセシーネは見当を付けた。少年の名前を思い出そうとセシーネは眉を寄せた。少年は

「あんたはびっくりするぜ、俺たちが何やらされているか知ったらセシーネは、ケンナスがもうこの子たちに《治療の技》をさせているのかと疑った。ケンナスは、最初に《見立て》を覚えさせると言っていたが、キルマが使い走りに使っていることはわかった。

「誰に何をやらせられているの？」

「あのケンナスとかいうおっさんだよ、おれたちにあんなことさせやがって」

「ケンナス先生が、君たちに何をさせているの？」

「聞いて、おどろくなよ」と少年は、話して聞かせた。

セシーネは聞き終わると、憤慨して顔を紅潮させた少年の目をじつと見た。

「別に驚かないわよ、そのくらいで」

「でも、ひでえだろ？」

「全然わかってないな、君は。いい？、医学の基本じゃないの」

「医学？」と少年はごくりと唾を飲み込んだ。

「病気やけがを治療する学問よ。ケンナス先生は《治療師》なのよ。まず、患者の診察をしなくてどうやって治療をするのよ。診察というのは、脈を診たり、心臓や肺の呼吸の音を聞いたり、他にも色々あるけど、それっだって大事な診察方法じゃない、そんなことも知らなかったの？まあ、わたしだってやるわよ」

少年は嘘だろうと疑った。すました顔で、セシーネは自分の分だけだけどねと付け加えた

「ともかく、他の子たちにも、これは診察の基本だと教えてあげるのね」

セシーネは、ところでと前置きし少年に食事内容について質問した。少年は、メシは悪くないとだけ答えた。もう少し詳しく知りた

かったが、そこにモリカが小走りで戻ってきた。

「あなたはこんなところで何しているの？早くお部屋に戻って綴りのお稽古をしなさい」

少年はもう終わったと答えた。いいから戻りなさいとモリカは、「ケンナス先生がいないからといって、さぼるじゃありません」と叱った。

少年はわかったよと言い捨て走り去った。モリカはセシーネに「何か、失礼なことを申し上げませんでした？」と訊ねたが、セシーネは、失礼なのは、言葉遣いだけと笑った。モリカは、口に手を当てまあと言つと、お行儀が悪い子ばかりではありませんけどと付け加えた。

宮殿に戻る馬車の中で、セシーネは、《治療の才》があるという子供たちについて考えてみてみた。彼らの処遇に自分にはどの程度の権限があるのだろうか？救貧院長のキルマは、早く帰れとばかりにセシーネを見送った。父である国王は、セシーネに、救貧院を廃止し、その場所に王立施療院を設立し、その院長にセシーネが就任すること、何人かの《治療の才》がある子供たちが見つかったぐらしいか教えてくれなかった。多忙な国王にそれ以上のことを訊ねる機会はほとんどなかった。食事時は、エドワーズも同席したし、彼は、施療院が出来るのは十年以上後のことだと言つてのけた。

元々、施療院の設立は、セシーネの祖母の王太后の遺言だった。王太后は、自身の葬儀や埋葬法から始まり、自分の財産についても細かく書かれた遺言状を残していた。その遺言状の発表の場にセシーネも同席していた。王妃に抱かれて歩き始めたばかりのセシーネの次妹のリディア王女までがその場にいた。その内容についてセシーネが覚えているのは、施療院という言葉と院長にセシーネを指定してあることだけだった。

だいたい、おばあさまは、このわたしにどうしろというのかしら？第一、おばあさまは《治療の技》を毛嫌いしていたじゃないの。

《見立て》だつていやがつて…。セシーネは唇をかんだ。

セシーネの午後の授業には、意外な人物が、二人現れた。その一人、ヘンダース王子が

「セシーネ、こちらは、パウエル・ブルックナー伯爵だ。二ヶ月前に大蔵郷を退いたのは知っているかな？」ともう一人を紹介した。

文民服のブルックナー伯爵は、礼儀正しくセシーネに挨拶し、彼女もそれに応じて挨拶を返した。

「あの、叔父さま、どういうご用なのかしら？」とセシーネには二人が自分の部屋に来た理由がわからず、当惑していた。ヘンダースは、椅子の一つに腰掛けながら、

「何しろ、国家事業だからな。ブルックナー、君も掛けたまえ」

ブルックナー伯爵が、一礼して腰掛けた。叔父の国家事業という言葉にますます当惑しながら、セシーネも椅子に腰掛けようとすると、ヘンダースは

「セシーネ、施療院設立法案の写しがあつたらう、それを持ってきて」

セシーネが机の抽斗にしまつてあつたその写しを持っていくと、ヘンダースに手渡した。ヘンダースは受け取るとブルックナー伯爵にそれを手渡し、ブルックナーは、黙ってそれを読み始めた。セシーネは、小声で

「座つていい？叔父さま」

ヘンダースはうなずいた。セシーネは、椅子に腰掛け、二人の様子を見守つた。ブルックナーが、法案の写しから目を上げると、ヘンダースが、君の意見は？と尋ねた。

「難しいのは、この《治療師》の規定でしょうか」

「そうなんだ。そこなんだな。セシーネはどう思う？」「いきなり叔父に尋ねられて、セシーネは、口ごもつた

「あの、よく解らないの。あの、わたしには難しすぎて」

叔父が説明した

「つまり、《治療師》というのは、どういうものかという点だ」

「あの、《治療の技》を使えるということじゃなかしら？」

「違うな、それならエドワーズも《治療師》ということになる、あいつだって、多少は使えるわけだからな」セシーネは、《見立て》はどうかしら？と思いついてみた。ブルックナーは怪訝そうに

「《見立て》？」

「君は知らなかったな。セシーネ、ちょっと、ブルックナー伯の《見立て》をやってみてくれないか」

「いいけど」

「どうした？ケンナスに禁止されているのかい？」

「そうじゃないけど、気味悪がる人もいるから」

ブルックナーは、自分は大丈夫ですと微笑んだ。

ブルックナーは、少し目を見開いただけだった。セシーネが、再び、腰掛けると、ヘンダーズがブルックナーに説明した。セシーネは、ちよつと違つと、二人に説明しようとした。

「病名がわかる訳ではないの。体で感じるの、その、なんていうかしら、体の調子が、どこが重く感じるとか、熱く感じるとか。うーん、説明が難しいわ」

ブルックナー伯が、

「つまり、この《見立て》ですか、これをしていただいた相手の体の具合が、解るといふわけでしょうか？」

ええ、だいたいのところはといて、セシーネは、口を閉じた。

ヘンダーズが

「この《見立て》はともかく、どうだろう、《治療師》を認定する人物を決めて、彼が、《治療師》と推挙し、その後、陛下が、ご承認なさるというのは？」

「問題は、その《治療師》を認定する人物ですな」

「一人、いるだろう？」

「ケンナスですか？そこまで、信をおくのはいかがと思われませんが

…」
ケンナスを疑うようなブルックナーの言葉にセシーネは、ケンナス先生は、立派な方だといいたかった。

「ケンナスがサエグリア出身なのが問題なのかな」

「そこまでは、申し上げておりませんが…」

「どうだろう、学科試験を加えたらどうだろう？」

ブルックナー伯は、はっと気がついたように、それがよろしいかもしれないなど同意した。セシーネは、

「あの、申し訳ないんですけど、そういうお話なら、別なところでしてくれませんか」

「セシーネ」

叔父の厳しい口調に、セシーネは少したじろいだ。

「これは、君にとつて、大事な勉強だ。君は王立施療院院長を拝命することが、すでに決まっている。つまり、陛下の勅命を戴くわけだ。それがどんなに重要なことか、解っているのか？これをちゃんと読んだか？」と、ブルックナーがテーブルに置いた法案の写しを指さした。セシーネは、叔父の話に身を引き締め

「読みましたけど」

「けど？」と叔父は、片方の眉を上げた。セシーネは、正直に白状した。

「わたしには、難しすぎて」

「だろうな。だが、何故、こういった法が必要なのはわかるだろう」

「この答えならセシーネは答えられた。」

「ええ、偽物の《治療師》がいては困るから」

「そうだ、勝手に《治療師》を名乗らせないためだ、あと、それから？」

セシーネは、思いつくまま、いくつか言ってみた。ヘンダースはこの程度理解していればいいと言った。ブルックナーはお厳しいですなと感想を洩らした。

ヘンダースは、立ち上がると法案の写しを手に取り、さあ、行くかと言った。ブルックナーも立ち上がった。ヘンダースは、「セシーネ、君もいっしょに来るんだ」

夕食の席で、エドワーズ王子は、機嫌が悪かった。

「何故、セシーネを特別扱いするんです？」と国王に詰問した。国王はのんびりとスプーンを手に取り

「別に、特別扱いしとらんぞ」

これを合図に、テーブルについていたものが、黙って一斉に、同じようにスプーンを手に取った。ただエドワーズだけは、では、甘やかしていますと言ってから、スプーンを持ち上げた。

「余は、甘やかしているつもりは毛頭ない」

セシーネは、国王の口調に気づいて、おとなしく黙っていた。しかし、エドワーズは納得していなかった。

「では、あれは何ですか？あの部屋は？」

そこへ、ヘンダース王子が、陛下、よろしいでしょうかと断り、王太子をなだめるように

「王立施療院の準備のためさ」

しかし、エドワーズは、今度は、叔父のヘンダースに食ってかかった。

「叔父上までなんですか」

「いい加減にしるよ、エドワーズ」と、今度は近衛兵の制服姿のランセル王子が口を挟んだが、エドワーズが

「ランセル叔父上のことでは、ありません」

セシーネは、いい加減、エドワーズが、気がつけばいいのにおもったが、案の定、国王が少し不機嫌そうに

「余のすることに、何か、不服があるならば」と王太子に顔を向け「聞こう。王太子」

国王の口調にエドワーズは、ギクツとした。エドワーズがうつむいた。国王は、食事に戻った。メレディス王女が、陛下、よろしい

でしょうかと断り、国王は

「メレディス、この席では陛下はよさんか」

「では、お兄さま、例の礼服のことですけど」とメレディスは、再び、昨夜の話題を口にした。彼女にとっては、重要なことだった。

国王は、

「どうだ、うまくいきそうか？」と妹に言うてから、スープを口に運んだ。

「それが、なかなか、うまくいきませんの」

ランセルが、ご婦人方は、ドレスのことになるとやっきだからなと感想を洩らした。メレディスが、きつと弟を睨み

「大事なことでしよう、わかってないわね、ランセルは」

「まあ、俺は、この制服が気に入っているのさ。ドレスの話は、ご婦人たちだけでやってくれ」

パンをちぎりながら、メレディスは

「そうはいかないわ、問題は、絹なの」と言つて、ちぎったパンを口に入れた。

ヘンダースが、絹がどうかしたのかと、妹に聞いた。口に入れたパンをかんでいたメレディスに代わつて王妃が絹は、高価だし、なかなか手に入らないと答えた。

ランセルが、何故、絹にこだわるのかわからないと言つと、

「絹は軽いですの」と、ランセルの妃のネリアが、そつと言つた。ネリアは、身重だった。それに国王と夕食のテーブルに同席することにはまだ慣れていなかった。セシーネの記憶では、彼女は、ほとんど発言したことがなかった。別に無口だという訳ではなく、国王のいない席ではかなりにぎやかにヘンリツタ王妃やメレディス王女たちとおしゃべりをしていた。

そこに、ヘンダースの妃のアンジェラが食堂に入ってきた。彼女は、国王にちよこんと膝を曲げて挨拶をし、遅れて申し訳ございませんと謝つた。国王は、何、かまわんとつぶやき、再び食事に戻つた。侍従の一人が、アンジェラのために椅子を引いた。アンジェラ

が、夕食に遅れたのは、彼女とヘンダース王子にとって二人目の子
ジョイス王女の授乳のためだった。アンドーラのチェンバース王家
では、メレデイス女王以来、乳母はおかず、妃でも、自身の母乳を
与える習慣だった。乳母がいたのは、セシーネだけだった。女王自
ら、王太子や王子に授乳をしたのに、妃風情がという訳だった。セ
シーネの祖母のエレーヌ王太后は、三人の王子と一人の王女を生み
母乳の出もよかったことが自慢だった。

アンジェラは自分の席に座りながらと、何のお話？と隣の夫に小
声で尋ねた。

「絹の話さ、それとも、ドレスかな。メレデイス、どっちだ？」

「ちやかさないで、ヘンダースお兄さま」メレデイスが、ぴしゃり
と言った。失礼しました、女官長殿とヘンダースが謝った。メレデ
イスは、からかっているのと彼をにらんだ。国王が、

「やめんか、悪い前例を作っている」と諭した。小声で、ランセル
が、隣のネリアに

「女王陛下の家だからな。この家は」とささやいた。聞こえておる
ぞと国王。笑おうとしたネリアが、赤くなってうつむいた。国王は、
絹かと言って、宙を仰いだ。メレデイスがそうなのため息をつい
た。ランセルが乱暴な意見を述べた。

「いつそ、絹なんて、やめちゃえば」

メレデイスが、あわてて、口の中のスープを飲み込んで

「そうはいかないわよ。だから、あなたはわかってないといってい
るの」

「僕にもわかりませんね」とエドワーズが顔をしかめた。食事の手
を休めた国王が、片方の眉を上げ

「エドワーズ、正直でよろしい。あのな、絹は、アンドーラでは、
生産されておらん」

「どうしてです？」とエドワーズ。

「何か栽培方法に問題があったのだろう。昔はアンドーラでも造っ
ておったと思っただが」

この日の夕食の席でセシーネは初めて、食事以外で口を開いた。

「ちがうわ、お父さま」

「どこが、ちがう？セシーネ」

「あの、絹は、虫なの」

それを聞いた王太子が再び、顔をしかめた。それを横目で見たセシーネは、再び、口を閉じた。

「ほう、そうか、虫か」と国王。メレデイスが

「夕食の話題に、ふさわしくないとと思う？ネリア」

ネリアが、目をパチパチとしたが、いえ、大丈夫ですわと、それでも手を止めた。国王が

「セシーネ、もう少し、詳しいことを知っているか？絹のことだが」

セシーネは、兄の顔色をうかがいながら黙っていると、メレデイスも

「わたしも、知りたいわ」

セシーネは、おずおずと

「わたしが知っているのは、虫の繭というところだけ」

国王が、それだけ知っていれば十分だと言った。ランセルが、つ

まり虫を着ているわけだとちゃちを入れた。セシーネは、のろのろと

「ランセル叔父さま、虫じゃなくて、虫の繭なの、虫は、その中に入っているの」

国王は、その虫が手に入ればなあとつぶやき、食事を再開した。

それを聞き逃さなかったエドワーズが

「手に入れてどうなさるおつもりですか？」

国王は、スープを飲み込み、よそから買わずに済むとだけ応え、

セシーネは、お兄さまってホント、鈍いんだからと胸の中でつぶやいた。エドワーズが

「確かに、そうかもしれませんけど…」

ヘンダースが、本当にわかってしているのか？エドワーズと違ってから

「その、セシーネのいう通りだったら、絹の虫とやらを育てて絹糸をとる。そして、卵を産ませてまた、育てる。とった絹糸は、貴族

たちに売りつけると、ここまで理解できたら、上出来だ、王太子殿下」

エドワーズが、ムツとして、その程度ぐらい見当がつかますと、だが、ヘンダースは、手厳しかった。

「エドワーズ、セシーネのあれこれを詮索するより、自分の結婚のことも考えていた方が、利口っていうもんだろ」

エドワーズは、真っ赤になった。それにかまわず、ヘンダースは続けた

「ちゃんと、読んだか？」

「何をです？」

「これだからなあ、結婚契約書に決まっているじゃないか。よくあんなもので、署名する気になるな」

エドワーズは、あのうと口ごもり、国王が

「面白い条件を、出してきた」

「伺っております。如何なされます？」とヘンダース。国王が、一隻ぐらいいは、売ってやろうと言うと、ランセルが、怪訝そうに何の話？と尋ねた。メエーネは、王女との結婚に際しアンドーラの船を要求してきた。しかしアンドーラの国王はそれをメエーネに売りつけようとしていた。国王の抜け目なさに笑い転げていたヘンダースが、

「メエーネは、船がほしいんだと」

さっぱり解らないと言うランセルを無視して、ヘンダースは、国王に

「別途契約になさったら、如何でしょう？」と提言した。

「うん、その方がいいだろうな」と国王も同意した。ランセルは、誰か、解るように説明してくれと大声出した。ヘンダースは

「ランセル、君は、声が大きな。行列の訓練でもしとけよ、その大声は、実に訓練向きだ」と弟に、忠告した。少しムツとしたランセルは、それでも

「でも、少しは、知りたい。いや、知っておくべきだと思う。気に

なるよ。船なんて」

「海軍も気になるか？」逆に海軍大佐でもあるヘンダースが、質問した。

「そりゃそうさ。けど、契約書も気になる」とランセル。

ヘンダースが、そろそろ、肉にしませんかと催促した。王妃が、クスクス笑いながら、

「それが今日は、お魚ですよ」と言いながら、給仕の侍従に合図した。

アンドーラの国王ジュルジス3世は、多忙だった。夕食後も、メエーネの国王代理との会談が、予定されていた。彼自身、国政を執ることは、苦にならなかった。それは、国王としての義務というより、趣味にも似ていた。父親のジュルジス2世から譲位を受け、国王に即位した当初は、何かと母親の王太后が、しきりに助言をした。退位した前国王は、メエーネとの縁組みだけしか、ほとんど口を挟まなかった。

前国王は、エドワーズが生まれその無事な発育を確かめると、早速それに取りかかった。自ら、メエーネに赴き、縁組みの足がかりを造った。メエーネ行きの前に、ジュルジス2世の王妃のエレーヌの猛反対を抑え込み、譲位を決め、ジュルジス3世の戴冠式をすますと、メエーネ行きの船に飛び乗った。

まさしく、飛び乗ったとジュルジス3世は、父親を思い出していた。幾度かアンドーラとメエーネと往復しているうちに、船が、竜巻に巻き込まれ、行方不明になった。船は、アンドーラに戻ってきたが……。結局、遺体も見つからず、まだ、正式な葬儀も執り行つてなかった。

当初、夫の行方不明の報告を受けたエレーヌ王太后は、憮然としていた。自ら、海軍提督にジュルジス2世の搜索を命じ、息子のジュルジス3世を激怒させた。

「いい加減にしてください。母上。これは、越権行為です」

「お前は、父上が、心配じゃないの？」

「そう言い方は、止めて頂きたいものですな、王太后」

冷然とした国王のこの口調に、最初に気がついたのは、当時、陸軍元帥だったメレデイス女王の次男ヘンダース王子だった。広げた地図を見ながら、穏やかに

「陛下、やはり、探索はこの辺りから始めては、如何でじゃ？」とアンドーラの東側に位置するメエーネ付近ではなく、逆方面の西側を指し示すと

「提督、この辺りの海岸線はどうじゃ？」

元帥に尋ねられた海軍提督は、答えに躊躇した。地図をのぞき込んだ王太后が

「何おっしやているの、こっちじゃないでしょう」と行方不明になったという地点を指で叩き、ここよ、ここと言った。そこは、海だった。国王は冷然と言い放った。

「余は、王太后の退席を命じる」

「何ですって？」と王太后。

「もう一度、申すぞ、余は、王太后に退席を命じる。速やかに、王太后は退席するように」

王太后は、息子の大きな、しかも凍り付くような声に、慄然とした。目を見開いて、息子を見たが、忽然と頭を上げ正面を向いていた国王は、隣に座っていた王太后と視線を合わせなかった。ヘンダース陸軍元帥が、王太后はご心労でお疲れじゃと言つと、これまた、高齢にも関わらず、大声で「衛兵！」と呼んだ。

会議の開かれている国王の執務室の扉の廊下側にいた近衛兵が、あわてて駆け込んできた。

近衛兵たちに敬礼を返すと、ヘンダース陸軍元帥は、彼らに、王太后はご心労でお疲れじゃ、王宮までお送りするようにと命じた。王太后は、屈辱に真っ赤になった。再び、ヘンダース元帥が、諭すように

「王太后、ここは、儂らに任せて、ゆっくりお休みなされ。ご心配

で、よく寝付けんじやろうが、横になるだけでも、大分違う。ゆっくり、お休みなされ」

さすがの王太后も、数々の武勲をあげ、王国の重鎮であるヘンダース元帥には、逆らえなかった。息子を見たが、国王は、正面を向いたまま、石のように動かなかった。

結局、すぐごと近衛兵に付き添われ、その場を退出した。

その夜、王宮に王太后を訪ねたヘンダース元帥は、彼女に幾つかの忠告をした。だが、興奮していた王太后は、聞き入れようとしなかった。ヘンダース元帥は、皮肉っぽくこう言い放した。

「ならば、ご自分で船を漕いで、探しに行きなされ。エレヌ」

「何ですって？」

「ご自分で、行きなされと申し上げた。耳が遠くなられたか？」

わたくしはと王太后が、口ごもっていると、ヘンダース元帥は

「今は、天候が悪い。この時期に艦隊の出航は、無理じゃ。あの命知らずの提督が、そう申した。その内、ひよっこり帰ってくるかもしれないぞ。なあ、エレヌ。焦っても仕方あるまい」

ヘンダース元帥のこの言葉に、王太后は、夫の行方不明の報を聞いて、初めて涙を流して泣いた。

実は、王太后は、夫の行方不明を疑っていた。夫のメエーネ行きは、当初、戴冠したばかりのメエーネ国王に対する儀礼的なものと聞かされた王太后は、予定を過ぎても戻らなかったことにいらだちをかくせなかった。一度だけで済むと思っていた夫のメエーネ行きはその後何度も繰り返された。その理由が王太后には解せなかった。孫が出来たとはいえ、夫がまだまだ男盛りなのを王太后は身をもって知っていた。そして、息子のジュルジス3世に譲位してからの夫は、玉座に座っている時よりも生き生きしているように妻の王太后には思えた。ただ一つ王太后が思いついたのはメエーネに夫の愛人が出来、それで、行方不明を偽装しているのではないかという疑念だった。

泣きじゃくりながら、王太后は、ヘンダース元帥にその疑念をう

ち明けた。

「それならば、儂が、何とか手を打とう」

取り出したハンカチで涙を拭きながら、王太后は、やっぱり、そうですねとヘンダース元帥を見つめた。

「そうと決まったわけでもあるまい。それより、大事なことがある。まあ、エレーヌにはそっちの方が、大事なことももしれんが」

ヘンダース元帥は、メレディス女王以来、アンドーラ王国の続いている各種のしきたりや称号について語った。王太后は、そんなことは存じておりますわと答えた。ヘンダース元帥は、厳しい声で

「ならば、何故、国王陛下をお前呼ばわりする？しかも、家臣たちのおる席で。気が動転しておられたか？」

王太后は、無言でヘンダース元帥を見つめた。彼は、今度は優しい声で続けた。

「なあ、こんな時に済まなんだが、致し方あるまい。陛下とお二人になられた時は、なんとお呼びしても、儂はいつこうに、かまわん覚えておるが、父上は、人前では、母上のことは必ず、陛下じゃった。それは、見事なもんじゃったぞ。男の父上に出来て、女御のエレーヌに出来ぬ道理は、あるまい。そなたが、頭を下げんで、誰が、下げる？先王もそうしていたぞ」

王太后は、再び、涙ぐんだ。

ヘンダース元帥の忠告にも関わらず、王太后は、相変わらず、国王をお前と呼んだ。さすがに、家臣たちの前では、そうはしなかったが……。

そして、王太后の夫の先王は、相変わらず、行方不明のままだった。

侍女の条件（前書き）

施療院の準備を進めながらも、セシーネは王女としての努めも果たさなくてはならなかった。

王女付きの侍女として侯爵令嬢のエランダが王宮にやってくるが、セシーネの侍女と言う役目に不満顔だった。

そして、ある夜エランダはとんでもない行動に出るのだった。

侍女の条件

「施療院」の計画は遅々として進まなかったが、セシーネには「施療院」は「医学」を学ぶいい口実だった。しかし、《治療の技》を嫌っていた祖母の王太后が何故「施療院」の設立を思い立ったのかセシーネには皆目見当がつかなかった。確かにケンナスの「授業」に祖母は同席したが、セシーネの王太后自身への《見立て》も《治療の技》も頑固として許さなかった。そして、時間が来るとケンナスを下がらせ、“第一王女”としての勉強をセシーネに強いた。その大部分は立ち振る舞いに費やされた。王太后にいわすとセシーネの動作はがさつで品性に欠けるということだった。刺繍をしている祖母の横に行儀よく座り、アンドーラの第一王女はどうあるべきかという祖母の「講義」を受けるのが、セシーネの午前中の日課だった。

この日、《治療の技》をそれなりに理解を示し始めたブルックナーにセシーネは、以前から疑問に思っていたことについてたずねてみた。彼は、快く調査を約束してくれた。

「確か、救貧院の運営は国母さまの持参金の一部からその費用は賄っていたはずですが、一応、調べてみましょう」

セシーネは礼儀正しくお願いしますといった。アンドーラの国母である祖母は、セシーネに常々重臣たちはお前の家来ではありませんよんよといっていたが、祖母自身は家来のように扱っているようにセシーネには思える時もあった。ブルックナー伯が懐中時計を取り出し、そろそろお時間ではといった。セシーネのこの日の午後の日程は、他にもあった。

その予定のために、セシーネは王宮の自分の居室へと急いだ。ブルックナー伯と話し込んで少し、時間が過ぎてしまったようだ。だが、走ったりはしない。少し早足程度である。歩きながら護衛の一人に話しかけた。

「お肉の件はもういいわ。それより《治療師》の見習いとか《治療の技》を習いに来ている子たちの方を調べてみて、薬草園を計画しているかどうかその辺りを聞いてみて」

「薬草園ですか」

「どうやら、《治療の技》を習うより、薬草を育てることに興味があるみたい。そうね、どのみち、男の子たちは兵役があるし、その辺りから仲良くなってみるというのはどうかしら？ともかくやってみて、お願い」

ともかく護衛は引き受けた。護衛の近衛兵たちはしばしば王家のものたちから「お使い」を頼まれた。彼らの本来の役目は国王を始め王家の人々の「身辺警護」ではあったが、救貧院の食事内容を調べるといふシーネの頼みに第一王女付きの近衛兵たちはなにやら面白そうな表情で引き受けてくれていた。近衛兵を使いこなすぐらゐ出来なくては“第一王女”とはいえないとセシーネは考えていた。キルマの身分を考えるとという言葉に自分の服装かしらとセシーネはふと思った、今日も“第一王女”とはいえないような粗末な服を選んで着ていた。別に服で立派な人物どうかは判断出来ないが、服で身分が多少はわかる場合もあった。セシーネは護衛たちに着替えると告げた。

いつものように王宮の自分の居室の前で立ち止まったセシーネに、部屋の中を調べた護衛の一人がお客人がいますと報告した。セシーネが王宮の自分に部屋にはいる前に護衛に調べさせるのは身の安全のためではない。宮殿のあちらこちらに近衛兵が配置され、警備は厳重だった。セシーネが護衛たちに部屋の点検をさせるのには別の理由があった。妹のエレーヌ王女は姉の留守中こっそり姉の持ち物を散らかすという子供らしいいたずらをするのがしばしばあった。その現場を見つけようと自分付の近衛兵たちに「偵察」を頼んでいた。しかし、今回はエレーヌではなく別な人物だ。今日の予定であつはずの人物であろう。どうやら先に来て待っていたらしい。部屋に通したのは、多分、叔母で女官長のメレディスの仕業だろう。

セシーネはこの人物に会う前に王女らしい服に着替えたかったが、仕方ない、覚悟を決めてセシーネは部屋の中に入った。部屋の中には着飾った二人の女が椅子に腰掛けていた。無遠慮にセシーネをじろじろと見て立ち上がるうともしない。セシーネは二人に近づいた。セシーネが口を開く前に若い方が

「ちょうどよかったわ、わたくしのどが渴いたの、お茶を持ってきて」と甲高い声でいった。どうやら粗末な服のセシーネを侍女と間違えたらしい。無理もないとセシーネは思った。セシーネが、その朝、選んだ服は王宮で下働きをしていた者から手に入れたものだった。セシーネは別に腹も立たなかったが、

「わたくしはあなたの侍女ではありません」といって奥の寝室の方に向かおうとした。年上の方が今度は

「失礼ですけど、あなたもセシーネ王女さまの侍女になられるのかしら」と尋ねた。セシーネは近衛兵が護衛をしている人物が誰なのか推測出来ない二人に「鈍いわね」といってやりたがったが、ただ、違いますと返事をして寝室に入った。化粧台の上に手に持っていた麦わら帽子を置こうとしてセシーネはハツとした。抽斗の一つが少し開いていた。抽斗を開けて中を確かめた。かき回した形跡があった。セシーネは、抽斗の中をもう一度いつものように戻すと続き部屋に戻った。年上の方が再び王女さまはいつお戻りになるか聞いてきて欲しいといったが、セシーネは無視して、扉の前で笑いをこらえている護衛の一人に

「エレー又第二王女さまを呼んできて頂戴」と命じた。怪訝な顔をした彼にセシーネは、いそいでと急ぎ立てた。やはり怪訝そうな年上の女の方が、口を挟んだ。

「第二王女さまではなくて第一王女さまの方だと伺っておりますけど」

セシーネは、逆に女官長のメレディス王女はと尋ねた。若い方がわたくしはあなたの侍女じゃないといった。セシーネはただ、あ、そうとだけこたえた。

エレー又王女は走ってセシーネの前に現れた。セシーネは妹に王宮の廊下を走るなど注意をしようと思つたが、ズバリと本題にはいることにした

「エレー又、勝手に人の抽斗を開けたりしたらだめよ。借りたものがあつたら、ちゃんと断つてから、して頂戴。いいわね」

エレー又は口をとがらせ、そんなことはしていないと答えた。セシーネは、あらそうだったかしらと妹をジツと見つめた。エレー又は、今日はお姉さまの部屋へは自分が入っていないと再び言い張つた。別の疑念がセシーネの頭をよぎつた。セシーネは、妹に借りたいものがあつたら断つてから借りるように約束させると、戻つていいといった。そこにメレデイス王女が現れ、エレー又にこんなところで何しているのと尋ねた。セシーネは妹に代わつて、借りたいものがあるかどうか聞いてみただけよと答えた。女官長は

「あら、そう、エレー又はお勉強に戻りなさい」

エレー又は何か不服そうだったが、セシーネがお勉強の邪魔をして悪かつたというと、おとなしく戻つていった。女官長のメレデイス王女は、セシーネの服を少し非難がましくみたが「セシーネ、改めてご紹介するわ。コンラッド侯爵夫人とエランダ侯爵令嬢」と、やつと事情を飲み込み赤面しているコンラッド侯爵夫人と小馬鹿にしたような表情を浮かべたエランダ侯爵令嬢を紹介し始めた。

勘違いについてしきりに恐縮するコンラッド侯爵夫人に第四王女はこんな格好しているから無理もないとにこりとませずにいつたが、第一王女は、最近農業がやりなのとだけいつた。メレデイスは片方の眉を少し上げただけだった。

エランダ侯爵令嬢は、第一王女付きの侍女になるために王宮にやつてきたのだが、これには訳があつた。第一王女のセシーネは、自分付の侍女サラボナとケンカをしたのだった。セシーネの乳母の娘であるサラボナは、「医学」に夢中なセシーネに自分は「医学」なんてまっぴらだと言つてのけた。それがきっかけて売り言葉に買い言葉になり、結局、メレデイス王女付となつた。幼い時から王宮に

出入りして、セシーネの遊び相手も努めたサラボナは、王宮の事情に詳しく、侍女という役目向きであったが、頑強に「医学」だけはいやだと言ひ張った。別につきあわなくてもいいとセシーネは思ったが、サラボナは自分もやりたいことがあるのだとセシーネにうち明けた。これを聞きつけたメレデイスが丁度いいと自分付ということにした。侍女を一人取り上げられた格好の第一王女であったが、返つてその方が、都合がよかった。サラボナはセシーネの乳母という母親の役目柄、セシーネに自分の母親を取られたようなことをセシーネにほめかした。これが、セシーネには心外だった。セシーネには自分の乳母を自分で選んだわけではなく巡り合わせというものだった。確かに乳母のユーリンは自分の乳で育ったセシーネに甘かったが、サラボナの言葉はセシーネを傷つけた。セシーネには、自分を生んだ母親の記憶がほとんどなかった。セシーネにとって「母」はヘンリッタ王妃だった。だが、もう母親に甘える年頃ではない。サラボナの言い分は少し子供っぽいように思えた。新しい侍女について女官長でもある叔母にセシーネは希望をいつてみたが、せいぜい小言の多いのはうんざり程度だった。メレデイスはにやりと笑っただけだった。

新しい侍女のエランダについてメレデイスから尋ねられたセシーネは、ある疑念についていつてみたが、メレデイスは、鼻でフフンと笑つと。侍女なんてそんなものだといった。そして、自分の経験を話してくれた。その後、自分の計画について話し始めた。この話だとメレデイスはキリなく話すのでセシーネは、サラボナはちゃんとしてやっているかと尋ねてみた。大丈夫よ、うまくやっているという叔母にセシーネは多分二人だとお互いわがママが出るのかもしれないと、少し反省の弁を述べた。叔母は、おもむろにうなずいた。

次の雨降りの朝、いつものように朝食をすませるとセシーネは自分の居室に戻つた。部屋にはいると昨日と同じように着飾つたコンラッド侯爵夫人とその令嬢が待つていた。さすがに今朝は礼儀正し

くセシーネを出迎えた。挨拶がすむとセシーネは、二人ともお早いのねと声をかけた。二人とも髪を縊で形を整え、化粧をし、着付けのに手間がかかる正装といっても良い服を着ていた。そのためには、早起きが必要だったろうとセシーネは思った。セシーネも謁見の日は、それなりに礼装を整えるが、普段は「清潔さ」を重点に置いていた。これは、国王自身もそう心がけていた。高価だが手垢の付いた服よりも、洗濯の行き届いた服を好んだ。

その時、護衛が兄の王太子の訪問を告げた。セシーネは通すように護衛に伝えた。この何日か王太子は「重騎兵訓練」に勤しんでいた。今朝も、朝食にはその装束で現れた。首から下を重い鎧で固め、小脇に兜を抱えたエドワーズは部屋に入るなり、頼みがあるんだと切り出した。セシーネは、自分より高位にある兄に少しかだけ膝を曲げて挨拶をしてから、黙って兄を見つめた。エドワーズは一緒に部屋に入ってきた自分の護衛を籠手をはめた右手の親指で指し示しながら、ビランのことは覚えているだろうといった。一緒に入ったきた兄の護衛はそのビランだった。セシーネがうなずくと、ビランは敬礼をしながら「お久しぶりです、姫」といった。これだからな、エンバーのやつはとエドワーズはいった。

ビランは、アンドーラ国王であるジュールジス3世が、王位を継ぐ以前に継いだエレーヌ王太后の生家であるエンガム公爵領のエンバーの出身だった。武功を誇るエンバーの出身のものたちに国王はある種の特権を与えていた。その一つが称号に関するもので、彼らは、国王を「殿」と呼び、王家の他の男子は「若」であり、王女たちは「姫」である。これは、「身内」だけの時や他の貴族に自分たちは王家に近いと誇示する時に限られていた。

エドワーズの頼みとはそのビランとセシーネ付きの護衛の一人と交代だった。セシーネが、陛下はなんて？と尋ねると、兄はすでに許可は頂いたといった。セシーネも異存はなかった。では、早速とエドワーズは、交換した近衛士官兵を連れてガチャガチャと甲冑の音を立てながら、セシーネの部屋を出ていった。ビランはそのまま

残り、姫、若の魂胆を知りたくないですか？と尋ねた。彼は、サラボナと同様、いわば「王宮育ち」だった。セシーネは、「王宮育ち」でないエランダはどうかしらと思いつながら、エランダに出かけるわよとだけいった。ピランは、ため息をつく、外出の用意を命じに部屋を出ていった。

降りしきる雨の中、セシーネを乗せた馬車は、救貧院に向かった。近衛兵の先導に続いた馬車には、エランダ侯爵令嬢とコンラッド侯爵夫人も同乗していた。馬車の中でコンラッド侯爵夫人は、しきりと、しつけの行き届かない娘についてくどくどと言いつつしていた。「ともかく、領地育ちでございますから王宮での作法については今一つでございます。言葉づかいも行儀作法もこんな有様で」

セシーネは、自分は、エランダのしつけ係ではないといたが、辛抱強く、どなたも母親はそんな風に思うものらしいとだけいった。これは、亡くなった王太后の言葉だった。王太后は、しばしば娘のメレディス王女について同じように育て方を間違えたようなことををいつていた。王太后はこれを反省し、セシーネ王女の教育に幾つかの変更点を加えていた。その主な点は、身の回りのことは自分でやるということだった。これは、むしろ、父である国王の教育方針でもあった。自分のことも出来ないものに、偉そうなことはいえないという訳だった。セシーネは、12歳になるまで服の洗濯もしたことがあるし部屋の掃除もある程度自分でやった。

突然、エランダが詰るように、何故、王太子殿下に紹介してくれなかつたのとまるでセシーネが自分よりも目下であるかのような口調でいった。セシーネは、化粧をしたエランダの顔をまじまじと見てから「そうね。あなたを正式にわたくしの侍女に決めたらその時に改めて紹介することにするわ」そして、まだ決めた訳ではないのと付け加えた。コンラッド侯爵夫人が、再び、娘のしつけがどうか言い始めた。確かにエランダ侯爵令嬢の、王女のセシーネに対しての口の利き方は今一つだった。

救貧院に到着すると、さすがに雨の中を建物の中から出てきはし

なかつたが、例によつて救貧院院長のキルマ・パラボン侯爵夫人が出迎えた。キルマはまた来たのかといわんばかりだった。セシーネは、キルマにコンラッド侯爵夫人とエランダ侯爵令嬢を紹介し、また二人に、救貧院院長でパラボン侯爵夫人のキルマを紹介した後、こう付け加えた。

「パラボン侯爵夫人は、長い間、女官長を努めていたのはご存じでしょう。王宮の色々なことをご存じだから、色々教えて頂くとよろしいわ、無論パラボン侯爵夫人がお暇な時に」気むずかしげな表情のキルマにセシーネは、ケンナスの居所を尋ねた。

治療師のケンナスは、見習の子供たちと一緒に居た。子供たちは、皆珍しそうに、セシーネの後ろから入ってきた着飾つたコンラッド侯爵夫人とエランダ侯爵令嬢を眺めていた。セシーネは、ケンナスに朝の挨拶をしてから、用件を切り出した。

今日、雨の中、救貧院に來た用件の一つが、叔父のヘンダース王子からの頼みだった。ヘンダースの息子リングート王子は、昨日の午後、左足首を捻挫したのだった。従医長のベンダーの診察もセシーネの《見立て》も「捻挫」だったが、念のためケンナスに《見立て》をして欲しいとヘンダースもその妃のアンジェラも朝食の席でセシーネに伝言を託したのだった。セシーネが二人からの伝言を伝えると、ケンナスは快く承知してくれた。これはケンナスにとつてもセシーネにとつても、ケンナスの《見立て》が、王家の人々の信頼を勝ちえたということでもあつた。

そして、セシーネは、ここにきたもう一つの用件に取りかかつた。エランダ侯爵令嬢にこう命じた。

「救貧院の院長のパラボン侯爵夫人と大事なお話があります。ご都合を伺つてきて頂戴」

だが、エランダは動こうともせず、代わりにコンラッド侯爵夫人が、伺つてきますといつて部屋を出ていった。確かにエランダはコンラッド侯爵夫人のいうように「しつけ」が今一つだとセシーネはふと思つた。

院長室で、机を挟んで向き合ったセシーネに、救貧院の院長は、椅子を勧めもしなかった。椅子に腰掛けたままのキルマは、少し顔をこわばせているようにセシーネには思えた。

「救貧院院長、それともパラボン侯爵夫人の方がいいかしら」

「わたくしのことは、キルマで結構です」

セシーネは慎重に切り出した。

「それは、どうかと思うわ、パラボン侯爵夫人。あなたは、長い間、王家の女官長を努めていらしたわ。女の方にこのようない方は、変かもしれませんが、あなたは、お父さまつまり、国王陛下にとつて重臣の一人だと私は思っています。その方に対して敬意を払うのが、礼儀に適っていると思いますし、それだけではありません、あなたは、病気のおばあさまの看病もよくやって下さったと思います。特におばあさまは、病気になられてから、ますます気むずかしくなられて、そのお世話は大変だっただけだと思います。これは、陛下もあなたに感謝したいとおっしゃったことがあります。おばあさまが亡くなったのは残念ですが、ここで私からも改めてありがとうございますとお礼を申し上げたいと思います。本当におばあさまのお世話をしてくれてありがとうございます。」とセシーネは深々と元女官長に頭を下げた。

「わたくしは当たり前のことをしただけです」と元女官長は素っ気なかった。

「そうかもしれませんが、やはり、病人の看病はやはり、いろいろ大変だっただけだと思います。特におばあさまのような方が相手では、誰にも出来ることではありません。本当にお礼を申し上げます。ところで、パラボン侯爵夫人、昨日、あなたがおっしゃった身分をよく考えるようにというあなたの言葉を私なりに考えてみました」

キルマが用心深そうにセシーネを見つめた。セシーネは、昨夜、懸命に考えたことを話し始めた。

「パラボン侯爵夫人、わたしは、アンドーラ王国の第一王女です。このことが何を意味するかとわたしなりにこう考えました。王女と

「この身分は、アンドーラ王国と王家のために何が出来るかということだが、大事だと思えます。アンドーラのために、何か役に立つことをすべきだと思います。陛下は王立施療院の設立を決定されました。施療院の院長には、おばあさまの遺言通り、このわたしが就任することも決まっています。その他には、施療院法というか、名前はまだ決まっていますが、必要な法律をつくる予定です。そして、この救貧院も、施療院の候補地の一つです。まだ、決定ではありません。先の話です。そして、わたしは、施療院の設立と院長に就任のためいろいろ準備とそのため勉強をしなくてはなりません。ここにいるケンナス先生から医学や薬学、そしてやはりここにいるモリカさんから、薬草の扱い方を学ぼうと思えます。パラボン侯爵夫人、薬草に詳しいモリカさんを引き合わせてくれたことにも、改めてお礼を申し上げます。彼女は、かなり、薬草学に詳しいようですから、多くことが学べるでしょう。それから、ここにいるガンダス先生が連れてきた子供たちのことですが、彼らが《治療師》になれるかどうかはまだはっきりとわかりませんが、薬草園の世話の仕方を習いたいという子たちもいます。この子たちの世話もしていただけると助かります。あと、これははっきりと申し上げた方がいいと思えますから、救貧院の院長として、これは困るということがあれば、はっきりそうおっしゃって下さい。身分をよく考えろといわれても、まだ、子供のわたしにはわかりません。とりあえず、明日は、陛下の菜園のお手伝いをする事になっていきますから、こちらには伺えません。あさっては、こちらに参りたいと思います。救貧院の皆さんの仕事のおじゃまをする気はありませんが……」

セシーネは、ここで、キルマの反応を確かめた。救貧院の院長は机においた組んだ両手を固く握りしめ、引きつったように見える顔でそれを見つめていた。キルマが口を閉じたままなので、セシーネは、自分の話を続けた。

「ところで、もう一つお願いがあります。パラボン侯爵夫人。第一王女付けの侍女のことです。あなたは、いろんな方をご存じでしょ

う。もし、いい方をご存じならご紹介してくれと助かります」

ここで、キルマは目を上げた。

「エランダは、わたくしの推挙ですが、何か、お気に召さないことでも？」

実は、セシーネは、エランダが、何となく気に入らなかつた。だが、最初の出会いがまずかつたと思つたが、そのことは、キルマに話さない方がいいだろうと判断した。

「いえ、昨日の今日では、まだ、わかりませんが、わたし付けの侍女というのは、そうね、こういえばよろしいかしら、わたしと同じようなことが、楽しいと思つてくれるような人でないと、長続きしないじゃないかしら？ そう思います。エランダが気に入るとか気に入らないということではなくて」

「お話は、それだけですか？」

「あと、ケンナス先生には、リングートの《見立て》をしに王宮に一度来て頂きます。今日は、ケンナス先生のご都合がよろしければ王宮に戻ります。では、失礼します」

こういい終わるとセシーネはキルマの返事を待たずに院長室を出た。廊下では、コンラッド侯爵夫人とエランダがウロウロしていた。セシーネは、二人に馬車の中で待つようにいうと、コンラッド侯爵夫人が鄭重にご用は終わりましたかとたずねた。セシーネはまだですと、今度は、ビランにケンナス先生のご用意が出来たか聞いてきてと頼んだ。ビランは何かいいたそうだったが、黙つてセシーネの命令に従つた。

馬車の中でも、席次はある。だが、セシーネは自分の隣にケンナスを座らせた。セシーネにとって、コンラッド侯爵夫人母子よりケンナスの方が、格が上だつた。互いを紹介する手順でも、ケンナスを優先させた。コンラッド侯爵夫人は、治療師と聞き返してきたが、セシーネは無視して、わたしはケンナス先生とお話がありますからとキツパリいった。

「先生、見習の子たちはどうですか、少しは見込みがありますか？ エランという子はどうやら薬草の育て方を習いに来たようですけど」

治療師のケンナスは、王宮に出入りするようになって王宮でどう振る舞えばいいかあるかは、多少は心得てはいた。また《治療の技》に対して、人々がどのように反応するかも十分承知していた。そこで、慎重に答えた。

「まず、見習の見込みですが、あるともないとも。わたしだって最初はそうでしたよ。まだ、始めたばかりですから、なにしろ、中には文字の読み書きさえ出来ない子もおりますから、そこから、始めなければなりません」

「そうですか。それは、大変ですね」

「出来るだけのことはするつもりです。王女さま」

セシーネは、今度は、ケンナスの書いている論文について尋ねてみた。ケンナスは《治療の技》に頼らない従来のアンドーラの医学による博士論文を準備していた。すでに従医長のベンダーの指導で医学学士の学位をケンナスは取得していた。博士論文に関してそちらもはかばかしくないとケンナスは答えた。

「治療法というのは、一人の患者を治せば、それで確定するという訳ではありません。数が多いほどその治療法に対して信頼出来るというわけで、わたしの申し上げていることがおわかりになりますか？王女さま」

「ええ、大体のところ、なんだか、大変なことを先生にお願いしているみたいで」

「気長にやりますよ」とケンナスはのんびりした声でいったが、セシーネは気が重たかった。あの見習の子たちは《治療師》になれるのかそれとも、一人もなれなかつたら？

救貧院の院長でもあるキルマ・パラボン侯爵夫人は、セシーネたちの馬車を見送り院長室に戻りながら後悔の念を覚えていた。体よくセシーネ王女を追っ払うつもりが、逆に、ここに来る明快な理由

を与えてしまった。キルマは、セシーネが苦手だった。苦手どころか、恐怖の的でもあった。女官長を長く努めた経験から、王家の人々をキルマはうまく「扱え」ていた。国王ですら、それなりに「扱え」ていた。だが、第一王女だけは、彼女の手之余った。それは、第一王女の持つ不思議な《力》に起因していた。王太后の生前中、キルマはしばしば、セシーネの《見立て》の稽古相手になった。その時の奇妙な感覚も恐ろしかったが、《見立て》の上達につれ自分の体調を言い当てるセシーネに、キルマはドキリとしたことが何度もあった。それは、まるで心の中をのぞかれるような思いだった。

長年、生きてきた来た人の常として、また、王家の女官長という職の役目柄、キルマの心の中には、人に知られてはならないあるいは、知られたくない秘密がたくさんあった。キルマにとって「秘密」は、権謀術の「切り札」の一つだった。「切り札」の切りようによつては、相手はいくらでも、キルマの思うがままの働きをしてくれた。だが、第一王女に関しては、キルマの「切り札」は弱かった。その「切り札」は、セシーネの生みの母に関するもので、これは王太子にはかなり有効だった。しかし、第一王女に対してこれを使うのはどうしてもためらいがあった。キルマは、第一王女の《見立て》が恐ろしかった。ケンナスの《見立て》も怖かったが、彼は、素性も今一つ定かでない。いくらでも、抗弁が出来た。だが、第一王女となるとそうはいかない。言葉の重みが違ってくる。キルマの最善の策は、第一王女から遠ざかることだけだった。

しかし、「王立施療院」の設立も気になった。国王は、王太后の「遺言状」の発表の席で機嫌が悪かった。母親の死に関して、国王はそれなりに悲しんだが、一年余りの闘病生活で覚悟は出来ていたようだった。キルマは、役目上、国王と王太后の確執をそれとなく知っていた。何かと国政に口を挟みたがる王太后を国王は煙たがっていた。キルマは国王の、死んでからも余に指図する気かという国王の呟きを聞き逃さなかった。

救貧院の院長でもあるキルマ・パラボン侯爵夫人は、セシーネた

ちの馬車を見送り院長室に戻りながら後悔の念を覚えていた。体よくセシーネ王女を追っ払うつもりが、逆に、ここに来る明快な理由を与えてしまった。キルマは、セシーネが苦手だった。苦手どころか、恐怖の的でもあった。女官長を長く努めた経験から、王家の人々をキルマはうまく「扱え」ていた。国王ですら、それなりに「扱え」ていた。だが、第一王女だけは、彼女の手に余った。それは、第一王女の持つ不思議な《力》に起因していた。王太后の生前中、キルマはしばしば、セシーネの《見立て》の稽古相手になった。その時の奇妙な感覚も恐ろしかったが、《見立て》の上達につれ自分の体調を言い当てるセシーネに、キルマはドキリとしたことが何度もあった。それは、まるで心の中をのぞかれるような思いだった。

長年、生きてきた来た人の常として、また、王家の女官長という職の役目柄、キルマの心の中には、人に知られてはならないあるいは、知られたくない秘密がたくさんあった。キルマにとって「秘密」は、権謀術の「切り札」の一つだった。「切り札」の切りようによつては、相手はいくらでも、キルマの思うがままの働きをしてくれた。だが、第一王女に関しては、キルマの「切り札」は弱かった。その「切り札」は、セシーネの生みの母に関するもので、これは王太子にはかなり有効だった。しかし、第一王女に対してこれを使うのはどうしてもためらいがあった。キルマは、第一王女の《見立て》が恐ろしかった。ケンナスの《見立て》も怖かったが、彼は、素性も今一つ定かでない。いくらでも、抗弁が出来た。だが、第一王女となるとそうはいかない。言葉の重みが違ってくる。キルマの最善の策は、第一王女から遠ざかることだけだった。

しかし、「王立施療院」の設立も気になった。国王は、王太后の「遺言状」の発表の席で機嫌が悪かった。母親の死に関して、国王はそれなりに悲しんだが、一年余りの闘病生活で覚悟は出来ていたようだった。キルマは、役目上、国王と王太后の確執をそれとなく知っていた。何かと国政に口を挟みたがる王太后を国王は煙たがっていた。キルマは国王の、死んでからも余に指図する気かという国

王の呟きを聞き逃さなかった。

キルマの見るところ、国王は即位以来その権力をより強固なものにしていった。それは、「竜にさらわれた」先王の失踪以来よりなお一層はつきりしてきた。権力のあるところには、甘い汁があった。それは、私腹を肥やすことではないことをキルマは知り抜いていた。いささか金銭にうるさい国王の元では、それははばかれた。それに金銭面では、国王はそれなりの気遣いをパラボン侯爵家にしてくれた。領地の広さの割には、収入が今一つだった夫の領地は国王の計らいで「侯爵領」らしい収入をもたらすようになっていた。キルマは、金銭面よりも、人を意のままに繰るといふ快感が忘れがたかった。だが、“第一王女”はキルマの意のままに動いてはくれない。そして、また、今の自分が権力から遠ざかったという思いがキルマを駆り立てた。だが、打つ手はまだあるはずだ。キルマは、夫のパラボン侯爵と話し合う必要性を感じていた。パラボン侯爵は妻のキルマから見てもなかなかの知恵者だった。万事、派手好きな王太后の元で、無難に女官長という職を無事努められたのも、夫の助言があつてのことであることをキルマはわかつていた。夫の助言の大部分は王太后の引き立て役に徹しろというものだった。キルマは自分の容姿が王太后にはかなわないことはわかつていた。王太后が自分を女官長として側に置いていたのも、その恵まれない容姿も一因にあると気づいていた。だが、口にしたことはなかったが、知略では負けないと自負していた。キルマの見たところ、勝ち気な王太后の失敗は、男の面子をしばしば損なうことにあつた。その愚をキルマは犯すつもりは毛頭なかった。夫に無断で、何かを決めるのは機嫌を損ねること位キルマにはわかつていた。しかし、その前に、簡単な「手」を打つことにした。

キルマは、薬草園の責任者であるモリカと向き合った。

「どうせ、あの子のことですから、あなたのことも先生と呼ぶのでしょ」

「あの、院長、それがそのう」とモリカはしどろもどろだった。

「いえ、かまいませんよ、それが、あの子の手なの」とキルマは、第一王女を「あの子」と呼ぶことで自分が王家と親しいことをモリカに思い出させた。モリカはごくりと唾を飲み込んだ。

「ともかく、第一王女殿下は、お勉強をしにこちらにおいでになります。そのお相手は、モリカ、あなたがするように、いいですね」院長であるキルマの言葉にモリカは不安そうな顔をした。

「怖がることはありませんよ。あの子は、お勉強が好きなの。あなたのことを先生と呼ぶのはあなたをそれなりに有能だと認めていることですよ。身分よりもそういった事を重要だと思っっているからなの。私も国母さまにお仕えしている時は、身分に甘えるようなものよりも、きちんと仕事を出来る人を大事にしてきましたからね。あなた達にもそうしてもらいますよ」

モリカは畏怖をこめた目で自分の上司に当たる院長を見つめ、こくりとうなずいた。モリカの反応にキルマは満足だった。

コンラッド侯爵夫人母子を着替えや身の回りのものを取りに帰るという名目で追いかえすと、セシーネはケンナスと一緒にリングゲート王子の部屋に向かった。リングゲートは、自分も《治療の力》があるかどうか試したがっていた。そのため、リングゲートは厳重に監視されていた。そして、エドワーズは彼に《治療の技》を使えたからといって偉くも何ともない。むしろ、王子として何が大切かとその一つが武術だと助言した。そこは、王子といってもやんちゃ盛りの男の子である、自分付の近衛兵を相手に剣術の稽古を始め、それに夢中になった。ケガはその最中の出来事だった。

従医長に捻挫と診断され、安静を申し渡されたリングゲート王子はしよげていた。今朝も朝食は寝台の上で一人で食べた。ケガの痛みよりケガをした事実リングゲートは自尊心を傷つけられていた。少しくらいのケガを怖れるなという父親のヘンダース王子に比べて、母親のアンジェラ妃は少し大騒ぎしすぎだとリングゲートは思った。

ケンナスのリングゲートへの診察には、当然ながら従医長のベンダ

「博士、そして母親のアンジェラ妃も立ち会った。ケンナスは、慎重な手つきで湿布をはがすとリングートの足首を曲げたり伸ばしたりして、普通の医学的な診察をまず行つた。その後、断つてから、患部に手を当て《見立て》を行つた。そして、所見を述べた「やはり、捻挫のようですね。骨には特に異常は見られません」

アンジェラ妃はホツとした表情を浮かべた。その後、ベンダーとケンナスが治療法や療養期間の過ごし方などを話し合った。結局、リングートは寝台で安静に過ごす必要はなく、椅子に腰掛けて学科の勉強をするように母親から申し渡された。リングートは、やや期待を込めて、ケンナスに《治療の技》は？と尋ねた。治療師のケンナスは素っ気なく答えた。

「捻挫を《治療の技》で、治しことはありませんので、湿布で患部の炎症を治した方が確実ですな」

リングート王子は、がっかりした。

リングートの部屋を出ると、ケンナスはベンダーにご相談したいことがあるといい、ベンダーも話があるわたしの部屋に来ないかとケンナスを誘つた。セシーネがついていこうとすると、二人に王女さまの部屋はあちらでしょうといわれた。二人に追い払われたような形になって、セシーネはなんだか、子供扱いされたような気分だった。

確かに、十二歳の「宣誓式」を済ました後、セシーネは、ある程度、自分の裁量で物事を決められるようにはなつた。しかし、晩餐会など夜の酒の出る行事には出席が許されていなかった。これは、国王も王太后も意見の一致を見た方針で、セシーネ自身も特に出席したいとは思わなかった。自分が子供扱いされていることに不満がないわけでもないが、三歳半年上の兄のエドワーズ王太子さえ叔父のヘンダー王子は、まだ半人前扱いである。

一般的にアンドーラでは、男子は兵役義務を果たすとほぼ一人前の口を利いてもいいという風潮がある。兵役を果たしていないものが何かいっても、そんなことは兵役を果たしてからというのだなど、

軽くいなされる。ちなみに兵役制度があるためか、アンドーラの男たちは「戦話」が好きである。女たちはどうかというと決して嫌いではない。なくなった祖母の王太后もまたその娘のメレディス王女も好きな方である。セシーネもよく付き合わされた。しかし、父のジュルジス3世が即位して以来、戦らしい戦はない。アンドーラは平和を享受していた。

平和だからといって、争いごとがないというわけでもなく、小さな争いごとはあるにはあった。この王宮においても、争いごとは絶えなかった。メレディスのいうキルマの野望云々について、セシーネは、根も葉もないでっ上げとまでは思わなかったが、キルマの有能さだけは認めていいとセシーネは思っていた。無能で、長年、女官長という要職がつとまるはずもなかった。キルマがその職を辞したのは、最後の宰相と呼ばれた先代カルチエラ伯が提唱した文官の50歳定年制ではないかとセシーネは推測していた。

そして、その日の午後、ブルックナー伯からセシーネは思いもかけない話を聞く。

「救貧院につきましては、国母さまの持参金で運営されておると申し上げましたが、意外なことがわかりました。その持参金の中から、使途不明金つまり、使い道がわからない支出がございます、その調査のため、キルマ・パラボン侯爵夫人が救貧院の院長に任命されたということですよ」

「使途不明金？」

「ええ、かなり高額ですよ」

「同席していた従医長のベンダーが「何に使ったでしょうね？」

「だから、その調査中というわけで」

「まさか、私的に使い込んだと？」

「そこまでは、まだわかりません。しかし、そうになったら横領罪ですよ」

「横領罪？」とセシーネは聞き返した。

「ええ、もし、そうならたからことですか。ところで、王女さまは、何故、肉の調査など思いつかれましたか？」

「食べるものも食べないでは、病気は、治らないと思ったからです」「そうですか、しかし、ベンダー博士、病人には何を食べさせるのがよろしいのかな？」

「病気によつて違いますよ。ちよつと面白い治療法があるんですよ。アンドーラの医学ではないのですが、昔読んだ書籍に食事によつて病気を治すという治療法について書かれていましたね」

ほうという顔をしてブルックナー伯が、ベンダーの話を促した。

最近、ブルックナー伯は「医学漬け」である。今日も、セシーネの《見立て》を所望した。ブルックナー伯は、年齢による老化は多少見られたもののその他はいたって健康体であるとセシーネは、正直に告げた。長生きはしたいものだといいながら、ブルックナー伯は、体調はいいのだといった

大蔵卿の職をブルックナー伯は、新進気鋭の後継者にその座を譲っていた。だが、この人事は、喧嘩をまき散らした。後継者の若さもさることながら、出自が問題になった。彼は、武官の雄である陸軍元帥の甥である。中には、陸軍が大蔵省に圧力をかけた人事だという意見もあった。しかし、これは、前任者のブルックナー伯には心外であった。新大蔵卿はその能力と政治的見識の高さにおいて国王に推挙したのであつて、陸軍元帥の甥という事実は偶然の賜物である。別に陸軍におもねるような自分ではないと、ブルックナー伯は思っている。新大蔵卿は、国家財政に「計画性」を持ち込んだ。これが、国王の賛意を得た。計画性なくして安定した国政はなく、行き当たりばつたりの国政では、国民は迷うばかりである。

従医長のベンダー博士の「講義」は、しばらく続いた。彼は、食物を植物性と動物性に分類し、これを釣り合いよく摂るのが望ましいと説いた。セシーネもブルックナー伯も興味深く拝聴した。

「肉ばかりに頼るのはいけません、やはり、畑でとれたものも食べなければ」

「軍あたりも、昔から兵隊に何を食べさせればいいのか研究はしているようですが」

「豆辺りはいいですね」

「豆ですか」

ベンダーの話を聞きながら、セシーネは救貧院に思いを馳せた。ブルックナー伯の話はいささか意外ではあったが、その使途不明金とやらについて、セシーネは、少し思い当たる節があった。幾らか金銭細かい国王に反して、王太后は大まかだった。国王は常々国税は王家が贅沢をするための費用ではないといつていたが、王太后は自分に気前がよかった。自分だけではない、お気に入り侍女たちにも高額な贈り物をした。国王は、しばしば諫めたが、王太后は自分のお金だから好きにさせると取り合わなかった。いったい王太后は何にお金を使ったのであろうか？

王太后は「施し」が好きだった。裕福なものが貧しいものに富を分け与えるということは「理」に適っているようにも思えたが、これを国王はしばしば「怠け者」をつくるだけだと苦言を呈した。「働けば暮らせる国」が国王の理想でもあった。そしてまた、国王自身も「働き者」であった。「働き者」の国王の二人の弟は、それぞれ海軍と陸軍に籍を置き、ただ一人の妹は女官長という職に就いた。

贅沢な資金のある王太后に比べ、現王妃のヘンリッタは、自身の乏しい持参金を何とかやりくりしていた。これは、周辺から王妃は質素と評判を取った。だが、これはいい方で中には「ケチ」というものもいた。王家に嫁いだ妃たちには、それぞれ王室費からそれなりに費用が出たが、それでヘンリッタを始め他の妃たちは何とか面目を保った。

さて、ベンダー博士の「講義」の成果は、夕食の席で発揮された。興味深く聞いていた国王は

「ほう、まんべんなく釣り合いよくな」

「なるべく、いろんなものを召し上がって頂くようにはしては、お

りますけど」と献立担当の王妃が、苦心の一端を覗かせた。

「ランセル叔父さま、軍でも、食事の研究をしているはずですって」「セシーネ、俺にそんな事聞くなよ。そんなことよりリンゲートの足はどうなった」

食卓の話題は、リンゲートのケガに移った。

セシーネは十二歳の誕生日の「宣誓式」の日から、夕食を国王と同席するようになった。この時、王太后はすでに病床にあり、同席しなかった。したがって、王太后がいる夕食の席がどういうものは、セシーネは知らない。メレディスにいわずと「お説教」の席だと、国王ですらその対象になつたらしい。

どこか《治療の技》に懐疑的であつた王太后が何故「施療院」の設立を思い立ったのか、セシーネには不思議だつた。だが、設立は国王の裁可が下つた。国王は細かい指示をセシーネに与えなかつた。元大蔵卿のブルックナー伯がその準備を手伝つてくれているが、準備は少しも進まない。

夕食を済ますと、セシーネは自分の居室に戻つた。新しい侍女のエランダは、部屋にはいなかった。別にたいした用もないのでセシーネは、自分の勉強に戻ろうとしていた。そこへ、護衛のピラン中尉がエランダを連れてきた。

「廊下をウロウロしていたのを見つけました」

エランダは挨拶もせず、いきなり「あんな部屋いやよ」といった。「わたしは王家の血を引いているの、あんな狭い部屋はいやよ。あの部屋が気に入つたからあの部屋にして」

セシーネは、相変わらず、謁見に出るような「着飾つた」エランダを見つめた。セシーネはここで自分たちの関係をはっきりさせる時だと思つた。王女と侯爵令嬢の違いを。

「エランダ、まずいっておくわ、王家の血を引いているかもしれなけれど、あなたには。王家の紋章も許されていなし、王位継承権もないでしょう。」

「王位継承権？」

「そう、それが、あなたとわたしの大きな違いね。それと、王宮の部屋割りは侍従長と女官長が決めるの。わたしに文句を言っても無駄ね。侍女の部屋割りは女官長のメレデイス王女が決めるの」

セシーネが言い終わると、エランダは挨拶もせず、部屋を出ていこうとした。

「ちょっと待ちなさい」と、セシーネは呼び止めた。ビランが、素早くエランダの腕をつかんだ。エランダはもがきながら、叫んだ「ちよつと何するの。離してよ」

「あんた、行儀が悪いぜ」

確かに行儀が悪いとセシーネは思った「ビラン、この子がお使いをちゃんと出来るか見張って頂戴」

「畏まりました」とビランがにやりとした。

「エランダ、従医長のベンダー先生のところについて、今日、お話ししてくれた治療法について書かれたご本がお手元にあるなら、お借り出来ないか聞いてきて頂戴。丁寧に頼むのよ」

セシーネに用を言い付けられたエランダは不服そうだった。

「ビラン、ベンダー先生がそのご本をお読みになるのなら、後でいいと申し上げて」

ビランは畏まりましたといってエランダの腕をつかんだまま部屋を出ていった。

セシーネは、エランダの気に入った部屋がどの部屋かはわからなかったが、部屋を変えて欲しいというエランダの要求を受け入るつもりは毛頭なかった。エランダにあてがわれた部屋が王宮のどの部屋かセシーネは聞いていなかったが、コンラッド侯爵家の自分の部屋より狭く粗末なのだろうかと思った。しかし、王女の自分に対してエランダは言葉づかいがなっていないとセシーネは少し不愉快になった。王女であることをひけらかすつもりはなかったが…

しばらくして、二人が戻ってきた。ビランはエランダの腕を離すとセシーネに報告した。

「まったく、お使いも出来ないだから。仕方がない、自分がベンダ
ー先生に申し上げました。ご本のほうは、大掃除の時にどこかにし
まいこんでしまったそうので、一応捜してみるところでした。姫、
他のご用は？」

「そうね、メリメが来たら通して頂戴」

ビランは敬礼をすると部屋を出ていった。部屋に残されたエラン
ダは、こった髪型に結び上げた頭をそらし、

「あなたの侍女なんかしたくないわ」

「そう、やめたかったらそれはそれで結構。あなたの代わりはいく
らでもいるんですからね。でも、エランダ、家に帰っても、あなた
のお母さまから行儀よくしろとかいろいろいわれるだけよ。その辺
をよく考えるのね」

エランダはまだふくれ面をしていた。そこに王太子の訪問を護衛
が告げに来た。そのとたんエランダの表情が変わった。

部屋に入ってきた王太子のエドワーズは相変わらず甲冑姿だった。
セシーネはふと、寝る時も甲冑を身につけたままなのかしらと思っ
た。

「あのな、セシーネ、イザベルからまた手紙が来て、お前に会いた
いといつてきているんだ」エドワーズは眉をひそめ、怪訝そうにい
った。

「それは、よろしくという程度じゃないかしら。まさか、メエーネ
まで遊びに行けるわけないでしょう？」

「それが、メエーネはいいところだから一度来てみたらと書いてあ
るんだ。なんか聞いているか？」

「そんな話聞いていない。そんなことよりイザベルにお返事でも書
いたら？お兄さま」

「うん、そう思うんだけど、何を書けばいいんだ？」

「そうね、取り敢えず、わたしは、多分メエーネにはいかない。そ
うだ、礼服が替わることも書けば、メレデイス叔母様にその辺り
を伺ってみたら」

多分その辺りがいいんだろなといいながら、王太子はセシーネの部屋を出ていった。扉が閉まったと同時にエランダが、イザベルって誰？と尋ねた。セシーネはその質問を無視しようと思ったが、「イザベルは、メエーネの王女よ、お兄さまの婚約者よ。多分正式に婚約したんだと思うわ。あと、イザベルのことはイザベル王女さまとかイザベル殿下というように。ほんと、あなたのお母さまのいう通り言葉づかいが悪いわね」

エランダは、フンという顔をした。

祖母の王太后は礼儀作法にやかましかった。日頃、行儀よくしていないといざという時その悪癖が出ると口を酸っぱくしてセシーネにいつていた。祖母のいざという時とは、各種の行事ごとだった。祖母の小言にセシーネはしばしば反発したが、今になって、祖母の言葉があたっているように思える時もあった。

第一王女の部屋付の侍女頭のメリメがやってきた。部屋付というのは、王家の人々の様々な雑用をする係で、部屋の掃除から洗濯など下働きをした。侍女の序列からいうと、第一王女付きの中で、メリメはエランダの次ぎになる。

「王女さま、今日はお風呂の日ですが如何致しますか？」

「そうね、いつも通りでいいわ、メリメ」

そこへエランダが、わたしもお風呂へ入りたいわと割り込んだ。

メリメは、呆れたように「何いつているですか、王女さまのご用の方が先です」

ここで、セシーネはふと着飾ったエランダをチラッと見た。エランダは「着飾って」いたが何故か薄汚れているようにセシーネには思えた。

「メリメ、この子にお風呂の入りを教えてあげて」といいながら、セシーネは鼻をひくひくさせ、こつ付け加えた「なんんだか、匂うわ」

エランダは、怒りで顔を真っ赤にした。だが、セシーネはエランダの機嫌なぞ取る気もなかった。エランダの態度は、十分セシーネ

を不愉快にした。セシーネの見たところエランダは、王宮に招かれた「客」のように振る舞っていた。コンラッド侯爵家でどういわれてきたのか知らないが、侍女は侍女である。それに、エランダは王女と侯爵令嬢の違いを受け入れようともしない。母親のコンラッド侯爵夫人の前では少しは行儀よくはしていたが……

翌朝、着替えをすませたセシーネの元に、いつも通り、メリメがやってきた。メリメは手早く寝台を整えながらエランダについて呆れたようにセシーネにこう告げた。

「まったく、まだ、起きてこないんですよ。ご用を承るのにあれじやどうしようもありませんよ」

「別に、これといって用はないけど」と黄金色の髪を櫛でとかしながらセシーネはいった。

「しかし、王女さま、普通、世話をしたらお礼ぐらいいうでしょう。それを当然のような顔をして。勝手なことばかりいうんですからね。よっぽど、いつてやるうかと思いましたよ」

「何て？」

「自分の世話をして欲しいのなら、自分の侍女を雇えばいいって」
王宮の侍女たちの中で高位にある者はよく自分たちの身の回りの世話をする侍女を雇うことが許されていた。エランダもそうしたければそうしてもいいはずだった。昨夜、エランダの世話をメリメに頼んだのは王宮でのあれこれに慣れていないエランダに色々、王宮勤めが長いメリメから教えて貰えばいいとセシーネは考えたのだが、どうも裏目に出たようだった。「宣誓式」の前から第一王女付のメリメとセシーネは気が何となくあった。

「メリメ、あなたとうまくいかないなら、やめて貰うのはエランダのほうですからね」

鏡に映ったメリメは満足そうにうなずいた。

その日は「役所」が仕事を休む「休日」だった。国王は、その休

日には火急の用件がない限り新宮殿と呼ばれる建物にある執務室へ行かず、王宮で一日過ごした。国王は「家庭」を大事にしていた。それは、自分の直系の王太子や王女だけでなく、弟王子たちの妃や王子・王女にも心配りを忘れなかった。

朝食の席で、作法通り、椅子から立ち上がったリンゲート王子に国王は、足は大丈夫なのかと声をかけた。リンゲートに替わって母親のアンジェラ妃が、このくらい大丈夫ですわと答えた。そうかといって、国王は侍従の引いた椅子に腰掛けた。

第二王子の妃アンジェラは、王子と王女を一人ずつ生み、宮廷内で確固たる地位を築き始めていた。王太后の亡き今、王妃ヘンリッタのよき相談相手となっていた。いわゆる新宮殿での政治に口を挟みたがる王太后に比べ、ヘンリッタ王妃は「国政」にはほとんど口出しせず、アンジェラと共に王宮内を「家庭的」な雰囲気をつくることに心を配った。ミンセイヤ王妃の死で失意の国王の前に現れたのが、ヘンリッタだった。幼いセシーネはなぜだが、王太后になつかなかつた。王太后が声をかけても第一王女は乳母にしがみつばかりだった。そこで第一王女を乳母のユーリンから引き離そうと王太后は一計を案じた。自分付の侍女の一人ヘンリッタに第一王女セシーネの相手を命じた。幼いセシーネの遊び相手をしているうちに国王の目にとまった。国王は忙しい合間を縫って、王太子やセシーネ王女の遊び相手も努めた。ヘンリッタはセシーネを遊ばせるのが上手だった。国王は、しばしば、セシーネとヘンリッタと三人で時を過ごすようになった。

「家庭的」な国王は、朝食の後、長女と次女を連れて王宮の庭園の片隅で最近始めた「菜園」へ足を向けた。昨日の雨は夜更けに上がり、青空が広がっていた。

「お父さま、気持ちがいい朝ね。」とセシーネは深呼吸をした。

そうだなといってから国王は、走り出したエレーヌ王女にどこ行くんだと呼び止めた。エレーヌは振り返り

「お水をやるんでしょう？お父さま」と再び走り始めた。

「エレー又、今日はいいんだ。昨日、雨が降ったからな」

気を利かせたつもりのエレー又は少しがっかりした。

国王が「菜園」を始めたきっかけは、ある農業に熱心な領主に勧められたからである。彼は、同じ面積の耕作地でも工夫次第で収穫量を増やせば、農民たちの収入を上げられると国王に進言した。この進言は随分前に行われたが、母親の王太后の病死や他のことに紛れてなかなか実行に移せなかった。国王が思いきって「土いじり」をしようと思いついたのは、従医長のベンダーに「野外生活」を勧められたこともあるが、国王としてアンドーラを豊かな土地にしたという思いもあった。

父親同様、国王という「職業」についたジュルジス三世は、ある意味で「職業」を選べなかった。王太子を始め子供たちを育てるにあたって国王は、子供たちが「世間知らず」になるのを怖れた。宮殿の中に籠もっている世の中の動きがわからない。まず、国王が王太子とセシーネ王女に見せたのは、ものをつくるという仕事だった。国王自身も興味深く宮殿で働く者たちの仕事ぶりを眺めたりし、時には、鍛冶仕事に手を出したこともあった。

王宮の庭園にリンゴの木が何本かある。リンゴの実がなると、園丁たちに混ざって王太子やセシーネと一緒に国王もその実をもいだりした。国王にとってリンゴの収穫はなかなか楽しみなことだった。そんな経験もあって「土いじり」を試してみようという気になった。話を聞くだけではわからないと国王は思った。

それほど広い菜園ではない。普段の世話は、園丁頭がやっていた。国王自身は、朝、散歩がてら見回る程度である。種をまいた何種類かの野菜が芽を出し、雨上がりの土の匂いが、国王の心を和ませた。娘たちにも父親としての愛情をたっぷり注ぐ。このひとときは国王にとって国王であるよりも父親でいられるつかの間の休息だった。

さて、一男一女の父親であるヘンダース王子も「父親業」に精を出していた。彼も「休日」以外は海軍の本営本部に「出勤」してい

た。普段は、リングート王子の養育はリングート王子付きの侍従任せである。リングートはケガをしているとはいえ「学科」の勉強に
なんの支障が無いことがわかってる。侍従から息子の学科の進展
振りを点検し、細かい指示を出す。ヘンダースには、息子と同じ年
頃の時、忙しい両親に構って貰えなかったという思いが心の片隅にあ
る。そんな思いをなるべく息子にはさせたくないと言ったヘンダースは思
っていた。そんな気持ちを知ってか知らずかリングートは神妙な面
持ちで聞いている。実はこの日の休日の予定は、最近武術に興味を
示している息子の剣術の稽古の相手でもしてやるのかとヘンダース
は思っていた。剣術なら多少自信はある。だが、リングートのケガ
で予定は変更を余儀なくされた。早く治るといいなと言って、今度
は娘のジョイス王女のところへと向かった。ふと、ランセルの方は
王子か王女かどっちだろうなと思う。弟のランセル王子の妃ネリア
はもうすぐ産み月に入る。

一方、その近々父親になる予定のランセル王子は、昨夜、兄の国
王からいたわってやれといわれた自分の妃をいたわる前に「重騎訓
練」と呼ばれる甲冑を着込んでの訓練を始めた王太子に図書室で助
言を与えていた。

「随分動きがよくなったじゃないか。走り回れるようになれば一人
前だ。後は、中身だな」

「中身？」

「そう、頭の中身も大事だぜ。軍略の勉強も本格的に始めたら。こ
の中に軍学校で戦略組だったものはいるか？」とランセルは図書
室に集まっている王太子の「勉強」のために王太子付けになってい
る武官の顔ぶれを見回した。年若い士官が自分は戦術組でたと名
乗り出た。戦術か、ま、いいかとランセルは思いながら「取り敢え
ず最後の国内戦といわれているゲングスル戦の作戦あたりどうだろ
う。この作戦は今の陸軍元帥が若い頃たてた有名な包囲戦なんだ。
これを見直すことから始めたらいいじゃないか。この中でこの作戦
に参加したものはいるか？」

「自分は、補給部隊でした」とやはり甲冑姿の退役大佐がいった。ランセルのいうゲンガスル戦以降、アンドーラの国内では、戦乱らしい戦乱は起こっていない。このゲンガスル戦をもってアンドーラは「国内統一」を果たすことになる。アンドーラ全土に「領主」の上に国王が君臨するという構図が出来上がった。この「国内統一」で「領主」たちは勝手気ままに領地を治められなくなった。領主たちは、なお一層、王家の顔色を伺うことになった。

顔色を伺われる王家を継ぐ身のエドワーズ王太子は、叔父のランセル王子の助言を受け入れ軍略の勉強をしようかと決意していた。軍用語の基礎は出来ている。叔父の助言は父の国王からの間接的な指示に思えた。王太子自身は叔父たちと違い陸軍軍学校へも海軍兵学校へも入学していない。父の国王にその必要はないといわれた。だが「軍」の勉強は必要だと思っていた。確かにゲンガスル戦以来アンドーラは平和が続いては、いる。

穏やかな平和が続いているアンドーラでも、心中穏やかでない人物もいた。救貧院長のキルマ・パラボン侯爵夫人である。彼女は、先王の時代から国王二代に渡り女官長を努めた経験から、この国の方針が何処で決定され実行に移されるのかよく知っていた。だから「王立施療院」設立は「以外」であった。国王は、余り乗り気ではなかった。セシーネ王女の話が真実ならそれが覆されたのである。キルマは不安だった。施療院設立の準備のためセシーネ王女が、毎日のように救貧院へやって来るのも不安だった。この不安の一部を夫にうち明けた。夫のパラボン侯爵は海軍少将でもある。彼は、根っからの「海の男」だった。定年で「艦」を降りた今でも外洋に出たがっていた。現在は、海軍兵学校の校長を務めている。キルマの夫は彼女の話の聞くと、あっさりいった。王宮に伺候しようと。キルマは躊躇した。夫は再び、陛下に伺うのが一番といった。キルマは決意した。

女官長時代、王太后の元に「ご機嫌伺い」にやって来る貴族たち

をキルマは、内心では、軽蔑していた。王太后の機嫌なぞ取つても無駄なことをキルマはよく知っていた。全ては、玉璽を握っている人物が、この国の最高権力者であり、全てを決定していた。先王時代はまだ、国政にそれなりの影響力は王太后にもあった。だが、先王の失踪以来、その影響力も徐々に低下し、精々、生母を亡くした第一王女の教育方針ぐらいであった。その事実には王太后は、かなりの抵抗を試みたが、国王は礼を失しない程度にやんわりとそれをかわした。

国王に対して、キルマは王太后の権威を笠に振るうほど愚かではなかった。ましては、王太后のいない今、誰の機嫌を取ればいいのかキルマはよくわかっていた。そしてその機嫌の取り方も……

エランダ侯爵令嬢は、相変わらず「着飾って」いた。服は昨日着ていた謁見に着るような礼服と違っていいだろう高価な絹の服で、赤みがかかった褐色の髪は昨日ほどでは凝ってはいるが高々と結い上げられ、濃いめの化粧をしていた。これでは「身支度」に時間がかかったろうなとセシーネは思った。セシーネ自身は背中まで伸ばした金髪を一つ三つ編みにし、化粧もしていなかった。服も絹ではない。外見から見るとどちらが王女で侍女なのかわからないがセシーネは構わないと思っていた。行事で礼装が必要な時以外、身なりにお金や暇を費やすより別なものに掛けた方がいいと考えていた。その別なもののため、セシーネは王宮の図書室へ向かっていた。エランダは渋々ついてくる。歩きながらエランダに毎日礼装しなくてもいいのよとセシーネはいった。エランダは返事をしなかった。

図書室の扉の前に近衛兵が立っていた。誰かが図書室にいる証拠だった。セシーネは、昼食の時、ランセルがエドワーズは図書室で昼食を取り、ちよつとした「幕僚会議」気分を味わっているといったのを思い出した。自分付の護衛の肩越しに入室禁止かしらと尋ねた。扉の前の近衛兵は何つて参りますと扉の中に入った。近衛兵が戻ってきて、王太子殿下は入室をご許可なさいましたと告げた。煩

わしい手続きだが、セシーネは慣れていた。護衛が脇によけてセシーネは図書室の中に入った。鎧を着込んだ男たちが大きな机を囲んでいた。セシーネは膝を軽く曲げ、王太子に挨拶するとお兄さまよろしいかしら？と尋ねた。何だと兄は聞き返した。エドワーズは、机を挟んで扉の向こう正面にいた。机の上には大きな紙が広がっていた。どうやら、地図らしい。

「ちよつとご本を捜したいの。おじゃまなら後にするけど」

いや構わないと兄は許可した。セシーネは椅子に腰掛けている甲冑姿の男たちの後ろを周り、正面の壁に沿って立っている書棚に向かつて歩き始めた。エランダも後ろからついてきた。丁度セシーネが兄の背に周り、書棚の前にたどり着いた時だった。エランダが、やけに甘つたるい声で王太子に話しかけた。

「王太子殿下、わたしのこと覚えている？」

何だと怪訝そうに王太子は眉をひそめエランダの顔を見た。セシーネは慌ててエランダのそばに戻り彼女の腕を引っ張りながら、ごめんなさいお兄さまと謝った。もがくエランダを書棚の前まで連れてくるとセシーネは、お兄さまの邪魔をしないと小声で叱った。エランダは不服そうだった。エランダを部屋の片隅に追いやり、あなたはここにいてと行って、セシーネは当初の目的である本を探し始めた。エドワーズは「会議」に戻った。

セシーネは何冊かの本を選び出し、それをエランダに持たせ自分の居室に戻った。エランダは重たい、こんなものを持たせるなんてと文句をいったが、セシーネは無視した。部屋の椅子を示してここに座っているようにとエランダに命じた。

セシーネは本に熱中して、エランダが部屋を出ていったのも気がつかなかった。エランダは、断りもせずセシーネの側を離れた。別に用は無かった。そこでセシーネは探しもしなかった。だが、エランダの図書室での行動は、ちよつとした「事件」の前触れだった。

セシーネが「事件」のことを知ったのは、翌朝の朝食前、叔母で

女官長のメレディス王女からだった。メレディスはセシーネの部屋に怒りで紅潮した顔で入ってきた。そしていきなり、いったいどういう訳？といった。セシーネは何のことかわからず、オウム返しのようにどういう訳ってどういうこと？と聞き返した。叔母は少し怒りを収め「そう、まだ、聞いていないのね。エランダ・コンラッドのことよ」といってメレディスは昨夜の「事件」について話し始めた。

エランダは、昨夜エドワーズ王太子の部屋にあられない格好で押しかけ、王太子に部屋を追い出されたということだった。セシーネは、叔母にあられないって？と尋ねた。未婚の叔母は頬を赤らめ「つまり、部屋着というか、つまり寝間着だったのですって。ともかく、エランダは今すぐやめて貰いますからね。いいわね」

セシーネは、この一件を抜きにしても、短い間だったがエランダはどう考えてもいい侍女になりそうも無いと思い、同意した。

「やめて貰うのは構わないけど、替わりの侍女は見つかるかしら？」
「替わりなら心当たりがあるわ。そっちにすればよかったわ。どっちか迷ったんだけど、年が近い方がいいかなと思ったものだから。ともかく、エランダには今日中にここを出て行って貰いますからね」と念を押すとメレディスは部屋を出ていった。

朝食の席でも、メレディスの怒りは収まらず、エランダのこの「事件」を話題にしようとした。朝食の席には「大人でない」エレーヌとリングゲートが同席していた。したがって、メレディスはただ、お行儀が悪いとだけエランダを評した。

「あんなお行儀が悪い侍女はやめて貰います。いいわね。エドワーズ」

「どうして、僕に聞くんですか？さっぱりわからないなあ」とエドワーズは迷惑そうだった。

この事件のことは王宮で働く人々の格好の話題となった。エランダはその後、ある異名で「勇名」を馳せることになるのだが、その一端を思わせる事件でもあった。エランダのしでかしたこの出来事

は、人から人へ伝わる内に次第に尾ひれがつき、中には、服を身につけていないと彼女を見たという目撃談まで現れた。ただ、主人公の名前は伏せられ、ある王女付侍女の侯爵令嬢がという匿名になっ
ていて、他の侯爵令嬢には迷惑な話である。あらぬ濡れ衣を着せられた侯爵令嬢もいた。ちなみにエランダの異名は女性にとつてあまり有り難くない「称号」ではある。

エランダは自分の「魅力」に絶対的な自信を持っていた。何しろ「実績」はある。彼女は弟の家庭教師を誘惑することに成功したのである。確かに男はこの手の誘惑に弱い。しかし利利な女は「餌」を見せるだけですぐ与えたりはしない。エランダは何度も「餌」を家庭教師に与えた。彼は、エランダのいうなりだった。最後には結婚を言い出しコンラッド侯爵夫妻の知ることとなった。たかが家庭教師と侯爵家の娘を結婚される訳にはいかない。エランダは領地から王都に移され、家庭教師は職を失った。

この経験から、エランダは「餌」を与えれば男はいいなりになる
と思いこんだ。王宮へ来て、彼女は、王太子と「出会った」。家庭教師とは比べられないほどの大物である。この大物を釣り上げるべく彼女は「餌」を与える機会をうかがった。狙った獲物の部屋を確認すると彼女はすぐ行動に出た。

さて、エランダの標的にされたエドワーズ王太子殿下であるが、
彼はこの事件をどうも女の子のすることはよくわからないで片づけてしまっていた。エランダの「いいことを教えてあげる」という「いいこと」が何を暗示するか彼は察していたが、そこは婚約者もいる身である、慎重且つ迅速に行動を起こした。大声で護衛を呼びつけ、彼女を部屋から排除した。こうして、エランダの「速攻」は、見事に肩すかしを食らうのであるが、このエランダの敗因についてもう少し分析してみると、要は簡単である。まず、王太子は、そう
いったことにその時はまったく関心なかった。彼の頭の中は、昼間の「軍略」のことでいっぱいだった。そして、明日からの「武術訓

練」に備えて少しでも早く眠り体を休めたかった。そして、決定的な決め手が、エランダの容姿は彼の好みからは遠かった。彼の女性の容姿の好みをいうと亡くなった母は美しかったと記憶している。叔母のメレディスも正装をすると華やかで悪くないと思っている。ただ、これは容姿の面からであって、男勝りの叔母は妻にするには骨が折れるだろうなと漠然と感じている。婚約者のメエーネの王女イザベルも会った時の印象は悪くない。ただ、この容姿に関してイザベルに余り期待はしてなかった。何年か会っていないし、成長過程でどう変化するかわからない。余り期待を掛けて裏切られるのを計算に入れてのことである。ただ性格は素直そうで気に入っていた。健全な結婚生活を長持ちさせるのには、重要な要素でもある。ついでに容姿もそれなりに愛らしかったとは思ってはいた。

王太子が武術訓練や軍略に精力を注いでいるのは、結婚を控えて少し手持ちぶさたからでもある。やはり王家同士の結婚である。いろいろな「外交交渉」の結果待ちの時期だった。エランダのことは大事な時に失点になりかねない。再発を防ぐ意味もあって、自分の護衛にあたる近衛兵に「女は絶対入れるな」と命じた。

エドワーズは、母の王妃が病死した後、父の国王が再婚し、幼心に深い傷を負った。先祖のヘンダース王は、その王妃の死後、幼い一人娘のメレディス王女を男手一つで育て上げ女王の座につけた。その史実もあってか、なかなかヘンリッタ王妃になじめなかった。妹のセシーネが素直に「お母さま」と慕うのに自分はなかなか母とは呼べなかったし、そう認めたくなかった。自分にとって母はただ一人だった。これが、彼の女性観や結婚観に多大な影響を与えた。その後、何年かたって、父に母のことを尋ねたことがある。国王は、ただ、愛していたから辛かった。辛かったから、思い出すのさえ辛かった。と語った。その時ようやく、母の死で傷ついたのは自分だけではないと彼は気がついた。

武官の娘（前書き）

王宮勤めは、貴族の娘たちにとってあこがれの地位のように思えたが、医学を学び、不思議な《治療の力》を持っているセシーネ王女が、侍女に選んだのは…

武官の娘

自分付けの侍女がまたいなくなつてしまつた第一王女のセシーネは、予告通り救貧院に向かつた。馬車の中で少し気が重たかつた。

一昨日、救貧院院長のキルマ・パラボン侯爵夫人にああいったものの、彼女が歓迎してくれるとは思えなかつた。だが、出迎えたキルマは心なしか挨拶がいつもより丁寧だつた。セシーネもなるべく明るい声でおはようございますと声を掛けた。キルマはセシーネの肩越しに馬車の中を見、エランダはどうしましたと尋ねた。セシーネは何気なく聞こえるように「エランダはやめてもらいました」

「やめた？三日も持たずに？」とキルマは呆れたように「そうですか。ところで王女さま、わたくしからお話がございます。どうぞこちらへ」とキルマは院長室に案内し始めた。セシーネは来たなと思つた。

院長室に入るとキルマは椅子を勧め、セシーネが腰掛けるとキルマは低いテーブルを挟んで向かい合つた椅子に失礼しますと断つてから腰掛けた。セシーネは用心深くキルマを見つめ「パラボン侯爵夫人、お話つて何ですか？」

「わたくしのは、キルマとお呼び下さい。王女さま」とキルマは、やけに礼儀正しかつた。セシーネがそれはどうかしらというときルマは骨張つた顔に少し笑みを浮かべ「では、わたくしからのご褒美ということで如何でしょう？王女さま」

「ご褒美ですか？」

「ええ、セシーネさまは第一王女としてのご自覚が随分お持ちになるようになったご褒美ということで。それにけじめということもございません。やはり、他に示しがつきません。」

「お話つてそのことですか？」

「いえ、王立施療院のことございます。わたくしも急なことで気が回らず失礼しました。もう少し先のお話だと思つたものですから。」

この救貧院を王立施療院になさるといふ陛下のご裁可には頭が自然と下がります。亡くなられた国母さまもさぞ、あの世とやらでお喜びでございましょう。わたくしも出来る限りのことはされて頂く所存です。準備の方はどの程度お進みですか？」

「パラボン侯爵夫人、まず、いつときですがまだここが施療院になるかどうかは決まっておりません。候補の一つだということですが」「そうですね、わたくしの伺った話と少し違うようですが、場所は決まっていらないが院長だけがお決まりということですか」

なにやら皮肉ばいキルマの言葉にセシーネは少しカチンときたが、ただそうですとだけ答えた。キルマは、続けた。

「お勉強なさるのは結構なことだと思えますね。モリカがいてくれて助かりましたわね。王女さま。ところでエランダは何故やめたのですか？やはり、ちょっと伺った方がよいと思えますが」

セシーネは、少し躊躇し、ちょっとお行儀が悪いことがあつてと言葉を濁した。キルマはどのようにと再び、促した。セシーネは、また躊躇し、こう考えた。どのみちキルマのことだからわかるだろうと。キルマは、秘密を嗅ぎつけるのは昔からうまかった。それにエランダのことをかばう気にもなれなかった。元女官長に、自分のせいで侍女がやめたと思われなくなかった。

「ここだけの話にしてください」というと、キルマはええと請け負った。

「昨日の夜、呼ばれてもいないのにお兄さまの部屋に行つて追い出されたの」

「王太子殿下のお部屋に？」

「そう、それも、廊下を歩くのにふさわしくない格好で」とセシーネは付け加えた。キルマは意地悪そうな笑みを浮かべた。

「それで、叔母様はカンカンなの。あなたがいた時と違って、だらしない王宮になったといわれたくないんですって。今朝、すぐやめて貰うといっていました。わたしも、引き留めるつもりはなかったし、ただ、お母さまがお気の毒だわ、エランダの」

「気の毒？」

「ええ、一所懸命娘をしつけようと、ああしなさい、こうしたらダメといっているんでしょね。それなのに、わざと悪いことをして困らせようとして、なんだかそうね、子供じみていると思えたわ」
「何故、そんな風に思うのです？」キルマの質問にセシーネは少し目を伏せた。

「時々、おばあさまのことを思い出すの。いろいろいわれたけれど、今になって、なんだかわかることがあるの。年長者のいうことは全て正しいと思わないけど、一応、耳は傾けるべきだと思います」

キルマは目を細めてセシーネを見た。

「随分、大人になられたこと。王女さま、ついでにいつておきますが、わたくしに《見立て》は、なさらないで下さい。あれは、あの後、しばらくして必ず気分が悪くなるんですよ。わざわざ、試さなくても結構。もう、年ですからね。今さら病気になったって驚きませんよ。それと、いきなり、手首をつかんで《見立て》をするのは不作法だと思いますよ」

「そんなことはしないわ、小さい時だったら、したかもしれないけど…」とセシーネは少し考え込んだ。《見立て》をされると少し、体の中が揺さぶれるように感じる。それかしら、気分が悪くなるのはと思いがくねっていた。キルマは畳みかけた。

「ともかく、断ってからして下さい。いいですね」と最後は、女官長時代に戻ったようにキツパリといった。

キルマは、王太后の生前、よくこんな口調でセシーネにお説教をした。キルマは、セシーネの行動を一部始終知っているように思えたものだ。しかし、《治療の技》も《見立て》も気味悪がる人が、多いだろうとセシーネは思った。気がついたらこのような《力》が備わったセシーネにしてみれば、為すべがなかった。

「後、もう一つ、明日は、ここでお昼を召し上がって下さい」というキルマをセシーネは伏せていた目を上げて見た。

「その後、宮殿まで一緒にします。陛下に救貧院のご報告をしなけ

ればなりませんから」言い終わるとキルマは、椅子から立ち上がり、モリカを呼んできますと院長室を出ていった。キルマの態度の豹変にセシーネは戸惑いを覚えていた。

キルマは、ほぼ満足だった。これで当分《見立て》は逃れられるだろう。それだけは避けたかった。それさえなければ、何とかやって行けそうな気がしていた。それにしても、エランダのこともある。思い切って打った手がよかった。キルマはエランダのことで他にも知っていることがあった。だが、これは噂の段階だった。キルマはエランダがまだ謁見を済ましていないのを思い出した。恥さらしの娘をコンラッド家は謁見に出すだろうかと考えた。国王は謁見を大事にしていた。特に新年の謁見は、貴族たちも大勢やって来るし、また、その後、晩餐会、舞踏会など華やかな行事があった。「爵位持ち」とも呼ばれるいわゆる領主たちにとって、一族のものを謁見に出すということは一族のものか、そうでないかの決め手だった。謁見に出すということは一族にものだと認めることになる。謁見に出していないものには、爵位を継ぐことが例外を除いて許されなかった。キルマの一人息子もとうに初の謁見を済まし、今は、海から離れようとしない夫に替わり「領地」の面倒を見ていた。後は、孫息子が謁見を済ます時期を待っていた。

キルマは計算してみた。昨日の王宮へ伺候して、予想以上に歓待を受けた。王妃もメレディス王女も彼女に相談したいことがあるといていたし、夫は、菜園を国王に案内され、農業にも熱心な「領主」だと印象づけた。

最後は、ヘンダース王子に夕食に誘われた。それは、一応断ったが、伺候にそれなりの手応えがあった。しかし、夫も自分も国王にそれなりの「信」は得ているが息子は今一つである。その点は少し気がかりだが、打つ手はいくらでもある。

セシーネが「医学」を学びたがっていることはキルマにもわかっていて。王女自身そういていたし、これにはモリカに相手をさせなければいい。

その日の午後、約束事のようにブルックナー伯に《見立て》をした後、彼に気分悪くなるかもしれないかセシーネは尋ねてみた。

「いや、かえって体調はいいですな。まあ、なんだか、こう、気分は悪くないですな」

セシーネは、また、考え込んだ。ブルックナー伯は、のんびりとした声で「いや、確かに、最初は驚きますよ。だけど、わたしは《治療の技》を拝見したことがありますからな。あれも驚いたのなんのって」

セシーネは、閣僚たちの前で《治療の技》を披露したことがあった。「御前会議」と呼ばれる会議に呼ばれ、閣僚たちの前に引つ張り出された。国王は、閣僚に皆を驚かすことがあると行って、着ていた服の前をはだけた。それだけでも閣僚たちには驚きだったが、王太子のエドワーズと第一王女のセシーネに「治療の技を見せよ、余がそう命じる」と厳かにいった。エドワーズは、短剣をという「王太子、その必要はない。第一王女、この辺りだ。浅く頼む」と丁度胃のあたりを手でさすり示した。息を飲むように閣僚たちが見守る中、セシーネはそのあたりを指でなぞり《力》で切った。その切り傷を国王は、國務卿に確認させた。確かに切れていますと、國務卿はいった。その後、お兄さまといって、場所を譲り、まず、王太子が、国王の切り傷を《治療の技》でつなぎ始めた。その後、王太子が、セシーネといって今度は、その続きをセシーネがつないだ。その場に閣僚だったブルックナー伯はいた。

「王女さま、切り傷を付けたり、治したりは拝見しましたが、他にはどんなことが出来るのですか？」

「ケンナス先生は、《治療の技》を使うことにとっても慎重なんです。確か、医学の学士学位はもっているですな」

「普通の医学で治療出来るのならそちらの方が確実だと」

「やはり、一度ご当人にお目にかかった方がよさそうだ。確か、救貧院におるとか、明日、わたしも王女さまと一緒にして、王女さ

ま、治療師のケンナスにお引き合わせをお願い出来ますか？」

「喜んで」とセシーネは答えた。セシーネは重臣であるブルツクナー伯のケンナスへの扱いが変わったのを感じた。かつては、信用が今一つだったが、今はそうでもなさそうだ。セシーネは『治療の技』の理解者が増えること望んでいた。

翌日、セシーネが、ブルツクナー伯とケンナスを引き合わせると、その場にいたキルマが、さあ王女さまはモリカが待っていますからとセシーネを追い立てた。セシーネは、二人がどんな話をするか気になったが、モリカの待っている薬草園へ向かった。

薬草園は、春が盛りだった。日差しをよけるための麦わら帽を被り直し、セシーネはモリカを捜した。モリカは薬草園の以前セシーネも手伝った、薬草保管庫の建物の前あたりにいた。何か屈み込んでいたが、少し小太りな体と着ている服で見分けが付いた。声を掛けるとまあ、王女さまといって挨拶をした。

「これをご覧下さい。王女さま、虫が付いてしまって」とモリカは薬草の上に再び屈み込んだ。

「虫が付くとどうなるんですか？」とセシーネが尋ねると

「これは、種も薬になるんですけど、虫が付くと使い物にならなくて」とモリカは薬草の花から虫をよけ始めた。

「モリカ先生、これは、何ていう名前でしたっけ。伺ったのに忘れてしまつて」

これはと聞いて、モリカの「講義」が始まった。結局、昼食に呼ばれるまで、セシーネはモリカと薬草園で「講義」を受けながら過ごした。

昼食の席には、セシーネとキルマ、ブルツクナー伯とケンナスの四人がついた。昼食をとりながらブルツクナー伯は熱心にケンナスと話し込んでいた。その様子を見ながらセシーネはケンナスがブルツクナー伯とどうやら「うまく」やっていると確信した。

昼食は、王宮でのそれに比べて粗末とまではいわないが、質素だった。キルマがお味は如何ですかとブルツクナー伯に尋ねると彼は、

食事も大切ですからなとベンダーから聞いた話を披露し始めた。最後にブルックナー伯はケンナスにこういった。

「施療院の成功する鍵は君が握っている。君は我が国の唯一の《治療師》だ。体を大切にな。病人を診るものがケガや病気になつては話にならん」

国王の重臣からそういわれたケンナスは、少し当惑気味だった。

馬車に乗り込む際、キルマとブルックナー伯が席を譲り合い、結局、二人はセシーネと向かい合う形で座った。馬車が動き出すと、ブルックナー伯はキルマに救貧院は如何ですかと水を向けた。

「来た当初はひどい有様でしたよ。だらしないというか、まったく不潔そのものでしたよ。おまけに来るものたちはただで泊まれる宿屋程度に考えているですから、いつてやりましたよ。お金がないなら、替わりに働いて貰うと、おかげで、少しは清潔になりましたけど」

セシーネはキルマが「きれい好き」なのを思い出した。国王はキルマが来てから王宮はきれいになったといったことがある。王太后は「掃除」が苦手で、部屋を散らかすとキルマを呼び、後かたづけを命じていた。キルマは侍女たちに指示しながら、こまめに自分も働いた。セシーネはふと向かい合って座っているキルマの手を見た。節くれ立ったその手はなぜだか働き者の手とセシーネは感じた。

キルマは饒舌だった。救貧院のあれこれについて語りながら、院長としての実績を誇示しているようにセシーネは感じた。これは、セシーネにとりよりブルックナー伯に向けての行為のようにセシーネには思えた。

「いい若い者が仕事もせずブラブラしているんですからね。陛下はよく、働けば暮らしていける国だと仰せられますが、わたくしもそう思いたいですね。働こうと思えば仕事はいくらでもあるんですから。ただ、ケンナスが病気だというので、本人も驚いていましたけど、仕方がないのでしばらくはおいてやることにしました」

「どんな病気ですか」

「肝の臓が悪いそうですけど、典型的な症状が現れているとか」

「ケンナスは《見立て》でわかったですか、その病気が」

「いえ、《見立て》だけではないそうですけど。申し訳ございませんけれど、ブルックナー伯、《治療の技》や医学に関しては、あなたよりわたくしは詳しいと思いますよ。王太子殿下やセシーネ王女さまをお育て申し上げるのに国母さまを始めいろんな方と随分相談いたしました。陛下がまずは丈夫な体と仰せられて……」

話を聞きながら、セシーネは叔母のメレデイスがキルマを煙ったがるのは、幼い時のことをキルマが覚えているかではないかとふと思った。キルマはセシーネが生まれた時から自分のことを知っているのだ。膝の上に置かれたキルマの手を見つめながらこの手でお尻をぶたれたこともあったと思い出した。

宮殿に到着すると、三人はいつもの小部屋に向かった。救貧院の院長が国王に面会を求めたことはすでに伝えてある。キルマはここで待たせて頂くといいながら部屋を見回した。懐かしいですねといい「ここは、女官長時代に頂いていたお部屋ですね」

セシーネはそのことを知らなかった。セシーネがそういうと、キルマはただうなずき懐中時計を取り出した。時間を見ると再びしまった。セシーネが時間を尋ねるともう王宮へ戻る時間だった。新しい侍女をメレデイスが紹介してくれるはずだった。キルマとブルックナー伯にそう告げ、セシーネは王宮に戻った。

セシーネの新しい侍女、ナーシャはルンバートン伯爵家の出身だったが、伯爵の娘ではなかった。父親は陸軍大佐で、ある師団で副官を務めていた。やたら「着飾って」いたコンラッド母子に比べ、ナーシャ母子は、せいぜい外出着程度だった。初老のルンバートン伯爵夫人は多少「着飾って」はいたが、ナーシャがルンバートン伯爵家で侍女の経験があることを強調していた。

「やはり、一族の娘のしつけはわたくしの責任だと思ひましてね。やはり、謁見出す以上、きちんとして貰いませんと。行儀作法だけでなく女としてのたしなみと申しますか、何処へ出しても恥ずか

しくないようにはしつめたつもりですわ」

セシーネはナーシャに好感を持った。ナーシャは19歳で、婚約もしているということだった。相手は父親の部下でこちらは子爵家の出身だそうで、将来有望な士官だとルンバートン伯爵夫人はいつた。セシーネはしばらく様子を見てから決めることにするといった。慎重ねとメレデイスはいつた。

ただの王女なら、別に何の問題点はないはずだった。ルンバートン伯爵家にとって一族の娘が第一王女の侍女を努めることはそれなりに利点があった。ナーシャが王女の侍女になることによって彼女にいわゆる「箔」がつくのである。またナーシャが王宮にいることによつて、ただ謁見に行くだけではわからない王宮の様子も知ることが出来る。

貴族たちにとって王家の特に国王の意向を無視することは自殺行為だった。アンドーラで国王は、圧倒的な軍事力とアンドーラ全土に課した王国税を背景に絶対的な権力を手中に収めていた。その絶対権力者の娘であるセシーネは《治療の技》という不思議な力の持ち主だった。新たに第一王女の侍女になるナーシャが《治療の技》や《見立て》にどう反応するか問題だった。部屋頭のメリメは平気なたちだった。毎朝セシーネの《見立て》を受け、時には他の王宮で働く者で体調が悪いものを診てやつてくれと頼むこともあった。ただ、これは王太后が亡くなってからでその前は《見立て》の相手も王太后が決めていた。そして、王太后はセシーネに《治療の技》を覚えることより大事なことがあると言いつた。聞いたすのだった。

その祖母の王太后が施療院設立を言いつ残すとは、セシーネにはその辺りがよくわからなかつた。そして、国王の父は自分に何を期待しているのだろうか。

次の日、セシーネはナーシャを伴つて日課となっている救貧院へと向かつた。馬車の中でセシーネはナーシャにわからないことがあればメリメに聞けばいいといつた。

「メリメは長いから、いろいろ教えて貰えばいいわ、服は何着ぐらい持っているの？」

「この服では、まずかったですでしょうか？王女さま。あの、絹の服は持っていないんです。謁見の時も伯爵家の伯母から礼服はお借りして、わざわざ作ることもないって」

ナーシヤは昨日と同じ毛織りの簡素な形の服だった。スカートの襷もそれほど取ってなく、セシーネはごてごてせずあっさりしていていいと思った。黒い髪も結び上げてなくて後ろで一つに束ねりボンを結んでいた。

「わたしだつて普段はこれよ。謁見や行事には絹の服を着るけど、絹は高いから。薄汚れた絹の服よりちゃんと洗濯した服の方がいいと思うわ」

ナーシヤは黙って頷いた。

救貧院につくといつも通りキルマが出迎えた。ナーシヤをキルマに紹介した後、セシーネは思いきってキルマに昨日、馬車の中で聞いた肝臓を患っている若者のことを尋ねた。キルマは「それなら、ケンナスに聞いた方がいいでしょう。どうせ、あなたのことだから《見立て》をしたいと思いますよ」

セシーネはキルマに胸の中を見透かされているような気がした。

ケンナスはセシーネの《見立て》に同意した。ただその前に、普通の医学での診察方法で、肝臓病は見分けられるといった。セシーネはケンナスに教わりながら、その若者を診察した。どうやら「診察」には慣れているようだった。その後、《見立て》でセシーネは、その若者の手からそれを「感じた」。今度は、上着を脱いだ背中に直に手を当て《力》で探った「感じ」がはっきりした。ケンナスは触診も大事だといって《力》を加えずに診てごらんといった。

ケンナスは、解剖図を見せながらセシーネに患部はわかるかなと尋ねた。若者の肝臓の一部にはれ物が出来ていた。若者も覗き込む。この辺りだなといってケンナスは指でなぞった。

「今のところ、この病気に内科の治療法、つまり薬で治す確実な方

法は現在のところない。幾らかいいのではないかといわれているものもあるが、今、アンドーラでは、名医と呼ばれる偉い先生が治療法について調べて貰っている。後は外科、つまり手術をしてこの部分を切るという方法もある」

「切るんですかい？」

「その方がいい場合もある。余り確実ではないが、内科の治療を試みよう」

不安そうに若者はうなずいた。注意深く診なければその若者は健康そうに見えた。

その後、セシーネは《見立て》についてキルマが、気分が悪くなるといってみた。ケンナスは少し苦笑いをし、《見立て》の人体における影響はわからないといった。

「先生、ブルックナー伯は、《見立て》をしてからの方が、体調がいいみたいなおことをいっていたわ。メリメは毎朝するけど気分が悪くなるとはいってなかった」

「セシーネ、キルマ夫人が、気分が悪くなるのはその後、いろいろ調べられたりしたからかもしれないよ」

そうかもしれないと思っただが、セシーネに確信はなかった。ケンナスは《見立て》の正確さを立証するため、《見立て》をした後、その人物をベンダーたちとあれこれと診察したり、研究したりした。その相手によくキルマが選ばれた。キルマは病気でないと言い張ったが、王太后は協力するように申し渡した。キルマが進んでそういった研究に協力しているのではないことは薄々セシーネも気がついていた。

帰りの馬車の中でナーシャはおずおずと伺ってもいいでしょうかといった。セシーネはいいわよと答えた。

「王女さまはいつたい何を、そのう、なさっているのでしょうか？」

「わたしは医学を学んだの。多少だけど。今、陛下は王立施療院を設立してその院長にわたしが就任することをお決めになりました。そのため、わたしはいろいろ勉強をしなくてはならないの。そう

いうこと」

セシーネはその後、胸の中で、決まっているのはそれだけと付け加えた。

その日の午後、なかなか動かなかった王立施療院設立が動き始めた。いつもの小部屋にナーシャを連れて行くと、ブルックナー伯ともう一人の人物が待ちかまえていた。挨拶が済むとブルックナー伯がその人物を引き合わせた。

「こちらは工部尚書に決まりそうなニドルフ・レンドル子爵、ニドルフ、こちらが第一王女のセシーネ王女さまだ」

レンドル子爵は、年の頃は二十代半ばだろうか、ひよろりと背高く顔は鷹か鷲を思わせた。椅子に腰掛けるとセシーネは、振り返ってナーシャに部屋の隅の椅子を指し示した。ナーシャはおとなしく座った。

ブルックナー伯はいつものように《見立て》をお願いしますかなどいって手を差し出した。セシーネはその手首を握り《見立て》をした。

「いつも通りですわ、ブルックナー伯」

レンドル子爵は、怪訝そうに何ですかと尋ねた。何、《治療師》の診察だ、君もやっていたらとブルックナー伯はさりげなくいった。レンドル子爵は、はあ、あのどうすればいいですかと頼りなげに聞いた。何、手を握って貰うだけでいいとブルックナー伯レンドル子爵は手を差し出した。セシーネはその手首を握ると《力》で探りながら《見立て》をした。レンドル子爵は、ウツとかすかにうめき、目を見開いた。如何ですかとブルックナー伯。セシーネは手を離し、

「そうではね、特に、悪いところはないです。これといって病気の兆候は見られません。健康と違ってよろしいでしょう」

「それは、よかった。君、健康だそうだ」

「あの、どういことなですか、なんだかさっぱりわからない」とレンドル子爵。

「医者が脈を診るのと同じだ。《治療師》は、そうやって診察をするんだ。ケンナスは総合的診察といったが診察法の一つだ。覚えておき給え。さて、王女さま、そろそろ、具体的に計画を練りましよう。王立施療院というからには、建物がある。陛下は、救貧院をそれに当てたいとお考えなようで。レンドル君、持ってきた図面は？」

レンドル子爵が、その言葉で我に返ったように机に古い図面を広げた。

「これは、随分、古いんですよ。正確かどうか分からない。ブルックナー伯、もう少し詳しく教えてください。さっぱりわからない。大体《治療師》ってなんですか」

「そうだな、《治療師》というのは、従来のアンドーラの医学とは少し違った治療法で治療をするものだ。取り敢えず《治療の技》と呼んでいる。」とブルックナー伯はレンドル子爵に説明し始めた。レンドル子爵は確認するように「すると、人間が持っている治す力を引き出すだけだ？」

「普通ちよつとした風邪なら、一晩グツスリ休めば治るし、ちよつとした傷もいつの間にか治っているもんじゃないか。そう、不思議なことじゃない」

「その辺りがどうも」とレンドル子爵は粘った。

「何、そのうちわかる、どのみち《治療の技》はまだ解明ができとらん。大体、薬がどうして効くのか、君にはわかるかね。これは効くと実績があるから、その薬を飲んだりいろいろするだろう。それで治ればその薬が効いたということになる、そんなもんじゃないか。取り敢えず、工部尚書としての君の初仕事だ、がんばり給え」

はあとといってレンドル子爵は、少し不承不承にうなずいた。ブルックナー伯が古ぼけた図面を覗き込みながら、やはり診察室がいるでしょうな、王女さまといった。セシーネも覗き込んだ。

「この図面は、正確かどうかわかりませんよ、ブルックナー伯。これで、わかるのは柱の数と壁の位置。広さも何もわからない。やはり、正確な数字を出さないと、実測したいですね」

ブルックナー伯が実測と聞き返した。

「ええ、実際、建物の大きさを測った方がいいでしょう」

「それもそうだな。君の明日の予定は？」

特にないとレンドル子爵がいうと、ブルックナー伯は、早速、明日、救貧院に行こうといい、こう付け加えた

「どの程度の手直しが必要か、計画書を作らんな。無論、費用もどの程度かかるか、見積もってくれ」

「費用ですか？」

「むろんそうさ、金の計算も出来ないで工部尚書が務まると思うか？」

セシーネは、ブルックナー伯のレンドル子爵への態度とキルマ・パラボン侯爵夫人への態度が違うの気がついていていた。ブルックナー伯は、キルマには鄭重だった。これは、爵位の序列に関係してくるのだろうか。だが、それだけではあるまい。ブルックナー伯は、キルマに「一目」おいていた。

そして、キルマはセシーネに施療院の設立の協力を申し出た。だが、それはある意味でキルマが救貧院の院長の座を追われることになるのではないかとセシーネは考えていた。キルマはどうしたいのだろうか？

レンドル子爵は広げていた図面を巻き戻しながら

「わかりました。それもそうですね。しかし、もう少し、その《治療師》について伺いたいですね。すみません、王女さま、もう一度さっきの《見立て》ですか、やってみて下さい」

セシーネは、黙ったままレンドル子爵を見つめた。お嫌ですかとレンドル子爵は尋ねた。

「気分が悪くなる方もおられますから」

いや、大丈夫ですと、レンドル子爵。セシーネは、彼の《見立て》をもう一度した。今度は声は出さなかったがレンドル子爵は目を見開いた。

「どう、わかるんですか？どうやって病気がどうかわかるんですか

「？」

「感じるんです。この辺が重いかうまくいえません」

レンドル子爵は、少し考え込んでいたが、共鳴ですかねといった。セシーネが聞き返すと

「音又つてご存じですか？同じ高さの音に反応して振動、細かく振るるんです。それと同じように触れるところ反応が感じられるんじゃないですか？どうですか、ちがいますか？」

「そうかもしれませんが、どうですか、如何ですか、王女さま」

セシーネは小首を傾げた。そうかもしれないとだけいった。ブルックナー伯は少し笑いながら

「ニドルフ。君が興味を持つと思った。しかし、程々にな。ところで、王女さま。これは、意見が分かれているところなんです。治療院を普通の医師をおくかどうかですな。これは、わたしの私見なんです。わたしはこの治療院を《治療の技》を広める場所にしたらいと考えておるんですが、如何ですか？」

セシーネは、そう出来たらいいですけどとだけ答えた。

「なに、ケガや病気の治療をして何が悪いですか。治療法が少し変わっているで、広まれば、誰も不思議がったりしません。そうでしょう、王女さま」と最後は、励ますようにブルックナー伯はいった。

王宮にナーシャを従えて戻る時、セシーネは彼女にあなたも《見立て》をして欲しい？と尋ねた。ナーシャは口ごもった。無理にとは言わないとセシーネはナーシャにいった。嫌がる人もいるのだ。ケンナスは、リングートの捻挫も《治療の技》を使わなかった。今日、診察した若者にもそうだった。《治療の技》でどんなことが出来、どんなことが出来ないのか、セシーネには皆目見当がつかなかった。

夕食後、自分の部屋でセシーネは机に向かい、ペンを走らせていた。ふと、目を上げて大人しく椅子に腰掛けているナーシャに声を掛けた。

「ナーシャ、あなたも本を読みたかったりしたらそうしてもいいのよ。用がない時はそうしてくれてもわたしは構わないけど」

「あの、それでは、王女さま、刺繍をしてよろしいでしょうか？」
「刺繍台をここにおくのはごめんよ」と刺繍と聞いてセシーネは祖母を思いだした。

「わたしは、あの、台ではなくて、枠で刺繍をいたします。お邪魔にはならないと存じます」

枠？とセシーネは聞き返した。ナーシャはうなずいた。

「まあ、見てみて邪魔だと思ったたらそういわ」

ナーシャはよろしかったら取りに行つて来ますといった。セシーネは、いいでしょうと許可をした。

今日一日だけだが、ナーシャはエランダと違い行儀がよかつた。ルンバートン伯爵家で、侍女をした経験のせいか特にこれといつて問題はなかつた。まるで、自分の方が上だといわんばかりのエランダと比べて、ナーシャは年下のセシーネに対しても年長ぶることもなかつた。セシーネより一つ年上のサラボナには少しそんなことがあつた。セシーネはよくそつちだつて子供じゃないと言ひ返した。そして、キルマだつた。キルマは完全にセシーネを子供扱いしてゐた。確かに、子供というか、孫といつてもいいかもしれない年の開きがあつた。

ナーシャが袋を持って戻つてきた。これですがといつて、袋から刺繍の道具を出し、セシーネに見せた。手を広げた位の大きさの丸い枠に布が張られていた。セシーネはこれならいいでしょうといつた。ナーシャはお許し下さつてありがとうございますと礼を述べた。ナーシャは実に行儀がよかつた。

意外なことに救貧院の院長は丁度いい、少し建物の修理を頼もうと思つていたといつた。ブルックナー伯とレンドル子爵を案内しながら救貧院の建物中に入った。セシーネは、一昨日のように追ひ払われると思つたが、キルマはそうしなかつた。そして、キルマは

レンドル子爵に上から見るか下から見ると尋ねた。レンドル子爵は出来れば下からお願いしますといった。

ロウソクの燭台を手にキルマは地下室へと一行を案内した。階段を下りながらセシーネは誰にいうのではなく、かくれんぼを思い出すわといった。レンドル子爵が、かくれんぼと聞き返した。キルマは素っ気なく「わざと隠れてを探し出す子供のお遊びですよ。あなただって小さい頃したでしょう」

「覚えていませんね」

「そうですね。王太子殿下や王女さまがお小さい時よくしましたよ。陛下はお子さまたちを遊ばせるのがお上手でしたから」とキルマの口調は何故か懐かしがっているようだった。

「陛下が隠れてそれを捜したり、逆に陛下が捜す方をなさったり、国母さまもわたくしも隠れたり捜したりして」

セシーネはふとキルマが自分と同じ時を過ごした人なのだと実感した。確かに色々口うるさかったが、色々なことを教えてくれた人物の一人だと気づいた。わたしは色んな人から学ばなければならぬ。セシーネは自分の未熟さを痛感していた。

地下は、ロウソクの明かりだけでは薄暗かった。階段を下り右に曲がると廊下に出た。その廊下に面して木の扉があった。その一つに近づくとキルマは燭台をブルックナー伯に渡し鍵を取り出した。地下を一通り見て回ると、レンドル子爵がもう今日は、いいですといった。ブルックナー伯が、君それで良いのかとたしなめた。「いえ、あの工部省にあった図面はまったく役に立たないことがわかりましたよ。あれでわかるのは、そうですね、体でいえば骨組みだけ、それも足の部分だけです。パラボン侯爵夫人、こちらにはこの建物の図面のようなものはありませんか」

「そういったものはありませんね。何しろ古い建物ですから」

「やはり、実測をしたいと思いますね。そうしてもかまいませんか」

まあ、いいでしょうとキルマは許可した。

セシーネはキルマの真意を測りかねていた。キルマにはセシー

ネのやることが「お見通し」なのにセシーネにはさっぱり見当がつかない。救貧院が施療院になれば、キルマは院長の座を失うことになる。そして、亡くなった祖母の王太后である。セシーネには祖母が《治療の技》を嫌っていたように思えてならなかった。祖母はどうして「施療院」の設立を思い立ったのだろうか。ブルックナー伯は《治療の技》を広める場にしたらとはいってくれたが、父の国王はどう考えているのだろうか。

院長室で、救貧院長のキルマが、レンドル子爵に「注文」を出していた。建物は手入れが悪いと長持ちしないですからねとキルマはいった。レンドル子爵が、費用は？と聞くと、キルマはこともなげに「救貧院の方からお出します」

「施療院の準備金というのがありますがな」とブルックナー伯が口を挟んだ。

「それは、どうかと思いますね。これはこれですわ、救貧院をお預かりしている以上、きちんとしておきたいですね」

確かにキルマのいう通りだった。救貧院に対してセシーネは何の権限もない。セシーネにはキルマの救貧院の院長という座が、不動のようにも思えた。

「ちよつと伺いたいんですが、パラボン侯爵夫人は王立施療院についてはどうお考えですか？」とレンドル子爵。

「結構なことだと思いますね。さすが、国母さま、この国に何が必要かよくご存じだとつくづく感服いたしました。昔からご聡明な方だとは存じ上げてはおりましたけど、わたくしなぞには思いつかないことです」

「僕が伺いたいのは、施療院はいかになるべきかということですが、それは、わたくしなどが申し上げる筋合いではないと思いますね。陛下がお決め遊ばされることだと思いますね」

「王女さまは、どう思われますか？」とレンドル子爵が今度はセシーネにたずねると一斉に皆の視線がセシーネに集まった。その中で最年少のセシーネは答えに窮した。セシーネは青い目を伏せ「わた

しは、《治療の技》だけでなく普通の医学でもケガや病気の治療を
したいです」とだけいった。

「そこですな。《治療師》のケンナスはアンドーラの医学を学んで
いる」とブルックナー伯がいうとレンドル子爵が、あってみたいと
いいだした。

「あなたの役目は、施療院の建物を造ることであって、《治療師》
をやることではありませんよ」とキルマは、息子とやっていい年の
レンドル子爵をたしなめた。

セシーネの知る限り《治療の技》を使えるのは、自分と兄のエ
ドワーズ、《治療師》のケンナス、そしてケンナスの弟子のルシバ、
彼は今、兵役についていた。そしてまた、魔術師のガンジスも多少
心得てはいた。そのガンジスの連れてきた「見習」の子たちは《治
療師》になれるのかどうかさえ疑問だった。

父の国王から、王立施療院の院長を命じられてから、自分はい
ったい何をしてきたのだろう。医学を学ぶの夢中で、せいぜいブル
ックナー伯に《治療の技》について舌足らずな説明をしただけだっ
た。兄のエドワーズのいった通り自分には施療院の院長なんて無理
なのだろうか。「医学」ですら、ケンナスやベンダーの足元にも及
ばない。セシーネは自分が情けなかった。

自信喪失気味の第一王女に引き替え、エドワーズ王太子は意気
軒昂だった。念願の「重騎訓練」である。はりきるのも無理はない。
最初は重い甲冑で身動きさえままならなかったが、今は何とか敏捷と
まではいかないが、ランセルのいうさまにはなってきたようにエド
ワーズには思えた。稽古相手の剣の攻撃を左腕の楯で何とか受け止
め、右手の剣で打ちかかる。今度は相手が楯で受け止める。そして
エドワーズにまた打ちかかる。

別に武術に秀でることが王太子の必須科目ではないことぐらい
エドワーズにはわかってはいた。だが、心得が多少なくては面子が
立たない。それぞれ、海軍と陸軍に属している二人の叔父は武術に

関してなかなかの腕前だった。そして、普段は剣を身につけない父の国王も剣術の腕前は確かだったと記憶している。

エドワーズにはある「計画」があった。それは、かねてから武官たちの間で評判になっていた陸軍のある「行事」に関するものでエドワーズも内心では参加をしたいと願っていた。かつてはその行事はメレディス女王の二番目の王子ヘンダース王子が陣頭指揮をふるっていた。これは、王太子にも納得出来た。ある意味で陸軍は「彼のもの」でもあった。だが、彼が亡くなった今、その息子のチェンバース公爵が口を挟むのは如何なものかと思っていた。そのような「行事」を執り行いたければ自分の公爵領ですればいいのである。王家領で勝手な振る舞いをするのはやめて欲しかった。ましては、一介の侯爵の弟に過ぎない陸軍元帥がいくら陸軍の「行事」とはいえ、陸軍元帥の一存するのは、言語道断である。

まあ、理屈をいえばそういうことであるが、自分の腕前を確かめてみたいというのがエドワーズの本音のところであろう。この「計画」を思いついたのは自分付きの武官のとの昼食の席での雑談からである。現陸軍元帥の若い頃の話になり、ある「訓練」に話が及んだ。この「訓練」は、最初は一軍区の「行事」だったが、やがて当時の陸軍元帥であったヘンダース王子の知るところとなり、アンドローの各地に駐屯している各師団から選抜された兵士が参加するようになった。無論、指揮を振るうのは亡くなったヘンダース第五王子である。

「まあ、ご褒美ですな」と参加経験のある退役大佐はいった。彼は、現陸軍元帥と軍学校で同期だった。

「ご褒美？」

「ええ、普段、行いの悪いものは連れてはいきません。こういつては何ですが、手当が出るんです。射止めればということですが、大物ともなればかなりいい値がつきますから」

エドワーズが興味を持ったのは手当云々より「大物」という言葉だった。自分も「大物」を射止めたくなかった。武術の中で、弓術に

はかなり自信があつた。これは是非参加したいものだと思つた。しかし、エドワーズはこの話を聞けば「陸軍」のランセル王子も参加を希望するだろうと思つた。まずは、この叔父に話を持ちかけてみるべきだとエドワーズは頭の中で計略を練つた。

ランセル王子は、話に乗つてきた。ランセルにしてみればいささか「重騎戦」に飽きてきたところでもある。おまけにいわば兄の国王への「無心」のような形で近衛師団から本営本部付けにはなつたものの「調達局」に配属され、金の勘定や物の勘定に追われていた。陸軍元帥は「金の勘定」の出来ないものに軍を動かす権利などないと素つ気なくいつた。いささか不本意ではあつたが兄の国王から「実力のない」大佐といわれたばかりである。自分の実力がいかほどか実力のある元帥に尋ねて酷評はされたくはなかつた。上官に対する敬礼をしてすごとと辞令書を持つて調達局に赴いた。案の定、書類仕事でランセルを待つていた。そんなランセルにとつて甥のエドワーズの持ちかけた話は「渡りに船」であつた。

「それもそうだな、いくら王家の出身とはいえ、王家領で勝手にしているものだから疑問だな。おまけに公爵は陸軍に籍を置いていない。兵役は三年だつたかな、確かそんなものだ。ともかくその件に関して調べてみようぜ」

「お願いしますよ、叔父上」

「武術好き」のランセルは快く引き受けた。エドワーズは自分の「計画」の賛同者を一人得た。後は「計画」を練るための情報集めである。軍用語でいえば「偵察」である。「偵察」なくして「軍略」なし。かくしてエドワーズとランセルは二手に分かれ「偵察」を遂行することとなつた。

当然ながら二人とも計画のための「偵察」ばかり行つ訳にはいかない。だが、「行事」の決行は秋である。夏までに「偵察」を完了すればいいとランセルはいつた。そしてその時までには自分は父親になつてゐるだろう。これもランセルをいささか落ち着かない気分になさせていた。そして結婚を控えたエドワーズも同様であつた。

さて、エドワーズとランセルが「計画」を練るための「計画」を練っている時、リングート王子もある「計画」について自分付きの侍従に持ちかけていた。侍従はにべもなく、そんな危ないことはなさらぬようにと釘を差し、湿布を取り替えましようとしてリングートがケガの療養中であることを思い出させた。リングートは自分の思いつきがなかなかいいものに思え、何処が危ないのかとしつこく尋ねた。

「息が詰まってしまいますよ、さあ、足をここに乘せて下さい」とリングートの教育係でもある侍従はキツパリといった。リングートは諦めて捻挫した足を差し出した。

アンドーラの王家は「計画」ばかりである。何しろ、新しい大蔵卿の提言は「計画性」である。その大蔵卿の提案したある「計画」について国王は弟のヘンダースに意見を求めていた。

「うまくいきますかね？」とヘンダースはいささか疑念を表明した。「うまくいくも何もやってみなければわからんさ。土地税という考え方からいっても不公平じゃないか」

それもそうかもしれませんがとってヘンダースは兄の国王がすでに「計画」の実行を決意しているのを悟った。

メレディス王女と王家の妃たちも「計画」を持っていたが、話し合いは昼間と決めていた。そしてセシーネは施療院の設立という「計画」に躊躇していた。その話を父の国王から聞いた時は小躍りする位うれしかった。だが、だんだんとことの重大さに気がつき、自分の無力さに腹が立ってきた。セシーネはふと祖母の言葉を思い出した。やりたいことではなくすべきことをなせと。そうだとセシーネは自分に言いきかせた。わたしはやるべきことをやるだけよ。

次期工部尚書に内定しているニドルフ・レンドル子爵はセシーネ王女に会うのが楽しみになった。お目当ての《治療師》のケンナ

スは救貧院院長のキルマ・パラボン侯爵夫人とブルックナー伯爵に「お預け」を食らったが、第一王女は眺めているだけでも楽しかった。国王の妹のメレディス王女の美貌も有名だったが、セシーネ王女もその片鱗を覗かしていた。陳腐な比喩だが花ならまだ蕾だろうが、それが花開いたらどんなに見事だろうかとニドルフは思った。

彼は、美しい物が好きだった。女性の美しさだけでなく、「創造主」の造ったこの世界のあるとあらゆるものが彼の目を楽しませた。そして今「創造主」ではなく、人の手で造ったものに取り組んでいた。

工部省から連れてきた「手の空いている」ものたちを指図して、救貧院の本館ともいふべき建物の外壁を測り終えりと古い図面から写し取った新しい図面にその数字を書き込み、次に地下に移動してその内壁を測ることにした。この実測には救貧院の院長のキルマ・パラボン侯爵夫人は立ち会わず、年取った修道女が部屋の鍵や明かりの用意をした。

セシーネ王女はモリカの待つている薬草園に行きかけたが、パラボン侯爵夫人に引き留められた。セシーネは再び、混乱してきた建物の実測に立ち会いながらも、自分のすべきことなのか迷った。だが、キルマは立ち会ふべきだと主張した。ここはやがて施療院になるのだからと。結局、その日の午前中は、ケンナスにもモリカにも「教え」を請うことは出来なかった。

時間だとキルマに急ぎ立てられるように宮殿にセシーネは戻った。宮殿ではブルックナー伯が待ちかまえていた。そこでブルックナー伯は《治療師》か《治療師》でないかと決めるのはセシーネがすべきではないかと主張した。

「無論ケンナスの推挙も必要でしょうが、やはり認定は、第一王女さまがなさるべきでしょう」

セシーネは自分にそんな権限があるのだろうかといぶかった。後は、施療院をどう運営すべきかという話になった。

次の日は月例の謁見の日だった。国王ジュルジス三世は即位すると、最低年一度の謁見を「爵位持ち」に課した。月一度、謁見の

日を設けその日に「爵位持ち」を始め貴族たちは国王始め王家の人たちの謁見を賜る。特に新年の謁見は華やかであった。

その月例の謁見の最中、セシーネは施療院の院長として何をすべきかと考えていた。まずはガンジスの連れてきた「見習」の子たちに会って話を聞くべきだと思つた。あの子たちの一人でも《治療師》になれば上出来だ。《治療の技》でどんなケガも病気も治せるわけではない。病床についた王太后に《治療の技》が使われたとうかはセシーネは知らない。記憶では王太后はケンナスを側に寄せ付けなかったように覚えている。その王太后が何故、施療院を思い立ったかはセシーネには見当もつかないが、それはそれだとセシーネは割りきることにした。

謁見の次の日、救貧院に到着したセシーネをキルマとレンドル子爵が出迎えた。セシーネはレンドル子爵に建物の図面が出来上がったら拝見しますわといつて、キルマにケンナスの所在を尋ねた。セシーネが思いついたのは見習たちに自分に《見立て》をさせることだった。そしてけがや病気の治療法を覚えたいかあるいは薬草の世話の仕方を覚えたいかについて聞いてみるべきだと考えた。見習全部にあつて話を聞き終わつたのは次の「休日」の前日だった。驚いたことには《力》の強弱はあるにしろほぼ全員《力》で探ることが何とか出来ることだった。《見立て》の難しさはその感触を自分の体にどう反応させるかだった。セシーネは約二年かかった。しかし、ガンジスはどうやってこの子たちの《力》を見抜いたのだろうか？

とにかく、「見習」たちが、多少《力》があることはわかった。後は、それをどう育てるかだ。これについてケンナスは楽観視していたが、セシーネはそう悠長なことはいつてはられないと感じていた。ブルックナー伯は年内に施療院を開設の準備を終えたいようなことを言いだしていた。

その翌日、休日の日課である菜園の世話を手伝いながら父の国王にセシーネは問いただしてみた。国王は菜園の雑草を抜き取りな

がらこういった。

「セシーネ、それはやってみないとわからないな。何もやらずに後悔するより、出来る限りのことをやってみる。今のお前にはそっちの方が大事なように思えるね」

国王の言葉はセシーネを励ますよりも自分に負わされた責任の重さを実感しただけだった。

実は国王自身も迷っていた。病気やけがの治療する施療院を造ることはその必要性を感じてはいた。きちんとした医療を受けずに病状を悪化させ死んでいく者たちがいかに多いことか。「働けば暮らせる国」が国王の理想である。そのためには国民の健康が不可欠であった。しかし、『治療の技』は別問題である。それは、国王の頭を悩まし続けた。最初の結婚で生まれたエドワーズとセシーネは不思議な『力』を持っていた。その扱いに父である国王は苦慮していた。王太子のエドワーズはそれを自分の「特技」ぐらいに捉えていた。『力』を使わずとも体調に異変が起きるわけでもなく、見せびらかすのはとうにやめていた。問題はセシーネ王女の方だった。先の王妃がまさに命をかけて生んだ王女は、『力』を使わないと体調を崩すことがあった。

「あの子は一生ああよ」とまるでセシーネが化け物であるかのような王太后の口振りだった。諦めましよう王太后はいった。王太后のいう諦めるというのは第一王女セシーネとメエーネの王太子との縁談だった。メエーネの国王は姪をアンドーラへ嫁がす代わりにセシーネと自身の王太子との縁組みを望んでいた。アンドーラの王室にとっても悪くない話だった。だが、断るには口実がいる。まさか王女が奇妙な『力』を持っているという訳にはいかない。そこに女官長だったキルマが妙案を出した。

「もしもです、こちらに王子さまが生まれ、あちらには王女さましか生まれないとしたらどうでしょう？メエーネは女王を即位させるでしようか？」

国王は、したりと思った。キルマはなかなかの「知恵者」であっ

た。

肝心の第一王女セシーネはこの話をまったく聞かされていなかった。セシーネは、今度は薬草園の薬草について書き記すことを始めていた。その横では侍女のナーシャが刺繍に精を出していた。ナーシャは聞き分けのいい侍女だった。部屋頭のメリメともうまくいつていた。

「やはり、武官のお嬢さんというのはしっかりしていますね。堅実というか浮ついたところがなくて」

セシーネは古株のメリメとナーシャがうまくいつていることにホツとしていた。侍女のあれこれで気を遣っては肝心の「勉強」がお留守になる。セシーネは貪欲に「医学」に取り組んでいた。

ニドルフ・レンドル子爵も貪欲に「知識」の吸収に取り組んでいた。まずお目当ての《治療師》のケンナスにも引き合わせて貰った。ケンナスは格別変わったところがない普通の中年の男でどこにその不思議な力を秘めているかニドルフにはわからなかったが、その目は知性にあふれていた。

「別に、角が生えてもいないし尾っぽがはえているわけでもありませんよ」とニドルフの率直な質問に《治療師》は苦笑いをしてそう答えた。《治療の技》についても質問してみた。

「《治療の技》が治すのではなく治すのは本人ですからね。同じ薬を飲ませても治るの早い者もいればそうでない者もいますよ。結局は本人の体力というか治癒力ですね」

ケンナスの説明はニドルフにはわかるようではなかった。

当惑気味のニドルフ・レンドル子爵をキルマ・パラボン侯爵夫人は冷ややかに見守っていた。《治療の技》に初めて遭遇した者は二通りの反応を示す。見たものを肯定する者、そして否定し見間違いだと自分に言い聞かす者。キルマも最初は後者だった。だが「実験」を重ねる内に恐れながらも認めざるえなかった。あらゆる文献が密かに調べられ、国王と王太后の御前で様々な検討が重ねられた。

ただ一人悠然と構えていたのはガンジスだけだった。そして得体の知れない男を国王の前に連れてきた。それがケンナスだった。

ケンナスは自分の母親から《治療の技》を教わっていた。ケンナスは十歳までアンドーラの隣国サエグリアの祖母の元で暮らしていたが、ある日、母親が現れ息子に《治療の技》を教え始めた。息子にも《治療の才》があることを知った母親は息子と共に街で暮らし始めた。「薬草売り」が隠れ蓑になっていた。その母親の母親であるケンナスを育てていた祖母も「薬草売り」だった。ケンナスの母親の「薬草」は効き目がよかった。だが、商売敵が「密告」をした。サエグリアでは「魔法」は男だけに許された「技術」である。女が使うとそれは「聖者」チングエンへの冒涇とされた。その時ケンナスがどうやって難を逃れたかは、キルマは知らない。ケンナスも多くは語らなかつた。ただ、流浪の旅でガンジスと知り合いアンドーラへたどり着いた。

キルマは《治療の技》に興味新々のレンドル子爵にキリないですよと声を掛けた。

「治療法の一つですよ。あなたが医者になりたいのなら別ですけどね。そんなことよりこの建物の雨漏りを直してくれた方が有り難いですね」キルマは自分の声が落ち着き払っているのが心強かった。先王ジュルジス二世が「竜に浚われて」以来、アンドーラでは奇妙なことがおこっていた。魔術師のガンジスが現れ、そして王太子と第一王女は奇妙な《力》を用いてはケガを治してみせる。キルマに出来ることといえば気を失わずにしっかりその目で現実を見つめるだけだった。

《治療の技》に未練たつぷりのレンドル子爵にキルマは目の前の仕事を思い出させた。

「陛下は、怠け者はお好きではないんですよ。ここに座り込んでおしゃべりをしているようでは工部尚書のお役目なんてとても務まりそうもありませんね」

「それなんですが、なんで僕なんですかね」

「そんなことは陛下がお決めになることです。わたくしが知るわけがないでしょう」

確かにキルマは知らなかった。このことにいささかキルマは内心の焦りを感じていた。王太后の生前、主な人事は事前にキルマの耳に入っていた。国王は事後承諾ではあったが、必ず王太后に就任前の報告を欠かさなかった。王太后はそれに対して何か一言いわなければ気が済まなかった。その席にキルマも同席していた。国王の決定が覆ることはなかったが、国王は王太后の助言を聞くことは聞いた。ただ助言を受け入れるかどうか別だった。そういつた時、国王は父親のジュールジス二世のよく使った「手」を用いた。閣僚たちが反対している、あるいは賛成している。そうして国王は母親の王太后からの「くびき」から逃れた。

キルマには工部尚書の交代があるのはわかっていたことだが、その後任にこの青年が選ばれるとは思ってもかけないことだった。国王は何を見込んでこの人選をしたのだろうか。現工部尚書は温厚な人物で、人当たりがよかった。しかし、キルマは幾らか慰めを見いだしていた。「勅命」を受ける前にこの青年と知己を得たことはキルマにとって「損」はない。どう扱えばいいのかも検討はついている。好奇心旺盛な彼の興味を引きそうなことはいくらでもあった。これは「使える」とキルマは思った。

ニドルフ・レンドル子爵は、本来の仕事である救貧院の建物の実測に戻った。《治療の技》の究明を彼は諦めたわけではなかった。彼にとつてこの世界がどうなっているかを知ることが彼の知識欲を満たす格好の研究材料だった。いわゆる「教会」の司教たちには、この世界は「創造主」が造った。だが彼は頑迷な司教たちにその「創造主」を誰が造ったか尋ねたかった。だが、その問いかけは冒涇だといわれた。大体誰が「創造主」がこの世界を造った時を目標しているのだ？司教たちの主張は推論に過ぎないと彼は結論づけた。

アンドーラでは、メレディス女王以来「信教」の自由は保障さ

れていた。何を拝もうが自由である。その代わり、他者に強制は出
来ない。かつては王ですらその支配下においた「聖徒教会」はその
力を失い、今は歴代の王の霊を慰めるだけの存在になりつつある。
これは教義において否定されたためでなく、経済的理由で衰退して
いった。メレディス女王とその夫のチェンバース公爵は抜け目なか
った。それまでアンドーラの全ての人に課せられた「教会税」を撤
廃したのである。女王は抵抗する司教たちを看破した。

「そなたたちの教えが正しいというのならその証拠を余に見せよ。
見せぬのなら余は信じたりせぬ。信じたい者だけがその教えに耳を
貸せばいいことじゃ」

「聖徒教会」の勢力が弱まったおかげで人々は発言の自由を取
り戻した。アンドーラの論議好きはその時からだといわれるが、学
問も自由を取り戻した。即位にあたって宰相でもあり夫でもあるチ
エンバース公爵は新婚の妻に「大学」の設立を勧めた。アンドーラ
王立大学である。それまで学問の域においても支配を及ぼしていた
「聖徒教会」は、その影響力を低下せざる得なかった。

「聖徒教会」も手をこまねいていたわけでもない。死への恐怖
が人々の足を教会に運ばした。そこで「創造主」の怒りを和らげる
ために寄付が集められ、人々の信仰心がその金額で試された。この
傾向はある司教の発言力に比例して高まっていた。

しかし、大部分の国民は日々の暮らしに追われ、死後の世界へ
の興味より現実の生活の苦楽に心奪われていた。何しろ「働けば暮
らせる国」が国王の理想である。勤勉さは尊ばれ、享樂的な人物は
「お気楽な」と蔑まされる。それは「聖徒教会」の教義にも反して
はいなかった。

つい最近までただひたすら自分の知識欲を満たすだけの日々を
送っていたニドルフ・レンドル子爵は、別な知識欲にそそられてい
た。救貧院の建物は大いに彼の好奇心を刺激した。数字を図面に書
き込みながら「人がこれを造ったなんて驚きませんか？」

「石組みの建物が珍しいのですか？そちらの方が驚きですね」と救

貧院院長のキルマ・パラボン侯爵夫人は素っ気なかった。ニドルフはこのパラボン侯爵夫人が並々ならぬ頭腦の持ち主だと察していた。キルマは続けた

「図面を造るのはいいですけど、陸軍がなんといいいますか」

「なんで、陸軍がでてくるんです」

「あなたは宮殿の建物の図面を見たことがありますか？」

「そういえば工部省にはなかったですね」

「わたくしは拝見したことがあります。ただ、保管には十分配慮が必要です。ここの図面も陸軍が何かいつてくるかもしれませぬ」

「なんだか、さっぱりわかりませぬね、なんで陸軍が口を挟むのです？」

「宮殿にしろいわゆる役所の建物にしろ、国の主な建物の図面の保管について陸軍はうるさいんですよ」というキルマ夫人の言葉にニドルフは面食らった。

「どうということなのかご説明して頂けませんか？」とニドルフはまさにお手あげだと両手を上げてキルマを見た。

「つまり、軍事機密というわけですよ」

ニドルフはその言葉に顔をしかめた。ニドルフの兵役は陸軍が一年、海軍が一年、階級は下士官だった。大学の入学資格があるので新兵訓練の後、伍長となったが陸軍ではさんざんだった。その後、海軍に移りそちらでは天文学の知識を買われ幾らかましな待遇を受けた。最初から海軍にいけばよかったが、なくなった祖父が航海の危険性を言い立て陸軍への入隊手続きをニドルフに無断で取ってしまった。ニドルフには陸軍との相性が悪い。噂では切れ者の陸軍元帥とは面識もなく「軍事機密」云々といわれたらことが面倒になると思った。しかし、女性の口から「軍事機密」という言葉がでてこようとは……

当惑気味のニドルフを残してキルマは自分の聖域、院長室に戻った。キルマが救貧院の院長を引き受けたのは困窮者の救済に賛同したわけではない。女官長の職も何度か辞職を申し出た。引き留め

られるのはわかっていたがやはり、先代カルチエラ侯の提唱した官の「定年制」という理由もあった。辞職の申し出の度に王太后と国王に引き留められ、結局王太后の死を看取ることになった。そしてこの救貧院に赴いたのは王太后が何に「無駄遣い」をしたか突き止めるためでもあった。そして証拠はないがある程度の目星はついた。

この報告を国王は重いたため息と共に受け止めた。キルマは王太后について聡明な方なのにもいわなかった。国王は、ただ証拠はないのだなと念を押した。キルマは黙ってうなずいた。国王は目を細めるとキルマに当然とも思える指示を出した

「このことは自分、君の胸の内にとまっておいてくれ。無理に証拠集めなぞするな、いいな」

キルマは顔を引き締め、畏まりましたと頭を下げた。

キルマは王太后の気持ちが変わらないでもなかった。「竜に浚われた」先王の失踪以来、常識では考えられないことが王家におこった。それは、王太后にとって第一王女の誕生以来、王家の不幸が続いているかのようだった。さすがに口には出さないものの王太后の気持ち、キルマには手に取るようにわかった。王太后にとって第一王女のセシーネは不幸をもたらした張本人だった。だが、冷静に考えてみればそれは王太后の八つ当たりだった。セシーネが王太后になつかないのも王太后を苛ださせた。そして、王太子と王女の不思議な《力》が王太后を恐怖に陥れた。幼い王女はその青く澄んだ目で王太后を見返しこういった

「だって、できちゃうんだもん。痛いのが治れとってさすると治るんだもん」

王太后の恐怖は王太子がその遊びに飽きると少し収まった。国王は王太子にそれが出来るのはよくわかった、他には何が出来る？と尋ね、他の遊びに誘った。王女もその誘いに乗った。母親のいない二人にとって父親の存在は大きかった。キルマの見るところ国王はいい父親だった。そしてその父親である先王ジュールジス二世もいい父親であったし、いい夫でもあった。だが、竜に浚われてしまっ

た。

しかし、真相は竜巻に巻き込まれたことをキルマは知っていた。メエーネからの帰途、予期せぬ天候に遭遇し運悪く先王だけが船上から消えてしまった。その知らせに王太后は気丈に振る舞っていたが、やはり動揺は隠せなかった。だが、先王のために喪服を着ることだけは拒み続けた。国王も先王のために葬儀を執り行ったりはしなかった。記録上は「行方不明」のままである。

アンドーラ王国の国王ジュルジス三世は、封蝋に押されている何度か見たことのある「紋章」を見つめていた。机を挟んで向かい合っている人物に掛けたまえと声をかけた。

「見下ろされるのは好きでないのではな」

目の前の人物は椅子に腰掛けた。

「この紋章はどう意味かな」と国王は尋ねた

「我が国では龍は尊いものです。我が国に恵みをもたらす有り難い存在です。それを紋章に用いることはわたしには残念ながら許されておりません」

ともかく拝見しようと国王は封蝋を破り中に書かれている文章を読み始めた。それは国王にも読めるアンドーラの文字で書かれていた。それは遠い異国からの手紙だった。その国との交易はアンドーラというよりチェンバーに豊かな富をもたらしていた。その富は貴族にも平民にも分け隔てなく懐を暖めていた。その分け前にあずかりたかつたら、船に乗り込み荒波を乗り越えていけばよかった。そしてその国からも富を求めて船がやってきた。王都チェンバーの港は交易でにぎわっていた。

その国はいつも礼儀正しかった。ことあるごとに様々な挨拶の親書と贈り物が贈られてきた。こちらからは自分の代に限ってだが立太子礼らしきものが行われたと聞いて贈り物をしたことがある程度だった。手紙の内容は、その国の国主とでもいうべき人物の後継者が見聞を広めるためにしばらくアンドーラに滞在したいということ

だった。その国では支配者を「王」とは呼ばないらしい。無論、国王はその国とは話す言葉が違うことは知っていたが。

アンドーラの支配者ジュルジス三世は自分の後継者エドワーズ王子に思いを馳せた。近頃「重騎訓練」に熱中している息子は随分大人びてきた。結婚が彼をまた大人にするだろうと国王は思った。同じ年に国王は最初の結婚をしその一年後には父親になった。

王太子のエドワーズをメエーネにいかせるべきか論議的になったことがある。結局は大した用もないで終わってしまった。父の先王がメエーネに赴いた時は、メエーネにとって試練の時だった。国王と王太子が相次いで病に倒れ国王の二番目の王子が急遽王位についた。ロバーツ王である。ロバーツ王はアンドーラの先王、ジュルジス二世を歓迎し、国王としていかにあるべきか教えを乞うた。ジュルジス二世はしばしメエーネに滞在しその王権の強化に助力した。その後何度かメエーネとの往復で「行方不明」になった。龍に浚われて……

その龍を紋章に用いる国との交易はチェンバーをそしてアンドーラに富をもたらししていた。

エドワーズ王太子は「重騎訓練」に明け暮れていた。朝起きるとまず馬の世話をする。馬なくして騎兵はあり得ない。その後、侍従の手を借り甲冑を身につける。食事もせいぜい籠手を外し、兜を脱ぐ程度である。甲冑を脱ぐのは夜寝台にはいる時ぐらだった。無論その前に入浴することもある。この訓練を始めてから、昼食は図書室で王妃たちとは別に取るようになっていた。彼には「計画」が幾つかあった。その中の一つが成功しつつあった。今度の休日に陸軍元帥を呼び出すことに成功した。

メレディス女王の王子でもあったヘンダース第五王子なき今、陸軍でその辣腕を振るっているのは陸軍軍学校の一期卒業生の軍略の才に恵まれた陸軍中将である。アンドーラの将官制度では現役でいる間その最高位は中将である。退役する時に中将時代の功を鑑みて

功があれば大将位を贈られる。したがって退役大将はいても、現役の大将は一人もない。軍学校時代からその才を見込まれていたその中将は当然のように陸軍の最高位についた。その彼から直に、ラッセルが勧めた彼の立案でもあるゲンガスル戦の話を聞こうと思っていた。これは王太子として当然知らなければならぬことでもあった。だが、元帥の任務の邪魔をする気はさらさらない。

エドワーズは休日でもないのに父の閣僚たちを呼び出すほど尊大ではなかった。亡くなった祖母はしばしば閣僚を呼びだし「すっぱかされて」いた。彼らが王太后の元にやってくるのは翌日かそのまた翌日だった。業を煮やした王太后は王太子の名前で呼びだし国王の怒りを買った。夕食の席で国王は王太子を叱責した。身の覚えがないエドワーズはびっくりしてそんなことはしていないと父に弁明した。国王はそうかと呟きこういった

「閣僚たちは遊んでいるのではないんだ。尋ねたいことがあったら手の空いている時にきて貰いなさい。それくらいはわかるな」

その後、エドワーズの部屋を訪れ、父である国王はエドワーズに勉強ははかどっているかと尋ねた。エドワーズは幾つか質問をし、父はそれに答えてくれた。そして、部屋に飾ってある母の肖像画に目を留めるとすぐ目をそらした。エドワーズにとってそれは唯一母を思い出す品だった。母の遺品はその時には全て片づけられエドワーズの手元にはその肖像画だけが残った。そして今でも肖像画の母は彼に微笑みかけていた。

ともかく、エドワーズは「休日」を楽しみに待つことにした。だが、例の「計画」についてうち明けるにはまだ早い。叔父のランセル王子もここは慎重にといった。

「何しろ数が多いらしい。矢を射れば向こうで当たってくるといふ寸法らしい。ただ、牝鹿をやると馬鹿呼ばわりされるらしい。何しろ雌は子供を増やすからな。我が陸軍も鹿ぐらいしか今のところ戦う相手がいないわけだ。まあ元帥閣下は甥の大蔵卿とやり合っちはいるみたいだが」

エドワーズはランセルの言葉で先の大蔵卿のブルックナー伯が「王立施療院」の設立に手を貸しているのを思い出した。そのことに触れるとランセルはまあお目付役みたいなもんさと肩をすくめた。エドワーズも《治療の技》に興味を失っているわけではない。だが、ケガの治療はしたがるセシーネに任せた方が無難だった。《力》を見せつけても相手は驚くだけでそれは子供っぽい行為だった。もう子供ではない。

《治療の技》にも限界があることをエドワーズは気づいていた。限界がなければ王太后も第五王子も死なずにすんだ。そして、ケナスが宮殿にもっと早く現れば、母も死なずにすんだかもしれない。死者を生き返らすことは《治療の技》でも魔法でも不可能だった。

来月、工部尚書に就任することが決まっているニドルフ・レントル子爵は元大蔵卿のブルックナー伯爵を訪ねていた。昼間、救貧院長のキルマ・パラボン候爵夫人から聞いた話が気になったからである。

「軍事機密なんて少し大げさすぎませんか」

「施療院設立だって、機密事項だよ。特に《治療の技》に関しては慎重に対応する必要がある」

ニドルフはブルックナー伯の意外な話ちょっと驚いた。

「ちょっと待って下さい。あなたまでそんなことを」

ブルックナー伯は、まだ若さのあふれているニドルフを少しうらやましく思いながらも「ニドルフ、考えてもみたまえ。わたしは《治療の技》を拝見したことがあるがその時ははっきり言ってぎよつとしたよ。アンドーラは魔法を特に違法とはしていないが、違法と決めつける国もある。特に女性が使う場合は」

ブルックナー伯の言葉にニドルフは思い当たった。「福音教会」だった。「聖者」チングエンを教祖と仰ぐその宗派は「魔法」に一定の基準を設けていた。いい「魔法」とそうでない「魔法」と。そうでない「魔法」を使うのは禁じられ、それを使ったものは「死罪」

だった。特に女性に関して汚れた「魔法」しか使えないとされ、多くの女性が処刑されていた。

「しかし、ブルックナー伯、《治療の技》は魔法なんですかね」

「わたしは治療法の一つだと思っている。大体、魔法がどういうものか、君だってわからないじゃないか」

確かにその通りだった。ニドルフはまだ少女といってもいい第一王女のセシーネの顔を思い浮かべた。青く澄んだその瞳は「汚れて」なぞいないとニドルフは思った。

アンドーラの第一王女は自分の部屋で薬草の調べものをしていた。モリカから教わった薬草の名前やその薬効を紙に書き記し、頭の中の新たな知識を整理していた。その横で侍女のナーシャがおとなしく刺繍をしていた。セシーネはナーシャにそろそろ休みましようと言声をかけた。ナーシャは刺繍から目を上げハイと返事をした。それから、おずおずとお願いがあるんですがと切り出した。セシーネがなあに？と促すとナーシャは

「プルグース子爵家のことなんですが」

「プルグース子爵がどうかしたの」

「わたしの婚約者はプルグース子爵家の出なんです」

ナーシャは事情を説明し始めた。ナーシャの婚約はルンバートン伯爵家でもプルグース子爵家でも歓迎された。ナーシャの父親は陸軍大佐である。ルンバートン伯爵家では将官制度が出来て以来その最高位は大佐である。それはナーシャの祖父だった。ルンバートン伯爵はナーシャの父親がもう一階級昇進し將軍と呼ばれる地位まで昇ることを期待していた。一族の中で將軍位のものがいるといないとでは「箔」がちがう。王家の各種の行事で將軍は「領主」と同じ扱いを受けた。ナーシャの婚約者はナーシャの父親の部下である。彼も武官での栄達を望んでいた。彼自身はプルグース子爵家の当主のいとこの息子である。その子爵家の当主の一人娘がもうじき初の謁見を控えていた。ナーシャが第一王女の侍女になった話がブルグ

「ス子爵夫人の耳に入り、自分の娘も第一王女の侍女として王宮に伺候することを望んでいるということだった。」

貴族たちにとって王家の人々に親しく知己を得るということは重要だった。アンドーラは法治国家である。あらゆる面で法が定められ、それに則り国家運営がなされていた。だが法は紙に書かれた書物である。それを生かすも殺すも人次第である。法の適用において多少の情実が絡むのは止む得ない。権力者の「取りなし」で罪を軽減されることもある。それだけではない。あらゆる面で貴族たちは「宮殿」の意向を伺った。自分たちの身分が保障されるのは、国王がそう認めたからである。王家に刃向かって貴族という身分を剥奪されるような愚挙をする気にはなれなかった。貴族と平民と比べるゝと貴族は遙かにアンドーラでは「優遇」はされていた。

ナーシャの話を聞いてセシーネは少し考えた。ナーシャはそれなりに気に入っていた。出しゃばらず慎ましかった。ナーシャにとって婚約相手のプルグース子爵家に「恩」を売ることが決して損ではない。

「あなたはやめたいの？」

「いえ、王女さま、出来れば一年間は勤めたいと思っています。出来ればなるべく長く」

「まあ、いいわ。その子に会うぐらいはしてもいいわ。それから決めましょう」

ナーシャはホツとした顔をして礼を述べた。

セシーネは自分の侍女を増やすことは余り考えていなかった。

普段は部屋付だけで十分だった。ただ、行事にはそれ用の侍女が必要だった。第一王女にふさわしい身分の侍女が側に付き従わなければならなかった。

セシーネは十二歳から自分にかかる費用に計算をさせられていた。侍女たちの手当も自分で決めていた。その時、部屋付たちの手当を少し上げた。ナーシャの場合は一年勤めれば謁見の時に貸した礼服をやることで話が付いている。ナーシャは、一着は欲しかった

と行って喜んだ。

ナーシャはメリメに勧められてセシーネの《見立て》も受けてみた。メリメにいわせると《見立て》をして貰うと食が進むという。確かに胃腸が弱かったメリメは丈夫になった。ナーシャはこれで病気がわかるのかと尋ねたがセシーネは首を振った。

「これで病名がわかるわけではないの。他にも診断方法が色々あるの。痛みがあるとか色々あるじゃない。後はどう治療をするかそっちのが大切だわ」

ナーシャは黙って頷いただけだった。ともかくナーシャは不思議な《力》を持つ王女を穏やかに受け止めて始めていた。

治療師の修業（前書き）

ヘンダース第二王子の息子リングートはやんちゃ盛り。王宮恒例のかくれんぼでリングートは大胆な作戦に出る。

一方、セシーネは施療院の準備は元大蔵卿のブルックアー伯の協力を得たが、救貧院の院長キルマは相変わらず渋い顔だった。そして、治療師の勉強に没頭したいセシーネは従医長のベンダーと《治療の技》の師ケンナスに子供扱いされる事にうんざりしていた。

治療師の修業

朝食の席で国王から提案された「計画」に一番顔を輝かしたのは、足首の湿布のとれたリングート王子だった。彼はその計画が持ち出されるのを心待ちにしていた。伯父の国王はリングートにとって話のわかる伯父だった。リングートは陸軍軍学校への入学を希望していた。一方の叔父の第三王子ランセルにいわすと「戦」の経験もない海軍はただの船乗りの集まりだった。やることといえば港に入ってくる船を行儀よくするぐらいだと。その点、陸軍は「戦」経験も豊富で国内では「無敵」だった。特に「重騎兵」は花形だった。父のヘンダース王子は海軍に籍を置いていた。漠然と父が自分の海軍兵学校への入学を希望しているのではないかと思っていたリングートは思いきって伯父の国王に自分は軍学校に行きたいといってみた。その時は、まだ早いといわれたが、特にダメだとはいわれなかった。リングートが何故「陸」を希望するかというと最近とみに厳しくなった父の目を逃れたいという気持ちもあったが、何となく陸軍の方が強そうだという気持ちがある。

アンドーラでは「武術」の振興のために幾つか行事がある。夏に催される海軍兵学校の訓練生が参加するそれは、チェンバー川で「挺」の櫓を漕ぎ、速さを競うものや立てた柱をよじ登る速さを競うものだった。それはそれなりに見ていて楽しかったが、リングートは今一つ「勇ましくないと感じていた。やはりランセル叔父のいった通りかもしれないとリングートは思っていた。

とにかく話のわかる伯父である。ケガについても叱責した父に比べ、叱ることもなく優しく言葉をかけてくれおまけに自分が待ち望んだ「計画」を実行してくれるとは。

「今度の休みあたりどうか。今度は大がかりにやるう、リディアの初めてのかくれんぼだから。みんなの都合は？」

「僕はちよつと予定があります」とこれは王太子。

「わたしもちよつと調べものがあるから遠慮するわ」とこつちは第一王女。

「わたしはやりたい」と第二王女。満を持してリングートはいった「陛下、僕もやりたいです。すぐいい隠れる場所があるんだ。ねえ、五時まで隠れてもいいかな」

「ほう、五時までか」と話のわかる伯父の国王

「ものを壊したりするな」と厳しい父のヘンダース王子は壊す前に説教しようとした。

「そんなことしない」と自信満々のリングート。そこへランセル王子も参加を申し出た。

「リングート、自信がありそうじゃないか。よし。俺は捜す方を引き受ける」

リングートのケガの容体を確かめると国王は「計画」の決行を決めた。

その後のリングート王子は忙しかった。リングートには「勉強仲間」がいた。王子の「教育」のためいろんなお相手をする少年たちだった。十人ほどいたが、リングートより年長の彼らはそれぞれ軍学校や兵学校へ進学を家のものたちから申し渡されていた。彼らにリングートは「計画」をうち明けた。ともかく国王が「大がかり」というからには王宮中どこへ隠れてもいいはずだった。これはちゃんと「確認」してある。リングートは、少年たちにものを壊すにはダメだと念を押した。それぞれ「作戦」を練るようにと申し渡し、自分付けの護衛兼教育係の近衛隊長に相談するようにつた。少年たちを「行儀よく」させるのも隊長の彼の仕事だった。リングートには密かに立てた「作戦」があった。後は協力者を捜すだけだ。まだ決行まで時間はある。「仲間」の少年たちも活気を帯びた。

国王主催の「かくれんぼ」に不参加を表明した王太子であるが、別に大人ぶって不参加を決めたわけではない。彼には大事な予定があった。多忙な陸軍元帥が自分のために時間を割いてくれる。軍政

について学ぶことは王太子として大事なことだった。

エドワーズには「かくれんぼ」に悲しい思い出がある。死んだ母の姿を捜し父と二人で王宮中を歩き回った。その時初めて母がもうどこにもいないのだと悟った。泣きじゃくりながら父に抱きついた。父は彼を強く抱きしめながら優しくいった。

「かあさまは創造主の元へ帰った。もうここにはいないんだ。さびしいけど、我慢で出来るね。お兄さまだから、いいね」

幼いエドワーズは涙をぬぐいながらうなずいた。母の死を悲しんだエドワーズに比べセシーネはそうでもなかった。その時、父は、セシーネは小さくてそういうことがわからないのだといった。幼くて人の死が理解出来ないことを今はそうかもしれないとエドワーズは、理解はしていた。それはまだ祖母の死をわからないリディアを見ればわかる。王太后の死を妹のエレー又は幾らかわかったようだった。王太后の死はそれなりに悲しかったが、母の比ではない。父の再婚相手のヘンリッタについてエドワーズは悪い人ではないとは思っていたが、複雑だった。色々やかましかった祖母に比べ、ヘンリッタは王太子のあれこれに格段口を挟むことはなかった。それはエドワーズには有り難かった。

ニドルフ・レンドル子爵は複雑な思いで第一王女を出迎えた。王女は馬車を降りると涼やかな声で救貧院院長のキルマ・パラボン侯爵夫人に「おはようございます」と声をかけた。黄金色に輝く髪は一つの束に編み込まれ、謁見の時とは違って変わり質素な身なりだった。その青く澄んだ瞳がニドルフを捉えるとおはようございますと彼に声をかけた。軽く会釈をしながらニドルフも「おはようございます」と挨拶を返した。

第一王女は王位継承者という高い地位にありながら、福音教会から「魔女」と弾劾されるかもしれない存在なのだ。この少女のどこが汚れているというのか。女性が汚れている存在ならそこから生まれた男たちはどうなのだ。ニドルフは思った。「魔法」に関し

て、ニドルフは、メレディス女王の見解を支持したいと思った。女王の即位に反対し、女王を「魔女」と弾劾した福音教会の狂信者や貴族たちは武器を持って宮殿に押しかけた。彼らを宮殿で迎えた女王は逆に彼らをやりこめた。

「余が魔女というのなら証拠を見せよ。魔女は鏡に映らないというが、ほら映るであろう」

鏡には王冠を被った女王の姿がはっきりと映し出された。

「魔女は影を踏まれると動けないと聞くがほら動けるであろう」

女王は影を踏まれてもスタスタと歩き玉座に座り直した。

「今すぐ余にひざまずくなら許してやるう」

何人が慌ててひざまずいた。

「だが、許すのは命までじゃ。余が女だからといって侮るな。余はそなたたちの王である。余が本当に魔女なら今頃はそなたたちをひきかえるに変えていたかもしれぬ。「魔法」は人に害を与えるものだけを違法とする。余がいいと認めたらそれでよい」

宮殿に押しかけた狂信者たちは捉えられ、あるものは逃げ帰った。女王の父ヘンダース王は容赦なかった。軍を自ら率いて娘のメレディス女王の即位に反対した者たちを追いつめた。ヘンダース王の時代から「領地替え」が頻繁に行われたが、その動きが顕著になった。女王の即位に賛同したものはよりよい領地を与えられ、爵位を引き上げられる者もいた。反対したものは領地を削られたり、狭い領地に換えられたり、中には爵位を取り上げられ平民の身に落とされたものもいた。

この、女王を受け入れ難いものたちは、今度はヘンダース王の弟のフーサル王子を担ぎ出した。しかしこの動きは肝心のフーサルに跡継ぎがなかなか生まれず、女王自身が生んだ王太子が立太子礼をすると次第に収まった。今度はどうやら、男の王になりそうだと気がついたからである。

ニドルフは別に女王で何が悪いと思うが、それは後世になってメレディス女王が賢明な国王だったと知っているからなのかもしれない

い。アンドーラにとって幸いなのはヘンダーズ王以降暗愚な国王は出なかった。貴族にとっては王権の拡大と自分たちの特権の縮小の時代ではあったが、ある意味で国の統一性ということをもたらし、かつては土地に縛られていた元農奴の平民たちはもつと広い世界があるのを知った。アンドーラは活気のある国だった。

ニドルフは夕べ、ブルツクナー伯から聞いた隣国のサエグリアの現状を思い浮かべた。相変わらず男爵たちは領地の取り合いをし、国王には王女しか生まれず後継者をめぐって争っていた。おまけに「農奴制」を敷いたままだった。二百年前かなとブルツクナー伯はいった。確かにアンドーラの平民たちは元気がよすぎるがと、彼は笑った。同じ平民でも自由民出身の多い王都チェンバーは、自由闊達がその気風だった。

セシーネ王女はパラボン侯爵夫人となにやら薬について話し合っていた。元女官長は王女に対しても媚びることがなかった。ニドルフはたかが病気やけがの治療をする「王立施療院」の設立にも複雑な政治状況があることを知った。《治療の技》をブルツクナー伯は治療法の一つだといっていたがニドルフは彼がそう自分に言いきかせているようにも思えた。

パラボン侯爵夫人はニドルフに救貧院の建物の図面を作成するに当たって「仕事部屋」を提供してくれた。どのみち空いていますからねと彼女はいった。彼女はやせ細って気むずかしげに見えたが、「仕事」に関しては有能なのだろう。彼女のいう通り救貧院は閑散としていた。活気があるのは《治療師》の見習だという子たちのいる部屋ぐらいだった。巻き尺で各所の寸法を測っているとその見習の少年の一人が話しかけてきた

「なにしているの？」

「見りゃわかるだろう、寸法を測っているんだよ」

「そりゃわかるけど何のために？」

「色々必要だからさ」

「フーン。ねえ、あんたさ、骨にも名前があるのって知っていた？」

筋肉って肉のほうにも難しい名前があるんだ」

ニドルフは少年の話に好奇心をそそられた。

「先生はそれを全部覚えろっていうんだけど、薬草の名前だって覚えなきゃならないしな」

「どうやら《治療師》の修行も大変そうだなとニドルフは思った。少年は続けた。

「先生は大学つてところで学士つて偉い位を持っているんだ。兵隊でいえば下士官ぐらいだっていうけど、もっと偉い先生が俺たちを教えに来てくれるはずなんだけど、王子殿下がけがをしたんで忙しくてこられないらしいんだ」

少年との会話は救貧院の修道女がきたところで終わった。少年はその修道女に慌てて姿勢をただした

「あの、皿洗いは終わりました」

「だったら、いつもの部屋に戻って綴りの練習をしなさい。この方々のお仕事の邪魔なしないの」

ニドルフはあの少年が「魔法」や「福音教会」をどう思っているだろうと考えた。それより少年は「偉い先生」が自分たちを指導してくれるという今の境遇に満足しているのだろう。少年の口振りは少し自慢げだった。

第一王女は先の大蔵卿ブルックナー伯からアンドーラの「医学」事情について説明を受けていた。

「何しろ、兵役がありますからな。大学の医学部のほうでは、学士位を先に取らせてから兵役につかせるように勧めるんですな。そうしますと医務官の元で医務官補、つまり助手ですな、それをしながら今度は博士号を目指すわけで。資格を取って開業するのは大概、領主に招かれてということになりますな。」

「すると、軍は大勢、医学学士はいるというわけですね」

「ええ、何しろ、給料が出ますからな。開業すれば診察料や治療費を請求出来ませんが、資格がなければそれは出来ませんからな。他の

博士の元におつても給料どころか逆に指導料をいわれたりするとも聞いております。そんなわけで資格を取るまでは軍におるのが多いですな。医者が近所そこらにいるというわけではないんで、そこで、大概は病気になると薬草売りから薬草を買ってそれで治すものが多いようですな。医者に診て貰うものもおりますが、診察料はお安くない。こういつたらなんです、ベンダー博士の診察料はお高いですな。あと、駐屯地に近いものはそこに医務官がいるのを知っておりますからな。そこで診て貰う。わたしの領地でも医者はおるんですが、駐屯地に近いものはそっちへ行っているようすな」

セシーネはアンドーラが「軍」を中心に動いているのを改めて実感した。セシーネが生まれてから、戦乱らしい戦乱は起こっていない。それは、国軍がしっかりと国内を押さえているからだ。駐屯地に駐在している各師団は王家領に限らず貴族たちの領地を巡回し、国内の平安を支えている。農民たちは不安なく畑を耕し、商人たちは心配なく商売が出来た。王都チェンバーから出たことのないセシーネには地方の状況はわからないがそれなりに安定はしているらしい。

ブルックナー伯はこう主張した。きちんとした医療をアンドーラに行き渡らせるためには「王立治療院」は必要だと。自分の知る限りではアンドーラの医学は対処療法で、病気を根本から治す研究はされているようだが、まだこれという成果は上がっていない。むしろ、人が元来持っている「治す力」を促す《治療の技》がこの病気をその根元から治す治療になるのではないかと。

セシーネは《治療の技》がそれほど有効かどうかかわからないという、ブルックナー伯は笑って少なくとも切り傷は治せましようといった。そう難しく考えない方がいいと、ただ、始めないと何も始まらないと。

ブルックナー伯は、《治療の技》について、これは道を切り開いていくことに似ていると思った。国王陛下はこの王女にどれだけの重荷を背負わしたのだろう。しかし、あのケンナスなら王女を助け

てくれるだろう。そして、自分もまたこの王女を出来る限り助けたいと思った。

セシーネは、ブルックナー伯に救貧院と施療院の違いについて質問してみた。

「そこですな。救貧院は貧しいものたちの面倒を見る。中には病人もおるかもものしれない。しかし、問題なのは、治療代を払えるくらい金は持っていてても医者はどこにいるかわからない連中には、いい目印になりましょう。そこに行けば診て貰えるという場所が必要ですよ。あと、これは、私見ですが、どうやったら病気になるに偏って病気になるなんて馬鹿らしいですよ。まあ、徐々にやればよるしいでしょう。やはり、これはやってみないとわからないですよ。後これをご覧下さい」

ブルックナー伯が取り出したのは救貧院の報告書だった。そこには何故救貧院にやってきたのかあるいはその後の処遇について数字で書き記されていた。大部分は王都にいけば仕事口があると聞いてやってきた者たちだった。セシーネは病人がいるから薬草をわけて欲しいと行ってわけてもらった薬草を売る抜け目のない者がいるとキルマが話していたのを思い出した。それを見抜いたキルマも抜け目なかったが。

先王の時代から大蔵卿を長く勤めたブルックナー伯は、国王から常々「国税は王家が贅沢をするための金ではない」といつているのを聞かされていた。いうだけでなく国王は王室の費用をいかに削るか苦心をした。ただ、普段の費用は切りつめたが、行事にはお金をつき込んだ。その幾つかの行事は貴族だけでなく平民たちも大いに楽しんだ。陛下は人心を掴むのがうまいなとブルックナー伯は思っている。この施療院もうまく国民たちの心を掴むだろうか？

第四王子のリングートが楽しみに待っていた「休日」の前日、セシーネは、ニドルフ・レンドル子爵に救貧院の彼の「仕事部屋」に

招かれた。レンドル子爵は宮殿の図面を見たことがあるかと尋ねた。「ありますけど、それが何か？」

「じゃあ、あるんですね。工部省を捜したですけれど見あたりなくて」

「どうしてそんなことをわたしに尋ねるのですか？」

「いや、一度拝見したいと思って、工法に興味があるのですよ」

「工法？」

「建物の作り方ですよ。」

「わたしが見たのはせいぜい部屋の間取りというのかしら、どこにどんな部屋があるのかわかる程度ですけど」

「それだけでも結構です。何しろ工部尚書の話では、そういったものを拝見するには陛下のご許可ないと伺ったものですから」

セシーネはふと思いついて明日なら拝見出来るかもしれませんといった。

「明日ですか？」

セシーネは「かくれんぼ」の計画をレンドル子爵にいつてみた。

子爵は怪訝そうだったが、セシーネはリングートがいい隠れ場所を見つけたと知っていること、その場所を見つけるために多分叔父のランセルあたりが図面を見ながら予想を立てているかもしれないといった。

ニドルフ・レンドル子爵は大いに興味がわいた。ニドルフにとって国王は犯しがたい存在である。盲目的な忠誠心こそなかったが、「いい国王」の元でアンドーラは平和で豊かなだとニドルフは思っている。その国王は父親のように彼を諭した。学問も人の役に立たなければ意味がない、君は人の役に立つ人間になりたくはないか、この国をよい国にするのはどうすればいいか考えてみたことはあるかと。これはニドルフにとって耳の痛いことであった。ある意味で働かずとも暮らしていけるニドルフにとって生きるということは、自分の知識欲を満たすことでもあった。ニドルフはこの世界がどのように造られているか知りたかった。そんな彼を国王は「研究」の

世界から引つ張り出した。

国王は彼に医学に興味があるかと尋ねた。ありますと彼は答えた。国王は医学書も読んでいるだけでは病人は治せないといった。そしてこう尋ねた、アンドーラは健全な国かと。ニドルフは答えに躊躇した。

アンドーラは論議の盛んな国である。ニドルフも大学時代は色んな論議をかわした。法科の学生たちは「政治論議」が好きだった。それは歴代の王の評価から始まり、中には王は必要か否かという過激な発言も飛び出した。レンドル子爵家は半ば「新貴族」である。貴族の出ではあるがメレディス女王の代に遷都に功があつたとして新たに子爵位を授かつた。亡くなつた祖父は元の家の当主にあつちはあつち、こつちはこつちと、本家面したがるその当主の干渉をはねつけた。あつちに頭を下げるのは陛下だけではないのは陛下のおかげだとよく祖父は彼にいった。頭を下げるのは陛下だけでいいと。祖父の跡を継いだニドルフにとって、国王は謁見の間で玉座に座る遠い存在であつた。自分が好きな学問を出来るのも子爵という有り難い身分である位はわかつていた。

だが、目の前の国王は、今度は、アンドーラはどんな国になればいい？と尋ねた。それも彼は答えられなかつた。君は意見というものが無いのか？アンドーラでは珍しいなと国王はいった。食べ物の好き嫌いだつて立派な意見だという意見もあるかと笑つた。ようやくニドルフは難しい問題ですとだけいった。国王は働けば暮らせる国になればいいと思つている。君にも働いて貰うよといった。厳しい国王の目がそこにあつた。身近に見る国王は威厳そのものだった。人として格の違いを感じた。

その国王が「かくれんぼ」をするとは……

その「かくれんぼ」の当日、王都チェンバーは雲一つない快晴であつた。前夜は風が吹き荒れたが、その風も止んだ。リングートは伯父の国王に幾つか確認をした。国王は機嫌良く

「新宮殿のほうはダメだ。王宮の中だけだ。本当に五時まで隠れているのか？」

「いい場所があるんです」と協力者を得たリングゲートはいった。この「作戦」の遂行には協力者が不可欠である。それに秘密を厳守出来るかが鍵ではあるがリングゲートは協力者を信頼していた。

たかが「かくれんぼ」であるが亡くなった第五王子のヘンダース元帥はこれも「軍事訓練」だと主張した。孫を引き連れよく「参戦」した。確かに王家の人々を警護する近衛兵たちにとって警護する相手を見失ってはその任務を果たせない。

朝食の後、国王は休日の日課である菜園に足を向けた。第一王女と第二王女が同行した。王宮の庭園では園丁たちが、前夜風が吹き散らした木の葉を掃き集めていた。第二王女のエレーヌに隠れなくていいのかと国王は尋ねた。エレーヌは、自分は捜す方にするのといった。国王はそうかとだけいって菜園の世話を始めた。

父と農作物について話しながら菜園の世話を終えたセシーネは自分の部屋に戻った。そこにはナーシャが待っていた。

「今日はお休みにしてもいいといたはずだけど」

「いえ、大した用もありませんし、それに邪魔だといわれまして」「邪魔？」

「ええ、私たちのお部屋のほうは鍵をかけるといわれまして。それにこれを仕上げてしまいたいので、お邪魔でしょうか？」とナーシヤは刺繍を取り上げた。セシーネは構わないと許可をした。セシーネは自分の机に向かい「勉強」を始めた。セシーネが「かくれんぼ」に参加しなかったのは、それは子供じみていると思っただからではない。それは、父と妹たちや張り切っているリングゲートのお楽しみであってそれを邪魔する気はなかった。父との交流は朝夕食事を共にし、さつきの菜園での会話で十分だった。それより自分に課せられた責任を果たすためにセシーネは勉強をしたかった。医学の道は深くけわしい。

人が成長するきっかけは自分の未熟さを悟ってからであるまいか。

セシーネは自分の未熟さを十分自覚していた。未熟さを補うためには自身を成長させなくてはならない。人は漫然と生きていても成長はしない。様々な経験から何かを学ばなくては、成長はあり得ない。

王太子のエドワーズも自身を成長させるために研鑽に励んでいた。相変わらず甲冑姿である。休日の今日は「武術訓練」は休み、軍略の勉強に取りかかっている。王太子の右隣の席の人物は甲冑姿ではなく軍服姿である。左の肩章には陸軍でただ一人許されている王家の紋章が金糸で刺繍されている。陸軍元帥の「階級章」である。彼は武勇だけの人ではなかった。むしろその機略に富んだ発想で今の地位を掴んだ。だが、頭脳だけでなく、体格もよかった。日々の鍛錬の賜物でその背筋はぴんとし、その目つきは鋭かった。武官らしく髪を刈り上げている。

「包囲戦で注意をしなくてはならないのは後ろですな」

王太子は後ろ？と聞き返した。そうですとガナツシュ・ラシユール陸軍元帥はうなずいた。

「後方から敵が襲ってきたら目も当てられません」

エドワーズはなるほどとうなずき、先を促した。この「勉強」は叔父のランセル王子の勧めに従ったものだが、エドワーズは叔父の助言を有り難いと思った。いささか苦言の多いその上のヘンダース叔父よりランセルは気さくだった。いささか言葉が乱暴なのはこの方が武官たちに「受け」がいいからだといった。「戦」になって、礼儀作法なんていつてられるか？ともいった。ランセルは「戦」経験のない海軍に籍を置いているすぐ上の兄をからかつてはこう言い返されていた。戦わずして勝つのが一番さ。だがやがて海軍も「戦」を経験することになる。

ランセル王子は首をひねった。リンゲートは昼食の時間になっても見つからなかった。今日の「主役」リディア王女は国王自身が王妃の衣装タンスから見つけだし、別の遊びに国王と興じていた。し

かし、五時まで隠れると豪語したリングートどころかリングートのお相手に選ばれた少年たちも見つかっていない。ランセルは彼らをリングート班と名付けていた。王太子のエドワーズにもそんな少年たちがかつていた。彼らはすでに兵役を果たすために軍服に着替えアンドーラの各地に散らばっていった。ランセルも普段は陸軍本営本部に「出勤」し、「数」数えに専念していた。内心では参謀本部を希望していたが、階級上は上官である陸軍元帥は手厳しかった。「よろしいかな、ランセル大佐。軍の基本は何だと思えますか？」「やはり、戦略でしょう」と陸軍きつての「軍略家」に敬意を表してランセルはいった。

「違いますな、まず兵士を食べさせることですか、腹が減っていては、兵士はいうことを聞いてくれません」

ランセルはなるほど思った。

それにしてもリングート班はどこいったんだ？彼らも「かくれんぼ」に参加しているのはわかっていいる。これは本腰を入れて捜さなきゃならないなとランセルは思った。昼食もそこにランセルはまず、リングート付の近衛隊長を捜し始めた。彼ならリングートの所在を知っているはずだった。彼は近衛兵の控え室にいた。ランセルの問いに

「存じておりますが、申し上げる訳にはいきません。まさか上官の命令だとおっしゃるような野暮な真似はならんでしよう」隊長の階級は中尉だった。ランセル大尉は、リングート班は？と尋ねた。

「それも把握しておりませう」と隊長はすました顔で答えた。

ランセルはこの近衛中尉から聞き出すのは諦めた。これは各個撃破だなと覚悟を決めた。自分付きの護衛を従え王宮の建物の上階から探し始めた。彼らは普段陸軍本営本部へランセルの送り迎え以外暇だった。こき使っても文句はないはずだった。まず王宮の屋根に登らせた。これは以前エドワーズが使った手だった。

王宮には各所に近衛兵が配備されている。彼らは一時間毎に交代で決められた場所に立っている。彼らに尋ねても要領を得なかった。

搜索しているうちに驚くべきことが判明した。リングート班は用意周到だった。昼食で釣ろうかと思っただが「食料」までを持参していた。見つかった一人はもう食べましたといった。他の少年たちの所在を尋ねたが知らないといった。少年たちは次々と見つかった。だが、リングートの姿はなかった。

ランセルは「かくれんぼ」に参加していないセシーネの部屋にも行ってみた。

「念のため部屋を捜させてもらうぜ、まったくあいつらときたら」「叔父さま、あいつらって?」

「リングート班だよ。食料は持参するは何はで、ここからは天井裏には上がれないな」天井を見上げた後、今度はとセシーネの部屋の寝台の下を覗き込んだ。衣装ダンスも開けてみた。暖炉の中も覗き込む。

「一人は煙突に隠れていやがった。上から綱を使ってハンモックでぶる下がっていたんだ、邪魔したなセシーネ」

図書室にも搜索の手を伸ばした。大きなテーブルの下を覗き込みながらランセルはエドワーズにぼやいて見せた

「まったく、あいつらときたら、天井裏には潜り込むは煙突にはぶらさがるはで、とんでもない奴らだ」

「まあ、いいじゃないですか、リングートはケガをして少し憂さをはらしかったでしょう」

当然、リングートは図書室にもいなかった。なぜだか、陸軍元帥とエドワーズ付きの退役大佐が顔を見合わせてクスクスと笑った。だが、くまなく捜したおかげでリングート班はリングート以外見つけだされた。しかしリングート第四王子はどこに?

結局、王妃の居間でお茶を飲もうということになり、ちょっとした「作戦会議」となった。休日の午後にはよく貴族たちが王宮に「ご機嫌伺い」にやってくる。今日もニドルフ・レンドル子爵がやってきていた。王太子も陸軍元帥と近衛師団長を伴って居間にやってきた。

「厩や馬車の中は見ましたか？」とエドワーズ。ランセルは自分の近衛隊長に合図した。彼は敬礼すると早速探しに行った。リンゲートの母のアンジェラ妃がさすがに心配しだした。夫のヘンダース王子は

「ハロルドは今日休みじゃなかったか？」と息子付きの侍従のことを尋ねた。アンジェラがええというと言ランセルは

「王宮の外に隠れているなんて反則負けだ、新宮殿も同様だ、そっちは封鎖してあるからな。どこに隠れたんだろう」

お茶を受け取った陸軍元帥が箱や空き樽の中は？と尋ねた。

「積み重ねた樽の間に隠れているやつは見つけた。つまり、誰かがその上に積み重ねて隠した訳だ」とランセルはいまいましたにリンゲートの護衛隊長を睨み付けた。彼は知らん顔していた。それが余計ランセルを苛出せた。

「なんか悔しいな。俺が小さい頃はこんな大がかりなかくれんぼなんてやらせて貰えなかった。あつちの部屋は入るな。この部屋は覗くんで、そういわれると余計覗きたくなるものだろう」

ランセルは父親と遊んで貰った記憶は、ほとんどない。譲位をしてから多少、自分の将来について話し合ったことがあるくらいだった。冷たい父親とは思わなかった。息子の将来よりもアンドーラの将来を父親のジュルジス二世は案じていた。まだ、少年だったランセルは、そんな父親を尊敬していた。

「しかし、どこに隠れているだろう。なんか悔しいな、逃げ回っているという手もあるけど。王宮の建物は上から下まで探したんだ。階段は封鎖してある」とランセル。

「建物の中でないとすると庭は如何ですか？」と思案顔の陸軍元帥。「植え込みの間に一名、木の上に一名、見つけた」と報告するランセル。陸軍元帥は、箱や空き樽の数は？と近衛師団長に言いかけて眉をひそめた。まさかとつぶやいた。リンゲートの護衛隊長に

「君、まさか、殿下を箱の中に隠してそれを土の中に埋めて隠したんではないだろうね」

近衛中尉は、ご明察の通りですといった。居間にいた全員が目が近衛中尉に集まった。元帥は立ち上がった。いつになく慌てている。「君、窒息でもしたらどうするんだ？」と近衛中尉に詰め寄った。

中尉は落ち着き払い、大丈夫です。空気穴を通してございますといった。しかしねえと上官の元帥は、本当に大丈夫なのかと詰問した。中尉はリングゲートの「作戦」を説明し始めた。

「空き樽に穴を開けてそこに竹筒を通して地上にだしてあります。埋めた後、自分自身そこから殿下にお声をかけ、ご無事を確かめております。そうですね、三十分ほど付き添っております。その後、昼食時にもお声をかけ、昼食を召し上がって頂くようお声をかけました。ここに何う前にもご無事を確認しております」

ランセルは、用意周到なリングゲートに呆れかえったが、元帥は、追及の手を緩めなかった。

「しかし、目を離すのはまずいじゃないのか、何かあったらどうする？」

「大丈夫です、信用のおける人物が随時お声をお掛けし、ご返事がない場合は、すぐ掘り出す手はずになっております。呼吸回復術の方も、今年の夏、誰が心得ているか、確かめてございますし……」

ランセルは中尉の信用のおける人物が誰なのか検討がついた。多分、園丁頭のバルカンであろう。彼が勝手に庭園に穴を掘らせるわけがない。休日だというのに園丁たちは庭園で仕事をしていた。

だが、中尉の話は搜索の手がかりになった。

「つまり、竹筒の出でいるところが、リングゲートの居場所だ」と断定したランセルに、中尉は

「おわかりなるでしょうか、陽動作戦で、竹筒を何本か偽装で埋め込みました。お声をかけるにも合図を決めました」

国王は笑い出した。ランセルは、そこまでやるかとおつばやいた。

「そこまで、考えてあるなら、折角だ、五時まで待ってやるう」と国王

「俺はその前に探し出すぜ」とランセルは立ち上がった。そこにへ

ンダースが

「バルカンが入るなといったところがそこさ。」とため息をついた。

五時きっかりにリングート王子は「見つけだされた」。まず、園丁頭のバルカンが竹筒から声をかけた。

「やりましたね、リングエ若」とエンバー出身のバルカンはいった。

下からリングートがもう五時？と聞いた。

「もう、約束の五時だ、リングート」と次に国王が竹筒を通して話しかけた。

「本当に五時？」とリングートは尋ねた。

地中に埋められた樽の中で立ち上がったリングートは、周りを取り囲んでいる人垣に驚いた。父親のヘンダースの手を借り、地上に出ると、国王が、怖くなかったかと尋ねた。リングートは胸を反らせ、少しもと、答えた。陸軍元帥が「ご自分でお考えになったのですか？よく思いつきなされましたな」と声をかけた。

従医長のベンダーとアンジェラがリングートの「身体検査」をした。ヘンダースは息子を叱っていいものやら褒めていいやらわからなかった。ともかく、無事なのが何よりだ。

このリングート王子の「冒険」は、瞬く間に王宮で働く人々の口を上った。ある侯爵爵令嬢の不行跡を論うよりも「愉快な」話題ではあった。

約束の五時まで隠れきつたリングート王子の国王からの「ご褒美」は「馬の世話」だった。次の日の朝、朝食の席でそう申し渡された。怪訝な顔の第四王子に、第三王子が、乗馬の上達のコツだと教えた。リングートも乗馬は上達したかった。甥にしてやられた感のあるラッセルは、馬は利口だから世話をしてくれ者になつくのさといった。第二王女のエレエー又は少し面白くなかった。エレエー又は自分より八ヶ月ほど年上のリングートと何かと比べられる。無論第一王女とも比べられる。「出来のよかった」姉に比べ「学科」が少し苦手だった。どうせお馬鹿だもんといって母に叱られた。エレエー又はリン

ゲートにしかめ面をして見せた。

アンドーラの第一王女セシーネは、救貧院院長のキルマ・パラボン侯爵夫人の手になる救貧院の報告書を読んでいた。その報告書によるとキルマのいった通り、ただで泊まれる宿屋ぐらいに考えて救貧院にやってくる人たちが多いのはわかった。しかし、自分では健康だと思っていたものが病気を発見される場合もある。この間、診察した若者はまだ救貧院にいるはずだった。彼の病気に対する治療法は《治療師》ケンナスや従医長のベンダーが試みてはいる。だが、ケンナスもベンダーも内心では「外科手術」を考えていた。肝心の若者は、その決意がつかなかった。手術に対する恐怖心がその原因だった。ケンナスは「眠りの技」を使ってみたらと考えていた。魔術師のガンダスは技をかけて人を眠らせることが出来た。セシーネもその技をかけることが出来た。そのことはケンナスもベンダーも知ってはいたが、彼らは慎重だった。ガンダスの帰りを待とうということになっている。

キルマは救貧院の運営に見事な手腕を発揮しているようにセシーネには思えた。この感想を元大蔵卿のブルックナー伯にいうと、ブルックナー伯はうなずき同意を示した。セシーネは祖母の持参金に「使途不明金」があるのを思い出した。キルマはその調査もしているはずだった。これをブルックナー伯に確かめると、意外な返事が返ってきた。セシーネの祖母の王太后はある「教会」に多額の寄付をしたことが判明したとブルックナー伯はいい、こう付け加えた。わかつているのはそれだけでどの教会かわからないと。

セシーネの記憶では王太后は熱心な「教会」の信徒ではなかった。熱心な信徒はことある毎に教会に足を運び、祈りを捧げ司教や司祭の言葉に耳を傾ける。セシーネは祖母からそう強制をされた覚えもないし、王宮に司教たちの姿を見かけたことがなかった。

ブルックナー伯は第一王女には告げなかったが、国王が「教会」に対してある計略を考えていることを知っていた。メレデイス女王

に「教会税」を廃止され、経済的に打撃を受けた「教会」はいわば王の前に跪いた。

「教会」は、人々の心の安寧を計るためにあるのであって、人々やましては国王を支配するための存在ではないと国王のジュールジス三世は考えていた。それは、ブルツクナー伯も同感であった。

現在の「聖徒教会」の長である大司教は、政治的には無難な人物であった。学究肌で古い教典の編纂や礼拝の復旧に努めていた。不倶戴天の「福音教会」も同様である。王家は今までどちらの教会にも一線を画していた。王太后も同様だったはずだった。ブルツクナー伯は気丈な王太后が病気で気弱になりそこにつけ込んだ司教が司祭がいるのだろうと推測していた。

大蔵卿を努めた経験から「金」が人を動かす原動力になることをブルツクナー伯は知っていた。無論、それが全てではない。全てではないが多額の「金」の動きには十分な警戒をして警戒しすぎることはないと思っていた。多額の寄付を受けるほど王太后の心を動かしたのはどの「教会」なのだろう。

セシーネは「教会」から救貧院に注意を戻した。

「これを読んだ限りでは、飢えて苦しんでいる人がいないのがわかりましたけど、それはキルマ、つまりパラボン侯爵夫人が救貧院へいつてからのことですね。その前はどうかだったのですか？救貧院はその役目を終えたのでしょうか」

「そこですな。陛下も廃止を考えておられたのですが、実際、王都には、困窮者はおらんでしょう。仕事ならいくらでもありますからな」とブルツクナー伯はいった。

ブルツクナー伯の言葉にセシーネはほっと安堵の息をついた。飢えた国民が皆無とまではいえなくても、救貧院に困窮者が大勢押しかけるような事態でない事がうれしかった。この国に富める者もあれば貧しい者もいることぐらいはセシーネも知っている。父である国王はアンドーラが「働けば暮らせる」国にしようと懸命だ。セシーネもその父の理念は間違っていないと思うし、そのために自分に

出来ることは何だろうと考えてみたこともある。亡くなった王太后は、セシーネに王女という身分がただ威張るだけのものではないと、アンドーラのために何が出来るかが大切だとよく言い聞かせた。今の自分出来ることは何であろう？

当初、セシーネはキルマが救貧院の経費を私しているのではないかと疑っていた。だが、それは正反對だった。ずさんだった経営はキルマの手で効率よく運営されていた。

セシーネは、以前、薬草保管庫で見た木箱のことを思い出した。モリカは古い記録だといっていた。そのことをブルックナー伯にいうと調べてみようということになった。救貧院を存続するかどうか閣僚たちの意見も分かれていた。

その調査には救貧院院長のキルマ・パラボン侯爵夫人もあっさり同意した。手が空いたら調べてみようと思っていたと。何がしまつてあるか記録にはなく、何しろ記録が曖昧だとキルマはいった。そして、好奇心旺盛なニドルフ・レンドル子爵も加わった。薬草保管庫の重い扉を開け、中に入った。薬草保管庫の中は薄暗かった。開けた扉からの日の光で、積み重なった木箱がぼんやりと見られた。ブルックナー伯は、一つ開けてみましょうと提案した。セシーネの護衛の近衛兵が二人係りで木箱の一つを持ち上げ、薬草保管庫の外に運び出した。皆が見守る中、ニドルフが箱のふたをこじ開けた。その中には古びた紙が束ねられて入っていた。セシーネはその一つを手にとった。見られない文字のようなものが書き記されている。アンドーラは通常ペンで文字を書き記すが、それは筆のようなもので書かれたようだった。アンドーラの文字より力強い筆跡だとセシーネは思った。ブルックナー伯も手に取り「これは、ひよっとしてラダムスの文字ではないですか」

ラダムスとはセシーネを生んだミンセイヤの生まれた国だった。遠い異国のラダムスをセシーネは名前ぐらいしか知らない。

「わたくしはラダムスの文字を拝見したことがあります、こんな感じではなかったと思いますね」とキルマ

「興味深い、実に興味深いですね」とニドルフ。彼はワクワクしていた。ブルックナー伯がもう一つ開けてみようかと提案した。そちらも同様だった。何故、異国の文字が書かれたものが救貧院の薬草保管庫の中にしまわれていたのかセシーネには謎だった。

ブルックナー伯とキルマはさすがに手際がよかった。見慣れぬ文字に見入っているセシーネとニドルフの手から紙を取り上げると、再び箱の中にしたまった。

「やはり、外務省の通訳官あたりに調べて貰った方がよさそうですね」

「てつきり、救貧院の記録ではないかと思っていたのですが、どうやら、違うようですわね。まったく食事をだした人数も数えていないのですからね」とキルマは前任者の院長を思い出した。中流貴族の出身であるその初老のその女性はキルマから見れば「無能」だった。来るもの拒まずで「施し」を無制限に与えていた。善行を施すことで自分も救済されると信じていた。キルマはその女性にこういつてやった

「そんなことをしたかったら自分のお金でやりなさいよ。国母さまのお金を自分のものと勘違いしているんじゃないの」

キルマの鋭い指摘に彼女は口をあんぐりと開けたままだった。彼女には王太后から年金が約束されていた。それを受け取ると、ある教会の修道院へと移っていった。彼女は救貧院へ寄進もしなかった。意地悪くキルマはこう思った。結局、自分の金はしっかり握るといつ訳ねと。

セシーネは、王宮に戻る馬車の中で、遠い異国からアンドーラに嫁ぎそして死んでいった母のことを考えていた。セシーネには母の顔さえ記憶がない。セシーネにはそれは触れて欲しくない話題だった。自分が母を覚えていないことは、どういう人なのか知りたいと思う反面、知ったところで死んだ母が生き返ってくるわけでもなく、母を失った喪失感が埋め合わせるどころか、むなしい悲しみを増長

させるだけだった。母を失った悲しみより、母を覚えていない悲しみの方が大きかった。

今、王家では先の王妃ミンセイヤの話題が出ることはほとんどなかった。ミンセイヤの病死以前から、その祖国ラダムスンとの国交も絶えてしまった。セシーネは母についてもその祖国についても大した知識は持っていない。乳母のユーリンから聞かされたわずかな事だけだった。父の国王からはほとんどその話題について耳にしたことがなかった。何となく避けた方がよい話題の一つだとセシーネは感じていた。

兄のエドワーズ王太子がヘンリッタ王妃に対してどこか冷淡なのをセシーネは気がついていた。セシーネにはエドワーズの気持ちかわからないでもなかった。でも、それは何か駄々っ子のようにも思える時もあった。王家に生まれても手に入らない物はいくらでもあった。母の思い出がセシーネには一つもなかった。その寂しさは口に出したことはない。それはセシーネの胸の奥にそっとしまわれていた。

救貧院にあったあの記録が生母の祖国ラダムスンのものだったら、少しは母について知ることが出来るのだろうかとセシーネはぼんやりと考えていた。しかし、知ったところで何が変わるのだろうかとも思った。

一方、第二王女のエレー又は、姉の帰りを待ちわびていた。エレー又はどうしても姉に確かめたいことがあった。気になって勉強どころではなくなった。元々姉のセシーネと違って勉強嫌いの王女ではあったが、これは確かめなくてはならない大事なことだった。

エレー又は救貧院に出かけた姉の帰りを待ち伏せることにした。近衛兵の先導で姉の乗っているはずの馬車が戻ってきた。エレー又は、馬車から降りた姉に駆け寄った。息を弾ませながら、エレー又はは一気に用件を言った

「お姉さま、どうしても聞きたいことがあるの」
なんなのと姉は尋ねた。エレー又は周りを見渡し、声をひそめて、

後でお部屋に行つていい？と尋ねた。いいけどと、姉はいいながら、王宮の建物に入った。姉のセシーネは、歩くのが速い。小走りで追いかけてながらエレー又は約束を取り付けた。

夕食後、エレー又は約束通りセシーネの部屋にやってきた。エレー又は二人きりで話がしたいと姉にいった。セシーネの部屋には侍女のナーシャが、部屋の片隅で椅子に腰掛け刺繍をしていた。

ナーシャが部屋を出ていくと、エレー又は、声をひそめてセシーネにこう尋ねた。その質問はセシーネがして欲しくない質問だった。「お姉さまとお兄さまのお母さまってどんな人なの？」

セシーネはしばらく母の違う妹の顔を見つめていた。妹のエレー又は真剣な眼差しでセシーネを見つめている。この妹に誰かが、兄や姉を生んだ母と自分の母が違うことを耳に入れたものがあるのは確かだった。余計なことをとセシーネは腹立たしかった。おまけにラダムスンのもものかもしれない記録が見つかった今日という日にこんな質問をエレー又はがするなんて、何という巡り合わせだろう。

ようやくセシーネは素っ気なくこういった。

「エレー又は、そんなくだらないことを知ってどうするの？そんなことよりちゃんと学科のお勉強をなさい。リディアの方が先に宣誓式をするような無様なことにならないようにね」

エレー又は、答えにならない姉の答えに不満だった。だが、姉は不機嫌そうにエレー又はを見つめ返すだけだった。エレー又ははここでやっと自分の質問が気まずいものだと思つた。

セシーネは妹を部屋から追い出し、自身の勉強に取りかかった。エレー又はの質問は自身がしたい質問でもあった。セシーネは母が遠い国からアンドーラに嫁いできたくらいしか聞かされてはいない。記憶にない母の面影を追うよりもセシーネには目の前の問題を片づけなくてはならなかった。

セシーネの見たところ救貧院はキルマによつてうまく運営されているように思えた。国王が救貧院を施療院に改革しようと考えていることはブルックナー伯から聞かされている。キルマは施療院の設

立に協力を申し出た。今でのところ、キルマは実に協力的であった。しかし、セシーネはキルマが自分を好いていないのは薄々感じていた。人に好かれるために物事を決めてどうするとも思うが、嫌われるのは気分の良いものではない。セシーネはキルマをどう扱っていいか考えあぐねていた。

一方、キルマは迷っていた。第一王女セシーネは、相変わらず救貧院にやって来る。キルマにとって第一王女は扱いにくい存在だった。王女という身分を怖れてのことではない。セシーネの持っている特殊な「能力」がキルマは恐ろしかった。懸命に自分に言い聞かせても精々怖れていることを悟られないようにするのが精一杯だった。女官長の職を辞そうと思ったのも一度ではない。その度ごとに国王や王太后に引き留められ、結局王太后の死を看取ることになった。その後、この救貧院に院長として赴任したわけであつたが、それを引き受ける理由の一つがセシーネから逃れたいという気持ちがあつたのは否めない。それが、皮肉なことに再びセシーネと毎日のように相對することになるとはキルマも予想がつかなかった。あの「能力」さえ除けば、王女とはいえ「小娘」に過ぎないセシーネを「扱う」ぐらいキルマにはわけもないことだった。

アンドーラは論議の盛んな国である。「施療院」の設立を巡って閣僚たちも賛否両論の意見があつたことをキルマは知っていた。だが、国王が設立を決めた以上閣僚たちはその決定に従うだろう。そして「施療院」の設立に熱心なブルックナー伯が、施療院を《治療の技》を広げる場に見たらと、国王に進言していることもキルマは察していた。《治療の技》に関しては、キルマは不思議なことだと思つたが、恐ろしくはなかった。キルマが怖れているのは人の心を見透かすような《見立て》だけだった。そして、キルマ自身の処遇に関して第一王女からはキルマ自身に一任されていた。第一王女はキルマに実に礼儀正しかった。

「パラボン侯爵夫人、王立施療院は、最初はそれほど費用を掛けら

れないと聞いています。それだけではありません。病人の世話は気が張ることです。やりたくない方にまで無理に協力をして頂くのも考え物ですし、失礼ですけどあなたには侯爵夫人としてしなければならぬこともおありでしょう。そちらのご都合も遠慮なくおっしゃって下さい」

そういわれてもキルマにはどちらともいえなかった。第一王女の言葉をそのまま受け取るほどキルマは軽率ではなかった。国王の意向がどうなのか気になった。この国の最高決定機関が誰なのかキルマはよく心得ていた。

アンドーラの貴族たちは国政に関して対応は二手に分かれていた。積極的に関わる者、そして、一線を画して「領地」に引きこもる方と、そして、キルマの夫、パラボン侯爵は積極的な方だった。侯爵家から侯爵家に嫁いだキルマは当初、国政なんて興味もなかったし、女の口を挟むべきことではないと思っていた。思いもかけずに女官長という役職を得てからもそう思っていた。だが、先王のジュルジス二世は当時のエレーヌ王妃に国政に関して意見を求めた。エレーヌ王妃は積極的に意見を述べた。そして、これはジュルジス二世が息子のジュルジス三世に譲位をしても続いた。だが、国王となつたジュルジス三世は、王太后の意見は聞くが、その意見をそのまま受け入れることは稀だった。母親に対する礼を失さない程度にやんわりとその進言をかわした。それが、王太后となつたエレーヌ元王妃の不満だった。すでに父親になつているジュルジス三世を王太后は子供扱いをしようとしているようにキルマには思えたし、王太后はやりすぎたとキルマは思っていた。同じ息子でも国王の次弟のヘンダース王子は母の王太后の前で子供扱いをされても喜々として受け止めていた。

王家の暮らしぶりを身近に見ていたキルマはそこから多くのことを学んだ。女だからといって国政にまったく無関心ではいられなかった。夫は王家、特に国王が何を考えているのか知りたがった。確かに国王の意向を無視して行動するのは愚かだった。いつの間にか

キルマは政治に興味を抱かざる得なくなつた。

救貧院で働いている者たちを取りまとめるくらいは、キルマにとつてそう難しいことではなかつた。ここにいる者たちは侯爵夫人であるキルマに比べて同じ貴族でも身分上はたいしたとことがない。王家の人々と親しく口を利く機会など滅多にない者ばかりだつた。

第一王女のセシーネが毎日のように救貧院にやって来る事態は彼女たちにさざ波のような影響を与えた。特に薬草園の責任者モリカは彼女たちの注目の的だつた。モリカ自身はそうした事態に対処しきれなかつた。しばしば院長のキルマに助けを求めた。キルマは鷹揚に第一王女の相手を努めるようにモリカに命じた。

「王女さまはここへ遊びに来てはあります。お勉強をしてお見えになつて居るのですから、あなたもそれをお手伝い出来ることを光栄に思わなくてははいけませんよ。モリカ」

モリカは不安そうに肯いた。王家の威光をかさにかけることくらいキルマにはわけもないことだつた。今ではモリカはキルマにも十分な敬意を払うようになっていた。だが、そのモリカにも第一王女の《見立て》が恐ろしいとはキルマはいえなかつた。

熟考の上、キルマは王太后の使つた手を使うことにした。救貧院にいる治療師のケンナスにこう提案した。

「見習いのあの子たちの《見立て》の稽古には救貧院にいる者たちを相手にしても構いませんよ。ただ、わたくしは気分が悪くなるのがわかつていますから、やめて下さい。あと体調が悪い者がいたらわたくしに報告して下さい。ここで働いている者たちの健康かどうか知つておくのもわたくしのお役目ですからね」

ケンナスは「協力的」なキルマに感謝の言葉を述べた。キルマは第一王女を除けば救貧院にいる者たちの手綱をしっかりと掴んだ手応えを感じていた。

季節はいつの間にか春が過ぎ夏にさしかかつていた。セシーネの日課は相変わらずだつたが、その周辺には幾つかの変化が見られた。

まず、叔父のランセル王子に王女が誕生した。妃のネリアは王子を望んでいたようだったが、ランセルはそれよりもネリアの初めてのお産が無事にすんだ事に安堵していた。国王からも慰労の言葉がネリアに伝えられた。各種の祝典が華やかに催され、その幾つかにはセシーネも出席した。

セシーネ自身も十四歳の誕生日を迎え、父の国王から乗馬用の馬が一頭セシーネに贈られた。これは、まだ、持ち馬を持つことが許されていない従弟のリングートから羨望の目で見られた。馬の世話を手伝うことを条件にリングートに乗ってもいいとセシーネは約束した。

そして、王太子のエドワーズは立太子礼を執り行ってから毎年、恒例になっているエンバーの行幸へと旅立った。例年と違っていたのは、王太子が甲冑姿で向かった事である。これは道中の安全を懸念してのことではなく、儀礼的な意味合いが強かった。アンドーラの国内は平安だった。

エドワーズがエンバーに向かった次の日、侍女のナーシャのいていたブルグース子爵家の令嬢タチアナが王宮にやってきた。タチアナは彼女自身の十六歳の誕生日をすました後、初めての謁見を控えていた。彼女の頭の中はどうかやら、そのことでいっぱいのように執拗にセシーネにどう振る舞えばよいか尋ねた。セシーネはそれにはナーシャに聞けばいいと答えた。そして、タチアナが第一王女の侍女として仕えることにはこれといって断る理由もなかった。セシーネは承諾した。

ただ、ナーシャもタチアナも医学にあまり興味を示さなかった。この不満をセシーネはヘンリッタ王妃に相談してみたが、王妃は穏やかな微笑みを浮かべながら「中途半端な知識は危険だわ」とだけいった。

「お母さまは女が医学を学ぶのは反対？」

「いえ、そんなことはありませんよ。セシーネには必要な学問だと思いますよ。お勉強ははかどっているの？」

セシーネは思わず苦笑いをした。王妃の口調は王太后によく似てきたとセシーネはふと思った。セシーネは、従医長のベンダーから借りた医学書に取り組んでいた。王妃のいった通り、セシーネにとって医学を学ぶことは施療院の院長に就任するために必要不可欠な学問であった。《治療の技》は、ケガに対してはかなり有効だったが、病気に対してはそれほど効果が見られなかった。少なくともセシーネは《治療の技》で病気を治した経験はなかった。王太后の生前、セシーネが《見立て》で見つけた病気の治療は従医長のベンダーが薬の処方をするのが常だった。セシーネが医学を学ぶことに反対しているように思えた王太后が、何故、施療院の院長にセシーネを指名したかセシーネには疑問だった。王太后の腹心だった元女官長のキルマなら何か知っているだろうかとも思ったが、その機会はなかなか訪れなかった。たとえ尋ねてもキルマはこう答えるだろう。

「国母さまは、アンドーラのために何が必要かよくご存じでしたからね。何しろ国母さまはご聡明な方でしたから」

アンドーラは国王を頂点とする身分制度が敷かれている。その上下関係とは別な序列がある事をセシーネは気がついていて。

例えば、ブルツクナー伯は、鄭重な態度でセシーネに接してくれている。だが、それは“第一王女”に対して敬意を払っているのであって、セシーネ自身の人格に敬意を払ってくれているのかは別問題だった。一人前扱いされない事への不満はある。あるが、何の実績もない自分が周囲から認められるのは「王立施療院」を成功させることだとセシーネにはわかっていて。そのためには協力者が必要だった。セシーネは胸の中で協力者の顔ぶれを数えてみた。成功の鍵を握っているのはまず治療師のケンナスではあるが、それ以外にもブルツクナー伯を始めとする《治療の才》がない人々の理解も必要だった。その中でキルマの態度が気になった。救貧院が施療院になれば救貧院の院長の職にあるキルマは職を失う。形式上はどうであれ、セシーネがキルマを追い出す格好になる。キルマが自分のこ

とを嫌っているように思えるのはそのためかとも思ったが、それだけではないとセシーネは思った。女官長時代からキルマにとって自分は扱いやすい王女ではなかったとセシーネは感じていた。手こずったといっても過言ではない。強情な子だといわれたこともあった。それは、王太后の代弁者としてセシーネにあれこれ指図する時に限られていたが、セシーネにとってキルマと祖母の王太后は一心同体だった。

つまりは、王太后にとって自分は王太后が望んだような王女ではなかったということだ。王太后は素直で従順な王女を望んでいた。その王太后が自分に何をさせたかったかセシーネは気がつき、暗然たる思いを抱いた。それは、「教会」との対決だった。

魔法に関して、教会の見解は宗派によって幾多の相違が見られた。魔法全てを違法とする教会もあれば、女の魔法のみ違法と見なす教会もあった。セシーネは《治療の技》が魔法だとは思わないがそう思う人間もいるだろう。ガンダスがいうように、人は不思議な出来事に遭遇すると魔法だと思いたがる。セシーネにとって《治療の技》は不思議でもなんでもなかった。生まれた時から備わっている《力》だった。そして、兄のエドワーズと違ってセシーネは《力》を使わないと体調を崩す。《力》を隠し通すのは無理だった。それだけはない、セシーネはガンダスの見つけてきた子供たちにも責任を負っていた。当初はおとなしかった彼らも、救貧院での生活に慣れるに従い、ケンナスの手に余るようになって来た。そこに助け船をだしたのがセシーネ付きの護衛ビラン中尉だった。ビランはやんちゃ盛りの彼らをつまく手なずけてしまった。ビランは、軍学校に入学するまで、王宮で王太子のお相手役に選ばれた少年たちの大将格だった。貴族の子弟よりも、ビランにとって彼らはずっと扱いやすかった。確かにセシーネ自身もそのようなことを護衛たちに頼んだ覚えはあった。問題は約束の半年を過ぎてもケンナスの元で《治療の技》を習うかどうかだったが、ビランの話だと男の子たちは兵役につくまで学びたいということだった。これは、セシーネよりブル

ツクナー伯を喜ばせた。セシーネはそう簡単に喜ばなかつた。彼らが残るといふのはそれまでの生活よりも救貧院での暮らしが楽なのではと疑っていた。彼らのほとんどが貧しい身分の出身者であることをセシーネは知っていた。彼らが一人前の治療師になれるまでどの位の年月がかかるのだろう。セシーネは不安だらけだった。

王室付け魔術師のガンダスが旅から戻ってきた。ガンダスらしく一人でフラリと宮殿に現れた。彼の報告をセシーネは国王と共に国王の執務室で聞いた。セシーネはガンダスに尋ねたい事がたくさんあつたが、出過ぎた真似をしないように口をつぐんでいた。

「陛下、ただいま戻つて参りました」とガンダスは宮廷流に国王にお辞儀をしながらいった。以前ランセルがいったように文民服を着たガンダスは、魔術師というより、宮廷に出入りする小貴族か役人のように見えた。

「ガンダス。今回は手ぶらか？」と同じように文民服を着た国王。

「いえ、治療の才のあるものは見つかりましたが何分、少し若すぎましてな。王都へ連れて来るには少し早過ぎると存じまして」

「若すぎるとは？」

「五歳か六歳では若すぎましよう。中には三歳というものもおりました。親元から引き離すには少し若すぎましよう、もう少し、ご猶豫を」という訳だった。

ガンダスを待っていたのはセシーネだけではない。従医長のベンダーと治療師のケンナスも待っていた。春先から救貧院にいるある若者の治療のためガンダスの術を二人は待っていた。その術はセシーネもかけられたが、ベンダーもケンナスも慎重だった。二人はいわなかつたが、それはセシーネが教会から「魔女」の疑いをかけられないようにする配慮なのはセシーネも薄々気がついていて、セシーネ自身は自分が魔女だなんて思つてもいない。ベンダーもケンナスも少し過保護だとセシーネは思った。

国王への報告を終えるとガンダスは待ちかまえていたベンダーに

捕まった。セシーネはまた、子供扱いされ追い払われるかと思つたが、そうはされなかつた。

ベンダーの話を聞くとガンダスは素つ気なく、その術なら第一王女も掛けられるといつたが、ベンダーは

「あんたの方が経験もあるし、すぐ目が覚めてしまつては意味がない。手術の間、眠っているかどうかが重要なんだ。なあ、ガンダス、ちよつとした実験を試してみるのはどうだろう」

ガンダスはベンダーの実験という言葉に興味をそそられたようだった。

その実験は、救貧院で行われることになった。救貧院長のキルマは、医学の発展のためだとブルックナー伯が説得した。キルマは相変わらず気むずかしげな表情で承諾した。だが、肝心の若者は、やはり恐ろしがって、実験を承知しなかつた。そこで、ケンナスが自分に《眠りの技》を掛けてみてはどうかと提案した。

その実験は、キルマの提供した救貧院の一室で、ひっそりで行われた。ガンダスに《眠りの技》を掛けられて眠り込んだケンナスの体をベンダーが色々調べた。この実験は、《眠りの技》を掛ければ、外科手術における痛みを感じるかどうかを確かめることであつた。ベンダーを始め実験に立ち会つた人々の期待に反して、眠っているケンナスは、太腿をベンダーに強くつねられてかすかに身動きをした。ベンダーは失望の色を隠せなかつた。

「これでは、手術に使えるそうもありませんな。ガンダス、もう少し深く眠らせることは出来ないか？」

ガンダスは、首を振り、それは危険だといつた。《眠りの技》を強く掛けすぎると目を覚まさなくなると説明し、眠り込んでいるケンナスを揺り起こした。実験に立ち会つた者たちはこの結果にがっかりしていた。

ベンダーもケンナスも《眠りの技》を掛けて眠らせている間に痛みを感じさせないで開腹手術を行うことが出来るのではないかと考えていた。それが可能なら今まで躊躇していた大きな外科手術も出

来るのではないかと期待していた。期待が大きい分、落胆も大きかった。

実験自体は失敗といってもよかったが、思いもかけぬ事態になった。それまで手術を渋っていた若者が手術をしてくれといい出したのだ。これには、ベンダーを始めケンナスもセシーネも一安心した。肝臓を患っているその若者ペートルの治療法は《治療の技》も含めて色々検討したが、手術が一番確実な方法だとベンダーもケンナスも判断し、ペートルにもベンダーからその説明をしたが、怖がるばかりでなかなか手術に同意しなかった。

これにはブルックナー伯の手腕に因るところが大きかった。簡単にいえば、彼はペートルを脅かしたのだった。その詳細についてはセシーネも聞かなかった。セシーネにしてみれば《治療の技》でペートルの病気を治す事が出来ないことには歯がゆかったが、それでも治療法があることに幾分救われる思いだった。

ペートルの手術は、ベンダーの執刀で行われることになり、行われる場所は救貧院の一室と決まった。この手術にセシーネも立ち会いたかったが、ベンダーもケンナスも許可しなかった。セシーネは第一王女といたって何の権限もないのだと思った。それでも別室で他の子供達と手術の経過を持つことは許された。

この手術については、エラン達も興奮を隠せなかった。これを諫めたのはやはりブルックナー伯であった。

「資格もないのに腹を切り裂いたら、傷害罪になる。勝手にするんじゃない」

「そんなこと考えもしません。本当です」

エランの言葉遣いはこの数ヶ月で随分ましになってきていた。

手術の費用は救貧院の院長であるキルマが頑強に主張し、救貧院の費用で支払われることになった。従医長のベンダー博士は王家や王宮で働く人々を診る他に依頼を受ければ診察や治療を行い、その人たちから多額の謝礼を受け取っていた。これは国王の許可を得ることであった。独身のベンダー自身は従医長という役職から得る

収入で十分だったが、金はいくらあっても足らんと国王自身がそう勧めたからでもある。

金が万事を動かすのではないが、金で思わぬ苦勞をしている人間もいた。エドワーズ王太子である。彼はある計画のために費用の計算に追われていた。父である国王は計画自体の遂行には賛同はしたが、その計画の費用は王太子自身が見積もるように申し渡されてしまった。ブルックナー伯に替わり大蔵大臣の座についたその人物は国家財政に新しい制度を持ち込んでいた。年度ごとに予め予算を組んで計画的に各費用を賄うというやり方だった。エドワーズは自分の計画のための予算書と格闘していた。その予算書の作成にあたり前大蔵大臣のブルックナー伯爵に助力を求めたがやんわりと断れてしまった。それでも大蔵省を定年退官した平民出身の官吏を一人紹介はしてくれた。

アンドーラではエドワーズの祖父に当たるジュルジス二世の代から王国の各省の官吏に平民を採用してきた。重職にこそ就いてはいないが、国家運営の基礎を担っていた。そして、それは王国の男子全員に兵役を課したのと同様に平民たちに王国民であるという意識を植え付けていた。ましては論議の盛んな国である、平民出身のその元官吏は貴族たちに批判的だった。

「まったく、何かという引きをあてにするのですからね。まったく当てになりませんよ。役所に来たり来なかつたりで、仕事も横着というか、だつたら、役所勤めなんかやめればいいんですよ」と実名こそ上げないが齒に衣を着せぬ物言いでエドワーズに大蔵省の内務事情について色々話して聞かせた。多少なりとも医学を学んだエドワーズにとって人の違いは男女の差ぐらいで、貴族だろうが平民だろうが同じ人種だということはわかつていた。エドワーズには身分の差よりも男女差の方が大きかった。叔父のランセルではないが、女という生き物は訳がわからない。まあ、男にとって女性は永遠の謎ではある。その謎であるエドワーズの婚約者はまもなくアンドー

ラに到着することになっていた。

エドワーズは、自分の結婚が純然たる恋愛の結果ではなく政略的なものだとわかっていた。それに対して不満はなかった。むしろ、気が楽だと思っていた。女性の気をひくためにあれこれするのは、面倒くさかった。それでも、しばしば手紙をよこす婚約者のイザベルへは返事の手紙を書くぐらいのことはしていた。書く内容については、叔母のメレディス王女に助言を受けていた。それは主に服装についてであった。エドワーズには何が面白いのかさっぱりわからなかったが、イザベルは興味をそられたようであった。ランセルにいわすとご婦人方はドレスのことになると躍起だからである。エドワーズも同感だった。服装に無頓着に見えるセシーネでさえ、普段の質素な身なりもそれなりに考えてのことらしい。まったく女というものである。

エドワーズが扱いに苦慮する女性の中でその最たるものは、継母である王妃のヘンリエッタである。人柄がいいとか悪いとかいう話ではなく、立場上、複雑な胸中だった。エドワーズは、父親の再婚相手と一線を引くことでその対応をしていた。同じ母から生まれた妹のセシーネがヘンリエッタをお母さまと呼ぶことについても口にしたことはないが何となく抵抗感があった。エドワーズは自分自身にこう言い聞かせていた、女同士だから話があうのさ。

さて、エドワーズが予算書と格闘している間、セシーネも自分の中途半端な立場と格闘していた。医学的にみてまだ、未熟なのはわかっていたが、セシーネは、ベンダー執刀の開腹手術に立ち会えなかったことでベンダーやケンナスに腹を立てていた。この不満を父である国王に訴えてみたが、国王は従医長であるベンダーの判断に任すとセシーネに告げた。結局、セシーネは他の見習たちと別室で待たされることになった。兵役期間中のケンナスの弟子のルシバを赴任先の駐屯地からわざわざ呼び出し、手術に立ち会わせたのに比べ、自分は手術をする部屋にも入れて貰えなかった。セシーネは悔しくてならなかった。祖母である王太后の存命中ならいざ知らず、

自分は王立施療院の院長に就任するのである、それをベンダーとケ
ンナスは子供扱いをしていると憤然としていた。

だが、セシーネは知らなかった。表向きはベンダーの判断という
ことになっているが、国王が許可しなかったのである。国王も迷っ
ていた。王立施療院の設立と第一王女の院長の就任を決意したもの
の、医学にいささか夢中の第一王女に古傷を触られた思いがしてな
らなかつた。第一王女のセシーネに話したことがなかつたが、王太
子のエドワーズと第一王女のセシーネを生んだミンセイヤの母親は、
代々医学者の家の出身者だつた。彼女自身も医学を学んでいた。遠
い異国から嫁ぐ娘に彼女は同行してアンドーラにやってきた。その
母方の祖母に成長するに従いセシーネはそっくりなってきた。黄金
色に輝く豊かな髪と青く澄んだ目、まだ若かつた国王は、その美し
さに目を奪われたことがある。父親として美しく育っていく娘に国
王は心中穏やかでなかつた。女性の価値が美しさだけではないと思
うものの、美しい王女を巡って争い事が起きることは避けたかつた
し、また、セシーネの不思議な《力》も国王にとって頭の痛い問題
でもあつた。

セシーネ自身は、医学を学ぶことは必然性があるというより、医
学という学問に魅せられていた。学べば学ぶほど自分の未熟さとい
うより、学術的に未解明な部分が多いのに気がついていた。《治療
の技》についても、まだまだわからないことだらけだつた。セシー
ネは自分の力の限界を試したかつた。だがその機会はなかなか訪れ
そうにもない。この不満を誰にぶつけていいのかわからなかつた。
以前なら王妃のヘンリエッタに相談したろう。だが、異母妹のエレ
ーヌが、セシーネを生んだのはヘンリエッタではないと知つた今、
ことある毎にわたしはお姉さまとちがう主張し、目を光らしている
ので、何か言い出す機会がなくなつてしまつた。ヘンリエッタが、
実の母親だつたら素直にうち明けられたかもしれない。セシーネは
自分が無邪気な子供ではなくなつたと自覚した。しかし、周囲から
みれば、まだまだ子供だと思われているのもわかつていた。

後になって振り返れば、この時期のセシーネは、ひな鳥が初めて巣から飛び立つように懸命に翼を広げ羽ばたこうとしていた。それとも、幼虫がさなぎになり成虫に変わるように苦しみがいていたとでもいうべきか……

手術の間、どこかイライラしている第一王女に比べ、救貧院院長のキルマ・パラボン侯爵夫人は悠然としているように見えた。キルマにしてみれば、手術が成功しようがしなかるうがどちらでもよかった。手術が成功してもベンダーの名声が上がるだけで、何の得にもならなかった。ただ、ベンダーに幾ばくかの金貨を払うことによつて別な人望が上がるのを計算してのことであつた。手術を受ける若者はすでに手なずけてある。ガンダスの連れてきた治療師の見習たちも同様である。長年、女官長を努めていた彼女にとつてそれは簡単なことであつた。何でも一番でなければ気が済まない王太后はすでにこの世を去つた。キルマ自身は一番になるよりも陰になつて動くことが気性に合つていた。一番になるということは人のねたみを受ける場合もある。そのいい例が陸軍の人事である。現在のアンドーラの陸軍の基礎を築いたヘンダース元帥の亡き後、その地位を受け継いだのは、陸軍兵学校の第一期卒業生である。彼の卒業時の成績は一番ではなかつた。

そしてまた、アンドーラの女性として席次の一番上位にいるのは王妃である。それは謁見の時の式次第で決まっていることだつた。子爵家から王妃になつたヘンリエッタについては色々なうわさ話を耳にするが、キルマは聞くだけでうわさ話を自分からしたことがない。口は災いの元とよく心得ていた。ただ、王太后の存命中はそうはいかなかつた。王太后はうわさ話が好きであつた。そのうわさ話を集めてくるのは女官長だつたキルマの役目だつた。無論、逆にうわさを広める場合もあつた。キルマは身近に仕えていて王太后の人となりをよくわかつていた。うわさを鵜呑みにするほど王太后は愚かではなかつたし、うわさを無視するほど迂闊でもなかつた。巧みにうわさを利用し、王家はもちろん王太后自身の人望を高めていた。

王国を統治するという政治的な観点からみて人望も大切な要素である。統治者の妻としてあるいは統治者の母として王太后は優秀であった。それは認めていいとキルマは思っていた。だが、王太后とて完璧な人間ではない。欠点も多かった。その一つが人の好き嫌いが激しかった。王太后は自分の機嫌を損ねるような人物を徹底的に嫌った。人として当然の心理ではあるが、キルマにはおべっかつかいを集めているように思えた。その点、息子の現国王は違っていた。ある時、キルマは反射的に国王にさすがだと誉めたことがある。国王はすかさず「世辞はいい。世辞を聞くために国王になったのではない。ただでさえ自惚れの強い男だと思っておるのに、これ以上自惚れさせてどうする？自惚れは足元を危うくするだけだ。わたしが聞きたいのはむしろ、苦言だな」

これを聞いて、キルマは心の中でさすがだと思った。この時、キルマは女官長として仕えるべきは王太后ではなく国王なのだと思いを強くした。そして、それはキルマの心の負担を軽くした。キルマは王太后に屈折した思いを抱いていた。同じ女として持てるものの違いを見せつけられていた。どこか敗北感があった。それがいつの間にか消え去り、王太后の死の直前には深い同情心がわいていた。人の一生を勝ち負けで評価しても仕方がなかったが、王太后の死を看取ることによって、キルマは何となく彼女に勝ったような気がした。長寿も人生において勝利といえるのかもしれない。

さて、話は救貧院の院長室に戻る。キルマは手術の結果を自分の院長室で待つことにした。これは、キルマの得意分野、権謀術の計算の結果そう判断したことである。女官長時代、従医長のベンダーよりも役職の席次はキルマの方が上だった。救貧院の院長となった今、席次としてはキルマは、ベンダーよりも少し下になる。だからといって、風下に立つつもりは毛頭なかった。

この手術が失敗に終わってもキルマの体面に傷がつくことはなかったが、多少は成功して欲しかった。これは金銭的な面を考えてのことである。キルマは、ベンダーに報酬を払うことを約束していた。

自分自身のお金ではないが救貧院を預かっている以上、財政もキルマの責任である。キルマは、あのペートルという若者が健康を取り戻したら、救貧院で働いてもらおうと考えていた。どのみち職のない彼を救貧院で働かせてもどこからも苦情が来るわけでもない。あの程度の裁量権はある。王太后の設立した救貧院は今まで女性だけで運営されていた。しかし、男手も必要ではないかとキルマは感じていた。

院長室の扉をノックして修道服を着た救貧院の職員が入ってきた。机の前に座っているキルマに向かって膝を折ってお辞儀をする。キルマは軽くうなずいただけだった。

「手術が終わりました。院長」

「それで？」

「手術は成功したそうです」

「まだわかりませんよ。ともかくベンダー博士にはご苦労様とお伝えして。それから、博士に院長室でお茶を差し上げたいからその用意をして。王女さまもお声をおかけしてもちろん、ブルックナー伯にも」

「畏まりました」職員は、再びお辞儀をすると院長室を出ていった。キルマは、救貧院で働く修道女たちを職員と呼んでいた。元々は聖徒教会の修道院だった場所を王太后は王太子妃時代に救貧院に変えたのであるが、働いているのは創造主に誓いを立てた修道女だけだった。救貧院の院長に就任してまずキルマがしたのは、ここにいる修道女たちの意識改革だった。その一つが部下を職員と呼ぶことだった。国王はまるで役所だなといって笑ったが、キルマは救貧院の報告書が国務省の民部局に送られている点をそれとなく指摘した。国王は片方の眉を上げただけだった。

しばらくすると、先ほどの職員に案内されてセシーネたちが入ってきた。キルマは椅子から立ち上がり、一同を出迎えた。各自に椅子を勧めながら、キルマはサツと視線を走らせ彼らの表情を読み取った。疲れた表情のベンダー、ホツとした表情のケンナス、相変わ

らずおどけた表情のガンダス、喜色円満のブルックナー、ここまで
は、予想通りと聞いていい。そして、無表情なセシーネにキルマは
内心オヤと思つた。お茶が運ばれてくる前に口火を切つたのは、ブ
ルックナー伯だつた。

「手術は大成功でしたよ、キルマ夫人」

「まだ、わかりませんよ。失礼なことを申し上げるつもりはありま
せんけど、ベンダー博士、こういつたことは術後が大事ではありま
せんか」とキルマはベンダーと目を合わせた。ベンダーは目をそら
せ軽くうなずいた。

「お厳しいですな、術後と申しますと、どういつた点に気をつけれ
ばよろしいのですかな。ベンダー博士、後学のためにお聞かせ願
いたいですな」

キルマはにが笑いをしそうになつた。大蔵大臣の職を辞した後、
ブルックナー伯は、王立施療院の設立のため走り回つていた。《治
療の技》だけでなく医学にも興味津々である。それを国王がからか
うと自分は長生きをしたいのだといつた。

手術後の注意点を話すベンダーの様子をうかがいながら、キルマ
はそれとなくセシーネをうかがつた。相変わらず仮面を被つたよう
に無表情だつた。それは儀式用の顔だつた。元々は表情が豊かな子
供だつた。それを式典のために表情を消すことを覚えさせたのは、
国王だつた。王家に生まれたものはいつまでも子供じみた振る舞い
をすることは許されなかつた。

いつもならこういつた場合、ベンダーたちをあれこれ質問せめに
するのにこの日のセシーネは、口を開こうとしなかつた。替わりに
質問役はもつぱら、ブルックナー伯だつた。

儀礼上、お茶のおかわりをキルマは勧めたが、ブルックナー伯が
セシーネにそろそろお暇しましょうと声を掛け、セシーネが椅子か
ら立ち上がった。キルマは忘れないうちにといつて、ベンダーに用
意してあつた金貨の包みを差し出した。ベンダーは一旦躊躇したが、
ブルックナー伯が「何、金はいくらあつてもたらんぞ」といつと、

ベンダーは包みを受け取った。ガンダスがおどけたように「わたしも頂きたい」と手を差し出した。

「なにしろ、病人を眠らせたのは、わしじゃからな」

「魔術にお金を払うなんて聞いたことありませんよ。第一、あなたなら、金貨を魔術で作り出せるでしょう」とキルマは言い返した。

「何、それは、陛下に禁止されておるんじゃない」

「ほう、魔術で金貨を作れるのなら、国家財政のために一つお願いしたいですな」とブルックナー伯。

「ホントは出来ないのじゃ」

「それは、残念だ」

ベンダーがもう一度、病人の様子を診たいと言い出し、キルマも病室に当たった部屋を見に行くことにした。ペートルはグッスリ眠っていた。ベンダーがペートルの脈を診て軽くうなずくと、今度は、ケンナスがペートルの手首を握った。ケンナスの目が遠くを見るような目つきになり、キルマにはケンナスが《見立て》をしたのがわかった。

「順調ですよ。ベンダー」

「まあ、これからだな。わたしは取り敢えず宮殿に戻るが、後のことはよろしく頼む。キルマ夫人もよろしく願いますよ」とベンダー。キルマはうなずいて「わかっています。出来るだけのことではましよう。明日もこちらに来るんでしょう」

「急用がない限り」

キルマは再びうなずいた。セシーネの方を横目でチラッと見ると、相変わらず、儀式用の顔をしていた。

そして、ブルックナー伯に急ぎ立てられるようにセシーネとベンダー、ガンダスは宮殿に帰っていった。

セシーネたちを乗せた馬車を見送った後、キルマは、セシーネの様子が気になって、やはり見送りに出てきたケンナスに話があるから手が空いたら院長室に来るように告げた。

一時間ほど立った頃だろうか院長室にやってきたケンナスにキル

マは「第一王女さまは機嫌が悪かったと思わない」とたずねた。ケンナスは意外そうな顔をして「王女の機嫌が気になるのですか」と聞き返した。

「難しい年頃ですからね」

「確かに、多分、手術に立ち会えなかったのが不満なのでしょう」

キルマもそうではないかと思っていたが、気になったのは、セシーネの態度だった。幼い時からセシーネは、癩癩持ちというほどではないが、どちらかというと感情を表に出す方だった。不満があればはっきりと口にした。それは、亡くなった王太后に対しても同じで、口達者なセシーネは王太后を言い負かすことすらあった。どこかおっとりしている王太子のエドワーズに比べ、セシーネはどこか早熟なところがあった。キルマも一男一女を持ち、心あたりがあった。兄に比べ、妹の方が、大人びるのが早かったように思えた。しかし、なんだか気になった。

王女の義務と特権（前書き）

セシーネのいらだちは剣術と乗馬で多少解消されるが、なかなか《治療の技》を試みる機会には巡り会わなかった。そんなある日救貧院に向かう道で事故にあった馬車引きを見つけるが…

王女の義務と特権

セシーネは様々な不満のはけ口を武術の稽古に費やすことにした。アンドーラの王家では、女性でも武術が奨励されていた。それは、現国王の代に始まったことではなく、メレデイス女王の代から女性でも剣をとることがあった。史実では女王自身が剣をとるのは儀式だけの時だったが、女王の名を受け継いだメレデイス女王は、武術が好きだった。セシーネ自身も気がついたら、剣をとり、乗馬をこなしていた。自分付の侍女であるナーシャが武術に関してまるでダメなのを気がついて驚いたことがある。

「自分で自分の身を守れなくてどうするの。それでも武官の娘だといえるの」

セシーネの指摘にナーシャは口ごもり、もう一人の侍女のタチアナはズボン姿のセシーネをあっけにとられたような顔をした。タチアナの関心はいかに自分が女らしく美しく見えるかだった。セシーネの男装に批判的なことを口にした。「そのような服は王女さまのご身分にふさわしくないではありませんか」

「馬鹿なこといわないでよ。馬に跨るにはこっちの方がいいわよ。まあ、あなた達に無理に勧めないけど」とセシーネは「フィード」と名付けた、国王の父から贈られた馬にブラシを掛けながらいった。タチアナは王宮に来た当時、馬に近づくことさえ怖がった。セシーネは、あきれたが、これにも王女と貴族の娘の違いを感じた。だが、実際のところは「家風」の違いであろう。同じ王女でも、他の王家では、それほど武術をたしなまない。エドワーズの婚約者メエーネのイザベル王女は、武術の訓練は眺めることは好きだったが、彼女自身はほとんどしたことがなかった。

ナーシャにもいったことだが、自分の身を自分で守るといって考えは、セシーネが祖母の王太后と意見の一致をみた数少ない事項でもある。ある意味で、近衛兵に守られている王女に武術は無用に思え

だが、セシーネは体を動かすことが嫌いでなかった。

当然のことながら、剣を構えるのがやっとの初心者ナーシャやタチアナでは稽古相手にならない。セシーネの稽古相手には第一王女付の近衛隊長のピランが務めている。朝起きてから朝食までの間、セシーネはもっぱら剣術に励んだ。セシーネの傍らには末弟のランセル王子を相手に組み打ちをしている国王の姿があった。

「まるで、軍学校だな」とランセルは額の汗を拭いながらいった。

「叔父さま、軍学校には女性がいないわよ」

「セシーネは、ヒョツとして男に生まれたらと思ったことはないか」「別に、どちらでも同じよ」とセシーネは肩をすくめた。セシーネの不満はベンダーやケンナスが自分を子供扱いすることであって、女だからといって差別をされた覚えはなかった。

「俺は違うと思う。まったく、ネリアのやつまだいっていやがるんだ。王女だって、王家には必要さ、そう思いませんか、陛下」

「まあ、そうだな」と国王は曖昧に答えた。国王自身は、最初の結婚で王子と王女、二度目の結婚で王女を二人設けている。これが逆だったら、厄介なことになるのはわかっていた。今の王妃は物わかりのいい王妃であったが、自分が王子を生めば、妙な野心を抱くかもしれない。アンドーラは王女でも王位継承権があるが、やはり、男子優先である。女王を戴くに賛同しない連中もいる。国王ジュルジス三世の世継ぎであるエドワーズは立太子礼も無事すませ、後継者を巡っての血なまぐさい争い事は皆無だった。後継問題で揺れる隣国のサエグリアに比べてアンドーラの王家は、表面上はのどかであった。

和やかに見える王家の朝食の席で、一見、物騒ないでたちだったのは、王太子のエドワーズだった。エンバーから戻ってくると、エドワーズは、重い金属でできた重騎甲冑を脱ぎ、今度は大部分が革でできた軽騎甲冑を着込んでいた。これは、彼のある計画に必要な装束であった。彼の計画とは、王太子主催の「鹿狩り」である。この計画に関しては、すでに父である国王の許可ももらっていたし、

普段は厳しいことをいう叔父のヘンダーズも珍しく、彼を誉めたのである。外見に反して王太子殿下の機嫌は上々であった。自然と軽口もでる。妹の第一王女のズボン姿をついからかいたくもなる「なんでそんな格好しているんだ、セシーネ」

「いいでしょう、ほつといてよ。謁見の日じゃないんだから、好きな服を着たつていいでしょう」と気分があまり上々とはいえない第一王女。そこへ第二王女が口を挟んだ

「わたしはそんな格好しない。お姉さまと違うもの。なんだか男の子みたい。変なの」

セシーネは妹に一言なにかいい返したが、その代わり儀用の顔を作った。セシーネにはエレーヌの当てこすりがわかっていいた。エレーヌのいうお姉さまと違うというのは母が違つたという意味であるぐらいセシーネにはわかつていた。そこへランセルが混ぜ返した「まさか、女官長殿、新しい礼装とは、ご婦人方にドレスではなくズボンを履かせることではないでしょうね」

「まさか、馬鹿なことをいわないで」と女官長でもあるメレデイスがいった。メレデイス自身もしばらくズボン姿で過ごした時期もあったし、重騎甲冑こそ持つていなかったが、軽騎甲冑は以前あしらえて持つていた。メレデイスは服装に関しては、時と場所を選ぶべきだと考えていた。普段は簡素な仕立ての服だったが、各行事では華やかに装うことが好きだった。その落差が大きいほど、正装した時の効果があることを知つていた。そして、その効果を十分楽しんだ。王宮に侍女としてやつて来た、メレデイスの兄弟たちの妃たちもメレデイスの助言でずいぶんと垢抜けてきた。王家の一員である以上、貴族たちよりも美しくなければならぬ。メレデイスは女性の価値が美しさだけではないとは思つが、美しい女性を嫌う男はいないとも思つていた。そして、姪の第一王女は彼女にとって腕の振るい甲斐のある素材であつた。何しろ、女のメレデイスからみても嫉妬に駆られるほどの美少女だった。

国王は、第一王女のズボン姿に妙な既視感にとらわれていた。

妹のメレディス王女もそういった時期があった。母親である王太后が諫めたが、メレディスの男装は、父である先王のジュールジス二世を面白がらせた。剣を与えるだけでなく、わざわざ、軽騎甲冑まで誂えるということまでした。国王が、第一王女に馬を与えたのは、武術好きなメレディスがそう進言したからである。乗馬も出来ない王女なんてアンドーラの王女らしくないとメレディスはいった。自分もその年の誕生日に父親から馬を贈られた事実を指摘した。それで、セシーネ王女に何を贈るか頭を悩ませた国王は、馬を第一王女に贈ることを決めた。実は、国王自身も乗馬は嫌いでなかった。その乗馬を巡って言い争ったことがある武官が今は陸軍の最高位にしている。ガナツシュ・ラシユール陸軍元帥である。かつて、国王は、王国軍の近代化に努めた今なき大叔父のヘンダース王子から軍学校での彼のあだ名を聞いたことがある。それは「文句屋」である。その齒に衣を着せない物言いが気に入って、ガナツシュを今の職に就けた。大叔父は、死の直前まで陸軍元帥の職に就いていたが、後任については何人かの名を挙げただけであった。その中に国王の末弟ランセルの名もあった。大叔父は何かと逸話の多い人物であったが、軍事面では天才的な力を発揮した。現在、国王の座に安心して座っていられるのも大叔父の尽力によることが多いことも国王はわかっていた。そして今、その陸軍での後継者「文句屋」は、報告書の束を部下に持たせて、国王の執務室にやってきた。いつものように国王は椅子に掛けたまま敬礼を返すとガナツシュ元帥にこれも、いつものように「掛けたまえ」と声を掛けた。ガナツシュ元帥はいつものように「失礼します」といって、椅子に腰掛けた。

「なあ、ガナツシュ、鹿狩りについてはどの程度聞いている」

「王太子殿下の主催ということぐらいは伺っておりますが、小官が思いますに何故、陛下ご自身の主催でなさらないのです」と、相変わらずの「文句屋」らしい一言をいった。

「ここだけの話だが、実は、弓術はそれほど得手ではない」

「ほう、それは存じませんでした」

「わざわざ、その話を広めなくてもいいぞ」

ガナツシユ元帥はちよつとニヤリとしただけだった。国王が気にいっているのはその武官らしいさっぱりとした気性である。国王に対してもおもねることがない。

「ところで、大蔵卿とはうまくやっているか」

「まあ、やりにくいのはあちらの方ではないでしょうか、あれの軍歴など大したことはありません」

ガナツシユ元帥のいう、あれとは大蔵卿のことである。大蔵卿は、ガナツシユの兄の息子、つまり、甥である。この人事に対して、色々喧噪があるのを国王は知っていたが、知らん顔をしていた。国王はいつものように報告書に目を通すと、今度は、口頭での報告を促した。

ジュルジス三世が即位してから、もう、先王以上の治世が続いていた。先王と違って、ジュルジス三世自身は国政を執ることが苦ではなかった。即位当時ほど細かい指示は出さなくなったが、それでも、王国内外の事情について細かい報告はさせている。即位以来、アンドーラに大きな戦乱はない。ランセルにいわすと、陸軍の相手になるのは鹿ぐらいである。陸軍元帥との会話も自然と王太子が計画している鹿狩りの話になった。

「王太子は、海軍の連中も呼ぶつもりだそうだ。どう思う」

「海軍でございますか、陛下」と一旦言葉を切り元帥は考え込む表情になった。

「提督はなんと申しておるのですか」

「それが、結構自信ありげだったそうだ。陸軍としてはうかつか出来ないな」

「問題は、騎射でございましょう」と陸軍元帥は事も無げにいった。さて、その鹿狩りである。エドワーズはその行事の予算書を何とか作り終わると、今度は「下見」の計画を練り始めた。たかが、鹿狩りであるがこれも大事な軍事訓練であると王太子付の武官が主張した。そして、かなり危険性を伴うことも指摘した。エドワーズは

危険なことを怖れては何も出来ない」と反論した。文弱な家風ではない。叔父二人は、それぞれ海軍、陸軍に属し、エドワーズからみれば誇らしげに軍服を着ているようにも思えた。近頃、エドワーズが甲冑を着込んでいるのはそういった面もある。自身にはその義務はないが兵役義務期間の二年間は甲冑姿ですごそうとエドワーズは考えていた。そして、鹿狩りが軍事訓練の一種なら、自分も積極的に参画すべきことだと思った。まあ、色々理屈もあるが、実のところは同じ弓を射るのではなく実戦で試してみたいというあたりが本音であろう。武術の稽古も自信がつけば腕を試したいという気持ちにもなる。

一方、腕を試したくてもなかなかその機会に恵まれない第一王女は、父から贈られたフィードに跨って、つまりズボン姿のまま救貧院に向かった。人通りの多い町並みを抜け、チェンバー川に架かる橋を渡ると、後は救貧院まで一本道だった。セシーネはフィードに全速力を命じた。護衛の近衛のビランたちが慌てて追いかけてくる疾走するフィードに身を任せ、セシーネはなぜだか開放感を味わっていた。体に当たる風が心地よかった。ふと、なぜ、今まで、こうしなかったのだろうか。セシーネは思った。こんな楽しいことをタチアナは怖がるのだ。医学書の人体解剖図ですら、タチアナは気味悪かった。ましては、手術の話をして、青ざめるだけだった。ナーシャの方は、タチアナほどでないが、医学には無関心といってもよかった。彼女たちに、セシーネは、なんだか物足りなさを感じていた。それにしてもフィードの足はすばらしい。ビランたちの馬はなかなか、セシーネに追いつかなかった。

セシーネがフィードの手綱を引いたのは、前方になにやら人だかりらしきものを見つけた時だった。フィードが徐々に速度を落とし、やがて、人垣から三十m位手前で立ち止まった。ビランたちが追いついてきた。この辺りは、あまり人通りはあまり多くない。ここまでする時にすれ違ったのは、王都に農作物を売りに来る農夫たちの荷車ぐらいだった。それが、道をふさぐように人が集まっている。

何だろう。

「姫、ちよつとお待ち下さい」とビランが息を弾ませていった。

「何かしら」

「今、調べてきますから、このままでお待ち下さい」「ビランは部下の一人に「何があつたか調べてこい」と命じた。近衛騎兵が一騎、人垣の方に向かった。セシーネは辛抱強くフィードの上で待った。その間、近衛騎兵がセシーネを守るように取り囲んだ。

前方の偵察から近衛騎兵が戻ってきた「どうやら、荷馬車が倒れて下敷きになったものがあるようで」

セシーネは前を塞いでいるビランに「ビラン、ちよつとどいてちよつだい。様子を見たいわ」と声を掛け、フィードを前に進めようとした。ビランは動こうとせず「姫、危ないですから」

セシーネは言い返した「何が危ないのよ、いいからどいて」最後は「命令よ」と付け加えた。結局ビランはセシーネと並んで大騒ぎの渦中に近づいた。

横倒しになった荷馬車の下から、男たちが下敷きになった男を引っ張り出そうとしていた。だが、荷物を満載した荷馬車が重くてなかなかうまくいかない。

「ビラン、手伝ってやりなさい」といいながらセシーネはフィードから降りると「それと誰か救貧院へいつてけが人が出たからといって大急ぎでケンナス先生を呼んで来なさい」そしてフィードの手綱を護衛の一人に渡した。「フィードに乗せて先生をつれてくるのよ」

「しかし、王女さま、」「これは、命令よ」「フィードの手綱を持った近衛騎兵は上官のビランをみた。ビランは覚悟を決めると馬から降り、てきぱきと指示を出し始めた。

ビランの指示で、荷馬車の下から男が助け出され、道路の端に横たえられたのは、二十分ぐらいたった頃だろうか、セシーネは、助け出されうめいている男に近づきひざまずくと男の手首を握り《見立て》をした。

「右の大腿骨が、折れているわ、後、肋骨が何本か、ひびがはいっ

ているわ」

男は怪訝そうにセシーネをみた

「わたしは医学を学んだの、今わたしの先生を呼びにいつているから、ここでおとなしく待っているのよ」

「動こうにも動けやしません」

「いつたい、何があったの」

「いきなり、狼が飛び出して来たんで、」

「この辺りには、狼はいないぜ、狐だろう、しかし、あんだ、運がいいぜ」とビラン

「これのどこが運がいいんだ」

「馬は、足の骨を折っていないぜ」

男はホツとしようだった。この間に、近衛騎兵によって横倒しになった荷馬車が元に戻され荷駄がもう一度積み込まれていた。

ケンナスを迎えに行った護衛が、戻っていたのはその十分後ぐら이었다。ケンナスはフィードから降りてくると「けが人が出たそうだが」といいながら、人垣をかき分けてきた。セシーネは自分の《見立て》をケンナスに伝えた。ケンナスは険しい顔をしてうなずき、男の側にひざまずいた。ケンナスはまず、男の右足のズボンをナイフで切り取り、従来の医学的な診察を行った。ケンナスに患部を押されて男が悲鳴を上げた。その後、《見立て》をした。痛みに喘いでいた男は《見立て》の不思議な感覚に気がつかなかったようだった。

「セシーネの《見立て》通りだな。取り敢えず、救貧院へ運ぼうか」

「そんな必要ないわ」とセシーネはキツパリというと、物言いたげなケンナスに小声でささやいた「今こそ、治療の技を掛けるべきよ」
しかしとケンナスはためらった。

「先生がやらないのなら、わたしがやるわ」

「それは、どうかと思うね」

セシーネは辛抱強く慎重なケンナスを説得した「先生、骨折が治

るまで、一ヶ月以上かかるわ。その間、多分、彼は仕事を休まなくちゃいけないわ。でも、治療の技をかければ、すぐに働けるようになるわ。違う?」

ケンナスはため息をつく、「わかったよ。ビラン、すまないけど見物人を追っ払ってくれ」

「了解」とビランは敬礼をすると「さあ、見せ物じゃないだ、いった、いった」

ケンナスは、最初は荷馬車の下敷きになった男を助けるために集まり、そして、今はこの成り行きに興味津々で残った人々が立ち去るまで待った。やがて、道ばたに横たわった男の周囲にはケンナスとセシーネとセシーネの護衛の近衛騎兵だけが残った。

ケンナスはまず、男の折れた右足を正常な位置に戻した。男がうめいた。ケンナスは患部に手を当て大きく息を吸うと治療の技をかけ始めた。

「痛みがなくなっていく」と男は驚いた声を出した。

「いいから、黙っている」ケンナスの額に汗が浮かんだ。セシーネは息を殺すようにしてケンナスの様子を見守った。ケンナスは男の太腿から手を離すと

「今度は、肋骨の方だな」といって、男の胸元をはだけた。「セシーネ、ちょっと手を貸して」

セシーネが右手を差し出すとケンナスがその手を左手で握った。

ケンナスの右手は男のひびの入った肋骨あたりにあてがわれている。右手から伝わる感覚でセシーネはケンナスが《見立て》をしたのがわかった。セシーネは右胸に痛みを感じていた。その時、セシーネは自分の《力》が引き出されていくのがわかった。痛みを感じていた右胸の肋骨あたりが暖かくなり、痛みが和らいだ。ケンナスがセシーネの手を離れた。男が目を丸くして「息をしても痛くない」

「起きあがってもいいぞ」とケンナスは、男に手を貸し立ち上がった。

「いったい、どうなっているんだ?」と男は首を傾げた。ケンナス

が口を開く前にセシーネは「新しい治療法よ。ところで、ケガが治ったんだから、先生に治療代を払うべきだとおもっわ」

「セシーネ」とケンナス

「ケガの治療をしたのだから、当然、払うべきよ、いくら払える？」

「あの、あつしは金は持つていないんで」

「でも、お酒は飲むのくらいのお金はあるんでしょ」男の息は少し酒臭かった。男は自分を取り囲んでいる甲冑に身を固めた近衛騎兵を不安そうに見回した。ケンナスが

「ズボンを切り取ってしまったからな。それで、あいこだ。もう、いっていいぞ」

男は自分の荷馬車に駆け寄った。

「ちよつと、お礼ぐらいいいなさいよ」

男は荷馬車の御者台に乗ると荷馬に鞭を当て逃げるように走り去った。

「追いかけますか」とピラン。

「まったく、助けてもらって、お礼もいわないなんて、失礼よ」

「まあ、驚いたんだらうよ」とあきらめ顔のケンナス。

「治す前に、金をもらっておけばよかったですか」とピラン。その言葉に近衛騎兵が笑い出した。ケンナスも笑い出した。セシーネもむきになった自分が何だがおかしくなって笑い出した。

笑いが収まると、歩いて救貧院に戻るといふケンナスをピランは自分の馬の鞍の後ろに跨がせると「姫、全速力はなしですよ」といってから、先頭に立った。

救貧院の門を過ぎると見習の子供たちが走り寄ってきてセシーネたちを取り囲んだ。ケンナスはピランの馬から飛び降りると「さあ、遊んでいないで、授業だ」

「先生、けが人はどうなってますか」

「何、大したことはない」

セシーネは出迎えに出てきた救貧院の院長の前にフィードを横づけ、フィードから降りた。セシーネのズボン姿にキルマは何か言い

たげだったが、

「おはよう、キルマ」とセシーネは、にこやかに声をかけた。キルマは、軽く膝を折る高位に対する礼をしてから「けが人が出たということですが」

「それだったら、もういいの。大したことなかったわ。ところで、ペートルの様態はどうかしら」

「ベンダーが診察して、しばらくは安静にしているように」

「そう、ベンダー先生はまだ、いらっしやるかしら」

従医長のベンダーは、朝、国王の検診を終えると国王に許可をもらい、救貧院へ昨日手術をしたペートルの容態を確かめに来ているはずだった。不思議なことに、セシーネの腹立ちは治まっていた。

ケンナスが治療の技をかける時、セシーネの《力》を使ったことで、体の中に沸々とたぎるような感覚はきれいさっぱりなくなっていた。

ベンダーは、ケンナスが「授業」に使っている部屋にいた。キルマが追いかけてきて「王女さま、お話があります。院長室へどうぞ」といった。

「今じゃないといけないかしら、パラボン侯爵夫人」とセシーネはまた、儀式的の顔を作った。

「早いほうがいいでしょう」

「そう、わかったわ」

院長室にはいるとキルマはセシーネに椅子を勧めた。セシーネが椅子に腰掛けるとキルマは失礼しますといつてから自分も椅子に腰掛けた。セシーネはキルマの話が見当がついていた。

「お話って、この格好のことかしら、それとも、けが人のことかしら」

「けが人はどうなりましたか」

「それだったら、ケンナス先生に聞いて下さい」

「わかりました。ところで、王女さま、その服装は、いかがと思いますね」

「そうかしら、でも、乗馬にはこちらの方が、都合がよろしいの。」

スカートだと足が丸見えになるでしょう。大丈夫よ、メレデイス王女さまのように、甲冑まで着ようとは思わないから。後、礼装が替わるといつても、ご婦人方にズボン履かせようなんてことにはならないと思うわ」

「しかし、いかがと思いますね」

「だから、馬に乗るにはこの方がいいだけ、他に理由なんてありません。第一、乗って欲しくなかったら、陛下はわたしに馬なんか贈らないと思いますけど、ともかく、陛下はこの格好に何も仰せになりませんでした。この話はこれでお終い。これから、救貧院へはフイードに乗ってまいりますから、そのおつもりで」

「フイード？」

「わたしの馬の名前です。そんなことより、誰か、医学に興味がありそうなご婦人はいらっしやいませんか」

「どういうことです」

「パラボン侯爵夫人、以前にも申し上げたと思いますが、わたし付けの侍女なら、できれば同じことを楽しいと感じるような人じゃないと長続きしないと思います。そうね、ナーシャもタチアナもどこが悪いといっているではありません。でも、薬草の名前ぐらい覚えようとなぜしないのかしら」

「その点がご不満だと」

「そうね、ここだけの話にして下さい。パラボン侯爵夫人」

「わたくしのことは、キルマで結構です」

「そう、だったら、わたしのこともセシーネで結構よ」とここでセシーネは儀式用の顔から一転してにっこりと微笑んだ。

「それでは、示しがつきません」

「そう、以前はそう呼んでいたじゃない。キルマ先生。あなたからは、色んなことを教えて頂いたわ。改めてお礼を申し上げます。後、お説教をしたかったら、セシーネと呼ぶのね」とセシーネは席を立った。

キルマは、相変わらず口達者な第一王女に舌打ちしたい気分だった。

た。キルマがセシーネを院長室に呼んだのは無論、服装について注意しようと思つたからである。しかし、セシーネは言い逃れを国王に求めた。まあ、先王ほどではないが、父親というのは、大概、娘に甘いものである。しかしである、キルマはセシーネの侍女に対する不満もはつきりと聞いた。キルマは、第一王女の注文通りの医学に興味がありそうで王女の侍女を勤められるような貴族の娘たちには心当たりがなかった。再び、舌打ちしたい気分になる。以前、侍女に推挙したエランダ・コンラッド侯爵令嬢は、見事にしくじつた。そして、キルマは、エランダが、まだ、謁見をすませていなかったことを思い出した。それは、女官長のメレディス王女が式部省に手を回した結果だった。コンラッド侯爵夫人から相談を受けたキルマは、礼装が替わることをそれとなく伝え、それからでも遅くないと、いつてコンラッド侯爵夫人を安心させた。コンラッド家はキルマの持ち駒の一つになった。キルマは、頭の中で、他の貴族の各家の娘たちの顔を思い浮かべた。

キルマ自身は、第一王女が医学を学ぶことに賛成でもなければ反対でもなかった。王太后は、あまり賛成しなかった。王女にふさわしい学問ではないというのが王太后の理由だった。確かに、ある意味ではそうともいえる。だが、ケンナスの授業を聞きながら、キルマ自身結構ためになった。どうすれば健康でいられるか、あるいは、病気になった時どうすればいいのかを学んだからである。同じ王女でも、メレディスは時間をもてあまし、武術の稽古に励んだ。それは、王太后も止めなかった。丈夫な体を作るのによらしいというのが、その理由だった。

キルマは、ふと「血」は争えないと思つた。セシーネの母方の祖母は、医学者の家の出身だった。彼女自身も医学の心得があった。そのことをセシーネに告げるべきかどうか、キルマは、計算してみただが、今はその時期ではないと判断した。いや、誰かがそのことをもう告げているかもしれない。キルマは、王宮の細かい情報が、手に入らないことにいらだちを覚えた。王太后の死後、王宮の侍女た

ちの顔ぶれも替わった。キルマは自分の持ち駒が少なくなったことに不安を募らせた。

院長室を出たセシーネをモリカが待ちかまえていた。セシーネのズボン姿に「王女さま？」と喋って驚いたように目を丸くした。その後、あわてて、高位に対する礼をした。セシーネもおはようと声をかけた。モリカは率直に「どうしたのでございますか、その服は」セシーネは肩をすくませ「乗馬にはこの格好が一番よ」

「乗馬でございますか」

「ええ、王女であることは、色々不便なこともあるのよ」

「わたくしはそのあたりはわかりませんが」

実際のところ、ズボン姿は王女の不便さよりも、王女の特権といつてもよかつたが……

セシーネはモリカを従えて、ベンダーの「講義」のおこなわれている部屋に戻った。ベンダーの講義は昨日の手術のことではなく、もっと基礎的な一般的な医学知識についてであった。セシーネはすでに修得したといつてもよい知識だった。ベンダーは、見習たちに質問を浴びせ、見習たちの進展振りを確かめていった。質問に淀みなく答えをいうものもあれば、そうでないものもいた。セシーネは誰がそうなのか頭の中にたたき込んだ。

実は、見習たちも不満を抱えていた。自分たちが《治療の技》という不思議な《力》の持ち主であるらしいことはわかつたが、なかなか実際にそれを試す機会に恵まれなかつた。今日、けが人が出たと知らせを受け、彼らは色めきだつた。しかし、自分たちを置いてケンナスだけがその場に向かつた。戻ってきたケンナスは、大したことがなかつたとしかといわなかつたが、本当にそうなのか、確かめようにも確かめようになかつた。

その不満が、まず、セシーネのズボン姿に向けられた。

「なんで、そんな格好しているんだ？男みたいじゃないか」

「君に、とやかく言われたくはないわ」

「王女だからといって、威張るなよ」

「これ、王女さまになんて口に利き方をするのです」とモリ力がたしなめた。

「べつにかまわないわ。そんなことより《見立て》はどの程度上達したの」

「《見立て》なんて、少しも面白くない」

「何、いつているの。どんな病気がわからなかったら、治療法もわからないでしょう」

とまあ、口達者な第一王女である。セシーネはそっくりながら、自分にもそっくり聞かせていた。ペートルの場合も、結局は、外科の切開手術という治療方しかなかったのだからと疑問に思ったりした。エドワーズは《治療の技》で何でも治せる訳ではないというが、果たしてそうだろうか。やはり、セシーネは、限界を試しかつた。しかし、その時のセシーネは知らなかった。治療師が《力》を使い果たすとどういったことになるのか、それを知るのは、もう少し後になる。

ブルックナー伯が、ペートルの容態を確かめにやってきた。年若い修道女に案内され、授業の部屋に入ってきた。

「やあ、ベンダー博士。そして。王女さまもおはようございます。

ちょっと手術の経過が気になりました。どうです、病人の様態は」
ベンダーに替わり、ケンナスが「今のところ、順調のようですよ。今は、安静が大事だそうで、眠っていると思いますが」

「なになに、順調ならそれで結構」とブルックナー伯は、なにやら満足そうだった。そして、授業を進めてくれといって、その場に残った。ベンダーはそのまま授業を続けた。ケンナスが懐中時計を取り出し、ベンダーに時間を告げた。ベンダーは「今日は、このくらいでいいだろう、ただ、もう少し、復習しておくように」といって授業を終了した。その後、ペートルの診察に、見習たちを残して向かった。

ペートルは、目を覚ましていた。昨日と同じようにベンダーが脈

を診て、ケンナスが《見立て》をした。ベンダーが「王女さまも《見立て》をしてご覧なさい」と勧めた。セシーネはペートルの手首を握ると《力》で探った。体の中で《見立て》の感覚が走った。ベンダーがメスを入れた場所にかすかな痛みが感じられた。ペートルの手首を離し、「少し、痛みがあるようですけど」

「まだ、傷口はふさがっておりませんからね。抜糸するまでは、少し痛みが残るでしょう。ちょっと失礼」といってベンダーはペートルの脛をひっくり返して「うん、少し、貧血があるかな。どうだ、ペートル、めまいとかあるか」

「いえ、それより、腹が減って」

「まあ、最初は、肉汁ぐらいにして、徐々に普通の食事に戻すからな。救貧院の方々には、そうお願いしてある。指示通りの食事をするようにな。少しくらいは、起きあがって歩いてもいいぞ」とベンダーは、手術後の過ごし方をペートルに指示した。ブルックナー伯が「ちゃんと、博士のいうことを聞けば、健康になれるんだ。いいな」と念を押した。

そのあと、ブルックナー伯の馬車でベンダーは一足先に宮殿に戻っていった。

そして、再び、フィードに跨ったセシーネは、乗馬の楽しさを味わっていた。ビランは自分の指揮する近衛騎兵隊を一定の速度ではなく、速めたり緩ませたりした。幼い時からセシーネを知っていたビランは、王女の気性をよく知っていた。《治療の技》についても、ビラン自身試したことがあった。結局、その《オ》はないとわかったが、ケンナスの授業にはよく付きあわされた。見習たちが今、学んでいる程度の医学的知識はあった。セシーネの横に並びながら「姫、ご報告した方がいいと思います、あの見習たち危ないですよ」「どつ、危ないの」

「《治療の技》を試したがついています。特にヨハムは危ない」

「そうなの。ケンナス先生には、そうだったの？」

「一応、それとなく、申し上げておきました」

「そう、わたしだつて、色々試したいけど、でも、わざわざ、けが人を作るまではしなくていいけど」

「畏まりました」と幼い時のエドワーズとセシーネの遊びを知っていたビランは、ニヤリとした。

「それより、もう少し速度を上げない？」

「畏まりました、速力前進」とビランは号令をかけた。結局、チェンバー川の橋まで、セシーネたちは全速力で、馬を走らせた。ビランたちと抜きつ、抜かれつを繰り返しながら、橋の手前でセシーネは手綱を引き、フィードの速度を並足まで落とした。セシーネは息を弾ませながら、こうでなくちゃと思った。フィードを贈ってくれた父にもう一度お礼をいおうと思った。

「ビラン、当分は、救貧院には馬車でなく、フィードに乗って行くことにするけど、かまわないでしょ」

「自分がかまいませんが、一応、師団長殿に報告しておきます」

「あら、そうなの」

「一応です、姫のご希望通りになるかは、お約束出来ません。まあ、その点はおわかりでしょう」

「何か、危険なことがあるの」

「いえ、そうではありませんが」

「乗馬がダメなら、陛下は、馬を下さったりしないわよ。師団長が文句をいうなら、陛下に伺うわ」

「わかりました」

セシーネは、自分の身分にちょっと不便を感じた。王女だからといって自由気ままにならないことも多かった。だが、王太后の生前に比べて、幾らかの自由は手に入れた。それは、年齢よるものかもしれない。もう、子供ではなかったが、かといって、大人とも言い切れない。セシーネの体はまだ、大人の女性の体ではなかった。

平日の王宮での昼食の席は、王女と妃だけだった。ついこの間まで、リングートも同席したが、エドワーズに誘われ、別の部屋で食

事をするようになった。リンゲートの母親のアンジェラはあまりいい顔をしなかったが、父親のヘンダースは、男同士の方がいいのさと許可をした。これには、メレデイスが少しへそを曲げた。メレデイスの不満は王太子のエドワーズが計画している鹿狩りに女性が参加出来ないことであつた。

「何で、殿方だけでやるうとするの、わたしだって、行きたいわ」「メレデイス、問題は、弓術だと思うわ。女性は、あまりしないもの」と王妃のヘンリエッタが指摘した。

「そこなのよ、わたしは、女性だって、多少の武術は心得ておくべきだと思つわ。セシーネはどう思う?」

「問題は、イザベルだと思う。彼女が、参加したいといつたら、お兄さまも考えるでしょう。イザベルはそういつたことに興味があるのかしら?」

「どうも、そのあたりが、わからないわ。礼装に関してはかなり、興味があるようだったけど」

「ところで、海洋大会の衣装だけど」とネリアが話題を変えた。エレーヌが「わたしも、新しい服が欲しい。いつも、お姉さまのお下がりばかり」とふくれっ面をした。王妃がすかさず「あれで十分、何、警沢をいつているの」とたしなめた。

「わたしだって、叔母様のお下がりだったわよ。気に入らないなら、リディアに上げることにするわ」

「メレデイス、少し、手直しをしたらどうかしら、ちょっと刺繍を入れるとかすればだいぶ、違う服のように見えるわ」とやはり王女を持ち、エレーヌやリディアのお下がりを受けているアンジェラ妃。

「そうね、後で、持ってきてちょうだい。みてみるわ」とメレデイス。彼女の衣装に関する目は確かだった。普段簡素な仕立てのドレスを着ているのも彼女なりの計算だった。そのドレスは、長身の彼女の体型を引き立たせた。王女である以上、美しくなければならぬ。それがメレデイスの持論だった。無論、妃たちにもそれを求め

た。女性が自分を美しく見せたいと思うのは、当然の心理であった。話題が俄然盛り上がった。エレーヌさえ発言した。だが、セシーネは、衣装のことはメレディスに任しておくことに限ると、あまり口を挟まなかった。

セシーネはにぎやかだった女性だけの昼食をすませると、いつものように新宮殿に向かった。いつもの小部屋にいく前に国王の執務室の前で国王付の近衛兵に国王との面会を求めた。近衛兵が許可をセシーネに伝えた。セシーネは、執務室にはいると膝を折って、高位に対する礼をした。

「陛下、よろしいでしょうか」

「何だ、セシーネ」と椅子に腰掛けたままの国王。

「お礼を申し上げようと思って」

「お礼？」と国王が片方の眉を上げた。

「そう、フィードを下さってありがとうございます。フィードはすばらしい馬だわ。当分は、フィードに乗って救貧院へ行くつもりです。よろしいでしょうか」

「かまわんが、ズボンも履いてか？」と今はスカートに履き替えた第一王女をみた。

「そのつもりですけど、いけませんか」

「まあ、いいだろう」と国王はかすかに微笑んだ

「ありがとう、お父さま」とセシーネも微笑んだ。これで、近衛師団長が何をいおうと大手を振るってフィードに乗れる。まあ、フィードを当てにしているリングゲートはがっかりするだろうが……

「ところで、救貧院の病人の様子はどうだ」

「昨日、ベンダー先生が手術したペートルのこと。それなら、今のところ順調よ。熱もないようだし、特に問題はないと思います」

「そうか」

「では、お忙しいでしょうから、これで失礼します。退出してもよろしいでしょうか」

国王はうなずいただけだった。セシーネはもう一度、膝を折り高

位に対する礼をして、国王の執務室を出た。

いつもの小部屋にブルックナー伯が待ちかまえていた。ブルックナー伯はこの部屋のことを準備室と呼んでいた。ブルックナー伯は、王太子の鹿狩りの計画も聞いていたが、その計画についての参画には、国王の指示によって、それほど重職でない大蔵省を定年退職した平民出身の元部下を充てていた。在職中は王太子と親しく言葉を交わす機会に恵まれなかった元部下は、感激し、毎晩のように進捗状況を報告に来る。ブルックナー伯は、大蔵卿を辞したものの、まだ、自分の影響力が低下していないことに気をよくしていた。

「問題は、予算書ですが、まあ、概算でよろしいでしょう」とブルックナー伯は、書類を取り出した。

「王女さまは、算盤がおできになりますかな」と今度は算盤を取り出した。

「少しは」

「暗算もよろしいのですが、やはり、数字の桁が多くなると計算違いが多くなりますからな」とブルックナー伯は算盤の使い方をセシーネに教え始めた。

第一王女は飲み込みがよかった。算術の基礎はできていた。しばらくすると、かけ算も算盤で計算出来るようになった。そこへ、ピランが工部尚書の訪問を告げた。

部屋に入ってきた工部尚書は、挨拶がすむと「施療院の準備の方はいかがです」と尋ねた。

「君のこそ、役所の方は、どうなっているんだ」

「少しは、なれてきましたけど、やはり、施療院の設立も気になりますから、新しい建物を造る予定はありませんか」

「そういった案もあることはあるが、最初から大規模にやるのはどうかという意見もあってな、多分、救貧院を手直ししてということになるだろう」

「すると、救貧院は廃止ですか」

「何、働こうと思えば仕事はいくらでもある」

ここでセシーネはようやく口を挟んだ「男の人は、そうでしょうけど、女の人はどうですか」

それがといて、ブルックナー伯は、陸軍の「計画」について話し始めた。

いわゆる軍需物資の中で、武具のたぐいは工兵と呼ばれる職人たちが作っていた。各駐屯地の建物さえ工兵たちの手で作られていた。今度は軍服に必要な布地の生産も、軍部内で始めようとしていた。それは、女性の労働力を見込んでいた。

「つまり、後は、病気で働けないものをどうするかということになる。そこで、施療院が必要になってくるわけですね」とブルックナー伯は話を締めくくった。

「ブルックナー伯、病気の治療には《治療の技》はあまり、有効ではないんです」

「それは、存じております、王女さま、しかし、《見立て》をして、薬を調合すればいいでしょう。よろしくないのはきちんとした医学的知識がない者が勝手に薬草を煎じたりすることですな、かえって病気を悪化させてしまうかもしれませんからな」

ブルックナー伯は、即位して間もない頃の国王から「働けば暮らせる国」という理念を聞き、感服したことがある。そして、今、王立施療院の設立に関わることで、自分もまだまだ「お国」の役に立っている実感があつた。

さて、この日の朝、ケンナスに《治療に技》で骨折を治してもらった男である、彼の名前はセルバンという。セルバンは、荷馬車の御者で、荷物を預かってはあちらこちらに届けては荷駄賃をもらうという暮らしをしていた。馬と荷馬車が彼の財産の全てだった。セルバンは、金が入るとそのほとんどを酒代に費やしていた。しかし、酒で仕事をしくじるほどではない。約束通り、荷駄を届けると金を受け取り、定宿にしている宿屋に腰を据えた。顔なじみの宿屋の亭主に「のどがからからだ、エールをくれ」と頼んだ。宿屋の亭主は

昼間から酒を飲むなどは当然いわなかった。酒場の売上も大事な収益である。黙って、ジョッキにエールをなみなみとつぎ、セルバンに差し出した。

「うちは前金だよ」

「ああそつだったな」とセルバンは受け取ったばかりの金を財布から出した。勤労が責ばれる国ではあるが、セルバンにもそれなりの理屈はある。一仕事した後、自分の金をどう使おうが勝手である。

セルバンは一気にエールを飲み干すとジョッキを差し出し、宿屋の亭主にお代わりを頼んだ。それにしてもやけにのどが渇く。セルバンが、今朝、自分の身に起きた出来事を話し始めたのは三杯目のエールのジョッキを手にした時である。やはり、顔なじみの荷馬車の御者がそちらもエールのジョッキを片手に話しかけてきた。

「セルバンじゃねえか、久しぶりだな、景気はどうだい」

「おう、カーチャク、そつちこそ、どうだい」

「まあ、しけた話しかねえな」とそれは同業者である以上、うまい話をうっかり洩らしたら、仕事を横取りされかねない。カーチャクは用心深かった。セルバンは、三杯目のエールに口を付けながら、
「しかし、今朝は、えらい目にあつた。街道に狼がいきなり飛び出してきてな、手綱を引いたら馬車が横倒しになってその下敷きになつてしまつて」

「そりゃ、大変じゃねえか、それでどうしたんだ」

「ちょうど、騎兵隊が通りかかつて助けてくれたんだ。ちよつと待てよ、あれは、どこの師団だ」とエールを流し込む。あの時は動転していたので思い出せない。四杯目のエールを頼んだ。結局、セルバンが話し終えたのは、六杯目のエールを飲み終わった時だった。カーチャクは、ケガが一瞬のうちに治つてしまったというセルバンの話を半信半疑で聞いていた。大方、大したケガではなかったのだらう。カーチャルの見たところ、セルバンは運がよかつたのである。馬車から放りだされても、大したケガもなくこうして無事であるのだから。第一、王都の近くに狼がいるなんて聞いたことがない。

「そんな、話を大げさにいうなよ。最初から、大したケガじゃなかったのさ」とカーチャクは、すっかり酔いの回ったセルバンの話を酒の上のほら話と決めつけた。セルバンは、いつもよりなんだか酔いが早いなと思いつながら、すつきつばらにエールはいけなかったと思つたとたん眠気が襲つてきた。セルバンは椅子から立ち上がるうとしてボタンと椅子ごと仰向けにひっくり返つた。宿屋の亭主は動じなかった。酒場ではよくあることである。酔いつぶれたセルバンを宿屋の亭主は他の客に邪魔にならないように酒場の隅に引きずつて運んだ。セルバンはいびきをかいてすっかり眠り込んでいた。それを横目でみながら、カーチャクは、エールで腹一杯にするのは考え物だと鳥のあぶり肉を注文した。宿屋の亭主は金と引き替えにあぶり肉を渡しながら「ところで、賭はどうする」とカーチャクに持ちかけた。

「海洋大会か、掛け率はどうなっている」と賭け事の好きなカーチャクは乗ってきた。他の客もその話題に乗ってきた。春の競馬や秋の馬上試合ほどではないが、賭け事の好きな連中は、海洋大会の優勝を巡つて金を賭けていた。ちなみに、賭け事はアンドーラでは違法行為ではない。酒場の中はその話題で盛り上がり、セルバンの大げさな話は、皆、忘れ去られてしまうのである。どこにでも、自分の身におこつた出来事を大騒ぎする手合いはいる。カーチャクがセルバンの話を思い出すのは、王立施療院が設立されてから、何ヶ月も経つた頃だった。

さて、海洋大会の準備に追われているように見える海軍本営本部では、退役海軍士官の臨時招集をかけていた。臨時招集をかけたのは、前提督のリーバイト海軍大将である。リーバイト海将は、王太子から鹿狩りに海軍も参加して欲しいと要請を受け、退役した元部下たちを再び集めたのである。集まつた元部下たちを前にリーバイト海将は、一席ぶつた。

「ここは、陸の鼻をあかす時で御座るよ、いつまでも、陸に大きい

顔をされているのも困るので御座る。ここは海の意地を王太子殿下にお見せしなければ」

「確かに、そうですね。弓術なら、多少自信がありますから」と不適な笑みを浮かべたパラボン海軍少将。

「問題は、騎射でしょうね」とこの会議で唯一の現役大佐のヘンダース王子。

「何、今から、特訓すれば間に合うで御座るよ。今年が無理なら来年ということも御座ろう」

「確かに、エドワーズは毎年開催したいといっておりましたから」と、ヘンダースはこの成り行きに少々驚いていた。エドワーズはエンバーから帰ってくると重騎甲冑から軽騎甲冑に着換え、海軍兵学校の視察をおこなった。それは、ヘンダースが勧めたからであるが、エドワーズは熱心に訓練生に声をかけ、航海術だけでなく武術の訓練についてあれこれ教官に尋ねたりした。その後、訓練鑑に乗り込みチェンバー湾を一周した。これは、大いに兵学校の士気を高めた。そして、この鹿狩りである。これが、リーバイト海将の戦好きを大いに刺激した。王太子にその計画をうち明けられたリーバイト海将は、陸軍に負けてならじと大張りきりである。現在の陸軍元帥など、リーバイト海将は、若造扱いである。あんな若造に率いられている陸軍に一泡吹かせようとまず退役した海軍士官に声をかけた。海軍士官でも、馬術は必須科目である。これは、現国王の方針でもあった。ヘンダースは亡くなった名付け親から、その話を聞いたことがあった。リーバイト海将自身も馬には目がなかった。海軍の馬車行列など、見たくもない。むしろ見たいのは海軍の騎馬行列だと国王にいわれてリーバイト前提督は、海軍士官たちに馬術も訓練を課した。その成果が発揮される時が来たのである。張り切るのは無理もない。たかが、鹿狩りであるが、王太子主催ともなれば、国家行事である。ヘンダースは退役しても意気軒昂な顔をふれをやられと思いつながら見回した。エドワーズはこの成り行きをわかっているのだろうか。ヘンダースは、ふと思った。まあ、女を追い回

すより鹿の方が無難だろうとヘンダースは結論づけた。

そして、リーバイト海将は、王太子の成長振りに目を細めていた。日頃、武術の訓練を怠らないこともあってか、その体は筋骨たくましい若者に育っていた。それだけではない、兵学校の視察では、頭脳明晰なところもかい間見られ、訓練生にも気さくに声をかけ、案内をかって出たリーバイト海将にも、体をいたわるようにとねぎらいの言葉をかけてくれた。有り難いものである。

実は、リーバイト海将は、陸軍元帥に「賭」を持ちかけようと考えていた。獲物の数を競い合うのである。鹿狩りに参加する人数は多分、陸軍の方が多だろう。だが、こっちは少数精鋭でいけばよい。とにかく、陸の若造なんぞに負ける気は毛頭ない。目に見せてくれるとリーバイト海将は意気込んでいた。

ヘンダースは、リーバイト海将の気持ちが変わらないでもなかった。名付け親の大叔父によって近代化された陸軍は、装備も人員も充実していた。それに比べ、海軍は、やっと育った士官や下士官が、商船に引き抜かれその人員補強に追われていた。その対応策として、給金を上げることを検討したが、大蔵省がなかなかうんといわない。経費削減を申し渡されているのは、海軍だけではなかったが……

第一王女付けの侍女、タチアナ・ブルグース子爵令嬢は不満だった。その一つが海洋大会での自分の席が、ナーシャよりも下なことだった。ナーシャは侯爵家の出身とはいえ、侯爵自身の娘ではない。席次からいえば自分の方が上である。こう主張して、セシーネをうんざりさせた。

「そんなに文句を言うのなら、連れて行かないわ。替わりにメリメを連れて行きますからね」

「そんなことはなさらないでしょう」

「するかもしれない、わがままを言わないでちょうだい。第一、ナーシャには色々教わったのでしょう。席を譲るぐらい何でもないでしょう」

タチアナは不承不承にうなずいた。

王宮での生活は、タチアナの思い描いた生活と違っていた。毎日、きれいなドレスを着て面白おかしく過ごすものだとばかり思っていた。ところが、第一王女は、変わっていた。まるで、男の子みたいなどころがあつた。剣術はするは、馬術はするは、おまけに、なにやら薄気味悪い医学書を読んだりする。国王だつて変わっている。すり切れた服を着て、農夫のまねごとをするのだ。自分の父親は、そんなことをしたことがなかつた。女官長のメレディス王女も口うるさかつた。タチアナは化粧が濃いと叱られた。

「なんだか、下品よ、タチアナ。もう少し上品な化粧にしなさい」女官長のいう上品な化粧というのがタチアナには今一つわからなかつた。ただ、予想通りだったのは、王太子だけだった。王太子はタチアナの思っていた以上にハンサムだった。背も高く、軽騎甲冑姿はりりしがつた。だが、なかなか、話す機会が訪れなかつた。側近に取り囲まれた王太子と廊下ですれ違つたたびにタチアナの胸はときめいた。だが、王太子は自分に目もくれない。なにやら急ぎ足で立ち去つていく。

「何を急いでいるのでしょうか」とついタチアナはいつてしまった。

「誰が」

「あの、王太子殿下ですけど」

「色々、あるんでしょう」と第一王女は肩をすくめ、こちらもスタスタと歩き始めた。

セシーネは、王太子が忙しくしているのは、自分から言い出した鹿狩りのためだと知っていた。無論それだけではない。王位を継ぐために色々学ばなくてはいけないこともたくさんあつた。セシーネ自身も医学ばかり学んだわけではない。文字の読み書きから始めて、算術や歴史・地理なども学ばされていた。学問は武術と同様、王家では奨励されていた。

それにしても、今日の工部尚書の話は面白かつた。工部尚書は、なかなか博識だつた。《治療の技》についても独自の見解を述べた。

それについては、セシーネは答えようがなかった。それに従来のア
ンドーラの医学でも解明出来ないこともたくさんあった。それ
でも、工部尚書によるとメレディス女王の代に王立大学が設立され、
各種の学問は学術的にかなり進歩したらしい。セシーネはふと、大
学の医学部はどうなのだろうかと思っただ。覗いてみるのも悪くない
その機会を作るべきかセシーネは迷った。王太后が生きていたらな
んというだろうか。そして、キルマは？明日も、セシーネはフィ
ードに乗って救貧院に行くつもりだった。誰がなんといおうと国王が
許可したのだから。

近衛師団第一連隊第二大隊第四中隊第一騎兵隊隊長のビラン中尉
は、第二騎兵隊隊長と勤務を交代すると直属の上官である第四中隊
隊長に報告をしていた。「第一王女殿下は、救貧院へは、明日から
も馬車でなく、騎馬でお出かけするおつもりだそうです。後
は、異常ありません、以上報告終わります」
「いってよし」と中隊長

ビランは敬礼をすると、武官らしくきびきびと回れ右をし、屯所
と呼ばれる上官たちの部屋を出た。ビランは今朝の出来事を中隊長
に報告するつもりはなかった。部下たちにも口止めしてある。中隊
長は、定年まで何とか佐官に昇進出来ればと考えているような、い
わゆる王宮育ちのビランから見れば小心者である。あの出来事を話
せば、動揺するだろう。それに《治療の技》をかけたのは姫じゃな
かったしなとビランは思った。下手に話せば騒ぎ立てて、ケンナス
先生も迷惑だろう。ビランは、ケンナスが好きだった。王宮にやつ
てきた時、アングーラ王国の男子には兵役義務があるのを聞くと、
すすんで軍服を着た。ケンナスにはそういう律儀なところがある。
それにしても、第一王女が馬車でなく騎馬で移動をするなら、警備
の方法も違ってくるだろうに、何もいわない上官にビランは、少々
呆れていた。俺だったら、馬車の方が安全だと一応はお諫めするだ
ろう、多分、姫は聞かないだろうし、ちゃっかり、殿の許可をもら

ってしまったしな。やれやれだ。

ビランは、勤務時間でなかったので、王太子のところへ顔を出すことにした。この時間は図書室だろう。勝手しつたる王宮である、案の定図書室の前に、王太子の護衛である第二中隊の当番兵が立っていた。敬礼をし、自分の名を名乗る。当番兵は元上官のビランの顔を知っていてその必要はないのだが、これは手続きである。入室の許可が出た。図書室の中に入り、敬礼をする。ビランは図書室の顔ぶれを見て少し驚いた。リーバイト前提督を始め海軍のお歴々が揃っていた。それも、海軍甲冑と呼ばれる完全武装である。真正面にいるエドワーズが

「ビラン中尉、用は何だ。セシーネのお守りに飽きたのか」

「いえ、そうではありません、今は非番ですので」

「それで、遊びに来たのか」

「いえ、鹿狩りのご計画について伺って、たしか、場所は第七軍区ですよ、あそこは近衛に配属される前の勤務地です」

「そうか、ならば、ちょっと座れ」

「あの、よろしいのですか、後にいたしましょうか」

「いいから、掛ける、ビラン」

そんなわけで、ビラン中尉は鹿狩りの作戦計画に参加することになった。ビランは上官の中隊長が聞いたら悔しがるだろうと思った。しかし、まさか、海軍まで乗り出して来るとは、うわさに聞いていたが、うわさは本当だった。壮大な鹿狩りになるだろうとビランは思った。

さて、第一騎兵隊長のビラン中尉の報告は第四中隊長から第二大隊長へそして第一連隊長から、近衛師団長に伝わった。報告を聞いて近衛師団長・サツカバン・バンデーグ准将は少し苦笑いをした。副官に「もう一度、第六師団に、救貧院までの街道の巡回をこまめに頼むと伝令を走らせる」と指示を出した。王家の人々の身边警護が役目の第一連隊長は「すでに出してあります」

「そうか、ただ、念には念を入れるだ」

ハツと敬礼をして副官と第一連隊長は師団長室から出た。部屋を出ればそこには副官の席と連隊長たちの席がある。副官は伝令を呼び、指示をする。伝令役の当番兵が敬礼をし、部屋を出ていくと、副官は隣の席の第一連隊長に話しかけた「君、今日、海軍のリーバイト前提督がお見えになつたるう、それも、物々しいでたちでさ」

「さあ、伺つておりませんが」

「なんでも、例の鹿狩りに海軍も参加するらしい」

「海軍もですか」

「海軍が、鹿狩りなんてやってどうするんだらう」

「さあ」と第一連隊長は、上官ではあるが、同じ大佐の副官に首を傾げた。アンドーラの陸海両軍の将官制度では、同じ階級でも、その昇進が一日でも早ければ、席次はそちらの方が上である。だが、たまに大佐となると先に連隊長から副官に上がるものもいた。だが、近衛師団の副官は第一連隊長より大佐歴が長い。第一連隊長は、海軍の鹿狩り参加よりも鹿狩りの下見にいきたいという王太子の警備計画に着手した。第五大隊長から、ランセル王子も同行するという報告を受けている。やれやれと思いつながら、第一連隊長は、近衛師団付けの参謀を呼びだした。彼にとって、王家の人々が行動範囲を変えるのは、それなりに気の張ることであつた。

さて、午前中に、国王への報告すませて、本営本部に戻つたガナツシユ・ラシユール陸軍元帥閣下である。リーバイト前提督に若造扱いされていたが、それも、そうであろう。年齢からいうと同じ将官でも若い方である。年上の部下には慣れていたが、以前味わつた居心地の悪さを感じていた。それは、甥が大蔵卿と呼ばれる地位に就いたためもある。兄であるミゲル・ラシユール伯爵は、その知らせを受けて、辞退すべきだと諭したが、甥は耳を貸さなかつた。なぜ、そんな遠慮をする必要があるのかと逆に父親をにらみ返した。気の強いのはいいがとガナツシユは思うのである、今の自分があるのは、兄のおかげでもある。それを甥は、批判的なことを口にする。

ガナツシユは自分の進退を親友でもある国務卿に相談した。

「ガナツシユがやめることないだろう。しょうがないじゃないか、陛下がえらく気に入られ、それが偶然、君の甥だというわけさ。気に入ることない」

「しかし、あれのどこがお気に召したのだろう」

「さあ、なんだか熱心に計画性について申し上げたらしい」

「あれのどこが計画性があるというのだ。武官になりたいといって軍学校に入り、大した成績も残せず、楽なことばかり考えて、堪え性がないんだあいつは」

「まあ、しばらく様子を見よう、ブルツクナー伯がついているから大丈夫さ。それより、今度の工部尚書の方が問題児さ、大学荒らしというか、あちこち手を出して収拾がつかなくなっているらしいよ、パルツクスに聞いてみるよ」

「やたら、法律論をぶつのか」

「そうじゃない、その、逆さ、法科で入って、関数学で卒業という変わり種だ」

「関数学か」

「その後、今度は博物学の学位をとった。兵役も陸で一年、海で一年だそうだ」

ガナツシユは、大蔵卿と工部尚書というこの二つの重要人事に関して、解せなかった。それで、軍学校時代に「文句屋」とあだ名された彼は国王にずけずけと尋ねた。国王はただ笑って「すこし、年寄りの顔を見飽きたのでな。ただ、こつも思ったりする、臣下を育てるのも自分の役目ではないかと、まあ。気長にやるさ。」

ある意味で、自分を育ててくれたのも年下の国王であることに気づいたガナツシユは、沈黙せざるえなかった。国務卿のイーサン・カインバール子爵が指摘した通り、新工部尚書のニドルフ・レンドル子爵は、閣僚会議で問題児振りを発揮した。

「なんでも、法律で取り締まればいいというものでもないでしょう。取り締まっても、抜け道を探しますからね、人はずるをするのが、

ある意味で本質ですよ」

「君ね、だからこそ、法が必要となってくるのだろう」と生真面目な法務卿は鼻白んだ。閣議の議題は、税法に関するものだった。ガナツシュ元帥は、参謀長時代から出席したこともあって、慣れていた。しかし、顔ぶれは随分変わった。陛下のおっしゃる通りに臣下である閣僚を育てるのも、アンドーラの将来のためであろう。しかし、ガナツシュ元帥は、若い工部尚書が気に入った。確かに、自分はずるをしてここまで登ってきた。そこで、工部尚書の加勢に出た。「しかし、違法行為だといっても、それを摘発するのに返って費用がかさむのじゃどうしようもないじゃないか。経費節減を説く大蔵省が、それではなあ」

「これは、大蔵省の問題です。陸軍の管轄ではありません」と新大蔵卿

「しかし、結局は増税だろう。税が重いといって暴動でもなったら、それを修めるのは、軍の役目だからね。違うか、大蔵卿」

そこへ、ハツタン海軍提督が大蔵卿の加勢に出た「増税とは、限らない、減税となるかもしれん」

ガナツシュ元帥は「それだったら、なおさら、いかがなものか」「税の適性という面から、やはり調査は必要だろう。牧草地が畑になっっている場合もあるし、その逆もあり得る。」と國務卿。

その後、色々論議がでたが、その日の閣議は、大蔵卿の提案を御前会議へ「上げる」ことで終了した。そして、その日、本営本部から、自宅に戻ったガナツシュに新大蔵卿は食ってかかった「叔父上わたしの足を引っ張るような真似はやめて下さい」

ガナツシュは閣議のことだとピンときたが「何のための閣議なんだ。お互い意見を出し合うためだろう。立場が違えば意見も違ってくる。それより、ここを出ていってくれないか。大蔵卿と同じ家とというのは、ちょっとやりにくいのでね」

「それは、どういう意味です」

「ダース、ここは、わたしの家だ。誰を住ませるか、わたしの勝

手だ、ともかく、早急に、ここを引き払ってくれ」

ダースこと新大蔵卿は、不満げだった。ガナツシユの王都の住まいは、参謀長時代に借金をして購入したものだ。役目上、必要があるので、多少の無理をした。つまり、この家の家主はガナツシユだった。そこへ甥のヘンダース・ラシユールが居宿していた。大蔵卿なら、家一軒ぐらい王都に構えてもいいのではないかとガナツシユは思っていた。結局、大蔵卿は、ブルックナー伯の屋敷に移っていた。甥を追い出した格好のガナツシユは、何となく後味の悪さを味わっていた。

元帥付の従卒が、昼食を運んできた。本営本部には食堂があるのだが、他の部下たちが気詰まりだろうとガナツシユは本営室と呼ばれる自分の部屋で、昼食をとるのが習慣になっていた。ガナツシユは、遅い昼食に取りかかった。そこに秘書官が第三王子でもあるランセル大佐の面会の許可を求めにきた。

「かまわん。お通ししなさい」

ランセル少佐が「ランセル少佐、入ります」と大きな声でいつてから、本営室に入室し、入り口のところで直立不動で敬礼をする。元帥も椅子から立ち上がり、返礼をする。もう一度椅子に腰掛けながら、秘書官に「君、少佐に椅子をお持ちして、後、君も食事して来たまえ」と命じた。

机の上の食事を目にしたランセル少佐は「あの、後にいたしましたしよようか」

「何、かまいません。大佐は、食事は」

「自分はすませました」

元帥はパンを持った手で椅子を指し示すと「じゃあ、少佐もそこに掛けたまえ」

これは、異例なことであった。本営本部では、上官に用件を伝えるのは、立ったままつまり直立不動の姿を保つのが規則であった。ランセル少佐は躊躇した。元帥はもう一度椅子に腰掛けるよう促した。ランセル大佐は戸惑った顔をしながら椅子に腰掛けた。パンを

飲み込むと元帥は「それで、用件は」

「あのう、局長が元帥閣下のご許可が必要だとおっしゃるので」

元帥は何の許可か推測できたが、ここはとぼけた「何のどの許可ですか、殿下」

「殿下はやめて下さい、少なくともこの制服を着ている時は」

「殿下と呼ばれることには、うんざりですか」と元帥は鋭い視線をランセル王子に向けた。ランセル王子はうなずき「ええ、まあ、」

「でも、それが、あなたのお立場でしょう。違いますか、少佐」とランセルから見れば冷淡に思えるような元帥の口調である。

「確かに、でもこの少佐という位だつて、なくなつた母上が陛下にご無心したことだとわかつています」と同じ武官としてガナツシユ元帥を尊敬していたランセル大佐は自嘲気味にいった。

「それが、わかつてらっしゃるならそれで、結構」

ランセルは少したじろいだ。それで、これから言い出すことをためらつた。ガナツシユ元帥は無情にランセル王子の希望をうち砕いた「鹿狩りの下見の許可はできません」

ランセル王子は、落胆の色を隠せなかつた。

「でも、視察はして頂きたい」

「視察？」

「王太子殿下が海軍の視察をなさつたことは伺っております。今度は、陸軍の視察をお願いしようかと、無論、ランセル大佐も、調達局の一員として各師団の物資の過不足の調査をして頂きます」ここで、元帥はかすかに微笑んだ「鹿狩りの下見よりも、駐屯地の視察の方が、聞こえがいいでしょう」

ランセルの顔が輝いた。お若いなと元帥は思った「ただし、ご視察には小官も同行します」

ことの成り行きにランセルは戸惑つていた。エドワーズと計画していたのは、小規模な旅行である。ランセルは、母方の祖父の領地であつたエンバーに一度、いったことがあるくらいで王都からほとんど出たことがなかつた。軍学校を卒業後も近衛師団に配属され、

自分の護衛を自分が指揮をするというなんだか、妙な立場にいた。ランセルは地方の駐屯地に配属を願ったが、それはかなわなかった。王太后が反対したのである。何でも、口を挟む母親だった。軍学校では一回生は、親族との面会は禁止されていた。それを王太后は侍女たちを引き連れやってきた。入学当時、王子という身分を隠していたランセルは、王太后が面会に来たことでそれが同期生にばれ、仲間はずれにされてしまった。一回生には班ごとに色々当番があるが、ランセルは、何かというと同級生たちに「殿下は、こんなことなさないでもいいですよ」といわれ、疎外感を味わっていた。ランセルは少なくとも軍の中では王子という身分に甘えたくはなかった。しかし、やはり、甘えているのだろうか？

「ところで」と元帥は話題を変えた。これから話すことは国王の命ではない。陸軍元帥として閣僚に席を置いている身として当然気がつくべきことだった。ランセルが、少し身構えた。かまわず、元帥は言葉を続けた「これは、元帥として、つまり、上官としての命令ではなく、殿下に対する助言と思って頂きたい」

ランセルが緊張するのが、元帥にはわかったが「気を楽しにお聞き頂きたい。殿下は、御前会議にはお幾つかから出席なされましたか」とすでに知っていることを尋ねた。

「十八からですけど」

元帥は軽くうなずき「法律書ぐらい目を通されたことはありますか」

「多少は」とランセルは元帥の質問の真意を測りかねていた。

「兄上のヘンダース殿下が、法学の学位をお持ちなのはご存じですか」

「知っています。それが何か」

「わたしとしては、殿下にもそれをおすすめしたい。何、退官して大学へ行けと申しているではありません。無論、そうなされたかしたら、そうしてもよろしいが、わたしとしては、勤務の傍ら、学位をとるお勉強をなさった方がいいと思いますね」

「あのう、それは」

「どのみち、佐官研修でも多少は、学ばれたと思いますが、法律の知識も武官でも必要です。小官としても法学の学位を持っている少佐が居れば、多少は閣議で、面目が立ちますから。それに」

「それに？」

「鹿狩りも結構ですが、そういったお勉強も殿下には必要だと思いませんね、陸軍少佐は他にもおりますが、王子殿下は陸軍にはお一人しかおられない。学位をとれば、兄上のヘンダース殿下にも、太刀打ち出来ると思いますよ。どうですか。学科は好きでないのですか」

「学位ですか」とランセルは少し気が重たかった。武術は好きだったが、学問となると今一つやる気がでなかった。元帥は豊みかけた「少し、お考えなってみて下さい。今も申し上げたように、学位をとれば、いつまでもヘンダース殿下に、兄貴風をふかされないですむと思いますよ」と元帥は国王の末弟の顔色を伺った。ランセルはニヤニヤし始めた。どうやら、この提案に乗ってきたようだった。

「もし、そのおつもりになられたなら、パルツクス・スタバインをご紹介します」

「どなたですか」

「わたしの家内の二番目の兄です。何で、あいつがと思えますが、一応、王立大学の法科の学部長です。副学長も兼任しております」

ランセルは、陸軍元帥の意外な人脈に驚いていた。大蔵卿は甥っ子だったしなとランセルは思った。

「ともかく、この件は少しご検討下さい。ヘンダース殿下にご相談されるのもされないのも、ご随意にどうぞ」

「相談なんかしませんよ」とランセルはこの助言がもたらす効果を計算していた。兄貴の鼻をあかす機会を見逃すほどお人好しではない。

「そうですね。あと、申し訳ないが、王太子殿下には、下見ではなくて駐屯地の視察をお願いしたいと小官が申しておったとお伝え願

いますか。殿下を伝令役に使って申し訳ないが…」と、元帥はまだニヤついているランセルに会談が終了したことを伝えた。「ランセル少佐は退出してよろしい」

ランセルはあわてて椅子から立ち上がり敬礼をしながら「ランセル少佐、戻ります」といった。元帥は、今度は椅子から立ち上がり「椅子に腰掛けたまま返礼をした」。

ランセル少佐が退室すると元帥は中断していた昼食に戻った。かつて、亡くなつた前職者のヘンダース陸軍元帥に「ちつぽけな策謀家」と評された現陸軍元帥は、昼食を食べながら頭の中でちよつとした策謀を巡らした。しかし、これも、軍略の一つであると彼は断定した。自分の甥の名付け親も存命ならば、同意するであろう。「でかした。ガナツシュ」と誉めてくれるであろうと、少しだけ前職者を忍んだ。だが、いつまでも、その死を悼んでも仕方がない。昼食をすまずと、戻ってきた秘書官に副将を呼んでくるように命じた。

それにしても、副将を待ちながら、伯爵の弟であるガナツシュは思った、王子という身分は端で見るほど楽ではないと。ましてや国王という王冠はいかに重たいものか、察してあまりある。それに付け加え、王太子と第一王女には、説明のつかない不思議な《力》が備わっていた。ガナツシュには、魔法や魔術がどんなものか解りもしなかつたし、解ろうとも思わなかつた。自分は門外漢と割り切っていた。ブルックナー伯が王立施療院設立のため奮走しているのは知っている。問題は教会がどう出るかであるうとガナツシュは思った。宗教が絡むと厄介だなと陸軍元帥は、何となくいやな予感があった。幸いにしてアンドーラでは教会には軍事力がない。しかし、隣国のサエグリアでは、教会の騎士たちがサエグリアの国王を悩ましていると聞いている。それだけではない。貴族たちも、互いに争っていた。内乱とまでいかないが、うわさでは、馬上試合で、互いの領地を取り合っているとか、それでも、戦争になるよりもむしろ。戦争は国力を疲弊さす。戦争が職業の陸軍元帥は、それを十分わかつていた。アンドーラの繁栄が、平和の上に成り立っている

のを創造主に感謝していた。

副将がやってきた。「メングラン中将、入ります」

ガナツシユ陸軍元帥は立ち上がり、メングラン中将の敬礼に返礼をした。

「君も掛けたまえ」と元帥はまた、椅子に腰掛けながら、秘書官がまだ片づけていなかった机の向こうにある椅子を指し示した。はあといつて、メングラン中将は椅子に腰掛けた。メングラン陸軍中将は、ガナツシユ陸軍元帥より、年長であった。軍学校と呼ばれる王立陸軍士官学校の卒業生でもない。ある意味で、年功と家柄によって今の地位に上がったといつてよい。自分もある程度、家柄による「引き」があつたと自覚しているガナツシユは、それをとがめようとは思わなかった。だが、軍略において、ヘンダース元帥なき今、自分より秀でているものは、そう多くはないだろうとガナツシユは自負していた。軍略において、大切なのは「情報」である。ガナツシユは、その情報収集に当たるようメングラン中将に指示を出した。メングラン中将は、怪訝そうだった。

「ともかく、各師団に伝令を走らせる。指示は、口頭でよい。報告は、一ヶ月以内にな、いつてよし」といつて陸軍元帥は立ち上がった。副将も立ち上がり、「メングラン中将、戻ります」といつて敬礼をした。元帥も返礼をする。メングラン中将が退出すると、話を聞いていた秘書官が「閣下、どういうことでありますか」と尋ねた。元帥は秘書官から見れば謎めいた顔をして「君、軍略の基礎は何だろうと思つ」と逆に質問した。

「さあ、偵察でしょうか」と軍学校の成績が今一つで、戦略組ではなかった秘書官は自信なさそうに答えた。

「それだけ、わかれば十分だ。それよりその椅子を元に戻しなさい」「はあ」といつて秘書官は元帥の命令に従いながらも、元帥が自分の疑問に答えてはくれないのが、少し不満だった。

「君、いいか、秘書官というのは、口が軽いのはダメだ。ここで、見聞きしたことをべらべらしゃべるのは、秘書官、失格だな」とい

つて、元帥は机の上の書類を手にした。なんだかわからないが、このことは、誰にも聞いたりできないのかと思いながら、秘書官も自分の席に戻った。元帥が何を考えているのか彼にはさっぱり検討がつかなかった。

ガナツシユ元帥は書類仕事に取りかかりながら、亡くなったヘンダース元帥の「謀は密なるを尊ぶべし」という言葉を思い出していた。何人の師団長が、彼の「計画」に気がつくだろうか。そして、海軍提督の反応は？いや、その前に陛下がなんと仰せられるか。この程度なら、陛下はお許し下さるであろうと、そして、この計画を午前中、国王にお目通りをした際に思いつかなかった、自分の迂闊さにガナツシユは自分もまだまだだと思ったが、いや、その前に戦力を確認することが肝要だと思い直した。

陸軍本営本部から、各師団に伝令が向かったのは、その日の、午後の半ばだった。季節は初夏である。日が日々長くなっていった。伝令たちはそれぞれ、日が沈むまで、どこまで行けるだろうと計算しながら、馬を並足から徐々に速度を上げていった。それにしても、メングラン中将の指示は訳がわからなかった。ただ、上官の命令は絶対である。理由など聞こうものなら、拳が飛んでくる。ともかく、各師団へどれだけ早く到達できるかが、伝令として、優秀かどうかである。伝令たちは、王都の道で馬を急がせた。

待遇の改善闘争（前書き）

第二王子のヘンダースの長子リングート王子は、母親の添い寝という夜の習慣を従妹のエレーヌ王女に馬鹿にされるのが不満だった。そして、エレーヌ第二王女も母親のヘンリエッタ王妃のお小言に不満だった。

待遇の改善闘争

夕食の席でヘンダース第二王子の長子であるリングート王子は、いつもの元気がなかった。夕食の献立に嫌いなほうれん草があるのもいやだった。妹のジョイス王女に食事をさせていた母親のアンジエラ妃がそれを見とがめて「リングート、ほうれん草も食べなさい。残したりしたら、ダメですよ。」

リングートは、この世に何でほうれん草があるのか、そして何でそんなものを食べなくては、いけないのだろうかと思った。それでつい、母親に口答えをした「ほうれん草を食べなくても、死んだりしない」

それが、いけなかった。アンジエラ妃は怖い顔を見ると、リングートをジッと見、「そう、そういうことをいうの。今度から、毎日、ほうれん草を出しますからね。ほうれん草は体にいいのよ」

リングートは自分の不運を呪った。皿の上のほうれん草を力無く見つめた。母親は、彼をまだ見つめている。今日という日は、最悪だった。いつも、馬術の稽古の時、リングートは、従姉の第一王女セシーネの馬フィードに乗っていた。ところが、今日は、王宮の厩舎にはフィードの姿はなく、よぼよぼの老馬しか残っていなかった。仕方なく、リングートはその馬で我慢をしなければならなかった。

そして、今度は、リーバイト前提督が、王宮に来て、王太子のエドワーズに紹介してもらった。そこまではいい。だが、侍従のハロルドが「リングート殿下はお勉強がありますから」といって、そこから、連れ出されてしまった。リングートは、なにやら、面白そうな話が聞けると抵抗したが、エドワーズまで「リングエイ。また、後でな」と追い出しにかかった。リングートは、ハロルドに抗議をした。ところが、ハロルドは「殿下、海軍へいきたいのですか」と尋ねた。リングートは、身震いした。うわさでは、海軍では、士官でも、水兵と同じように櫓を漕ぎ、漕ぎ方が悪いとむちで打たれるという。

リングゲートは、絶対海軍なんかに行きたくなかった。

リングゲートの不運はまだ、続いた。夕食後、部屋に戻ると、侍従のハロルドが待ちかまえていた。

「殿下、パサーケール侯爵から、お手紙が届いております」と母方の祖父からの手紙をリングゲートにハロルドは渡した。リングゲートはその手紙を待ちかねていた。ふと、気がつくや封蝋がすでに破られていた。

「ハロルド、先にこれ読んだの」

「いえ、お母上です」とハロルドの口振りは当然だという風にリングゲートには、聞こえた。リングゲートは、宛名を確かめた。宛名はリングゲート王子殿下と書かれていた。たとえ、母親でも、自分宛の手紙を読むなんてと、リングゲートは、少し不愉快だった。でも、お祖父様はなんていつてきたのだろうと、少し、期待を持って、リングゲートは手紙を読み始めた。そこには、侯爵領では馬を育てていないし、買うとすればかなり高価だということ、そして、こういうご無心は、大変、遺憾であると書かれてあった。リングゲートはその部分から、ハロルドに尋ねた。ハロルドは、手紙を読みもせず、「おねだりは、困るという意味です」

「別に、ねだつてなんかいない」とリングゲートは、落胆しながら、手紙の最後の方を読んだ。手紙は、きちんと勉強をするようにと結ばれていた。リングゲートは自分の馬が欲しかった。勉強仲間であるリングゲートのお相手役の少年の中には、父親に頼んで、馬を手に入れたものすらいた。実家で育てているから、いくらでも手に入ると自慢していた。その馬は、年をとっていたが、それでも、リングゲートは羨ましかった。それで、もしかしたらと思ひ、ハロルドには内緒で、母親のアンジェラ妃の実家であるパサーケール侯爵に手紙を出したのだった。その手紙は随分前に書かれたもので、リングゲートは、半分それを忘れていた。手紙は、リングゲートの味方のカッセル大尉がこっそり、手伝ってくれた。

「殿下、よろしいですか」と、ハロルドの口調が、お説教の始まり

であることを告げていた。

「大体、馬の世話も、きちんとできてないのに、ご自分の馬を持つてどうします」

確かに、ハオルドの言う通りだった。セシーネと約束したフィードの世話は、精々、飼い葉を飼い葉桶に入れるくらいだった。そのためだろうか、リンゲートは、思案した。

そこで、リンゲートの不運は、少し、幸運へ傾いてきた。部屋に夕食を終えた少年たちがどやどやと入ってきたのである。ハオルドのお説教は中断された。ハオルドのお説教は、いつも長かった。ホツとしたリンゲートは、ふと、少年たちと夕食の献立は同じだろうか、疑問に思い「みんな、夕食はすんだ？ほうれん草はでなかった？」と少年たちについて聞いてしまった。ハオルドが「ほうれん草がどうかしましたか」と聞きとがめた。リンゲートはあわてて、「いや、何でもないよ。それより、知っている、今日、リーバイト海軍大将が、お見えになったんだ。前の海軍提督の」

「リーバイト提督なら、お名前を聞いたことがある」
「海軍が何だつていうんだ。たいしたことないさ」とリンゲート同様、陸軍びいきの少年がいった。その後は、海軍が強いが、陸軍が強いかと皆口々に言い始めた。ハオルドが、「さあさあ、この話はこのくらいで、文法の復習をしましょう」

リンゲートは、文法が、少し苦手だった。いつもは、この時間、地理の勉強をするはずだった。リンゲートは、地理は好きだった。アンドーラの各地からやってきた少年たちの話を聞くのが、リンゲートの地理の勉強だった。しかし、ハオルドは、少年たちがおとなしく椅子に座るのを待って、課題を出した。リンゲートもおとなしく、課題に取り組んだ。石版に文章を書き込みながら、一人ずつ、それを持ってハオルドに見てもらう。リンゲートは、何度もやり直しをさせられた。部屋付の侍従が、部屋の燭台に明かりを点しにやってくる。ハオルドが、懐中時計を見て「今日は、このくらいで、終わりにしましょう」といった時、リンゲートは少しホツとしてい

た。そこへ、近衛兵が、父親のヘンダース王子の来訪を告げた。ハロルドは立ち上がり「お通しするように」と近衛兵に告げた。リングートも椅子から立ち上がりながら、それは、自分がいすべきことなのにと思った。この部屋は、自分の部屋だし、第一、自分は王子なんだから、エドワーズは、こういう時、自分で近衛兵に答えていた。ヘンダース王子は、部屋の中にはいると少年たちの顔ぶれを見回しながら「ハロルド、勉強の邪魔をしたかな」と尋ねた。

「いえ、もうそろそろ、休ませようと思っていたところです」

「そうか、ちよつと、リングートに話がある」とリングートの父親は、思わせぶりな目つきをした。ハロルドは、少年たちに「もう、部屋に戻りなさい」といった。少年たちは、入ってきた時と同様にどやどやとリングートの部屋を出ていった。それを見送りながら、ヘンダース王子は「どうも、お行儀が今一つだな。リングート班は」と感想をいった。そして、息子に「石版を片づけなさい。リングート」と命じた。何で、自分がとリングートは思った。王子の自分が、なぜ、こんなことをしなくてはいけないのだろう。石版を棚の上に重ねながら、今度から、あいつらにやらせようとリングートは思った。石版を片づけ終わると、リングートは、父親に「お話って何ですか、父上」と尋ねた。その間、リングートの父親は、祖父からの手紙を読んでいた。リングートは、しまったと、思った。

「リングート」と父親の口調は、優しげだった。そのあとは、意外なことをいった。どっか面白がっているような口調だった。「ほうれん草は、嫌いか」

リングートは、しまったと思った。自然と顔が赤くなった。うなずいた息子に諭すように「食べ物好き嫌いは、あまり、感心しないな」

「はい」とだけしかリングートには答えられなかった。

「ところで、リンゲイは馬が欲しいのか」とやはり優しい口調で、父親は尋ねた。リングートはこくんとうなずいた。

「そうか、でもな、とうさまも、お前の年頃、自分の馬が欲しかっ

た。自分の馬を持ったのは、ちょうど宣誓式のちよつと、前だった。リンゲイもそれまで、待ちなさい」

リンゲートは、気が遠くなるような気がした。王家では、十二才になると、宣誓式をおこなう。王家と、王国に忠誠を誓う式典は、王家の一員にとって大事な式典だった。リンゲートは、この春で、七才になったばかりだった。後、何年、待てばいいのだろう。ここで、リンゲートは、王子である自分が馬を持ってなくて、侯爵家の遠縁に過ぎないネットスがすでに自分の馬を持っている不条理について、父親に切々と訴えた「ネットスは、まだ、十才なのに自分の馬を持っているんです。そんなの、なんだか、変です」

「何が、変なんだ」

「だって」とリンゲートは口ごもった。ヘンダースはハロルドに「いい馬なのか」と尋ねた。ハロルドは

「たいした馬ではありません。年取つておとなしいのが取り柄の馬です。馬術の稽古を始めたものには向いているかもしれませんが」

その後は、リンゲートの馬術の進展振りをハロルドが「父上に言い付けた」。リンゲートのしてみれば、ネットスの馬術も大したことになかった。それなのにと、リンゲートは不満だった。ついでにハロルドは、リンゲートが、文法が苦手なのを指摘した。そして、
「それでも、パサーケール侯爵にお手紙を書けるくらいには、文章が書けるようになりましたが」とハロルドは嫌みっちらしく付け加えた。ヘンダースは、片方の眉を上げた。もう一つ、リンゲートにいわなくては、ならないことを思い出した。

「リンゲート、お祖父様に、おねだりは、ダメだ」

「おねだりなんかしていません。馬を育てているか、聞いただけです。本当にそれだけです」

「そうか、どのみち、海洋大会には、お出でになるだろうから、聞いて見よう」

リンゲートは、自分の書いた手紙の内容を思い出そうとした。何と書いたっけ、後で、カッセル大尉に聞いてみるべきだろうか。

そこへ、近衛兵が母親のアンジェラ妃の来訪を告げた。アンジェラ妃は入室の許可を待たずにリンゲートの部屋に入ってきた。それも、リンゲートの不満だった。アンジェラ妃は自分の夫に膝を曲げて高位に対する礼をした。母上は、一度だって、自分にはそんなことをしたことがないと、リンゲートは気がついた。

「リンゲート、そろそろ、休む時間よ」と、リンゲートの母親は、そう息子に告げた。それも、リンゲートの不満だった。リンゲート班の連中のからかいの的だった。いい加減、赤ん坊じゃあるまいし、母親が寝かしつけようとするのは、やめて欲しかった。しかし、父親は「もう、そんな時間か」と、懐中時計を見て「ジョイスはもう休んだのか」とアンジェラに尋ね、アンジェラは、優しい表情で「ええ、もう、グッスリ」と微笑んだ。

「じゃ、お休み、リンゲート」といって、父親のヘンダースは、部屋を出ていった。「さあ、リンゲート、寝間着に着替えなさい」というとリンゲートの母親は、ハロルドにそれとなく身振りで、指示をした。ランセルが、寝間着を持ってきた。リンゲートは、ため息をつきながら、着換え始めた。

いつものように寝間着に着換え寝台に入ったリンゲート王子の横に母親のアンジェラ妃が添い寝をしながら、リンゲートの好きな物語の本を読み出した。それは、昔の騎士が怪物と勇敢に戦う話だった。リンゲートはちよつと疑問に思っていたことを尋ねた「この騎士は、爵位は何だったの」

「さあ、この本には書いてなかったわね」

「ねえ、母上、僕はこの本なら自分で読めると思うんだけど」と何回もこの物語を読んでもらっていたリンゲートはおずおずと切り出した。

「だから、なんなの、リンゲイ」とリンゲートの母親は、優しく尋ねた。この添い寝の習慣は、夫であるヘンダース王子が、リンゲートが生まれた時、強く主張したことだった。王子を生んだことに内心では誇りを持ったアンジェラは、自分が生んだ王子の父親の言葉

に意を強くした。実家のパサーケール侯爵家からは、生んだ子の世話をするために自分の幼い時世話をした年取った乳母が、侍女として王宮に送り込まれていた。しかし、内心では、自分で世話をしたかった。妊娠をした時から、夫は、日々、大きくなっていくアンジェラのお腹をなでながら「どっちなかな、王子かな王女かな」といいながら、嬉しそうに出産を楽しみに待っていた。それは、アンジェラも嬉しかった。

王宮に侍女として来て以来、ヘンダース第二王子は、アンジェラのおこがれの存在だった。それが、父親のパサーケール侯爵から、第二王子との結婚話を聞かされた時、アンジェラは、まさに、天にも昇る気持ちだった。だが、将来の義理の母親になるエレーヌ王太后は、彼女に手厳しかった。アンジェラの目の前で「まあ、持参金がこれだけなの」とパサーケール侯爵家の申し出に呆れたように王太后はいった。海軍士官の制服を着た第二王子は肩をすくめ「別に金と結婚するのじゃあるまいし、これで、十分ですよ」と屈辱で真っ赤になったアンジェラを庇った。確かに、公爵家と侯爵家とは格がちがうし、領地からの収益も違う。メレディス女王の時代に吹き荒れた貴族の階級の変動を生き延びたパサーケール侯爵家は、名門貴族によくあるように一族が多かった。パサーケール侯爵家としては、王子と結婚するために精一杯、アンジェラの結婚持参金を用意した。それでも、王太后は、不服そうだった。だが、ヘンダース第二王子は意に介せず、兄である国王に「気に入りましたよ。パサーケール侯爵はなかなか、学問がお好きで、一族の中には、博士もいるそうです」と改めてアンジェラを紹介した。国王は、その当時は、陽気な第二王子に比べて、どこか気むずかしい顔ばかりしていた。国王は「君が気に入ればそれでいい」としか言わなかった。国王の承諾を得た第二王子は、晴れてアンジェラと婚約し、その次の新年の舞踏会でアンジェラだけと踊った。それまでは、貴族の令嬢と片端から踊っていた時とは、大違いだった。国王は、一曲だけ、王太后と踊ると早々に舞踏会の会場の大広間から出ていった。その

年の舞踏会でアンジェラは女としての幸福を感じていた。その幸福感が最高潮に達したのは、リングートを生んだ時だった。さすがの王太后も、アンジェラに優しい言葉をかけた。だが、それが、どこかの空だったと気づいたのは、ヘンリエッタ王妃にエレーヌ王女が生まれた後だった。しかし、第二王子は、王子の誕生に喜びこらうった「いいか、アンジェラ、子育てを侍女任せにするな。乳母なんかは、よほどのことがないかぎり、王家ではおかないのは知っているだろうな。それに王家に生まれようが、金がたくさんあるうが手に入らない物はいくらでもある。その一つが愛情だ。この子には、絶対、寂しい思いをさせるな」

無論、アンジェラもそんな気は毛頭なかった。アンジェラは愛する人の子供を産んだ女性の幸福感に包まれながら、リングートに惜しみない愛情を降り注いだ。そして、月日は流れ、リングートは、すくすく育っていった。リングートの一挙一動が、アンジェラには喜びだった。しかし、王太后の命令でリングートの養育には、侍従のハロルドが当たることになった。その時にはアンジェラは二度目の妊娠に気づいていた、アンジェラは澁々と王宮中を走り回るリングートを手放した。

アンジェラは、二人目の子供のジョイス王女を生んだことで、少し、リングートが、夜、独りで寂しい思いをしているのではないかと心配した。しかし、それは、夫のヘンダースがリングートの添い寝をかって出てくれた。第二王子は、リングートに勇ましい物語を読み聞かせていた。

父と過ごすその時間は、リングートには、それは、それで楽しかった。それが、また、最近その役目が母親に変わった。この事実が、従妹のエレーヌ王女に伝わり、リングートは馬鹿にされた「何なの、赤ちゃんみたい、変なの」

この「変」という言葉は、王宮の子供たちのはやりの言葉だった。リングートは思いきって「やっぱり、変だよ。母上」といつてみた。「何が変なの」

「だって、この本は自分で読めるし、自分で読みたいんだ。そうしてもいいでしょう」

「そう、だったら、明日から、別の本にしましょう」と母は、リングートの言いたいことをわかってくれない。

「そうじゃなくて、エレーヌは、夜一人で眠るんだって。僕もそうしたい。ねえ、いいでしょう」

リングートの母親は、ちょっと衝撃を受けた。この時間は、アンジェラにとって大事な時間だった。昼間はほとんど、ジョイスに手がかり、息子の方はハロルド任せである。せめて、リングートが寂しい思いしないようにこうして眠るまで一緒に過ごすことで、それを埋め合わせしようと思っていた。それをこんなことを言い出すとは、アンジェラは、なんだか寂しくなってしまった。リングートはもう一度、ねだった「ねえ、いいでしょう、一人になりたいんだ」アンジェラは、ため息をつき「わかったわ、今日は、一人で寝れるのね」といつて起きあがると、また、ため息をついた。そして、寝台からだと布団をかけ直し「ホントに、一人で大丈夫？」と息子に聞いた。

「大丈夫だよ、もう、一人で眠れる、赤ちゃんじゃないんだから」とリングートはあくびをした。

まだ、心配なアンジェラ妃はリングートの部屋を出る時、部屋の前で歩哨に立っている近衛兵にいつも以上に念入りに頼んだ。

アンジェラが、自分たちの寝室に戻ると、夫のヘンダースは入浴中だった。新婚間近だったら、遠慮したろうが、そこは二人も子をなした間柄である。入ってきたアンジェラを見て、夫は「リングイは、もう寝たのか」と尋ねた。アンジェラはため息をつき、夫に今夜の出来事を話して聞かせた。ヘンダースは、体を拭きながら「へえ、そんなことを言うようになったんだ」

「そうなの、なんか寂しくなっちゃって」

ヘンダースは、ちょっと笑っただけだった。子供が成長していくのは、親にとっては楽しみでもあったが、それは、寂しさもその一

方である。アンジェラにとって二人目のジョイスも離乳の時を迎えていた。

さて、リンゲート第四王子が「独り寝」を勝ちえたその夜、セシーネ第一王女は、再び、海洋大会の席次について持ち出して来た侍女のタチアナ・プルグース子爵令嬢に、癩癩を起こしそうになったついに、根負けして「わかったわ、こうしましょう。午前中は、ナーシャ、午後はあなたということにするわ。それで、いいでしょう」

タチアナは、少し考えてから、これ以上、第一王女の機嫌を損ねないようにそれで、妥協することにした。

「ありがとうございます。王女さま、ところで、晩餐会のお席はどうなっているんですか」

「わたしは、でないわよ、もちろん、あなた達の席もないわ。ただ、晩餐会のお手伝いをするとお手当がでるんじゃないかな？ メリメに聞いて見てちょうだい」

「あの、なぜ、お出にならないのですか」

「十六才にならないと、そういった席にはでられないの。まあ、あまりでたくもないけど」

「まあ」といってタチアナは口に手を当てた。

「もう、この話はこれでお終い」といって、第一王女は手を振ってタチアナの質問を遮った。まったく、タチアナは始末が悪かった。

話すことは、衣装のことや行事のことばかりだった。確かに、それはそれで、大事なことはあるが、それが人生の全てではないだろう。もっと、有意義に時を過ごす方法があるはずだ。しかし、待てよとセシーネは、あることに気がついた。救貧院にいる見習たちは、各地から、連れられて来て以来、どこか出かけたことがあるのだろうか。確か、ガンダスは、王都見物はさせたといっていた。救貧院にいる見習の子供たちにタチアナが大騒ぎする海洋大会ぐらい見せてやってもいいのではないだろうか。それとも、そんなものに興味を持たないかも。これは確かめた方がよさそうだとセシーネは判断

した。タチアナに「ビラン中尉を呼んできてちょうだい」と命じた。タチアナは、おとなしく第一王女の言い付けに従った。まず、第一王女の部屋を出て廊下に立っている歩哨の近衛騎兵にビラン中尉の居所を確かめる。彼は姿勢を崩さないまま「さあ、非番だから、詰め所じゃないかな」

タチアナはその場所を知らなかった「詰め所ってどこ？」

「さあ」

「教えなさいよ。王女さまが、呼んでくるようにおっしゃったの。教えないと、言い付けるわよ」

歩哨の近衛騎兵は「わかった」というと「詰め所」の場所を教え始めた。そこは、タチアナの行ったところのないところだった。もう一人の歩哨が「わからなかったら、歩哨につきまり、こうやって廊下に立っている近衛に聞けばいい。尉官詰め所って言えばわかるから」とタチアナに教えた。

「尉官詰め所ね」

「第一連隊第二大隊第四中隊第一騎兵隊長のビラン中尉だ。覚えられるか」

タチアナは「第一連隊第二大隊ええーと」

歩哨がもう一度繰り返した。今度はタチアナは、何とか覚えられた。もう一度繰り返す。

「そうだ」

タチアナは、教えられた通りに王宮の廊下を歩きだした。

それを見送った近衛師団第一連隊第二大隊第四中隊第二騎兵隊の騎兵は、同僚に「なあ、あのご令嬢も困ったもんだ。お礼ぐらいえっというの」

「前の誰ほどでもないけど」

「あれはどうなっているんだか」と思わず、笑いが出る。

「こら、私語厳禁」と上官である隊長が注意をした。あわてて、口を閉じ、もう一度、部屋に聞き耳を立てる。第一王女の部屋は静かだった。

第一王女付けである近衛師団第一連隊第二大隊第四中隊第二騎兵隊では、王女付けの侍女のうち、ナーシャの方が、人気が高かった。それは、ナーシャの父親のルツセルト・ルンバートン陸軍大佐の存在だった。師団こそ違うがルツセルト大佐は師団の副官だった。つまり、もうすぐ将官の地位まで手が届きそうなところまで、上り詰めたのである。尉官である彼らには、あこがれまではいかないが、一目おくべき存在である。もしも、その師団に配属となったら少しは考える。タチアナが子爵家の令嬢だろうがそれは、武官である彼らには、あまり意味を持たない。そして、ナーシャも感じよかった。護衛の彼らに「ご苦労様」とかちよつとしたことに声を掛ける。最初、独身者の中には色めきたつものもいたが、婚約していると聞いて、それなりに思惑があつた彼らを少し、残念がらせた。しかし、世の中には幸運なやつはいるものだと彼らはため息をついた。そんな訳で、何か用を頼まれても、ナーシャだと快く引き受けるが、たかが、子爵家令嬢をひけらかすタチアナは今一つ評判が悪かった。そんな、評判を知つてか、知らずか、タチアナは王宮の随所に立っている歩哨達に場所を聞きながら、ようやく尉官詰め所にたどり着いた。そこにも歩哨が立っていた。最初は、槍を交差させ、行く手を阻まれたが、教えてくれた通りに「第一連隊第二大隊第四中隊第一騎兵隊隊長のビラン中尉はどこなの、教えなさいよ」と高飛車に言つと通してくれた。その歩哨が、ニヤリとしたのをタチアナは気がつかなかった。まあ、兜の面頬を下ろしていたので当然であつたが…

タチアナは、必死だった。普段は、第一王女に用を言い付けられなくても大概は、ナーシャが引き受けてくれた。しかし、今夜は、ナーシャは女官長に呼ばれて、留守だった。それは、海洋大会の衣装のことだった。女官長のメレディス第四王女は、第一王女が、新宮殿に行っている間、王妃を始め王家の妃を引き連れ、今回の海洋大会に着る衣装の点検に現れた。それは、まず、豪華な第一王女の衣装を注意深く点検し、その後、タチアナの衣装とナーシャのそれを

点検した。第四王女は、タチアナの分は「まあ、いいでしょう」と合格点を出した。しかし、ナーシャのドレスを見た第四王女は「ちよつと、地味じゃない？」といった。王妃がナーシャに「あなたは、地味なのが好きなの」と尋ねた。ナーシャは赤くなつて「これでは、いけなかつたでしょうか」

「いけないとは、言わないけど、今回は、ちよつと華やかにしたいの。喪が明けたことだしね」とメレディス王女

「それもそうね、少し、襟のあたりを直したら、今はこういう襟は流行らないと思うわ」とアンジェラ妃がいった。結局、衣装の手直しをすることになった。そのことは、ナーシャ自身が第一王女に断り、承諾を得た。そして、第一王女の部屋に残されたタチアナは、再び、海洋大会の席次について第一王女の説得に取りかかった。タチアナが海洋大会の席にこだわったのは、自分が子爵家の出身というからではなかつた。衣装の点検の後、タチアナは女官長のメレデイス王女にそれとなく自分の席を確認してみた。女官長は席次表を取り出すと見せてくれた。それは、王家の人々、そして王太子から遠く離れた席だつた。ナーシャの方が幾分近かつた。声が聞こえそうなほど近かつた。王太子が自分に声を掛けることはないかもしれないが、なるべく近くに行きたかつた。どんな話をするのか聞きたかつた。それで、こだわったのである。そして、何とか、第一王女を説得して、近くの席に座れるようになったのに、また、第一王女の機嫌を損ねたくなかつた。こんな用も足せないようではと……

タチアナは、ビラン中尉を捜すのに懸命で、「詰め所」がどういふところかはつきりわからなかつた。大佐の娘であるナーシャなら、多少は気がついたかも知れない。そこは「男の世界」だつた。そこは、軍人たちが、甲冑を脱ぎ、くつろぐ場所だつた。中には、裸同然の格好をしているものもいた。歩哨に通されて、中に入ったタチアナは、むせ返るような男の匂いに卒倒しそうになつた。下着姿の男が興味深げに声を掛けた「お嬢さん、ご用は何ですか。誰に会いに来たのかな、それとも、誰でもよかつたりして」ドツと男たちが

笑い声を上げた。タチアナは、これはとんでもないところに来たところようやく気がついた。しかし、第一王女の用は足さなければならぬ。タチアナは何とか「ビ、ビラン、ビラン中尉、第一連隊第二大隊第四中隊第一騎兵隊隊長のビラン中尉はどこなの」といった。「ビラン中尉殿か、知らないな、それより俺、今、暇なんだけど、遊んでいかない？」

「わたしは」とタチアナは、からからに乾いた口の中で唾をようやく飲み込んだ。「第一王女、第一王女さまのご用なの。ビラン中尉はどこなの」

男は急に興味を失ったようだった。「何だ、だったら、早くいえよ。誰か、ビラン中尉殿の居所を知らないか」

「さあ、外出したんじゃないか」
部屋の奥の方で「ビラン中尉なら、多分、図書室だろう、さつき、俺も誘われたけどな」

「何なんだ」とタチアナに声を掛けた男が、そちらの方に向かった。タチアナは、逃げるように「尉官詰め所」を走って出た。後ろの方で、男たちの笑い声が聞こえた。

ようやく見慣れた場所にたどり着くと、タチアナは、立ち止まり息を整えた。こんな目にあうとは、信じられなかった。ともかく、図書室に行ってみよう、そこにいなかったら、後は、それまでだ。タチアナは覚悟を決めて図書室に向かった。そこへは、何度か、第一王女に連れられて行ったことがあって場所はわかっていた。

図書室の前には、二人、近衛兵が立っていた。向かい側の廊下にも二人。王家の誰かが、いる証拠だった。その位なら、タチアナにも察しがついた。王宮に来てまず驚いたのは、王家の人々に必ず、近衛兵が随行することだった。宮殿の各所にも近衛兵が立っていた。ブルグース子爵家の領主館では門番がいる程度だった。領地育ちのタチアナは大きな建物が建ち並び人通りの賑やかな王都にまず驚き。壮大な宮殿の大きさにも驚いた。何もかも、領地とは大違いだ。しかし、今は第一王女の用を足さなければならぬ。タチアナは、

大きく息を吸うと扉の前に立っている近衛兵に「第一連隊第二大隊第四中隊第一騎兵隊長のビラン中尉はどこにいるの」

近衛兵はタチアナにここで待っているようにというところに入ってきた。タチアナは扉の前で待った。

図書室の中に入った近衛兵は敬礼をし大声で「失礼します。妙齡なご婦人がビラン中尉を訪ねて来ております。いかが致しましょうか」

図書室の中には、軽騎甲冑姿の王太子、軍服姿のランセル王子、他にもビランを始め何人かの武官たちが集まっていた。奥の方の席に腰掛けていたランセル王子が「妙齡なご婦人か、ビランも隅におけないな」

室内にドツと笑いが起きた。

「ランセル若、からかわないでくださいよ」とエンバー出身のビラン。王太后の実家エンガム公爵の領地エンバーの出身者は国王を「殿」と呼び、王子たちを「若」と呼ぶ風習があった。国王の末弟ランセルは「どんなご婦人なんだ、美形か」と近衛兵に尋ねた。近衛兵は「それが、なかなかで」と答えた。近衛兵も長く王太子や王子の近くにいればこういう軽口ぐらい叩くこともある。王太子が「その妙齡のご婦人とやらをお通ししろ」

近衛兵は敬礼して廊下に出た。廊下で待っていたタチアナに「王太子殿下が入室のご許可を下さった」と伝えた。タチアナは心臓が止まるかと思った。どうしよう、王太子殿下だなんて。近衛兵が「早くしろ、入るのか、入らないのか」と急ぎ立てた。彼にしてみれば、ビラン中尉を捜しに来たうら若い女性が誰なのか、多少の興味はあった。彼は、タチアナの顔を知らなかった。タチアナは高まる動悸を押さえながら、図書室の中に入った。教わった通りに高位に対する女性の礼、スカートを少しつまみ、膝を曲げる仕草をした。足のふるえが止まらなかった。

「ビラン中尉に何のようかな、お嬢さん」とランセル王子、ランセルもタチアナの顔を知らなかった。タチアナの頭の中は真っ白だった

た。言葉が出てこない。

「なんだ、タチアナじゃないか、俺に何のようだ」とビランの声が出て、タチアナは用件を思い出した。「第一王女さまが、お呼びです」声が、少し振るえていた。そこへあこがれのエドワーズが「セシーネのお守りも大変だな、ビラン」といった。タチアナはどう振る舞っていいのか、わからなかった。

「いえ、慣れていきますから」とビランは椅子から立ち上がった。そして、立ちすくんでいるタチアナに「セシーネ姫は何のようだった」といった。

「あの、聞いていません」

「そう」といいながら、ビランは邪魔なので床においてあった兜を拾い上げ、小脇に抱えた。「それでは、セシーネ姫のご機嫌伺いにいってまいります」

再びエドワーズが「ビラン、お前はもういいよ。大体はわかったから、どうしても行きたかったら、転属願いを出すんだな」

「わかりました。考えておきます。若、では失礼します」とビランは敬礼をした。ガチャガチャと重騎装備の音を立てながらタチアナの横に並んだ。「ビラン中尉退出します」と再び敬礼をする。図書室にいた全員が立ち上がり返礼の敬礼をした。ビランは小声で「あんたも、お辞儀をしるよ」とタチアナにささやいた。タチアナはあわてて高位に対する礼をした。それとも自分も敬礼をすべきなのだろうか。

「いつてよし」とエドワーズがいった。エドワーズはなんだか武官になったみたいでご満悦だった。

廊下に出るとタチアナはほっと息をついた。まだ、胸がドキドキする。そこにぶっきらぼうに「第一王女殿下は、何のようだ仰せられた」とビランが尋ねた。そして、廊下を第一王女の部屋に向かつて早足で歩き始めた。タチアナはあわてて追いかけた。思いきつて「あの、王太子殿下と何をしていたの」とビランに尋ねた。「いえねえな、あんたには関係ないだろう」とビランは答える義務がない

と判断した。ビランは、何かというたとチアナは第一王女の用をナーシャに押し付けているのを知っていた。ナーシャはチアナが慣れていないからといっていやな顔もせずその用をこなしていた。まったく、遊びに来ているんじゃないだからなとビランは思った。どうやら、第一騎兵隊の評判もチアナは今一つのようである。

いつもの手続きを経て、第一王女の部屋にチアナが入ったビラン中尉は敬礼がすむと「ご用は何ですか。姫」と尋ねた。

「ああ、ビラン、忙しかった？」とセシーネは尋ねた。ビランを呼びにやったのにチアナがなかなか戻ってこないのもその間、セシーネは従医長のベンダーから借りた解剖学の本を読んでいた。

「暇だったので、若のご機嫌伺いをやっております」

「そう」とだけセシーネはいった。兄のエドワーズが鹿狩りの計画に夢中なのを知っていた。叔父のランセル王子も同様である。夕食の席では、もう一人の叔父のヘンダー王子まで乗り出してきた。だが、セシーネは自分の口を挟むことではないと思っていた。

一方、チアナはビランがもう少し、王太子のことを話してくればいいのと思った、大体「若」って誰だろう。チアナは知らなかった。エンバー領の出身者が国王を「殿」と呼び、王太子や王子を「若」と呼ぶことを。

「ねえ、ビラン、救貧院にいる見習たちだけど。海洋大会を見に行きたいとか言っていたかしら。どうなの」

「そうですね、どうだろう、まあ、一回ぐらいは見たいんじゃないんですか」

「そう、やっぱり」とセシーネは眉を寄せ考え込む顔になった。

「連れて行かれるおつもりですか、姫」

「それは、出来ないわ、でも、明日、ケンナス先生やそうね、パラボン侯爵夫人にも相談してみようかしら」

「まあ、それがよろしいでしょうね」

「他にも、思いついたことがあるんだけど、それはまた後でね。もういいわ、ビラン」

「妙なことでないでしょうね」と幼い時からセシーネ王女を知っているビランは探りを入れた。

「違うわよ、いいから、今、何時かしら」

王女の質問には答えずビランは「ご用はそれだけでですか」

「うん、それだけ、もういいわ、ビラン。下がってよろしい」

ビラン中尉が敬礼して出ていく間、セシーネは読書に戻った。タチアナはいつもの部屋の隅の椅子に腰掛けた。タチアナは、色々話しかかった。ビランを探し出すまでひどい目にあったこと、図書室での王太子とビランのやりとりなど、どうやら、ビラン中尉は王太子と親しそうだ。色々彼に尋ねてみようかしらとタチアナはぼんやりと考えていた。それにしても、昼間見た第一王女の衣装は豪華だった。自分もあんな衣装を着てみたかった。お母さまに頼んでみようかしらとタチアナは、思案した。まあ、セシーネの推察通り、タチアナの頭の中は各行事やそれに着る衣装のこと、そして、これはセシーネが気がつかなかったが王太子のことで一杯だった。

近衛師団第一連隊第二大隊第四中隊の重騎兵たちに評判がいい、第一王女付きのもう一人の侍女ナーシャ・ルンバートン嬢は、王宮に勤めるお針子たちの手を借りながら、海洋大会に着る自分の衣装の改良に勤しんでいた。それは、ルンバートン侯爵夫人が若い頃着ていた衣装で、王宮勤めになったナーシャにくれたものだった。ナーシャは十三才で侯爵家に呼ばれるまでは、両親と兄と弟と一緒に父の勤務する駐屯地の近くの「家族寮」と呼ばれる武官たちの家族が暮らしている建物で、他の武官の家族と暮らしていた。武官の暮らしは慎ましかった。父親のルツセルトは自分の給料をまず、武官として必要なものにつぎ込んだ。それは、高価な馬だったり、部下たちに時々振る舞う酒だったりした。順調に出世していく夫にナーシャの母親のデライラはそれについては何もいなかった。駐屯地が変わるたび、父は階級を上げていった。ナーシャは母の家事をよく手伝わされた。それは、家族寮に暮らす同じ年頃の女の子も同様

で、取り立て不満はなかった。二つ年上の兄が王立陸軍士官学校を受験する時、初めて、ルンバートン侯爵夫妻に引き合わされた。駐屯地を尋ねてきたルンバートン侯爵の興味は兄の方だったが、侯爵夫人の興味はナーシャにあった。

「今、幾つなの、ナーシャ」と尋ねられ、内気なナーシャに代わって母親が答えた。侯爵夫人は肯くと「どうかしら、そろそろ、謁見に出すことを考えているのかしら」とデライラに持ちかけた。ナーシャには何のことだかよくわからなかった。デライラは「謁見でございませうか」と聞き返した。

「ええ、そうよ、無論その前に、ちゃんと礼儀作法は教えないとね」その後、侯爵夫妻と両親との間で色んなやりとりがあり、ナーシャは侯爵家に引き取られた。娘のいない侯爵夫人はナーシャを娘のように扱った。侯爵家の使用人たちには「ナーシャお嬢様」と呼ぶように命じ、あれこれ仕込み始めた。それは、礼儀作法から始まり、貴族の娘として必要だと侯爵夫人が判断したことをナーシャは学ばされていた。侯爵家には、同じようなルンバートン一族の娘が何人かいた。皆、侯爵夫人のことは「伯母様」と呼んでいた。侯爵家での暮らしは家族寮と違っていた。まず、使用人の数が多かった。家族寮では、精々、近くの農家から、通ってくる洗濯女ぐらいたった。質素な暮らしになれていたナーシャにとつては、なにやら、贅沢な気がしたものである。そして、ナーシャが十六才になると侯爵夫人は彼女を王都に連れてきた。初めて見る王都は何もかも珍しかった。侯爵家の領主館には、ナーシャはあまり驚かなかったが、王都の宮殿の大きさには、やはり驚いた。まさか、そこで暮らすようになるとは、その時のナーシャには想像もつかなかった。「少しは、慣れた？」と作業を見守っていたメレディス王女がナーシャに話しかけた。

「はい、多少は慣れましたけど」

「そう、まあ、セシーネのズボンには驚いた？」

「いえ、あの」とナーシャは口ごもった。

「わたしも、あのくらの年にはああだったわ」といいながら、メレディスはナーシャの衣装を点検した。

「まあ、いいじゃないかしら、大分よくなったわ、ちよつと着てみて」

ナーシャは第四王女のいわれた通りにした。手直した衣装を身につけたナーシャをメレディスが腕組みしながらながめている。ナーシャは少し、恥ずかしかった。

「ちよつと回ってみて」

ナーシャはやはり、いわれた通りにした。第四王女が近づいてきて、ナーシャの後ろに束ねた髪を手に取った。第四王女は、ほのかにいい香りがした。

「後は、髪型ね」

「あのう」とナーシャは口ごもる

「髪型一つで大分印象が違うわよ。女ですものおしゃれしなくちゃ、普段はお化粧しないの？」

「あのう、侯爵家の伯母が、あんまり派手なのはダメだと」

「時によりけりよ、まあ、けばけばしいのは感心しないけど、華やかなのはいいと思うわ。顔立ちが悪くないだから、いくらでもきれいになれるわよ、ナーシャ。おしゃれというのは、ちよつとしたコツがあるのよ。ただ、お金を掛ければいいというものじゃないわ、ちよつとこつちへいらっしやい」と第四王女は鏡の前へナーシャを引っ張っていった。

「ちよつと椅子を持ってきて」

部屋にいる誰かが椅子を持ってきた。

「さあ、ここに座って」

ナーシャは素直に従った。椅子に腰掛けたナーシャの束ねた髪を第四王女がほどいた。

「ちよつと、ピン持ってきて」と第四王女は、今度は、ナーシャの髪型の改良に着手した。

ナーシャが第一王女に自分の衣装の手直しをするように第四王女

からいわれているといった時、第一王女は「まあ、叔母様は、そう
いったことが好きなの。どのみち、女官長だから、侍女たちが何を
着るかそういったことも色々いうと思うわ。いいわよ、こつちの方
は大した用もないし、タチアナがいてくれるから、大丈夫よ」とい
つてくれた。ナーシャは、第一王女の「そういったことが好き」と
いう意味が最初はわからなかったが、第四王女が、あれこれナーシ
ヤの髪型を試したり、終いには、化粧まで施し始めたのには驚いた。
それは、今までのナーシャには無縁の世界だった。駐屯地での暮ら
しと違った世界があるのをナーシャは実感していた。

さて、リングート第四王子を「赤ちゃんみたい」といったエレ
ー又第二王女も、ある不満を持っていた。それは部屋割りのことだっ
た。エレー又は妹のリディアと同室だった。それは、どうみても「
変」だった。生まれたばかりの第六王女のコーネリアが一人部屋な
のに第二王女の自分が第三王女と同じ部屋を使うのは「変」だった。
他にも部屋はいくらでもあるのにとエレー又は思った。このことを
自分たちの部屋にやってきた母親の王妃にぶちまけた。

「変よ、お母さま」

「何が変なの」と王妃は、部屋に散らかったおもちゃや服を片づけ
ながら聞いた。

「だって」とエレー又は頬をふくらませた。

「だって、何なの」

「どうして、わたしは、リディアと一緒にの部屋なの。そんなの変よ」

「どこも、変じゃありません。そんなことより、使ったものはちゃ
んとしまいなさい」

「それは、リディアが使ったものだもの、わたしじゃないわ」

王妃は、床に落ちている人形を拾い上げるとエレー又の方を向い
た。「あなたは、お姉さまでしょう。あなたがだらしないと、リディ
アが真似をするでしょう。いつも、散らかしては、そのまんま、ど
うしてお片づけが出来ないのかしら」

どうやら、雲行きが怪しくなってきた。そこで、エレー又はもう一度話を戻そうと、「コーネリアだって、ジョイスだって、お部屋は一人よ、それなのに何で、わたしは、リディアと一緒になの、そんなの変よ。絶対、変」

「お片づけもちゃんと出来ない子が何いつているの」と王妃は話題を元に戻した。しかし、それは「変」だとエレー又は思った。お片づけは侍女の仕事だとエレー又は思った。自分は王女なんだし、そんなことは自分にはなくてもいいはずだと思った。それなのに、お母さまはリディアが散らかした分まで片づけるようにいうのだから、そんなの「変」よとエレー又は思った。思っただけでなく口に出した。

「何で、わたしがお片づけをしなきゃいけないの、そんなの変よ」「当たり前でしょう。どうして、あなたって子はそうなのかしら」と王妃はため息をついた。「ねえ、パティ」と王妃は第二王女付けの侍女パティス夫人に今度は声を掛けた。部屋の片づけを手伝っていたパティス夫人は手を止め「何でしょう、王妃さま」と尋ねた。それから王妃がパティス夫人にいったことは、エレー又は信じられないほど「変」だった。

「今度から、エレー又にごのお部屋のお片づけはきちんとやってもらいます。あなたは手を出さないで、パティ、エレー又にやらせなさい。まあ、リディアにも少し、手伝うように、使ったものはきちんと元に戻す習慣をつけるように、いいわね、マージ」と今度はリディア王女を着換えさせていた第三王女付けのマージュール夫人にも念を押した。

「さあ、早く片づけなさい、エレー又」と王妃は拾い上げた服をエレー又に渡した。第二王女は「いやよ、そんなの変よ」と抵抗した。「いいから、早くやりなさい。お尻をぶたれたいの」と王妃は大声を出した。

「そんなことしないでしよう」とエレー又はパティス夫人に救いを求めた。パティス夫人はかすかに首を振った。

「必要があれば、そうします」と王妃はキツパリと言い切った。事態は最悪の方向に向かっていった。王妃の監視の中、渋々とエレーヌは部屋を片づけ始めた。こんな「変」と思いながら、エレーヌはこんな仕打ちをされたことを誰にいえばいいのか、そうだ、お父さまに言い付けてやるとふと思いついた。何たって、お父さまは国王陛下なんだから、この国で、一番えらい人なんだから、フン、お母さまなんて、大嫌い。お尻をぶつなんて脅かすんだもの。フンだ、お母さまこそ、お尻をぶたれた方がいいわ。王女のわたしにこんなことをさせるなんて。

それは、とてもいい思い付きのように思えた。そうだ、お部屋のこともお父さまに頼んだ方がいいわ。そうしようつと。第二王女は「権力」というものに気がつき始めていた。無論、そんな言葉は、彼女はまだ知らなかったが：

そして、アンドーラの最高権力者の妻であるヘンリエッタ王妃は、子育てに悩んでいた。第一王女のセシーネはあの不思議な《力》を除けば、手のかからない子だった。王太子の子育ては、ヘンリエッタの範疇ではなかった。ヘンリエッタが、エレーヌを生んだ時、夫の国王は、出来るだけ手をかかるようにといった。王太后は侍女上りのヘンリエッタには冷淡だった。他の妃にも、自分が公爵家の出身であることをヘンリエッタからは、ひけらかせているように思えた。気位の高い人だったとヘンリエッタは、感慨にふけた。確かに国母と呼ばれるだけのことはあった。三人の王子と王女を一人生み、国政にも多大な影響力を及ぼした。そんな芸当はヘンリエッタには出来そうもなかった。また、王太后と自分とは立場が違うのはよくわかっていた。何しろ、王太后の生んだ王子は王位についたのだから。

王都で暮らす人々の悲喜こもごもの思いを乗せながら、アンドーラの王都、チェンバーの夜は更けていった。善良な人々は大方、眠りにつき、昼間は賑わった通りも、今は静まりかえっていた。宮殿でも、大半が眠りについたが、眠れない人々もいた。夜勤と呼ばれ

る近衛兵たちである。彼らは、一時間交代で、宮殿の警備にあつて
いた。彼らは、所属でいうと近衛師団第二連隊と第三連隊である。
彼らの大半が歩兵で、階級も兵卒が多かった。かつては、王家領の
出身者だけでしめられていた近衛師団もアンドーラ各地から集めら
れ、今では、ほとんどの地域を網羅していた。出身地も様々なら、
その思いも様々である。少しでも早く昇進をしたい願うものいれば、
何とか勤務を無事終えてエールでも飲みたいと願うもの、一人一人
が顔が違うように、人生も様々である。

夜が明けない夜はないというように、王都チェンバーにも夜明け
が訪れた。初夏の夜明けは早い。アンドーラでは、ジュルジス一世
の時代に時計が、導入された。それまで、大まかだった時間の観念
が一時間、あるいは一分単位で切り刻まれる。だが、大半の暮らしは
相変わらず、大まかな時間単位で過ごしていた。

昨夜、王妃から第二王女のことについて愚痴を少しだけ聞かされ
た国王は、王太后とてメレディス王女の教育に失敗したといつて慰
めた。

「まあ、メレディスはそれほどひどくありません、あら、そういつ
た意味じゃなくて、ちゃんとしているわ」

「そうかね。まあ、気長にやるさ。もう休むよ」といつて、その話
を打ち切った。王妃も色々な気苦労があるであろう夫を気遣い「お
休みなされませ」と答えた。

そして、その朝、国王は、いつものように目が覚めた。王妃も寢
台の中で身動きをした。どうやら、そちらも目が覚めたようである。
国王は寝返りをうつて、王妃に背を向けた。王妃が静かに寢台から
抜け出すのを国王はそのままの体勢で待った。たとえ夫婦でも、多
少の礼儀というか、気遣いは必要である。国王は、王妃に少し身繕
いをする時間を与えるために自分は寢台の中で待った。王妃はやが
て寢台の天蓋の垂れ幕を明け「陛下、おはようございます」と形式
上は国王を起こした。「おはよう」と答え伸びをしながら、国王も
寢台を出た。王妃は、高位に対する礼をすると、寢室を出ていった。

隣の部屋で着換えたりまあ、まあ、色々と夫に見せたくはないことをするために。王妃はその前に呼び鈴を鳴らすひもを引っ張った。これもいつもの習慣である。

その呼び鈴に答えるように侍従が何人か入ってきた。国王はいつもの朝の習慣に取りかかった。国王はなるべく規則正しい生活をするように従医長から助言されていた。その侍医長ベンダー博士も寝室に現れ、毎朝の診察を始めた。

「今日も救貧院へ行くのか」と国王は従医長に声を掛けた。「お許しがいいだけでしたら」と従医長はいった。「かまわん」と国王は許可を与え、侍従に手を借りながらひげをそり始めた。侍従の役目は鏡を持つことぐらいである。その時、侍従長がやってきた。「本日のご予定は」と彼は国王に奏上し始めた。その間にひげを剃り終わり、顔を洗い、髪を整える。その後、儀式用でない剣を身につけた。そして、寝室を出て、侍従長のいつていた朝の予定の散歩を始めた。その前後を近衛兵が随行した。王家の人々に常に近衛兵が随行するのは身辺警護のためであるが、その他にも王家の威光を見せつけるという意味合いもあった。

さて、その朝、第二王女も侍女のマージェル夫人に起こされた。エレーヌはもう少し寝台の中にいたかったがあることを思い出して、寝台から飛び起きた。朝、起こしに来るのはマージェル夫人の役目だった。同僚のパティス夫人と話し合い、少し、勤務時間をずらしたのである。夜の見回りはパティス夫人が引き受けた。マージェル夫人は、自分の担当であるリディア王女を起こすと、その世話を始めた。時々、エレーヌ王女の様子も確認する。「さあ、エレーヌ、さっさと顔を洗いなさい」

それも、エレーヌの不満だった。「マージ、わたしは、王女なのよ」とふんぞり返った。

「そうだったら、王女さまらしくなさい。お顔ぐらい自分で洗えるでしょう。もう、お姉さまなんですから」と以前は第二王女付けだったマージェル夫人は言い返した。エレーヌとリディアが身支度を

終える頃、パティス夫人が部屋付を従えてやってきた。パティス夫人は二人の王女の寝室を見ると、「エレエ、自分の寝台は自分で整えなさい」

「そんなの変よ」と第二王女は抗議した。やはり、このことはお父さまに言い付けてやるうともう一度決意した。

「いいから、おやりなさい」とパティス夫人は無情にもそう第二王女に申し渡した。

マージェル夫人とパティス夫人は王女付の侍女というほかにも、二人には共通項があった。それは二人とも未亡人ということであった。孫も生まれ多少の余裕があるパティス夫人と違い、マージェル夫人の王宮勤めは深刻だった。

彼女は、侯爵家の傍系の家に生まれた。各領主には農地率というのがあり、耕作地の全てを自分の所有財産には出来ない。一種の財産分けのような形で隣の侯爵領の土地を曾祖父が手に入れた。祖父の代に始めた葡萄園があたってマージェルの生家は、豊かだった。マージェルの生家での暮らしは、貴族というより地主の娘に近かった。家事はもちろん、農作業も手伝させられた。人を雇えばその分、賃金を払わなければならない。収穫期には、家族総出で働いた。彼女が十六才の時、縁談が持ち込まれた。相手は、近くにある駐屯地に勤務する軍学校出の陸軍少尉だった。出自も直系ではないが、侯爵家の出身だった。祖父も伯爵家の当主もいい話ではないかと乗り気になり、彼女も陸軍士官の制服姿が眩しく思え、マージェルはその陸軍少尉と結婚した。しかし、それが生家の金値当てのとんでもない男だと判明したのは一月も立たなかった。豪放磊落な性格というのは、ただの放蕩者を取り繕った言葉だった。実は、酒場に入り浸る彼を心配した上官が結婚すれば、腰が落ち着くのではないかと期待して縁談を取り持ったのである。放蕩だけならまだしも、酒を飲んでマージェルに殴る蹴るの乱暴を働いた。彼女の父親や兄が止めに入ったこともしばしばあった。父も兄も兵役は兵卒だったが、普段の農作業で体は鍛えてある。腕っ節では負けなかった。夫

の言いぐさは「俺はこんな田舎で終わるような人間じゃないんだ、絶対出世してやる。お前みたいな田舎娘と結婚するじゃなかった」とマージェルを罵倒した。それが、祖父を決意させた。本家と呼んでいた侯爵家に彼女を連れて相談に行った。特に憤りを感じていた兄も父も同行した。

「このままじゃ、マージは殺されてしますよ」と兄ははつきりと言った。

事情を聞いた侯爵は困った顔をした。「上官にでも諫めてもらったらどうなんだ」

祖父は首を振った。「そんなことをしたら、逆恨みをして益々ひどくなるでしょう」

「考えてみたら、あの年でまだ少尉というのも、腑に落ちない。だまされたんですよ」

「しかしなあ」と侯爵は離婚を言い出した祖父を見た。兄は「実はこういうことがあったですよ」とマージェルの知らなかった話を始めた。

「駐屯地に売った作物の代金をあいつは横取りしたんです。マージの持参金の一部だといって。この間だって、酒蔵の葡萄酒を持ち出そうとしたし、うちだけではありません。本家の方だって手を出し始めたらどうするんです？」

それを聞いた侯爵家の嫡男が顔色を変えた。侯爵家も陶器の製造で内容はよかった。

「やはり、別れさせましょう」と中立説から離婚説に傾いた。

「しかし、相手は伯爵家の人間だ。侯爵家の中だけなら、わたしが決められるが、離婚となると向こうの体面もある。そう簡単にはいかない」と慎重論の侯爵。

「こういうことは早いほうが、いい。傷が大きくならないうちに、第一、伯爵家だって結婚式にも一人も来なかったでしょうが」と祖父は主張した。その間マージェルはただ泣いていた。侯爵夫人がしきりに慰める。夫への愛情はマージェルにはなかった。恐怖しかな

かった。

意外なところに助言者が現れた。旅回りの商人で領地に必要な日用品を王都から持ってきては売り、一方、侯爵家で製造する陶器を王都で売りさばいてくれる人物だった。

話し合いが長引き、事情を知らずただの親族の親睦を図る集まりだと思っていた執事が部屋に通してしまったのである。商人は愛想がよかったが、部屋の雰囲気はただならぬものだと感じ取ると出直しましょうかといった。そこへ祖父が声を掛けた「丁度、いい、あなたに頼みがある」

「何なりとお申し付け下さい。あたしでお役に立つことがあれば」

「あなたを信用してのことだが、この孫娘を王都に連れて行って下さるか」

「ちよつと、待ちなさい」と侯爵が止めた

「しかし、マージをうちには置けんでしょう。無論ここにも」

「それも、そうだが」と侯爵

察しのいい商人は「なんだか、込み入った事情がありがたいようですね」

これは身内の恥ではないと判断した侯爵の嫡男が事情を説明し始めた。そこへ兄も言葉を添える。事情を飲み込んだ商人はマージェルに同情を寄せた。

「わかりました、そうだったことなら、お力になりましょう」

結局、離婚を匂わせて伯爵家の当主から諫めてのもらおうというところに落ち着いた。侯爵は相変わらず慎重論だった。ただ、マージェルの身柄は、王都に移すことには同意した。

王都には商人と共に兄も同行した。生家の葡萄酒に目を付けた商人が王都で売った方が高く売れると勧めたからもある。表向きは商談のための方がいいでしょうといった。王都までの旅は楽ではなかった。荷車の荷台に乗ったり、時には歩いたり、マージェルは旅を楽しむどころでなかった。旅の間、商人は色々な助言を兄にしていた。のんびりと口バに乗ったその商人は、各地の事情に詳しかった。

夫の出身の伯爵領にもいったことがあるといった。

「あちらは、代替わりで大変じゃないでしょうか」とだけ言った。

ナーシャやタチアナが王都の繁栄に目を奪われたの違い、マージェルは、それどころではなかった。道中、たびたび、吐き気に襲われ、王都の商人の家にたどり着いた時には、ぐったりしていた。それが、妊娠だと気が付いたのは、商人の母親が朝、食事を吐き戻したマージェルの様子を見にきた時だった。

「まあ、おめでたじゃないの」

マージェルは青ざめた。兄は、祖父からの指示を受け離婚のための準備を商人の助言を得て進めようとしていた矢先だった。商人は顔が広がった。あちらこちらに色んな知り合いがいた。

「まったく、殿方というのは」と老夫人はいった。多少の事情を聞いていた老夫人は息子呼びつけた。

再び、話し合いがもたれ、老夫人はマージェルにキツパリと言った。

「まあ、生むのなら覚悟を決めなさい。ご主人のことなど当てにしないで、自分でお腹の子と生きていく、まあ、後家になったつもりでいればいいわ、世の中にはそう人もいるのよ、それとも、お腹の子を始末する？」

「かあさん」と商人がいった、老夫人は厳しい顔をして「まあ、そういう方法もあることはあるのよ。あまり勧められないけど」

「ひよつとして、子供が生まれれば、少しは変わるかもしれないよ。ともかく、あちらに伺ってみよう」と商人がいうあちらとは夫の実家である伯爵家のことだった。

兄も苦り切った顔をした「お前は、運がないな。まったく。しかし、知らせるのは、あいつの乱暴振りだけで、子供が出来たことまでは、ちよつと、待った方がいい」

それからの日々は、息をひそめるようにマージェルは過ごした。

商人の家は商人の父親が健在で、一階では雑貨商を営み、二階には下宿人を置いていた。商人自体は次男で、長男は国務省に勤めてい

た。マージェルは老夫人に実家では教わらなかつた町での暮らしを教わつた。お産を軽くするためだと、色々な用を言い付けた。無論自分もこまめに働いた。そして離婚は難しいかもしれないといった。乱暴を働くぐらいでは、なかなか認められないかもしれないといった。「ここで、暮らせばいいじゃない。どのみち武官の奥様は、一緒に暮らさない方だつているのだし、うちはかまわないのよ」

そして、マージェルは、その家で男の子を生んだ。夫への愛情はなかつたが、無心に自分の乳をすう我が子にマージェルは、この子を守らなければ、強くならなければと思つた。子供の誕生は王都で暮らす夫の実家の伯爵家に知らされた。その前にもマージェルが王都にいることを知らされた伯爵家ではマージェルを引き取ると申し出があつたが、老夫人が、キツパリ断つた。そんなところへいつても肩身の狭い思いをするだけだと。「どうせ、ただで、女中代わりに使つつもりよ。それだつたら、ここにいた方がいいわ。多少はお給金を出しますからね」

実は伯爵家でも、この件は迷惑な話だつた。事を大げさに言い立てるだけだと捉えられていた。ただ、生まれた子の名前は、前伯爵の未亡人が夫の父親にちなんでコーデインと名付けてくれた。そして、夫の赴任地が王都の近くの駐屯地に変わった事を伝えると、ソコクサと帰つていった。マージェルは再び忘れかけていた夫への恐怖を覚えた。そして、数日後、夫は現れた。息が酒臭かつた。コーデインを見ると夫は「本当に俺の子か」と言つた。マージェルは「当たり前でしょう」と言い返した。夫はフンと云つて「そんなことより金をくれ。馬がいるんだ、今度は軽騎兵だから、いい馬がいる」

「そんなお金あるわけないでしょう」
「だつたら、実家から持つてこい」

いわあせた老夫人が「どうやら、お里の方も作柄がよくなつて大変なようですよ」とうそを付いた。商人が勧めてくれた王都での取引はうまくいき、実家の葡萄酒はかなり高値で売れていた。金が

手に入らないと思った夫は畜生といいながら帰っていった。さすがに他人の前で乱暴は働かなかった。

夫の赴任地が代わったことにマージェルは一抹の不安を覚えたが、老夫人が大丈夫と請け負ってくれた。しかし、馬を買うとは大嘘で、夫の放蕩は王都近くに来たことで拍車を掛けていた。遊ぶところはいくらでもあった。そのためのお金だった。

若伯爵夫人が王宮勤めの話を持ち込んできたのは、産後一月も立たない頃だった。

「ねえ、お乳のほうがいいの」と最初は、マージェルへの気遣いかと思ったがそうではなかった。半ば、強引に王宮にマージェルは連れて行かれた。王家では第二王子の妃アンジェラが懐妊し、乳母を捜しているとのことだった。若伯爵夫人はマージェルを女官長のキルマ・パラボン侯爵夫人に引き合わせた。

「お乳の出は、いいそうですね、余るほどだそうです」

女官長は、気むずかしげに若伯爵夫人が貸した服を着たマージェルを見た「ところで、謁見はすませたの。伯爵家の一員ならば、謁見ぐらいして貰わないと」

「謁見はまだしたことはありません」と正直にマージェルはいった。

「あら、侯爵家でしなかつたの？」と若伯爵夫人は尋ねた。これは祖父の方針だった。若い娘が王宮など行ってもろくな事がないと。

兄は一度だけ謁見をさせてもらっていた。

「今は、お宅の一族でしょう。まずは、そっちが先ですよ」といつて女官長は席を立った。

あわてて、マージェルの謁見の用意が調べられた。謁見がすむと再び若伯爵夫人と前伯爵夫人に王宮に連れて行かれた。息子のコーデインも連れてくるようにいわれていた。息子を抱いたマージェルは王太后と第二王子とその妃の前に緊張して立ちつくしていた。ようやく、教わった礼儀作法を思い出し、高位に対する礼をした。

「礼儀作法は、今一つね」と王太后がいった。女官長は「お乳の出はいいそうです。余るくらいだそうです」

その後のやりとりはマージェルは、知らない。コーデインが泣き出し、侍女の一人に連れて出されたからである。退出したマージェルになぜかアンジェラ妃がついてきた。彼女のお腹も妊娠中であることを告げていた。コーデインは乳を与えるとすぐ泣きやんだ、懸命に乳をすう。アンジェラ妃が興味深くそれを見ていた。「お乳の出がいいのでしょうか。わたしもそうだといいのだけど」と羨ましそうにいった。

その日は一旦、伯爵家に戻り、マージェルは、荷物を取りに行くと言う名目で商人の家に逃げ帰った。事の事情をマージェルは老夫人にうち明けた。

「王宮勤めねえ」と老夫人はいった。マージェルはこの家の暮らしが好きだった。平民と変わらない暮らしをしていた彼女には、王宮勤めなどんでもないことだった。しかし、老夫人の長男の意見は違っていた。

「王宮なら、あいつも手を出さないんじゃないか、この間はおとなしく帰ったけど、店で暴れたりしたら」

ここで、マージェルは自分がこの家の好意に甘えすぎていると気が付いた。そこへ、若伯爵夫人が馬車で迎えに来た。

「荷物はまとまったかしら？」

「いえ、まだです」

「早くして頂戴」

「やはり、王宮勤めなんか、田舎者のわたしには無理です」

「何いつているの、謁見までしたのに、それに言いたくはないけど借金があるのよ」

「借金？」と老夫人が聞いた。

「ええ、何でも、馬を買うとか何とかいって、それだけじゃないわ、随分用立てたのよ、うちだって楽ではないのですからね。こんないい話を断って、うちの立場はどうなると思うの」

若伯爵夫人の言葉にマージェルは、王宮勤めを決意した。

王宮で彼女にあてがわれた部屋は他の侍女たちと同室だった。部

屋に荷物を置くくと女官長に再び、コーディンを連れてくるようにといわれた。廊下を周り、階段を下り、また廊下を通り、豪華で広い王太后の部屋に到着した。

「ちゃんとご挨拶をするんですよ」といって女官長は中に入った。

ぎこちなく、息子を抱きながらと高位に対する礼をすると、思いも掛けず王太后は優しい声で「その子は、そこに寝かせなさい」と長いすを指し示した。マージェルが指示通りにコーディンを寝かせた。コーディンはスヤスヤ眠っていた。泣き出したらどうしようとマージェルは、ハラハラした

「キルマ、アンジェラを呼んできなさい」

「はい、国母さま」と女官長は答えたが、部屋に控えていた侍女の一人にまた同じように命じた。

しばらくして、アンジェラ妃が侍女を連れて現れた。国母に高位に対する礼をするとアンジェラは

「なんででしょう、お母さま」と尋ねた

「あなたには、そろそろ母親がどういうものか知ってもらいます。今日はこの子の世話をしなさい」と一旦言葉を切り「この子の名前はなんていうの、えーっとマージェルだったかしら。お前の名ではありませんよ、お前の息子の名前です」

「コーディンです。王太后さま」

「王太后さまのことは、国母さまとお呼びするように」と女官長が注意をした。あわてて言い直す「コーディンでございます。国母さま」

「そう、ともかく、コーディンの世話はアンジェラが今日はしなさい。覚えなきやダメよ。アンジェラ」

「はい、お母さま」というとアンジェラ妃は長いすに寝かせているコーディンを抱き上げようとした。

「だめ、折角眠っているのに起こすの。抱き癖はよくありません」と厳しい声の国母。

こうして、マージェルの王宮務めが始まった。昼間は大概、アン

ジェラ妃の部屋でコーディンと過ごした。アンジェラ妃はあれこれマージェルに尋ねた、その大半はお産のことだった。その辺は、マージェルも気持ち良かった。彼女も初めてのお産だったし、不安で一杯だったから。

アンジェラは次第にうち解けてきて、夫のことを尋ねてきたりした。マージェルは陸軍少尉で軽騎兵だとしか答えようがなかった。「同じ武官ね、こっちは海軍だけど、でも大変、学位をとらなくちゃいけないですって。陛下のご命令でね」

とアンジェラ妃は夫の第二王子について色々話し始めた。マージェルは、ただうなずくだけだった。だが、その話は大部分がのろけだった。夫婦仲の良さはマージェルにもわかった。夕方、部屋に現れると第二王子は人目も気にせず妻を抱き寄せキスをする。クスクス笑いながらアンジェラは「人が見ているわ」

「そんなもの気にするな。今日は、この子は元気だったか」と今度は妻の腹に手を当てる。マージェルは目を伏せた。こういう夫婦もいるのである。いや、自分の方が間違っていると思った。

何日か経って夫が訪ねてきた。夫は上機嫌だった。「お前が王宮務めとはな。俺にも運が向いてきたぜ。ところで、金あるか」

「ないわ」と答えると「けちくさいな」と言い捨てると立ち去った。それが夫の姿を見た最後だった。

マージェルが王宮に来て、約一月立った頃、アンジェラ妃のお産はその日の夜明けから始まり、昼過ぎに王子が誕生した。初産の割には安産だった。そして、心配していた母乳の出もいいのが、わかった。このことは女官長から知らされた。これは、マージェルには悪い知らせだった。乳母という職を失うのである。今さら、あの家には戻れない。ましては、乳飲み子を抱えて実家にも戻れない。

「お願いです、女官長さま、ここを追い出さないで下さい。何でもします、掃除でも洗濯でも何でもします。ここを追い出さないで下さい」とマージェルは泣きながらいった。

「なんだか、事情があるようね」といつもは厳しい女官長が優しい

口調でいった。マージェルは夫のことをうち明けるべきかと迷った。「まあ、いいでしょう。実はもう一人お生まれになる予定なの、ここにいていいわ。折角なれたことだし。また、新しい乳母を捜すのも面倒だから、ここにいなさい、しかし、今までとは違いますよ。色々用はして貰いますよ」

「ありがとうございます」と涙を拭きながらマージェルは女官長に礼を述べた。

今度のマージェルの仕事は王妃の部屋付きという役目だった。王妃も懐妊していた。マージェルはいやがらずにどんな仕事でも引き受けた。少しずつ、王宮の暮らしになれていった。無論、親切な人間もいればいじわるな人間もいた。それでも、夫と暮らすよりまじだった。侯爵夫妻と父も訪ねてきた。コーディンを抱いて現れたマージェルに父は、暖かく抱き寄せ、涙声でいった「苦勞を掛けてすまない」

「いいのよ、コーディンがいるから、大丈夫よ」とマージェルは気丈に振る舞った。侯爵夫人が「何かいるものはない？」と尋ねた。マージェルは首を振った。父はこうなったら、ここでいればいい。時々様子は見に来るからといって帰っていった。

そして、王妃にエレーヌ王女が誕生した。マージェルはエレーヌ王女付となった。王妃も母乳はまずまずだった。マージェルの仕事は、エレーヌ王女の世話だった。王妃も時々していたが、大部分はマージェルがやっていた。

夫の消息を聞いたのはその二ヶ月後だった。師団の馬を売り払い、降格処分を受けたというだった。結局、それは、馬の代金を伯爵家が弁償し、階級を准尉に降格されるだけで何とかすんだということだった。そして、遠くの赴任地に配属替えになったということだった。この知らせをもたらした若侯爵は苦り切っていた。この金はマージェルの実家に出してもらおうとはつきり言った。「あいつは、あんな悪じゃなかった。あんたと結婚してから、悪くなったんだ。夫をほったらかしているからだ」

マージェルは呆れかえった。王宮勤めを持ち込んできたのは伯爵家である。それを何と思った。このことをマージェルは、女官長に思いきって相談した。彼女を第二王女付けにと強くいつてくれたのも彼女だった。

「それは、大変ねえ、でもその位では離婚は難しいわ、不貞行為、わかる？浮気でもして、子供でも出来たら多少は、その理由になるかもしれないけど、どのみち裁判ということになるわ、その覚悟が出来たら、もう一度相談しましょう。いつでも相談に乗ってあげるから」

マージェルは礼を言つて仕事に戻った。そして、再び夫の消息を知ったのは、王妃が二度目の懐妊をした時だった。陸軍の伝令が持ってきた夫の赴任先の師団長からマージェルに宛てた一通の手紙からだ。酒場のケンカで刺し殺され、その裁判に来るかどうかとその手紙には書いてあった。マージェルにはさっぱり訳がわからず伝令に尋ねた。伝令は気まずそうな顔をして詳しい話をしてくれた。夫は酒場兼売春宿で、酒に酔って娼婦をなぐりはじめ、止めに入ったその店の用心棒に夫の剣で刺し殺されたという事だった。先に剣を抜いたのが夫で、それを取り上げようとした用心棒ともみ合いになり、そして、自分の剣で腹を刺され死んだと。そして、今、その裁判がおこなわれている。ただ、夫が剣を振り回し店で暴れ回っているのを見た証人が、いくらでもいるし、相手は素手だった。裁判でも、相手の落ち度はなかったといわれているなど話してくれた。

その後始末は実家の侯爵家がしてくれた。借金も方々にあつたが、何とかそれも決着がついたのは、王妃にリディア王女が生まれた後だった。そして、未亡人となった彼女は、今度は、リディア王女付けとなった。そして、息子のコーディンは、リングート王子の相手役の一人となつていた。

マージェルは、乳飲み子だったエレヌ王女の世話をすること、第二王女には何かしら、愛情も感じていた。しかし、王妃はキ

ツパリと第二王女に自分の事は自分で出来るようにとマージェルとパティス夫人に申し渡ししていた。そして必要があれば、お尻をぶつてもいいと王妃ははつきりいった。呼び方も王女さまでなく、エレーヌでかまわないと。

第一王女が自分には何の権限がないと内心不満に思っていたと同様に、第二王女も自分の待遇を不満に思っていた。この待遇改善に乗り出すべく、第二王女は、その小さな頭を精一杯動かした。それを解決するのは、決まっている。国王への直訴である。無論、第二王女は、その時はまだ、アンドーラの裁判制度などは知るよしもなかったが…

エレーヌは、その直訴の機会を考えた。朝食の席ではまずい、敵も同席する。エレーヌは、パティス夫人にこう命じた「お父さまに大事なお話があるの。どこにいるか聞いてきて」パティス夫人に代わってマージェルが「陛下なら、今の時間、お庭をお散歩させていただきますよ」

エレーヌははたと思い当たった。庭といっても王宮の庭は広い、でも、あそこだとエレーヌは駆けだした。「エレーヌ、走るんじゃないよ」とパティス夫人が追いかけてきた。初老にさしかかっているパティス夫人には少しきつい労働だった。そこで彼女は王女付き近衛兵を使った「王女さまをお止めして」

気の利いた近衛兵が第二王女の服を掴み、服ごと持ち上げた。以前は、第二王女の大好きなお遊びだった。エレーヌはもがきながら叫んだ「何するのはなして、こんなの変よ」すると、ゆっくり近衛兵はエレーヌを床に下ろした。

その間にパティス夫人が追いついた「エレーヌ、廊下を走るじゃありません」そこでもう一言付け加えた「そんなのは王女さまらしくありません。変ですよ」

それもそうだとエレーヌは思った。わたしは王女なんだからと。エレーヌはパティス夫人と近衛兵を従え、しずしずと目的地に向かい始めた。

その朝、第二王女の直訴など思いもかけないアンドーラの絶対君主ジュールジス三世は初夏の朝の外気を吸いながら、日課となっている菜園の見回りへ足をのばした。国王らしくゆったりと歩く。菜園近くで園丁頭のバルカンが出迎える。

「おはようございます。殿」とエンバー出身のバルカンはエンバー出身者らしく国王に声を掛けた。ちなみに、第一王女付きのピラン中尉の母方の祖父でもある。

「おはよう、バルカン」と国王も機嫌良く答えた。それもそのはずである、国政において何ら由々しき事態はおきていない。軍政は、王太子主催の鹿狩りを巡って陸軍と海軍が競い合っている程度である。文政も新しい人事でそれぞれ活気が出てきた。アンドーラは安泰だった。

アンドーラの最高権力者ジュールジス三世はバルカンと並んで歩きながら菜園に足を踏み入れた。それぞれ何を植えたか、どんな種をまいたか、頭に入っている。時々、屈んで、葉の丈を物差しで測る。肥料のことを話しながら、ふと国王の足が止まった。ある区画だけ、土しかなかった。そこには、確か人参が植わっているはずだった。昨日見た時は、青々とした葉が茂っていたはずだった。後、何日かしたら、収穫出来るところまで来ていた。それが、ない。跡形もない。

「バルカン、ここは」といった国王の声が少しうわずっていることに長年仕えてきたバルカンは気づいた。

「ここは、確か、人参だったな、どういう事だ」とやや強い口調で国王はバルカンに詰め寄った。バルカンは「実は、昨日、エレヌ姫が、そのう、引っこ抜いてしまったんで、いや、その時は、バラ園の虫取りをしていたもんで。人参をエレヌ姫が持ってきて、これは食べれるかと聞いたんで、ええとお答えしました」とバルカンはそつと国王の様子を窺った。

国王は呆然と人参が植えられていたあたりに視線を何度も走らせ

ていた。そして、ふと、昨日の夕食に人参が出たのか思い出そうとした。

「殿、もう一度植え直した方がよかったですでしょうか」とバルカンがおずおずと切り出した。

「何てことだ」と国王は呟いた。こみ上げてくる怒りを必死に押さえ込んだ。国王は人参の収穫を楽しみに待っていた。折角だから、王女たちにも手伝わそうと日取りを色々計算していた。それを何だつて…

国王は、体を震わせながら、大きく息を吸った。「バルカン、大きさはどの位だった？」と国王は尋ねた。声が少し振るえているように聞こえたのは、バルカンの気のせいだろうか。バルカンは手でその大きさを示そうとした。

その時、お父さまと呼ぶ声があった。人参が消えてしまった地面を見ていた国王は声のする方に視線を向けた。第二王女がお供を引き連れ近づいてくる。

「コラッ、そこは勝手にはいるじゃない」と国王は怒鳴った。その声は初夏の晴れ渡った空に鳴り響いたという。第二王女の足が止まった。お供も立ち止まった。国王は、大股で、しかし作物を荒らさないように気をつけながら、第二王女に近づいた。第二王女が、かわいらしい仕草で高位に対する礼をした。再びこみ上げてくる怒りを国王は押さえ込んだ。

「おはよう、お父さま」

「おはよう、エレヌ」と国王は、臣下たちを振るえがらせる口調でいった。そして、やはり、臣下たちに冷や汗をかかす視線で第二王女付の侍女のパティス夫人を見た。この、国王の楽しみを奪ってしまったその責任は誰にあるのだろうか」と国王は考えていた。落ち着けと自分に言い聞かせながら、まず、当事者の話を聞くのが先決だと国王は判断した。

ここで、第二王女は作戦上、大失態をした。国王は、微笑んでいた。そこで彼女は、国王は機嫌が悪くないと判断したのである。古

参の閣僚、例えば前大蔵卿のブルツクナー伯なら、その微笑みが、誰かを叱責する時だったり、いわば、機嫌が今一つだったり、そういう時の微笑みだった。史実に曰く、ジュールジス三世は冷然と微笑みながら、勅命を発した。

エレーヌもまずは、可愛らしくにつこりした。その後、眉を寄せ真剣な表情になった「ねえ、お父さま大事な話があるの、とつても大事な話なの」と、人参引っこ抜き事件の主犯は、どうやら、自供を始めたようである。国王はなんだい。話してごらんと促すとエレーヌの話に耳を傾けた。しかし、犯罪者の告白が大概そうであるように自供は身の上話から始まった。

「わたしは、第二王女だわ」とそれは始まった。国王も「そうだな」といって先を促す

国王の無念（前書き）

大事に育てていた人参を畑から引き抜いてしまわれた国王は、事の真相を確かめようと第二王女エレエヌの話聞く。

国王の無念

「わたしは、第二王女だわ」とエレーヌ第二王女のそれは始まった。アンドーラの最高権力者国王ジュルジス三世も「そうだな」と同意した。犯人に自供をさせるコツは相手の話の腰を折らないことである。告白者は続けた「でも、お母さまは、子爵の娘だわ、だから、王女がどうものかわからないのよ。だから、変なことをわたしにさせるの」ここで、国王は、事件の主犯が王妃かと少し疑った。そうだとしたら、事は深刻である。国王は、王妃のいわば、出過ぎない性分が、気に入っていた。何かと口を挟む王太后と違って、国王に非難がましい事は口に出した事はこれまでなかった。それが、今回に限ってと、国王は眉をひそめた。

エレーヌ王女の告白は続いた。いや、正確には告発かもしれない。第二王女は、王妃を弾劾しにやってきたのである。「わたしにお部屋を片付けなさいというの、王女のわたしによ」

国王は、昨夜の王妃の愚痴を思い出した。なんだそのことかと思いながら、国王は、この人参引っこ抜き事件の判決文を頭の中で草案に着手した。裁判において難しいのは量刑である。重すぎてもいけなし、軽すぎてもいけない。無論、死罪は考えていない。父親のジュルジス二世は死刑は慎重にといつていた。ジュルジス三世も同意見である。軽々しく死罪を連発したら、恐怖政治を生む。この場合妥当なのは、説諭であろうか、それとも、お尻をぶつ程度が妥当であろうか。やはり、裁判において大事なのは、再犯防止である。罪を犯したものが、反省し、罪を償い、そして、二度と罪を犯すまいと誓わせる。それにと思った、勝手に人参を引っこ抜いてはいけないと注意してなかった。やはり、説諭が妥当であろうと判断したと同時に、この第二王女の告白というか、告発が長引くのを直感した。これは、国王としてよりも、父親としての経験によるものだった。大体、子供の話は、論旨がめちやくちやである。主旨が相手に

伝わるのは、かなり時間がかかる。そう判断した国王は、場所を移動することにした。

王宮の庭には庭を散歩する人々が、体を休めるため、あるいは庭をゆっくり眺めるためにベンチが随所に設置されていた。そこへ国王はエレーヌを手招きして腰掛ける。エレーヌも隣に腰掛ける。彼女は、自分の待遇改善の話が聞いてくれると内心、自分の思いついた行動にほくそ笑んでいた。その間、お供の移動もあった。ベンチの国王側には、国王付の近衛小隊長が国王のやや後ろの立ち彼は油断なく目を光らせながら手を後ろに回し、待機の姿勢をとった。部下たちは、適度な距離を置いて、やはり、油断なく部署についている。第二王女付けのパティス夫人はエレーヌ王女の斜め後ろに控えた。彼女は、王女の告発が、何であるか推察して検討がついていた。しかし、止めるべきかどうか迷ったが、ここは国王陛下の御前である。口を挟むのは差し控えた。第二王女付けの近衛兵たちは国王に背を向けるべきか迷ったが、結局、国王の御前で直立不動の姿勢を保った。そして、園丁頭のバルカンやはり、事の責任を感じて、やはり国王のやや斜め前に控えた。

エレーヌ王女の告発は続いた。それは、随所に「変よ」とか「変だわ」という言葉が挟まれていた。国王は辛抱強く娘の話聞いていた。国王は、人の意見は聞くものだど父親から、あるいは、母親からもいわれていた。まあ、王太后的場合は自分の意見という場合が多かったが。

王女の話は国王は、頭の中で要点を整理した。つまり、まずは、自分は第二王女なのに部屋の片づけをしなくてはいけない。次に、第二王女なのに妹と同室である。そして、第二王女なのに侍女たちは自分をエレーヌと呼ぶ。そして、第二王女なのに王妃はお尻をぶつと脅かした。ざつとこんなところである。肝心の人参については、言及しなかった。

アンドーラは、論議の好きな国である。国王自身も閣僚たちには十分意見を戦わせて、お互い納得する手段をとっていた。意見を持

たない人間は侮られる。ただ、人の命に従っているだけではと国王は思っている。頭ごなしに命令するより、相手を説得し、納得させる手段を好んだ。当然、国王は、説得術にも長けていた。そこで、穏やかに、王女の告発には、欠点があるのを指摘し始めた。その前に、話はそれでお終いかと確認した。

「エレーヌ、これは、大事なことだが」とこの話が王女付きのパティス夫人の耳にも届くように「そろそろ、わかっても、いい頃だが、王女という身分は、人に色々命じたり、えばったりするのが王女ではない。王女だからといって好き勝手にしてもいいと訳ではない」と諭すように国王はいった。当然である、王女だからといって、勝手に国王の大事な人參を引っこ抜いていい訳がない。

そして、国王は、第二王女を論破し始めた「まず、部屋を片づける件だが、やはり、自分でやった方がいいと思うね。大事なものがどこにしまつてあるかわからないと困るだろう、わたしだってそうしているよ」

「さて、部屋の件だが、当分は、リディアと同じ部屋を使いなさい。姉妹仲良くしなさい。いいね。二人分は十分ある広さだ」

「でも、わたしは、第二王女なのよ、そんなの変よ」

「エレーヌ、第二王女というのは、宣誓式をすんでから正式呼ばれるようになるんだ。まだ、エレーヌは第二王女の見習いというところだ。まずは、王妃やその他の人のいうことをよく聞かなきゃダメだ。お前より色々な事を知っているんだからな、ちゃんと、お母さまのいうことをまず聞く、それが、大事だ。いいね。それより」と国王は事件の現場の方を指さした。

「あそこに植えていた人參を知らないか。エレーヌ」と国王は事件の真相説明に乗り出した。

「ああ、それなら、ちゃんと育てているか確かめようと、思って、抜いて確かめたの。人參だなんて知らなかったわ、がっかりしちゃった。わたし、人參なんて大嫌い」

と無造作な王女の口調に、国王は、思わず、自分が、カッターとな

るのを覚えた。冷静沈着を心がけていた国王にはかつてないことである。頭の中が熱くなつたのは、初夏の日差しのせいばかりではなかった。やはり、犯人は、この娘だったのかと、怒鳴りたい自分を押さえ、国王は、落ち着けと自分に言い聞かせた。国王は、人參に關して、自分自身も、引っこ抜いてその成育振りを確かめたいという自己の欲求と戦いながら、その収穫を日々数えてその日を楽しみにしていた。それを何だつてこの娘はと思った。しかし、事件の全容説明も大事である。

「それを抜いて、どうしたんだ」と国王の語気は鋭くなかつた。むしろ、がっかりした口調である。

「バケット少尉にあげたの、見たくもないからと思つて」と王女の口調は、国王の心理とは逆にどうでもそんなことはどうでもいいたろうといった風である。それもそうである第二王女には罪の意識が欠如していた。

国王は前にやや所在なげに立っている王女付けの近衛兵に鋭い目を向けた。最初は、直立不動の姿勢を保っていた彼らも、王女の話が長引き、少しだらけた姿勢になっていたが、国王の視線にあわてて姿勢を正した。「バケット少尉はどいつだ」と今度は少し怒鳴り声である。人參の行方はいずこに？その行方を知っているのはパケツト少尉である。

「あの、陛下、バケット少尉の勤務は午後からで」とパティス夫人が、口を挟んだ。国王は声の方を振り返つた。犯人は、犯行を自供した。ヒヨツとしてパティス夫人も共犯者かもしれない。

「パティス夫人、君もその時、そこにいたのか。つまり、エレエヌが、人參を抜いた時」

パティス夫人はアリバイを立証し始めた。彼女は、「人參引っこ抜き事件」の事は今初めて聞かれたが、何となく、王女が、まあ、いたずらというか、何かしでかしたのは察しがついていた。「陛下、わたくしは、午後、王女さまの海洋大会のご衣装の手直しで、メレデイス王女さまのお部屋にいておりました。その間、王女さまの

ことはバケツト少尉にお願いして算数と馬のお稽古をお願いしておきましたか」

「君、ジャンク」と国王は自分付の近衛小隊長を肩越しに呼んだ。

「バケツト少尉にエレーヌに渡された人参をどうしたのか、報告にさせに来なさい。そうだな、午前中にでも、執務室に来たら、通すように。直に話が聞きたい」

「ハツ」とジャンク小隊長は姿勢を正し敬礼した。

エレーヌはまだ、事の重大さを認識していなかった。彼女は直訴の失敗で頭が混乱していた。宣誓式かと口をすぼめ、リングート王子がそれを待ち望んだように、彼女もそれまで待遇改善はないのだろうかとまだ、不服だった。そんなの変よ、気はそつちにいつて、事件を起こしたことの反省の色はなかった。国王は、実行犯の説諭に取りかかった。彼女は誰かに教唆されその犯行を犯したのではない。自らの意志でその犯行に着手した事が判明している。

「エレーヌ、勝手に人参を抜いたりしたらダメだ。いいか、勝手に草を抜くのもダメだ。わたしか、バルカンに聞いてから、やりなさい」

と、ここで、自分の名前がでたことでバルカンは口を挟んだ。彼は、国王の気持ちを探していた。「殿、よろしいでしょうか」とまづ、国王の許可を求めた。彼は自分の失態を認識していた。

「何だ、バルカン」と説諭を中断された国王は、バルカンが、犯人を庇うのではないかと思った。しかし、それは違った、再犯防止策を奏上したのである。だてに、王家の園丁頭ではない。

「やはり、菜園の周りには、柵をこしらえた方がいいと思います。こういっただらなんですが、リングイ若のところの悪ガキどもが、いたずらでもしたら、困りますから、年がら年中、見張っている訳もいらないですから、何、今日中にやっておきます」

国王はこの再犯防止策を検討し始めた「そうだな、そうしてくれるか。それと、立て札を立てなさい」と国王の癖である、臣下の提言にもう一工夫する癖がでた。国王であるためには、臣下よりも優

れているところを見せなくてはならない。

「立て札でございますか」

「そうだ、国王の許可なく立ち入ったものは厳罰に処すと書いておきなさい」とここで、国王は少し考慮した「紋章を入れるまでには及ばないと思うが」と、しかし、終始徹底させるのは、その方がいいだろうか、まあ、そこまではいきすぎだろう。最初はその程度でいいと判断した。「じゃ、そうしておいてくれ」

「へい、わかりました。あと、あの茄子なんですけど、聞いてみたら花を間引いた方が実が大きくなるということですが」

国王は立ち上がった。それは、まだ、見回ってないところだった。足早に、バルカンが指摘した場所に移動する。無論、身辺警護の近衛兵も移動する。そこで、まだ、事件の反省が足りなかったエレーヌ王女は、また「変」なところを発見した。国王を追いかけながら「ねえ、お父さま、なんで、わたしの護衛は重騎兵じゃないの、変だわ」

茄子の件に気をとられていた国王は立ち止まらず「それは、宣誓式が済んでからだ」とだけ言った。国王というのも楽ではない。王妃の愚痴や王女の文句も聞かなくてはならない。だが、ここは有能な臣下が揃っているアンドーラである、王女付のパティス夫人が王女を「さあ、王女さま、まいりましょう、陛下のお邪魔になりますから」と日課をきちんと過ごさせようと引き戻した。おかげで、国王は、茄子の件に集中出来た。

第二王女が自分の待遇改善を国王に直訴という手段をとったのは違い、第一王女は、自身の待遇改善より、救貧院にいる《治療師》の見習の待遇改善に乗り出そうとしていた。無論、自身の力ではどの程度出来るのかは疑問だったが、提案ぐらいは出来るだろう。昨夜、思いついた海洋大会とは別な案が、寝起きのセシーネの頭の中に浮かんだ。検討してみるとなかなか妙案にも思えた。寝台から起きあがり、伸びをした。寝台から、でると、侍女たちがやってき

た。挨拶がすむと、セシーネは、朝の身支度を始めた。セシーネが選んだのは作朝、選んだのと同じズボンであった。その間、メリメがカーテンを引き、ナーシャとタチアナが寝台を整える。このことも、タチアナは不満だった。子爵令嬢の自分が第一王女の部屋の掃除を手伝わなければならなかった。エレーヌの言葉を借りれば「変よ」といった心境である。だが、口には出したことはなかった。救いは、王太子の存在だけだった。

部屋の後かたづけが今一つの第二王女とちがい、第一王女はきれい好きだった。侍女の不満などセシーネは関心がなかった。それより、今朝思いついた事についてやはり情報が必要であろうと判断した。

「ナーシャ、図書室に行つて、王都近辺の地図を探してきて頂戴。多分、図書室にあると思うわ」

「それなら、わたしがいつてまいります。図書室ですわ」とタチアナは箒を放りだした。図書室？そこは昨夜、王太子と直接ではないが、言葉を交わしたというか、声を聞いた場所である。ナーシャにその機会を奪われてたまるかと、タチアナは、大慌てで高位に対する礼をすると王女の部屋を飛び出していった。

その様子を見ていたメリメが「よほど、掃除が嫌いと見えますわ」と皮肉った。メリメの目には雑用をいやがらないナーシャと違い、タチアナは、今一つだと映っていた。ここでも、タチアナ嬢の評判は今一つよくないようである。

セシーネは、黙っていた。ここで何かいえば、タチアナの立場が悪くなる。

「後、ここは、お願いね」といって、愛馬フィードの世話をしにズボン姿の第一王女は自分の部屋を出ていった。

ナーシャは、珍しく自分から王女の用を引き受けたタチアナの真意を測るどころではなかった。ナーシャも自分の事で精一杯だった。夜遅く、女官長のメレディス第四王女から、ようやく開放されたナーシャにタチアナは海洋大会の席次の変更だけしか話さなかった。

それについてナーシャは、取り立て不満はなかった。ナーシャは、それよりも別な事に気をとられていた。伯母の侯爵夫人の好みは地味で、どちらかというと実用一点張りだった。それに引き替え、何と違うのだろう。伯母が見たら、昨夜の自分を何とこのだろうとナーシャは、少しぼんやりとしていた。

タチアナは、王宮の廊下を図書室に向かいながら、何となく髪に手をやり、はやる気持ちを押さえかねていた。朝、起きてから、化粧もそこそこに第一王女の部屋へ伺候しなければならなかった。しかし、今のタチアナの胸は弾んでいた。王太子にどういえばいいのかしらと色々考えていた。タチアナは、王太子の日課など知らなかった。王太子の姿を見たかったら、別な場所へ行くべきだった。

図書室の前には、タチアナの期待に反して、護衛の近衛兵の姿はなかった。廊下の端に歩哨の近衛兵が立っているだけだった。期待が大きかった分、失望も大きかった。タチアナは半分がっかりしながら図書室の扉を開いて中に入った。そこには、夕べとは違い、誰もいなかった。そして、第一王女の用はなんだったつけと思い出そうとしていた。そう地図だっけ、えーっと王都近辺の地図、王太子にいうはずだった言葉を思い出しながら、タチアナは立ちすくんだ。そこには、実家の子爵家とは比べようがないほど膨大な書籍が書棚に並んでいた。どこをどう探していいのかタチアナには検討がつかなかった。結局、ナーシャが探しに来るまで、タチアナはそこで茫然としていた。

夕べ、国王と同様、自分の妃から、子育てについての愚痴ともらえる話を聞かされたヘンダース第二王子は、やたら寂しがる妻に、そうになったらもう一人、作ればいいじゃないかと持ちかけてみた。アンジェラ妃も、その点は、異存はなかった。そういう訳で、ヘンダースは、充実した夜を過ごし、その後、満足な気分ですぐ熟睡出来た。熟睡すれば、快適な目覚めが、やって来る。体調は悪くなかったが、やはり、色々、算段しなければならぬこともある。朝の身支度を整

えると、その算段を胸に王宮の厩舎へ向かった。そこには、自分の愛馬が待つてゐるはずであった。

王宮の朝は、早い。あちこちにそれぞれ用をこなすために、廊下を忙しそうに行き交う人々の姿があった。それでも、護衛を引き連れた第二王子に足を止め、高位に対する礼をする。返礼はしない。いちいち立ち止まり声を掛けては、目的地へたどり着くのに、一時間はかかるかもしれない。第二王子が厩舎にたどり着くと、そこには、すでに国王の愛馬にかいがいしく馬櫛で毛並みを整えている馬丁頭ホルカットの姿があった。「おはよう」と声を掛けると、ホルカットは手を休めずに「おはようございます」とだけ答えた。大體は、いつも通りである。ヘンダーヌも自分の馬の世話に取りかかった。

「なあ、ホルカット、この馬も大分くたびれてきたと思わないか」「なあに、まだ、大丈夫でございますよ」と見もせずにホルカットはいった。

「そうかな」とヘンダーヌはいった。第二王子の算段とは、この馬を自分の馬を欲しがっている息子のリングート王子に与え、新しい馬を購入するべきかどうかである。少し、息子に甘いかなと思つたりもするが、王太子主催の鹿狩りには、いい馬で行きたかつた。

そこへ、ズボン姿の第一王女が、到着した。別に式典ではないので、式部官が、その到着を告げることはない。「おはよう」といいながら、セシーネは厩舎に入ってきた。第二王子の姿をみると「おはよう、叔父さま」と第一王女はいった。ヘンダーヌは、ズボン姿のセシーネに少し批判がましい目をむけてから「おはよう、セシーネ」と答えた。セシーネも自分の馬の世話に取りかかった。それを横目でみながら、そういえば、リングートも馬の世話をするはずじやなかつたかとヘンダーヌは思い出した。

「なあ、ホルカット、この馬だつて、陛下に売りつけられたんだぞ」と第二王子の口調は少し愚痴っぽかつた。

「へえ、そんなんで」とホルカットは、特に第二王子に同情は見せ

なかった。

「つまり、財布は別つてやつさ」とヘンダースは馬丁頭にうち明けた。第二王子は結婚を機に侯爵位を授けられていた。ただ、これは位だけで、侯爵領はなく、いわば年金のような形で手当がでることになっていた。その他に収入は海軍からの大佐としての給料である。兄の国王からは、これで、各種の費用を賄うように申し渡されていた。いわゆる食費まで請求はされなかったが、それは、アンジェラの衣服から始まり、自分たちの世話をする侍従や侍女たちの手当など、それまで、金銭に無頓着だったヘンダースの意識を変えた。第二王子は家計のやりくりを自然と覚えざるえなかった。なお、護衛の近衛兵の費用もその中には、含まれていなかった。そこまで、請求されたら、第二王子は自分の地位を投げ出したかもしれない。家族が増えるたびにヘンダースが自分の自由に出来るお金は少なくなつていった。いい馬は欲しかったが、やはり、そう簡単に手にはいりそうにもない。世間の人々と同じで財布と相談である。無論、馬泥棒まで、第二王子は考えてはいない。ふと、自分の馬が牡馬であり、セシーネの馬が牝馬であることに気がついた。手を休め、そちらに近づいた。

「いい、馬だな、セシーネ」

第二王子の目論見に第一王女は気がつかず勘違いの返事をした。「だめよ、叔父さま、フィードは気にいつているの、貸さないわよ」「そうじゃなくて、牝馬だろう、その馬は」と第二王子はいった。第二王子の遠大な計画に馬丁頭のホルカッツは気がついた。王宮の馬の管理は彼の責任だった。それは、馬同士を掛け合わせて、子馬を誕生させる事も彼の仕事の一つだった。

「まだ、早いですよ。」とホルカッツは、季節的にも、馬齡的にも早い事を指摘した。そんな訳で、リングート王子が自分の馬を手に入れる日は、再び遠のきそうである。

「それより、殿下。ちよつといいたくはないですがね」とホルカッツは、苦情を言い始めた。

「リングート殿下のお相手の方々の事なんです、勝手に馬を持ち込んで、世話はしないわ。飼葉料は払わないわ。よっぽど、追いついてしまおうかと思っていたりするんですがね」

馬丁頭の飼葉料という言葉にヘンダースは、少したじろぎ、家計のやりくりに再び、頭を悩ませた。しかし、ホルカットの主張は違っていた。馬の持ち主が、その費用を負担すべきだと。なるほどと思いつながら、馬丁頭の言葉に第二王子は耳を傾けた。

そこへ国王から、馬の世話を命じられていたリングート王子が姿を現した。勅命を無視するほど第四王子は愚かではなかったし、それに気になることもあった。挨拶もそこそこに「ねえ、姉上」とリングートはセシーネに「今日も、フィードに乗っていくの」と尋ねた。

「そうね、悪いけど、そうするわ」とリングートの期待に反してセシーネは無情にいった。リングートは、ため息をついた。

さて、父親になったばかりのランセル王子は、乳飲み子を抱える暮らしに少しずつ慣れてきた。無論、大変なのは母親のネリア妃である。夜明け近くに授乳のため、侍女に起こされた。当然、寝台を共にしているランセル王子も目が覚めた。ネリアが、授乳のため寝台からでて、王女の部屋へ行くのを見送った後、自分は、もう一寝入りしようかと思ったが、あまり寝坊しては、ネリアに文句を言われるかもしれないと思い、起きることにした。しかし、赤ん坊というのは、泣いているか、眠っているかどっちかだなと思いつながら、呼び鈴のひもを引っ張った。

古株の侍従が入ってきて「今朝は、お早いですね」といった。

「おちおち、寝てられるか」といいながら、ランセルも朝の支度に取りかかった。昨夜は、盛り上がったなとランセルは思った。陸軍元帥の提案の一部は王太子を喜ばせた。しばらくは「軍」の勉強をしようと思っていると王太子はいつていた。王位を継ぐのは楽そうではないなとランセルは思った。しかし、学位を修得したらという

陸軍元帥の助言は、少し気が重かった。いったい、どこから手を付けていいのやら。しかし、兄貴の鼻をあかしたいしとランセルは思った。兄貴とはヘンダース第二王子である。国王は、陛下か、精々兄上である。国王より十二才年下の第三王子は、国王より、エドワーズ王太子の方が年が近かった。国王は王太子時代からランセルの目には大人びて見えた。いわゆる兄弟げんかは国王とはなかった。その点、第二王子とは、子供時代、とつくみあいのケンカをしたこともある。もちろん、体の大きいヘンダースが勝ったが、ランセルは、悔しがり、泣きながら、父のジュールジス二世に訴えた。第二王女が国王に直訴しように、彼もその手にでたのである。温厚なジュールジス二世は、両方の言い分を聞き、第二王子に少し手加減をするようにといった。それは、第三王子には侮辱だった。どうしても、兄貴に勝ちたいと子供心に誓ったのである。しかし、年齢の差は大きかった。なかなか、勝てない。それで、熱心に武術に取り組んだ。その差は縮まったように思えた。しかし、学位とは。なんとなく、畜生めと思う。今度は、学問で張り合わなくてはならないのか。まあ、国王も大変なら、王子も大変である。

しかし、鹿狩りも大切であるランセルは思った。愛用の弓を手に部屋を出て王宮で弓術の稽古に充てられている場所へ向かった。そこには誰の姿もなかった。少し、早かったなと思いつながらランセルは、的に向かい矢を射り始めた。矢筒の矢が空になると、護衛に命じて回収させる。もう一度矢を射る。それを何回か繰り返しているうちに、軽騎甲冑の王太子やリングート王子、そしてリングート王子のお相手役の少年たちもやってきた。鹿狩りのうわさを聞きつけてどうやら、王宮は弓術ばやりのようである。リングート王子の使っている弓は、子供でも引けるように小振りに出来ていた。それは、かつては、リングートの父親のヘンダース第二王子が使い、ランセルが使い、幼かったエドワースが使っていたものだった。王家は、服でも、様々な身の回りの品は、使い回しである。特に、子供時代はその傾向が顕著である。

ランセルは、弓術の色んな技術を確かめようと、姿勢を変え、色々試してみる。多少は、王太子を始めとする年少者に見せつけてやれという気もある。武術の好きなランセルは、無心に矢を射り続けた。そこで、護衛の近衛隊長が咳払いをした。振り向くと、「そろそろお時間では」といった。ランセルの朝の日程は他にもあった。肯くと、「じゃあな。エドワーズ」と王太子にいつて、その場をでた。ランセルのその予定とは、国王の剣術の稽古相手である。だが、約束の場に国王はいなかった。大概是、少し待たされる。国王を待たすほど第三王子は、尊大ではなかった。

そこでは、馬の世話を終えた第一王女がすでに剣術の稽古に取り組んでいた。武官でもあるランセル王子の目にはセシーネの剣術は初心者域を出していない。しかし、剣捌きは、妙な癖がなくていいのではないかと護衛の隊長と論評しながら、国王をランセルは待った。「何しろ、女王の国だからな。アンドーラは」とランセルは自分の護衛隊長にいった。剣術に熱中しているセシーネを眺めながら「だから、女でも武術をするのさ」と肩をすくめた。

第一王女は、頬を紅潮させている。姉のメレディス王女が、気がついたように、ランセルも第一王女の容貌には気がついていて、しかし、姉と同様に、男など何するものぞ、の気迫である。やれやれ、思いやれるなとランセルは、気の強い王家の女性たちを思った。

その朝、いつも、規則正しい国王はなかなか姿を見せなかった。その時、国王は人參引っこ抜き事件の真相解明と、第二王女の弾劾の処理におわれていた。多忙な国王である。

さて、一件落着とはいかなかった国王の胸の中には、菜園から、剣術の稽古に充てる場所に移動する間、再び、人參の収穫を第二王女に横取りされた無念さが甦っていた。人の計画を台無しにして国王は思った。その時、国王は知らなかった。アンドーラよりも、厳罰主義の国があることを、いや、正確に言えば、罰則規定が、少し異なっていた。それは、鞭打ち刑の多用という、アンドーラでは、あまり例がないやり方である。国が違えば、法に違ってくる。第二

王女は運がよかったかもしれない。そのことをその時知っていれば、鞭打ちの刑をジュールジス三世は採用してかもしれない。茄子の件も第二王女を救った。

国王の登場にそれぞれが、その場で、アンドーラの最高権力者にふさわしい、高位に対する礼をした。陸軍武官であるランセルは陸軍式の敬礼をした。ランセルは、ズボン姿のセシーネの礼がなんだか少し、滑稽に見えた。しかし、口には出さない。国王は、足早にランセルに近づくと、「おはよう、ランセル、今朝、わたしは機嫌が悪いんだ」と正直にいった。ランセルは、一瞬、自分が何か、国王の叱責をかうようなことをしたのかと不安になった。確かに国王は、機嫌がよさそうには思えなかった。夏の暑さのせいか、少し、紅潮して見えた。

「君のせいではない」と公明正大な国王は、末弟に彼には何の咎がないこと告げた。ランセルは、幾分ホツとした。国王は第一王女が不満のはけ口に剣術に求めたの同様、人参引っこ抜き事件のやり場のない気持ちを剣術の稽古にぶつけることにした。「だが、ランセル、今のわたしの気分は攻撃あるのみだ」といいながら国王は剣を抜いた。第三王子の顔に緊張が走った。普段、国王との剣術の稽古は、攻撃はランセルの方がもっぱらで、国王は受けるだけだった。

ランセルが使う剣も国王にケガを負わせないように少し、刃先をなまくらにさせている。しかし、国王の今、抜いた剣は、研ぎすまされてあることをランセルは知っていた。まあ、いいかとランセルは思った。多少の切り傷ぐらい、セシーネに頼めば、あつという間に治るんだしとランセルも稽古用の剣を抜いて構えた。

剣術の稽古に費やした時間は、国王よりランセルの方が多かったかもしれない。しかし、腕前も稽古量に比例するか定かではないが、今朝の国王の剣には気迫が籠もっていた。受けに回りながら、ランセルはたじたじとなっていた。ついに、庭の植込みの際までランセルは追いつめられていた。「ちょっと、待って下さい。息が切れた」「体が鈍っているんじゃないか。だらしないぞ」という国王も息が

弾んでいた。汗を拭いながらランセルは、場所を国王と入れ替えた。再び、国王の攻撃が始まった。ランセルは、防戦一方である。これは、侍従長が、朝食の用意が出来たと知らせに来るまで、続いた。国王の機嫌を知ってか知らずか、侍従長は「陛下、お召し替えなされますか」といつものように尋ねた。国王は、汗びっしょりだった。「そうだな」といって剣を鞘に戻すと足早にその場を離れた。ランセルも稽古用の剣を鞘に戻し、去っていく国王に敬礼をした。しかし、国王の機嫌を損ねるとは、何であろうかとランセルは、思った。まさか人參ごときに、冷徹な国王がむきになっているとは、第三王子もその時は知らなかった。国王がその話を末弟にしたら、第三王子は、吹き出してしまったかもしれない。まあ、国王も、その時はランセルにうち明けなくてよかったのである。やはり、国王にも面子というものがある。十二才年下の弟に自分の失敗というか、失策を笑われたくはなかった。まあ、この事件は、アンドーラの安泰を揺るがすような大事件ではなかったが、それにしても、国王にとっては癪にさわる事件であった。それに、まだ、真相解明まで、もう少し時間を要したのである。

汗を拭い、着換えても、国王の気分はさっぱりしなかった。自分でも未練がましいと思うので、侍従長にも、人參の件は話さなかった。広い王宮を食堂に向かった国王を途中の廊下で王妃が、待っていた。これもいつも通りであった。食堂には、王家の六才以上のものが国王夫妻を待っていた。食堂にはいると、声をそろえて「おはようございます、陛下」とこれも、いつも通りの習慣である。国王はただ肯いただけだった。機嫌が今一つなのは、王妃には何となくわかった。軽騎甲冑の王太子が「陛下、よろしいでしょうか」といった。不機嫌そうに「何だ」と国王はいった。「ちよつと、席を替わりたいので」と王太子はいった。王太子の席は国王の右隣である。まさか、機嫌の悪い国王を避けた訳ではあるまい。「ちよつと、ランセル叔父上と話がしたいので、ネリア、悪いけど席を替わってく

れないか」と王太子はいった。「よかろう」とおもむろに国王は許可を与えた。席を替わってくれといわれたランセル王子の妃ネリアは、躊躇した。「いいから、替わってやれよ」と夫は無造作にいった。王家に嫁いだネリアにとって、国王と食事の席を同じにするのは気が張ることだった。なるべく、目立たないようにしていた。それが、国王の隣の席とは、気が重たいことである。国王はすでに着席していた。ネリアと王太子以外、それぞれ、自分の席に着いた。食卓を回りながらすれ違う時、王太子は「悪いな。ネリア」と謝った。「いえ」とだけネリアは小声で答えた。王太子とネリアが席に着くのを待つて国王は「いただきこう」といってスプーンを手にした。思わず目の前の皿の上に人参があるかどうか確認していた。幸か不幸か人参はなかった。

国王を始め、王家の人々はいつものように朝食に取りかかった。王妃は機嫌の悪そうな国王に話しかけずに「ねえ、メレディス、馬に乗るのは、やはり、ズボンじゃなくて何か、いい方法はないかしら」と第四王女に話題を振った。

「そうねえ、女乗りという乗り方があるの。鞍が違うけど、結構、難しいのよ」と武術好きなメレディス王女は、話題に乗った。王子とランセルはひそひそと話し込んでいる。それを横目でみながら、第二王子は息子の様子を探った。国王の機嫌は、ランセルから、国王が食堂に現れる前に警告されていた。その原因が何であるか第二王子は、検討もつかなかった。自分や自分の妻子に非があれば、叱責は覚悟しなければならぬ。兄の国王は、公明正大あると思っていたし、そう心がけているのは、第二王子もよく理解していた。リングートのいたずらでなければいいかとヘンダースは、思った。

しかし、第二王子の息子は、しよげていた。リングート第四王子は、馬の件でも、そして、鹿狩りの件でも、がっかりの連続だった。エドワーズから、騎射も出来ないのに鹿狩りなんてとんでもないと、はつきりいわれてしまった。まあ、出来るようになったら連れて行ってもいいが、兵役の年齢まで待つんだなと釘を差されてしまった。

宣誓式が十二才なら、兵役は志願兵でも十六才である。まだ、七才のリングートには気が遠いほどの歳月である。幸いに嫌いなほうれん草はその日の朝食にはでなかった。無論、おねだりの時間でもないのは、リングートにはわかつていた。

不機嫌な国王をおいて、朝食の話題は馬術とそれにふさわしい服はどうあるべきかと話と、いささか、密談じみた王太子と第三王子の会話に終始した。国王は不機嫌な眼差しをその原因を作った第二王女に向けた。人参引っこ抜き事件の首謀者は、改悛の情を見せることもなく、犯罪者がよくあるように、まるで自分が悪いことをするのは世間が悪いのだといった風にふてくされていた。それまで、黙々と食事をしていた国王は「エレヌ、その顔は変だよ。ちよつとも可愛くない。後で、鏡を見てごらん」とチクリといった。エレヌは、びっくりした顔をした。愛情はあつたが、それにしても、子育ての難しさよ。それは、順番というものだ、国王は思った。自分は、手にかかる子供だったのか、記憶をたどつて見た。そういつたことは、あまり言われた覚えが国王にはなかった。母はずでにこの世になく、温厚な父は、依然その消息がつかめなかった。そして、気になるのはやはり、人参の行方である。もし、昨日の夕食にそれが出ていたらと、国王は考えた。知らずに食べていたらやはり、それはそれで癪である。それで、王妃にもその時は、国王は尋ねなかった。国王がエレヌを見たのは、一言いった時だけだった。朝食の場にいわせた人たちには、国王の不機嫌な理由が、何一つつかめなかった。こういう時は、話しかけない方がいいに決まっている。食事をしながら、お叱りを賜るのは、誰でも、避けたいものだ。食欲が減退する。国王は、大方、食事をすませ、お茶のお代わりを茶碗をスプーンでチンと叩いて、給仕役の侍従に知らせた。侍従がすり寄つて茶碗にお茶をついだ。空腹は満たされたが、やはり、満たされないのは、人参の行方に対する国王の探求心である。やはり、この件は、人参がどうなったのか気になる。子供たちにも、愛情はあつたが、人参にも愛着心が余計募つていた。お茶をゆっくりと飲

みながら、国王は、食卓を見回した。何となく、皆が目を合わせようとしのないのには気がついていていた。この場で、第二王女を叱責して、不機嫌な理由を何となく、知られたくはなかった。自分でも、大人げないと思ったり、いや、一時が万事だと、珍しく、国王の心境は千々に乱れていた。いつの間にか、会話は、エドワーズとランセルのひそひそ声だけになった。国王は、懐中時計を取り出し、時刻を確かめた。国王が、朝食の席をすぐ立たないのは、その間、それぞれ、お付きの侍従や侍女・近衛兵たちが別室で食事をしているからである。いつまでもくよくよしている自分が国王は少し情けなかった。王太子は、鹿狩りしか眼中にないようだし、ここで、ふと国王はちよつとひらめいた。

「なあ、エドワーズ。どうせなら、鹿狩りの後、祝宴を開くなら、君の手で鹿を料理して見たらどうだ、鹿肉はなかなか美味だしな、検討してみたらどうだ」

「そついは、いいや。なかなか、妙案だな」と少し、国王に迎合気味の第三王子である。国王の提案にやや戸惑い気味の王太子は、「料理なんてやってみたことはありませんよ」

「この際、何事も経験だ。無理にとはいわんがね」と国王の口調は、平坦だった。

「なかなか、面白そうじゃないか」とやはり、第二王子も賛同した。「どんな料理があるのかな」とエドワーズは何となく、嫌とはいえなかったし、そう嫌でもなかった。

「多分、あぶり肉あたりが妥当じゃないか」とランセル王子は提案した。エレーヌはここでまた国王の怒りを買う発言をした。「そんなの変よ」

「少しも変じゃないさ。男の料理の方がうまいんだぞ」とランセル王子は、国王の提案に異議を唱える第二王女の意見をきって捨てた。ランセルは、軍学校時代に皿洗いはしたことがあるが、料理はしたことがない。やはり、なにやら、面白そうだった。「なあ、やろうぜ、エドワーズ。お前がやらないなら、俺がやる」とランセル王子

は大乗気である。やはり、何事も経験だとランセルは思った。

「肉を焼くぐらいなら、君たちにも出来そうだな。ただ、目を離したりせずに見張っていればいいのだからな。まあ、生焼けと焦がしすぎないようにな」と第二王子は少し助言じみた発言をした。第二王子も料理経験は皆無だった。しかし、弟のように無造作に料理をしたいとはいえなかった。しかし、国王の機嫌はいいのか悪いのか、まあ、それは計りかねたが、少なくとも、ひどく悪い訳ではなさそうだ。国王は再び懐中時計を見ていた。

そろそろ、お供が戻ってくる時間だと判断した国王はようやく、席を立った。他の者たちも一斉に立ち上がった。食堂の前には、国王付のジャンク少尉に率いられた近衛騎兵が待ちかまえていた。王妃といつものように腕を組み、国王は食堂をでた。廊下を歩きながら、王宮から、新宮殿と呼ばれる方に向かってゆっくりと歩き出す口をつぐんでいた国王が、王妃に事の真相の一部を話したのは幾つか廊下を曲がった時だった。「エレーヌにも困ったものだ。王女というのは、好き勝手していいものだ」と勘違いしている。子供じみたわがままは、許さぬ方がいい」

「まあ、そうですね」と王妃は、朝食の前にエレーヌ王女たちの部屋を見に行った事で、多少は検討がついていた。部屋に戻ってきた第二王女付けのパティス夫人から、王女の行動についてそれとなく聞かされていた。王妃は、戻ってきた第二王女に部屋の掃除を命じた。第二王女は不服を申し立てたが、王妃は「セシーネだって、あなたの年頃には、ちゃんとお部屋のお掃除を上手にしていますよ」といってエレーヌの申し立てを却下した。やはり、夫の不機嫌は、エレーヌのわがままにあると王妃は推測した。しかし、国王を不機嫌にさせているのが、そのほとんどが、人参を勝手に引き抜いたエレーヌの行動にあるとは、王妃も予想が出来なかった。

「エレーヌは、人参が嫌いだそうだ」とここで、国王はクスクスと笑った。「リングートはほうれん草が嫌いだというし、食べ物が好き嫌いは、感心しないが、料理法を少し工夫してみてもどうだね」と

国王は王妃に持ちかけてみた。王妃は「それも、そうですね」とだけいった。王妃の趣味は料理でもあった。王妃の趣味としては無難な方であろう。

「ところで、昨日、菜園で何が起こったか、パティス夫人に、聞いてみたかな」とさりげなく国王は尋ねた。

「いえ、伺っていませんけど」

「後で、聞いてみるといい」と国王はここで、組んでいた王妃の腕をそつと引き抜いた。いつも、王妃と別れる場所にでたからである。王妃は「いつてらしゃいませ」と新宮殿に向かう国王に立ち止まりいつものようにそこで見送った。手を挙げそれに答えた国王は、国政が待っている自分の執務室へ向かった。

国王は回廊を歩きながら、「ジャンク、人参の件は、パケット少尉に報告するように伝えたかな」と確認した。

「はあ、伝えましたが」と油断なく目を配りながら、ジャンク少尉は答えた。パケット少尉は昇進したばかりで、国王の命に少しばかり、驚いていた。ともかく報告に來いと古参のジャンク少尉はそう命じた。

「たかが、人参ごときにむきになっていると思うか」と国王はさりげなくジャンク少尉に尋ねた。国王付けという任務上、国王が熱心に菜園に取り組んでいるのをジャンク少尉は知り得る立場にいた。それは、芝生が植えてあった場所を菜園に変える作業から、始まった。芝を剥がし、土を掘り返す作業を見守っていた国王は「ちよつと、貸しなさい」といつて、園丁の一人から、鍬を取り上げ、自ら耕し始めたのである。無論、諫める立場にはジャンク少尉はなかった。諫める事とも思えなかった。

「なかなか、難しいものだな」といつて国王は手を休めた。

「やはり、コツがあるんでさあ」と園丁頭のバルカンはいった。国王の何にでも手を出す性分は知り抜いていた。鍛冶場仕事に手を出して、鍛冶頭から、たしなめられたことすらある。まあ、何にでも手を出すといつても、女性に関しては二人の王妃だけである。

ともかく、菜園の形が整うとあれこれ指示を出したり、バルカンの意見を聞いたり、土をわざわざ入れ替えさせたり、野菜類の種をまくのも国王が自分でやった。その後も、毎日、菜園を熱心に見回り、今日という日まで特に問題はなかった。まあ、大きな声ではないが、国王の菜園に対する取り組みようは、熱心を通り越し、些か、熱中振りといった方が、適切な表現といってよかった。それでも、国政をおろそかにはしていないのだから、誰が諫めるというのか。ジャンク少尉には思い当たらなかった。

「君は、土地持ちか」と国王はジャンク少尉に尋ねた。

「はあ、祖父が多少は手に入れました」と仕立て職人の孫であるジャンク少尉はそう答えた。ジャンク少尉の祖父は店を弟子に譲ったお金で王都近郊に農地を購入していた。

「農民の楽しみは何だと思う？それは、作物を育て、収穫することだろう。不作ならがっかりするだろうが、それでも、やはり、何も採れないよりはましだろう。それをあの子は」といって国王は言葉を切った。

「はあ」とだけジャンク少尉は答えた。彼にはこの人参引っこ抜き事件の責任は、当然無かった。新米少尉であるパケット少尉は、多分事件の責任を国王から追求されるだろう。少し、パケット少尉がジャンク少尉は気の毒になった。

そうこうしているうちに執務室の前の廊下に到着した。執務室の前で国王付の秘書官スーバスが出迎えた。スーバスはいつものように「陛下、おはようございます」といって軽く頭を下げ、「今日のご日程は」と言いかけた彼を国王は押しとどめ「ジャンク、パケット少尉が報告に来たら、すぐ通しなさい」といって国王は足早に執務室に入っていった。その間にジャンク少尉はかすかに首を振った。スーバスに対する合図である。陛下は、機嫌が悪いという合図である。スーバスは黙って国王の後から、執務室に入った。スーバスが扉を閉めると、国王は、剣帯を腰から外し、いつも掛けている場所に掛けてから、執務室のいつもの椅子に腰掛けた。

「スーバス、今日の日程は」と平坦な声で尋ねた。いつもの国王の日程が始まった。

第一王女もいつもの日程が始まるうとしていた。国王の機嫌がよからうが、悪からうが、それが自分のズボン姿のせいかしらと思いつつも、セシーネは、食堂から、自分の部屋に戻った。ナーシャとタチアナが待ち受けていた。「タチアナ、地図は、見つかった」とセシーネは尋ねた。タチアナは顔を赤らめ「いえ」とだけ答えて俯いた。

「そう、わたしはこれから、救貧院へいくけど、その間、探してみても頂戴。多分図書室にあると思うのだけど、後、あなた達も読みたい本があれば、図書室の本を借りて読んでもいいのよ」とセシーネはまあ、簡単にいった。

「はい」とタチアナは答えた。しかし、地図が見つかるどうかタチアナには自信がなかった。フェードに跨った第一王女を見送った後、タチアナは、ナーシャに「地図はわたしが探すわ」といった。ナーシャも自分のことで頭が一杯だったからタチアナが積極的に第一王女の用を引き受けてくれるのを別に不審に思わなかった。

タチアナは何となく、勘が働いたのである。もう一度、図書室に行けば、王太子に会えるのではないかと漠然と思っていた。そして、その予想は見事に当たった。

図書室の前には、重騎装束に身を固めた近衛兵が立っていた。昨夜と同様である。タチアナは厳かに告げた「第一王女さまに頼まれて捜し物をしているの。通して頂戴」

「ここで、待ってる」と横柄に近衛兵はタチアナにいった。タチアナは、兵士の階級がどんなものか詳しくは、知らなかった。重騎兵というのは、士官以上で、かなり、気位が高かった。過酷な訓練や厳しい審査をくぐり抜けてきたという自負が彼らにはあった。その点、武官の娘であるナーシャはそのあたり、よく知っていた。そして、近衛師団にもやはり、それなりの自負があった。兵卒でも各地

から選抜されたという意識が当然あった。子爵家の令嬢などという肩書きは彼らには通用しなかった。ガチャガチャと音立て近衛重騎兵は図書室から出てくると、「入ってもいいぞ」と彼は、タチアナにいった。タチアナが、図書室にはいると、昨夜と同じように真正面に王太子の顔がちらりと見えた。あわてて高位に対する礼をしながら、タチアナは、どう振る舞っていいのか混乱していた。入り口近くに座っていた武官が「捜し物は何だね」と尋ねた。上気した頬でタチアナは小声で「第一王女さまが、地図を探してこいと」

「どんな地図だね」と再び、武官が尋ねた

「あの、王都の、王都近辺の地図を」とようやく消え入りそうな声でいった。武官が声を張り上げ「第一王女さまが王都近辺の地図を探しているんだそうです」

「王都近辺の地図？」と王太子は聞き返した。「何を考えているんだか、まったく、セシーネのやることはなあ」といった。その時、王太子と目があつたタチアナは、胸が高鳴るの覚えた。そんなタチアナの気配にも気がつかず王太子は「君、理由は？理由もなしに地図なんか見せられないと、セシーネにそっくりい給え」とそういうと机の上に広がった地図に視線を戻した。タチアナは、ボーっとしていた。先ほどの武官が「君、もういつていいよ、第一王女さまにはそうお伝えして」とタチアナに退出するよう促した。軍隊式に「いつてよし」と彼はいわなかった。タチアナはハツとして高位に対する礼をして図書室を渋々と退出した。タチアナの高位に対する礼は、王太子は見もしなかった。妹の侍女の心中には彼には、興味がなかった。鹿狩りとそれに先立つ駐屯地の視察と王太子の興味は、王位を継ぐ日のために何を学ぶべきか、その点が中心であった。まあ、アンドーラのためにも健全な興味の持ち方であった。しかし、料理の話は側近の武官たちの笑いを誘った。国王と違って王太子は上機嫌であった。そして、退出したタチアナは、上機嫌というより、浮かれていたという方が適切な表現であろう。その後、はたとタチアナは気がついた。第一王女に何といえればいいのだろう。機嫌をそこ

ねるだろうか。地図が見つからなかったいい訳をどういえばいいのかタチアナには見当がつかなかった。浮かれた気分は消し飛んでいった。

フィードに跨った第一王女は、護衛のビラン中尉と会話しながら、救貧院へ向かう道のりを急ぐこともなく順調にすすんでいた。セシーネからみれば、頭が空っぽな子爵令嬢との会話より、実りある会話をもたらしていた。救貧院にいる見習の子たちと薬草狩りにいつてみたらどうなのだろうかというのが、セシーネの見習たちの待遇改善案の一つだった。タチアナに地図を探すように命じたのも、その計画のためだった。その計画をビランにいうと、あっさりと「爺さまに聞いてみましょうか」とビランは、いった。ビランのいう爺さまというのが園丁頭のバルカンドとセシーネは思い当たった。「そうね、そうしてくれる」といいながら、地図に薬草の生えている場所が記されているかは、疑問だとふと気がついた。それより、そういったことに詳しい人物を捜し出す方が、簡単だとセシーネは思った。後は、ケンナスやキルマがどう話すかだけであった。自分の権限がどの程度なのか、セシーネは、検討もつかなかったが、発言権というか提案権ぐらにはあると思っていた。第二王女と違って、第一王女は、身分だけで人を判断出来ない事ぐらいわかっていた。「少し、急ごうよ」とセシーネはビランに催促した。良馬を手に入れた人の心理がわかっていたビランは「全速力」と護衛の近衛師団第一連隊第二大隊第四中隊第一騎兵隊に号令をかけた。そこから、救貧院までセシーネは再び、フィードの脚の良さを味わっていた。さすがに国王の贈った馬である。それに重騎装束に身を固めた第一騎兵たちと違って、王女は軽装である。フィードは、かなり護衛たちを引き離して救貧院に到着した。

時刻を計って迎えにでた救貧院長のキルマ・パラボン侯爵夫人は、セシーネのお転婆振りをたしなめようと、フィードから降りたセシーネに近づいた。高位に対する礼をしたキルマに「お小言はな

しよ、キルマ」とまず、第一王女は氣勢をそいだ。「そんなことよ
り、ちよつと話があるの、ケンナス先生はどこかしら」というセシ
ーネの言葉にキルマは益々、気難しい顔つきになった。護衛たちが
次々と到着した。「おはようございます。キルマ夫人」とピラン中
尉は馬をおりながら、挨拶をした。

「おはようじゃありませんよ」とキルマはピランを睨みつけた。

「いいじゃない、わたしが、ちよつと急いで来たかっただけなの、
いいことを思いついたものだから」と第一王女。

「何ですか」とキルマはセシーネがそんなに急ぐ理由を尋ねた

「大した事じゃないの、あさつては、海洋大会でしょう」と建物の
中に入りながらセシーネは「ピラン、ちよつとケンナス先生を呼ん
できて頂戴、わたしは、院長室にいるから」

「海洋大会がどうしましたか」とキルマは、第一王女の真意が計り
かねた。キルマは人に主導権を握られるのは好きではなかった。や
はり、第一王女は苦手だと思った。第一王女は、儀式用の顔を造っ
た。キルマは、それ以上追求をするのは、やめにした。ケンナスが
来るまで第一王女は口を開かないと思った。院長室でしばらく向き
合つて、ケンナスの来るのを待ちながら、第一王女のいう、いいこ
とがキルマは海洋大会となんの関係があるのかさっぱり、思いつか
なかった。ピランがケンナスを院長室に連れてくるとセシーネは「
おはようございます。先生」とにこやかにいった。「おはようござ
います、王女さま」と軽く頭を下げケンナスも答えた。

「先生も、掛けてください」とセシーネはケンナスに椅子を勧めた。
これも、キルマは内心不愉快だった。

ケンナスが椅子に腰掛けるのを待つて、セシーネは、再び「海洋
大会は、あさつてでしょう」といった。「そうでしたっけ」とケン
ナスは、アンドーラの国家行事に無関心さを示した。「それでね、
先生」とセシーネは、切り出した。キルマは、内心緊張した。何を
言いつ出すのだろうか第一王女はとキルマは、内心びくついている自
分が情けなかった。

セシーネのいいことは、《治療師》見習の子供たちを海洋大会に連れて行つてはどうかという他愛のないものだった。

「気がつかなかったな」とケンナスはいった。

「ただし、先生から見て、いい子にしている子だけよ」とセシーネは儀式用の顔でいった。

「ここからじゃ、会場まで大分ありますよ」とキルマはセシーネの計画の欠点を指摘した。

「それなのよね」と第一王女はあっさり、認めた。「何か、良い案がないかしら」と眉を寄せた。

「それだったら、自分に任せてください」と院長室の扉の横に待機の姿勢でいたビランが助け船を出した。口を挟んだビランをキルマは、何となく睨んだ。やんちゃ盛りの子供たちを救貧院の外に出すのは、キルマは内心反対だった。

だてにこの若さで中尉に昇進した訳でない。すでに、昨夜、第一王女からこの話を聞かされたビラン中尉殿はすでに手を打っていた。「非番の騎兵の奴らに頼めば、わけないですよ。馬の後ろにのっけりゃあ、すぐですから」

「そう、お願い出来るかしら」とセシーネ。

「わたしは、反対ですよ」とキルマはいった。

「大丈夫ですよ。あいつらが、勝手に見にいっくよりいいでしょう」とビラン。

「それも、そうだな」とケンナスも同意した。どのみち見習いの子供たちの行動の責任は自分でなく、ケンナスにあると思ったキルマも渋々、同意した。会話の主導権は、いつの間にかビランが握っていた。後は、誰を連れて行くとか、お昼の弁当をどうするのかという話になった。キルマは、内心、また、手間がかかると半分あきらめ顔で話を聞いていた。

「悪いわね、パラボン侯爵夫人、色々手間を掛けて」といって、第一王女が立ち上がった。

「ところで、ペートルの様子はどうですか、先生」とセシーネはケ

ンナスに尋ねた。

「今朝も、従医長が、いらして、異常なしだ」とケンナスも立ち上がり、この計画の話が終了したことをキルマは、悟った。セシーネとケンナスが並んで、院長室を出ていった。扉の横に陣取りその二人の通過を確認したピラン中尉殿は「すいませんね、キルマ夫人、出しゃばって」といいながら、院長室を出てその扉を閉めた。一人、院長室に残されたキルマは、他にも第一王女が計画を立てている事に気がつきもしなかった。

そして、アンドーラの国王陛下ジュールジス三世は、無論、第一王女の計画に気がついていなくてもいなかったし、また、その計画が国家を揺るがす大陰謀でもなかったので、国王はいつもの安泰な執務室の椅子に腰掛け、政務に精を出していた。

「すると、国王が多少留守をしても、メエーネは大丈夫なんだな」と国王はメエーネから帰ったばかりの外務卿のハツパード・サンバース子爵に確認をした。

「はい、国内は、多少、兵役制度で、貴族たちに不満があるようですが、それでも、国王は、次々と平民たちを弓兵に取り立てています。大部分は歩兵ですが、それでも、かなり戦力になるでしょう。宰相もしっかりした人物ですし、特に、問題ないでしょう。国王が特に興味を持ったのは、我が国の航海術のようです」

「航海術な」といいながら、ジュールジス三世はメエーネの国王の真意を推し量った。アンドーラの王太子とメエーネ国王の姪のイザベル王女との縁組みの話から、メエーネ国王ロバーツ二世はアンドーラの船の購入を打診してきた。

王太子時代を経て、いわば満を持して戴冠式を執り行ったジュールジス三世と違って、ロバーツ二世は王太子と国王の相次ぐ急病死という形で国王の座に急遽ついたという人物だった。それはそれで苦労があったのだろうとジュールジス三世は推察出来た。父のジュールジス二世が、メエーネに赴いたのは、丁度そんな時だった。息子に国

王の座を譲つたばかりのジュールジス二世が、メエーネの先王と王太子の死に悔やみの言葉を述べると、ロバーツ二世は涙を流したという。ジュールジス三世は、その母の死でも涙を見せなかった。ましてや、行方不明の父に関して、ジュールジス三世はいつ涙を流していいのかわからなかった。

「海軍の設立を考えているのかな」とアンドーラの国王は自分の外務卿に尋ねた。

「そこまでは。むしろ、交易のようです」

「それで、船を欲しがったのか」

「なにしろ、船足が違いますから」とアンドーラの戦船に何度も乗った経験がある外務卿は少し、自慢げだった。そこへ、ジャンク少尉が執務室に入ってきた。彼は国王に敬礼をすると

「パケット少尉が出頭してまいりました、いかが致しましょうか」

と国王の指示を仰いだ。国王は思わず顔をしかめた。今朝の事件というか、昨日の午後の事件というか、国王の折角の楽しみを奪うという由々しき事態を思い出した。思い出した以上、気になって、悶々とするのも嫌だった。そして、誰かに愚痴を聞いて欲しかった。

国王としての愚痴は、臣下に話しても、致したかたないが、その相手は、精々、同じ立場のロバーツ二世ぐらいだろう。これは、むしろ、父親としての愚痴になりそうである。国王は「取り敢えず、これに目を通してくれ」と外務卿に文書を手渡した。

「ジャンク、パケット少尉をここに通せ」

ハツとってジャンク少尉は敬礼をして国王の執務室を一旦退出した。外務卿は自分との対談を中断してまで、国王が優先させた事項が気になって「陛下、何かあったんですか」とそれとなく、探りを入れた。

「ハツプ、ここだけの話にしておいてくれ」と国王は機密事項であることを匂わせた。やはり、人参ごときにむきになるのは、外交上、まずいかもしれない。しかし、国王の愚痴の聞き役は、閣僚最年長者の外務卿なら、適任であった。これが、新任の大蔵卿か、工部尚

書だったら、席を外させたかもしれない。王妃にこの件で愚痴をこぼすのは、子育てで悩んでいる王妃の悩みを深くするぐらいなのは国王にはわかっていた。

緊張してパケット少尉が入ってきた。ジャンク少尉も同行している。普段は、そんなことはしなかった。秘書官のスーバスは席を外させてある。気を利かせて外務卿が腰掛けて椅子を少しずらした。こうしないと机を挟んで国王の真正面に座っている自分が邪魔のなると気がついたのである。外務卿は渡された文書を読む振りをして耳を澄ませた。このぐらいの芸当が出来ないとアンドーラで外務卿は務まらない。

外務卿が脇にどいたおかげで国王と真正面から向き合う形になったパケット少尉は膝がガクガクとしていた。何か不祥事を起こしたのはわかっていたが、直属の上官から叱責を受けるのではなく、国王自ら、乗り出すとはどんな重大な不祥事を起こしたのであるかと不安だった。それに剣を外せと入室前にいわれたのもパケット少尉には不安だった。これは、ただの習慣だった。執務室に入る時、剣の携帯を許されるのは国王付の近衛兵だけだった。

国王は珍しく、パケット少尉の敬礼にたち上がって、返礼をした。普段は横着に椅子に腰掛けたままの方が多かった。ゆっくりと椅子に再び、腰掛ける。国王は例によって冷然と微笑んでいた。しかし、この時は冷然というより、自嘲気味という方が正確だろう。

いよいよ、人参引っこ抜き事件の真相解明である。主犯の自供はすでに国王は事情調書こそ書き取っていないが、直にこの耳で聞いてある。後は、この目の前のうら若いパケット少尉が共犯かあるいは、目撃者かどうかだ。直立不動の姿勢を保っているパケット少尉と比べて、ジャンク少尉はくつろいでいた。

パケット少尉の視線は腰掛けた国王の頭上三十センチぐらいをさまよっていた。犯罪者にありがちな視線というより国王陛下の御前であるという意識の方が、パケット少尉は強かった。彼は昇進して近衛師団には属されたばかりだった。それまで、平民である彼には

国王は遠い存在であった。軍学校時代は、何かというと国王陛下から下賜されたものであるとか、国王陛下のお情けでとか、国王の軍隊ということを徹底的に叩き込まされた。軍学校卒業以来こんなに緊張するのは初めてだった。

「昨日の午後、エレー又は、何をしていた？ん？君はエレー又王女付きのパティス夫人から、君は何を頼まれた。正直に言いなさい」と椅子の背にもたれた国王の口調は、淡々としていた。しかし、初めて国王から、声を掛けられたパケット少尉はすぐに答えられなかった。左斜め後ろに立ったジャンク少尉が指でパケット少尉の背中を突っついた。パケット少尉は飛び上がりそうになった。

「ささつと、お答えしろ」とジャンク少尉は急かせた。パケット少尉は大きく息を吸うと

「はい、第二王女さまの算術のお勉強を見るようにと、その後、馬術の訓練をするようにとのことでした」

「それで、エレー又はちゃんという通りにしたかな」と国王はパティス夫人の供述と合致する事に肯きながら、実際はどうだったか、確かめ始めた。

驚くべき事が判明した。何と、エレー又はまず、算術の勉強は少しすると「飽きちゃった」といって、お人形遊びを始め、その後、パティス夫人が指示した時間が来たので厩舎に連れて行くと今度は、エレー又は「お馬は好きじゃない、それよりお散歩しましょう、いいところへ連れて行ってあげる」と言い出し、パケット少尉他、彼の部下の近衛兵を連れて菜園の方に足を向けたという。菜園を案内しながら、これは、葉っぱを食べるのとか、これは、実が食べられるとか、説明しながら歩きまわり、問題の人参のところで、これは根っこの方だって。そして、「どうなっているか見たい」といって、人参を引っこ抜いたという。国王だっけ見たかったのである。国王は半分唾然としてした。驚くべきわがまま振りだった。

「君は、止めなかったのか」と国王の冷然とした微笑みは消え失せ、真剣そのまま聞いた「エレー又が人参を引っこ抜くのを止めな

ったのか」

「はい、そうであります。陛下」とパケット少尉は答えた。パケット少尉の返事はなぜか、力強い口調に国王には思えた。ため息をつくくと国王は「それで、その人參をエレーヌはどうしたんだ」と再び、先を促した。

「自分も人參だとは知りませんでした。それで、バルカンを探すということになりました。菜園の世話をしているから、知っているはずだとおっしゃったんで」

「それで、バルカンに見せたのだな」と国王はおもわず、にが笑いをした。もし、パケット少尉が、エレーヌが引っこ抜いたそれが人參と知っていたら、人參引っこ抜き事件ではなく、人參行方不明事件になるところだった。

「その後、その人參はどうした」と国王はため息つきながら、質問した。

「はい、第二王女さまが、いらさない、自分にくださるとおっしゃるので、ナーカル一等兵に渡しました」

「それで、渡したナーカル一等兵がそれをどうしたのか君は知っているのかね」

「多分食事当番に渡したかと」

「多分」と国王は鋭い目つきでパケット少尉を見た。

「あの、陛下、食べ物だと伺ったので、それで、ナーカルにいつて食事当番に持っていくよう命じました。それから、海洋大会の衣装を見たいとおっしゃったので」

「もう、いい。それより人參は、どうなった？つまりだ」とエレーヌのわがまま振りより、人參の行方が気になる国王であった。

国王は、エレーヌ王女には、一言「お前は自由でいいな」と皮肉つてやりたかった。ある意味で日程が予め決まっており、なるべく規則正しい生活をするように従医長のベンダーからも進言を受けていた国王は、エレーヌのように、わがままというか好き勝手な生活は望めなかったし、また、周りのことを考えるとそれも当然出来な

かった。

国王は、少し緊張の緩んだそれでも、直立不動の姿勢を保っているパケット少尉に「君、休みなさい」と声を掛けた。パケット少尉は、はあとという声は出さなかったが、そういう怪訝な顔とした。

「軍隊式の休めの姿勢をとりなさい。そう、しゃっちょこ張つていては、話がしづらい。ジャンク少尉のようにな、休め」と国王はそう命じた。ジャンク少尉はすでに、「休め」の姿勢、両足を肩幅に開き、両手を後ろの回し、組んでいる。あごは引き、背筋はピンと伸びている。パケット少尉は肩越しに振り向き、ジャンク少尉が軽く肯くと、彼も「休め」の姿勢になった。

「うん、それで、いい」と国王は軽く肯き、人參の行方が気になつてつい身を乗り出した自分の体をもう一度背もたれに寄りかけた。

「いいか、エレー又は王女だといってもまだ、子供だ。悪いことをしたり、危ない真似をしたら、注意してやめさせなければいけない」「陛下、よろしいでしょうか」とジャンク少尉が口を挟んだ。

「何だ、ジャンク」

「パケット少尉はまだ、近衛に来てから、日が浅いのです」

「それで、益々、訳がわかった。ともかく、エレー又は王女だなんて思うな。ただのわがままな子供だと思え。いいか、君には、子供がいるか？パケット少尉」

「いえ、おりません」という返事には一瞬、間があった。

「そうか、それでは、まだわからんだろうが、子供を育てるのは親だけじゃない。周りの大人たちにも責任がある。悪いことをしたら、叱り、危ないことをしそうになったら、やめさせる。それが、周りの大人たちの責任だ。そうしないといい大人には育っていかない。むろん、いいことをしたら褒めてやることも大切だ。しかし、今のところ、エレー又は褒められそうなのは、何にもしてないな。呆れて、ものがいえない。王女さまなんて呼ばなくていい。ただのエレーで十分だ。王女だといってえらそうなことをいったら、いつてやれ、王女の称号は余が剥奪したとな。まず、エレー又はは、王

妃のいうことをきちんときく、次にパティス夫人のいうことも同様だ。君は軍学校か、パケット少尉」

「そうであります」と今度は間がなかった。

「じゃあ、エレーヌの教官殿になったつもりで、厳しくやってくれ。お尻を叩いてもかまわない。わたしが許可する」

「しかし、陛下、自分は平民でありますから」とおずおずとパケット少尉がいった。

「それが、どうかしたのか。子供を育てるのは平民も貴族も王家も同じだ。悪い大人に育たないように、周りの大人が気を配る、当然じゃないか。悪い大人になったら、王女なら、なお、始末が悪い。好き勝手させるな。周りが迷惑する。自分のこともきちんと出来ないくせに。何が、第二王女だ。笑わすな。エレーヌと呼んだり、お尻を叩いたりしても、君を不敬罪で逮捕させたりしないから、安心して給え。これは、身分というより、子供のしつけの問題だ。わかっただか、パケット少尉」

「はい、わかりました」と自信なさそうなパケット少尉。国王はここで、外務卿をチラッと見た。文書を読んでいる振りをしているが、もちろん、耳に入っているだろうし、もう、とつくに読み終わっているはずだった。それほど長い文章ではない。人參の行方も気になったが、外交も気になった。

「ともかく、第二王女付けの近衛には、身辺警護も大事だが、エレーヌのしつけも大事だと終始徹底させなさい。勅命だと思っておかない。いい加減うんざりだ」そして、人參も大事と思いながら「ともかく、部下たちにもそう伝えなさい。エレーヌは、階級でいえば、新兵だ。一番下だ。そういうことだ、当分は、その扱いでかまわない。いってよし」と最後は大声になった。二人の武官が「休め」から敬礼の姿勢になった。

「ジャンク、君は、もう少し、残りなさい」

パケット少尉が敬礼して国王の執務室を出ていくのを見届けた国王は「ハツプ、聞いていただろう。まったく、ひどい有様だ。もう

少し待ってくれ。ジャンク、ちょっと、こつちへこい」と国王は立ち上がりジャンク少尉を手招きした。ジャンク少尉がどっしりとした国王にふさわしい机をまわり、国王の隣にやって来た。

「ジャンク、ちょっと耳を貸せ」といった国王にジャンク少尉は上半身を傾けた。外務卿には、ひそひそとジャンク少尉に指示を出す国王の声は届かなかつた。従つて、その指示が人參の行方を確かめることだとは、勘のいい外務卿もとんと検討がつかかなかつた。

外交上の大事な話が終わり、国王が二人の新兵はどうだと新しい閣僚の仕事振りを尋ね、外務卿は「まあ、大蔵卿は、新兵とは、呼べないでしょう。ブルックナー伯が、みっちり、仕込んでありますから、今もブルックナー伯の館におるとか」とそつなく答えた後、問題児だと國務卿が称した工部尚書については口を閉ざした。それは工部尚書が新兵だと言外に匂わせていた。

そして、国王は、外務卿に愚痴をこぼし始めた「まあ、いい。それより、うちの新兵はひどいぞ。折角の人參を引っこ抜きやがつて、それもあの若造に、ばいとやつてしまふのだからな。人の苦勞を何だと思つているんだ、あの、娘は」

国王の愚痴はしばらく続いた。王太子がもうすぐ結婚を控えているとはいえ、まだ若い国王と親子といつてもいいほど年の離れた外務卿は、しきりにうなずいたり、慰めの言葉をいったり、しばらく国王の愚痴に付きあつた。国王の愚痴は、次第に菜園で作物を育てる苦勞話になつた。外務卿は、國務卿から国王が菜園を造らせたこととは聞いていたが、それを国王自らの手で世話をしていると聞いて、多少、驚き、そして感服した。年長の外務卿には、相変わらず、陛下はそつのない方だと思つた。まあ、農作業も、ある意味で国王の道楽のようにも思えるが、農業の振興という意味では、アンドーラ王国に不可欠な作業でも、あつた。

肝心の人參の行方は外務卿が執務室を退出してから、ジャンク少尉の立ち会いの元、パケット少尉から報告された。結局、人參は、近衛師団の昨夜の夕食となつて、兵士の口に入つたことが判明した。

そして、国王の質問が人参の形状をこと細かく報告させることに及んで、パケット少尉は、冷や汗をかき通しだった。国王は聞きながら記録に名残惜しそうに「未成熟」と書き加えた。国王は、菜園の作物の記録をとっていた。まあ、道楽も極めると学問になるというが、大学もあるアンドーラである、それはそれで、博物学部の植物学という立派な学問である。

まさに根ほり葉ほり国王に尋ねられたパケット少尉は、そのことを知らなかった。そして彼の処遇が替わらなかったのは、食べ物を粗末にするなど教えた王立陸軍士官学校の教官が教えた通り、彼が行動したからである。さまざまに、彼は、最悪で降格処分もあり得たかもしれない。食べ物の恨みは怖い。

国王はその人参を食べられなかったのは、よかったのか、悪かったのかは、しばらく判断が付かなかった。その判断は、もう一度人参の種をまき、それを念いりに育て、それを収穫し、それを口にして、やはり、食べたかったと思った。惜しいことしたとエレーヌにチクリと聞いたかったが、それは宣誓式前の第二王女が同席しない夕食の席だったので、その機会も逸してしまった。やはり、少し無念な思いがその時には国王にはあった。

王宮の風紀（前書き）

第一王女セシーネに王都近郊の地図を探すように命じられた王女付きの侍女タチアナ・プルグース子爵令嬢は、図書室であこがれの王太子にその理由をセシーネに聞くように言われるが…

王宮の風紀

救貧院にいる《治療師》の見習いの子供たちを海洋大会に連れて行くという一番目の計画案の実行決定に気をよくしたアンドーラの第一王女セシーネは、再び愛馬フィードに跨り、この計画の協力者であるビラン中尉と並んで、朝、来た道をゆつくりと戻っていった。「それにしても、うまくいったわね、でも、ビラン、本当に協力してくれる騎兵は、いるの」

「おりますよ、ざつと数えても一個中隊はおります。姫、わかりますか、騎兵の一個中隊というのは」

「そのぐらい知っているわ。それより、どうやって集めたの、そんな人数」

「何、簡単ですよ、面白い奴らに会わせてやるといったら、みんな乗ってきましたから」

「それって、治療の技のこと」とセシーネが少し儀式用の顔になった。

「何、心配はいりません。少し、匂わせただけですよ。このビランにお任せあれ」と槍を持った右手を少し挙げた。

昔から、そうだった。セシーネが小さい時から、ビランはセシーネの味方だった。エドワーズとケンカしても「お兄さまなんだから、その位、我慢しなきゃ、じゃないと、若と遊んであげませんよ」と王太子を諫めてくれるのも、ビランだった。園丁頭の孫であるビランにとって宮殿の庭は、いわば、なわばりだった。どこで、泥んこ遊びをしているのか、あるいはどの木に登っているのか、よく知っていた。そんな訳で、自然とエドワーズもセシーネも彼の後を追いかけていわば、二人にとって、遊びの教師役だった。そんなビランが利発だと気がついた父親の国王のジュルジス三世は一緒に遊びの計画の参加させることにした。ビランの利発さは、幼い二人にとって危ない程度がわかることだった。そして、孫が生まれ、やはり

遊びの計画に参加した亡きヘンダーズ陸軍元帥がこれは武官向きだと軍学校と呼ばれる王立陸軍士官学校への入学を勧めると、物怖じしない性格のビランは王国の重鎮にもキツパツリと言い切った。「エンバーでは軍学校へはいかない決まりになっています。お断りします」

「残念じゃな。そんな法はない、これを読んで見る」とヘンダーズ元帥はビランに王立陸軍士官学校入学法を見せた。

「ほれ、声に出して読んで見る。それとも文字が読めぬのか。どうじゃ、まいったか」と甲冑を脱ぐと些か子供じみた癖のあるヘンダーズ元帥はいった。ビランは声に出して読み上げた。ちなみに王立陸軍士官学校入学法は、解りにくい法典の条文が、多いアンドーラの法律でも少年でも解る明快な文章で知られている。しかし、王国の重鎮に、ビラン少年は負けなかった。

「そんなことおっしやったって決まりは決まりですから」

「国法より上はないじゃ。陛下の勅命じゃからな。それとも軍学校はわしが造ったのが不満なのか。そうなんじゃな」とエンバー領の領主エンガム公爵家の血筋ではないヘンダーズ元帥はすねて見せた。「そんなことは、いつていませんよ、あれ、王立というのだから陛下がお作りなつたじゃないですか。殿下」と論議の好きな国の子供は子供でも口達者だった。

「それは、言葉のあやじゃ。口がへらんやつじゃ。どうしても嫌だと抜かすからには、わしにも考えがある。どうせ、兵役の時がやって来る。フン、そなたのことじゃ、兵役はエンバーと想っているじやろうが、そんなことをしてみる、王国軍を率いてエンバーへ攻めていくぞ。覚悟しておけ」と王国陸軍元帥は宣戦布告をした。まさか子供の自分を巡って戦争を起こす気なのかとビラン少年は呆れたが、そこで、妥協案を提案した。

「だったら、海軍にします」

「フン、同じことよ、あの提督とは、一度、一戦交えたかったら、丁度、いい」と妥協案も蹴飛ばす勢いである。孫が出来ても好戦的

な性分は、少しも変わらない。

「でも、決まりがあるんですよ。それも、殿がつまり陛下がお決めになったと伺っています。つまり、勅命ということなんでしよう、どうなんでしょう」とピラン少年は、泣き出しそうな顔をした。ピランは内心では軍学校に行きたがったが、祖父から、エンバーの出身者は入学できないと聞かされ、ようやく諦めたばかりの頃だった。ここで、ようやく、自分が年甲斐もなく少年を苛めているような状況に気がついたヘンダース元帥は「じゃったら、その勅命を取り消して頂く」と請け負った。

「そんなことが出来るのですか」と藁もすがる表情のピランにヘンダース元帥は「どうしても、必要だとそなたの殿を説得するまでのことよ。それより、馬術を磨いておくんじゃぞ」と席を立った。その後、紆余曲折があったが、ピランは、晴れて軍学校の一回生となった。そして、軍学校を卒業したピラン准尉は近衛師団に配属になりセシーネ王女付となった。やることは、軍学校へいく前とあまり変わりはなかった。違うのは近衛兵の制服を着ていることだけだった。ただ、この配属には王太后がケチをつけた。ピランの存在は王太后には不満の種だった。王家の子供らしくない遊びを王太子エドワーズや第一王女に教えたのがピランだったからである。それで、ヘンダース元帥に苦情を何度なく申し入れをして二年後、ピランは第七師団に配属替えになった。ただ、ヘンダース元帥は自分の采配に口を挟む王太后に条件を付けた。ピランの昇進である。王太后は自分の氣にいらぬピランがいなくなればと条件を飲んだ。そして、ピランは少尉となって赴任先に向かった。行き先は無論エンバーではなかった。そして、王太后の亡くなった今、ピランは近衛師団に再び、配属となった。いわば、古巣に戻ってきたのである。古巣に戻ってきたピランは水を得た魚のようだった。一個中隊の騎兵を集めるのは訳もないことだった。戦争でもない限り軍隊の生活は、ある意味、単調だった。刺激を求めてケンカ沙汰を起こすことすらある。これは大きな声でいえないがランセル第三王子付きの近衛兵が

そうだった。ランセル王子自身がケンカを吹っかけるのだから、ちよつと始末が悪い。このケンカ沙汰も王太子が鹿狩りの件をランセルに持ちかけると、ピタツと収まった。不思議なものである。

王太后には邪魔な存在だったビランもセシーネには有り難かった。やはり、頼りになるビランお兄ちゃんである。ビランが一個中隊をかき集めたのは、別に海洋大会に見習たちを連れて行くためだけのためでもなかった。直属の上官が事なかれ主義で、頼りにならないと判断した彼は、預かっている小隊を優秀な小隊にすべくあちこちの騎兵に声を掛けたのである。まあ、予備兵とでもいうかそんなところである。やはり、武官である以上佐官には登りたいと思うし、将官だつて夢ではないかもしれぬ。夢を見るのは自由である。

ビランは、自分の立場をよく解っていた。エレーヌ付のパケット少尉がそうであつたようにたとえ近衛師団の尉官でも、国王と口を利くことなど滅多にない。例外は国王付だけである。上に覚えが目出度いほどそれに甘えてはいけぬことは、ビランは、知っていた。話のわかる国王だが、厳しい面も持ち合わせているのは、ビランにも解っていた。

「ねえ、ビラン、後は、これが上手くいったら、次は、薬草採りだけど、バルカンは忙しいじゃないの、大丈夫？」

「一日中、働いている訳では、ありませんよ。外仕事だから、夜になつたら手が空くでしょう。その時に話をすれば、いいでしょう。取り敢えず自分から話しておきます」

「見習たちには、まだ、話してないでしょう」

「ええ、そういつたことは、自分たちから話さないと方がいいと判断したので、こいつらにもいつてあります。後は、ケンナス先生からか、姫からですが、自分は姫からの方がいいとおすすめますね」とここで、ビランは弟子が急に増えたケンナスを思った。ケンナスにはどこか孤高の影があつた。

「そう、でも、海洋大会が無事終わつてからの方がいいでしょうね。あんまり期待されては困るし、それとも行きたくないかしら」

「そんなの遊びがてら、いけばいいんですよ」とここで遊ばせ上手なビランは「しかし、姫、ここで提案なんです、海洋大会は、全員連れていった方がいいと思いますよ。やはり、親元から離されて寂しい思いをしているんですから。そのぐらいはしてやらないと」と、さすがにビランお兄ちゃんである。子供心をよく解っている。それに、あの厳しい元女官長もいるしなとビランは思った。その後、どの子がどうかの話になった。

ビランは、よく見ていた。それは、武官になる前の彼の職業だった。彼は、国王からわずかだが給料をもらっていた。小姓制度を廃止していたアンドーラの王家では異例のことだった。裕福とはいえないビランの実家ではそれは、有り難かった。ビランは、それを軍学校へはいるための馬術の稽古料に費やした。武官でも金銭に細かいものもいれば、大まかなものいる。ビランは細かい方だった。少年の時から、少しは金で苦労したせいもある。部下たちにはいい馬を買えといつてある。そして、定年まで尉官で過ごすのかといつてある。やはり、自分を軍学校へ入れるために骨を折ってくれた今は亡きヘンダーズ元帥のためにも、ビランは少しでも階級を上げたかった。

王宮では、第一王女の帰りをタチアナ・プルグース子爵令嬢は、首を長くして待っていた。第一王女から王都近辺の地図を探せと命じられたタチアナは、まず、朝食前に図書室で、迷い、その後、王太子からその理由を聞いて来いといわれ、立ち往生して迷いに迷って彼女なりの決断をした。セシーネから見れば、頭が空っぽに見えるタチアナでもその程度の知恵は働く。無論、ナーシャには、一言も相談していない。第一、相談出来ない。王太子と口を利く機会など滅多にないのだから。まあ、人間というのは欲求があるかない知恵もでてくるようである。結論はこうである。まず、第一王女へ王太子の伝言を伝える。その返事をまた、王太子に伝える。それから、タチアナは、色々その後のことを想像したが、ちよっと夢心地すぎ

るので割愛する。ほら、タチアナの頭の中だつて、一杯、詰まっているでしょう。頭が空っぽだなんて医学を学んでいる第一王女らしからぬ表現だと思いませんか。ねえ。

第一王女が何となくそう思ったのは、それは受けた教育の違いであつた。第一王女は王位継承権を持つ身として王太子ほどではないが、それなりの教育を受けていた。学問好きだけは、王太后も渋々認めざるえなかつた。女性に学問はいらないと国王は考えてはいない。学問の領域がどこからと学者論議になつてしまつが、軍学校式に学科といえはよいだろうか、それとも、大学入学合格の基準というかその程度まで、もう少しのところ前まで、来ていた。末恐ろしい王女である。

それに比べてタチアナの方は学科の方は、男子では、兵役で恥をかかない程度である。プルグース家の教育方針は恥をかくなである。いわゆる新貴族と呼ばれるメレディス女王時代に子爵位を授けられたプルグース家としては当然な教育方針である。王家の方々も大変だが、貴族の方だつて大変なんですから。

当然、礼儀作法に重点を置かれる。ところが、重大なことが判明した。タチアナは上がり性で、人前に出すと金縛りにあつたようになって、身動きがとれない。高位にする礼がちゃんと出来ないのである。家族だけだときちんと出来るのである。第一王女の侍女となつたのは、そんな事情もある。これは、一族同士の縁組みで懇意なつたルンバートン侯爵夫人から勧められこともある。王宮に出入りしていれば、その上がり性も治るのではないか、慣れですよとルンバートン侯爵夫人はいつた。思いきつてそうするかと父親のプルグース子爵と母親の子爵夫人は意を決してタチアナに王宮勤めをさせることにした。第一王女は自分の侍女に恥をかかせたりしないだろう。そういう計算もあつた。

第一王女には、その辺の事情がよく伝わっていなかつた。ナースィヤが大部分の用を引き受けていたのもそんな事情もある。聞かなければ解らないものである。ただ、第一王女は聞かなかつた。王太后

が病気になる前は、やはり初謁見という貴族たちの儀式を控えた貴族の令嬢たちが、「行儀見習」として大勢やって来る。だから多分そんなところだと思ひ、聞かなかつた。セシーネは特に意地悪をして聞かなかつた訳でもない。

上がり性のタチアナだが、ルンバートン候爵夫人の助言もあつて初謁見を何とか無事すませた。王宮勤めはタチアナには驚きの連続だつた。驚いている間に上がり性も何とか出ずに今日まで来ている。近衛騎兵の先導に続いてフィードに跨つた第一王女に姿にタチアナは今まで出なかつた上がり性が出てきたのがわかつた。胸の中で何度も繰り返していた言葉を繰り返した。王宮の玄関と呼ばれる場所にセシーネは乗りつける。先に降りたビランがセシーネに手を貸す。タチアナは、少し、足がもつれる。何とか高位に対する礼が出来た。タチアナは待つた。セシーネの方が先に声を掛けた。礼儀としてはそれがアンドーラでは正しいが、正確に言つと王家では大体そうである。行事の日でない時はしばしば破られる。じゃないと日々の暮らしが円滑にすすまない。無論、違つところもある。

「ただいま、タチアナ」とセシーネはいつた。そこでもうタチアナは混乱して来た、普通ならお帰りなさいとかお帰りなされませとかいへばいいのに言葉が出てこない。その代わり「あの、王女さま、地図は」といつて事情を説明しようとした。そうしたら、意外なタチアナの予想もつかなかつた返答が返つてきた。

「それなら、もういいわ」とセシーネはもう歩き出している。

そこで、よろしいでしょうかともう一度尋ねれば、よかつたのだらうか、気まぐれな王女に振り回されたタチアナ嬢である。少し、遅れながらセシーネについていく。セシーネの後ろにビランとタチアナが並んで歩く格好となつた。「タチアナ、着換えるわよ」とセシーネは歩きながら話す。この辺りも教えられた礼儀作法とは、違つていたが、少しは慣れた。はい王女さまとタチアナが返事をする前にセシーネに「地図は見つからなかつたのでしよう」と図星を指された。キルマ・パラボン侯爵夫人ではないが、第一王女は人の心

理を読むことに長けているのだろうか、そんなことない。ただ、何となくセシーネにはわかった。種を明かせば、ビランから地図は軍事機密だと教えられたのである。王宮で育った彼が王宮の図書室にある書籍を全て知っている訳ではないが、そこにはないはずだとピランは、いった。「陸」こと陸軍はそういったことにうるさいのだと。やれやれと思ったが、セシーネは作戦変更をビランの助言でしていた。ただ、ビランのいった地図は、最近の測量術で作成された地図で古地図ならあった。ただ、それでは歴史を学ぶにはよいが、この計画には役に立たない。

足早に歩くセシーネにとぼとぼと歩くタチアナは次第に遅れていく。タチアナの心境はやや茫然自失状態である。まあ、夢と現実は一致しないのが人生である。ビラン中尉が小声で「あんだ、歩くのが遅いぜ。もたもたするなよ」とタチアナに注意をする。前方にいたセシーネが「何しているの」とがめた。あわてて、タチアナは追いつく。第一王女一行の陣形が整ったところで、再び前進する。号令はかけない。王女の速度に合わせるのがお供として当然である。「ピラン、ところで、ホントに騎兵は大丈夫なの」

「姫、騎兵というのは、馬をとばす理由をいくらでも捜すものです。姫だって、そうでしょう」

「それもそうね」と乗馬の楽しさを味わったセシーネ。むろん、タチアナにはその会話は理解出来なかったし、耳にも入ってなかった。タチアナは、当初、宮殿の近衛兵におびえたが、これは、ナーシヤから、壁だと思えと助言されていた。だから、壁に対して些か不作法な態度をとっていることに、タチアナは気がついていない。近衛師団には、新兵はいないし、その陣容も一生というか定年退役まで軍人として過ごすものたちだけで構成されていた。彼らには、各師団から選抜されたという意識が強い。

もう一人の侍女、ナーシヤは、第一王女の部屋でこれまた、少し夢心地気分を刺繍をして王女の帰りを待っていた。これは、セシーネが留守の間、侵入者を防ぐためであった。侵入者とは、エレーヌ

王女のことである。セシーネは几帳面で、部屋はきちんと整理整頓していないと気が済まない。部屋を荒らされるのが嫌だった。そしてまた、医学に興味ないナーシャとタチアナを救貧院に連れだっていても邪魔になるだけだとセシーネは、思っている。

部屋に戻ってきたセシーネは、着換えながら「タチアナ、ご苦労だったわね。ともかく、地図はいまのところいいわ」とタチアナの労をねぎらった。そして、昼食に出かけた。労をねぎられてもタチアナは少しも気分が晴れなかった。

王家の女性たちだけの昼食で意外な話がでた。ズボン姿を再び話題にした王妃に第四王女が「前、お父さまから伺ったのだけども母さまは十才位まで男の子として育てられたらしいわ」

「あら、そうなの、知らなかった」と王妃

「多分、女王がいれば女公爵がいてもいいと思ったのでしようよ」と女王の名を継いだメレデイスはいった。王太后は、エンガム公爵の一人娘だった。国王は王位につく前、外祖父の跡を継いで七才でエンガム公爵となった。ここで第二王女があることに気がついて「ねえ、叔母さまのお父さまって、わたしのお祖父さまってことよね。どんな人だったの」

王家の話題で、あまり口にしない方がいいのは、亡くなった前王妃ミンセイヤと「龍」にさらわれた先王ジュールジス二世の話だった。王妃がすかさず「エレヌ、大人の話に口を挟むんじゃありません」とたしなめた。

「わたしだって、女侯爵よ。まあ、女官長としての手当も含めてと言ふことらしいわ」とメレデイス。第四王女は兄の第二王子や弟の第三王子と同じ扱いを受けたのが内心では自慢だった。やり手の前職者以上に女官長としてやらなければと思っている。子爵家出身の王妃では貴族たちに侮られる。ここは自分が睨みをきかす役目だと心得ている。

昼食が終わり、一旦部屋に戻ったセシーネは「わたしは、準備室へ行くけど、あなた達は好きにしていいいわ」と予定を侍女たちに告

げた。昨日、ブルツクナーから渡された王立施療院の予算書を手に新宮殿へと向かった。

好きなことをしていいと言われた侍女の一人、ナーシャは再び、刺繍に取りかかった。タチアナは、地図の件を懸命に考えていた。そして、こう考えた。もしかしたら、王太子が地図を探しているかもしれない。やはり、ここは、もう不必要になったと王太子に伝えるべきではないかと。タチアナの前途に光明がさしてきた。

恋というのは、人を大胆にも臆病にもする。タチアナ自身も自分の気持ちに気がついていない。上がり性のタチアナは、一種の使命感で、王太子を捜す行動に出た。場所は、図書室であろうと検討をつけた。ナーシャには、散歩をすると嘘をついた。彼女に王太子に言づてを伝える役をとられなくなかったから、タチアナは必死だった。

案の定、図書室の前には近衛兵が立っていた。期待に胸を弾ませながら近衛兵に「第一王女さまのご用よ」と告げた。近衛兵はあっさり、扉を開いた。中に入ったタチアナは、思わず、立ちすくんだ。そこでは、国王の次弟ヘンダース王子の長子リングート王子とそのお相手役リングート班と呼ばれる少年たちが勉強に励んでいた。無遠慮な少年たちの視線に引っつけられた礼儀作法も忘れてタチアナはあわてて図書室を飛び出した。

そのタチアナの行動をみたリングート王子は「変なやつ」といった。「大体、失礼だよ。僕を誰だっと思っているの」と呟いたリングート王子の言葉はリングート班の最年長の少年の耳に入った。彼は、我らがリングート王子に失礼を働く変なやつを懲らしめるべきだと考えた。大かくれんぼ以来、王宮では、面白い出来事がなかった。精々互いを変だと言い合って、ケンカするぐらいである。暇をもてあますほどではないが、多少の時間はある。彼は「あの失礼な変なやつ」を探し出せと夕方の少ない自由時間をその搜索活動をリングート班に命じた。

図書室を飛び出しタチアナは廊下を逃げるように走っていた。やがて、気がついて立ち止まった。どこへ行けば王太子に会えるのだ

ろうか。再び、途方に暮れる。

王太子はそのころ宮殿にはいなかった。午後から、陸軍本営本部で鹿狩りの下見をかねた駐屯地の視察の打ち合わせのための会議に出席していた。そんな事情を知らないタチアナは王太子の捜索活動に従事するのである。つまり、自分の育った領主館と比べようがなほほど広い宮殿の随所にいる「壁」に尋ねて回るという根気のいる仕事である。「壁」の彼らも王太子の居所を知らなかった。

そんなタチアナの行動を知らない第一王女はブルックナー伯と準備室と名付けた新宮殿の小部屋で王立施療院の準備に勤しんでいた。「やはり、あそこがいいかどうかですな」とブルックナー伯は施療院の候補地について検討し始めた。

「そうですね。少し、遠いですけど、あそこには薬草園もありますし、問題は、子供たちを育てるにはあそこがいいのではないかと」とセシーネは救貧院を施療院に変える案の利点について自分の考えを述べた。やはり、ここは慎重に検討すべき課題だった。《治療の技》という特殊な力を持っている子供たちを町中で育てるには問題が出てくるだろう。

セシーネは、海洋大会に子供たちを連れて行くことも、ブルックナー伯に告げていた。やはり、その方がいいと思った。彼が反対したら、取りやめようと思ったが、案外に賛成してくれた。ブルックナー伯は王都に暮らす人々が海洋大会を始め各種行事を楽しんでいるのを知っていた。十二年前、始まった海洋大会も年々、見に来る人で賑わうようになっていた。海洋大会に子供たちを連れて行ってはどうかという第一王女の提案をブルックナー伯はなかなか良い案だと思ったし、そう、第一王女に述べた。

施療院の候補地について検討していると、工部尚書がやってきた。準備室に入ってきた工部尚書のニドルフ・レンドル子爵にブルックナー伯は「君ね、役所の方は大丈夫なのか」と尋ねた。

「いえ、大丈夫です。僕はね、こう定義したんです。工部省という

のは、建物を造って、金貨を造るだけの省じゃない。ものを造る職人たちの技術の向上を図るべきだと。修理だって、大事な技術の一つです。ということは、身体を修理するのは、やはり、工部省でしよう」

「ちよつと、こじつけだな」と論議が嫌いでないブルックナー伯「丁度いい、今、施療院の候補地について検討していたところだ」

「しかし、僕は、てつきり、宮殿の職人たちは、工部省の所属だと思っていたんですが、全員、近衛師団に所属しているんですね。呆れました」

「そうなのね。宮殿で働いている男の人は侍従長と従医長と以外そうなの。あと園丁頭は、退官したのね」

「エッ、ホントですか」と何でも軍が優先することに、工部尚書は顔をしかめた。

「陛下のご方針だな。侍従長は、自分は文官であるべきだといつてな」とブルックナー伯はそのあたりの事情を説明し始めた。戴冠式がすむとジュールジス三世は、軍で必要なものは軍で作るべきだと主張した。食料まで全て賄うのは、無理であったが、ありとあらゆる職人たちが、軍に徴集されていた。工兵と呼ばれる彼らは、大事にされていた。

軍備を整えるために、彼ら職人たちの衆知が集められた。これは、閉鎖的な世襲制の親方制度を打破する意味合いもあった。それまで、世襲制で受け継がれていた職人の技術が軍のため開放されていた。職人たちは息子ではなく、部下にその技術を伝えなければならぬ。親方の息子でなくても親方となれることになった。そして、また、職人を別な親方の元で鍛えてもらうという技術の交流という面でも功績があった。

医学の面でも、医学部を卒業すると兵役があるので軍の医務官となる。ブルックナー伯がその辺の事情を工部尚書に説明していると従医長のベンダーがやってきた。

「ベンダー博士は、なぜ、近衛じゃないんです」と工部尚書はすけ

ずけときいた。

「近衛だと近衛全体の健康管理に責任がありますからね。わたしは、王家の方々だけで精一杯。それに、あまり、武術は好きじゃなかったもので、でも、陛下にからかわれるのですよ。運動を勧める割には自分はどうなのだと」とベンダーは苦笑いした。

「丁度、よかった、これ見てください。施療院にいりようなものを書き出したんですが」とブルックナー伯が予算書を取り上げた。受け取るとベンダーは目を通し始めた。

「幾つか、足りないものもありますね」とベンダーは、書き加え始めた。その間、ブルックナー伯は工部尚書に「君ね、救貧院以外の候補地を探してきたまえ」

「あそこじゃないんですか」

「候補地の一つだ。たしかに、国母さまは救貧院を施療院にするように遺言された。しかし、勅命は、国母さまの遺言状の上だ。一番いい、立地条件のところを作るのが当然だろう」

「しかし、地図もないんですよ、軍事機密とかいって」

「だったら、陸軍の本営本部に行ってみせてもらいなさい」

はあとといって、工部尚書は不承不承に立ちがった。切れ者と評判の陸軍元帥は、苦手だった。

工部尚書が立ち去るとベンダーは最近の大学の医学部の状態について話し始めた。

「そりゃ医学学部長は、内科といいますが、解剖もしない、診察もほとんどしない。無論、うわさの段階ですが、学生たちも減っているというし、どうなっているんでしょうね」

「先生、それ本当なの」とセシーネは問いただした

「まだ、確かめて見ないとわからないが、医学というのは医学書を読むだけじゃダメなんだ。臨床、つまり、実際の診察や治療が大事だ。無論、病理といってなぜ、病気になるかという研究も必要だが」と苦り切った表情のベンダー。ブルックナー伯も、第一王女も眉をひそめた。

陸軍本営本部では、軽騎甲冑を身につけた王太子のエドワーズが、視察のための作戦会議に出席していた。会議には、陸軍元帥他、参謀長、近衛師団長のサツカバン准将、近衛師団付きの参謀、調達局に配属されたランセル第三王子、王太子付の武官などが会議室に集まっていた。

「計画というのは、あまり、細かいと、それに足元を掬われる場合もありますから……後、ご視察には今回は小官も同行します」と陸軍元帥。

「なんだか、本格的になつてきたなと幕僚会議気分を味わっていた王太子はうなずいた。

「いやがる師団長もいるだろうな」と重騎甲冑の近衛師団長

「そろそろ、師団の移動も考えているんですよ。サツクは、近衛はあきたかな」と制服の陸軍元帥

尋ねられた近衛師団長は逆に「お断り申し上げます。近衛であることを誇りに思えといったのはどなたかな。それとも、小官では不服か」と陸軍元帥に詰め寄った。近衛師団長サツカバン准将には、父子二代にわたって当時連隊だった近衛を師団にしたという自負がある。

「いや、それなら、それで良い。わたしは、色々師団を回ったが、近衛だけは経験がないのですね」と元帥

「あれだけ、口を挟めば十分でしょう。ここまでいうかというくらいにいうのだから。殿下、元帥の軍学校時代のあだ名は文句屋というんですよ」と元帥と軍学校と同期の一期生の近衛師団長。

「まあ、副参謀長でしたから、仕事の一つですよ」と文句屋はあっさりとしていた。

「やはり、殿下には、全駐屯地を見て頂きたい。何、国内は安定していますから、大丈夫でしょう」と元帥の提案にエドワーズは「僕はね、今は兵役期間中だと考えています。だから、武官の勉強をまずしようと思つて、ホントは軍学校にも入りたかった」

「しかし、殿下、軍学校に入ったら、今度は兵学校ということになりますよ」と元帥は指摘した。海軍にも士官学校があり、それは兵学校と呼ばれていた。

「それもそうだな」と意外な盲点をつかれたエドワーズ。

「取り敢えず、第七軍区までということで、随行員は最小限度の方がいいでしょう」と元帥は軍事機密である地図を眺めながらいった。近衛師団長は随行する部隊の編成を考え始めた。

「僕は、天幕で休みますから」と武官気分を味わいたいエドワーズ。補給隊が当然いるな、食料はどうする」と近衛師団長

「持参することはないでしょう。荷物が多くなるだけだし、後は、各師団の方から、ご一行の食費が請求されるかどうかだが、それも興味がありますね」と軍を動かすとは金も動くし心得ている元帥

「小官だったら、請求するね」と近衛師団長も興味があつた。

「取り敢えず、行軍日程を決めましょう」とガナツシユ元帥

元帥の行軍という言葉にエドワーズは内心ワクワクした。突然、元帥が参謀長をしっかりと始めた「君ね、行軍計画も立てられないのか、午前中、何やっていたんだ」

ハアと反応の鈍い参謀長。

「まったく、軍略の基本だろうが、取り敢えず。移動に一日、視察に一日でいい」と軍略の専門家である元帥

「まあ、歩兵に合わせればいいだろう」と随行員の編成を考えていた近衛師団長。

「あの、俺は、制服なんですかね」と制服のランセル

「本営本部から視察に行く時は甲冑が規則です、重騎甲冑はお持ちでしょう」と元帥。

「僕も、重騎の方がいいかな」とエドワーズ。

「そうですね、そっちの方がよろしいでしょう」と元帥。

「いいよな、エドワーズは将官甲冑で。俺なんか佐官甲冑だもん」とランセルは自分の待遇に少し不満だった。将官だけに許された将官甲冑は、胸当てに打ち出した模様が入っているなかなかの芸術作

品である。大事な商売道具である、武官たちは甲冑にかなりそれぞれこだわりがある。軍支給の甲冑は精々体に合わせる程度だが、自分で買い取るとそれぞれ職人たちに注文をつける。だが、それでも規則があつて、鉄で出来た重騎甲冑の裏打ちは、尉官は布、佐官以上が革と定められている。胸当ての打ち出し模様は将官だけである。打ち出し模様を入れて欲しいとランセルは甲冑職人に頼んだが、王子でも規則は規則だと職人の親方にあつさり断られていた。

「まあ、がんばつて、将官試験に合格することですね。いいですか、ランセル少佐、初代の調達局長は、元々は文官でしたけど、武勇でなく、物資の手配などで将官になりましたよ。まあ、やり手でね、ついていましたよ、わたしは」と元帥は昔話を始めた。元帥はこういつた現在の軍制度が整つていく課程なども王太子に話すべきだと思つていた。

元帥の話はエドワーズには興味深かつた。そして、初代の陸軍元帥のヘンダーズ王子を現元帥は、やはり、大したお方だと称した。確かに王国軍をここまでした功労者であることは事実であろう。アンドーラは、陸軍の存在で平和を享受していた。

「斥候はどうする」と話題を行軍計画に戻した元帥
「軽騎の奴らもいかせるから、そいつらにやらせればいい」と軽騎隊は二個小隊かなと考えている近衛師団長「後、ランセル殿下の方は、重騎の一個小隊でいいでしょう。誰を連れて行くか人選して下さい下さい」

いくら国内が平穏とはいえ、ぶらり二人旅といかないのが、王子と第三王子という身分である。元帥は参謀長と近衛師団の参謀に行軍計画を参謀本部室で立てるように命じた。近衛師団長も当然、彼らの仕事だと思つて何もいわなかつた。

「しかし、文句屋が来たといやがる連中もいるだろうに」と近衛師団長。師団長の中には軍学校を卒業していない、元帥より年長者もいた。

「見られて困る師団にしておく方が悪い。機織りの計画もあるし」

と元帥はここで通過地点の駐屯地にいる親友のカルバス・ファンタール中将を思った。元帥は予め、各師団に予告をしておくつもりはなかった。不測の場合に備えるのが武官たるそれも、将官の心得だと思っっている。

「後、いつ出立するかですが」とここは王太子の都合を聞くべきだと元帥

「そうだな、海洋大会の次の日では、準備は無理かな」と早くいききたいエドワーズ

「よろしいでしょう」と近衛師団長。武官は迅速なりだとこれまた、部下をしっかりとばしたい気分の元帥も同意した。

こうして、王太子エドワーズのアンドーラ全土にわたる視察が始まった。この駐屯地視察は各地で色んな波紋を呼ぶが、エドワーズ自身もそれによって成長していくのである。

会議は視察の行軍計画より陸軍の組織的な話になった。これも王太子には勉強になった。まだ、学ぶべきことがたくさんあるとエドワーズは思った。

「役所ですよ。本営本部なんて、武官だって役人ですからね。書類仕事もきちんとしてもらわないと」と陸軍の長は、調達局に配属されたランセルにやんわりと言った。そこへ元帥の秘書官が工部尚書の訪問を告げた。何だろうと元帥は王太子に断って席を外した。すっかり武官気分のエドワーズは立ち上がって敬礼に返礼しながら、まだ、見ぬアンドーラ全土の駐屯地に思いを馳せていた。

工部尚書は、陸軍本営本部の玄関で待たされていた。何となく気が重い。そこへ制服姿の陸軍元帥がやってきた。用件を伝えるとほうという顔をした。よろしいでしょうと本営室に案内し始めた。工部尚書のニドルフは生まれて初めて陸軍の中樞の建物の中に入った。元帥の執務室である本営室にはいると陸軍元帥は秘書官に地図を探すよう命じた。

「どこにあるんです」と秘書官はいった。うんざりした顔の元帥は

「調達局にいつて聞いてみなさい」

秘書官はあわてて敬礼をして出ていいった。

「まったく、手取り足取りいわないと何にも出来ないんだから」と元帥は文句を言った。やはり、厳しい人だと工部尚書は思った。

「取り敢えずここでお待ち下さい。小官は重要会議がありますので、失礼しますよ」と元帥は本営室を出いった。一人残された工部尚書は、敬礼はなかったなと思いつながら、将官甲冑の飾られている本営室を見回した。工部省の自分の部屋より立派だなと思いつながら、ふと、下士官それも最下位の伍長だった自分には遙か遠い地位にある陸軍元帥の椅子に座つても良いかなと彼は考えた。

一方、ガナツシュ元帥は王太子たちとの会議に戻つた。

「ねえ、元帥、ちょっとお願いがあるんですが」とランセル「何ですか」

「規則では、本営本部への出勤は私服となつていますが、小官は、重騎甲冑で来たいんです。大体、私服というのは本営本部の所在を知られないためでしょう。でも、誰だつて、ここが本営本部だと知っていますよ」

元帥は少し考え「いいでしょう、小官もそうしましょう」とあっさり許可を出した。その後、鹿狩りの話になつた。元帥は自分が指揮とるといつた「あいつには、無理だ」と簡単な行軍計画も立てられない参謀長を切り捨てた。

「海軍はどうする」と近衛師団長

「場所をどこに割り当てるかだな」と思案顔の陸軍元帥。ここで、ニヤリとした。そして、自分の海洋大会についての計画をうち明けた。

「まあ、鹿狩りに出るなら、そつちも出させるといふことか。面白い」とこつちもニヤリとした近衛師団長

「後は、戦力がどの程度かなといふことだな」と戦力を確認するためにすでに伝令はだしてある元帥。たかが海軍兵学校の訓練生の訓練成果を見るだけでは物足りないと思つていたエドワーズもランセ

ルも賛成した。あさつてでは当然間に合わない。来年が楽しみだなとランセルは思った。

王太子と陸軍元帥の視察計画の会議は、五時に終了した。元帥は会議室から本営室に戻った。そこで自分の椅子に腰掛け地図とにらめっこをしている工部尚書がいた。

「みつかりましたか」と一応聞いてみる。

「地図だけ見ても見つかりませんよ。建物を見たり、実地に見ないと」と椅子から立ち上がった工部尚書

「そんなの部下にやらせりやいいですよ。何のための部下ですか」と元帥は制服を脱ぎ始めた。

「なにしてんです」と元帥の行動に不審な工部尚書

「着換えるんです。君、ちょっと手伝つて」と秘書官を呼んだ元帥飾つてある自分の将官甲冑に近づいた。

好奇心旺盛な工部尚書は陸軍元帥が甲冑を身につける様子をとくと拝見することにした。

陸軍本営本部から、自分の師団長室に戻った近衛師団長サツカバ准将は、副官から妙な報告を受けた。どうやら、王太子を捜し回っている不審な若い侍女らしいものがいると。師団長は顔をしかめた。エランダ事件は記憶に新しい。そこで副官にその人物を連行するように指示を出し、自分は、女官長のメレデイス王女に会いに行った。やはり、年若い男女が暮らす宮殿である。当然、風紀の乱れは忌むところである。これは師団長の自分と女官長にその責任があると彼は思った。

「ともかく、本人に王太子殿下にどんな用事があるのか聞いてみるつもりです」

「そうね、お願いね。サツク」と心当たりがない女官長はいった。

もしも、王太子の寝室に潜り込むようなことがあつたら一大事である。あの事件以来、師団長も女官長も神経をとがらせていた。

夕食の席で、国王は、エレー又は新兵だ、そう扱うように同席している王家の十二歳以上のものにそう命じた。

「まったく、王女という身分をはき違えている。そろそろ、そういつたこともわからせないかと、当分はエレー又新兵と呼びなさい。今は夏だから、水仕事だつてやらせなさい」と平坦な声で国王はいった。王妃は思わずため息が出た。自分も子供時代に新兵扱いされ、それを喜々と受け止めた王太子は、視察について国王に報告した。「やはり、全駐屯地を見て回るべきだと思っんです。元帥もそう勧めてくれたし、取り敢えずは海洋大会の二日後に出発しようと思いません。第七軍区までいつて帰ってきます。大体十日ぐらいでしょう。もうちよつとかかるかな」

国王は、ほとんど王都から出たことがなかった。王太子時代にエソバーへ何度かいったことがあるだけだった。やはり、治めるべきアンドーラ全土を見て回るのはエドワーズにとっていい勉強になるだろうと国王は許可した。自分がいけば行幸となつて大変な行事になることはわかっていた。エドワーズは、父親の許可をもらい嬉しそうだった。その日の夕食の話題は、鹿狩りと海洋大会の予想と無難な話題だった。

セシーネは、エドワーズが各地を視察することで、色々なことがわかるのだろうと思つた。もう本当に飢えて暮らしもままならぬ人々は、アンドーラではいなくなつたのだろうか。病気で苦しんでいる人はいないのだろうかとそんなことをぼんやり考えていた。

夕食が終わり、部屋に戻るとタチアナの姿はなく、ナーシャしか部屋にいなかった。別に用もないのでセシーネは、ベンダーから借りた医学書を読み始めた。ナーシャもおとなしく、刺繍に取りかかつた。今日の午後、ナーシャは王妃に呼び出された。

ヘンリッタ王妃は、侍女のしつけの責任は自分にもあると思ひ始めていた。侍女のしつけは女官長の責任ではあるが、現女官長のメレディス王女は未婚である。その辺が不十分だと思つたし、また、王太子は自分の権限外だと思つたが、第一王女に関しては、多少の

発言権はあると思っていた。セシーネの様子をナーシャから聞いた後
「あの子は、そんなわがままいわないと思うわ。やることはきちんとわかつている子だから。ところで、婚約しているんでしょう」と針仕事をしながら、王妃はいった。王妃の居間に入ったナーシャは、実家であるルンバートン侯爵家の領主館でしばしば開かれたお針の会を思い出した。侯爵家では、王都から持ち帰った服や布地などを見ながら、侯爵夫人自ら、裁縫をしていた。領民の妻女たちも呼ばれ、そちらも縫い物をしたり、色んなおしゃべりをしたりした。ここでも、王妃を始め、それぞれが縫い物に精を出している。

やはり、縫い物をしながら第二王子の妃アンジェラが「まあ、お相手はどんな方なの」とたずねた。居間にいる人々が縫い物から目を上げ、一斉にナーシャに視線を向けた。ナーシャは赤くなつてうつむいた。婚約者がどんな方とたずねられても、本人に会つたのは二回だけである。縁談はナーシャの父親がルンバートン侯爵夫妻に持ちかけ、ほとんど、両親と侯爵夫妻、相手のブルグース子爵家との間で話がまとまつた。

「あの、陸軍中尉です。父の部下で」

ここで、ジョイス王女が泣き始めた。王妃とアンジェラ妃が席を立ち、その側へ行く。王妃が「まあ、リディア、それはジョイスが使っていたのでしょうか。どうぞは？」

どうやら、おもちゃの取り合いらしい。アンジェラ妃が「リディアはそれが気に入っているのよね。ほら、ジョイス、これ」といつて別なおもちゃでジョイス王女の気を引く。リディア王女とジョイス王女が遊び出すと王妃とアンジェラ妃は席に戻った。

「さっきの話だけど、結婚するということは、普通、子供が生まれるわ。子供を育てるのは大概、母親でしょう。ナーシャ、子供は嫌い？」と王妃は本題に入った。

そこで今度はコーネリア王女が泣き始めた。ネリア妃があわてて抱き上げ、乳を与えようと服のボタンを外し始めた。

「ネリア、あなただったら、まず、おむつが濡れているか見なきゃ」

と二人の子を持つアンジェラ妃。

ネリア妃はあわてて確かめた。ほらとアンジェラ妃。

「ちょうど、いいわ、ナーシャ、やってご覧なさい」と王妃はナーシャにおむつ替えを命じた。

ナーシャは赤ん坊のおむつなど取り替えたことなかったが、なんとかやってみるしかない。見守っていたアンジェラ妃が「そんな、ぐずぐずじゃだめよ」と手直した。さすが、二児の母親である手慣れている。コーネリア王女はネリア妃に渡され、母乳を飲み始めた。

つまり、王妃は、ナーシャが、子供の世話を覚えるべきだと考えたのである。幼い王女たちにはそれぞれ担当の侍女がいるが、休みの日もある、その時、ナーシャも手伝うべきだと。

そんな、訳で、ナーシャも色々忙しかった。タチアナのことまで気が回らなかった。

第一王女の部屋に女官長のメレディス王女と近衛兵に腕を捕まえられているタチアナがはいってきたのは、夕食後三十分位だろうか。「何なの、叔母さま」とセシーネは本から目を上げた。タチアナは泣いていた。

「あなた達は、廊下で待っていなさい」と女官長はまず近衛兵たちを部屋の外に出した。女官長のメレディス王女は「セシーネ、ちょっと伺いますけど、エドワーズに何の用があるの」

「お兄さまに？」とセシーネは顔をしかめ「別に、お兄さまにこれって用はないけど」

「そう」と女官長の顔が厳しくなった。

「それで、タチアナ、王太子殿下にどんな用があるの」と今度は泣きじゃくるタチアナに女官長は詰問した。ナーシャは泣きじゃくるタチアナを抱き寄せると「あの、わたしが事情を聞いてみます、あのタチアナは人前が出るのが苦手です」

「へえ、それで、あなたがこの不始末の責任をとるといふ訳ね」とタベのにこやかな顔とうって変わって険しい顔のメレディス王女。

顔立ちがいいだけに少し迫力がある。

「不始末だなんて、大げさじゃない」とセシーネ。

「セシーネ、あなただって、あの馬鹿娘を忘れた訳じゃないでしょう」と女官長

「そうね、タチアナ、お兄さまにどんな用があつたの」とセシーネはエランダのことを思い出した。

「泣かなくなつていいじゃない。まるで、わたしが苛めているみたい」と両手を腰にあてたメレディス

「地図だそうですね」とやつとしゃくり上げているタチアナから聞き出したナーシャ

「地図？それは、もう良いといったはずよ」と地図よりバルカンのほうが役に立つと考えているセシーネ。

「あの、王太子さまが探してくれるといったの、どうなの、タチアナ」とナーシャ。

「エドワーズはそれほど親切じゃないと思うわ、いろいろ忙しいんですからね」とここでメレディスはタチアナが馬鹿正直なのではないかとふと思った。報告によるとタチアナは午後一時半頃から夕食の時間まで宮殿中を探し続けていたらしい。タチアナは首を振り「王太子さまが理由を」とようやくいった。

そんなところに近衛兵が園丁頭のバルカンとビラン中尉の訪問を告げた。セシーネは通すようにいった。タチアナが何をやったか気になるが、こつちも大事だ。

「バルカンに何の用があるの」と探りを入れるメレディス

「ちよつと、薬草のことで」とセシーネは叔母の質問をかわした。

バルカンとビランが入ってきた。

「何事です」とただならぬ気配を感じたビラン

「あなたには、関係ないわ、ビラン」とメレディスはピチャリといった。

「ともかく、理由をいいなさい、タチアナ」とメレディスは泣いているタチアナに少しうんざりしてきたが、やはり、ここははつきり

するべきだと思った。セシーネはここで推理した。探しに行けといった図書室は大概、王太子が使っていた。タチアナは地図を探して欲しいと王太子に頼んだ。だが、王太子は自分が何をしているか探るために地図が必要な理由を聞いてこいといった。ところが今は必要がないとセシーネはいつた。このことを伝えるためにタチアナは王太子を捜したのでは、ないかと。セシーネはメレデイスに事情を説明しながらこう結論づけた

「つまり、お兄さまに地図は必要がなくなったというために、お兄さまをさがしていたの」

タチアナは泣きじやくりながら何回も肯いた。その様子を見ていたメレデイス王女は

「そういうことは王太子殿下に直接でなく、王太子殿下下の侍従か武官にいいなさい。それが王宮のやり方よ。まあ、なれてないから仕方がないけど、誰かに用がある時はお付きの侍女か侍従に頼むのよ。わかった？あんまりみつともない真似はしないでちょうだい」と少し溜飲を下げた女官長は第一王女の部屋を出ていった。

セシーネはナーシャにまだ、泣きじやくっているタチアナを自分たちの部屋に連れて行くように命じた。ナーシャとタチアナは部屋を退出し、セシーネは、園丁頭のバルカンに椅子を勧めた。

「バルカン、悪いわね、忙しいんじゃないの」とセシーネは、ここで制服に着換えたビランを見た「ビランも掛けたら」

「じゃあ、失礼します」といって、ビランは椅子に掛けた。バルカンも椅子に掛けていた。

バルカンは、ここでこの場の雰囲気や和らげるために今朝の「人參引っこ抜き事件」も話でもしようかなと思つたが、止めとおいたとほづが無難だと判断した。そして、薬草採りの話になった。バルカンはそういうことなら狩猟頭が適任ではないかといった。セシーネは王家に狩猟頭なんていることを知らなかった。王都のはずれに王家専用の狩猟場がある。そこは国王の許可なく立ち入ることは出来ない。やはり近衛師団を定年退官した狩猟頭が普段、そこに見張

り小屋を立てて暮らしていること。薬草などにも詳しいことなどをバルカンは話した。

「とりあえず、あつしから、話してみましよう。ちょっと変わり者というか。人と話すのが苦手なやつなんで」

セシーネは少し考えてから「じゃ、お願いするわ」とバルカンに頼むことにした。どちらにしても、海洋大会が無事すんでからのことだとセシーネは思った。あの子たちがお行儀よくしてくれたらいいのだけど、セシーネは再び読書に戻った。

国王は書斎と呼んでいる部屋で王太子とランセル第三王子とともに王太子の駐屯地視察について進捗状況を近衛師団長のサツカバン准将から報告させていた。

「まあ、あのあたりはそれほど険しい山道ではありませんし、王都街道をずつつと行けばいい訳ですから、特に問題はないでしょう」と何度かその道を往復したことのある近衛師団長はいった。普段は、五時に勤務を終えるが、彼の住まいも宮殿の一画である、多少の残業をしてもかまわないと思っている。彼は、王太子に第一王女付けの侍女が王太子を捜し回っていることを告げなかった。それは、女官長に任せた方がいいと判断した。泣いている若い娘を怖がられるだけだと思った。

「ご視察には小官は同行いたしません、元帥が同行いたしますので、それで十分でしょう」

「サツク、よろしく頼む。エドワーズ、取り敢えず、いつてみることだな」と国王は、やはり、自分もアンドーラを色々旅したいと思っ

「俺も、視察を色々しなきゃいけないですかね」とランセル

「それは、調達局が必要があれば、でもね、殿下、書類仕事も大切ですよ」とランセル王子のやんちゃ振りをよく知っている近衛師団長。彼も、普段は書類に取り囲まれていた。

「ホントに料理をなさるんですか、いや、鹿狩りですよ、王太子殿

下

「うん、どうしようかな」と少し、迷い始めた王太子。

「やるうぜ、何事も経験だぜ」とやる気満々のランセル。

「ここで鹿狩りの話になった。何度も参加したことがある近衛師団長が「射止める数は、師団ごとに決まっています。その以上だった場合は、その翌年その分数を減らされる訳で、牝鹿をやったものは罰金ものすな。子鹿も同様で、やるのは角がある雄鹿だけ。あの時期は、結婚というか、雌を奪い合って、角をつき合わせる。少し、気が荒くなっています」

「しかし、何で、俺は連れて行ってもらえなかったでしょうね」と不満顔のランセル。

「勤務態度が悪い。それに重騎兵になりたいって。あれは、軽騎兵を連れて行くことになっています」

「勤務態度が悪い？」と国王。しまったと思うランセル。

「ダメですよ、殿下、夜勤の連中に酒を飲ましたりしたら」

「ちよつと親睦を深めよう」と、いい訳するランセル

「別な方法だってあるでしょう。陛下だって、お酒を召し上がるのは休みの前の晩と行事の時だけでしょう。小官はね、近衛は他の師団の手下になるような師団であるべきだと思っし、規律は厳しくなきゃ」

「すいませんでした」と元上官に謝るランセル少佐

「わかってくださればいいです」と謝罪を受け入れた近衛師団長「しかし、何で陛下主催になさらないのです？」

「鹿を射止めて、勲章というのもな」と国王。弓術が今一つ自信がないとはいえない。

「それも、そうですね」と近衛師団長

そして、話は、陸軍元帥の若い頃の話になった。

「なんだか、生意気なやつだと思った。それで、ガナスの名前を覚えて」と陸軍元帥より年若い国王はいった。その後、軍学校時代の陸軍元帥の優秀さを近衛師団長が披露した。やがて、国王が懐中時

計で時間を見、それぞれ国王にお休みなさいをいってそれぞれの部屋に引き上げた。

宮殿は、夜勤の者たちを残して、眠りについた。

翌朝、ペトールを見舞ったブルックナー伯は救貧院の院長室で救貧院長のキルマ・パラボン伯爵夫人と向きあった。第一王女はケナスと見習の子たちと共に、ペトールを念入りに診察している。ブルックナー伯はキルマの説得に取りかかった、

「実は、ですな。キルマ夫人。施療院の設立は国母さまの遺言です。あなたは長年女官長を努められ、国母さまの看病もなさった。この施療院に関して、何か、国母さまから伺っていませんか」

実は、キルマは王太后が遺言状を作っていたことも施療院のことも、なに一つ王太后から聞かされていなかった。このことはキルマを不愉快にしていた。

「施療院を思いつかれるとは、国母さまらしい思いつきですわ」とだけキルマはいった。

「そうですね。問題は、それをどこに造るかという事ですな」

「ここでは、ないのですか」

「いや、候補地の一つですな。他に適切な場所が見つければとも考えております。それは、ともかく、あなたには施療院設立のお手伝いをしていただければとわたしは思っているのですよ。キルマ夫人。あなたは女官長としても、立派な業績を残されたが、救貧院の運営でも、見事な手腕を発揮されていらっしやる」

「別に大したことではありませんよ」とキルマは、元大蔵卿に卑下して見せた。キルマは《治療の技》に関わるなんて内心ではまっぴらご免だった。元大蔵卿は食い下がった。しかし、ここは、もう一つ、お国のためにお役に立ちたいと思いませんか。適切な医療を行き届くために」

ブルックナー伯は施療院の必要性を説き、その協力をキルマに再び要請した。キルマは夫に相談してみると態度を保留した。

ブルックナー伯や第一王女が帰った後、キルマは院長室で一人物思いにふけっていた。王女とはいえ、小娘に過ぎないセシーネにおびえている自分が情けなかった。逃げれば逃げるほど追いつめられるとは。ブルックナー伯の協力要請が国王の意志かどうか確かめようにも宮殿は遠く、女官長時代と同じようにはいかない。《見立て》が怖いと、もちろんいえなかった。王立施療院の設立に携わることで何か自分に利点があるのだろうか。ブルックナー伯は「お国のため」といったが、さて、自分はどうすれば、上手く立ち回れるのだろうか。キルマの計算はそこに絞られていた。

そして、海洋大会の当日、心配していた天候は、晴れ渡り、大勢の見物人が会場であるチェンダー川の沿岸に詰めかけた。観衆は、競技に歓声を上げたり、拍手を送ったり、大いに楽しんでいる。その中で、第一王女付け侍女のタッチアナ・プルグース子爵令嬢の関心は、競技ではなく王太子の一挙一動に向けられていた。王太子のエドワーズは、今日は甲冑姿ではなく、礼装と呼ばれる服を着ていた。時折、望遠鏡をのぞき競技を見ている。

やがて、全ての競技が終了し、総合点が発表され第三組の優勝が決まった。海軍では軍の最小人員要員を十人で一組と呼ぶ。陸軍は一班であるが、海軍の独自性を強調した結果である。優勝した組にはヘンダース杯と呼ばれる金杯が国王からヘンダース第二王子へ渡され、優勝した第三組の組長に授与された。組長は高々とそれを掲げ、優勝の喜びを表した。ちなみに優勝した組はその金杯でエールを飲み回すという行為が黙認されていた。海洋大会は無事終了した。後は、晩餐会があるだけだった。

王太子も席を立て第一王女に近づいた「なあ、セシーネ、鹿狩りのことなんだが」

「また、その話、お兄さま。そのうち頭から角が生えてくるんじゃないの」とセシーネはからかった。

「そういう医学的根拠のないことはいいな」

第一王女の後ろを歩いてきたタチアナは、医学的根拠ですつてな
んてむずかしい言葉を王太子は言うのだろうと思った。

「それも、そうね、それでなんなの、お兄さま」とセシーネはエド
ワーズと並んで待っている馬車に近づいた。

「かなり、危険らしい、ケガ人がでるじゃないかなと思ってさ」と
いいながらエドワーズは馬車に乗り込んだ。

「その、治療をお兄さまがするというの」とセシーネも乗り込んだ。
座席に座ったエドワーズは「まさか、お前じゃあるまいし」と肩を
すくめた。タチアナは馬車の前で立ちすくんでいた。馬車から身を
乗り出しセシーネが声を掛けた「タチアナ、何ぐずぐずしているの、
早く乗りなさい」

何という幸運であろうか。王太子と同じ馬車に乗れるとは、タチ
アナはあわてて乗り込んだ。従者が馬車の扉を閉め、馬車が動き出
した。タチアナは斜め前にいる王太子のほうを見ないように目を伏
せた。

「そんなに危険なの」とセシーネ

「危険を承知の上さ。ケガを怖れていたら何も出来ない」

ここで、セシーネはブルックナー伯から聞いたアンドーラの医学
事情をエドワーズに話した。

「ふうん、じゃ、医務官は、各師団にいるんだな」とエドワーズは
確認した「ところで、海洋大会もな、ちよつとわかりにくいな。最
後の上陸艇の競争がすんでも、どこが優勝か点数を発表するまでわ
からないだろう」とエドワーズは苦言を呈した

「それも、そうね」とセシーネも同意した。少し考えてからこう提
案した「こうしたら、どうかしら、最後の競争の時、それまでの点
数で、出発地点を変えるの。点数によって、ゴールまでの距離を変
えるの、いい点数の組は距離を短くして、悪いのは距離を長めにす
る。差を予め付けておくの。どうかしら」

同乗していた王太子付きの若い侍従が身を乗り出した「それ、い
いですよ。最後の競争ですぐわかる。盛り上がりますよ」

エドワーズは腕を組んだ「うーん、そうだな。あまり差を付けすぎても、しらけるし、その辺が難しいところだな。よし、提督には僕からの提案ということで、いつてみるか。セシーネ、わかっているだろうけど、軍のことで女が口挟むのは軍がいやがるんだ」

「もちろん、この功は、王太子殿下にお譲りしますわ」とセシーネはすました口調でいった。ここで、エドワーズはクスクスと笑いだした。海洋大会に陸軍も参加したいといった陸軍元帥の言葉を思い出したのである。

「なんなの、お兄さま」

「何でもないんだ、セシーネ。ちよつとした軍事機密というやつさとエドワーズは馬車の窓から外を眺めた。

「そう」とセシーネは受け流した。

「しかし、去年はどしゃぶりだったな、ひどかった」

「ええ、そうでしたね」と侍従

「しかし、僕の記憶では、馬上試合は一度も雨になったことはなかったな。去年もどうかかなと思ったが、何とか持って、夜になって降り出した。不思議なもんだな」

「そういえば、そうですね」と侍従は相づちを打った。タチアナは会話に加わるような勇氣はとてなかつた。そして、幸運は馬車が宮殿に到着することで終わりを告げた。馬車から降りた王太子は護衛の陣容が整うと「じゃあな、セシーネ」と手を挙げるといってしまった。

それを見送ったセシーネはタチアナに「タチアナ、馬車の中で聞いたことしゃべっちゃダメよ」

「あおう」

「海洋大会のこと。まだ、決まっていけないのに競技のやり方が変わるとかすぐうわさになるから。余計なことはいわないこと」

「はい、わかりました」とタチアナは上気した頬で肯いた。タチアナは王太子と秘密を共有出来るという事実胸がときめいた。

第一王女も護衛の陣容が整うといつもよりゆっくりとした歩調で歩

き始めた。

「ねえ、ビラン、子供たちはどうしているかしら。やはり、協力してくれた騎兵にはわたしからお礼をいった方がいいかしら」

「何、あいつらには酒の一杯もおごればすむことです」とセシーネの斜め後ろを歩いているビラン。

「だったら、そのお金はわたしが払うわ」

「そりゃ助かります」

部屋に戻るとセシーネは奥の寝室の化粧台の抽斗から金貨を取り出してきた部屋の入り口で待っているビランに手渡した。ビランは礼を言つて「今日はもうお出かけにはならないでしょう」と確かめた。

「ええ、メリメとナーシャがきたら通してちょうだい」

ビランは敬礼をして廊下へ出ていった。しばらくしてナーシャとメリメがやってきた。メリメも今日はいつもと違っておしゃれをしていた。メリメとナーシャの手を借りセシーネは豪華な衣装を脱ぎ、頭から宝冠を外し、結び上げた髪をほどき始めた。宝石がちりばめである宝冠は王家の女性だけに許された権威と富の象徴だった。国王は普段は戴冠式に用いた王冠を被らない。謁見の時だけである。他の儀式の時はもう少し簡素な造りの王冠を用いていた。

「ねえ、この衣装だけど、よかつたら売ってあげるわ、どうせ、もう、着ないのだから」と第一王女は侍女たちに持ちかけた。

「とても、わたしには手が出せそうもありませんわ」とナーシャ。

「あの、本当に売ってくださるのですか」と案の定顔をほころばせたタチアナ。こんな衣装を着てみたかった。

「値段はメレデイス叔母さまに聞いてちょうだい。メレデイス叔母さまに売りつけられるのよ」と衣装代も馬鹿にならないと考えている第一王女。

「あの、母に聞いてみます」とタチアナは、セシーネが脱いだ豪華な衣装が欲しいと思った。

普段着に着替えたセシーネは化粧を落とすと「ああ、さっぱりし

た」といった。メリメが「王女さまはこういうのがお好きでないようですね」と笑った。

海洋大会の翌日、国王は執務室へはいかず、政務を休んだ。これは例年のことで、海洋大会を観戦し、晩餐会に出席した貴族たちが「ご機嫌伺い」にやってくるのでそれを見込んでのことである。朝食がすむと国王は菜園に足を向けた。柵で囲まれた菜園の入り口で制服姿のジャンク少尉が待っていた。

「何だ、ジャンク、休みじゃなかったのか」と鍵を開けながら国王はいった。

「だから、お手伝いしようと思って。王女さま方は？」

「セシーネは救貧院へ行くといっておった。エレーヌは、当分手伝わせない」

「陛下、あれは残念でしたね」とジャンク少尉はエレーヌ王女が人參を勝手に引っこ抜き、国王があわてたことを思い出し、我知らず笑みがこぼれそうになった。

「まったくな」といいながら国王は柵の中に入った。ジャンク少尉も後に続く。

「ところで、陛下、記録をとられるなら、その場でなさった方がいいと思います。自分は多少速記が出来ますから」といってジャンク少尉は陸軍特製の手帳と発明品である新しい筆記用具を取り出した。見かけないその道具に国王は「それは何だね」

「これですか、同期のやつが持ってきたのですが、簡易筆記具と呼んでいました。試しに使ってみて改良点をいって欲しいって」

「ちょっと、見せなさい」と新しもの好きの国王は手を差し出した。国王の気性がある程度は心得ているジャンク少尉はおとなしくそれを国王に手渡した。どうやら木炭を細くして紙で巻いてある。国王は興味深げに手の中のを眺めている。

「変わったやつなんで、家の事情で軍学校に入ったんですが、ものを造る仕事が好きって、職人になりたいとかいって」

「ほう」といつて国王は簡易筆記具をジャンク少尉に返ししながら、何ヶ月か前、陸軍元帥から軍備のための様々なものを研究開発するための施設を作ったと報告を受けたのを思い出した。この簡易筆記具とやらもその産物であろうと推察できたが、人参の行方ほど熱心にはなれず、国王は菜園の作物の発育状況を確かめ始めた。問題の人参の育っていた場所に行くよ

「ここは、どうなさるおつもりですか」とジャンク少尉

「やはり、もう一度、人参を蒔こうと思う。その前に肥やしをやらんとな」

大蔵卿の父親で陸軍元帥の兄でもある、ミゲル・ラシユール侯爵の提唱した人の排泄物を熟成させ肥料に用いる農法は今やアンドーラ全土に広まっていた。

「あれは、すごく効くそうですね」とジャンク少尉。

「そうらしいんだな」と国王。

「場所はわかっておりますから、持ってきましょうか。ところでバルカンじいさんはどうしたんですか」

「なんだか、苗木を見に行くとかいっておった、まずは、全部みてしまおう」と国王は実をつけ始めた胡瓜に近づいた。ジャンク少尉は簡易筆記具をどうも今一つだなといいながら、巻いてある紙をはがした。

「まだ、改良点はありそうだな」と国王はいった。

タチアナは様子を見に来た母親のプルグース子爵夫人と会っていた。

「もう、謁見もすんだことだし、おうちに帰りましょう」

「いやよ、折角なれてきたのに」とタチアナは首を振った。第一王女付けの侍女だから王太子と同じ馬車に乗り合わすという幸運に恵まれたのである。これから、もっと幸運が巡ってくるかもしれない。「それより、お母さま、第一王女さまが衣装を売ってくださいるって。とってもすてきなよ」

「売ってくれる？」

「値段はメレデイス王女さまに聞いて下さい。ねえ、いいでしょう」とタチアナはねだった。プルグース子爵夫人は出かけているという第一王女ではなく女官長になったという第四王女に取り敢えず挨拶をすることにした。

「とりあえず、セシーネからは苦情はないわ」とメレデイス第四王女。先日の件は待ち出すつもりはなかった。

「ねえ、お母さま、それよりご衣装のことを伺ってよ」とタチアナは母親を急かせた。

女官長は衣装の値段をいった。

「まあ、そんなお高いもの、うちではとても手が出せそうもありませんわ」とプルグース子爵夫人。

「まあ、手が込んでますからね」とメレデイス王女。衣装一つでも王家と貴族とでは格が違うとメレデイスはいいたかった。

メレデイス王女の部屋を辞するとプルグース子爵夫人は未練タツプリな娘に「あなたにはあれで十分。あれだつて結構お高いですからね。身分相応というのがあるのよ」と釘を差した。タチアナは不満顔だった。第一王女の部屋に戻るとナーシャとルンバートン侯爵夫人がいた。

「まあ、お久しぶりですこと」とプルグース子爵夫人は、挨拶をした。

「こちらこそ、今、王女さまにご挨拶をしようと待っていたんですの、そちらも」とルンバートン侯爵夫人

「伯母さま、王妃さまにもご挨拶をした方がいいと思うんだけど」とナーシャ。ちよつと怪訝な侯爵夫人

「色々、お世話になっているし」とナーシャ。

「それも、そうね、どちらにいらっしゃるかしら、わかる、ナーシャ」とルンバートン侯爵夫人。ナーシャは肯いた。廊下に出ると伯爵夫人は「セシーネ王女さまは救貧院に行かれたと言うけどあなたはお供しなくていいの」

「邪魔になるだけだつて。どのみち、乗馬でお出かけになるから」
「乗馬ねえ」

「王女さまは医学のお勉強をしたんですつて、施療院を造るのですつて。その院長に就任なさるですつて」とナーシャは息せき切つて一氣に王家の情報を伯母に伝えた。

救貧院では見習の子たちが興奮状態だつた。彼らの興奮は海洋大会を見たことより騎兵たちの馬に乗せてもらったという滅多になり体験をしたことにあつた。

「さあさあ、王女さまにお礼を申し上げるんですよ」と気難しげな表情の救貧院の院長。エランが代表してセシーネにお礼をいった。

「みんなも楽しんだといいのだけど、楽しんだ後は、お勉強をちゃんとしなくちゃ」とセシーネはにっこり微笑んだ。

「当然だ、ほら、部屋に戻つて勉強、勉強」とブルツクナー伯。彼は、キルマを何とか説得しようとしていた。ある意味で、《治療の技》に関してキルマは自分より詳しいのでは思っていた。

「ところで、ブルツクナー伯もキルマも、ちよつとお話があります。ビラン、ケンナス先生を呼んできて」とセシーネは院長室に向かつた。再び、キルマは不愉快になつた。今度は何を言い出すのだろう、第一王女は。

ビランに伴われてケンナスが院長室にやってきた。挨拶がすむとセシーネが「掛けてください、先生」

これもキルマには不愉快だつた。ケンナスが椅子に腰掛けるとセシーネは切り出した。

「そろそろ、見習の子たちをどうするか考えなくては、あの子たちは医学の勉強が好きなのかしら。大事なはその点だと思います。好きでないと長続きしないでしょう。お兄さまは、好きじゃないから、医学は途中で諦めたでしょう」

「そりゃ、王太子殿下は医学を学ばれるより、大事なお勉強がありますからな。今度は、駐屯地をご視察なさるとか」とブルツクナー

伯。キルマは思わず問いただした「ご視察？」

「ええ、これもいい王太子殿下にはいいお勉強になるでしょうな」
「そんな話、どこで聞いたんですか」と王太子の駐屯地視察などキルマには寝耳に水だった。

「何、陛下からですよ。施療院の準備状況をご報告した時にそんなお話が、でましてな」とブルックナー伯は何気なくいった。もちろん話はそれだけではないが、ここでいう必要がないのでいわなかった。

「ところで、あの子たちをどうするかですな。まずは、ケンナスはどう思う」とブルックナー伯は尋ねた。

「そうですね、わたしの場合は祖母が薬草売りをしていて自然とそんなことを覚えて、その後、母から《治療の技》を教わりました。それで、きちんと医学を学びたいと思い始めて、まあ、わたしには、これしか能がないですから」

「そう、卑下することもない。大事な技術だよ。問題はあの子たちだよ」と《治療の技》は工部尚書のいった通り技術の一つと割り切ることにしたブルックナー伯。

「やはり、好きでないと長続きしないとします。《見立て》だけでも確実にわかるようになるのは何年もかかりますから、根気がいるわ」とセシーネ。彼らが一人前になるのは何年かかるのだろうか。「ちょっとよろしいでしょうか」と院長室の扉の横に立っていたピランは「そんなに難しく考えない方がいいですよ、学校のつもりでいればいいです。ついでに医学も教えてやるといって程度で、こういつては何ですが、学校に通ったことのない連中ばかりですからね」
「ここを学校にするつもりですか」とキルマはピランを睨み付けた。ピランは平気な顔で続けた「どのみち男の子には兵役がありますし、医学以外の学科なら自分たちもお手伝い出来ます。陛下がこうおっしゃったそうです。子供を育てるのは親だけではない。周りの大人にもその責任があると」

「それは、そうですね」とブルックナー伯

「どうして、そんなことを知っているの、ピラン、つまり、陛下がどうしてそんなこと仰せられたか、どうして、知っているの」とキルマは追求した。

「いや、陛下付けのやつからですよ。陛下はいいことをおっしゃると子供もないの自慢するんですよ。後は、勝手にあいつらが『治療の技』を試さないかどうかですけど、若や姫みたいなことをしなきゃいいですけど、どうなんですか、先生」とキルマの追求を軽くかわすと今度はピランがケンナスに質問した。

「面白半分にやられたら、困るな。返って傷が悪化する場合もある」と深刻な表情のケンナス。

「やはり、難しいものですか」とブルックナー伯

結局、もう少し様子を見ようということになった。セシーネとケンナスはペトールの容態と他にもいる病人の様子を見に行った。

キルマは、内心の焦りを感じていた。救貧院に閉じこもっているのは、宮殿の様子が少しもわからない。何となく、権力から遠ざかった感が拭いきれない。王太后の死後、女官長の職を辞したいというキルマに国王は引き留めなかった。

「その代わり、君にはやってもらいたいことがある、救貧院の実情を調べて欲しい。どうしてあんな費用がかかるのか調べて欲しい」と国王は救貧院の院長の職をキルマに命じた。そして、救貧院の院長の職にキルマは就いた。

院長室に残ったブルックナー伯が「実はですな。キルマ夫人、お耳に入れておいた方がいいことがありますな」

「何ですか」と用心深くキルマは尋ねた

「いや、国税の見直しですよ。何しろ国税が制定されてからもう十年以上たつ。そろそろ見直すべきだとダースが主張するですな。適正な税かどうか。牧草地が、農作地になっていたり、家畜の数も変わっているだろうし、やはり、調べるべきなのでしょう。一応、上に上げるということになって」

「上に上げる？」

「ああ、御前会議で陛下のご裁可を仰ぐということで、多分、決まるでしょう。一応、お知らせしておこうと思ひましてな。ところで、そちらの領地のほうはどうなすっているんで？」

「わたくしもこちらですし、宅も兵学校にかかりきりなので、息子夫婦がみておりますけど、国税ですか」

「多分、決まれば、大事業ですな。ただ、困ったことがありますな」

「困ったこと？」

「陸軍元帥はダース、つまり大蔵卿のやり方が強引過ぎると批判的なですな」

「でも、確か甥御さんじゃありませんか、陸軍元帥の」

「何か、心配なんでしょうな。まあ、一応お知らせしておこうと思つて。それじゃ、わたしは帰ります。第一王女さまには午後から、いつものように準備室でお待ちしているとお伝えしてください」とブルックナー伯は席を立った。

「準備室？」

「ええ、陛下から頂いたあの部屋をそう呼んでおります。王立施療院の準備のための部屋ということで。では失礼しますよ」

やはり、乗馬で来ていたブルックナー伯を見送った後、キルマは、夫のパラボン侯爵と話し合う必要性を感じていた。それも、早急に。

セシーネは、病人に《見立て》をしたり、一般の医学による診察をして回った。ケンナスがどんな治療法がいいとか、大体は薬草を始めとする薬物治療だった。一通り見て回ると、今度は子供たちの様子を見に行った。子供たちはモリカから薬草の使い方を習っていた。真剣な子もいれば退屈そうな子もいた。

セシーネもモリカの話聞いていたがピランがそろそろ時間だと告げた。

セシーネが護衛の近衛兵に取り囲まれるように帰った後、キルマは、やはり、夫に会うべきだと思った。昼食をすまずとキルマは、

徒歩で夫がいるはずの海軍兵学校へ向かった。熱い日差しの中、とぼと歩きながら、キルマは第一王女に腹を立てていた。セシーネが救貧院へ馬車で来ればそれに便乗して宮殿までは行けたはずだった。それなのに侯爵夫人でもあり海軍少将夫人でもある自分が歩かなくてならないとは。女官長時代は、何か用がある時は王太后の馬車が使えた。侯爵家でも馬車があつたが、それは息子夫婦が領地と王都の行き来に使っていた。そして、キルマは、海洋大会の観戦と王都で様々な品物を購入するため息子たちが来ていることを思い出した。どのみち、夫のパラボン侯爵は、侯爵であるより海軍少将であることのほうが重要だと考えているようなことがある。やはり、このことはまず息子に知らせようとキルマは思った。

セシーネが救貧院から戻るとルンバートン侯爵夫人とプルグース子爵夫人が待っていた。二人ともセシーネのズボン姿に驚いたようだった。

「まあ、乗馬にはこっちのほうがよろしいのよ」とセシーネは肩をすくませた。如才ないルンバートン侯爵夫人は「施療院をお造りになるとか」と尋ねた。

「ええ、今その準備のため色々やらなくてならないことが多くて。ゆっくりお話ししたいですけど。ご心配は無用ですわ、ナーシャもタチアナも、ちゃんとやっていますから」

ルンバートン侯爵夫人は引き時を心得ていた「じゃあ、私たちもそろそろ引き上げましょう。王妃さまにも女官長のメレデイス王女さまにもご挨拶はすませましたし、ただ、ちょっとナーシャを拝借出来ますか。結婚の準備のため、色々ちよつと」

「かまいませんわ、大した用があるわけではないし」とセシーネ王女は鷹揚だった。

「ありがとうございます。では、ごきげんよう、王女さま」とルンバートン侯爵夫人はセシーネに高位に対する礼をするとナーシャとプルグース子爵夫人を従えて第一王女の部屋を出ていった。

部屋に残ったタチアナは「絶対、誰にもいいませんから」

「何の話？」とセシーネは尋ねた

「あの、海洋大会の」

「ああ、あれね、そうね、その方がいいわ、着換えるわ、タチアナ」とセシーネは寝室に向かった。

宮殿の廊下を歩きながらルンバートン候爵夫人はナーシャの結婚持参金の話を始めた「やはり、わたくしが仕込んで謁見に出した以上、伯爵家としてそれなりの持参金は用意すべきだと侯爵は申しますからね。あなたのお祖父様もそれなりことは考えてはいるようですが、でも、ナーシャ、持参金はいざというときのためのお金ですからね、あなたが贅沢をするためのお金ではないことは覚えていてちょうだい」

「はい、伯母さま、色々ありがとうございます」とナーシャは礼を述べた。ナーシャの祖父は武官を退官し、ルンバートン候爵領にある自分が相続した農園で暮らしていた。ナーシャは自分の家つまり両親の家計がどうなっているのか詳しくは知らなかった。慎ましい暮らしをしていたから、多分父の武官としての給料だけだったのだらう。

「それにしても、立派なお衣装でしたこと」とブルグース子爵夫人は、見せてもらった第一王女の衣装に話題を変えた。ナーシャの持参金がいくらになると露骨に聞くのは避けた方がいいと思っただし、それなりのものを用意するということを聞くだけで十分だった。

「王家は王家、貴族は貴族ですわよ。陛下は普段は、慎ましいと伺っておりますわ」とルンバートン候爵夫人。

「それもそうですわね」とブルグース子爵夫人。確かに王家と貴族では財力が格段と違うことぐらいブルグース子爵夫人にもわかっていた。

昼食の席で、国王は賑やかだなといった。確かに王太子時代より王家は人が増えていた。弟王子二人がそれぞれ結婚し、それぞれ

の妃との間にも王子や王女が誕生していた。やがて、来年にも王太子が結婚をすれば、国王にとって孫が生まれるだろう。世襲制である以上、王家の人数が増えることは王家の安泰に繋がる。アンドーラでは王女にも王位継承権がある。第一王女は王太子に次ぐ王位継承第二位ということになる。だが、出来れば女王は避けたいと国王は思っていた。王太子の婚約で亡くなった王太后は露骨だった。相手のメエーネのイザベル王女が、子供が産めるかどうか確かめてからの方がいいと。確かにそれは結婚に関して重要な要素ではあった。「セシーネ、施療院のほうはどうなった」と国王は尋ねた。「そうね、お父さま、ブルックナー伯は、場所は救貧院にこだわることはないって。ただそうすると建物を建てたり、費用がかかると思うの」

「それもそうだな」と国王は自分以外でこの日の昼食の席についている男であるリングゲート王子に目を向けた。王太子とランセル王子は陸軍本営本部へ行っていたし、ヘンダース王子も海軍本営本部に出かけていた。

「リングゲイ、元気がないな。どうした？」

確かにリングゲートは元気がなかった。今日ぐらいいはセシーネが救貧院へいかずにフィードに乗れると思ったのに、おまけに尋ねてきた母方の祖父のパスケール侯爵から馬の件で再びお説教を食らった。やはり、馬術の稽古は午後にしてもらうと思っていた。

「ねえ、姉上、午後はフィードに乗る？」と思いきってリングゲートはセシーネに尋ねた。

「いいわよ、乗らないから貸してあげるわ」

「ホント」とリングゲートの顔がほころんだ。

「変よ、お姉さまの馬に乗るなんて」とエレエヌがいった。

「いいじゃないか、馬術が出来なきゃ軍学校へ入れないだから」とリングゲートは反論した。

「これこれ、ケンカはよしなさい」と国王はたしなめた。確かに賑やかな食卓ではあった。

昼食がすむとセシーネは準備室に行くといった。国王はブルツクナー伯が施療院の設立のため熱心に取り組んでいるのを知っていた。

王太子の視察（前書き）

王太子のエドワーズは、叔父のランセル王子と陸軍元帥のガナツシユ・ラシユール中将とともに地方の駐屯地視察に出かける。

王太子の視察

海洋大会の翌々朝、王太子のエドワーズと第三王子のランセルが駐屯地視察のため旅立った。視察団の先頭には、白地に王家の紋章を縫い取り金糸で縁取られた王太子旗が掲げられていた。本営旗と呼ばれる大きな旗は畳まれ、ガナツシュ・ラシユール陸軍元帥の鞍袋に納められている。一行は補給隊と呼ばれる荷車を引く歩兵たちの速度に合わせてゆっくりとすすんだ。時々、斥候を走らせ行く手の安全を確かめる。

かつて、ヘンダース王は王妃を亡くすと、幼いメレデイス王女を伴い「ヘンダース王の親征」と呼ばれる旅に出た。行く先々で貴族たちに自分とメレデイス王女に忠誠を誓わせ、従わぬものは容赦なく叩きつぶすというやり方で貴族たちを震え上がらせた。忠誠を誓ったものを列に加えるとヘンダース王は再び別な貴族領へと向かった。これが王国軍の始まりだといわれている。ヘンダース王は武力だけではなく、宰相に法典の見直しを命じ、「領地法の上に国法がある」という考えを貴族たちに植え付けた。貴族たちにとって受難の時代の始まりだった。

ヘンダース王率いる王国軍はやがてチェンダー港の交易で繁栄をしているチェンバース公爵領に辿り着く。自分の城よりも大きい宮殿を構えるチェンバース公爵にヘンダース王は警戒心を募らせたが、チェンバース公爵はヘンダース王とメレデイス王女を暖かく迎え、二人の息子と共にヘンダース王とメレデイス王女に忠誠を誓った。やがて、メレデイス王女が十六才の誕生日を迎えるとヘンダース王はチェンダーでメレデイス女王の戴冠式を執り行った。アンドーラ王国史上初めての女王の誕生である。ヘンダース王は戴冠式に列席しなかった貴族たちを容赦なく追いつめた。「ヘンダース王の親征」はその死の直前まで続けられた。

アンドーラの王家は結婚運にも恵まれていた。メレデイス女王は

チエンバース公爵位を継いだジュールジス・チエンバースと結婚し、その間に生まれたジュールジス一世は子供に恵まれなかったキルバーン公爵の姪と結婚し、その息子ジュールジス二世はエンガム公爵の一人娘と結婚をし、婚姻によって大きな公爵領を王家に取り込んだ。唯一残ったのがゲンガスル公爵領だった。ジュールジス二世の度重なる招集にもゲンガスル公爵は応じようとはせず、領地に立てこもり、国王に屈すること拒んだ。そして、温厚なジュールジス二世が、武力行使を決意したのは、ゲンガルス公爵が、兵を募り、軍備を増強したという報告を受けたときであった。ジュールジス二世は、今一度、ゲンガルス公爵を王都に招集すべき王国軍を派遣した。だが、ゲンガルス公爵は、弓矢を打ち込むことでそれに答えた。こうしてゲンガルス戦の火ぶたが切って落とされた。しかし、組織だって訓練を施された王国軍の前にゲンガルス軍は為すすべもなく次第に追いつめられていった。やがて、敗戦を悟ったゲンガルス公爵は、自ら館に火を放ち、自害をする。生き残った者たちは捕らえられ、公爵家が平民に落とされたことを告げられ、辺境の地へ苦役を申し渡される。ただ、ゲンガスル一族でも王国軍に加わったものは母方、あるいは祖母方の姓を名乗ることが許され、貴族の身分は保障された。そして、ゲンガルス公爵の領民たちは二年の兵役がすむと大部分は土地に返され、ゲンガスル公爵領は王家領となった。

エドワーズはゲンガスル公爵のたった行動がどうしても理解出来なかった。

「何で、ゲンガスル公爵は勝ち目のない戦をしたんだろう」とエドワーズは轡を並べた元帥に尋ねた。

「本人が亡くなってしまったので、よくわかりませんが、ゲンガスル戦の原因は領地替えと侯爵に爵位を落とされることだと聞いております。領地替えの理由ですが、過酷な税をかけ、農奴制とまではいかなくても小作人が多かった。それと王家としては銀山を王家領にしたかったと聞いております」

ヘンダース王は抜け目なかった。領地替えを頻繁に行い、金山を

始めとする各種鉱山を次々と王家領に組み入れていった。採掘権を失った貴族たちは自然と農業と牧畜業に目を向けた。それでも制限がある。

元帥は太陽の位置を見上げて確認すると懐中時計でも時間を確かめた。

「そろそろ、お昼にしましょう」と元帥は手綱をひいた。

昼食は、ブリキのコップに入った水と乾し肉、煎った豆だった。それを受け取るとエドワーズは歩兵たちに近づいた。

「君たち、疲れていないか」

「何、このぐらいいは行軍のうちに入りません」と答えた歩兵の階級章をみると軍曹だった。

「君は、軍曹だな、近衛は何年？」

「五年になります」と軍曹。エドワーズは別な歩兵に声を掛けた。「君は、出身はどこ」

「王都です」と一等兵は答えた。隣の二等兵にエドワーズは「君は、どこ」と尋ねた。

「スクリューズです」

「スクリューズか、ちよつと遠いな」といいながらエドワーズは草むらに腰を下ろした。

「君たちも休めよ」と兜を脱ぎながらエドワーズはいった。軍曹が腰を下ろすと他の歩兵たちもそれぞれに腰を下ろした。

エドワーズを取り囲むように歩兵たちが腰を下ろし、昼食を取り始めた。時々、笑い声此起彼伏。

その光景を見守っていた元帥にランセルが「今度は自分が斥候にいきましょうか」と申し出た。ランセルは少し、のろのろと進む行軍の速度に焦っていた。ピラン中尉殿のいった通り、騎兵は馬をとばす理由を探すものらしい。

「何、調達局員がそんなことをなさらずとも結構ですよ」と元帥はにべもなかった。はあとといってランセルは「しかし、よろしいのですか、本営旗をしまいこんでいて」

「殿下閣下のおられた時代は、殿下閣下のおられるところが本営だという考え方をしておりましたが、移動の時は、本営旗をどうなさっていたか伺っていないので。それに、かさばりますから」

「しかし、暑いですね。重騎甲冑なんて誰が考えたのですかね」とランセルは兜を脱ぎ、額の汗を拭った。

「小官が軍学校に入った時は、重騎兵を見直し始めた時で」と元帥は昼食を配り終えた補給隊長の退役大佐のポータッドに「食料はどの程度用意した」と尋ねた。

「二日分の携帯食料と水はこの暑さだから一日分」

元帥は肯き「まあ、日暮れ前には、第五駐屯地につくだろうから大丈夫だろう」

エドワーズとランセルの視察旅行は始まったばかりだった。

王室付きの魔術師ガンダスも王都を旅立っていった。目的地は特にない。かつて、魔法があふれていたこの地もチュグエンの登場で魔法が失われつつあった。チュグエンは自分と同じ力を持つ者を認めず、次々と滅ぼしていった。チュグエンの死でもその動きは止まることを知らず、不思議な力を持つという噂だけで無実の人々が次々と処刑されていた。安住の地を失った魔術師たちはこの地を去っていった。どこへ行ったかはガンダスも知らない。ガンダスが生まれる前の時代の話である。

ガンダスは自分に言い聞かせていた。これは、魔法を取り戻すのではない。《治療の技》は人の生命力を生かすだけのこと。創造主が与えた命を生かすだけのこと。それにしても命の美しさよ。アンドーラは、自然の恵みにあふれていた。

第一王女セシーネは海洋大会に着た衣装を侍女のタチアナに売りにつけることを断念した。タチアナも少し無念だった。

「まあ、仕方がないわ」とセシーネは、あまり当てにはしていなかった。副女官長でもあるお針子頭のミルブル夫人とセシーネの前の

侍女サラボナがやってきた。挨拶がすむとミルブル夫人は早速仕事に取りかかった。セシーネの衣装を念入りに点検し始めた。

「今度はいかが致しましょうか」とミルブル夫人

「任せるわ、ただ、わたしはあまりピラピラしたのは好きじゃないの。品よく仕上げてください。じゃあわたしは救貧院へ行くから、後はお願いな。それとっておくけど糸クズ一本でもわたしのものですから。大事にやってよ」

ミルブル夫人は「ええ、わかっておりますよ」とうなずいた。

セシーネが部屋を出ていくとナーシャは「これをどうなさるおつもりですか」

「全部、ほどいて一回洗濯して、乾かして火伸しをかけるの、その後、別な衣装に仕立てるのよ」とサラボナが説明した。なるほどとナーシャは肯いた。ミルブル夫人が「こういうこと習いたい?」と尋ねた。ナーシャは「教えて頂きたいですわ。こんな立派な衣装はともかく、普段着ぐらいいは自分で縫いたいですから」

「あなたは」と今度はタチアナにミルブル夫人が尋ねた。

「わたしは」とタチアナは口ごもり「ホントにほどこんですか。なんだかもつたいない」

「これが、王家の秘密っていうやつよ」とサラボナ

「それほど、大げさなものでないでしょう。とにかく見ていてちょうだい」とミルブル夫人は衣装をほどこき始めた。その様子を見守りながら、ナーシャは「礼装が替わるようなことを伺いましたけど」
「そのことだけどイザベル王女さまの意見も伺ってからということになると思うわ」とミルブル夫人

タチアナは、聞き慣れないその名前に「あのイザベル王女さまって」と何気なく聞いた。サラボナが「若の許嫁」と何気なく答えた。再び「若って?」とタチアナは尋ねた。ミルブル夫人が「サラボナはエンバーだから、王太子さまのことをそう呼ぶのよ」と教えた。

タチアナは腰掛けていた椅子から立ち上がった。「なんだか、気分が」と呟いた。

衣装から目を上げたミルブル夫人が「あら、顔色が真っ青よ。大丈夫」と尋ねた。タチアナは血の気の失せた顔で視線も虚ろだった。「従医長のベンダー先生に見てもらいなさい。先生の部屋はわかる」とミルブル夫人。ナーシャは頭を振った。

「わたしが連れて行ってあげる」とサラボナ。
「わたしも一緒にまいります」とナーシャ。

従医長のベンダーはタチアナの脈を診てから、彼女の瞼をひっくり返して「貧血ではなさそうだな」

タチアナはベンダーの部屋までくる間、逆に頬を上気させていた。「のぼせかな。行事ごとの後だから、疲れたんだろう。今日は少し暑いからね。薬は出さないよ。手拭いを水で浸して額と首筋の後ろを冷やすといい」とベンダーは手で自分の額と首の後ろを触った。礼を言つてベンダーの部屋を出るとサラボナは「自分の部屋に行つて休みなさいよ」といった。

自分たちあてがわれた部屋で、二人きりになるとベンダーの指示通りに額と首筋を冷やしながらタチアナは聞かずにいられなかった。質問をナーシャにした。

「イザベル王女さまってどんな人なのかしら」

「確か、メエーネの王女だって聞いたけど」

「そんな話、誰から聞いたの」

「侯爵家の伯母からだけど」とナーシャは自分が使っている寝台に腰を下ろした。

「それより、あなた馬鹿なことを考えているじゃないでしょうね」とナーシャはいつになく険しい顔をした。

「馬鹿なことつて」

「いい。大体、貴族の結婚は家同士、親同士が話し合つて決めるものよ。わたしの場合だつてそうだったわ。父が侯爵家の伯父と伯母にどうかといつて相談して、そちらのプルグース家と話し合つて婚約ということになったの。あなただつて縁談があるかもしれない」「そんなのいやよ」

「だったら、断ればいいじゃない。ともかく、貴族でもそういうものよ。ましてや王家となればそう簡単にいかないと思うわ」

「会ったこともない人と結婚するの」

「そんなことまでは知らない。ともかく、馬鹿な真似はしないで頂戴。メリメさんから聞いたんだけど、王太子さまを追っかけ回して迷惑がられ、やめさせられた侍女もいたそうよ」とナーシャは先日
の件を匂わせた。

「わたしは」とタチアナはつぶやいた。

「ともかく、あなたの恥はわたしに恥でもあるのよ。結婚すればわたしだつてブルグース家の人間になるのですからね。行動には気をつけて頂戴。ともかく、わたしは仕事に戻るわ」とナーシャは寝台から立ち上がり部屋を出ていった。一人残されたタチアナはなぜか涙が止まらなかつた。近づいたと思つた王太子の存在が再び遠のいていく。タチアナはかなわぬ恋心を持って余っていた。

ブルックナー伯は、救貧院の院長であるキルマ・パラボン侯爵夫人に施療院設立の協力を取り付けるため、ちよつとした策を講じていた。手紙を持たせて救貧院に迎への馬車を送り出したのだ。手紙は救貧院の現状について話を伺いたいと鄭重な文面である。手紙を持ってきたのはブルックナー伯爵家の家僕らしかつた。院長室でキルマが手紙を受け取つた時刻は、丁度エドワーズが歩兵たちと談笑しながら昼食を食べ終わり、セシーネが王妃たちと昼食を摂り、国王はいつものように執務室で一人昼食を食べ終えた頃だつた。キルマも昼食を食べ終わつていた。

「ご都合はいかがでしょう」とブルックナー伯の家僕は尋ねた。

キルマは断る理由を探している自分に気がつき、なんだか情けなくなつた。逃げ回つても、第一王女は毎日のように救貧院にやつて来る。まさか《見立て》が怖いとは口が裂けてもいえなかつた。王女とはいえ十四才の小娘に過ぎないセシーネを扱えない自分はないはずだ。自分には女官長時代の実績があり、国王の信頼も厚いとい

う自信もあつたではないか。何を臆しているのだと自分を叱つた。キルマは意を決して、馬車に乗り込んだ。

宮殿に着くとキルマは国王の面会を求めた。国王の執務室前に立っているジャンク少尉が「今は、お取り次ぎ出来ません。お待ちになりますか」と姿勢を崩さずいった。

「いえ、こちらに來たからご挨拶をと思つただけです」とキルマは何気なくいった。女官長時代は、ある程度自由に国王に面会出来た。何となく、国王から遠ざかった気がした。仕方なく自分が以前与えられ、今は施療院の準備室となつた小部屋に向かつた。

準備室では第一王女とブルックナー伯と工部尚書のニドルフ・レンドル子爵がキルマを出迎えた。挨拶がすむとブルックナー伯に椅子を勧められた。キルマは椅子に腰掛けながら工部尚書に「あなたはこんなところで何をしているのです」と聞いた。工部尚書は肩をすくめ「施療院が新しい建物を造るとなれば工部省の仕事ですし、救貧院を改装して施療院にするにしても同様です」

「まあ、取り敢えず、救貧院の現状についてお話下さい」とブルックナー伯。キルマは敢えて答えず「王女さまはどう思われますか」と切り返した。

「わたし？」とセシーネは少し考え込み、意を決したようにいった。「わたしは、救貧院なんてあるのは国の恥だと思ひます。飢えで苦しむ人たちに食事を与えるだけでなく、そうですね、ちゃんと暮らしていけるように仕事を与えるようにすべきではないでしょうか。お父さま、いえ、陛下のお考えは働けば暮らせる国でしょう。問題は年取つて働けなくなつた人や病気で働けない人たちをどうするかでしょう。生意気なことを申しましたか」

ブルックナー伯はセシーネの一言一言にウンウンと肯き「いや、よくおつしやつた。貧しさから飢えで苦しむ人間が多いのは、国政上、何か問題があると、いわざる得ないですな。キルマ夫人、わたしが見たところ救貧院は人が大勢押しかけているようには見えませんが」

「そうですね、今は夏場だから、そんな連中はいないのですが、お金を持っていて王都に買い物に来たとか、王都見物に来たとか、まあ、中には仕事を探しているというものもありましたが、海軍では港の整備を考えていて仕事はありませんから」

「ちよつと、待つて下さい、そんな話どちらからでたんです」とキルマから出た海軍の話に工部尚書はあわてた。

「何、キルマ夫人の夫君は海軍の兵学校校長のパラボン海軍少将でもあらせられる」とブルックナー伯が説明した。「結論から言つたとブルックナー伯は促した。

「そうですね、わたしは今まで見た限りでは、あまり必要がないと思います。特に王都近辺では、飢えてなくなつたなんて聞いたことがありますよ。地方では民部官が見回っているでしょうし、領主たちもそれぞれ領民たちの面倒は見ているでしょう。今では、救貧院では、食事をしたり、泊まつていくものにはお金を払うか、働いてもらうことにしています。付属の農園もありますし、以前はまったくほつたらかしてしたよ」とキルマは前職者の無能振りを話し始めた。

「ともかく、困窮者の救済は特に今のところ必要がないでしょう。ただで泊まれる宿屋ぐらゐに考えているものが多いのですよ」とキルマは締めくくつた。セシーネは何となく安堵感があつた。確かに、貧富の差が全くない訳ではなかつた。それでも、貧しいなりに暮らしているのだらう。後は、病気で苦しむ人たちをどうするかだらうとブルックナー伯はいつた「こうなると、益々、施療院が必要となつて来ますな」

「確かに、そうですね」とキルマは用心深く同意した。

王太后は遺言状で施療院を設立しその院長に第一王女が就任することが指定されていた。国王は王太后の遺言状など無視出来る立場にいた。王太后が第一王女を施療院の院長にと言ひ残したのは、むしろ宮殿から第一王女を遠ざけたいという気持ちが王太后にはあつたのでなかるうか。病に倒れた王太后は見舞いに來た第一王女を「

お前が生まれてから、王家ではろくなことがなかった。何もかもお前のせいよ」と病氣の後遺症でよく回らない口で罵倒した。第一王女も負けていなかった。

「そんなだから、お祖父様は帰ってこないのよ」と言い返した。この王太后と王位継承権第二位である第一王女のやりとりを聞いていたのは、当時女官長だったキルマだけだった。キルマはこのことを国王に密告をした。国王はため息をつき「困った人だ」と眉をひそめた。そして、キルマに口止めを当然した。キルマもうなずいた。

到底、愛情から施療院の院長の座に第一王女をつけようと王太后が思ったのではないことは推察出来た。だが、キルマはこの考えを口に出さなかった。キルマが今考えているのは施療院の設立に協力することで自分にどんな利点があるのかということだった。態度を決めるのはまだ早い。ここは自分を高く売りつける場面かもしれない。しかし、用心は必要だった。

国王は式部卿のハルビツキ・サングエム子爵と執務室で面談していた。話題はエドワーズ王太子とイサベル王女の結婚式とその参列者たち特にメエーネの国王ロバーツ王のことだった。

「今までの儀礼集の記録を当たっても、他国の国王がアンドーラを訪問したことはございません」と式部卿は、

「まあ、そうだろうな、しかし、やはり、閱兵式はしたがるだろうな」と国王は王太子の結婚式の費用の見積書に目を通し始めた。

「これは、概算でして、ただ、晩餐会の費用は司厨長の話ではやはりその時になってみないと金額はわからないと、料理の品数も例年の晩餐会の時より増やしたいとっております」と式部卿は説明した。

「折角、お見えになるのだから、アンドーラの料理をお楽しみ頂きたいものだ」

「ええ、もちろんです。ただ、大蔵卿が結婚式の費用について、その、陛下の最近の結婚式の時と同じでいいのではないのかと申し

まして」と少し、式部卿はいいにくそうだった。

「そうは、いかん。一国の国王が参列するというのにはことは簡単に済まされない」と国王。確かに経費節減も大切だが、これは国運をかけた行事でもある。

「ハル、ここはまず結婚式の費用を抑えてしまおう。今、王太子とランセルは駐屯地の視察に出かけているから、帰ってきたら、御前会議を開こう」と国王は自分が出席する会議を自分でそう呼ぶことに少し、違和感を持った。

「ご視察ですか」と式部卿は王太子の視察の話は聞いていなかった。

「ああ、ガナスがそう勧めたらしい。今日から出かけて十日ほどかけて見てくるらしい。鹿狩りの話は聞いているだろう」

「聞いております。王太子殿下ご主催でなさるとか」と式部卿。

「ああ、そろそろ、何かやりたいのだろう。自分でそういいました」

「左様ですか」と式部卿は王太子が提出した鹿狩りの費用の予算書を持ってこなかったことに気がついた。しかし、鹿狩りもいいが結婚式はもっと大事である。

「ともかく、結婚式の晩餐会の費用は多めに見積もっております」といった。

「随行員の人員はどれくらいになるかな」

「それほど、多くはならないでしょう。取り敢えず、ランガルク公爵がお見えになるのは」と式部卿は覚え書きに目を落とした「馬上試合は是非見たいとおっしゃっておられました、多分、そのあたりでしょう」

「そうか」

「あちらにはそういったものがないそうで」

国王主催の馬上試合は国王ジュルジス三世が即位してからジュルジス三世自身の提案で始まった。主な目的は無論、武術の振興である。ジュルジス三世は即位すると貴族の家に伝わっている先祖伝来の甲冑を各家に一つだけ残して取り上げた。重騎兵は伝統の甲冑を脱ぎ、鉄で出来たより強度の優る重騎甲冑を身につけていた。ただ、

馬上試合には先祖伝来の甲冑で参加することは許されていた。中には、腕試しとばかり参加するものもある。年々盛んになり、多くの観衆を集めていた。平民にも人気の行事の一つだった。

王太子一行は、午後三時半頃最初の目的地第五駐屯地に到着した。駐屯地の門の前の歩哨に王太子の到着を告げると、歩哨はあわてて駐屯地に駆け込んだ。やがて、建物の中から制服を着た第八師団の師団長が一行を出迎えるためにでてきた。元帥は面頬を下ろした兜の中で眉をひそめた。規則では休日以外師団長は将官甲冑を身につけることになっていた。

面頬を上げて元帥は馬上から「今日は休日ですか」と元帥より年長の師団長のマークルト少将に尋ねた。

「いや、今日は書類仕事をかたづけしてしまおうと思って、あの伝令は何ですか」とマークルト少将は聞き返した。

「甲冑が重くなったのではないでしょうね」と元帥はやんわりと皮肉った。

「何々、そんなことはない」

「とりあえず、王太子殿下は天幕でお休みになられるから、お部屋を用意することはない。小官も同様です」

エドワーズは歩兵たちが駐屯地の訓練場と呼ばれる整地され兵舎に取り囲まれた場所に天幕を張る様子をジッと見つめていた。兜を脱いだランセルが「いよいよだな」といった。ランセルも天幕で休むのは初めての経験だった。マークルト少将は仕事があるといって天幕を張る場所を指示すると師団長室に戻っていった。

夕食の席で制服のマークルト少将は少し、恥ずかしそうだった。

「やはり、夏ですからな、事務官たちにも上着を脱いでいいといっているのですよ。汗で書類がぬれるといけませんから」

「夕食の献立はいつも通りですか」とエドワーズはマークルト少将に確認した。

「突然のお出でするので、いつも通りです」とマークルト少将は答

えた。当然、酒はでていない。ランセルは少し、酒が飲みたかったが元帥の目もあるので我慢した。

翌朝、エドワーズは天幕の中で、起床ラツパで目を覚ました。時刻を告げるラツパは駐屯地ならではの光景である。近衛師団だけはこんなことはしない。天幕の中は以外と暑かった。簡易寝台に毛布を掛けて休んだのだが、着ていた甲冑下と呼ばれる重騎甲冑の下に着る木綿の下着のようなものは汗でびっしょりだった。着替えの甲冑下と石けんを手にエドワーズは天幕をでた。ランセルも甲冑下姿で続く。隣为天幕で休んでいた元帥も甲冑下でてきた。

「おはようございます。殿下」と元帥も着替えを手にしていった。ランセルは周りを見回し「しかし、こんな格好でうるついでいいんでしょうかね」

「何、駐屯地は男だけですから、気にすることはない。混まないうちに顔を洗いましょう」と元帥は記憶にある流し場に歩き出した。訓練場の外周を新兵だるうか走っている者たちもいた。

「エドワーズは自分で洗濯する気か」とランセルはからかった。

「悪い？汗くさいのはいやなんだ」

「まあ、今洗えば、昼過ぎには乾きますよ」と元帥。ランセルもやはり、洗濯することにした。これが、武官の野戦の暮らしなのだろうかとふとランセルは思った。

朝食の席にさすがにマークルト少将は甲冑姿で現れた。夕べのうちに副官に朝の掃除を念入りにしろと命じてあった。王太子と陸軍元帥の突然の視察に昨日は少々あわてたが、特に大意はなく、王太子の陸軍の勉強のためと聞かされ安堵の息をついた。

「あの、お願いがあるのですが、マークルト師団長。昼食はともかく、夕食は兵卒と一緒にしたいのですが」とエドワーズは鄭重だった。

「こちらは、かまいませんが、どうしてそんなことを」とマークルト少将は理由を聞いたがった。

「あの、食事は兵卒も同じですか」

マークルト少将に変わって元帥が答えた「今は、士官も兵卒も同じ食事を出すようにしております。初代の調達局長が兵卒こそ十分な食事を与えるべきだと主張して。昔に比べて軍の食糧事情はよくなりましたよ。ランセル少佐は本営本部で書類を見たでしょうから、軍の食料費がいくらになるかご存じでしょう」

「ええ、べらぼうな金額ですね」

「まあ、大所帯ですからね。かなりの金額です。大蔵卿は、軍は金がかかるといいますが、まず兵隊たちにきちんと食べさせないと話になりません」

エドワーズはその金額がいくらになるか聞いていなかった。後で、ランセルに聞いて見るべきだろう。

「ところで、元帥は兵役義務についてどう思いますか。このままでいいのでしょうか」とエドワーズは気になっていたことを尋ねた。

「そのことでしたら、民間人たちに聞いてみたことがあるのです。

大体は、兵役は男が一人前になって帰ってくるのでいいというのが大多数の意見ですね。海軍はまだ、人手が足りないといっておりますし、当分はこのままでいいのではないのでしょうか、大体、農家というのはそれほど年がら年中、忙しい訳ではないんですよ。収穫期には各師団でも手伝いにいかせたりします」

「どのみち、作物を師団で買い取ったりしていますから」とマークルト少将も言葉を添えた。

ランセルは自分の役目を思い出していた「この師団の調達部長は誰ですか」

大きな食卓の端にいた制服を着た中佐が「自分であります」と名乗り出た。

こんな風にエドワーズの視察二日目が始まった。エドワーズは兵卒の兵舎から見て回った。兵舎は掃除が行き届き清潔だった。一階は兵卒食堂と厨房で、二階以上が兵卒の部屋だった。寝台は二段になっていて、幅も少し狭かった。明け放れた窓の外には洗濯物が風に揺れていた。エドワーズには何もかも物珍しかった。

セシーネは、はれぼつたい顔で現れたタチアナに「大丈夫なの」と尋ねた。《見立て》をしようかと思つたがナーシャの話では従医長のベンダーに診てもらい多分のぼせだろうということだった。無理に《見立て》をすることはない。

「大丈夫です」とタチアナはいつた。本当は大丈夫どころではなかつた。思いきつてセシーネにタチアナは聞いてみた「あの、イザベル王女さまはどんな方なんですか」

「メエーネの国王の姪でランガルク公爵の娘よ。お兄さまの立太子礼の時にアンドーラに来たけど、そうね、いいアンドーラの王太子妃に、ゆくゆくはいい王妃になってくれればいいと思うわ。その日が遠ければいいけど、お父さまには長生きして頂きたいわ」と第一王女の関心は質問されたイザベル王女から、どうすれば病気になるかに長生き出来るかに移つていつた。タチアナの心中に気がついていない

「後、お願いね」といつてセシーネは日課であるフィードの世話に行こうとして足を止めた「ねえ、あなた達も少し武術の稽古をしてみない。女官長のメレデイス叔母さまは武術の心得がある侍女には武術手当を出そうかといつているの。無理には勧めないけど考えてみたら」

「武術手当ですか。メレデイス王女さまらしいですね」と部屋頭のメリメ。メレデイス王女の武術好きは有名だった。

「そうなの。いい運動になると思うわ」

「わたしは、お針仕事を覚えたいので」とナーシャ。セシーネの衣装は、昨日のうちに解かれ、今日は洗濯をする予定だった。

「まあ、考えてみて」とセシーネは部屋を後にした。

厩舎でリンゲート王子はしよげていた。午後に馬術の稽古をするという案に侍従のハロルドは、午後は日差しが強いからと反対したのだった。

「姉上、今日もフィードに乗っていくの」とリンゲートはもしかし

たらと期待を込めてセシーネに尋ねた。

「ええ、そのつもりよ。わたしの馬だもの」とセシーネは無情にもいった。

「なあ、リンゲイ。馬術の稽古には古参の馬のほうがいいぞ」と父親のヘンダースがいった。

「そうかな」とリンゲートは疑問を投げかけた。

フィードの世話が終わるとセシーネは剣術の稽古にあてられている中庭に向かった。ピランが相手をしてくれた。そこへジャンク少尉と話しながら国王がやってきた。国王に対し、それぞれが高位に対する礼をした。国王は第一王女に剣の相手を命じた。「どの程度か見てやるう」と国王は剣を抜き構えた。国王の剣術の腕前はもちろんセシーネを上回っている。受けに回りながら国王はセシーネの剣をはじめとばす。汗をかきながらセシーネは懸命に剣を振るった。やがて、いつものように侍従長が、稽古時間が終わったことを告げにきた。国王も汗をかいていた。

朝食の席で、視察に出かけているエドワーズとランセルはもちろんいなかったが、ランセルの妃のネリアもいなかった。夕べの夕食の席にもネリアは姿を見せなかった。そのことに国王は気がつき、「ネリアはどうした」と王妃に尋ねた。王妃に替わってアンジェラ妃が「お乳の時間でしよう」といった。

国王はそうかと呟き「ただこう」といってナイフとフォークを手にした。

朝食がすみ、海軍本営本部へ向かうヘンダースを見送ったアンジェラ妃はネリア妃を訪ねた。ネリアは自分の部屋で朝食をすましていた。

「ネリア、夕べも、ここで夕食をすましたの」とアンジェラ妃はさりげなく尋ねた。

「あの、そうだけど」

「ねえ、授乳の時間があるからしょうがないかもしれないけど、なるべく食堂で陛下と一緒すべきだと思うわ。どんなお話がでるか

わからないでしょう。夕べもメレディスから侍女たちの武術手当の話が出たのよ。ランセルは留守の間、どんなお話がでたのか聞きたがると思うわ。夕食には遅れてもいいからでなさいよ」と言い終わるとアンジェラ妃はネリア妃の部屋を出た。アンジェラにはネリアの気持ちが変わらないでもなかったが、露骨に国王を避けるネリアのやり方は考え物だった。国王は決して恐ろしい人間ではなかった。人間味のある暖かい人物であることはアンジェラも気がついていて

救貧院にやってきたシーンを出迎えた救貧院院長のキルマは、自分のつぴきならない状況にあるのを改めて思い知らされた。

「ねえ、キルマ、あなたはここが施療院になつたらどうするつもり」とセシーネはズバリと切り込んできた。

「まだ、考えておりません」とキルマは言葉を濁した。キルマは二者選択を迫られていた。施療院設立に協力を申し出るか、それとも、第一王女から逃げ回るか。昨日も国王には会えなかった。不安が心に渦巻いていた。救貧院の現状は行き場のない老人や病人だけで閑散としていた。この事実を曲げて報告するほどキルマは愚かではなかったが、かといってブルックナー伯のように進んで施療院設立に走り回るほど熱心にはなれなかった。しかし、このままでは救貧院の院長の職を失うことも目に見えていた。そのこと自体は何の未練もなかった。だが、権力から遠ざかることもいやだった。他の貴族たちのように王宮に「ご機嫌伺い」をして国王の顔色を伺う羽目に陥りたくなかった。いや、もう、そんな風になっているのではないか。国税の見直しも王太子の視察もブルックナー伯から教えられて初めて知った。キルマは内心の焦りを隠せなかった。

だが、ブルックナー伯は、次の手に打って出た。乗馬で救貧院に現れ、キルマの説得工作に取りかかった。

「いや、これは国母さま云々ではなく、施療院はこれからのアンドーラにとって大事な政策になると思いますな」

「そういう難しいことはわたくしにはちよっと」

「いやいや、わたしは、あなたの手腕をなかなかだと思っ
ています。こういつたらなんですが、病人の世話はやはり、女手が必要
になってくる。その点、あなたは、人あしらいが上手だし、女官長、
救貧院院長としても見事だなと。ここは一つ、お国のため、是非、
ご協力をお願いしたい」とブルックナー伯は頭を下げた。元大蔵卿
という重臣に褒められ頭を下げて、キルマは悪い気がしなかつ
たが、ここは慎重にと思いこう答えた。「もちろん、協力したいの
は山々ですけど、ここはやはり、宅に伺ってみせんと」

「それもそうですな」とブルックナー伯は一旦引き下がった。

ブルックナー伯を見送ったキルマは彼が一人息子を病気で失った
ことを思い出した。彼が熱心なのはそのためもあるかもしれないと
キルマはぼんやりと考えていた。

しかし、ブルックナー伯は、今度は、将を射るには駒を射よとば
かり、今度はキルマの夫パラボン海軍少将を兵学校に尋ねた。ブル
ックナー伯の協力要請にパラボン海将は快諾した。

「何、奥は、そういったことが嫌いじゃない。お国のために役立つ
ことがあればなんなりとお使い下さい」

「そう、いつてくださいつて感謝しますよ。ところで、今年の卒業
生はどうですか」とブルックナー伯は卒業を控えた兵学校の訓練生
のことを礼儀上尋ねた。

「何、一人前になるにはまだまだかかる」

「それもそうでしょうな」と礼儀上答えて、ブルックナー伯は兵学
校を辞した。

午後になって、この件をブルックナー伯は第一王女に報告した。

「一存でございましたが、施療院には、女手も必要と思ひましてな
キルマ夫人はなかなかのやり手ですから、彼女にも協力して頂く
と思ひましてな。王女さまはどう思われますか」

「パラボン侯爵夫人が協力してくればいいと思ひます」とセシー
ネは慎重にいった。

「そこですな、彼女が協力を申し出れば他の貴族たちもそれを見習

うでしょう」

そんな訳で、キルマは自分の意志とは無関係に施療院設立に協力せざる得なくなった。半ばあきらめ顔で第一王女の《見立て》さえ逃れれば、何とかなるのかと思いつながら、再びブルックナー伯の迎えの馬車に乗り込んだ。

「わたしとしては、施療院はお金をきちんと払ってもらいたいわ。どうもケンナス先生はお金を受け取るうとあまりしないでしょ」と金銭に執着しない師を第一王女は思った。

「ケンナスには陛下から《治療師》として、お手当がでているはずですよ」とキルマは指摘した。

「そう、でもね。こう思うの。あの見習の子たちが《治療師》として一人前になった時、それで暮らしていけるようにならなくては、それもたくさん稼げるとわかれば、一生懸命勉強すると思うわ。お金で釣るみたいだけど、工部尚書じゃないけど、貴重な技術の一つだと思うの」

「確か、全員《見立て》はできるんですな」とブルックナー伯は確認した。

「ええ、まだ、正確に診断出来るまでには、いつてませんけど」

「診察は医学の基本ですよ。どんな病気かわからなくてはね」と従医長のベンダー

「それもそうですな」と今日もお約束の第一王女の《見立て》と所望したブルックナー伯。

「ともかく、無料というのは、結局、大事な税をそのために使うということでしょう。払える人には払ってもらいたいわ」

「まあ、そういう方向でよろしいでしょうな」とブルックナー伯は話を取りまとめた。次ぎにベンダーが王立大学の医学部の現状について話した。

「今年の卒業生は、たった六人ですよ。確かに医者是一人前になるには時間がかかるが、それにしても何とかならないかと思えますよ」

ベンダーの言葉にその場にいた全員が眉をひそめた。

タチアナは、このところ、王太子の姿を見かけないことに不安を募らせていた。ナーシャはしきりに針仕事に誘ったが、なかなかその気になれないでいた。タチアナの足は自然と思いつきの場所、図書室へと向かった。期待通り、図書室の前には近衛兵が立っている。タチアナの胸は高鳴った。しかし、図書室に入るにはそれなりの理由がある。その理由を探しながらタチアナは図書室の前をいつたり来たりした。しばらくたつた後、図書室から一人の少年が出てきた。少年は廊下をうろついているタチアナに近づきこころ尋ねた「あんだ、第一王女付の侍女？」

「そうよ、それが何か」

「だったら、いいものやるよ。手を出しな」といいながら少年はズボンのポケットに手を入れた。タチアナは反射的に手を差し出した。少年はポケットからカエルを取りだしタチアナの手の上に乗せた。自分の手に乗せられたのがカエルだと気がつくのとタチアナは悲鳴を上げ尻餅をついた。タチアナの悲鳴に驚いたのかカエルはタチアナの手から飛びだし廊下をピョンピョンと跳びはねていった。

「カエルぐらいで驚くなよ」といつて少年は立ち去った。少年はリングート班と呼ばれるリングート王子のお相手役の一人だった。この時を境にタチアナはリングート班のいたずらの集中攻撃にさらされることになる。ただ、リングート王子はこのことに気がついていない。彼は、馬のことで頭が一杯だった。

タチアナが、思いきって王太子の所在を第一王女に確かめたのは海洋大会から約十日目の夜だった。ちょうど、ナーシャがミルブル夫人に呼ばれ席を外した時だった。

「あの、最近、王太子さまをお見かけしないようですけど」

「ああ、お兄さまなら、駐屯地の視察にいつているわ。そうだ、海洋大会のこと、ナーシャに話した？」

「いえ、誰にも話しておりませんから」とタチアナは力強くうなず

いた。本当はセシーネには海洋大会のことなどどうでもよかった。ベンダーが指摘したように医学部の人気は今一つだった。それにしても六人とは。その彼らも卒業後は兵役につくため軍に所属していた。この惨状を打開する案はないだろうかとセシーネは頭を悩ませていた。タチアナの心中など気がつきもしない。

この医学部の状況はすでに国王に伝えてあった。「確か、医学部は授業料が高いんだよ。しかし、六人とは」と国王も眉をひそめた。その日の夕食後、セシーネは、珍しく国王に書斎に呼ばれた。

「この話は、知っていたかな」と国王はさりげなく切り出した。王太子のエドワーズとセシーネを生んだ前王妃ミンセイヤの母親は医学者の家の出身で、自らも医学を学び、アンドーラで唯一の女性学士であること。ジュールジス三世の戴冠式がすんだ後、故国に戻りたいと同行してきた者たちとラダムスンに戻っていった。いや、ラダムスンに到着したかはその後消息がつかめていない。こんな話を国王はセシーネに話して聞かせた。このことは、セシーネは知らなかった。でも、知ったところで自分に何が出来る？気になるのは医学部の今の現状だった。

王太子のエドワーズは約十日間に及ぶ視察から帰ってきた。第五駐屯地からは補給隊の歩兵たちをおいて、一気に王都まで駆けてきた。無精ひげを生やした王太子を国王は執務室で出迎えた。

「で、どうだった」と国王は穏やかに尋ねた

「色々と勉強になりました。どこも、のどかでのんびりしているようです」

「今日は、ゆっくりとして、休みなさい。あさっては、閣僚との会議がある。君も出席しなさい」と国王は御前会議の予定を知らせた。その日の久しぶりに揃った夕食で、メレディス王女は御前会議に自分も女官長として出席したいといった。

「色々、閣僚の方々に申し上げたいことがございますのよ」とだけ第四王女はいった。そうかとだけいって国王は許可をした。

御前会議の席では、まず、式部卿が王太子の結婚式の費用について概算ですがといったその金額を発表した。そして、国王はまず、皆の意見を聞こうといった。真つ先に大蔵卿が「陛下、少し、費用がかかりすぎませんか、もう少し、切りつめた方がよろしいのでは」と発言した。メレデイスが「陛下、よろしいでしょうか」と発言の許可を求めた。よろしいと国王は許可した。

「何、ケチくさいことをおっしゃっているの、大蔵卿。これはアンドーラにとって大事な結婚式ですわよ。外国からのお客様も多分お見えになるでしょう。またとない機会ですわ。アンドーラの国力を他の国に見せつける時ですわよ。財力、軍事力、政治力、その他諸々を見せつける時ですわ。」とメレデイスはその長い指を折った。「アンドーラを敵に回したら怖いと味方でよかったと思わせなくちゃ。そのために費用を惜しんでどうなさるの。アンドーラの威厳というのかしら、そういったものを他国に見せつける絶好の機会に、しみつたれた結婚式を行ってどうしますの。大した国ではないと思われてよろしいの。王太子の結婚式ですわ。それなりのものをするべきですわ。わたくしのいつていることは間違っているかしら」「余の申したいことをメレデイスが代わりにいつてくれたようだな」と国王はいつた。大蔵卿はまだ、納得のいかない顔だった。

「大蔵卿は知らんだろが、父上が余に言い残したことの一つに普段は切り詰めても行事には金をかけろというお言葉があつた。余もそのとおりだと思う。王太子も心してこの言葉を覚えておくように」と国王は、珍しく閣僚の決をとろうとしなかつた。

「ところで、陸軍元帥に頼みがあるのだが」と国王は議題を変えた。「何でしょう」と元帥。

「何、近衛の制服なんだが、赤にしてもらえないかな。ちょっとわかりにくい」と国王。

「赤ですか」と元帥。意外な会議の成り行きにちよつと戸惑っている。

「うん、近衛だとはつきりわかつた方がいい。後、武官も礼服とい

うのを考えて見た方がいい。普段とおなじではな

「わかりました。そうですね。いつ頃まで変更すればいいでしょうか」と元帥

「しかし、費用が」と大蔵卿が口を挟んだ。

「何、制服は毎日造らせている。その分を近衛に回せばすむだけのこと。後、礼服のほうは、将官たちならその位、自分の費用で造らせますから」と元帥はこともなげにいった。

「それもそうで御座るな」と武官の一方の雄、海軍提督も異存はなさうだった。「ところで、陛下。王太子殿下には、陸だけでなく海軍のご視察もお願ひしたいので御座る」

「そうだな、王太子はどう思う」

「そうですね、機会があればそうしたいな」と王太子は海軍も大事だと思った。国王は肯き「じゃあ、そういうことで、ガナス、新しい制服は、来年の新年の謁見までには間に合うかな」

「陸軍、総力を挙げて間に合わせます。やはり、各地に王太子殿下がご視察でお行きになりますし、近衛だとはつきりわかった方がよろしいでしょう」と元帥は力強くいった。

「じゃあ、この件はよしなに頼む」と国王は席を立った。御前会議の終了だった。国王の退席を立ち上がって、それぞれアンドーラの最高権力者に高位に対する礼をして見送った。文官はお辞儀をし、武官は敬礼をした。メレデイスは軽く膝を曲げた。大蔵卿は幾分不満げに陸軍元帥に「費用のことで、ご相談しましょう」

「何、さつきもいったように、他の師団の分を近衛に回せばすむ。心配ご無用。式部卿、ちよつとご同行をお願い出来ますか。近衛の制服が替わることを近衛師団長に知らせたいと思いますから、それに礼服についてもご相談したい」と元帥は式部卿を誘った。「もちろん」と式部卿は答え、女官長のメレデイスが「そういうことでしたら、わたくしも協力をさせて頂きますわ。制服用に布を赤く染めなくてはならないでしょう」

「これは、心強い。お願い出来ますか」と陸軍元帥は、今度はラン

セルに目を向けた。「ランセル少佐。視察の報告書をお忘れなく」

「はい」とランセルは答え、元帥と式部卿は会議室を出ていった。

一方、提督は王太子に「王太子殿下。今日のこれからのご予定は」と尋ねた

「特にないですよ」と今日も重騎甲冑のエドワーズ

「では、早速、本営本部におこし願えますか、お見せしたいものが御座るよ」と提督は誘った。王太子はうなずき、兜を床から取り上げ、小脇に抱えるとやはり提督と肩を並べ会議室を後にした。その後、後にヘンダーヌも海軍本営本部に戻るため後に続いた。

残された大蔵卿は少し鼻白んでいた。やはり御前会議に出席していた元大蔵卿のブルックナー伯が「ダース、ちよつと」と呼び止めた。

「何でしょう」とぶつきらぼうに大蔵卿は前職者に聞いた。

「何、費用のことはあんまり心配するな。王太子殿下の結婚式は前もってわかっていたことだから、その費用は積み立ててある。このことはいわなかったかな」

「積み立ててあるのですか」と不審気な大蔵卿

「そうさ、その位出来なくて式部卿といえるか。やはり、メレディス王女のいった通りだと思つよ。陸軍だつて、不測の事態に備えて蓄えてある。その中から何とかするさ。それが、閣僚というものだ」とブルックナー伯は、少し才気走っている大蔵卿を諭した。経費節減も大事だが、やはり、ここはアンドーラ王国の王家の威光を見せつける時だと彼は思っていた。

会議室を出た国王は執務室に戻ろうとして、護衛のジャンク少尉に「ジャンク、菜園の記録を整理しよう」と声をかけた。ハイと言つてジャンク少尉は国王の後から、執務室に足を踏み入れた。机に向かいながら国王は「そうだ、ジャンク。近衛の制服が代わる。赤にしてもらつた」と教えた。

「へえ、すると親父は忙しくなりますね。赤ですか」

「うん」とうなずきながら国王は、ジャンク少尉の父親が近衛師団

所属の仕立て職であるのを思い出した。ジャンク少尉の祖父は貴族の出身だったが、王都で仕立て職人をしていた。少年の頃、当主から分ける土地はないといわれ、仕立て職の修業を命じられていた。やはり、国王ジュルジス三世と同じように、他に服の仕立てを頼むのが癪だったらしい。腕はよかつたし、貴族たちの評判もよかつた。戴冠式のすんだジュルジス三世はあらゆる職人たちを軍に再編入させた。その中にジャンク少尉の祖父もそして、やはり仕立て職だった父親も混じっていた。祖父は二年で近衛を退役したが、父親はそのまま近衛に残り、国王の服を始め近衛兵の制服も手がけていた。そしてジャンク少年もビランと同じように王宮育ちだった。ジャンク少年は年頃の少年らしく軍学校を希望していた。父親は仕立て職でも士官になれるとあってなかなか、ジャンク少年の希望に納得しなかった。それを説得してくれたのがビランだった。「試験を受けさすだけでもいいじゃないですか。職人の息子だからといって継がなくちゃならないことはないと思いますね。それにカンク兄さんはそっちを継ぎたいといっているんだし」とビランはジャンクの兄のカンクがすでに仕立て職の修業を祖父の元でしていることを指摘した。祖父も加勢してくれた。ビランが軍学校に行くと、ジャンク少年は王太子の相手役のリーダー的存在になった。ただ、ビラン少年のように国王はジャンク少年に手当は出さなかった。

国王はジャンク少尉の手を借りながら菜園の見取り図を作成していた。これで、どこに何が植えてあるように一目でわかるというものだ。国王が普段、執務室にいるのは、先王のジュルジス二世の勤勉さを見習ったこともある。いつもの日課通りに五時までそこで過ごすと国王はふと思いついて近衛師団長室に向かった。

「陛下、近衛の制服が替わることは元帥から伺いましたよ」と近衛師団長のサツカバン准将は師団長室を訪れた国王にいった。サツカバン准将はこれで、益々近衛らしくなると国王の発意に賛同していた。宮殿内の近衛にはそんなことがないが、宮殿の外を警護する近衛師団第三連隊は連隊本部から宮殿に向かう途中しばしば王都民に

呼び止められ、苦慮していた。王都の巡回は近衛師団の役目ではなかった。これで、この問題も解決するだろう。

「サツク、そうではないんだ」と国王は「どうも、王宮育ちというのは小賢しいな」

「小賢しいですか」と近衛師団長は聞き返した。

「ああ、少しわがままを言わせてくれ。ジャンクのことだが、あいつの顔は見飽きた。いや、菜園のほうは手伝ってもらいたいが、わたし付けを外してくれ。近衛を追い出すまではせんでいい」

「畏まりました。どのみち調達部が忙しくなるでしょうからそちらに回します」と近衛師団長は承諾した。

「じゃあ、頼んだよ」といつて国王は師団長室を出ていった。

近衛師団長はジャンク少尉を呼びだし、近衛師団調達部へ配属替えになったことを告げた。

「どこがいけなかったのでしょうか。自分としては特に心当たりがありませんが」とジャンク少尉は戸惑い気味だった。辞令書を渡しながら近衛師団長は「まあ、少し書類仕事を覚えてもいい頃だ、それと、陛下は菜園のほうは手伝ってもいいおっしゃった。後、規則はわかっているだろうな。甲冑は自分で買い取るかどうか決める」とだけいった。重騎甲冑姿のジャンク少尉は「買い取りです。まだ払い終わっていませんが」とこの処遇に不満顔だった。折角、任務になれてきて自信が出てきた矢先だった。

しかし、師団長命令である。致し方なくジャンク少尉は辞令書を持って調達部長の元に出頭した。調達部長は辞令書を見ると「これは人事部長に提出するように。後、机は」と部屋を見回し「それぐらい自分で調達しろ、明日の朝、九時までにはやっておけ」と命じた。ジャンク少尉は「何で」とはいわなかった。ともかく、調達部員としての初仕事に取りかかった。

さて、近衛師団長はもう一人の有名な、国王が小賢しいと表した「王宮育ち」を思い出した。彼は今、再び第一王女付けだった。近衛では常時王家の人々の付き従う任務に就いているものを「直付け」

と呼んでいた。この直付けはかなり気がはる任務だったが、大事なのは王家の人々と気が合う、合わないも大事な要素だった。この真意を確かめるべく近衛師団長は第一王女の元に向かった。第一王女は近衛師団長の訪問に不思議そうだった。

「なにかしら」と敬礼をした将官甲冑の近衛師団長に尋ねた。

「ビラン中尉のことですが、お気に召さないのなら、配属を替えませんが」と近衛師団長は切り出した。

「困るわ。ビランを替えないで下さい」と第一王女はいった。セシィネにとって頼りになるビランお兄ちゃんである。配属替えなどともんでもないことだった。

「わかりました。それならそれで結構です」と近衛師団長は敬礼をして第一王女の部屋を後にした。

近衛師団長のサツカバン・バンデーグ准将は《治療の技》が発覚した時のことをよく覚えていた。王太后は真つ青になつていたし、サツカバン自身も腰が抜けるほど驚いていた。幼い王太子と第一王女は周りの大人の反応に少し驚いていた。気を取り直した国王が微笑んで「エドワーズ、他にはどんなことが出来るのかな」と優しく尋ねた。不思議な《力》を持つ王太子と第一王女に国王の心労はいかばかりかとサツカバン准将は思うのである。幸いに王太子はその遊びに飽きて、別な遊びに熱中し始めた。

王立施療院の設立は自分の範疇でないことぐらいサツカバン准将はわかつていた。この件に関して元大蔵卿のブルックナー伯が熱心に取り組んでいるのを噂では聞いていた。

宮殿からブルックナー伯の馬車で救貧院に戻ったキルマは、少し気をよくしていた。今日の御前会議の様子はブルックナー伯から、聞かされていた。キルマは御前会議には出たことがなかった。やはり、宮殿の様子が少しわかるだけでも収穫だった。やはり、施療院設立に協力することで何かしら、利点があるのではないかとキルマは思い直した。

国王が施療院の設立を決めた以上、それに協力することで、国王の自分への評価がますます高くなる。それに、病人やけが人たちの世話をすることで、慈愛のある人物と周囲は思うだろう。いわゆる人望が高まる。第一王女の《見立て》さえ逃れれば何とかなるとキルマは計算をした。

なくなつた王太后は慈愛のあふれた人物と評されていたが、決してそうではないことを身近にいたキルマは知っていた。そうならば第一王女にあのような仕打ちはしなかつただろう。確かに子供を甘やかすのは考え物だが、かといって厳しいだけでは子供が萎縮する。その点、国王は公平だった。いいところは褒め、悪いところは叱る。キルマは王太后のやり方を諫めたことはなかつた。気位の高い王太后の機嫌を損ねるだけだとわかつていたから。

次の雨降りの朝、さすがに第一王女は乗馬ではなく馬車で救貧院にやってきた。馬車から降りるとセシーネは護衛のビランに「大変ね」と声をかけた。ビランの重騎甲冑は雨で濡れていた。

「何、軍人に雨も雪も関係ありませんよ。この位大丈夫です」とビランは雨の滴を拭いながらいった。

そして、ブルックナー伯も馬車で救貧院に現れた。キルマが用心深く「今日は、どういったご用件ですか」と尋ねると「何、ちよつと子供たちと話そうと思つて、どちらですか」といそいそとブルックナー伯は見渡した。キルマがケンナスの「授業」を受けている子供たちのところへ案内するとブルックナー伯は「いいかな、ケンナス、ちよつと子供たちと話がしたい」

「かまいませんよ。どうぞ」と少し戸惑い気味のケンナス。キルマもブルックナー伯の話とは何だろうと思つた。

子供たちを前にブルックナー伯は一席ぶつた。「君たちは、今、アンドーラの新しい医学を学んでいる。こちらのいる《治療師》のケンナス先生がそれを君たちに教えてくれるはずだ。それを修得するのには時間がかかるだろうが、これは、大事なことだ。ケンナス

先生を始め、色んな人から、色々学ばなければならぬ。君たちがそれを学び、色んな人の病気やけがを治す《治療師》という立派な仕事に就くことを、国王陛下を始め、色んな人がそう望んでいる。

《治療師》というのは今までにない新しいやり方で病気やけがの治療をするものことだ。無論、従来の医学でも治療が出来ることもあるだろう。だが、この新しい医学を広めるには君たちの協力も必要だ。君たちはこの《治療師》と人から感謝され、尊敬される、わかるか、他の人から病気を治してくれてありがとうといわれる仕事を覚えたいかどうかだ。どうだね」

「あの、俺は、薬草の育て方を教わるようにと侯爵さまからいわれているんで」と赤毛のエラン。

「薬草を育てることも立派な仕事だが、その薬草がどんな病気に効くのかを知っておいた方がもつといいだろう。それとどんな病気なのかを診察することも重要だ。ケンナス、全員《見立て》は出来るんだっとな。ちよつとやってもらおうかな」

「まだ、確実ではありませんよ」とケンナス。

「無論、わかっているさ、でも、ちよつと確かめたい」とブルツクナー伯。「じゃあ、ちよつとやってごらん」とケンナスがいうと、見習の一人がごくりと唾を飲み込み、差し出されたブルツクナー伯の手首を握った。ブルツクナー伯は《力》を感じた。

「どうだ」と尋ねたケンナスに見習は首を軽く傾げた。ウンウンと肯きブルツクナー伯は「次ぎ」といった。別な見習がブルツクナー伯の手首を握った。

「少し、強いな」とブルツクナー伯。「どうです。キルマ夫人にも伺いたい。《見立て》は慣れているでしょう、どうですか、彼は少し強く感じるですが」

「キルマ夫人は、《見立て》が合わないようで」とケンナス。「わたしは《見立て》をして貰うようになってから体調はいいし、体が軽くなったように思えるですがな」とブルツクナー伯。キルマはいやとはいえなかった。ここで下手に拒めば返って疑念をもたれると

思い「一回くらいなら大丈夫ですよ。ちょっとやっつけてもらいなさい」とキルマは手を差し出した。見習がキルマの手首を握り、キルマの《見立て》をした。やはり、第一王女やケンナスのそれより《力》が強く感じられた。「ちよっと、強いわね」

「あのう、そうしないとわからないんです」と見習は俯いた。

「ケンナス、《見立て》でどうして体調が、わかるの」とキルマは尋ねた。

「感じるんです。例えば頭が痛い、同じように痛い部分が痛く感じる。それでわかるんです」とケンナスは説明した。ブルックナー伯はウンウンと肯いている。キルマはなおも追求した「じゃあ、ペートルはどうだったの」

「あれは、普通の診断方法でもわかりましたよ。」

「でも、《見立て》もしたのでしよう」

「ええ、そうですね、殴んでいるって感じですかね。手を当てると患部がもう少しはつきりわかります。腫瘍ですから、第一王女さまは腐っていると感じたそうですけど、腫れ物は大体そんな風に感じます」

「健康だとどうわかるの」

「それはすつきりした感じですね。体調がいいと気分がすつきりするでしょう。そんな感じですよ。ただ、自分の体調が悪いとそれに気を取られて区別が付かず、よくわからない時があります。やはり、従来の診察方法が大事なのはそのためでもあります」

「ケンナス、体調にはくれぐれも気をつけてな、何しろ、君が頼りなんだから」とブルックナー伯はケンナスを気遣った。

ブルックナー伯の実験は続いた。見習全員が《見立て》を終えるとキルマはブルックナー伯に話があると院長室に誘った。院長室に入るとブルックナー伯は「無理にお誘いしてご迷惑でしたかな」と治療院設立のいささか強引な協力要請を謝った。

「いえ、そのことなら、よろしいですよ。わたくしも出来る限りのお手伝いはさせてもらうつもりでしたから。それより、国税の見

直しはどうなっているのですか。息子はその辺りを伺って欲しいと申しまして」とキルマは気になっていたこと尋ねた

「ああ、そのことなら、まだですな」

「確か、上に上げると伺いましたが」

「昨日は、結局、近衛の制服を替えることを陛下が指示なさってそれで退席なさってしまったので」

「あの、陛下は、国税の見直しには賛同なさってないということですか」

「いや、陛下も見直しの必要性は感じておられる。国税が制定されてから、もう十年以上になる。ただ、まだ、もう少し具体的にどう調査をすればいいのかその辺りを煮詰めてからということになるでしょう。後は、国税を見直せば領地税もと、いうことになるでしょうな。どこも税は上げたいのは山々ですからな」と領地を持っているブルックナー伯はいった。

「それもそうですわね」とやはり、侯爵夫人でもあるキルマも同意した。「ところで、王太子殿下の結婚式はいつ頃になりそうですか」「多分、来年の春頃でしょうな、まだ、こちらも煮詰めないといけないことがあるようで」とこちらも交渉中であることをブルックナー伯はキルマに教えた。

「どうも、宅は、海軍のことばかりで、他のことには無頓着で」

「いや、兵学校のことでお忙しいのでしょうか、しかし、お元気ですな。パラボン少将も」とブルックナー伯は、パラボン侯爵夫妻は自分より高齢だと気がついた。勧められるままにブルックナー伯は救貧院で昼食を摂り、午後から、揃って宮殿の準備室に向かった。

準備室で約束の第一王女の《見立て》をブルックナー伯はしてもらい「体調は、ホントにいいですね。これは、何か効力があるでしょうか」と尋ねた。

「さあ、どうでしょうか」とセシーネにもその効果はわからなかった。

「しかし、新しい医学とは、お考えになりましたわね」とキルマは今

朝のブルックナー伯の発言をやんわりと言った。

「しかし、医学部が当てにならない以上、彼らにがんばって貰わないと。適切な医療を広めるためにも、施療院の存在が必要ですね。

王女さまは、施療院は有料がいいとお考えのようだが、無料ということも一応、検討するべきでしょうな」

「わたしは、反対ですよ。そんなただで診てもらえると知ったら、病気でもないのに面白半分ですべてきますよ。ましては《治療の技》を聞きつけたら、どういふことになるか」とキルマ

「それもそうですね。王女さま、《治療の技》でどこまで出来るのかですな」

「ケンナス先生は《治療の技》にとっても慎重なんです。でも、わたしは色々試してみたいんです」とセシーネは少し意気込んでいた。

「お気持ち、わかりますよ。治せるものなら治してあげたい。医学を学べば自然とそういう気にもなる」と《治療の技》を新しい医学だと考えたいブルックナー伯。

「あと、病気になるにしろ、丈夫な体を作るにはどうすればいいかとかそんなこともやりたいです」とセシーネは自分の考えを述べた。やはり治療も大事だが予防も大事である。

「最近、体をきれいに洗うことぐらいは、わかってきたようですが、不潔にしていたら、病気になるですよ」ときれいな好きなキルマ

「そういった指導も大事でしょうな。何を食べればいいのか。食事が偏るのはいけないそうですね」と最近、食事にも気を使い始めたブルックナー伯

その日の雨は夕方になって上がり、雲の合間から日が差ししてきた。ブルックナー伯は実りある話し合いに満足げだった。やはり、元官長のキルマを誘ってよかった。救貧院にキルマを送りながら「《治療の技》でどこまで出来るんですかね」とブルックナー伯は尋ねた。

「さあ、わたくしが知っているのは切り傷を治すくらいですけど」

「後は、《見立て》ですか」

キルマはうなずき「あんまり、当てにしないほうがいいと思いますよ。どんな病気も治る訳ではありませんから」

「それも、そうですね」

馬車が救貧院に着くとキルマは礼を言つて馬車から降りた。ブルックナー伯はよろしければ明日も迎えにくるといった。ええ、伺いますとキルマは答えた。

亡くなつた王太后は「女が政治に口を挟むのは考え物だ」といつていたが、これは、王太后は例外で、彼女はあらゆることに口を挟んだ。確かに王妃時代はかなりの国政に影響力を及ぼした。息子のジュールジス三世が即位するとその影響力は自然と低下していった。キルマの見たところ、幾分、感情論が先立つ王太后に比べ、ジュールジス三世は合理的だった。意に添わない意見でも聞く耳を持つというところがあつた。

王太后の手前、意見を差し控えることが多かつたが、それでも王太后に「キルマ、お前はどう思うの」と尋ねれば意見を述べることもあつた。ただ、キルマは王太后の意に添わないと思つたら自分の思うところを述べることはなかつた。長年、王太后の側に仕え、王太后の考えは手に取るようにわかつていた。その王太后は、すでに亡く、キルマはもう誰にも遠慮することなく自分の考えを述べられるようになった。後、問題は第一王女だと思ひながら、ふと自分の孫といつていい位の第一王女と張り合おうとしている自分に気がつきキルマはなんだか可笑しくなつた。そして、自分の意見を尊重するブルックナー伯の態度にもキルマは気をよくしていた。王太后の死によつて、キルマは自分の舌に自由を取り戻したことを実感していた。

王太子のエドワーズも気をよくしていた。ハットン提督の提案した海軍の視察は、陸海両軍合わせての大がかりなものになりそうだった。提督のいう視察がチェンダー湾一周ぐらいではないだろうと

踏んだ陸軍元帥は、近衛師団長と共に海軍本営本部に現れ、海路と陸路を組み合わせた視察を提言した。以前から、海軍提督はチェンダー港以外の海軍寄港地の必要性を説いていた。その予定地は、陸軍元帥にも検討はついていた。

海軍本営本部の会議室で地図を眺めながら元帥は「この辺りは、陸路では、物資の輸送が大変なんです。どうです、提督、海路で運んでもらえませんか」

「海軍は、海運業者でない。それだったら、商船にでも頼めばよろしい」と提督。

「まあ、殿下はどう思われますか。海路でここまで行って、少し、足をのばせば第十二駐屯地はすぐそばです」と元帥は水を向けた。「そうだな、だが、馬がいるだろう」と今日も重騎甲冑のエドワーズ。元帥の海路でいつて陸路で帰るといふ案はなかなか興味深かった。

「運ばいいでしょう、艦ではどの程度運べますか、何頭ぐらい？」と元帥。

「精々、二三頭ぐらいかな」と提督。

「すると、十頭は、難しいか」と元帥。

「いや、全艦隊出動をさせるつもりだから、もう少し、運べるで御座ろう」と同席していた前提督のリーバイト海将。

「全艦隊出動か」とエドワーズ

「無論、我が輩もお供をするで御座る」とネーバイト海将

「そんなの艦長たちがいやりますよ」と提督

「何をいうか」とリーバイト海将

「どうしても、いわれるのならご自分で船を仕立ててくるんですね」と提督

「それですよ、商船で馬を運ばいいでしょう。かなりの荷物が運べるじゃないですか」と元帥は指摘した。

そういう訳で、行きは海路、帰りは陸路となった。時期については、今は、メエーネとの行き来が多くてと提督は少しいい訳じみて

いた。外務省からの要請で海軍は外交文書をメエーネに運んでいた。様々なやりとりがあつて、ともかく陸海合同作戦となつた。

「ところで、海洋大会なんだけど、競技のやり方を少し変えてみたらどうだろう」と昨日はすっかり忘れていたことをエドワーズは提案した。エドワーズの提案は提督も前提督も賛同した。

「こつちのほう面白そうなので御座るな」とリーバイト前提督。

「実は、僕が思いついたことじゃないですけどね」とエドワーズ。ふと、施療院はどうなっているのだろうと思つた。まあ、セシーネには元大蔵卿のブルックナー伯がついている。心配することはないだろう。

陸軍と海軍、両雄の話は自然と鹿狩りの話になつた。エドワーズはここである提案をした。「帰りは一気に王都まで戻ろうと思つただけど、ずっと全速力でね。途中で馬を乗り換えて、ぶつ飛ばして帰りたいですけど、無理ですか」

元帥は少し考えて「よろしいでしょう、換え馬を用意すれば、一度、そういうことも試したかつたですから」

「毎回でなく、今年はそうしようと思ひます」とエドワーズは鹿狩りが今年限りの行事でないことを暗にほめかした。

海軍の本営本部をでると雨が上がつていた。海軍の視察はまだ、先になりそうだったが、それでもエドワーズは、色々楽しみだなど思つた。

その日の夕食の席で第一王女は亡くなつた王太后を痛烈に批判した。

「大体、おばあさまは、施療院を造るように言い残したけど、医学に少しも理解があるとは思えなかつたわ。医学の向上のため解剖ぐらい言い残してもいいと思うわ」とセシーネは舌鋒鋭かつた。

「まあ、お母さまが、ええかつこしいのはわかつていたわ」と王太后の娘のメレディス

「そうなのよ。わたしはそんなおばあさまを認めませんからね」と

セシーネ

「死んだ人間を悪くいうものではない」と国王は、やんわりと言った。彼自身も王太后にはいいたいことがあったが、死んだ今になって思い返すのは、王太后もこの国を愛していたという感慨のほうが多かった。

「それよりも、海軍の視察は大がかりなものになりそうです。海路でいって、陸路で帰る。帰りは陸軍の駐屯地を回ってくる、合同視察かな、そんな風になりそうです」とエドワーズが話題を替えた。「僕も視察に同行します。新しい海軍寄港地の話はご存じですか、陛下」とヘンダース

「聞いている」

「王家領でないのですが、なかなかいい位置にあるので、まだ、整備が無論必要ですが、チエンバー港以外にも寄港地は必要ですから、一艦隊はそこを中心に巡航することになるでしょう」

そうかと国王は呟いた。戴冠以来、海軍は補強を続け、今では四艦隊、十二艦の戦船を有している。提督も前提督もまだそれでも足りないといっていた。アンドーラの法律上、また技術的にも大型船の新造船は海軍造船所でしか造ることが出来ない。国王はメエーネが欲しがる船を造れるアンドーラの造船技術と航海術に絶対的な自信を持っていた。

ブルックナー伯爵の災難（前書き）

国王の近衛兵制服改訂でにわかに忙しくなった王宮。

一方、軍の視察をしていた王太子エドワーズは、新兵たちを集めて、その前に立つ。

そしてまた、第一王女セシーネも王立施療院設立の協力者ブルックナー伯爵が領地での災害に見舞われ、苦境に立っていた。

ブルックナー伯爵の災難

近衛師団の調達部員に配属替えになったジャンク少尉は、近衛師団士官食堂で息子の配属替えを疑う父親のマルキス少佐と夕食を摂っていた。マルキス少佐は近衛師団の仕立て職人の責任者だった。陸軍は、軍の各種装備を作る職人たちを軍の中に取込み優遇していた。その軍の方針に従い、階級制度でも腕のいい職人は昇級が早かった。しかし軍人でもあるので武術の訓練も怠りなく執り行っている。少年の時より、武術が好きで軍学校に進んだジャンク少尉のことは、マルキス少佐にとつて口にも出さなかったが内心の自慢だったし、期待もかけていた。優秀でなければ、国王付けの重騎兵に配属されることなどないと仕立て職人であってもその辺はわかっていた。

「何か、しくじったじゃないだろうな」と父親は探りを入れた。「違いますよ。師団長は、書類仕事をそろそろ覚えるべきだと。多分制服が替わるので調達部が忙しくなるのでそれでしょう」とジャンク少尉自身も配属替えには内心不満であった。近衛では、国王付けというのはいわば花形な役目だった。それが、「制服組」と呼ばれる事務官の一つ調達部に配属になったのは些か不本意である。「それなんだから。形も変えてみたらと思うんだ」と近衛師団の仕立て職人の責任者であるマルキス少佐は仕事を思い出していった。「そうですか、親方」と息子は慣例通りに父親を呼んだ。軍に所属している職人のそれぞれの責任者は将官制度に依る階級ではなく、民間の職人と同じように普段は「親方」と呼ぶのが軍の習慣だった。「どうも、垢抜けない。ここは近衛らしい制服にしたいもんだ」とマルキス親方はいった。という訳で近衛の制服改訂にはその色だけでなく、形そのものを変更するという大がかりなものになりそうである。食事が終わるとジャンク少尉は食べ終わった食器を親方の分も洗い場まで運んでいった。やはり、配属替えは父親が仕立て職人

ということも関係しているのだからとジャンク少尉は思った。調達部長からは制服担当主任と申し渡されている。本営本部の調達局長のミルバード大佐が宮殿の近衛師団本部に来て、各駐屯地に伝令を送ったことをジャンク少尉は聞いていた。各地から陸軍所属の仕立て職人の者たちが集まってくる。元帥は陸軍総力を挙げてことに当たれと厳命したという。陸軍にとつて物資の調達という広い意味での軍略上の機動力の見せ場であった。

「爺さまはどうしているでしょうね」とジャンク少尉は王都で開いていた店を職人頭に譲り、王都近郊に土地を買った祖父を思った。

「元気になっているさ」とマルキス親方はいった。

「しかし、陛下は形を変えることまで仰せられてなかったと思いますが」と話題を仕事に戻したジャンク少尉

「だったら、ちよつと伺つてみてくれ」とマルキス親方。これはジャンク少尉が「制服担当主任」で自分が仕立て職人の責任者という役目上当然の、依頼ではなく半ば命令である。

「わかりました」とジャンク少尉。明日の朝、菜園で伺つてみるべきだろうと思った。今朝も降りしきる雨の中、傘をさして国王は菜園の見回りをした。ジャンク少尉も傘をさし制服姿で同行した。その時、お叱りを受けることなく、会話は菜園の作物のあれこれに終始した。菜園の見回りに同行の許可が出るということは、国王の寵まで失った訳ではないとジャンク少尉は自分を慰めていた。しかし、配属替えの理由を質することはできなかった。

次の朝、曇り空の下、ジャンク少尉はいつもの散歩に向かう国王を待っていた。国王の日程は前の役目上、大方頭に入っている。定刻通りに国王は現れた。敬礼をしたジャンク少尉に「おはよう、ジャンク」と国王は声をかけた。

「陛下、おはようございます」とジャンク少尉は国王と並んで歩き出した。以前は、少し後ろに控えていたがその場所は後任のものが陣取っている。

「陛下、ちよつと、よろしいでしょうか」

「何だ、ジャンク」

「近衛の制服ですけど、なぜ赤なんですか」

「ああ、そのことか、目立っていいと思ったただけだ、大した理由はない。国王なんだから、その位好きにさせるといいたいね。反対しているものがあるのか」

「いえ、特には、おりませんが、自分は調達部の制服担当主任ということになりました。それで、仕立て職人のマルキス親方が、形も変えたいようなことを申し出ております」

「形？」

「ええ、垢抜けた近衛らしい制服にしたいと、いかがでしょうか」

「まあ、気に入らなかつたら、許可はしないが、そうだ、ジャンク、制服だけではなく、甲冑も一目で近衛とわかるようにしてくれ」と国王は追加注文をした。ジャンク少尉は、特に慌てなかつた。これも調達部員の仕事だと心得ている「畏まりました。鍛冶職の親方たちにもそう伝えます。後、師団長にも自分から伝えた方がいいでしょうが」

「うん、サックには君から伝えておいてくれ。それとジャンク、甲冑は重騎だけじゃないぞ、軽騎もあるぞ」

「そうでした」と重騎兵だったジャンク少尉は、失念していた自分に内心しまったと思つたが、国王は特にとがめなかつた。菜園の収穫の予定に話題を変えただけだった。

話をしていくうちに菜園の入り口に到着した。いつものように園丁頭のバルカンが待つていた。

「おはよう、バルカン」と国王

「おはようございます」とバルカン、制服姿のジャンクにも声をかけた。「お前さんも熱心だな」

「ええ、土地がありますからね」とジャンクは答えた。ジャンク少尉が仕立て職人の家に生まれたことを知っていたバルカンは「土地なんてあつたのかい」

「ええ、爺さまが店を売って土地を買つたんですよ。麦ばっかり作

つてもしょうがないでしょう」とジャンクは答えた。ジャンクは国王を手伝っているうちになんだか野菜作りが面白くなってきていた。そして、いつものように国王は菜園を見回り始めた。

従医長ベンダー博士の手術を受けたペートルは順調に回復していた。今朝も救貧院に往診に来たベンダーは「もう大丈夫だろう。力仕事はまだ無理だが、順調だよ」とペートルに告げた。それを聞いたキルマは多額の金貨を払った甲斐があると思った。キルマ自身は別段ペートルが生きようが死のうがどちらでもよかった。だが、ベンダーもケンナスも内心ペートルに手術を受けさせたいと思っっていることはわかっていた。元大蔵卿のパウエル・ブルックナー伯爵が熱心にペートルに手術を勧めた時もキルマは余計な口は挟まなかった。キルマがベンダーに多額の手術代を払ったのは、それによって自分への評価が高まることを計算の上だった。長年、女官長を務めた経験から、自分がどう立ち回ればいいのかキルマにはわかっていた。ただ一つ悩みの種だった《見立て》も何とか逃れる術を取得出来そうである。キルマは見習の子たちの《見立て》の訓練には救貧院の自分以外の「職員」をあてることをケンナスに提案し、受け入れられていた。「職員」たちの体調を知っておくのも院長の職務の一つという訳である。王太后の命令で、セシーネの稽古相手にされていた時に味わった《見立て》の奇妙な感覚を今度は「職員」たちが体験するのである。何となくキルマは意地悪い満足感を覚えていた。

王太后が病気で倒れる以前は、ある種の屈辱感を持って王太后にキルマは仕えていた。それは身分制度があるアンドーラでは、先王の妃で国王の母である王太后に膝を屈するのは、当然であったが、同じ女性としてキルマなりに自負があった。先王の失踪以来、王太后はしばしば女官長であるキルマを「友」と称したが、気位の高い王太后が心底そうは思っていないことぐらいはキルマには簡単に察しがついていた。王太后と女官長という主従の関係を越えることは

王太后の死という最後の時までなかった。そして、キルマ自身も王太后と友情を結ぶことなど願ってもいなかった。王太后を憎んだことすらある。それは王妃あるいは王太后という地位を妬んでのことではなく、エレーヌ王太后の言動に起因していた。王宮に仕える侍女たちに王太后は、直接でなく女官長のキルマを通して「小言」をいった。キルマは立場上、侍女たちにたいして口うるさい女官長でいなければならなかった。いわば「憎まれ役」であつたが、それは自分の役目と割り切るしかなかった。人に好かれるために甘言をいうのもキルマの性分に合わなかった。王太后の看病もそれは自分の役回りだと心得ていたからであつて、決して進んでしたことではなかった。だが、見返りはあつた。国王を始めとする人々からは信頼出来る人物であるという評判を得たことである。その評判が「王立施療院」設立準備への参画となつた。

形式上はブルックナー伯の熱心な誘いに乗つた形ではあつたが、キルマはそれをいやがっていない自分に些か驚いていた。今日も救貧院に迎えに来た馬車で宮殿に向かつた。

王立施療院の設立は王太后の遺言ではあつたが、国王がそれを決定した以上、国策の一つということになる。亡くなつた王太后はその遺言状で施療院の院長に第一王女を指名しただけで具体的なことは何も述べていなかった。キルマはふと、皮肉なことだと思つた。口を挟もうにも、王太后にはもうそれがかなわないのだから。

第一王女のセシーネ自身は、施療院の設立で、少し持て余し気味だつた自分の《力》が他の人々に役に立つことを素直に喜んでいて、ブルックナー伯が《治療の技》を医学の一つと表したことも嬉しかった。十二才で宣誓式を執り行つて以来、セシーネは王女という身分が面白可笑しく過ごすことだけではないことを十分理解していた。子供を大人にするのは、己が有益な人間であると自覚することから始まるのかもしれない。

大人びてきた第一王女にキルマは内心複雑な心境だつた。第一王女を避けようとして避けきれずに再び毎日相對することになるとは

だが、もう打つ手はある。《見立て》さえ逃れれば、いくらでも…

王都近在の陸軍第二駐屯地は王太子一行の視察を迎えていた。重騎甲冑姿のエドワーズは駐屯地の建物を見回った後、第二駐屯地を預かる第十六師団師団長キーナンス准将に新兵たちを集めるようにと頼んだ。訓練場に整列した新兵たちにまずエドワーズは兵役義務期間の二年を過ぎても軍に残る者たちを選び出すようにキーナンス准将に頼んだ。

キーナンス准将から、命令が次々と伝わり「兵役義務期間が終わっても、軍に残るものは一步前に」と新兵の訓練係である軍曹が大きな声を張り上げた。整列した新兵たちの中で何名かが、列より一步前に出た。姿勢は直立のママである。列から一步前に出た彼ら一人一人にエドワーズは軍に残る理由を尋ねた。その答えにいちいち肯き励ましの言葉をかけた。それが終わると、彼らを訓練に戻すようにと指示をした。そして、軍曹に命じて残りの者たちをもう一度整列させた。

キーナンス准将はエドワーズのすることに怪訝そうだったが、特に咎めなかった。新兵たちも異例なことに戸惑っていた。しかしエドワーズは兜を脱ぎ小脇に抱えると、ゆっくりと再び整列した軍に残らない者たちを見渡した。新兵たちのそしてその場に居合わせたキーナンス准将以下の士官たちも視線を感じながら、大きく息を吸うところ切り出した。

「僕はアンドーラの王太子エドワーズ・チエンバースだ。」とエドワーズは新兵たちを反応を確かめた。新兵たちは規則通りに直立不動の姿で立っている。軍曹が再び大声を張り上げた。「王太子殿下に敬礼」新兵たちを始め一同の者が敬礼をした。エドワーズも返礼の敬礼し新兵たちを見回した。

「君たちは今、兵役義務を果たすため生まれた家を離れここにこうしている。そして、王太子の僕自身はこの通りいつでもアンドーラのために戦う覚悟は出来ている」と将官甲冑のエドワーズは声を張

り上げ、籠手をはめた右の拳で鎧の胸当てにおおわれた自分の胸を叩いた。新兵たちは直立不動の姿勢だったがその表情は戸惑っていた。

「だが、幸いにして、アンドーラを攻め滅ぼそうとする愚かな国は、今はいない。安心したまえ」とここでエドワーズは再び新兵たちをゆっくりと見回した。気のせいかな新兵たちの表情は幾分緩んだようだった。

「アンドーラは平和だ。もちろん王国軍に逆らうような馬鹿な反逆者どもも今はいない。そして今厳しい訓練を課せられている君たちは多分訓練だけで終わるだろう。君たちは国民の義務である二年間の兵役が終わったら、多分、愛する家族が待っている家に帰るのだろう。それをとがめるつもりは、僕はない。少なくとも二年はアンドーラのために働いてくれたのだからな。だが、一言、君たちにいいたいことがある」とここで言葉を切つてエドワーズは新兵たちをもう一度見回した。

「男子なら志を持って」そしてまたエドワーズは新兵たちを一人一人の顔を見るように視線をゆっくりと動かした。

「志のない人間は、のんびんだらりと日々を過ごしまらぬ人間になるだけだ。もちろん、この僕にも志がある。このアンドーラをもっとよい国に、皆が誇りに思えるような国にすることだ。ではどうすればアンドーラがよい国になるか、僕もそのために力を尽くすが、僕一人の力で出来ることではない。国王陛下お一人の力で出来ることでもない。君たちの祖国であるこのアンドーラをよい国にするのはもちろん、君たちの協力も必要だ。君たちの力を貸して欲しい。みんなでアンドーラをもっといい国にしようじゃないか。みんながこの国を誇りに思えるような国にしようじゃないか。これは、君たち一人一人が心がければ必ず実現できるはずだ。そう僕は信じている。それは、君たち一人一人の自覚にかかっている。自覚とは何か、それは君たちがアンドーラの良き王国民になれるよう一人一人が心がけることだ。アンドーラの将来は王太子である僕だけでなく君た

ちの肩にもかかっていることを忘れてくれるな。そして、なりよりもこの国を愛し、誇りに思つて欲しい。君たち自身も陛下が誇りに思われるような王国民になつて欲しい。僕が君たちに望むのはそれだけだ」とここでエドワーズは右手で剣の柄を握つた。

「そして、なりよりも、君たちを信じている。そして、家に帰つたら、家族に話して欲しい、王太子のエドワーズが今日ここで話したことを。以上だ」とエドワーズは締めくくつた。軍曹があわてて「気をつけ。王太子殿下に敬礼」と大声で号令を出した。キーナンス准将以下がエドワーズに敬礼をし、王太子も返礼の敬礼をした。

「いいですか、王太子殿下直々に共にこの国をよくしていこうといわれて感激しないものはないでしょう」とこの新兵たちへのエドワーズの「演説」にキーナンス准将は興奮を隠せなかつた。王太子の一挙一動を細かく報告するキーナンス准将の話を聞きながら、陸軍の最高権力者ガナツシュ・ラシユール元帥は、国王も王太子も人の心を掴むのがうまいなと感歎していた。まさに仕えるに足る王家である。ガナツシュ元帥はふと、後継者に恵まれない隣国サエグリアを思つた。サエグリアの国王には王女しか生まれず、次期国王については色んな憶測が流れていた。もし、王位継承を巡つて内乱でも起き、それがアンドーラに飛び火したらとガナツシュ元帥は懸念を抱いていた。幸いにサエグリアの国境に面している駐屯地からは異変の知らせは届いていない。ガナツシュ元帥の思考は、再びアンドーラ国内に戻つた。甥の大蔵卿の国税見直しの提案は、なかなか国王の裁可が下りなかつた。閣僚たちの意見も分かれていた。大蔵卿の意気込みはわかるが、こと金銭が絡むと人は厄介である。国税の見直しが国民たちに特に土地の所有者たちに与える影響を考えて見ると、国王が慎重になるのもガナツシュ元帥には理解が出来た。そして、少し才気走つた感のある甥にもガナツシュは少し心配になる。しかし同時にあの年の頃には自分もそうだったなと少し自省をする。

そして、キーナンス准将の語った第二駐屯地のエドワーズの新兵たちへの演説とその後の新兵たちの反応に、ふとひらめいたことがあるので、前任のメレディス女王の王子ヘンダースに「ちつぽけな策謀家」と称されたガナツシュ元帥は、伝言を書いた書状を今は王宮に居るはずの王太子に届けるようにと、秘書官に命じた。

しかし、王太子のいうことも最もだが、理想は理想として現実をみなければとアンドーラ陸軍元帥は、命令に応じた秘書官が本営室を出て行くと再び書類仕事に戻った。

第一王女セシーネも書類と格闘していた。ブルックナー伯の手による予算書の数字を確認しながら算盤を入れる。ふと気がついてセシーネはブルックナー伯に尋ねた。「この値段というのはどうやって決めたんですか？」

「これは、統一価格表から算出しました」
「統一価格表？」

「ええ、軍は、色々なものを購入する際、決められた価格で購入することになっております。それが統一価格とっております。それを一覧できるようにしたのが統一価格表で、それが、また、土地税を算出する際にそれを基準としております」

「その価格表は、拝見出来ますか？それとも機密事項ですか？」

ブルックナー伯は少し微笑んで「第一王女さまでしたら、かまわないでしょう。明日、お持ちしましょう」

「お願いします」とセシーネは鄭重だった。

アンドーラでは、ジュルジス二世の時代に男子全員に兵役を課すと同時に各領主たちから「軍役料」を徴収していた。それが、現在の国税である。軍役料の時代はその収入は陸軍が管理していたが、国税になってからは大蔵省の管轄となった。それでも、軍備にかかりの費用がかかる。確かに、アンドーラ各地に駐屯している陸軍のおかげで、国内は平穏を保っている。しかし、それだけでいいのだろうかとブルックナー伯は考えている。この王立施療院の設立が、

アンドーラの大事な国策になるだろうことぐらいは、容易に察しがつく。確かに「治療の技」という微妙な問題もあったが、それをブルックナー伯は「アンドーラの新しい医学」と位置づけることで自身を納得させていた。後は、他の者たちがどう反応するかだが、それには樂觀視は出来ないだろう。ケンナスや第一王女の今後の努力次第だ。自分も助力は惜しむつもりはなかった。大蔵卿を辞したとはいえ、国政に影響力をまだ及ぼしているという満足感がブルックナー伯にあった。

そして、キルマ・パラボン侯爵夫人にも、同じような感情が、心に宿っていた。これは、女官長時代には味わえなかった満足感で、自身が有益な人間だと思え、施療院設立の会議でも積極的に発言した。それをブルックナー伯は、さすがですなよくお氣がつかれましたなとかといって感心しながら、キルマの意見を取り上げることもしばしばだった。

施療院設立の準備はブルックナー伯とキルマの両軸で上手く動き出しているようにセシーネには思えた。準備室の会議では、かなり具体的な話も出るようになっていた。

そんなある日。準備室に意外な人物が訪ねてくる。セシーネの乳母だったユーリンである。ユーリンは、セシーネを生んだミンセイヤの侍女としてミンセイヤとともに遠いラダムスンからアンドーラにやって来た。そして、エンバー出身の近衛士官と結婚し、サラボナを生んだ。その後、セシーネの出産が難産せいか乳の出が悪かったミンセイヤの代わりにセシーネに乳を与える乳母となった。母のミンセイヤになつかなかつたセシーネの侍女としてセシーネを育てた人物とあってよいだろう。現在は、アンジェラ妃付きという事になっている。ユーリンはまず「姫様とキルマ夫人にだけお話ししたのですが」とブルックナー伯に席を外すように頼んだ。ブルックナー伯は、怪訝な顔をしたが、ユーリンは意味深な顔をした「姫様とキルマ夫人に大事な話がございます。殿方には耳に入れたくないお話なので…」

察しのいいブルックナー伯は「わかりました。ちょっと用を足してきます」と準備室から退出した。

「姫様、施療院の事でございますか、施療院では、お産も見るのでございますか」とユーリンはセシーネの気がつかなかったことを尋ねた。実はユーリンは、ミンセイヤの母に勧められて産婆術を学んでいた。現王妃のヘンリエッタの出産こそ立ち会わなかったが、アンジェラ妃とネリア妃はユーリンが出産の世話をした。その他にも王宮に勤める既婚の侍女たちの出産もユーリンが世話をした。

「お産ねえ。考えていないというか、気がつかなかったわ」と意外な盲点をつかれた第一王女である。キルマもあつという顔をした。確かに妊娠出産は病気ではない。が、妊娠の兆候はしばしば病気と間違えるような症状を起こす時がある。

「お産に《治療の技》は利かないわ」とセシーネは《治療の技》の限界を認めた。

「でも、見立てはいかがでしょう。おめでたが姫様はおわかりになるでしょう」

「確かにわかるけど…」

「だったら、そのような方はこのユーリンがお世話をいたします」とユーリンは自信たっぷりだった。

ここでキルマが間に入った。「アンジェラさまはどうするの」

「アンジェラ奥さまにはご許可を頂いてございます。それにお産のお世話というものは数をこなせばこなすほど腕が上がるものがございますよ」とユーリンは主張した。

「それに」と付け加えた「エドワーズ若様のご結婚もございます。メエーネの方がご懐妊なされば、このユーリンが取り上げることは亡くなれた母君さまがご存命なら、そうお望みになるはずです。殿様にもそう申し上げてございます」

キルマはこのラダムスン出身の乳母上がりの侍女の言葉を聞きながら、ふと自分の権利が侵害されたような気がしていた。しかし、ユーリンの主張ももっともであった。王太子エドワーズの結婚は

王家の血統の継承を意味していた。それは王家の安泰と王国の存続をかけた国家事業でもあった。国家事業の参画に指をくわえて見ているほどキルマはお人好しでなかった。早速、キルマは反撃に出た。「それなら、私もあなたのお手伝いをさせてもらいますよ」

ここで、キルマをいつの間にか当てにしていた第一王女が口を挟んだ。

「ちょっと待ってちょうだい、キルマ、それなら施療院はどうするの」

第一王女に、キルマは二者択一を迫られたが、キルマは思いきって両方とることにした。どちらも捨てがたい気持ちであった。

王立施療院の設立への協力は、キルマの王太后の屈折した思いがそうさせていた。もう、国政に口を挟むことができないう王太后と違い、キルマの発言力は日増しに増していた。そして王太子妃の懐妊にはまだ時間があつた。

「もちろん、施療院のお手伝いも微力ながら、お手伝いさせていただきますよ。セシーネ」とキルマは女官長時代の口調で言った。セシーネのほつとした顔にキルマは大いに満足した。

一方、ガナツシュ元帥の相談があるという伝言にエドワーズは、少し不安になった。近衛師団の制服の改訂という課題を国王から出されて陸軍は多忙なはずだった。先日の陸軍元帥も同行した駐屯地視察でエドワーズの念願の「鹿狩り」の話はほとんどガナツシュ元帥は自分からは何も話さなかった。同行した王太子付きの退役大佐のポータードが、元帥と陸軍軍学校で同期でしかも一回生では同じ班でポータードが班長を務めていたと半ば自慢げに教えてくれた。そして、鹿狩りの発案者は亡くなったヘンダース元帥ではなく、まだ中尉だった若かりしガナツシュだということもガナツシュ元帥の親友は、王太子に打ち明けた。しかし、ガナツシュ元帥は「小官が提案したのは、駐屯地の行事としてでありますから、まあ、陸軍全体の行事として取り上げたのはもちろん、殿下閣下でしたよ」と素

っ気なかつた。

その初期の鹿狩りの発案者は、鹿狩りに何か異論でもあるのだろうか。何しろガナツシユ元帥のあだ名は「文句屋」である。さすがに王太子に陸軍本営部まで出頭せよと書状には書かれていなかったが、早急に面会をしたいとそれもわざわざ王宮まで、ガナツシユ元帥が出向くという。エドワーズは、書状を持って来た伝令に「わかつた。僕はこれからすぐでもいいと口頭で元帥にお伝えしてくれ」と返答した。伝令が敬礼をして、王太子の執務室でもある図書室から出て行くと、ポーテッド大佐に「元帥の話ってなんだろう。まさか鹿狩りのことじゃないだろうな」と聞いた。「さあ、文句屋が何を考えているか、わかるようなら、小官も將軍になれたでしょうな」とポーテッドはお手上げだとはかり肩をすくめた。

陸軍元帥が王宮の図書室に現れるまで小一時間ほど待っただろうが、エドワーズは少し無念でもあった。王立施療院の設立のため「準備室」をあてがわれている妹の第一王女の厚遇に比べ自分はまだ執務室さえ与えられていない。やはり、陸軍の総司令官のガナツシユ元帥を迎えるのに図書室ではなく王太子の執務室で迎えたいと思つた。これは父親の国王を説得するべきだとエドワーズは心に決めた。

ガナツシユ元帥は、なぜだか満面の笑みを浮かべていた。図書室に入るとアンドーラの王国の王位継承者第一位の王太子エドワーズに規則通り敬礼をした。エドワーズも執務室では座つたまま敬礼を返す父親の国王と違い、立ち上がつて敬礼を返す。

「ちよつと、王太子殿下に小官からお願いがございます」とエドワーズが再び椅子に腰掛けるとガナツシユ元帥は、自分は腰掛けず入口に立つたまま早速本題に入った。電光石火とはこのことか？

「これから、各地の駐屯地をご視察なさる訳ですが、その時、先日第二駐屯地でなされたような演説を王太子殿下にはしていただきたい。キーナンス准将から伺つてますよ。これで第十六師団の士気が高まつたとか」

「演説だなんて、大げさだよ」とエドワーズは鹿狩りのことではなく先日の「演説」のことだと知って安堵と戸惑いを覚えていた。「いえ、殿下なかなかの名調子でしたよ」とポーテッド大佐が、口を挟んだ。

「キーナンス准将なぞは、大感激でしたよ。是非にお願いしたい」とガナツシユ元帥はいつになく熱い口調であった。

「そうですか。わかりました。やってみます」

「お願いいたしますよ」とガナツシユ元帥は満足げだったが、エドワーズは、しかし第二駐屯地のことはどうしてガナツシユ元帥は知っているのだろうと疑問に思った。

このガナツシユ元帥の提案は王太子が視察に行った各地の駐屯地で、様々な反響を及ぼす。それは、アンドーラに対する忠誠心というよりは祖国愛を訴えたものといっているかもしれない。これはある意味では王位を継ぐ者の義務かもしれない。確かに愛国者というものとは厄介な面もあったが、国を大事に思うものは国に何を求め、王家に何を期待するのか、王太子は知るべきだろう。

この時期のアンドーラは、王太子のエドワーズが新兵たちに明言した通りに国民を苦しめる人為的な災害はほとんど皆無といってもよかった。個々を見れば、不幸な境遇の者もいたが国家が国民を害するようなことはなかった。大部分の国民が平和と繁栄を享受していた。しかし、自然の災害は、その地の支配者の仁徳と関わりなく訪れる。無論そう考えない迷信深い者はどこにでもいる。

領地からの急使が、ブルックナー伯の元にやってきたのは、彼とキルマのこれまでも経験からくる能力で、施療院の設立準備が順調に動いていた時だった。その知らせとは、伯爵領で数日、大雨が続き、その影響で元々地盤の緩かった箇所で大規模な土砂崩れがおき、領民たちの家屋が押し流され、死者こそ出なかったが、けが人も数人であったということだった。その知らせを受けてブルックナー伯は、内心動揺と後悔と苦悩があったが、それを表に出すこともなく迅速

に動いた。まず、国王に報告と領地に戻る許可を得ると、救貧院へと急いだ。第一王女と救貧院長のキルマ・パラボン侯爵夫人に事情を説明し、伯爵領に戻ると告げた。「ともかく、領地へ一旦戻って様子を見てきます。あそこは、前から、危ないと思っていたところでした」とブルックナー伯はため息混じりにいった。

ブルックナー伯以上に伯爵領での災害にセシーネは動揺していた。それは、災害への懸念よりも、施療院の設立準備にブルックナー伯の手腕が期待できないということになるのではないかとこの恐怖がセシーネの心を占めていた。施療院設立の準備のためブルックナー伯がこれまで尽力してくれたが、まだやるべきことは多い。これからのことを思つてセシーネは不安になり、すぐる思いでブルックナー伯に尋ねた「これからのこと、どうしたらいいのでしょうか？」

「とりあえず領地を見て参ります」とブルックナー伯自身も災害が領地で起きたしまったことと、施療院設立の準備が自分の手を離せるのではないかという無念の思いがあった。

ブルックナー伯の言葉にセシーネはキルマをみた。キルマは落ちて着いているようにセシーネには思えた。

「ブルックナー伯、お気の毒ですけど、死者が出なかつただけ、幾らかよろしかつたではありませんか。領主は領地に責任がございまずからねえ。施療院の方は、第一王女さまと何とかやってみますわ」「お願いしますよ。キルマ夫人」とブルックナー伯はあわただしく領地に戻るため救貧院を立ち去った。

残されたセシーネは、不安な目をキルマに向けた。キルマもいつも以上に気難しい表情を浮かべていた。キルマ自身も施療院に関してはブルックナー伯を当てにしていた。女王を頂いたことのある国ではあるが、女性が表に出ることは、やはり風当たりが強い。

そのいい例が王太后だった。本人は息子であるジュールジス三世にいろいろ助言をしたが、肝心の息子である国王は母親の干渉を極力排除していた。王太后が国政に口を挟みたがるのは、先王の時代からの名残である。ジュールジス三世の父王ジュールジス二世は妻

である王妃の助言を尊重していた。確かにエレノア王妃は賢かった。だが、賢かったのは自分で何も決められないという振りをしたジュルジス二世であった。彼は、いわゆる政治嫌いであった。しかし、王としての義務は十分果たしていた。この一見決断力のなさがジュルジス二世がとった政治的手法だった。決断力のなさ、周囲の者の意見聞くという独断をさけた開明さを生み、決定に慎重を期するという結果を呼んだ。

アンドーラは論議の好きな国である。この論議好きな国民たちは酒場で、あらゆることを話題に酒を飲むという風習が当然のように行われていた。もちろん主役は、兵役を終えた男性である。この国民の義務は果たしたという自負が国王の品定めをするという、若干不敬罪に問われる危険がありそうな話題も口に上ることになる。しかし、話題として無難なのは歴代の王を評価するという、歴史学者もどきが大勢存在した。その彼らさえメレディス女王は女性としては別格で、女性が政治に口を挟むのは、あまりいい顔をしなかった。それを知っているキルマは、施療院という職場が、女性の手を多く煩わす場所でありながら、経営面では男性が必要だと思っていた。だから、土砂崩れはブルックナー伯爵領の領主であるブルックナー伯と領民たちにとって災難だったが、施療院設立にとっても災難だった。キルマはユーリンの提言に乗って、自身も産婆術を正式に習おうと考えていた。自分自身お産の経験はあるのだし、女官長として王太子エドワーズをはじめ王家の子供たちの出産には立ち会ってきた。キルマは施療院の経営面での協力よりも、実務面での協力を考えていた。経営面は、元大蔵卿のブルックナー伯に任せておけばと考えていた。そして何よりも《見立て》の力のある第一王女セシーネと二人きりになるのを避けたかった。そこで、キルマはブルックナー伯が領地から戻るまで、産婆術を学ぶという口実を設けて準備室へいくことを中断することにした。

そんな訳で、第一王女セシーネの不安はますます強くなっていた。

話は、陸軍の近衛師団の制服改訂に戻る。陸軍は、機動性を発揮していた。

ガナツシュ・ラシユール元帥は、御前会議で国王の命を受けて後、本営本部に戻ると調達局局長のミルバード大佐を呼び出し、近衛師団の制服改訂を命じた。調達局局長ミルバード大佐はそれを仕立て職人の最高位の少佐でもあり調達局の課長でもあるバカラック親方に告げた。バカラック親方は各駐屯地に送るはずだった、制服の布地などの材料を王都に停めと同時に、制服の仕立てを一旦中止し、まだ制服用に裁っていない布地を持って王都に出頭するようにと本営本部の伝令を各駐屯地の仕立て職人の責任者に送った。

そして国王からのいわば追加注文は制服の色を赤にすること以外に甲冑も一目で近衛だとわかるようにするという近衛師団の装束の差別化だけだったが、ここは論議の好きなお国柄である、国王の服も仕立てるマルキス親方は、バカラック親方に呼び出され各駐屯地から集まってきた陸軍の仕立て部門の職人たちと論議を交わしていた。しかし、迅速を旨とするバカラック親方は「職人は口ばかりじゃだめだ。手を動かさないと」といつて早速試作品を作ることに着手した。何着か試作品が作られ、また、論議が始まった。ここでマルキス親方は、近衛師団長と甲冑職人たちの意見も聞こうと提案した。甲冑職人たちも、急遽王都に集まっていたが、作業の場を宮殿では手狭なので第二駐屯地に設けていた。

試作品を見てほしいというバカラック親方を始め仕立て職人の親方たちの依頼に近衛師団の師団長サツカバン・バンデーグ准将は「それなら、女官長のメレデイス王女にも見て頂きましょう」と提案した。

メレデイス王女は、仕立て職人の親方たちの試作品を見てほしいという依頼に、これは女官長としての役目だと思い快諾した。無論最終決定権は国王である兄のジュールジス三世にあったが、式典の礼装の改革を考えていたメレデイス王女は、近衛師団の制服改訂も自分なりの意見を持っていた。

試作品は第二駐屯地でメレデイス王女と近衛師団長と甲冑の改訂で忙しい甲冑職人たちにも披露された。

「あら、色を変えるのではなかったかしら」と試作品が従来の制服の草色であることにメレデイス王女はすぐ気がついた。

「新しい布を使うのがもつたないので、古い制服を使っただけさあ」と布地も安くはないことに調達局の課長でもあるバカラック親方は配慮していた。王家の礼装の制作の責任者でもあるメレデイスも確かにその点は気がついていていた。

当時のアンドーラでは、衣服に使う布地は輸入物が多かった。高価な絹はタジールから、毛織物はメエーネ産が上質だとメレデイスは知っていた。だが、陸軍は、なるべく安価にすむようと機織りを陸軍の軍人たちの妻たちに奨励していた。もちろん、陸軍の制服に高価な絹は使われていない。

古い制服の改訂版というところの試作品を口をすぼめて見たメレデイスは「やつぱり、着ているところが見たいわ。これでは感じがわからないから」と注文を出した。仕立て職人の年少のものが試着した。何着かある試作品の中でメレデイス王女は、一着の試作品に目を細めた。それは、今までにない斬新な形をしていた。襟が詰め襟で、上着丈が短い、陸軍の従来の制服も文民服よりも丈が短かったが、さらに短くちよつと胸衣のように胸回りまでの長さだった。そして、前合わせも、二重になってかなり斬新なデザインである。

「これ何かは、色を赤にしたら映えるんじゃないかしら。ただ、ズボンは黒にして襟と袖口に黒の縁取りをしたらどうかしら。それからここも」とメレデイス王女は前立てをその長い指でなぞった。

「もちろん、裾もね。別に全身真っ赤にしなくても、いいじゃないかしら。陛下のご意向は、他の師団と近衛が違っていれればいいんでしょうから。どう思うサック」と近衛師団長の意見を求めた。

「これは、斬新ですな。このような服は見たことがない」

「そこがいいのよ。近衛は流行を作るぐらいの気持ちでいなくちゃ」とメレデイス王女は、仕立て職人たちの苦心の斬新な試作品にご満

悦だった。甲冑の改訂については、メレデイス王女は、女の自分の発言権はないものと口を出すのはやめ、海軍に属する次兄のヘンダース王子に意見を聞いてみたらとサツカバン准将に提案してみた。「ランセル殿下はどうします」と国王の末弟のランセル王子の名をサツカバン准将はだした。

「そうね、ランセルにも聞いてみないと拗ねるかもね」とメレデイスは、ランセルを少々子供扱いした。ここで、バカラック親方が肝心な人物を挙げた「やはり、王太子殿下にも見ていただいた方がいいでしょうし」

「それは、これを赤い生地で作つてからでもいいと思うわ。エドワーズは制服より、甲冑の方が興味があると思うけど、制服も見てもらいましょう」と斬新な試作品がいたくお気に召した女官長であった。

順調な近衛師団の制服改訂に比べ、少しも順調でなかったのは、施療院の設立準備である。領地から、王都に戻ったパウエル・ブルツクナー伯爵は、工部尚書のニドルフ・レンゲル子爵を伴い暗い顔で準備室に現れた。

「申し訳ございません、王女さま。領地で起きた土砂崩れは、最悪なことに王国街道をふさいでおりまして、ただ、復旧すればいいという訳にはいかんです。駐在の陸軍から、この際だから王国街道の整備をしてくれといわれましてな。そちらに手がかかって、施療院のお手伝いどころではなくなりました」とブルツクナー伯は、ため息をついた。ため息どころでなくなつたのは第一王女のセシーネの方である。セシーネは呆然としていた。

「それは、大変でございますわね」と領主の妻であるキルマ・パラボン侯爵夫人が、同情を寄せた。

当時、アンドーラにおいて、王国街道と呼ばれる街道がアンドーラ全土に交通網として敷かれ、王家領を通る箇所は国の責任だったが、貴族領を通る箇所の整備はその貴族領の領主の責任においてな

される規則だった。無論その費用は領主の負担である。

確かに、陸軍が工事を請け負う例がほとんどだった。

ブルックナー伯は、まず、領主としての責任を果たさなくてはならなかった。何か足元をすくわれた気持ちでならない。大蔵卿時代は領地のことは、当初は家令任せであったが、最近では、成長した跡継ぎである甥に任せていた。もちろん、任せっきりでなく、領地のあれこれは報告も受けているし、国税の納税の時期には、領地に戻っていた。

ともかく、施療院の準備どころではなくなったのは、まぎれのな
い事実ではある。セシーネは、この事実を重く受け止めていた。

施療院の準備に時間がかかるのは、運営上の問題というよりは、
医学的というべきか、実際に治療に当たる治療師の数が少なかった
からである。そして、医師の数も多くはなかった。施療院を治療師
の治療を受ける場所と定義をしていたブルックナー伯は、見習いた
ちの成長を待っていた節がある。王室付き魔術師のガンダスという
通り《治療の技》を使える者が多ければ、それは不思議ではなく常
識になる。《治療の技》を公の場に出すことには、まだ、慎重を期
する必要があるにはあった。

ブルックナー伯の戦列離脱でいささか混乱気味の第一王女セシー
ネは「これからどうしたら、いいのでしょうか」と途方に暮れていた。
「これからのことは、國務卿のイーサン・カンバール子爵にご相談
ください」とブルックナー伯は、セシーネに告げ半分後る髪を引か
れる思いで立ち去った。セシーネは、ため息をついた。それを聞いた
キルマは「さあ、ため息をついても仕方ありませんよ。どの
みち施療院は國務省の民部局の管轄ですからね」とキルマは、かつ
て教えたアンドーラの政治の仕組みをセシーネに思い出させていた。
「民部局の管轄なの」とセシーネはオウム返しのようにいった。セ
シーネは、自分がどれだけブルックナー伯に頼っていたか思い知ら
されていた。セシーネは、当初、単純に施療院を《治療の技》を施
す場所ぐらいにしかとらえていなかった。

そして、キルマも意外なところで苦戦を強いられていた。産婆術を習いたいというキルマの要請に王宮のお産を一手に引き受けていたユーリンは、まるで職権侵害だというばかりの態度だった。そこで、キルマは切り札を切った。「これは、あなたの姫さまをお守りするためでもあるのですよ。姫さまにお産のお世話をさせるつもりはありませんからね。施療院で、患者の妊娠がわかったら、私が面倒を見ます。そのためにどうしても、産婆術を知っておく必要があるのです」

「キルマさま、お分かりでしょうが、私は、これで王家にお仕えしたいのですよ」とユーリンもなかなか譲らない。

「でも、王宮にいたら、どうやって姫さまをお守りするの。あなたも施療院に来るつもりなの」とユーリンに迫った。

「それは、殿様に伺わないと」とユーリンは、エンバー出の男と結婚した者らしく、国王を殿様と呼んだ。キルマは、「わかったわ。そうしましょう」と国王の判断を仰ぐことにした。

キルマは国王の秘書スーバスに国王との会見の予定を設けさせた。これは女官長時代にスーバスは手なずけてあったので、キルマには容易なことだった。朝聞いた予定とは違うキルマとユーリンとの会見に国王は「どうした」と怪訝そうだった。アンドーラの最高権力者に膝を折るとキルマは早速要点に入った。

「実は、産婆術のことでございます。陛下」

「産婆術」とますます怪訝そうな国王。キルマは「ご存知のようにユーリンは、産婆術で王宮勤めをしておりますが、その知識を私にも教えていただきたいと存じます。これは、施療院で、必要となる知識でございます。ですが、この知識は、まだ、年若く未婚の第一王女に学ばせるのはいかがと存じます。そこで、この私が王女さまの代わりにこの産婆術を習得してお役に立ちたいと存じます」

国王は、目を細めてキルマを見た。

「キルマは、施療院に勤めるつもりか」と尋ねた。ここで、キルマは自身でも思いがけない言葉が出た「もちろんでございます。第一

王女さまのお力になりたいと存じます」

「そうか、そしてくれるか。あれには、力になってくれる母親代わりのような者が必要だと思う。王妃もよくやってくれているが、下の王女たちに手がかかる。君がセシーネの力になってくれるなら、私も安心だ。あとはブルックナーがいてくれたら、万全なのだが、多分無理だろう。それから、産婆術のことなら、ベンダーにも聞いてみなさい」と国王は、父親としての配慮を見せた。キルマは、国王の支持を得たことで満足だった。そして、従医長のベンダーなら、彼の弱味をキルマは握っていた。だが、それを持ち出さずとも、国王の意向だと告げれば、ベンダーはキルマに協力するだろう。しかしキルマは自身でも気がついていなかった。それは、国王に第一王女の力になると約束したことである。そして、それをいやがっていない自分に。

一方、セシーネは不安が最高潮に達していた。ブルックナー伯の離脱も痛かったが、キルマも施療院のことから手を引くのではないかと、内心、ビクビクしていた。だが、ブルックナー伯が、施療院準備の戦列離脱をした日の夕食の席で、父親の国王から「セシーネ、キルマは当てにしてもいいぞ」とキルマの協力を告げられる。セシーネは本心から、安堵の息を吐いた。しかし、ここでエドワーズが自身の不満を国王に問いただした。「セシーネには準備室があるのになぜ僕には、そういった部屋がないのです。やはり、駐屯地の視察など準備するのにそれなりの部屋が必要です」

ここで、エドワーズの予想に反して国王はあっさり和王太子の請求を飲んだ。「そうだな、スーバスにいつて部屋を用意させよう」

「本当ですか、父上」と思わず、声が弾んだ。

「そうだな、視察には、演説も必要だからな」と国王は、第二駐屯地でのエドワーズの評判と各駐屯地で演説をするようにすすめたという陸軍元帥のガナツシュ・ラシユールからの報告を受けていた。

国王が王太子に執務室を与えなかったのは、王太子が、武術訓練を優先させていたからである。国王自身は武術は剣術と馬術くらいで

ある。エドワーズのように本格的な武術訓練を受けたことがなかった。今も甲冑姿のエドワーズに国王は複雑な心境だった。自身の王太子時代にゲンガスル戦を経験している国王は当時の政略的な観点から、わざと甲冑を身に着けなかった。無論、実戦の経験はない。甲冑を身に着けたのは、当時の陸軍元帥ヘンダース王子と副参謀長のガナツシュ・ラシユールが、閲兵式の式次第を考案して制定してからである。皮肉なことに甲冑を身につけることになってからの方が平和が続いていた。

そして、救貧院の院長キルマ・パラボン侯爵夫人の協力を得たことで第一王女も幾分心の平和を取り戻していた。ブルックナー伯が施療院設立準備から手を引いたことは痛かったが、キルマの協力を得ただけでもありがたかった。これも、振り返ればブルックナー伯の置き土産みたいなものである。

施療院の準備室に國務卿のイーサン・カンバール子爵は、二人の部下を伴って現れた。その顔ぶれを見たキルマ・パラボン侯爵夫人は、思わず、まあと驚きの声を上げた。第一王女セーネはキルマの反応に反射的にキルマの方を振り返った。キルマは、苦虫をかみ殺したような顔をしていた。セシーネが國務卿の方に顔を向け、國務卿が、アンドーラの法律上自身より上位に当たる王位継承権第二位のセシーネに連れてきた部下とともに文官流の挨拶をした。それがすむと國務卿は部下の紹介を始めた。

「王女さま、こちらが民部局長のジェド・ムツハアでこちらが医事課のレクター・メンドーサ課長でございます」民部局長は見た限り40代後半であろうか。課長も40才前後に見えた。

「施療院の準備には主にメンドーサ課長が、王女さまのお手伝いさせていただきます」

「そうですか。よろしくお願ひします」とセシーネは、國務卿に答えたが、ブルックナー伯より、随分、格落ちだなと思った。そしてセシーネは気がついていなかった。國務卿は暗に施療院の設立はセ

シーネ自身が主体になって準備をするということ伝えたことに。そしてキルマが「民部局に医事課なんてありましたっけ」と国務卿に尋ねた。

「今回、必要と思ひまして、新たに設立しました」と国務卿は、悪びれずに答えた。キルマは畳み掛けた「このことは陛下もご存知なのですか」

「まだ、ご報告はしておりませんが、ああ、陛下のご報告には、これからは、第一王女さまとキルマ夫人でお願いします。今日は私も一緒にさせていただきますが、明日からはお二人でお願いします」

「キルマも一緒なのですか」とセシーネは、ちよつと以外というか、でもキルマも一緒なら安心だと考えていた。

キルマは気難しい顔をしていた「じゃあ、国務卿は、施療院のことはこのレクターに任せてしまっておつもりなのですか」

「無論、報告はメンドーサ君から民部局局長のムツハア君と一緒に聞くつもりですが、何かご不審なことでも」

キルマは追求の手を緩めなかった「国務省の人事に口を挟むつもりはありませんが、なぜ、医事課長がレクター・メンドーサなのですか」

「適任だと思つたからですよ、キルマ夫人。メンドーサ君は王都の事情に詳しいですし、聖徒教会の自然派の司祭たちにも顔が利くのですよ。キルマ夫人も自然派の司祭や助祭たちが医事行為つまり、診察や治療をしていることもご存知でしょう」

「存じておりますよ」とキルマ。セシーネはここでふとキルマが問題にしているのは、医事課長の人選ではないかと思つた。キルマはレクター・メンドーサとは旧知の間柄でなかと疑つたが、口には出さなかつた。それに聖徒教会の自然派のことも気になつた「自然派とはどういうものなのですか」

「それは、聖徒教会の一派で、自然派の教義は勤労と創造主への感謝が、主で、礼拝が簡素なのが特徴です。司祭たちも質素なローブで、修道僧と見間違えそうなほどです。信徒たちは貧しい者が多い

のですが、最近、貴族も増えてきました。そしてなりよりも、信徒たちのけがや病気の治療をします。勿論、治療費は受けとりませんが」と国務卿ではなく医事課長が答えた。

ここでキルマが口を挟んだ。「厳密にいうと自然派は医師法違反すれすれですよ。確かにお金は受け取りません。そのかわり、畑の作物を受け取ったり、労働奉仕を要求したりしているのですから。でも、あまり、心配はないと思いますよ。王都の聖徒教会は祭壇派ですから、それに救貧院も祭壇派ですから。しかし、レクター、メンドーサ家はルツキアの信徒ではないのですか」とやはりレクター・メンドーサとキルマ・パラボン侯爵夫人が旧知の関係なのは明らかだった。なお、ルツキアとは海の女神のことで、船乗りたちの信教を集めていた。メンドーサ課長に変わって国務卿が答えた。「メンドーサ君には、自然派のことを調べてもらったですよ。キルマ夫人のご指摘の通り自然派の司祭や助祭が信徒たちの治療をするのは、やはり医事法に触れるのではないかと思ひまして」

「あとう、国務卿は自然派のそういうた行為が違法だとお考えなのですか」と意外な話にセシーネは戸惑っていた。

「自然派のことは一応陛下にはご報告してございますが、何らかの手を打った方がよいと存じまして。この件はメンドーサ君が処理をいたしますので、王女さまは施療院の準備をお進め下さい。無論、施療院のこともこちらのメンドーサ君がお手伝いいたします」と国務卿は直には手伝ってはくれなさそうだった。「とりあえず、これまでの経過をお話してください。ブルックナー伯からはお時間がなくてあまり詳しいお話は何えませんでしたので」と国務卿はセシーネに説明を求めた。

「どこからお話したらいいのでしょうか。そうですね、国務卿は《治療の技》をご存知ですよ」と施療院を《治療の技》を広める場所にしたいセシーネはブルックナー伯が《治療の技》をアンドーラの新しい医学だと定義しようしたことに気を強くして治療師の定義から説明を始めた。言葉を選びながら話すということは難しかったが、

時々キルマが話を補足する。

説明を終えた時、民部局長と医事課長の表情は官吏のそれ、これは第一王女の儀式用の顔と似ていた。それに比べ國務卿はにこやかな笑顔と違ってよかった。

「大方のことはムツハア君もメンドーサ君もわかったかな」と國務卿は部下たちに確認すると「なお、費用に関しては大蔵省が担当しますし、王立施療院法に関しては法務局が担当します。建物の改築などは工部省ということになります」と國務卿がいうと、改めて施療院の設立準備が各省をまたがった政策であることにセシーネは気がついた。

結局その日の会議は國務卿と民部局長と医事課長にこれまでの経過を話しただけで終わった。

国王への報告をするように國務卿に促され、第一王女と救貧院長は国王の執務室の前に立った。國務卿が「今日のご報告は私からさせていただきますが、明日からは第一王女様とキルマ夫人でお願いしますよ」

国王の秘書のスーバスに案内され国王の執務室に入った三人は規則通りそれぞれアンドーラの最高権力者に敬意を示す礼をした。椅子に腰掛けた国王はうなずいただけだった。

「陛下、今日はまあ顔合わせというところでした、具体的には明日からということになりそうですございます」

國務卿の報告に国王はうなずいて先を促した。

「それよりも救貧院の今後と以前ご報告した聖徒教会の自然派の治療行為の対策として困窮者救済法を立法してみたら、いかがでしょう。確かに、自然派の司祭たちの医療行為は、違法とまではいえませんが、わざわざ禁止をすることはないと思います。むしろ、法によって、きちんと困窮者の面倒を教会でみるようにした方がよろしいかと存じます」

「困窮者救済法な。イーサン、もう法案は、用意してあるのか」「ここにございます、陛下」と國務卿は、書類を取り出した。国王

は片方の眉を上げてそれを受け取り、目を通し始めた。

セシーネは、急に不安になり始めた。セシーネが準備を進めている施療院は有料である。それに反し自然派は無料で治療をする。これは手強い競合相手ができたと思った。しかも、困窮者救済法という法ができれば自然派の教会は、おおっぴらに治療行為を国民に知らしめようとするだろう。

一方、書類を読み終えた国王は國務卿に「この件は、閣僚たちで話し合うように」といって、書類を國務卿に返した。受け取った國務卿は「かしこまりました」と一礼をした。

「三人とも今日はもう下がっていいぞ」と国王は退室を促した。

国王の執務室を退出すると、セシーネは國務卿に不安を訴えた。「國務卿、やはり、自然派の治療行為が気になりますか、どの程度のことをするのですか」

「まあ、心配いらなんでしょう。自然派の司祭や助祭たちのいる教区は地方が多いですよ。王都の聖徒教会は祭壇派ですから」と國務卿は、セシーネの不安を和らげようとしたがセシーネの不安は消えなかった。

「でも、やはり、気になります。治療師の見習いたちは地方出身者が多いのです。ガンダスが地方を回っているのはご存知でしょう」「存じておりますが、まあ、自然派のことはあまりお気になさらずに施療院は施療院で、準備を進めていただきたい」

ここでキルマが口を挟んだ「國務卿、なぜ、この時期にレクター・メンドーサを医事課長に抜擢したのです」

「何、適任だと思ったからですよ」

「そうですか」と一旦キルマは引き下がった。

「では、私はこれで失礼させていただきますよ。閣僚会議の準備がございませうから」と國務卿は國務省に戻っていった。そして、キルマは「ちよつと、ユーリンに会ってきますので」と王宮に戻るセシーネに同行した。キルマと並んで歩きながら、セシーネは「キルマは、あの医事課長を知っているの」と聞いてみた。キルマは「ええ、

よく存知でありますよ。あのレクターの母親も父親も弟も」

「そうなの。でもキルマ、国務省の人事に口を挟むようなことはない方がいいと思うわ。それと、帰る時は、私の馬車で救貧院まで送らせるから」とここでセシーネは振り返って護衛についている近衛中尉のビラン隊長に「ビラン、馬車の手配をお願いね。これからは、キルマ院長の宮殿への送り迎えは私の馬車でしてちょうだい」

「まあ、助かりますわ。第一王女さま」とキルマは、少しわざとらしく礼を言った。そしてキルマの自尊心は大いにくすぐられていた。

さて、話は、再び近衛師団の制服改訂に戻る。メレデイス王女の助言で、制服と甲冑の見本が出来上がると近衛師団の士官食堂で「内覧会」を開催した。内覧会に出席した王家の顔ぶれは王太子エドワーズ。第二王子のヘンダース海軍大佐、第三王子のランセル陸軍少佐、第二王子の嫡子リングゲート王子、その他にヘンリッタ王妃、第二王子の妃アンジェリカ、第三王子の妃ネリア、そして第四王女で女官長のメレデイス、第二王女のエレーヌとそうそうたるメンバーだった。しかし、第一王女は施療院の準備があるといって欠席した。そして陸軍からは陸軍元帥のガナツシュ・ラシユール中将、調達局長のミルバード大佐、勿論、近衛師団長のサツカバン・バンデীগ准将もいた。侍従長のタツカードも出席した。

エレーヌはご機嫌だった。何となく一人前扱いされているような気になっていた。エレーヌとリングゲートの参加は王妃の提案だった。当初は国王と夕食をとにもする王家の者に限られていたが、王妃は、幼いけれど、自分の意志が出て来た第二王女と第四王子の意見も聞こうとメレデイス王女を説得した。この辺は未婚のメレデイス王女には気がつかない。母親でもある王妃に一日の長があったというべきだろう。そして、出席者にはそれぞれ説明役として一人ずつ仕立て職の職人と甲冑職人がついた。この重要人物扱いにエレーヌはますますご機嫌だった。だがこの説明役は出席者の意見を聞くという役目もあったが、幼いエレーヌとリングゲートがいたずらをし

ないための見張り役でもあった。

女性たちの興味は赤い布地で仕立てられた制服候補だったが、それは目新しいデザインでメレデイスが推奨している丈の短い上着は、王妃を始め、妃たちの評判はまずまずであった。一方、エレーヌはいつもの変だわという台詞を連発して、メレデイスに睨められた。まあ、エレーヌの意見を親方たちが取り入れることはなさそうだったが……

従来、陸軍の制服はどちらかというデザインよりもいかに布地を節約できるかに重点を置いて形を決めているようなところがある。丈の短さはその理論に合っていたが、前身頃を二重に重ね合わせてボタンで留めるといふ点は、理論から外れていた。そしてズボンも股上を深くして、上着丈の長さで下のシャツが出ないようにと工夫されていた。ズボンは赤と黒の二色が用意されていた。

制服の試作品がご婦人方に評判がいいことに制服の全軍の責任者であるバカラック親方も近衛の責任者マルキス親方も一安心していた。

一方、男性陣の目を引いたのはやはり、甲冑であった。鎧自体にはそれほど改訂点はなく肩当てにある肩章に赤い房をつけたくらいだった。問題は兜で、頭のとつぺんから後ろにちようど鶏のとさかかそれとも馬のたてがみのような物が付け加えられそのとつぺんにはやはり赤い房がつけられていた。

「なんだか、鶏のとさかみたいじゃないか」と海軍大佐のヘンダーヌは、少し小馬鹿にしたような口調でいった

「でも、わかりやすいよ」と王太子のエドワーズ。説明役の甲冑職人の総責任者のイルム親方が「重騎甲冑も軽騎甲冑もそれほど変える訳にいかんです。まあ、当時はそれほど考えられて作った甲冑ですから。変更が利くのは兜ぐらいで」と少々言い訳していた。

「なあ、費用はどのくらいになるんだ。従来のものに比べてどの程度の費用が増える」と本営本部の調達局員でもあるランセル少佐が尋ねた。これはやはり調達局で甲冑職人のルツカス課長が「重騎は

一騎につき50ゼムで、軽騎は45ゼムです。歩兵の兜も同様で「安くすませたなあ」とやはり軍の費用がかなりかさむことをランセルから聞いているエドワーズは、国王にはその方が受けがいいのではないかといった。ここで、制服担当であったジャンク少尉が「やはり、陛下にはその方がいいでしょうか」

「まあ、ここは費用をかけるところなのか、それとも費用節減をすべきところなのかは、陛下のご判断によるな」と結局、最終判断は父である国王にあるとエドワーズは肩をすくめた。

そして第四王子のリングートは、興奮していた。説明役がつくことも、なんだか重要人物のような気もしたし、陸軍での兵役を希望しているリングートは自分は多分以前ランセル叔父がそうだったように近衛師団に配属されるのではないかと思っていた。無論、夢は重騎兵である。リングートは説明役に赤い房をつけた兜をかぶってみたいとねだってみた。説明役の甲冑職人が「殿下には大きすぎますよ」といったが、仕立て職人が「まあ、ちよつとだけならいいんじゃないか。兜がどんなに重いか殿下にもおわかりになるでしょうから」とこのくらいならと承諾した。仕立て職人のいった通り兜は思っていたより重かった。

それを父親のヘンダースが見て「リングート、何している」と咎めた。リングートの説明役が「少しかぶってみたいとおっしゃったので、大丈夫、このくらいで壊れたりはいしません」

「そうか」と安堵したようでヘンダースは叱らなかつた「それより、この変更にはどの程度の日数がかかるんだ」と興味を製作日程の方に移した。

「まあ、今月中に陛下のお許しが頂ければ、年内には終わらせられるでしょう」と甲冑職人のルツカス親方が答えた。

「そうすると、新年の謁見には間に合うな」とランセル

「あと、制服を含め全体の費用はどうなっている。従来のもの比べ、どの程度、費用が増えるんだ」

このエドワーズの質問には制服担当のバカラック親方が答えた「

制服の方は染色に一着につき10ゼムほどかさむんでさあ。赤に染める染料が割高なもんで」

「全部で何着作ればいいんだ」

「5000着ほどで。でも、陛下がお許し頂ければ夏服と冬服と、外回りように外套も支給したいんでもんで」と近衛の制服の責任者マルキス親方が、希望をいったが、この希望にはエドワーズは結局は父の国王ジュルジス三世に決定権があるので口をつぐんでいた。しかし、思ったほど費用はかからないなど、近頃経済にも関心を持ち始めた王太子であった。

そして国王以外の王家の人々に試作品は評判はよかったので、親方たちは一安心というところだった。

こうして「内覧会」は無事終了した。後は、アンドーラの最高権力者である国王ジュルジス三世の許可を戴くのみだった。

一方、ブルツクナー伯の不在で失速するかと思えた施療院設立の動きは、速度を落とすことなく着々と準備が進められていた。それは、元女官長キルマ・パラボン侯爵夫人の活躍に帰することが多いにあった。ブルツクナー伯の後を受けた国務卿推挙の医事課長のレクター・メンドーサと毎日のようにもたれた会議でキルマは的確な指摘をした。それが、キルマの女官長としての経験からでたものかそれともキルマ自身の能力なのかはセシーネにはわからなかったが、キルマの実際に即した発言は、レクターをうならせた。

「さすがですな。キルマ夫人。よくお気づきにおなりましたね」とレクターは手放してキルマに感服して見せた。確かに、セシーネも気がつかなかったことをキルマは指摘している。レクターの賛辞に対してキルマは固辞をするでもなく、かといって高飛車に振る舞うでもなくあっさりを受け流していた。キルマの落ち着き払った態度は、自信の現れのようにセシーネには思えた。ただ、施療院の設立目的が、当初の予定とは異なり、「治療の技」を中心とした医療ではなく、従来の医学をもとにしたものになりそうなのがセシーネ

はいささか不満ではあった。ただ、肝心の治療師ケンナスが慎重な姿勢で、セシーネは少し齒がゆかった。ただ、キルマもレクターもまずは、施療院の設立こそ重要だと考えているようだった。それは、父の国王も同じ考えのようだった。確かに「治療の技」は未知数だった。いろいろ試したがるセシーネをケンナスはしばしば諫めていた。そのあたりの事情を知っているキルマはセシーネに王女としての義務を思い出させた。王国と王家に忠誠を誓ったことがセシーネの意識を「治療の技」から、病人の救済へと向かわせていた。

そして、この王立施療院準備室には、閣僚の大蔵卿のヘンダース・ラシユールや法務卿のアンマン・カスケード子爵も顔を出し、セシーネに施療院設立が国家事業だとの思いを深くしていた。この時期、工部尚書のニドルフ・レンドル子爵は土砂崩れの災害に見舞われその復旧と王国街道の整備という土木工事の必要があるブルックナー伯の伯爵領に視察にいっていたが、従医長のカールン・ベンダー博士が会議にしばしば加わった。国務省のレクター・メンドーサ課長とベンダーも旧知の間柄で、これは、ベンダーが自身の研鑽と治療師ケンナスの診察技術と《治療の技》を使わない治療法の研修のための場所をメンドーサ家の一室を提供していることから、レクターは、ケンナスのこともよく知っていた。そして、《治療の技》に大しても取り乱すこともなく内心はセシーネには想像がつかなかったが、冷静を装っていた。さすがの国務卿の人選とあってよいだろう。この診療室ともいふべき場所のことはセシーネも聞いていたが、実際、行ったことはなく、これもベンダーやケンナスへのセシーネの不満の一つだった。この診療室の事情をレクターから聞いたセシーネは、やはり、診察と治療を有料にすることを考え直し始めていたが、これには、キルマが反対した。そして、国王をはじめ、大蔵卿も国務卿も王立施療院の無料化には、反対の意向を示した。無料にするならば、救貧院をそのまま存続させればよいことだと国王は指摘した。

この施療院の有料で運営することには、国家財政の事情も影響し

ていた。アンドーラ王国は軍備費に費用がかさんでいた。確かに軍の存在は、アンドーラを平穩に導いている。だが、周辺各国を見渡せば、まだ、軍を補強せざる得なかった。国内をみればこの強兵策には、国民たちも半ば必要な物という意識の方が強く、表立っての不満は国王には届いていなかった。

そして、国王のジュルジス三世と國務卿のイーサン・カンバール子爵が、その立法を準備している聖徒教会の自然派の治療行為を容認というより、黙認と言っていていいだろう。「困窮者救済法」は、むしろ、王都で国政に対する勢力をのばそうと画策している祭壇派には、この新法が打撃となることを期待しての対抗策だった。祭壇派は、自然派より権力志向が強く、これまでも国政に影響を与えようと様々な手を使ってきた。この教会からの無言の圧力はメレデイス女王によってくびきを逃れたように思えたチエンバース王家にとって頭の痛い事項だった。

現在、祭壇派の首席の座にいる総大司教ロレンツアは、祭礼の正統性を追求することに熱心な学究肌で表面上は政治的に無難な人物である。だが、高齢な彼がいつまでもその座に座っていれるかは、まさに創造主のみぞ知るである。彼が健在なうちに王都で創造主の威光をちらかせる祭壇派の勢力をそぐ手を国王ジュルジス三世は打たなければならなかった。それには、最近力を伸ばしてきている自然派の勢力を利用するのが最前の方法に思えた。

無論、チエングエンを祖とする福音教会を利用するのが愚の骨頂というべきぐらいなのは、政略家を自負しているジュルジス三世にはよくわかっていた。チエンバース王朝の前王朝の始祖初代アンドーラの国王カーラル・ペレクルスが、聖者を名乗るチエングエンの死後、この地方一体を治めていた福音教会の信徒たちを放逐することで、王国を打ち立てた歴史もあって、チエンバース王家は、福音教会とは一線を画していた。ペレクルス王朝時代には福音教会に対する弾圧もあつたし、福音教会の王家に対する抵抗もあつた。

そして、《治療の技》という微妙な力を持つ治療師を半ば育成し、

その行為を容認することになる王立施療院の設立には、チエングエ
ン以外の魔法は認めないという魔法に対してかたくな見解を示す福
音教会が、どういう反応を示すかはある程度予想はできた。そのた
めにも魔法に対して寛大な聖徒教会それも権力志向をあまり持ち合
わせていない自然派の勢力を増す必要があつた。まあ、教会同士が
勢力争いをしている分には、王家はそれを高見の見物をしていても
大丈夫だろうと予想ができた。

第一王女セシーネ自身は聖徒教会の自然派に肩入れをするような
「困窮者救済法」は施療院の脅威に感じていたが、他の教会に対す
る牽制だとはキルマ・パラボン侯爵夫人に指摘されるまで気がつか
なかつた。それに正式な資格を持った医師の絶対的な不足という事
情から、自然派の医療行為はまだ、アンドーラには必要なことでも
あつた。

それより、セシーネにはまだやるべきことが山積みだつた。まず
は、治療師の見習いたちを早く一人前にすること。これは、セシー
ネの師でもある治療師ケンナスや従医長のベンダーの協力で見習い
たちの指導は行われていた。そして何よりセシーネ自身の医療技術
を向上させること。これはまだ、一般庶民を相手にするのではなく
以前と同様に近衛兵を含めての王宮勤めの人々を対象に研鑽をする
ことにベンダーもケンナスもそして意外なことにキルマも同意した。
まだベンダーをはじめ他の従医たちの指導が必要であつたがセシー
ネには診察ができることは、正直うれしかつた。

また、王立大学の医学部志望者の減少に対しても、何らかの手を
打たなければならなかつた。これには、セシーネの父の国王ジュール
ジス三世は大胆な策を考えていた。それは医学部の学部長の交代で
ある。この人事はセシーネの知らないところで密かに進まれていた。
それは、従医長のカールン・ベンダー博士の起用である。これは、
ベンダー自身が文官の定年の年齢をもうすぐ迎えることもその推薦
理由になつていた。ベンダー自身も定年を迎えたら、従医長の席は、
副従医長のチャイス・メリエール博士に譲るつもりだつた。また、

王立施療院の設立も、彼をその気にさせていた。従医長の職を離れた方が、治療師の見習いたちへの指導も医学部の学部長という立場から、気兼ねなく行えると考えていた。だから、国王ジュールジス三世からの医学部学部長の就任の打診には二つ返事で引き受けた。ベンダーは自身の進退を潮時だと考えていた。同じ医師として副従医長のメリエールには、もう十分に従医長の資格があると思っていた。また、王家に仕えるものに必要な家柄も気質も十分備えていた。この人選に国王は当初メリエールの若さに難色を示したが、ベンダーは自身が父親の跡を継いで従医長に就任した年齢を国王に思い出させた。

「そうか、そんなに若かったか」と国王は感慨深げだった。しかし、この人事は、国王と従医長と侍従長のみが承知していて、他のものには伏せられていた。そして、国王は公正な君主であった。この人事を発令する前に、現在の大学の学長と医学部学部長を宮殿に呼んで、弁明の機会を与えることにした。

現王立大学の学長ミツケル・ハイター博士は、大学創立以来、貴族で占められていた学長の座を初めて平民で射止めた人物であった。学長は大学の自治を尊重して教授たちの選挙で選ばれることが慣例になっていたが、国王はあえて、ハイターを推挙する文面を各学部長に送り、陰から平民学長の誕生に手をまわしたいきさつがあった。国王の執務室に通された王立大学の学長ハイターは、明らかに萎縮していた。一方の医学部学部長のブラド・ルーカス博士も、何か落ち着きがなかった。二人とも国王になぜ呼ばれたか見当もつかないといった風だった。国王はあえてズバリと本題に入った。

「医学部の現状についてだが、最近入学者が減少しているそうだが、その理由について心当たりはないか」

ハイターは、自身の出身の歴史学部のことではないと知り、安堵したようだった。「私には心当たりはございませんが」と、さも自分には責任がないと言いたげだった。

「私は、今ぐらいの人数の方が、目が届いてよろしいかと存じます」

とルーカスは、国王とは違う見解を述べた。

「そうであるうか、余はむしろ目が届き過ぎて、学生たちが敬遠しているように思えるがな」と国王は口調に君主としての威厳をにじませながら「しかし、今のところ医者の方が絶対的に少ないのは、そなたたちも存じておろう」

ここでルーカスは致命的な失敗をした「しかし、医療面では、聖徒教会の自然派の連中が治療をしておりますから」

「ほう、自然派なあ」と国王は困窮者救済法のことには触れずに「ともかく、一ヶ月以内に医学部志望者が減少した理由の調査と、それを解消する対策を練って来るように。いいかな学長」と国王は逃げ腰のハイター学長に釘をさした。

ともかく、二人には弁明と失地回復の機会を与えた。そして、国王にはルーカスの言動から、なぜ学生の減少の理由が垣間見えた。

それは、自然派の治療行為である。やはり、新法はその制定を急がせた方が良さそうだ国王は判断した。

そんな父親の国王の動きを第一王女セシーネは、まったく知らされていなかった。

竜の国の大使（前書き）

アンドーラから、西に遠く離れたタジールの国主ラジ・リニの跡継ぎリニは古いしきたりを破って、アンドーラの言葉でアンドーラ流の生活を離宮で暮らしていた。アンドーラの国情や風習に詳しく聞くために、アンドーラのバンデーグ大使を離宮に呼びつけていた。タジールの伝統を守るものたちが、そんなリニを面白くないと感じているのを察したりリニは、バンデーグ大使のラジ・リニとの拝謁を押し進める。

竜の国の大使

アンドーラから西に遠く離れたタジールの麗しい竜都ペンガットで、アンドーラのタジール駐在大使バンデーグ子爵は、ようやく、タジールの国主「ラジ・リニ」に拝謁を許されることになった。タジールはバンデーグ大使の祖国アンドーラと言葉も違えば衣装・風習も違っていた。バンデーグ大使はラジ・リニの拝謁もラジ・リニの世継ぎ「リニ」のアンドーラへの興味が関係しているのを察していた。最近になって知己を得たりニはアンドーラへ興味を隠すことなく、バンデーグ大使に打ち明けていた。

それにしても、リニのやる事は徹底していた。住まいである離宮をアンドーラ式の家具を備えさせ、礼儀作法もアンドーラ風に改め、無論話す言葉も側近たちにアンドーラの言葉で話すように決め、タジール語を使うと鞭打ちの刑に処した。リニ自身も側近たちの服装もアンドーラの衣装を作らせそれを身にまとうという風だった。

しかしバンデーグ大使のラジ・リニの拝謁は当然のことながら、タジール式で行われることになっている。大使の衣装もタジール式であった。アンドーラの礼服に比べ、タジールのそれはゆったりした絹製の長衣にサッシュをしめ、これまたゆったりとしたズボンに靴も革製のブーツではなく室内履きのような絹製の靴だった。この拝謁のための衣装はリニからの贈り物だった。これは外交上、アンドーラにとって有利な状況だった。噂ではリニは食事もアンドーラ風の食事に改めさせたということだった。リニのアンドーラびいきが幸いしてこれまで何度申し入れても実現できなかったラジ・リニの拝謁を受ける事ができたことになったのもリニの口添えがあったからだ。バンデーグ大使は、リニの側近から聞かされた。

リニがアンドーラへ肩入れをする一方で、その父であるラジ・リニはかたくなにタジールの伝統を守っていた。タジールの歴史は古く、口伝では当代のラジ・リニで107代を数えていた。歴史の古

さは、各儀式だけでなく日常生活もしきたりで縛られていた。それは、広く庶民の間も同様だった。

バンデーグ大使から見ると奇妙なことだらけだった。アンドーラにも貴族制度という身分の上下はあったが、タジールのそれはアンドーラの比ではなかった。バンデーグ大使が内心受け入れがたいものの一つに奴隷制度があった。ペンガットには公然と奴隷市場があり、多くの奴隷たちが売買いされていた。大使館では下僕のやるような様々な雑用をさせるため現地の人を雇いたかったが、そのような雑用は奴隷のする仕事とされ誰もなり手がなかった。アンドーラの法律では人の売買いは禁止されており、バンデーグ大使は使用人を仕方なく自身の子爵領から多額の給金を払い遠路タジールまで連れて来ていた。経費の面で見れば奴隷を買った方が安くすんだかもしれないが、外地とはいえアンドーラの国を代表する大使が、アンドーラの法律を犯す事はできないと大使は考えていた。

そして、何よりも風変わりに思えたのは、成人した女性が顔の目から下をバチカという布で覆うという風習だった。バチカをしていない女性は娼婦か奴隷と見なされ、身分の高い女性ほどバチカの長さが長くなり、街を一人歩きする事もない。女性の一人歩きができるアンドーラに比べ、この古い国の治安が悪かったためなのか、風習なのかはバンデーグ大使にはわからなかったが、妻をタジールに連れて来なくて正解だと思った。他にもバンデーグ大使が物騒だと思ったのは、大部分の人たちが胴に巻いたサツシユに短剣をさしている事だった。それは、バチカをしている婦人たちも同様だった。身分の高いと思われる人々のサツシユからのぞいている短剣の柄には凝った細工が施され、宝石がはめ込まれたものもあった。無論、剣を腰にぶら下げている者もいた。その者たちもバンデーグ大使から見れば、危険極まりないと思ったのは、すれ違い様に剣を抜いて打ち合うという風習だった。バンデーグ大使自身は、アンドーラ風の衣服を身にまわっている限りは他の剣を下げている者に剣を抜かれるような事はなかった。しかし、剣を身につけないと身分の低い

者と見られ、日々の買い物さえ不便な事だった。剣を身につけない者には商人たちは物を売ってくれない。しかし、商談は悠然として、値切らずに買う者は気の短い者と見なされた。タジール駐在大使としては交易の相手としてタジールは簡単な相手ではないと判断した。しかし、バンデーグ大使はタジールの風習に馴染む前にリニの計らいでアンドーラ式の生活を甘受していた。物資の調達もリニからの贈り物で間に合っていた。それは食料品から始まりどこで仕立てのかは定かではなかったがアンドーラ風の衣服もあった。特にこの何年かの旱魃で、食料の不足は明らかだったのでその贈り物は大使館ではありがたかった。

そして、バンデーグ大使はリニのいる離宮で食事を馳走になる事もしばしばあった。タジールの食事は米が主食で香辛料をたっぷり使った味付けの主菜で、バンデーグ大使は最初は馴染めなかったが、なれてくるとなかなか美味だった。しかし、アンドーラではナイフとフォークで食事をするのに比べ、タジールは手で食事をする。バンデーグ大使には、何やら、野蛮に見えた。

また、バンデーグ大使個人には関わりがない事でもあり、善悪の判断がつかなかったのはこの国の結婚制度で、一夫一婦制のアンドーラと異なり一夫多妻制で、ラジ・リニの宮殿には後宮がおかれ複数の妃がラジ・リニに仕えていた。当然のことながら、後宮にはアンドーラには存在しない宦官も存在していた。

政治的には、ラジ・リニは直接に統治はせず、宰相に任せきりだとバンデーグ大使は聞いていた。しかしバンデーグ大使の入手した情報はリニのいる離宮からで、実際のところはわからなかった。リニはアンドーラの様子は聞くが、タジールの現状については多く語らなかった。大使館でタジール人を雇えばこの国の事情ももう少しわかっただろうが、バンデーグ大使の情報収集能力に限界があったと言うよりはこの国の何か秘密主義のような体質であったと推測される。バンデーグ大使はラジ・リニやリニの名前すら知らなかった。無論ラジ・リニやリニは一種の称号である事は推察できたが、他に

もバンデーグ大使のタジール語の理解程度ではわからない事の方が多かった。

バンデーグ大使の名誉のためにいっておくが、タジールは他国の者とは一線を引いてつきあう排他的なところがあった。それは、タジールのものはすべて正しく、他国のものは劣ると考えている国粹主義な面が多々あったせいでもある。

しかし、リニだけは違って見えた。アンドーラへの傾倒ぶりはかなりなものだった。バンデーグ大使はなぜリニがアンドーラを気に入ったのかはわからなかったが、この状況を生かさない外交官はおるまい。バンデーグ大使はリニのいる離宮に日参し、アンドーラの国情を説明したり、アンドーラの風俗習慣はもちろんの事、宮殿での礼儀作法まで伝授した。リニはそれを聞くだけでなく日常生活に取り入れた。

バンデーグ大使はリニの側近たちがどう反応するかを揉んだが、論議の好きなアンドーラとは違い何の論議もなく無抵抗に近かった。それは数少ないバンデーグ大使が入手したタジールの国情で、ラジ・リニやリニの命令は絶対だと言う事のせいだった。側近たちがアンドーラを気に入っているかは、バンデーグ大使の推察でしかなかった。リニが特に興味を持ったのはアンドーラの女王制度のことだった。

「では、大使。アンドーラでは女子が王位を継ぐ事もあるのじゃないかとリニはアンドーラの言葉で尋ねた。

「はい、王位継承権は王女殿下たちもお持ちです。ですが、今は王位継承権一位は男子の王太子殿下ですし、陛下に万一の事があつた場合、王位を継がれるのは男子という事になります。確かにアンドーラの過去に女王はありましたが、メレデイス女王だけです」

「それは、いつの事じゃ？」

「今の国王陛下より四代前になります。実を申しますと、女王の即位には当時反対するものもありました。しかし、女王の父親であるヘンダース王には息子である王子はいず、たった一人の自身の娘で

あるメレディス女王が16歳のときに王位を譲ったのでございます。ヘンダース王の権威は大変強かったのでございます。そしてメレディス女王は大変英明な王であつたと言われております」

「確かに女子おんなこでも賢いものもある」

「そして、女王の夫君のチェンバース公も宰相の地位につき、女王の統治の後ろ盾になりました」

「妻より地位は低かつたのか」

「はい、女王の方が地位は高いのでございます」

「確かにタジールでも女子おんなこの方が身分が高い場合もあるが、妻が夫より身分が高い事はない」と数少ないタジールの情報をリニが教えてくれた。

「しかし、メレディス女王はアンドーラでも例外でございます。アンドーラの近隣の諸国では女王を認めない国の方が多いのでございます。サエグリアも女性の地位が低いと聞いておりますし、メエーネでも女王の例はございません」とバンデーグ大使はメレディス女王が特異な例である事を説明した。しかし、アンドーラではメレディス女王はヘンダース王と並びアンドーラの国内統一と近代化に力を発揮した偉大な国王であつたと歴史学者たちは評価していた。

歴史学者たちは過去の王朝には辛辣な論評をするが、チェンバース王家には点数が甘かつた。しかしこれは現王家に多少おもねつていたかもしれない。アンドーラでは、王家に対して非難的な事を発言したりしても罪にとらわれない言論の自由はあつたが、王家に対する反逆罪もある事にはあつた。実際に反逆罪に捕われたものたちもいたし、国王の勅命に従わず、王国軍と戦火を交え平民に落とされたゲンガルス公爵家の例もあつた。

そして何よりもバンデーグ子爵家が爵位を授けられたのはメレディス女王からだつた。アンドーラの貴族の中でもヘンダース王の時代以後に爵位を授けられた貴族たちは、ヘンダース王以前の爵位持ちからは、一種の侮蔑をもつて新貴族と呼ばれていた。しかし、新貴族たちはチェンバース王朝の功労者でもあつた。そして、現在

も新貴族たちはジュールジス三世によって重臣に取り立てられるものも多かった。バンデーグ子爵家でも、先代は王立大学で法律を学び、裁判官として就任して最後は王立裁判所の裁判長を勤めた。先代は現バンデーグ子爵の父に当たる。そして先代の従弟は武官として王家に仕え、初代の近衛師団師団長という名誉を授かった。彼の息子は現在の近衛師団師団長サツカバン・バンデーグ准将である。二代続けて将官というのは現在の騎士制度を廃止し将官制度を取り入れてからは初めての事だった。バンデーグ子爵自身も兵役義務を終えると王立大学で父と同じように法律を学んだ。しかし、大学在学中にタジールとの通商条約を目にする機会に恵まれ、父とは違う外交官の道を選んでタジールの言語を学び始めた。タジールの言語を学んでもタジールの大使になれる訳でもなかったが、言語を学んでいくうちにタジールの歴史の深さ・古さに圧倒されていた。いつかタジールにいきたいという希望はかなったのだが、アンドーラの風習との違いに戸惑う事の方が多かった。

しかしここにきて、バンデーグ大使の立場は大きく変化した。リニのアンドーラへの関心がバンデーグ大使の立場を変えた。君主制の大きな特長に君主の寵を受けたものは、政治的に有利になるという大きな利点がある。確かに周囲のねたみを買っておそれもあったし、権力に鼻の効く連中が自分たちもその恩恵を受けようと近づいてくる。これは、アンドーラでも同じ事だった。しかし、バンデーグ大使は、気がつかない振りをした。そして、リニの側近たちはバンデーグ大使が所詮よそ者だとわかっていたから、寛大だった。ただ、身の危険は、リニのアンドーラへの関心の深さと比例して増えていった。タジールの伝統をかたくなに守る保守主義者たちは、タジールの伝統を汚すものとしてバンデーグ大使の命を狙い始めた。

しかし、リニは、年は若かったが宮中に育ったもの特有の権力の使い方をよく心得ていた。アンドーラからの客人バンデーグ大使の身の安全を図るのは自分の側近たちの役目だと大使館と大使に護衛をつけてくれた。これで、バンデーグ大使の身の安全は確保された

ように思えたが、それと引き換えに行動の自由は大いに制限された。外交上、リニの寵はありがたかったが、反面、リニの父親のタジールの最高権力者ラジ・リニの怒りを持ったのではとバンデーグ大使は心配したが、思いもかけずに拝謁が許され、大使としての大きな役目を果たす事になる。前任者はラジ・リニの宮殿にも近づく事ができなかった。

拝謁の前にバンデーグ大使は、アンドーラの式部官に当たるタジールのポットウフに拝謁の際の礼儀作法を教わる事になった。その場にリニも同席し、タジール語しか話さないポットウフの通訳をリニの側近の宦官の一人に命じた。その宦官は、リニの側近中の側近で、アンドーラ語もタジール語を話すバンデーグ大使の水準よりも上でそのアンドーラ語はかなり流暢といってもよかった。

タジールの社会は、族長制度で一族で暮らしていた。アンドーラも大部分の家は、家父長制度だが、タジールはアンドーラ以上に一族の結束が堅かったし族長の権限も強かった。バンデーグ大使がなかなかタジールの人たちと昵懇になれなかったのもそのせいもある。ただ、客人には礼儀正しかったが、アンドーラのように客をもてなす場に女性も同席する事はなかった。

アンドーラでも貴族たちは、国王の謁見を重大な国王の臣下としての義務と考えていた。特に、ジュルジス三世の治世になって国王の謁見をすましていない者は爵位を継ぐ事ができないという爵位相続法が制定され、一族の長である爵位を持つているいわゆる爵位持ちの爵位を継ぐ予定の嫡子たちは、こぞって謁見をすませる風習が出来上がりつつある。そしてまた一族の者の初めての謁見には、爵位持ちとその夫人が、式部省や侍従長や女官長や王宮勤めの一つを頼って根回しをして無事にすませるように配慮していた。タジールでもその辺の事情は同様のようだった。バンデーグ大使自身のアンドーラでの初謁見は、ジュルジス三世の治世ではなく、その父親のジュルジス二世の時代だった。しかし、当時の王太子であったジュルジス三世も同席をしていた。ジュルジス二世の治世では謁見はそ

れほど儀式めいたところがなく、国王に家族の者を紹介する程度のざつくばらんな儀式だった。温厚なジュルジス二世は、父のバンデーグ子爵が息子ですと引き合わせると名前を尋ねた。これは、貴族社会で物笑いの種になっている事だがバンデーグ子爵家の家名はバンデーグだが当主の名前もバンデーグだった。つまりバンデーグ・バンデーグ子爵というのが初代からのバンデーグ子爵家の当主の名前だった。バンデーグ大使が生まれたときには初代の祖父は健在でやがて爵位を継ぐだろう孫にバンデーグと名付けるように孫の父親に命じた。正式に言うとはバンデーグ三世・バンデーグ子爵になる。なぜそんな命名をしたのかわからなかったが、国王のジュルジス二世と王太子のジュルジス三世にはすぐ覚えられもらえたのは事実である。そして、そのおかげで念願のタジール駐在大使という職を得たのだから命名した祖父を恨むようなことはなかった。

そして、その拝謁の日がやってきた。バンデーグ大使は、教えられた作法通りにタザウルセスと呼ばれる拝謁の儀式の馬鹿でかい部屋で、やはりこれもリニから贈られた礼装を身に着け、指示された位置に敷物を広げた上に座って待っていた。儀式用の剣は、やはり作法通りに体の右横に柄を玉座の方に向けておいてある。儀式用の剣は、アンドーラで謁見のときに用いる祖父から父へと受け継いだ剣を故国から持ってきていた。この剣がなかったら、拝謁はかなわなかったかもしれない。

タザウルセスをバンデーグ大使は「竜の間」と訳してみた。こうした言葉の翻訳も大使の仕事とバンデーグ大使は考えていた。白い大理石で作られた竜の間はアンドーラの謁見の間の十倍以上の広さと五倍以上の高さがあり、玉座と思える場所は、アンドーラのそれよりも高さも広さも三倍はあるように思えた。当然、座っているバンデーグ大使から、見上げることになる。この高低差は、身分の上下間の差を体現しているのだとバンデーグ大使は思った。そして、部屋の広さはタジールの国力と広大な領地を伺わせ、バンデーグ大使は、なぜか無言の圧力のように感じていた。

床に敷いてその上に座っている敷物もリニが特別に作らせたもので、バンデーグ子爵家の紋章が織り込まれていた。そして、贈られた礼装のサッシュにはこれもまたリニから贈られた短剣がさしてあった。何もかもリニから贈られた物づくしの中でアンダーラから持ってきたのは儀式用の剣とバンデーグ大使自身の体だけだった。

アンドーラでの謁見は、ジュルジス三世の戴冠後にその式次第が新たに制定され、玉座に腰掛けた国王が、儀仗兵に名前を告げられ入室してくる貴族たちを待ち受けることになっていた。そして、入室した貴族たちはその爵位の高低で、定められている位置まで歩き進めて、その位置で立ち止まり、武官以外は男性は辞儀をする。そして、辞儀が終わると横に向きなおり、定められた謁見の間の玉座の左右の壁面まで歩いていき、その壁際で部屋の中央に向き直り、次の謁見に入室してくる他の貴族たちを立つたまま待つて、その儀式を終えるのを見守ることになっていた。そして、最後の入場者が入室し、所定の場所で礼をし終わると、儀仗兵が謁見の間の扉を閉めると国王が何らかの発言をして謁見の一連の儀式は終了し、国王が退室する。その後、謁見を賜った人々がそれぞれに退室する。大體がそのような式次第になっていた。

しかし、タジールの拝謁はまるつきり違っていた。アンドーラの謁見とは逆に拝謁を賜る者の方が、こうして床に座ってラジ・リニが玉座に現れるのを待つという段取りになっていた。

バンデーグ大使は緊張の面持ちでラジ・リニの登場を待っていた。床に座ることになれていないバンデーグ大使は、足の痛みに耐えながらなかなか登場しないラジ・リニに内心、やはり、拝謁はかなわないのかと不安になっていた。その不安が絶頂に達した頃、ようやくラジ・リニの登場を告げる銅鑼の音が竜の間に響いた。バンデーグ大使は、作法通りに両手をつき、頭を床にこすりつけるかと思うほど下げて平伏した。儀仗兵に当たるベンダルーが床を鞭でたたくピッシという音がだんだん大きくなってきた。まだ、バンデーグ大使は顔を上げない。鞭の音が止まり、ラジ・リニが玉座についた気

配がし再び銅鑼の音が竜の間に響くと儀典長が口上を述べた。

「竜の民に告ぐ、竜の僕しもへに告ぐ。アンドーラのバンデーグが貴きお方にお目通りを許された。心して記憶に停めよ。心して記録に留めよ」

顔を伏せたままなのでわからなかったが、式部官だろうか何人かの男の声で復唱した「竜の民に告ぐ、竜の僕しもへに告ぐ。アンドーラのバンデーグが貴きお方にお目通りを許された。心して記憶に停めよ。心して記録に留めよ」

再び、鞭の音の後、ラリ・リニがここでようやく口を開けた「そのもの、面おもてを上げよ」

まだ、顔を上げてはいけないことは、バンデーグ大使は教わっていた。今度は儀典長が復唱した「そのもの、面おもてを上げよ」そして、式部官たちがまたこれに続いた。まだ、顔を上げない。もう一度ラジ・リニが同じ言葉を発し、儀典長が復唱し、式部官たちがこれまた復唱する。この儀式が、三回続いた後ようやく、バンデーグ大使は顔を上げ、上半身を起こし、正面を向いた。だが、高い玉座に座っているだろうラジ・リニの姿を見上げるようなことはしなかった。視線は玉座の下の方に黄金で彫つてあるこの国の最高権力者の印である竜の紋章の辺りに教わった作法通りに向けている。

「アンドーラのバンデーグよ。遠路、大儀であった」とラジ・リニが、あらかじめ決まっていた言葉をかけた。それを儀典長から式部官の順番で復唱した。バンデーグ大使はラジ・リニが発言を終えると同時に再び、平伏した。儀典長が「竜の民に告ぐ、竜の僕しもへに告ぐ。アンドーラのバンデーグ、貴きお方のお言葉を賜る。心して記憶に停めよ。心して記録に留めよ」と作法通りの言葉を発し、式部官たちの復唱がこれに続いた。

ここで、拝謁の儀式は終了し、ラジ・リニが退出するはずであったが、バンデーグ大使があらかじめ、聞いていた式次第になかったことをラジ・リニは、行った。

「バンデーグよ。リニが世話になっていると聞いた。余からも礼を

いつ」

多分、儀典長であろうものの咳払いのあと「竜の民に告ぐ、竜の僕しもへに告ぐ。アンドーラのバンデーグ、貴きお方のお言葉を賜る。心して記憶に停めよ。心して記録に留めよ」と先ほどと同じ言葉を発したが、異例なことに驚いているのはバンデーグ大使は顔を伏せていても察しがついた。式部官が儀典長の言葉を再び、復唱した。

一連の復唱が終わると、鞭の音が始まり、ラジ・リニが退出する気配をバンデーグ大使は、顔を伏せたまま感じ取っていた。この異例なラジ・リニの発言をバンデーグ大使はどう受け取っているのか判断がつきかねていた。バンデーグ大使が床に座っているところから玉座はかなり離れていたが、ラジ・リニの声は竜の間に響いてよく耳に入った。ただ、言葉が、タジールの宮廷語なので、バンデーグ大使は、おぼろげにしか内容がわからなかった。後で、誰かに聞いてべきだろうと思っただが、その人物にバンデーグ大使は、心当たりがなかった。そして、銅鑼の音がバンデーグ大使の退出を促したが、足が痛くて立ち上がる時、バンデーグ大使は、思わずよろけそうになった。どうにか、竜の間を出ると、例の通訳をリニから命じられていた宦官のコツタウが待ち受けていた。

「いかがでした」とコツタウはタジール語で尋ねた。彼から、ラジ・リニの宮殿ではアンドーラの言葉を使わないようにと注意を受けていたバンデーグ大使は、にが笑いをし

「足が痛くなった」とだけ感想を述べた。ゆっくりとした歩調で広大な宮殿の廊下を進み、臣下用の玄関を出ると、バンデーグ大使は、ホッと一息ついた。

「もうここではタジール語でなくてもいいかな」とコツタウにバンデーグ大使は、確認をした。

「まあ、いいでしょう」

「どうやら、無事すんだようだ。多分、粗相はなかったと思うが、伺っていた以外にもラジ・リニが何か仰せられていたようだ、私の語学力では、内容は理解できなかったよ」

「どづいづことです」

「いや、挨拶というかそのようなご発言の他に何かお言葉を賜ったのだが」

ここで、コッタウはバンデーグ大使に助け舟を出した。

「宮中でのラジ・リニのご発言は、記録に執つてあるので、リニのお名前で取り寄せましょう。どのみちそのつもりでしたから」

「その記録は、私でも拝見することができるのかね」

「リニが、お許しになれば、できるでしょう。でもタジール語ですよ」

「それは、有り難い。多少なら、タジール語は読めるのでね。それに本国にも報告しなくてはいけないのでね」

「有り難いと思うなら、リニにお礼をして下さい。贈り物には贈り物で返すのがタジールの礼儀です」

「いや、これは、失念した。これまでリニのご好意に甘えてしまい、お礼もしていなかった。礼を失っていたなら、お詫びもせねばなるまい」

「おわかりになれば、それで結構です」とコッタウは素っ気なかった。ここで、バンデーグ大使は、これまでのいきさつを顧みて、外交上、失礼な言動をしたのではないかと、反省をした。

「コッタウ、もし、こういうことを尋ねても失礼がないのなら、タジールの風習についてももう少し教えてくれますか」と言葉遣いも改めた。

「私で、わかることでしたら、お教えできますが」

「いや、そのあなたへのお礼もきちんとさせていただきますよ」とバンデーグ大使は、もしかしてこの宦官は、賄賂を暗に要求しているのではないかと値踏みをした。それは、善悪では判断できない古い国にありがちな悪習ともいえるだろう。何しろ、二千年の歴史があるといわれているこの国である。政治をはじめいろいろなところで贈り物と称する賄賂が横行しているのは、何となく推察できた。この宦官が自分に好意を抱いていなくても、なんとか、少なくとも

自分の敵にまわす愚は避けたかった。バンデーグ大使の外交官としての勤が働いた。このコツタウを何としてでも、こちらの陣地に取込まなければと、バンデーグ大使は、孤立無援のこの状態からなんとか脱却をはかり始めた。

アンドーラのバンデーグ大使のラジ・リニに拝謁を無事終了したという知らせをリニは正殿からはなれた竜都の外れにある離宮で、肝心のバンデーグ大使が、宮殿の正門を出ないうちに早馬で駆けて来た護衛の竜の一門の者から受け取っていた。バンデーグ大使は、宮殿の竜の間がある正殿から、ゆっくりとした徒歩で出て、リニが貸した輿に乗って宮殿の広い敷地をゆっくりとした速度で、アンドーラ大使館に向かうはずだった。何事にもゆったりなのがタジールでは、良しとされる。道を急いで歩くものは、気の短いものと見なされる風潮があった。

「そうか、無事すんだか」

「それが」と使者は言葉を濁らした。リニは「何かあったか」と使者に問い質した。ここで、バンデーグ大使がしくじるとリニの失点になる。

「いえ、それが、異例なことにラジ・リニからお言葉を賜ったそう
で」

「お言葉とは、どういうことじゃ。何か叱責されたのではあるまい
な」

リニは、父のラジ・リニが今のリニの暮らしぶりをあまり快く思っていないのは、ある程度察しがついていた。

「前例がないと、式部官たちや伝承官たちが騒いでおります」

「では、何を騒いでいるか、伝承官たちに確かめて参れ」と使者を再度、ラジ・リニの宮殿に向かわせた。

タジールでは、ラジ・リニやリニの言動は一挙一足漏らさず伝承官と呼ばれる者たちが記録に録ってあった。この離宮にもそのような役目をする者がいる。離宮ではアンドーラの言葉で生活をしてい

るので、記録もアンドーラの言葉で書き記されている。

そして、リニが、これまでの風習を破ってまで、貫いたのはその髪型だった。タジールの支配者層は、竜の一門と呼ばれていた。この中でも最高権力者の家は金の竜の家と呼ばれていた。竜の一門の男子は成人すると竜型と呼ばれる独特の髪型をすることが許される。いわば、その髪型をすることによって、竜の家の出身者である証明でもあった。それをリニは古くさいといってその髪型、頭部のでっぺんだけ残して髪を剃ってしまい、その残った髪を長くのばして鬘を結うのだが、それを成人前の者のように総髪で鬘を結っていた。これは異例中の異例で、この一件を理由にリニの座をおろそうとう動きすらある。これは、父のラジ・リニと若い妃の間に男子が誕生したことも影響してかもしれない。

リニがそんな危険を冒してまで、アンドーラ流の暮らしをしているのは、いつかアンドーラへ行くことを願ったことだった。外遊は難しいと腹心たちは進言したが、リニは、その願いが叶うような気がしていた。そして、外遊先は、言葉も風習もまるっきりと違い、政治制度も似ていて否なるアンドーラが最適だとリニは考えていた。過去の歴史をさかのぼっても外征をしたリニの記録はあったが、外遊をしたリニは、一人もいなかった。歴史を重んじる重臣たちは前例がないとリニのアンドーラ行きを反対したが、リニはこの古い事例に捕われていることこそ、タジールを衰えさせる元凶だと父のラジ・リニに訴えた。

「リニ、アンドーラへの旅は危険が多すぎる。リニの身に何かあったら、この国はどうなる」

「では、このタジールの宮殿が安全だと思いか。多くの護衛に囲まれ、食事は毒味をしなければ食せない、この国の方がよほど、我が身の危険を感じております」

「リニの勤めは、余の後を継ぐことじゃぞ」

「だからこそ、今、この国の外に出てみる必要があるのです。アンドーラは、女子おんなでも一人歩きができるくらい治安が、いいと聞い

ております。また、アンドーラの船は、船足も早く優れた航海術を持っております。アンドーラに学ぶところは多いと存じます」

「その気持ちもわからないでもないが、一位と二位が心配している」
一位と二位とは、ラジ・リニの妃で、「一位の君」が序列で第一の高位の妃で、リニを生んだ母の伯母に当たる。その次に高位なのが「二位の君」で、二人リニの異母姉を生んでいる。そして、異母弟を生んだのが、現在の「三位の君」と呼ばれるまだ年若い妃だった。リニを生んだ母は、リニのお産の産褥熱で亡くなっていた。残されたりニを育てるのが一位の君で、リニは「母者ははじや」と呼んでいた。一位の君自身は、生んだ子が夭折したり、流産を繰り返し、成人した子供は、一人もいない。年齢的にお産は無理だとわかった頃、自身の妹が生んだ姪を後宮に呼び寄せ、夫のラジ・リニに引き合わせた。無論、しきたりでバチカをしたままだったが、ラジ・リニは、その声気が気に入り、バチカを外すように命じた。これは、ラジ・リニとの同衾を要求するという意味だった。あらかじめ一位の君が因果を含めていたので、一位の君の姪はバチカを外した。これは、同衾を承諾するという意味の行為である。そのバチカを外した容姿はラジ・リニの好みだった。これは、夫の好みを知り抜いていた一位の君があれこれ伝つてを頼って見つけ出した女性である。当然なことといえた。無論、健康状態も後宮勤めの宦官の医官に確かめさせてある。そして「三位の君」となって、リニを懐妊した。これは、長い間空席になっっていたリニの座を巡る後継問題で揺れていたタジールの宮中では、安堵と落胆の嵐を巻き起こした。

ラジ・リニは、先祖から受け継いだ「イの力」で、それが男児であることを出産前から感じ取っていた。そしてその子も「イの力」を受け継いでいることも感じ取っていた。つまり、リニは生まれながらリニだった。そして、生まれた翌日に神聖なる神殿で古来から伝わる儀式で、タジールの各族長の前で「イの力」を証明してみせた。その二日後にリニを生んだ三位の君はあの世に旅立った。ラジ・リニの落胆は大きかった。

呆然としていたラジ・リニに替わって、生まれただかりのリニを抱き上げたのが一位の君である。自分が推挙した姪が期待通りリニを生んだことを誇りに思いながらも、リニの育ての親として何をすべきかは、後宮暮らしが長い一位の君にはわかっていた。そして、この子育てには、次の位である二位の君も巻き込んだのである。

二位の君は自身は女兒しか生んでいないと最初は遠慮したが、自身の生んだ娘の縁談にも一位の君の発言が重要視されることも考え、リニの子育てに手を染めることになった。無論、実際の世話は宦官がするし、母乳は乳母が与える。二人が心を砕いたのは生んだ母を亡くしたりリニの寂しさをどう埋め合わせるかだった。だが、リニは自分の生んだ母が既にこの世のいないことに気がつくのは大分、成長してからである。それほど、二人の継母になついていた。

ラジ・リニの言葉で、アンドーラ行きへの妨げになつてるのはラジ・リニの二人の古参の妃であるトリニは気がついた。無論それは父のラジ・リニの抗弁かもしれないが、将を射んとすれば駒を射よである、早速二人の継母に会いに行くことにした。その前に、アンドーラのバンデーグ大使をラジ・リニの拝謁を段どることにしたのである。これは、大使が拝謁もしていない国に行くのはリニの身分に差し障りがあるという意見を封じるためであった。

その拝謁の儀式で前例のないことが起きたことにリニは内心の不安を抱えながらもそれを顔に出さなかった。ラジ・リニの正殿の伝承官に確かめるために出した使者とバンデーグ大使に付き添わせた宦官のコツタウが輿で戻ってきたのはほとんど同時だった。コツタウは破顔していた。

「リニ、ご安心ください。ラジ・リニはなんとアンドーラのバンデーグ大使に礼を述べられたそうです。これで、このアンドーラ流の暮らしもラジ・リニは、お許しになったということでございますよ
う」

「まことか」

「はい、伝承官は渋い顔をしておりましたが、後、バンデーグ大使

にも、少しは礼儀をわきまえるようにと注意をしておきました。まあ、アンドーラとは風習が違うのだからとは拝察してはりましたが、ようやく、気がついたようです」

「さようか」とリニはコツタウの言葉にアンドーラ行きが一步前進した手応えを感じていた。

さて、リニの腹心コツタウに「礼儀をわきまえるように」と忠告されたアンドーラのバンデーグ大使は、大使館で本国への報告書とともにアンドーラの国王ジュルジス三世にある援助を嘆願する請願書を書いていた。それは、タジールの国情とともにこの数年タジールを悩ましている自然災害について触れ、その自然災害つまり旱魃かんぼつによって引き起こされた飢饉ききんについても述べていた。その報告とともに自身のタジールの最高権力者ラジ・リニの拝謁が無事終了したこと、リニのアンドーラへの興味とともにリニに食料援助を送るようにとの嘆願であった。これは、外交上タジールと親好を深める滅多にない機会であること、タジールでは餓死者が大勢出たことなどが国王への書簡に述べられていた。

その当時、タジールのアンドーラ大使館には、海軍の武官が駐在していた。この駐在武官は、本国との伝令役として大使館に配属されていた。海軍はアンドーラ海軍の重要海域であるタジールの近海とタジールの港に艦隊を巡回させ、タジールとの交易にいそしむアンドーラ船籍の貿易船を海賊から防護していた。そして、タジールとの国交を重要視する海軍は、陸軍ほどではないがタジールとアンドーラの間で伝令網を構築していた。当然のことながら、バンデーグ大使も、この伝令網を利用できることができる立場にいたのである。この国王への書簡の他に自分の上司である外務卿のハツパード・サンバース子爵、そして面識がなかったが大蔵卿のヘンダース・ラシユールへも書簡をしたためた。これは、大使といえども何度も伝令を往復させる訳にいかないと判断してのことである。バンデーグ大使が、頭を悩ませたのは、これまで前例がない他国への食料援助

の件であった。外務卿への書簡は、これまでの報告と何よりも食料援助でその賛否を巡って閣僚たちの賛意と何よりも経費の決済をするであろう大蔵卿への説得を願うての文面になった。大蔵卿への書簡は、タジールへの食料援助が、外交上必要不可欠な政策であると訴えていた。本国アンドーラの国情、特に農業面の報告では、昨年は豊作とあっていい状態だったことは、既に自身の領地の状態でもわかっていた。後は、外交上の必要性をどれだけ国王と閣僚が認識するかである。国王ジュールジス三世は、まず、閣僚たちの意見を求めるだろう。その時鍵を握るのは、外務卿と大蔵卿であろうことは、バンデーグ大使にも簡単に察しがついた。

前職のブルックナー伯爵とは多少のなじみがあったが、面識のない大蔵卿への書簡は、特に気を使った。ここで、バンデーグ大使は大蔵卿の父親のミゲル・ラシユール伯爵の評判を思い出した。ミゲル・ラシユール伯は、兵役義務を終えた後、王立大学で博物学を学び、博士の学位を得ていること、その専門は、植物学で特に農業に造詣が深かった。このミゲル・ラシユール伯にタジールの惨状を訴え父親から息子の大蔵卿へ食料援助の賛意を促してみてはと、バンデーグ大使は考えたが、ラシユール親子の親子関係がどうなっているかはわかりようもないバンデーグ大使には、危険すぎる賭けだと判断してミゲル・ラシユール伯への書簡は取りやめることにした。

何度か下書きをした後、清書した書簡に封蝋するともう夜明けになつていた。それから、つかれも見せずバンデーグ大使は、領地にいる妻と子供たちへの手紙を書き始めた。なかなかの体力である。大使館の使用人たちにも家族に手紙を書くように指示をしていた。これらは私信であるが、海軍の伝令にそれらを託すのは、外地に滞在している者たちの心遣いでもあるとバンデーグ大使は考えている。伝令には、王都にいる一族のサツカバン・バンデーグ近衛師団師団長まで、運んでもらい後は領地まではサツカバン准将が手配してくれるだろうと思った。

しかし、リニの腹心コッタウの意外な申し出にバンデーグ大使は、

早魃かんぱつに因るこの国の傷の深さを思い知った。大使館では食料の調達に苦労することはなかった。これもリ二の手配であったが、コツタウの話では、早魃かんぱつの被害は、竜の家つまり、支配階級の土地ではあまり被害は少なく、他の部族の土地がひどく被害が広がり、餓死者も出ているということだった。寒さの厳しいアンドーラに比べ竜都ペンガットは、夏はかなり暑い土地柄である。だが、広大な領地は様々な気候の土地が広がっていた。北部では、かなり厳しい冬の土地もあると聞いたことを思い出し、バンデーグ大使は、領地で留守を預かっている子爵家の家令のビルドル宛にいくつか大使として必要と思える指示を書き記した。それが終わる頃、タジールについてきた家僕のリックスが書斎に入ってきた。

「リックス、家族への手紙は書けたか」

「はい、書きましたが、殿様はお休みにならなかったのよ」とリックスはバンデーグ子爵家に仕えている者らしくバンデーグ大使を殿様と呼んでいる。

「ああ、大使として急ぐ必要があると思ったのね。皆の手紙がそろったなら、ケントル大尉を呼んでくれ。それと油紙を持ってきてくれ」

「かしこまりました」とリックスは書斎を出て行った。

ケントル大尉とは大使館の駐在武官の責任者である。今回の書簡をアンドーラまで運ぶ重要性は、彼に口頭で伝えてある。ケントル大尉の部下たちもアンドーラの家族たちへ手紙を伝令に託すだろうとバンデーグ大使は思った。海軍の伝令網はあるが、それを頻繁に使うのはやはり外務省に属する者としては、やはり気が引けた。外務省で独自の伝令網を敷けばいいのだが、海路の問題もあったし、何しろ港までの道中は治安が悪かった。そのような訳でタジールのペンガットとアンドーラのチェンバーを繋げるのは、やはり、武術の心得がある武官ということになる。海軍は陸軍ほどではないが、士官たちを養成する海軍士官学校では馬術が必須科目となっていた。大使館に配属されている者は、航海術よりも馬術の巧みな者が選ば

れているとケントル大尉は、半ば自嘲気味に語ったことがある。ペンガットから、アンドーラの海軍が寄港するアンターバまでは、馬で行き来をする必要があったからである。

大使の護衛は、自分たちの任務ではないと思っていた駐在武官たちも今回のラジ・リニの拝謁の重要性は理解していた。だから、役目上大使館に待機をさせられて手持ち無沙汰な彼らも、拝謁の成功を共に喜んでくれていた。何よりも、バンデーグ大使と駐在武官たちには、故国を離れての任務を務めという同僚意識が生まれていた。そして一族から、陸軍ではあるが二人の將軍を出したことが、バンデーグ子爵家への敬意となっていた。

リックスの案内でケネル大尉が書斎に入ってきた。武官らしく所属は違うが、高位にあたる大使閣下に敬礼をする。バンデーグ大使も椅子から立ち上がり敬礼を返すが、大使の敬礼は兵役を果たした陸軍流である。

「おはよう、ケネル大尉」

「おはようございます、大使。どうやら、徹夜ですか」とケネル大尉は書き散らかした大使の机を見やった。

「ああ、この件は火急を要するのですね。まあ、これを伝令に託したら、一休みするよ。アンターバまでは、誰がいつてくれるのかな」

「この件は、重要だと大使がおっしゃったので、小官が伝令隊の指揮をとります」

「そうか、くれぐれもよしなに頼む。リックス、他の者たちの手紙は用意ができているかな」

「はい、殿様、ここにもって参じました」とリックスは手紙の束を差し出した。それをケネル大尉は用意していた鞍袋にしまった。バンデーグ大使も用意した書簡をリックスが持ってきた油紙で包んだ。それを見たケネル大尉は

「用心深いですね、大使は。我が海軍の艦隊は沈没などしませんよ」

「いや、雨が降ることもあるじゃないか。まあ、タジールでは雨が降って欲しいようだがね。ペンガットでは、あまり見かけないが、

餓死者も出たそうだからな。そうだ、道中の食料も用意しておいた方がいかもしれない。かなり、この国は餓えた人でいっぱいだからな」

「食料ですか。そんなにひどいのですか」とケンネル大尉は顔をしかめた。

「ああ、この大使館はリ二のご好意で食べ物に不自由はしないがね。道中も十分気をつけてくれ」

「ご心配は無用です。チェンバーまで、無事にお届けします」とケンネル大尉は、書簡をしまい込んだ鞍袋をたたいた

「後、当番艦隊長は誰なのかペンガットに戻ったら、教えておいてくれ。外務省から、何らかの報償を外務卿にお願いしてある。全速力と頼んでくれ」

「わかりました。全速力ですね」

「ああ、大至急だ。よろしく頼む」とバンデーグ大使は椅子から立ち上がりケンネル大尉にうなずいた。そして互いに敬礼をかわした。ケンネル大尉が書齋を出て行くとバンデーグ大使は「リックス、私はちょっと休むよ。その前に風呂を頼む」

「かしこまりました」とリックスは辞儀をして書齋から出て行った。ここで、バンデーグ大使は、書簡の写しをとらなかつたことに気がついたが、下書きをもう一度清書すればいいことだと考え、それは、やはりやることもなく暇を持て余している書記官に命じればすむことだと合点していた。

バンデーグ大使が、風呂でつかれた体を癒している頃、リ二は普段暮らしている離宮からラジ・リ二の後宮へと馬で向かっていた。リ二の二人の継母へは昨日の間に使いをやり、面会の手はずを整えていた。リ二は年若い三位の君を母とは思っていないかった。幼い異母弟にも会ったことはなかつたし、無論、噂に聞くだけでその生母にも会ったことはなかつた。興味がない訳でもなかつたが、成人した今となつては、その関係には、微妙な配慮が必要だった。

だが、幼い時から共に後宮で過ごした二人の継母とは、互いに情が通じ合っていた。二人の継母は、それぞれ、ラジ・リニの妃になつた経緯が正反対と言つていいほど違つていた。

一位の君は幼いときに先代のラジ・リニに見込まれ5歳で後宮に入り、まだリニの世継ぎであつた今のラジ・リニの妃となつた。そして、宦官たちから将来のラジ・リニの妃にふさわしい教育を受けていた。それは、立ち振る舞いから始まり、ありとあらゆる教養を身につけさせられていた。中でも、絵画、特に花鳥画にはその才を發揮していた。気性も高位にあるものらしくおっとりとしていた。

それに比べると二位の君はバチ力をかぶるまで、つまり年頃まで生まれ故郷で一族の者とともに暮らしていた。ペンガットにやつてきたのも、後宮に入ったのも、ラジ・リニの寵を得ようとしてではなく、偶然が重なつて妃となつた。言葉遣いも一位の君が古来から伝わる宮廷語で話すの比べ、ラジ・リニの希望もあつて市井の言葉遣いそのままであつた。趣味も一位の君が、絵画だつたり音楽だつたりするのに比べ、お菓子作りといういたつて妃らしからぬところがある。後宮暮らしも長くなつていたが、庶民的なところも失つていなかった。

幼い時はこの二人の継母とラジ・リニの後宮でリニは暮らしていた。それぞれ、性格の違う継母にリニは、十分と言つていいほど、甘やかせてもらつて育つた。だが、それも短剣を身につけるまで、その後は、将来のタジールを率いるものとして、厳しい態度でリニの教育に望んだ。短剣を身につけるようになってから二年後、リニはラジ・リニの後宮を出て、竜都の外れにある離宮に移り住んだ。だが、二人の継母との交流は、絶えることがなかつた。二人は頻繁に離宮を訪れ、リニの様子を見にきたし、リニも後宮に二人を訪ねてに行つていた。

最近では、リニとしての儀式や執務をこなすことに忙しく、後宮からは、足が遠のいていた。ただ、二人の継母は、以前ほどでないが、離宮にリニを訪ねてきてはいた。それは、二人の時も一人ずつの時

もあつたが、リニのアンドーラ流の暮らしぶりに二人は、驚いたり珍しかったりしたが、特に古来のしきたりを破つたと言つて叱ることもなかつた。だが、さすがに成人しても髪型を竜型にしないことを決めた時には、二人ともこぞつて反対をした。だが、リニの決意が固いのを知ると二人は口をつぐんだ。それはラジ・リニが「リニの好きに致せ」という許可が出たのを知つたこともある。

久しぶりに二人の継母に会うことにリニは、それぞれにちよつとした贈り物を用意したかつたが、タジールの最高権力者の妃としてどんな高価なものでも珍しいものでも手に入れる立場にある二人にはつまらない贈り物をするよりも、バンデーグ大使から聞いたタジールとはまるで違うアンドーラの話をする方がいいのでないかと考えた。それに二人がアンドーラに興味を示せば、リニのアンドーラ行きも反対の気持ちが変わるかもしれないとも思つた。

後宮の正門に到着するとリニは、そのまま馬で、後宮の建物の玄関まで乗り付けた。これは、ラジ・リニとリニにしか許されない行為だつた。リニのベンダルーたちが、鞭でリニの到着を知らせた。その時、後宮詰めの宦官たちが、玄関に迎えでずらりと並らんで座り作法通り地面に頭をつけて平伏した。リニはそれを見ておもむろに馬から下りた。さすがにこの日はタジール風のいでたちだつた。リニの行く手を、ベンダルーたちが廊下を鞭で打ちながら進む。

古いしきたりで、リニとラジ・リニとその妃には専用のベンダルーたちがいたし、その中には、宦官のものもいた。この日、後宮までの道中は、宦官でないベンダルーたちが先導し、後宮の建物のなかへ連れてきた宦官のベンダルーがそれに替わつた。無論、先導を勤めるベンダルーにはリニの行くべき部屋はわかつていた。その部屋の前でリニは立ち止まり、ベンダルーたちが、部屋を鞭で打つて回るのを待っていた。その部屋は、後宮に入った女たちが、出身の一族のものたちと面会する部屋だつた。成人の儀式をする前は、後宮のどこへでも行ける立場にあつたが、成人して剣（けん）を腰に下げるところになつてからは、リニとはいえ面会の部屋にしか行けないことに

なった。ちなみにリニが愛用しているのは、竜の一門にしか許されない少し刀身が反っている竜剣りゅうけんと呼ばれる剣けんである。

何事にも「竜」を持ち出すのは、タジールの古い伝承に寄る。タジールでは竜はアンドーラで言う創造主であるイーネバの使いであり、タジールを治めるのは竜の加護を受けた竜の一門のものたちにしか許せないという言い伝えがあり、竜の一門である証に竜を紋章に用いることから始まり、様々なことに竜をかたどったものを身辺に置く風習がある。リニが竜剣りゅうけんを携えるのも、扱いに慣れておかないといつか、タジール風のいでたちに戻った時に不都合だからであった。

継母たちは、今は成人したりリニの前ではバチ力で顔を覆っているので見えるのは目だけだったが、リニは、二人の顔をよく覚えていたし、気心もしていた。

面会室の係の宦官に案内されてリニが次の間に入ると、既に奥の間でリニの到着を待っていた一位の君と二位の君が、作法通りに両手をつき平伏する。

「母者ははぢや、母上。お久しぶりじゃ、さあ、面おもてを上げなされ」とリニは言つと二人は体をおこした。拝謁の儀式のように三回も言わない。

「ほんに久しいのう」と一位の君

「ほんとに、久しぶりですね、リニ」と二位の君

「いろいろ忙しかったのじゃ。母者ははぢや、母上は達者であつたか」といいながら、リニは奥の間に入り、上座に座る

「まあ、息災ではあるが、リニがなかなか顔を見せぬのは、アンドーラという国のことで忙ししゆうにしておつたのじやろう」と一位の君はやんわりとした口調である。

「それだけではないぞ。ちゃんと学問もやっておつたぞ」

「二位の方、それが真ならば、喜ばしいことじゃなあ」

「リニ、どのような学問ですか」とこちらは、学問好きな二位の君。彼女の最初の娘は、タジールの最高学府の「学問所」の学者頭の家いへに嫁いでいた。その年の離れた姉には、リニは会つたことがなかつ

た。

「博物学という学問じゃ。これは面白いぞ」

「どのような学問ですか、リニ」

「そうさなあ、様々なものを集めてきて、名前を調べたりする学問じゃ」

「ものを集めてきて、名前を調べることが、学問なのですか。一位の君、そんな学問があるのをご存知でしたか」

「さて、妾もあまり聞いたことがないが、そのようなことをするより、リニにふさわしい学問があるじゃろ」

「母者、母上、博物学は、この世のものを知る学問じゃ。その他に寝る前には正伝も、読んでおる」

「正伝」とは古くから伝わるタジールの正式な歴史書である。無論、政権を握っているラジ・リニが命じてラジ・リニが召し抱えた学者たちが編纂をするので、竜の一門、特に最高権力者である「金の竜」の家に不利になるようなことは書かれていない。それに対し学問所の歴史学者たちが編纂する歴史書「タジール伝」の方が、正統な歴史書であると主張するものもいた。アンドーラとは、違うが、学問所においては政権と一線を引き、独立した組織で運営されており、言論の自由を保障されていた。いわば、ラジ・リニをはじめとする竜の一門の対抗勢力とも言えた。

「それならばよいが、正伝はどこまで、進んだのですか」

「まだ、112巻の途中じゃ」

何しろ正伝は、現在2083巻までである。つまりこの世の初めから始まり、現在のラジ・リニの世まで、約2500年の歴史を書き記すのである。その膨大な歴史書の他に伝承官たちが、書き記すラジ・リニとリニの言動を記録した伝承記録もある。正伝も当初は口伝だったが、文字がイーネバの使い竜によってもたらせると、伝承官はその口伝をまず動物の皮に書き起こしたと言い伝えられていた。その真偽については、学問所では根拠のないものだと主張していた。学問所は、まずラジ・リニをはじめとする竜の一門を否認する立場

に立っていた。その長である学問頭の家にはラジ・リニが娘を嫁がせたことは、学問所だけでなく竜の一門も賛否の声がタジール中にあがったという。特に動揺したのは、ラジ・リニの召し抱えの学者たちである。彼らは「学者溜がくしゃだまり」といって学問所とは立場を違えていた。それぞれに学位があり、一流の学者は学問所の学位と学者溜がくしゃだまりの学位と両方兼ね備えてなければならなかった。

「まだ、その程度なのですか。それなら、読み終わるのはいつになることやら」と二位の君はため息をついてみせた。

「まあ、気長にタジール流じゃ」

「武術の方は、いかがじゃ」と一位の君が話題を替えた。

「剣打ちけんうちは、欠かさないでやっておる。なにしろ、兄者に負けたかな。それが悔しいてならんのじゃ」とリニが兄者というのは、二番目の姉の結婚相手の「竜の爪」の家の若長のことである。剣打ちけんうちは、アンドーラのバンデーグ大使が物騒だと思った、剣けんを抜き払いに頭の上あたりで、剣けんを打ち合う例のタジールの風習で、剣けんを抜く速さが競われる技である。

「剣打ちけんうちの他には、何の武術ををしておられるのですか」

「弓術と槍術も、そこそこにはやっておる、兵法の書物にも目を通しておる。怠けてはおらん」

リニは多忙だったが、武術は好きだったし、リニの役目の一つに軍を率いるという役目もあった。竜の一門は、武門の家でもあった。それぞれの家に家伝の武術があり、血統よりその武術に秀でたものが重んじられていた。そして、竜の一門から、金竜の家以外の家の長が、ラジ・リニの指名により武門を束ねる武門頭ぶもんがしらを勤める。アンドーラでいえば、陸軍元帥と海軍総督をかねたような地位になる。現在の武門頭ぶもんがしらは「竜の爪」の家の長が勤めている。つまり、ラジ・リニは学問の雄と武門の雄とを娘婿に持っていることになる。政略的には、ラジ・リニは抜け目なかった。

「武術で思いした。アンドーラには面白い武芸大会があるんじゃないじゃ。タジールの言葉で言えば、槍騎術になるのじゃが、互いに

馬から、盾を槍で突いて落とし合うのじゃそうじゃ」

「ところで、一位の君と二位の君が声を立てて笑った。」

「リニ、妾たちまでアンドーラかぶれにするつもりなのかえ」

「母者、アンドーラを侮れぬぞ。あの国は海軍がある。アンドーラの海軍の船は船足が速いし、タジールの戦船では到底かなわない。」

それだけではない、陸の軍も剣の家だけではなくすべての家の若い男に武器を持たせて稽古をさせておる。あの国とは、戦をしない方が得策じゃと兄者も言っていた」

「まあ、竜の爪の若長まで、アンドーラ鼻屑にさせるおつもりかえ」「そうじゃ、一緒にアンドーラに行こうと約をした。実は、姉者まで行くと言張っておるのじゃ」

リニのその言葉に二位の君が慌てた「なんですと、二の姫は何を考えてそんなことを言い出したのですか。「若女長」の役目もまだ、十分果たした訳でもないのに、これは、一位の君様からも何か言っていたらなくては」

女長とは、タジールの一族の女の長みたいな地位で、その家父長制度のタジールでは重き立場にいる身分だった。一族の子供の養育から結婚まで生んだ母親より、女長の方が発言力があつた。リニの姉は、女長を補佐する若女長の立場にいた。武門の家である竜の一門の家々では女性も武術をたしなむ。その女戦士を率いるのも若女長の役目だった。

「母上、心配はご無用じゃ、アンドーラへは船に乗らねば、行けぬ。外洋船に女子は乗れぬ」

「リニ、そなたこそアンドーラへ行くのは、あきらめた方がよからう。外地はリニには鬼門じゃ」と一位の君はリニの説得にかかった。「ラジ・リニの父君が、外地で亡くなられたのは、ご存知じゃろう。ましては、外洋など、危ないことじゃ。そのたの身になにかあつたら、取り返しの効かぬことになる」

当代のラジ・ラニが幼いころ、祖父にあたる先代のラジ・リニには、当代のラジ・リニの父親がリニの地位にいた。そして、国境付

近で紛争があり、ラジ・リニの父親は、軍を率いて進攻し、その時の戦争で、戦死している。戦死した父親に代ってその一人息子がリニの地位に就いた。

「母者、タジールの方がよほど、危険じゃ。余の命を狙っているものが五万とおる」

そこで、二位の君はリニの予想のつかなかったことを言い出した。「リニ、それほど、アンドーラへ行きたいのなら、妃を持ちなさいませ」

「妃を持つのは、まだ早い」とリニは顔をしかめた。リニの役目の一つに跡継ぎを妃に生ませるという世襲制度で権力を委譲していく政治形態では必要不可欠な行為があるが、まだ、なされていなかった。年齢的にはもう16歳の誕生祝いすませ能力的には、可能な体になってはいたが、リニの女嫌いは有名であった。それは、リニが能力的に可能となったことを知った野心に取り付かれた宦官長と神殿を司る神官長が、リニに女性との同衾を強制し、それがきつかけとなってリニはその行為自体をいやがるようになってしまった。それだけでなく、女性の匂いをかいただけで気分が悪くなってしまふという体質になっていた。

「決して早くはありませんよ。ラジ・リニと一位の君様が結婚したのは、8歳と6歳ですよ。まあ、今気がつきましたよ。なぜ、私たちは、そうしなかつたのでしょうか。そうしていれば、今頃は、お世継ぎが生まれていたかもしれませんですよ」

「それは、どうかえ。確かに、結婚は早かつたが、ラジ・リニもそのようなことに興味を持ったのは18におなりになった頃じゃった」と宦官長と神官長の奸計を耳に入れていた一位の君が、リニの気持ちをくんで、取りなした。宦官長と神官長のその強引な行為は、リニに対する強姦といつてもいい手段を用いていた。それほどのことをしても、宦官長と神官長はおとがめを受けてなかつた。そのことが彼らを増長させることになるのだが、長期に渡るラジ・リニの治世は、内部から腐敗が始まっていた。

一位の君の援護射撃の意を強くしたり二は「ともかく、妃はまだ早い。それに二の若もおるじやろう。そうじゃ、二の若はどうして」と話題を幼い異母弟に向けた。

「リニ、二の若は、まだ『証あかしの儀式』を執り行っていないよ。ラジ・リニは仰せられないが、ひよっとして『イの力』は、ないのかもしれない」と二位の君はリニが生後すぐに執り行った「証あかしの儀式」で「イの力」が備わっていることを証明してみせたのに比べ、まだ二の若と呼ばれる異母弟が、まだ執り行っていないことに気をもんでいた。しかし、二の若が自身の「イの力」を証明すれば、リニの立場は微妙なことになる。とがめこそ受けなかったが宦官長と神官長とは、リニはうまくいっていない。彼らが、リニの廃嫡を画策してもおかしくなかった。

「それなら、もう一人生まれれば、いいことじゃ」

「確かに、三位の方は、まだお若いのがう、二の若に手がかかってそこまで気が回らんのじゃ」と一位の君は、子育てを宦官たちに任せようとしない三位の君のことを思つて少し顔を曇らせた。タジールの後宮では、妃は自らの手で生んだ子の世話をほとんどせず、宦官任せである。幼い時から後宮で暮らし宦官によつて育てられた感のある一位の君には、その辺が不満であつた。それに二位の君が気をもんだ「イの力」のこともある。金の竜の家の男子は「イの力」が備わっていないと他の竜の一門へ養子に出されてしまうしきたりがあつた。やはり「イの力」が強いと言われているリニに後継者が生まれるのが妥当であるうと一位の君は思つた。それにしても、宦官長と神官長は、よけいなことをしてくれたと腹立たしかつた。順等なら、リニが妃を持ってもおかしくない年になっていたのには、周囲のものは、とうに気がついていて。リニの結婚が遅れたのは、一位の君があまりに早かつた自分の結婚生活を顧みて、なかなかその相手を捜す気にならなかつたこともある。

「リニも、やはり、妃を持たなくては行けぬことはわかつておろう。このままでは金の竜の家がすたれてしまうことが案じられてならぬ」

「母者の仰せもわかるが、そうじゃ、アンドーラへ行かせてくれれば、妃を持つてもいいぞ」

「また、アンドーラかえ」と一位の君はため息をついてみせた。

「ああ。あの国は、面白いぞ。余はあの国で、学位を貰うつもりじゃ」

「何を仰せやら。第一、何の学位をもらうおつもじゃ」

「無論、博物学に決まっておる。これまで、タジールでは誰も、貰ったことがない学位じゃ。学問所でも学者溜がくしゃだまりでもない学位じゃ」とリニは胸を張ってみせた。

ともかく、リニのアンドーラ熱は収まりそうになかった。

一方、ペンガットのアンドーラ大使館を出発したケントル大尉の一行である、一路、アンドーラ海軍の寄港地アンターバへ騎乗で向かったが、その道中は気の張ることの連続だった。バンデーグ大使の助言を入れて食料も積んできたが、それがなければ、途中の宿屋で食事に取りつけずにひもじい思いをするはめになっていただろう。無論、物騒な道ばたで野宿など、とんでもないことだった。宿屋でも交代で見張りをして、貴重な馬を盗まれないように厩まで見張りをつける用心をした。アンターバへの道では、餓えた被災者があふれ、人里離れた山中では、山賊が出没していた。ケントル大尉が、伝令を単騎では出さず、大使館に詰めている半数の人数を割いたのはそうした状況を踏まえてのことである。山賊も、甲冑を身に着けた武官の一行を襲うこともなかるうと判断したケントル大尉は、部下たちに海軍甲冑と呼ばれる、陸軍では軽騎甲冑と同じような甲冑で武装させていた。途中で馬に水をやるのにも、注意が必要だった。それほど、タジールの国は荒廃していた。

ケントル大尉が、そんなタジールの状況に詳しくかったのは、実は、情報の提供者がいたからである。それは、竜の爪の家の若長である。バンデーグ大使が離宮に日参し、リニと親好を暖めていたのと同様に竜の爪の家の若長も、アンドーラに関心を持っていた。言葉はす

でに身につけていた竜の爪の家の若長は、武門頭の跡取りらしく甲冑姿で大使館を訪れて「ここに、騎士はおらんか」と大声で呼ばわり、応対にでたケントル大尉と言葉をかわしたのがきっかけで親しくなり、ケントル大尉はタジールの実情にも、ある程度詳しくなつた。

そこは、武官同士である、言葉さえ通じれば、話は尽きなかった。特にアンドーラの軍の話は、竜の爪の家の若長の興味をそそった。若長が、驚いたのは、ケントル大尉が、騎士の家の出身ではないということだった。ケントル大尉は、騎士の家つまり貴族の出身ではなかった。タジールの身分制度では剣の家でないものが、剣を下げることなどんでもないことであった。アンドーラの海軍の士官は船乗りの家の出身者が多かったが、ケントル大尉も、その口であるアンドーラの船乗りの家は自由民が出身の平民が多かった。

武装した効果があつてか、山賊にも襲われずに目的地のアンターバへ何とかたどり着いたケントル大尉一行は、「詰め所」と呼ばれるアンターバ港にあるアンドーラ海軍の駐在所に向かった。そこにも海軍の士官が駐在していた。この詰め所に詰めている武官たちの役目は、主に艦隊の補給物質を調達することだったが、この数年の早魃で、食料は入手が難しくなりアンドーラ本国から、輸送せざるえなかった。

詰め所に到着するとケントル大尉は、眉をひそめた。詰め所でも駐在武官たちが武装していたからである。それは、以前にはなかったことである。詰め所の責任者ジーク少佐も、甲冑で武装したケントル大尉一行に驚いたが、アンドーラへの伝令だと聞いて「それなら、ちょうどよかった、もうすぐラジツト艦隊が寄港する予定になっている」とケントル大尉に教えた。そして、武装の訳を詰め所に備蓄した食料を守るためだと説明してくれた。ケントル大尉たちも、武装を解くこともなく、ラジツト艦隊を待つことになった。海軍の組織的には伝令のケントル大尉も、詰め所のジーク少佐も、艦隊に所属せず海軍の本部に所属する。

それにしても、運が良かったとケントル大尉は思った。バンデーグ大使からは、火急にと言われていたが、状況によっては一ヶ月も艦隊を待つことになることもあった。当時の海軍は、タジールまでの航海とメエーネまでの航海を交互に運行していて、どの艦隊もどの航路でも順応できるように訓練を重ねていた。タジールとアンドーラの間に出没するという海賊も隊を並べているアンドーラ海軍の艦隊には手出しをしなかった。

やがて、ラジツト艦隊が、入港して来るのを詰め所の建物の屋上で見張りに立っていた歩哨の報告を受けたジーク少佐から知らされたケントル大尉は、部下を引き連れ、甲冑は着けたまま騎馬で港にむかった。旗艦が入港する埠頭に到着すると、騎乗のままケントル大尉は、部下に合図の旗を振るようにと命じて、ラジツト艦隊の旗艦が埠頭にその船体を寄せるのを見守った。旗艦が、錨を下ろすとケントル大尉一行の姿を確認した見張りの当番兵が艦隊長のラジツト少将に報告が届いたのだらう、少将は、船縁から身を乗り出し大声で「おう、伝令か」

騎乗のままケントル大尉は、艦隊長のラジツト少将に敬礼をした。ラジツト少将が、それに返礼をする。その後、旗艦から板が埠頭に渡され、ケントル大尉は、馬を下りると部下に「馬を見とおけ」といって手綱を渡すと、鞍袋を肩に掛け、旗艦へ乗り込んだ。再び、甲板にいる艦隊長のラジツト少将の前に進み、敬礼をする。ラジツト少将も返礼をし、「伝令にあたるとは、部下がいやがるな」といった。

海軍の艦隊は巡航を終えて寄港地に入港するとしばらく停泊をして、乗組員たちはその間に休暇を与えられる。だが、伝令の当番に当たると休暇は取り消され、補給を積み込むとすぐに出航しなければならぬ規則になっていた。それもアンドーラのチェンバーまで、強行軍で、戻らなければならない。乗組員たちには、不評な任務であった。だが、その任務が終われば、改めて休暇をもらえるはずだった。それに、バンデーグ大使はそうそう頻繁に伝令網を使う訳で

はない。休暇も、食料事情の悪いアンターバより、チェンバーの方が安心して過ごせるというものだ。

ケントル大尉は、預かってきた書簡の束を鞍袋から取り出すとラジエット少将に手渡した。それをラジエット少将が点検する。「大蔵卿宛もあるな。後、こっちは私信かな」

「はい、バンデーグ大使の領地宛は陸軍の近衛師団の師団長サツカバン・バンデーグ准将まで、お渡しすれば、いいそうです。こっちは、小官たちの家族宛の分もあります。みな、チェンバー出身なので、手配は本部でしてくれるはずですよ。それと、バンデーグ大使は、火急とおっしゃったので、全速力をお願い致します」

「まあ、風次第だが、速力全開で行くさ」とラジエット少将は肩をすくめた。

「大使殿のお話では、今回の伝令には、外務省から報奨金がでるそうですね」

「そうか、それなら、奴らに鞭を振るうとするか」

こうして、バンデーグ大使の国王ジュルジス三世への嘆願書を初めとする数々の書簡がチェンバーまで運ばれる手はずとなった。バンデーグ大使の希望通りにタジールへ食料援助が行われるのか。それは、アンドーラの国王の手に委ねられたのである。

若すぎる死（前書き）

アンドーラの貴族、ブライトン侯爵家は、当主のジークフリードの急死という不幸に遭遇する。後に残された一人娘のアリシアは、父の病死の原因を探ろうとするが…

若すぎる死

アリシア・ブライトンは父のジークフリード・ブライトン侯爵の葬儀の間、父を亡くした悲しみよりも後悔の気持ちに捕われていた。それは、自分に医学の知識があれば、父の病死は防げたのではないかという思いにアリシアは、悲しみの涙というより悔し涙が、目にあふれていた。亡くなった祖母は、薬草の扱いに造詣が深く、医学的な知識も持ち合わせていた。その祖母から、多少の薬草の知識を伝授されていたアリシアだが、自分の医学の知識はまだ、未熟なのはわかっていた。

しかし、父が、脳卒中の発作を起こした時、アリシアは、なす術もなかったことに歯痒さを感じていた。前兆はあったのだ。

ジークフリード・ブライトン侯爵は、領地をより豊かにするため灌漑工事と農地の開墾工事を計画し、その工事が始まったばかりだった。領主として勤勉なジークフリードは、領地の将来を託すその工事を人任せにはできないと朝早くから夜遅くまで忙しく飛び回っていた。当然、疲労が蓄積される。それだけではない。慣れぬ工事の采配と工事費用の工面に心労も重なっていた。

そして、何よりも、侯爵家に仕えていた従医が高齢のため亡くなったことも、不運だった。後任に雇い入れた従医のアーソナル・マネード博士は、どちらかというと外科が専門で、内科はそれほど得意分野ではなかった。それでも、多忙なジークフリードに、休養をとるように助言はしていた。

そして、さらに不運が重なったのは、ジークフリードの発作が起きた時、そのマネード博士が、往診で留守をしていたのである。侯爵家の従医ではあるが、マネード博士の仕事の一部に領民たちの治療も含まれていた。

絶対的な医師不足が、その事情を生んでいた。領民を思うなら、医師を雇ってその治療に従事させるのは、領主として当たり前なこ

とと言えたが、医師法の関係もあって、治療に従事できる医学博士は、各地で引つ張りだこの状態だった。当然、その給金も高騰する。ブライトン侯爵家が、従医に外科医を雇い入れたのは、前任者が、内科が専門であり外科に長けていなかった事情もある。

そして、聖徒教会の自然派の台頭の影響もある。ブライトン侯爵家の領地でも、領民たちの間に自然派に宗旨替えをするものが相次いで、内科的な治療は自然派の助祭たちが領民たちに施していた。そのような訳でジークフリードが、外科医を従医に雇い入れたも、必然といえた。それに、工事を計画していたジークフリードは、工事だけが人ができることも予想していた。外科の需要はあったのである。

マネード博士は、その前身は、陸軍の医官である。推挙した陸軍の医官長によると、外科医であるが、内科への造詣もあるとの触込みだった。その言葉通り、簡単な処方などは行っていた。

父の死の原因を従医のマネード博士にかぶせるほど、アリシアは尊大ではなかったが、むしろ、自身を責めていた。

その当時の医学では、予防医学という面では、あまり、研究が進んでいなかったが、アリシアは、祖母の薫陶で、滋養の知識は多少あった。ブライトン侯の発作が、日頃の健康状態を脈をとっているマネード博士には予見できなかったことに、アリシアは外科医の限界をみたような気がした。たとえ予見できてもその発作を止めることはできなかつたとしても、発作を軽症で済ませ、命を長らせることもできたのではないかとアリシアは、自分の少ない医学知識から、そのような気がしてならなかった。しかし、マネード博士の立場も考え、その思いを口に出すことはなかった。

ジークフリード・ブライトン侯爵の葬儀は、跡継ぎであるジークフリードの弟であるライネル・ブライトン少佐の到着を待って、しめやかにとり行われた。亡きジークフリードには、息子が生まれず、子供は、娘のアリシアだけだった。そのため、ジークフリードは、弟ライネルの息子のアーノルドを領主館に引き取って、やがて、候

爵位を継ぐものとして、養育していた。ジークフリードが、自身の息子を持つことをあきらめたかのかは、定かではないが、当時の常識では30歳を超えた妊娠は、貴族の中ではあまり例をみなかった。

メレデイス女王以前からの爵位を誇っていたブライトン侯爵家は、名門貴族にありがちな傍系の一族が多かった。皮肉なことにジークフリードの従弟たちの家では子だくさんで、男子も何人が生まれていた。その彼らをジークフリードは、やはり領主館に引き取り、やがては武官として王家に出仕すべく、退役軍人の家庭教師を雇い入れ、教育を施していた。なぜ武官かという点、その当時、名門貴族の間では文官は新貴族の牙城で、名門貴族の出身者は出世しないと言われていた。その噂のためかジークフリードの弟であるライネルは、名門侯爵家の次男として武官の道を選び、軍学校と呼ばれる王立陸軍士官学校へと進んだ。兄のジークフリードになかなか世子が生まれず、アーノルドを引き取りたいと兄から持ちかけられた時、ライネル自身は、兄の後を継ぐはめになるとは、まだ考えてもいないことだった。その話がでたときは、ライネル自身は、佐官への昇進がかかっていた。ライネルは、武官での栄達を望んでいた。

名門貴族でも、前王朝のペルクルス家の国王の下で騎士団長も務めたこともある武門を誇る家でもあったブライトン侯爵家には、騎士団長を拜命をした時の先祖伝来の甲冑が領主館に飾られていた。それを着用して戦場に出ることは、もうアンドーラでは許されないが、国王の主催の馬上試合には、その着用が許されていた。ライネルは、尉官時代は軽騎兵ではあったが、重騎兵の必修科目である馬上試合にただ一揃いだけ侯爵家に残っていたその甲冑を装着して何度か出場した。これも、武官としての誇示行動である。アーノルドを引き取る件についても、転勤が多い駐屯地暮らしでは、ろくな教育が受けられないと考えて承諾した話である。

結婚についても、ジークフリードが、同じ名門貴族のサリンジャ侯爵家から、当主の次女のアマンダが嫁いできたの対し、ライネルは、武官としての立場を優先して相手を選んだ。その相手とは、

上官でもあるアーノルド・カウネルズ准将の娘ベネットである。アーノルド・カウネルズ准将自身も伯爵家の出身ではあるが、次男で爵位は兄が継いでいた。アーノルド・カウネルズ准将は、その一人娘のベネットにはカウネルズ伯爵家からは縁談もあつたがそれを断り、武官としてのライネルの将来性を見込んで、ライネルに嫁がせた。下世話な話になるが、縁談を断つた以上カウネルズ伯爵家からは持参金が望まれず、アーノルド・カウネルズ准将は、自身の収入から何とか工面をしたが、名門貴族の侯爵家には少々少額といえたが、ライネルの両親は、それをあげつらうようなことはなかった。

息子が生まれた時、ライネルは、ブライトン侯爵家の由来の名前ではなく、岳父の將軍の名前を付けることにためらいはなかった。その時には既に父は亡くなっており、兄のジークフリードが侯爵を継いでいた。

一方のジークフリードは、侯爵家の世子として、大多数が通る道を行っていた。王立大学で入学許可をもらつと陸軍の下士官として兵役につき、兵役義務期間が過ぎると退役し、大学で法律を学び、卒業後は、実家で領主としての心構えや実際的な実務も経験を積んでいた。婚約も早かつた。兵役義務の前にその話が出て、大学の卒業と同時にアマンダと結婚をした。結婚の二年後に娘のアリシアが生まれ、順風満帆のように思えた。だが、その後子宝に恵まれず、それが悩みの種でもあつた。ブライトン侯爵家としては、直系ではないが男子は多く、そのため血統が途切れる心配はなかった。しかし、傍系とはいえ、一族の子弟の多さはブライトン侯爵家の財政を圧迫した。男子には、軍学校か海軍士官学校の兵学校へ進ませ、貴族としての面子が保てるような職業の道を考えてやらねばならなかった。だから、ライネルの結婚もブライトン侯爵家では、陸軍の将官と縁を結ぶことになり、歓迎された。

だが、問題は女子だった。身分にふさわしい結婚相手を見つけてやらねばならず、これは一族の長として、あれこれ気のはる役回り

だった。無論、それなりの持参金も用意しなくてはならなかった。そのような名門貴族の当主としての心配りが、ジークフリードにもアマンダにも必要であった。

アリシアの従弟のアーノルドは、領主館にきた当初は、両親から引き離された寂しさで、泣くこともあったが、慣れるに従って、徐々にわんぱくぶりを発揮していた。そして、何よりも家庭教師を始め領主館に勤める使用人たちが一族の少年たちを名前で呼ぶのに対して、アーノルドを「若様」と呼んでいたことで、幼心にアーノルドは自分が領主館にいる他の少年たちとは、立場が違うことに気がついたのである。部屋も他の少年たちが同じ部屋で寝起きするに比べて一人部屋を与えられていた。それは、最初の頃は、領主館暮らしにも慣れず一人で寝るのは寂しかったが、駐屯地にいた頃とは比べ物にならないくらいに厳しい武術訓練に疲れ果てて、寝台に向かうのもやっという有様で、寂しさは、いつしか消えていた。アーノルドが厳しい武術訓練に耐えていたのも、他の少年たちの目もあつたからである。彼らにとってアーノルドは「殿様」の侯爵の甥であり、何よりも、あこがれの将官の孫であることは、貴族の間では重要視される。自然と一線を画した態度で接していた。しかし、アーノルドは領主館に着て一ヶ月も経たないうちに少年たちのいたずらの頭目となっていた。その被害にあつたのは、やはり領主館に引き取られていた一族の少女たちで、駐屯地仕込みのいたずらは、徐々に激化していった。そこに「待った」をかけたのが、侯爵の娘のアリシアであつた。アリシア自体には被害がなかったが、少女たちの苦情を聞くとアリシアはすぐに行動に出た。父の侯爵に注進をしたのである。

「お父様、アーノルドを甘やかしては、いけないわ。確かに叔父さまたちと引き離されて寂しがっているとはいえ、将来は、侯爵家を継ぐのよ。あれでは、領民たちをいじめめる悪殿様になってしまうわ」

その時、ブライトン侯のジークフリードは、領地の灌漑工事と開墾工事の計画で多忙をきわめており、その打合せのため王都に行っ

て留守のこともあった。それに男の子を育てることのない侯爵夫人のアマンダには、手に余ることもあった。

「アリシア、それは、どういう意味だね」とジークフリードは、書類から目をあげた。そこで、アリシアは、アーノルドのいたずらのあれこれを父に語った。それを聞いたジークフリードは「私たちの時より、大物だなアーノルドは」と笑ったが、やはり、気になったのが、領民たちにいたずらをするようになっては、領主として手をこまねいていられなかった。

「わかった。サイラスにアーノルドのしつけを頼んでおこう。それでいいね」とジークフリードは、家令のサイラスにこの件を任せることにした。そして、再び書類に目を落とした。アリシアは、父の忙しさにそれ以上は、望めないとわかっていた。それに自分自身も国王ジュルジス三世に初謁見をする準備が進められていた。

貴族の爵位持ちたちに課せられた謁見の義務に名門貴族たちは、最初、うなり声をあげていた。だが、それが定例化すると、徐々に利点もあるのに気がつき始めた。同じ日に宮廷に集まるのは、郵便制度のなかった時代には、好都合だった。互いに情報を交換し、それは、領地同士の物資の交易から縁談も話題にのぼることもあった。それに国母のエレーヌ王太后は「行儀見習い」というしきたりを加えていた。貴族の娘を王宮に侍女として仕えさせ、礼儀作法や素養を身につけさせるという一見、無害なしきたりにも思えた。しかし、それは、権力志向の強い国母には、王家に膝を屈しさせるという意味合いもあることにはあった。誇り高いものには、屈辱的なきたりだったが、王家に生殺余奪の権を握られていた貴族たちにはなす術を持たなかった。

だが、それも王太后の病死で、途絶えたように思えた。現王妃のヘンリエッタは子爵家の出身で王太子を生んだ訳でもなかったことが、名門貴族たちには、王妃を軽視する理由の一つになっていた。だが、当時、女性の職業が少ない時代に職業としての侍女の需要はあった。そのような訳で爵位持ちの直系の令嬢には「行儀見習い」

の話はなかったが、その他の貴族の娘にとって王宮勤めはあこがれの職業のように思えた。

ブライトン侯爵家でも、侯爵夫人のアマンダは短い間であったが、王宮での「行儀見習い」の経験があった。その経験から、領主館に一族の娘たちを集めて「行儀見習い」をさせていた。その教育には、聖徒教会の修道女であるシスター・ブルガがあたっていた。シスター・ブルガは、ブライトン侯爵家の出身で、その素養の深さは貴族の娘たちを教えるに適材といえた。無論「行儀見習い」の娘たちには国王の謁見も一回はさせるつもりだったし、いい縁組みが決まれば十分な持参金をつけて嫁がすつもりだった。

もちろん、娘のアリシアの教育も怠らなかった。幼い時は、前侯爵夫人がその発言が重きをなしていたが、その死後は、アマンダが自らの経験をふまえて侯爵家の姫として恥ずかしくないように十分心を砕いていた。だが、アリシアは、祖母の残した薬草園の世話には熱心に取り組むが、貴族の婦人らしい趣味とその頃流行していた刺繍には、目もくれなかった。だが、アマンダは気がつかなかったが、野外で日常を過ごすことで、アリシアは健康的な身体に育っていた。

そして、アマンダは迷っていた。アリシアを王宮に「行儀見習い」に出すかそれとも、出さぬままに縁談を探すかどちらがいい縁組みの話が来るのか、夫に相談してみても「君に任せるよ。そういったことは、ブライトン侯爵家では最近、姫が生まれていないからね、わからないよ。そうだ、サリンジャー侯爵家に相談してみても、どうだろう」

「そうですね、母に聞いてみましょうか、次の謁見の日はいつでしたっけ」

「うん、そうだね、多分、新年の謁見の時でないとおえないかもしれないね。その前に馬上試合があったな。義父上キョウヂウヂは、それには、顔を出されていたろう。馬上試合だったら、他の領主もやってくるだろうし、確実に会えるよ。そう急いで決めることもないだろう」

「そうですね」とアマンドは、夫が一人娘を手放したくないのだと推察した。

ブライトン侯爵家が、武門の家なら、サリンジャー侯爵家は、ペルクルウス王朝では、宰相を輩出したこともある文官の名門の家系であった。しかし、時代の流れには逆らえず、現在は慣れぬ武門の道を選んで、一族の者を軍学校や兵学校へ進ませようと苦心していた。アマンドの父の二ハエル・サリンジャー侯爵自身は無官だったが、前国王の宰相で初代の国務大臣の前カルチエラ伯が、宰相に任命された時に礼を尽くされてそれ以来カルチエラ伯爵家とは親好があった。現在のカルチエラ伯は無官ではあったが、国政に影響力をおよぼしていた。カルチエラ伯爵家は”新貴族”ではあったが、その出自にはペルクルウス王家の血筋が流れており、気位の高い名門貴族たちも、頭を下げざるえない家であった。

そして、カルチエラ伯の紹介で、ミゲル・ラシユール伯爵とも知己を得て、彼の推奨する農法が、サリンジャー侯爵家からブライトン侯爵家へ伝わった。ジークフリードは、農業に熱心に取り組んでいた。その延長上に灌漑工事と開墾工事の計画があった。これは、開墾工事で、農地を広げるのは領民たちの願いでもあった。ブライトン侯爵領は、小作人より自作農が多かったが、その農地の相続で多くの子供で分けると各自の収入が減り、貧農になる。それを避けるため、新しい農地が必要だった。無論、侯爵家としては、税収が増えるという、領主と領民の利害が一致した計画であった。

すべては、順調のはずだった。しかし、ジークフリードの突然の病死は、周囲のものに衝撃を与えた。もちろん、当事者であるブライトン侯爵家の打撃は大きかった。呆然としている妻のアマンドに代わり、侯爵位を継ぐことになる弟のライネルへ使いを出したのは、家令のサイラスだった。その後も、親類縁者へ使いを出し、ブライトン侯爵家の当主の病死を伝えさせた。無論、王都のチェンバース公爵にも使いを出し、チェンバース公爵から国王ジュールジス三世に知らせる手配も、サイラスが行った。

実は、国王は陸軍の各駐屯地にいる師団長には、貴族のそれも爵位を持つているものたちの動向は、報告をさせていた。そのような訳で、ジークフリード・ブライトン侯爵の突然の病死はその領地の所属する第5軍区の第十三師団の師団長のコーネル・エルガー少将が、伝令を王都に走らせて、チェンバース公爵の知らせより早く、国王の耳に入っていた。

ジークフリード・ブライトン侯爵の寿命は、その当時の平均年齢よりもかなり若かった。それを思って、国王はため息をついた。しかし、臣下としては特に国政にはあまり影響がないことでもあったが、慣例として第三等の勲章を遺贈することを決定し、式部卿のハルビッキ・サングエム子爵にその葬儀に国王の名代として参列するように指示をした。それは、ブライトン侯爵家の後継者を見定める必要もあつた。そして、爵位を持ったものの死に際していつも行っているように陸軍の伝令網で、この知らせを各地に送るようにと命じた。

この訃報は、ブライトン侯爵家と婚姻で縁を結んでいるものたちの他にも、領地の境界を接している各領地の領主たちにもまた、領地の産物を通じて取引がある商人にも、滞ることもなく届けられた。

家令のサイラスの使者のもたらした知らせは、ライネルに当然のことながら、衝撃を与えた。ライネルは、自身が侯爵家を継ぐことになるにしても、武官としての定年を迎えることだと思っていた。早すぎる兄の死にライネルは「なぜだ」と自問自答していた。だが、急かされるように上官に報告をし帰郷の許可をもらうと、妻のベネツトとともにブライトン侯爵家の領地へと向かった。

ブライトン侯爵家の領主館は、悲しみに包まれていた。武官の道を進み幾分負けず嫌いな性格なライネルと比べると、兄のジークフリードは、名門貴族の当主らしい温厚な人柄で一族の尊敬を集めていた。家令のサイラスは沈痛な面持ちで、ジークフリードの死の経

緯を語った。兄嫁のアマンダは、一変に老けた顔をしていたが、姪のアリシアは、気丈に振る舞っていた。そのことがいつそう悲しみをさそった。

だが、悲しみに暮れてばかりはいられない。当主の二度目の死去を看取るはめになった家令のサイラスは、自分の気持ちは置いて、事務的にことにあたった。ライネルも、葬儀を始めとするそうした様々な手続きの準備に黙々といそしんだ。

人の死に際しての葬儀を始めとする煩雑とも思える事項は悲嘆にくれる暇を与えてくれず、本当の悲哀は弔問に訪れた人たちが去った後に訪れることが多いが、ライネルはそれさえ許されなかった。

まず、爵位を継ぐことの許可を国王ジュールジス三世にもらう必要があった。法的には何ら問題がなかったが、国王の名代で葬儀に参列した式部卿のルビッキ・サングエム子爵は、なるべく早い時期にライネルが国王の謁見を果たすように助言をし王都に戻っていった。形式的なものだが爵位を継ぐには、国王から改めて爵位を授かる儀式が必要だった。それは、ジュールジス三世の治世では、爵位を継いで最初の謁見の時に行われることが多かった。これまで、ジュールジス三世がその相続を認めない例はなかったが、やはり、その儀式を早めにすませ、爵位を確実なものにしておくのが、無難な道だった。

それと同時に未亡人となったアマンダの父であるサリンジャー侯爵と現在は定年で退役をしていたカウネルズ少将が、アーノルドの謁見も早くすませるようにと口を揃えて進言した。予定では、ジークフリードもライネルも幼いアーノルドが、12歳になった時に初謁見をさせるつもりでいた。その前にアリシアの謁見をすませ、嫁がすつもりだった。アリシアの謁見よりアーノルドの謁見を急ぐのは、爵位継承法で、国王の謁見を拝していないものは、爵位を継ぐことができない決まりになっていた。ライネルも侯爵家の息子としてそのことは知っていた。「そうですね、それは、急いだ方がいいのは、わかっています」と久しぶりに会う息子をみた。それは、父が使い兄のジークフリードが使っていた書斎でのことで、大人の話の

席に幼いアーノルドを同席させるのにベネットは、反対したが、サイラスは、アーノルドの自覚を促す必要があると主張した。アーノルドは、やさしかった伯父の死に涙をこらえていた。

そして、侯爵家の顧問弁護士が遺言状を預かっているとサイラスは、ライネルに告げた。「殿、これは、一族の方々の前で、発表すべきでございます」

「サイラス、殿はやめてくれ」とまだ、兄の死が実感できないライネルにサイラスは無情なように思えた。

「しかし、もうあなたが殿なのです。もう、武官ごっこは、お終いにしていただきたい」とサイラスは、ライネルが考えたくないことを口にした。そして、ライネルをさらに苦境に追い込む事実をサイラスは明かした。「殿、侯爵家には、借財がございます。それもかなりな額で、それも、遺言状を開く前にお知らせした方がよいでしょう」

「借財だって。それはどういうことだ」

そこで、サリンジャー侯爵が「灌漑工事と開墾工事をして農地を増やす計画のためにファンタール銀行から、資金を融資してもらった。その融資は、私が保証人ということになっている。工事を中断するつもりでも、もう資金は、工事の支払で手元にないだろう。ライネル、君には悪いが、陸軍はやめてもらおうよ。それが、ファンタール銀行の融資の条件なのだ。法定代理人ではなく、この領地を治めるのは、当主自ら当たらなくてはならないのだ」と説明をした。

「一体、何の話です。僕にはさっぱりわかりませんが」とライネルは、自分の心づもりと違ってきた風向きに顔をしかめた。任地から領地に戻る間、ライネルはベネットと自分は陸軍を除隊するつもりがないこと、領地は法定代理人をたてて治めさせるつもりだと話して、法定代理人の人選をどうするかと相談をしていた。

武官での栄達し、将官になるのはライネルの子供の頃からの夢だった。その夢のため、どれだけ精進したことか、侯爵家の甘い若様と呼ばれないように普段の生活も節制し、武官で昇進をするために

酒も控えていた。それを、あきらめることは到底できない話だった。しかし、そんなライネルに引導を渡したのは、こともあろうかライネルの陸軍での昇進を願っていたはずのカウネルズ少将だった。「ライネル、侯爵家の当主で武官を努めているのは、海軍のパラボン侯爵ぐらいなものだ。彼は、特別だよ。陸では両立は難しいと思うね。やはり、ここは、除隊しかないだろう。まずは、侯爵としての義務を果たすべきだろう。銀行の件もあるが、跡継ぎだったらともかく、侯爵家の当主が陸軍に籍をおくことは、陛下が、お許しにならないと聞いているよ」

「しかし、僕は侯爵家の当主として、どうしていいのか、さっぱり、わからないのですよ」

「それなら、私が少し、助言をさせてもらうよ。まあ、サリンジャ侯爵家とは、家風が違うかもしれないが、その点はサイラスに聞けばいいことだ」

「サリンジャー侯爵のお申し出は、有り難い。それに亡くなった兄に聞いたことがあるが、領地を治めるのは駐屯地を預かるのと似ているらしい。私は、伯爵家の出だが、多少の手助けはできる限りさせてもらうよ。」

ここで、ライネルは最後の抵抗をした「やはり、法定代理人では無理ですか」

法定代理人とは、アンドーラでのいわば、代官のようなもので、領主になり代わり領地を治める者のことで、代官が裁判権を持っているのに対し、法定代理人は、裁判権を持っていないことの他は代官とあまり、大差なかったが、その領主との取り決めて権限をどの程度与えられるか、契約で決められることができた。それも、あれこれ細かい規定が領地施政法という国法で定められていた。

名門貴族が、チェンバース王朝になって苦労したのは、その国法が存在だった。ペルクルウス王朝時代は、爵位を授けられるとほとんどの者が代官を領地に派遣して、税収のみを受け取る習慣になっていた。しかし、特にジュルジス三世の治世になって、領主はなる

べく自身で領地を治めるようにという風潮ができてつつある。

最後にサイラスがだめを押しした「殿、未練がましいですぞ。第一、私があなたの定年退役まで、生きているとお思いですか。それは、無理なご相談です」

「これで、決まったな。まあ、少佐で定年を迎える奴もいることだしな」とカウネルズ少将が、肩をすくめた。結局、ライネルは、軍服を脱ぐことになった。

ジークフリード・ブライトン侯爵の突然の死で、侯爵の甥から世子となったアーノルドの謁見の準備が、進められていた。この重大さをわかっているのかアーノルドは、神妙だった。謁見の礼儀作法の指導は、葬儀の後もブライトン侯爵家の領主館に残ったサリンジャー侯爵とカウネルズ少将が、ことに当たった。

国王ジュルジス三世は、謁見を重要視していた。その国王の意向は既に貴族の間では周知の事実となっていた。特に領地継承法で、世子の謁見は、必要不可欠だった。

そして、その日取りも、その次の月例の謁見の日にと決まった。その時に同時にライネルの爵位の認証式も執り行う希望を式部省に連絡していた。まだ、喪中であるが、その二つの儀式はブライトン侯爵家には欠かせない行事だった。

ライネルは、ベネットとともに一旦任地に戻り、上官に辞表を提出して後任の者に任務の引継ぎをし、家族寮を引払う段取りをすますと、急ぎブライトン侯爵家に取って返した。そして、サリンジャー侯爵とカウネルズ少将の手を借りながら、ブライトン侯爵家の当主としての義務を果たすべく、まず、領地施政法に目を通した。その国法自体は、陸軍の佐官の昇進研修で学ばされていたが、改めて領主として気をつけなければならぬことなどの助言を受けていた。無論、祖父の代に制定した領内法は、ブライトン侯爵家の一族でもある家令のサイラスが、説明した。幸いなことにブライトン侯爵領では、工事の計画以外、大きな問題はなかった。

そして、灌漑工事と開墾工事については、侯爵領が所属する第五軍区を受け持っていた第十三師団の師団長のコーネル・エルガー少将が、計画の進捗状況を報告することになっていた。当時の風潮としてアンドーラの陸軍は、各軍区の土木工事を陸軍が引き受けることが多く、ブライトン侯爵家も、陸軍の第十三師団にその要請をしていた。師団としては大事な収入源である。エルガー少将は、副官を始め、土木工事に詳しいものもその打合せに出席させた。

夫のライネルも忙しかったが、侯爵夫人となった妻のベネットも忙しかった。兄嫁のアマ نداから名門貴族であるブライトン侯爵家の当主夫人としての何をすべきで何をしないかということを学んでいた。それは、武官の妻としての暮らしと大きく違っていた。ベネットは、結婚前は父親の赴任地でほとんど両親と暮らし結婚後も夫のライネルと共に駐屯地の家族寮で生活をしていて、領主館で暮らしたことはほとんどなかった。使用人も近所から通ってくる洗濯女ぐらいで、家事は自身の手でほとんど行っていた。年一度あるライネルの休暇も、夫の実家へは立ち寄りせず、カウネルズ少将を訪ねることが多かった。今までと勝手が違うことにベネットも、兄嫁の手助けが必要だった。

そんな訳で、前侯爵の娘のアリシアの行動を誰もが、気にとめていなかった。領主館の使用人たちも、新しい主人夫婦に気を取られ、侯爵家の姫として何ら問題を起こすこともなかったアリシアの心のうちをのぞくものは誰もいなかった。

アリシアは、医学への関心が、どうしても消えなかった。特に父の死を招いた病気の原因を探ろうとしていた。それには、医学知識のあるものに尋ねなくてはならないことぐらいは、アリシアはわかっていた。だが、侯爵家の従医のアーソナル・マネード博士は、専門は、外科である。内科に詳しい人間を探さなくてはならなかった。それをアリシアは聖徒教会の自然派の助祭に求めたのである。

ブライトン侯爵家は聖徒教会の信徒であったが、自然派から「祭壇派」と揶揄される正統派から司教が、領主館の近くの教会に派遣

されていた。ジークフリードの葬儀もその司教が祭司を執り行った。自然派の教会は、領主館から離れた村の外れにあった。建物自体は、古くからある聖徒教会の礼拝堂と助祭の住まいがありそこで、簡単な治療が行われているはずであった。

そこまで、アリシアは一人で歩いていった。村はずれの教会は領主館のそばの教会より建物は小さかった。そのことは、アリシアの緊張感を少し緩めた。建物が大きければ、威圧感で圧倒されたり。アリシアは、まず礼拝堂をのぞいてみた。そこで、父の慰霊の祈りを創造主に捧げたかった。しかし、礼拝堂には、先客がいた。それは、見るから貧しい農民で礼拝堂の正統派のそれよりも簡素な祭壇の前でひざまずき、祈りを捧げていた。それが終わると農民は、脇に置いていた籠に入っていた野菜を取り出し、祭壇の前にある台の上ののせるとももう一度、辞儀をして礼拝堂から出て行った。

アリシアも、祭壇の前に進みひざまずいた。手を組み頭をたれた。祈祷のやり方は、自然派も正統派と大差なだろうと思った。それがすむとアリシアは、祭壇の前の台の上に、用意していた金貨をのせようとした時、暗がりから「自然派は、金貨を受け取らないのです」という声がした。アリシアは驚いて、金貨を床に落とした。声の方に振り向くとそこに質素な修道士服姿の修道士がたっていた。

修道士は暗がりから、祭壇の前で立ちすくんでいるアリシアのそばに歩んできて、床に落とした金貨を拾い、アリシアに手渡し、もう一度「自然派は、お金を受け取りません。どうやら、自然派の信徒の方ではないようですね」

ここで、アリシアは答えに窮した。だが、修道士は「何か、お困りなことがありなのですか」と低い声で尋ねた。

「ブラザー、こちらで、医学に一番詳しいのはどなたでしょうか」とアリシアはここへ来る途中、考えに考えた言葉を口にした。

「どなたか、ご病気なのですか」

「いえ、そうではありません。私は病気の原因が知りたいのです。脳卒中は、どうして起きるのでしょうか」

「困りましたね。そういったご質問にお答えできるものがおるか、この私でもわかりません。ここでは病気の原因を探るのではなく、治療を致します」

「でも、病気の原因がわからなくて、どうやって治療をするのですか」

「それは、どの病気かと診察をして診断を致します。病名がわかれば、その治療法も自ずとわかるのです。しかし、脳卒中は血の病気といわれていますが、どなたか、その発作を起こされましたか」

「父が、それが原因で亡くなりました」

喪服姿のアリシアに修道士は、はたと気がついた。普通、大多数の農民たちは、喪服を持っていない。喪に服す時は、喪章を腕に巻くぐらいが関の山だった。喪服を持っているのは、裕福な一部のものだけだった。

「これは、失礼致しました。ブライトン侯爵家の方ですか」

「はい、アリシア・ブライトンと申します」

「これはこれは、確かブライトン侯爵家のご息女アリシア姫ではありませんか。姫様には侯爵閣下のお悔やみを申し上げますよ。しかし、このようなどころにおいでとは、お供の方はいかがなされましたか」と尋ねられたが、治安のいいアンドーラでも、身分のある女性には、一人歩きをしない風習がある。

「ここへは一人で参りました」

「お一人で、馬車にも乗らずに」と修道士は眉をひそめ「しかし、領主館からこの教会までは、かなりの距離がありますよ」

「でも、私は、亡くなった父が、なぜ、脳卒中を起こしたのかが、知りたいのです」とアリシアは粘った。

「それは、お気持ちは、わかりますが、王立大学の医学部の教授でもわからないことでしょう。アンドーラのどんな名医もその脳卒中の発作を止めることはできなかつたでしょう」

「父が不摂生をしていたと」

「いえ、そういった意味ではありません。私は、ブライトン侯爵の

脈をとったことがありませんので、なんともお答えのしようがない」「脈をとっていけば、発作を起こしそうだとわかったかもしれないのですか」とアリシアは食い下がった。

「そこまでは、どうでしょう。たとえ、わかっていても、発作を止めることはできなかつたでしょう」

この答えは、アリシアをがっかりさせた。ここで、慌ただしく礼拝堂に少年が駆け込んできた。

「司祭様。大変だ。また、父ちゃんが倒れたよ」

少年の言葉にアリシアは、自分が勘違いをしていることに気がついた。修道士と思つた人物は、この教会の司祭であつたと。粗末な修道士服で見間違えたのだった。アリシアは自分の顔が赤くなるのが感じられた。

司祭は「どこで倒れた」と少年に聞いた。その少年は、アリシアの見たところ裕福とはいえそうもない粗末な服を着ていた。司祭は「さあ、姫様、お帰り下さい。ここは、あなたのような身分の方が来るところではありません」

「自然派は、貴族を拒むのですか」

「いえ、ブライトン侯爵家は、祭壇派を擁護しているのでは、なかつたのですか。お立場をお考え下さい。では、病人が出たので、失礼しますよ」と司祭は、呼びにきた少年と礼拝堂を出つて行つた。

一人残されたアリシアも礼拝堂を出て、今度は来る途中に見た教会の裏手にあつた薬草園をのぞくことにした。

アリシアの疑問は、まだ解決せず、漠然と司祭の帰りを待つことになつた。アリシアは、父の死なせたような罪悪感に苛まれていた。もし自分に医学の知識があれば、父は死なずにすんだのではないかという後悔が、アリシアを医学の道へと導くことになるとは、その時のアリシアは、予想していなかつた。

教会の薬草園は、アリシアの心を和ませた。領主館にも薬草園はあつたが、祖母の死後、薬草の世話はアリシアの手をわずらわせることはなかつた。侯爵家の従医マーネド博士は、薬草園の管理は、

園丁に任せきりで、口を挟むことはなかった。そのことにアリシアは特に不満があった訳ではないが、もし、自分にすっかりした医学の知識があれば、父は死なずにすんだのではなかったかという思いは消えなかった。そして、今、病気で倒れたという少年の父親も、自分に医学の知識があれば、何か手助けができたのにと思った。この思いが、アリシアの今後の行動の原動力になるのとはその時のアリシアは考えもしなかった。

司祭はなかなか戻って来なかった。それでもアリシアは、辛抱強く待っていた。ようやく司祭が戻ってきたのは、夏の太陽が傾き始めた頃だった。

「まだ、いらしたのですか」と司祭は、アリシアが待っていたことを驚いていた。

「病人は、いかがでしたか」と尋ねると司祭は渋い顔をした

「ここにある薬草だけでは、気休め程度の治療しかできません。そうだ、姫様にお願ひがあります。領主館で育てている薬草で、いくつか分けていただきたいものがあります。新しいブライトン侯爵にお願ひできますか」

司祭の頼みにアリシアは困ったことになったと思った。この自然派の教会には誰にも告げずに一人でやってきた。司祭の頼みを叔父のライネルに告げればどこへ行っていたか話さなければならぬ。ライネルはアリシアのこの行動は、いい顔をしないだろうと思った。そこで、アリシアはある考えが頭に浮かんだ。

「司祭さま、薬草をお分けするかわりに私に薬草の使い方などを教えていただけますか」

「それは、どういう意味ですか」

「私は治療法を医学を学びたいのです」

司祭は、驚いたような顔をした。それもそうである。当時のアンドローで侯爵令嬢が、医学を学ぶというのは、異例中の異例であった。

「それは、侯爵家の姫にふさわしい学問といえるでしょうか。それ

に残念ですが、自然派の司祭が治療法を教えるのは自然派の信徒で創造主に誓いを立てただけなのです」

「私には、教えられていただけないうことですか」

「申し訳ございません。それが規則なのです」

「わかりました。今日はこれで失礼します」とアリシアはがっかりした気分で、司祭に別れを告げた。意気込んできた行きと違い帰り道は、失望の思いが多かった。

一方、領主館では、アリシアの不在に気がついた母親のアマンダが大騒ぎをしていた。夫をなくしたばかりのアマンダにとってアリシアの存在は大きかった。しかし、新たに侯爵夫人となったベネツトと様々な打合せに忙しくアリシアが外出したことに気がつかなかった。領主館の中にアリシアがいないとアマンダは、ライネルに訴えた。ライネルはアリシアを探すようにと領主館の侍女や使用人たちを近所に送り出した。彼らは、心当たりの場所を当たってみたが、どこにもアリシアの姿はなく、この報告にアマンダは動揺してすずり泣き始めた。夫の死後、アマンダは、今までのおっとりしていた気質は消え失せ、何事にも神経を尖らせるようになっていた。

すでに辺りは日は沈み、暗くなり始めていた。ライネルが、駐屯地に使いを出して、陸軍に搜索を頼もうかと家令のサイラスと話し合い始めた頃、ようやく、アリシアが帰ってきた。

アリシアは、今回の無断外出について、叱責も覚悟していた。だが、母のアマンダを始め、領主館の人々の表情は叱ることより、安堵の色が濃かった。しかし、行き先については、いろいろ尋ねられ、アリシアは、正直に答えることをためらった。自身への叱責は仕方のないことだが、あの自然派の司祭に迷惑がかかるのではないかと心配した。しかし、結局はアマンダの涙に負けて白状させられた。

「自然派の教会ですって。何のために」とアマンダは甲高い声をあげた。

「いろいろ、尋ねたいことがあったからよ」とアリシアは、興奮し

ている母ではなくて、叔父に答えた。

「尋ねたいことってなんだだね」

「いろいろとお父様のことか」とアリシアは言葉を濁らせた。医学的な興味については明言を避けた。

「まあ、自然派も死者に対しては、変わらないと思うね。だが、アリシア、君にはこれから、侍女を一人つけさせてもらうよ。それと当分は外出禁止だ」とライネルは無断外出の再犯防止策に打って出た。そして、アリシアは、司祭に頼まれた件をおおずと持ち出してみた。

「あの、叔父さま、司祭さまが、領主館で育てている薬草を分けて欲しいですって」

「あの自然派の教会にいるのは、司祭なのか。そうか、わかった、その件は、サイラスと相談してから決めよう。ともかく、自然派に近づくのは今はやめなさい。いいね、アリシア」

その時から、アリシアは籠の鳥になった。外出は禁止されていたので、行動範囲は領主館の建物の中と庭ぐらいなものだったが、必ず侍女が一人、ぴったりとついてきた。そして、領主館の人々もライネルの侯爵の認証式とアーノルドの初謁見の準備で余念がなかったが、アリシアへの監視の目も少しも緩まなることもなく、引き継いでいった。行動を監視されることにアリシア自身は特に不便を感じることはなかったが、医学への興味は、失われていなかった。アリシアは、祖母の死後、園丁任せであった薬草園の世話をし始めた。この行為にはアマンドはいい顔をしなかったが、ライネルは、特にとがめだてすようなことはなかった。

そして、アリシアの初謁見は喪が明けるまで延期されるはずだったが、アリシアは、叔父の認証式に出たいと当主となったライネルを説得し始めた。王家の宮殿で執り行われる認証式には、国王への謁見をすませたものだけが出席できる。つまり、同じ日に、アーノルドの初謁見とライネルの認証式そしてアリシアの初謁見が、重なることになる。しかし、これには予想通り母のアマンドが猛反対を

した。

「アリシア、初謁見は喪が明けてからにしましょう。喪服での初謁見なんて聞いたことがないわ」

「あら、アーノルドだって、喪服でしょう。お母様」

「男の子と女の子では、違いますよ。あなたには、きちんとした衣装で、謁見にいつてほしいの」と、アマンドは、夫の生前に計画していたアリシアの初謁見には、侯爵家の面目をかけた豪華な衣装を用意する予定だった。これは、ブライトン侯爵家だけではなく、この貴族も当主の娘の初謁見には手の込んだ衣装を着せる傾向になっていた。それは、貴族界への娘の存在を知らしめる絶好の機会だった。その初謁見の宮殿の控えの間で、領主たちは娘の縁談先を探すことも多々あった。そして、初謁見を祝い事の一つに数えるようになっていた。

「喪服だって、立派な衣装よ。私は、どうしても、叔父さまの認証式に出席したいの。認証式は、喪が明けるのを待つなんてできないでしょう。いいわ、叔父さまがなんとおっしゃるか聞いてみるわ」

兄ジークフリードの跡を継いで当主となったライネルは、多忙を極めていた。それは、領主として、兄の遺産というべき灌漑工事と開墾工事の打合せに大部分の時間を割いていた。アリシアの認証式に出席したいというアリシアの希望は、ライネルにはもつともものように思えた。そして、また喪服以外の衣装を用意したいというを兄嫁のアマンダの意見も捨てがたいものもあった。

「アリシア、衣装が喪服になるけど、いいのかね」とライネルは、再度、アリシアに確認した。

「ええ、それでかまわないわ。叔父さま。それに、今のブライトン家には、豪華な衣装なんて、贅沢だわ」とアリシアは、ブライトン侯爵家の財政事情を加味して答えた。

「アリシア、衣装代のごとは、気にしなくてもいい」

「それに喪が明けたとしても、豪華な衣装なんて着る気にはなれないわ」

「わかった。アリシアが、それでいいのなら、初謁見をしよう」
「ありがとう、叔父さま」という訳で、アリシアの喪服での初謁見が決まった。

エレーヌ王太后の生前には、行儀見習いという習慣があつて、領主の娘たちは王太后の監視のもと、王家の侍女として王家の女性たちに仕えさせるという領主たちにはいささか屈辱的な風習があつたが、王太后の死後は、その風習も領主たちは、無視するものが多かつた。それでも、はじめての謁見のときは男子も女子も式部省の指導を依頼する風習だけはすたれていなかった。

ライネルは、家令のサイラスに式部卿のハルビツキ・サングエム子爵にアリシアの初謁見の連絡をするように命じた。自身の認証式とアーノルドの初謁見はすでに知らせてあつた。ライネルは、知らなかつたが、女性の初謁見の指導は、今は、式部卿夫人のオルガが、熱心に謁見の間での行儀作法を教えていた。本来ならば、王家に仕える女官がするべき役目であつたが、その時点で、女官と呼ぶにふさわしいものはいなかつた。メレディス王女の女官長という職も侍女頭というのが適切であつたであろう。

アリシアが、熱心にライネルの認証式の出席を望んだのは、認証式自体を見たいと思つたこともあるが、王都に行きたいと考えたことも理由の一つでもあつた。王都に行けば、アリシアの疑問に答えしてくれる人間が見つかるのではないかと漠然とした思いがあつた。アリシアはまだ、父の死に納得していなかつた。だが、その思いは、胸にしまわれたままであつた。

ライネルは、武官出身者らしく、一旦決断を下すと行動が速かつた。アリシアの初謁見が決まると、式部卿への連絡に出した使いが戻らないうちに兄嫁のアマンダと当人のアリシアを王都チェンバーへと送り出した。そして、護衛には、第5軍区の第十三師団から、重騎兵を含めた騎兵の一個小隊をつけてもらうという念の入った手配を試みさせた。自身は、工事の打合せを通じて顔なじみとなつた、第5軍区の師団長エルガー少将とともに王都に向かうつもりだつた。

やはり、初謁見のアーノルドは、名付け親で外祖父でもあるカウネルズ少将とともにすでに王都に向かっていた。

アリシアにとって王都は、年一度、母方の祖父母のサリンジャー侯爵夫妻に会うために訪れるだけで、慣れ親しんだ領地とは勝手が違う土地だった。それも、今回は、母親のアマンダと侍女たちだけというのは初めての経験だった。今までは、王都までは、第5軍区の師団長エルガー少将も同行して、軍区を同じくする領主たちも一緒という大人数の旅だったが、少人数でしかも護衛がつくのも初めてのことだった。

ブライトン侯爵家の王都までの宿泊は、例年なら、途中の街道が通っている領地の領主館に泊まるのが、習慣になっていたが、アマンダは領主館には立ち寄らず、街道に面した旅館に泊まった。これも、アリシアには初めての経験だった。護衛の小隊は、持参の天幕に宿泊したが、アマンダとアリシアの泊まる部屋の前に歩哨を立たせることを小隊長は怠らなかった。この丁重な小隊長の気配りにはライネルの依頼もあったが、エルガー少将の命でもあった。軍区を預かる立場から、各領主たちと親好を結ぶのも師団長の役目でもあった。

王都に到着すると、アマンダは、まず、チェンバース公爵の邸宅へと向かった。メレディス女王の次男ヘンダース王子の息子であるレオナルド・チェンバース公爵は、国王ジュルジス三世が貴族に冷淡なのに比べ、貴族たち特に名門貴族たちの味方とあってよかった。アマンダは、侯爵家の当主の妻として、初謁見などの行事などには、ある程度の根回しが必要なのは心得ていた。それにアリシアの初謁見については、すでに夫の生前に式部省に相談してあったので、式部卿夫人であるオルガ・サングエム子爵夫人が初謁見の礼儀作法の指導には当たること、知っていた。チェンバース公爵の邸宅に到着すると、護衛についてきた小隊の小隊長に、式部省に伝言を頼んだ。エルガー少将は、ブライトン侯爵家になじみのある小隊長を選んでいた。

連絡を受けたオルガ・サングエム子爵夫人は、すぐに滞在先のチエンバース公爵の邸宅にやってきた。オルガは、まず、未亡人となったアマンダに弔意を述べると、改めてアリシアに引き合わせられると

「顔立ちは、お父様にかしら」と礼儀にかなった辞儀をした挨拶をしたアリシアを観察した。本来ならば、子爵夫人と侯爵令嬢とはどちらが、身分が高いか論議を呼ぶところであったが、閣僚の大臣夫人であるオルガにアリシアは、敬意を称した挨拶（両手でスカートを少し持ち上げ、右膝を引いて、腰を落とす）をしたことにオルガは満足であった。それに、その動作は、謁見の際に重要な動作であった。

「お辞儀は、まずまず合格だね。後は、歩き方ね」とオルガは早速、仕事に取りかかった。初謁見を迎える娘たちに礼儀作法を指導する役目は、以前は、女官長のキルマ・パラボン侯爵夫人が引き受けていた。女官長を退いて救貧院の院長に就任したメレディス王女が、娘たちの出来を確認する。メレディス王女の点検事項は、礼儀作法だけでなく当日着る衣装から、髪型・化粧法までこと細かく及んでいた。メレディス王女が、許可を出さないと初謁見は、延期ということになる。そのいい例が、エランダ・コンラッド侯爵令嬢だった。彼女は、まだ、謁見をすましていなかった。メレディス王女は、エランダが、王太子の部屋に押し掛けた一件を忘れていなかった。また、オルガも強いてエランダの初謁見の許可をメレディスに求めようとも思わなかった。

アリシアの礼儀作法は、前もってアマンダが仕込んでいたおかげで、オルガ・サングエム子爵夫人は、特に注意点を指摘しなかった。「まあ、だいたいはそれで大丈夫だと思うわ。後は、実際に謁見の間で、お辞儀をする位置を確認すれば、いいわ。無論、女官長のメレディス王女さまが、最終確認をしてお許しが出れば、初謁見がで

きるといふ訳。それは、あさつて、宮殿の正面玄関で、待ち合わせましよう。他にも、初謁見を控えている子たちがいるから紹介をするわ。そういえば、カウネルズ伯爵家とは、縁戚でなかったかしら」「叔母は、カウネルズ伯爵家の出身ですが」とアリシアが答えると「そう、よかつたわ。カウネルズ伯爵令嬢のシルビナが、今回、初謁見なのよ。シルビナとは、顔なじみかしら」

「いえ、あまり、カウネルズ伯爵家とは、お付き合いがないんです」「そう」とだけ、オルガはいった。そして、別れの挨拶をすると慌ただしく帰っていった。

カウネルズ伯爵家は、アーノルド・カウネルズ少将の兄である先代の死後を息子のステファンが継いでいた。ステファン・カウネルズ伯爵は、いささか軽薄な失言をする、身分に不釣り合いな傾向があつた。自身で自覚をしていれば、多少、気をつけるのだが、その自覚が、やや乏しかった。

そのステファンの長女がシルビナだつた。シルビナは、式部卿夫人のオルガにとって、頭の痛い存在だつた。シルビナは、自身の容姿に絶対的な自信を持っていた。その容姿を引き立たせるため、顔の表情や所作にも念入りに気を配っていた。その気の配り方に、女官長のメレディス王女が、いい顔をしないことは目に見えていた。その目をパチパチしたり、腰をくねらすような歩き方は、オルガ自身もあまり感心しないと思つていた。普段、シルビナがどんな立ち振る舞いをしようとオルガには関係がなかったが、謁見の時だけきちんと礼儀作法を守ってくればよかつた。しかし、何度注意をしても、シルビナの妙な癖はなかなか直らなかつた。まあ、シルビナ本人が直そうとする気がなかつたこともある。

シルビナは、オルガの指摘を内心余計なお世話だと思つていた。シルビナは直感的に女性の特有の魅力に気がついていて、その魅力を増すためだけ鏡の前で稽古をしたことだろう。その努力の成果を国王の宮殿で披露しなくて何の意味があるうかとシルビナは思

っていた。

それは、シルビナの大きいなる勘違いといつてもよかつた。伯爵家に立ち寄る駐屯地の若い士官を相手に存分にその魅力を發揮してどぎまぎさせるのは、伯爵令嬢のやるべき行為ではなかつた。オルガはよほど、それは娼婦の仕草だといつてやりたかつたが、娼婦という言葉を口にするには未婚のシルビナの前ではためらわれた。そして、その言葉は、別な意味でシルビナの出生の秘密を暗示していた。

始末が悪いことにシルビナの勘違いは、もう一つあつた。貴族の結婚は、本人の容貌よりも家柄や人柄を重視して決定されることが多い。そして身分が高ければ高いほど特に家柄を重視する。シルビナは自分の伯爵家の当主の娘であることと、何よりも自分の容貌が良縁が呼ぶのではと期待していた。その容貌を貴族たちに見せつけるのが、初謁見の場所だと考えていた。しかし、オルガのいうように振る舞つたら、自分の魅力は半減すると思つていた。

結局、式部卿夫人のオルガはこのシルビナの件を女官長のメレディス王女に相談することにした。案の定メレディスは眉をひそませた。

「口を酸っぱくなるほど、いつても聞いてくれないのよ。多分は、理由は自分が伯爵令嬢で、私が子爵の妻でしかないことにあると思うの」

「わかつたわ、私から、いつてみるわ。それにオルガ、あなたの身分のことだけど、陛下に申し上げて、礼儀作法の指導役の正式な女官ということにしていたたくつもりよ。無論お役名は陛下に考えていただいて、それで、異存はないかしら」

「まあ、女官ということなの」

「そうよ、お役料も出していただくつもり」

「そこまで、していただかなくても」

「いえ、ただ働きなんて、これまで、あなたの好意に甘えすぎてい

たわ。まあ、問題は、あのケチな大蔵卿がなんとというかだけど」といってメレデイスは笑った。オルガは、思わずほっと安堵の息をついた。

今では初謁見を控えた貴族たちは、本番を前に実際に宮殿の謁見の間で、予行演習をすることができた。これは式部卿のハルビツキ・サングエム子爵の提案で始まった風習で、その時は女官長のメレデイスも立ち会い、貴族の娘たちの謁見に必要な動作から、当日の衣装・化粧法まで細かく点検をした。これも女官長の仕事と考えていた。

以前は、母親の今は亡き王太后と女官長の前任者のキルマ・パラボン侯爵夫人が、指導をしていた。その当時は、貴族の女性の初謁見は、行儀見習いを経てからという傾向があつたが、その傾向もやや廃れ始めていた。これは、子爵家出身の現王妃のヘンリエッタを貴族たちが、軽く見ている証拠だとメレデイスは推測していた。王家の威光を示すためのも、謁見をする貴族の娘たちの行儀見習いは是非復活したい風習だし、そして、貴族たちが国王の臣下であるなら、貴族の女性たちも国王の臣下つまりは女官長の管下に置くべき存在であるとメレデイス王女は考えていた。

シルビナ・カウネルズが自分の意見を聞く耳を持たなかつたら、初謁見は延期し、行儀見習いとしてしばらく王宮の自分の監視下に置けばいいのだとメレデイスは見通しを立てていた。そういう意味ではメレデイスは母エレーヌの娘であつた。生前は随分反発もしたが、亡くなつてみるとその思考や行動に賛同できる事も多少ならずともメレデイスにはあつた。

一方、そんな事情も知らないブライトン侯爵家の先代未亡人アマンダと娘のアリシアは、式部卿夫人のオルガ・サングエム子爵夫人が話題にしたカウネルズ伯爵家との今後のつきあい方を相談していた。アマンダは、領地育ちで身分のある同じ年頃の友人に恵まれなかつた娘にシルビナが友人となつてくれればと漠然と考えていたが、

肝心のアリシアは、頭の中は、ある計画でいっぱいだったから、まだ見ぬ又従姉妹に感心を寄せる事などなかった。それでも、侯爵位を継いだ叔父の立場を考え、カウネルズ伯爵家と親密とまではいかないが、礼を失しないような付き合いをすべきなのはわかっていた。

アマンダもアリシアも、問題なのはブライトン侯爵家が名門貴族と呼ばれるメレデイス女王以前の爵位なのに対してカウネルズ伯爵家はメレデイス女王以降に爵位を戴いた”新貴族”の家柄だという事である事は認識していた。それに侯爵と伯爵の身分差もあった。貴族は序列を気にかけるから、侯爵家は侯爵家同士、伯爵家は伯爵家同士で親好を暖める傾向があった。アマンダ自身も侯爵家の出身であった。そんな訳で、ステファン・カウネルズ伯爵の失言癖についての噂をアマンダは、耳にした事もなかったし、その娘のシルビナが身分にふさわしくない立ち振る舞いをする事など思いもかけない事であった。

母とカウネルズ伯爵家の事を話し合いが終わると、アリシアは、王都にやってきた主目的を果たすため早速行動に出た。アリシアの目的は初謁見でもなければ叔父の認証式でもなかった。それは「医学」だった。アリシアが、その目的のために使える時間は限られていた。母の許可を得て、アリシアは王都チェンバーにある聖徒教会の総本山、チェンバー大聖堂に向かった。無論、母に告げたそこを尋ねる理由は、亡き父のための祈りを捧げるためだったし、お供の侍女も同行していた。アマンダは侍女だけではなく、護衛についできた第十三師団の小隊長に同行を頼んだ。

チェンバー大聖堂は、チェンバー家が、王位に就く以前の公爵家時代にその財力を元に建立された。ブライトン侯爵領にある聖徒教会に比べると、その壮大さは、チェンバー家の勢力を如実に現していた。チェンバー大聖堂には、アンドーラの聖徒教会の最高位の総大司教は祭壇派であったが、自然派の最高位もそこにいるはずだとアリシアは検討をつけていた。その人物なら、侯爵領の自然派の司

祭に自分に医学の手ほどきをする許可がだせるのではないかとアリシアは考えていた。アリシアの思いは、父の病死の原因究明より、いつしか医学への道を進みたいという願いに変わっていた。その願いを口に出した事はなかった。だから、アリシアにとって、チエンバー大聖堂へ母親のアマンダが娘と行動を共にしなかったのは、司教か司祭かわからなかったが、自然派の最高位に会う絶好の機会であった。

チエンバー大聖堂の荘厳さは、アリシアの意志が挫けそうになるほどだったが、入口のアーチをくぐると、なおさら、その威圧感に自分がちっぴけな存在に思えた。だが、礼拝堂の祭壇の前に進み、かしくと自然とやさしかった亡き父ジークフリードの面影が浮かび、アリシアは自然と涙が流れてきた。そして、改めて父の病死を防げなかった無念さがこみ上げてきた。

父の冥福を祈る祈りを創造主に捧げ終えると、アリシアは涙を拭き、チエンバー大聖堂にいるはずの聖職者の姿を探した。聖職者はすぐ服装でわかった。その中の一人、あまり地位の高そうに見えない僧侶にアリシアは、どこに行けば自然派の司祭に会えるのかと尋ねた。その僧侶は「用件は何だね」と喪服姿で年若いアリシアに横柄な態度で示した。そこで、自分でも思いがけない事にアリシアは嘘をついた。

「私は、ブライトン侯爵からの伝言を伝えにきたのです。教会にとって大事な用件ですので、なるべく自然派で、一番地位の高い方にお目にかかる必要があるのです」

侯爵という身分とアリシアの毅然とした表情に途端にその僧侶の横柄な態度は消え失せ「わかりました。今、ご都合をお聞きして参りますから」と言って礼拝堂の奥へと立ち去った。

お供の年若い侍女が「姫さま、殿様から、何をたのまれたのですか」と怪訝そうに尋ねた。そしてまた、アリシアは嘘をついた「叔父さまに頼まれた事があるのよ。あなたは、余計な口出しはしないでちょうだい」

アリシアはこの聖なる場所で嘘をついて創造主の怒りを被るかもしれないとふと思ったが、しかし、自分の考えている事が他人を傷つける事でもないと思い直して、これから会うであろう人物への説得の言葉を胸で反芻した。

自然派の最高位は、驚いた事に大司教の地位にいた。彼には、侯爵領にいる自然派の司祭から医学を学びたいというアリシアの願いは聞き届いてはもらえなかった。その許可の条件は、ブライトン侯爵家の自然派への宗旨替えとアリシアの創造主に対する修道誓願であった。聖徒教会の大司教ともなれば、政略的な手段も必要であった。

しかし、母はもちろん、叔父のラオネルにも無断で会いにきたアリシアには、その条件は無理な相談だった。しかし、大司教は「私たちが病気やけがの治療法を学ぶのは、万人に奉仕するためなのです。人の役に立ちたいと言うお考えなら、侯爵家の姫らしい他の方法もございましょう。たとえば、救貧院を創設するとか。ブライトン侯爵領には、救貧院はございますか」

その言葉は、アリシアに大きなヒントになった。王都に救貧院があるのをアリシアは知っていた。そして、救貧院の院長に元女官長のキルマ・パラボン侯爵夫人が、着任している事も、母とサリンジャー侯爵家の祖母ミネビアとのうわさ話で知っていた。アリシア自身はキルマ・パラボン侯爵夫人と直接の面識がなかったが、うる覚えではあったが、祖母のミネビアとは、親交がある事も聞いた事があった。アリシアは宿泊先のチェンバース公爵家の邸宅に戻ると、早速、次の手に打つことにした。アリシアは、パラボン侯爵夫人へ届ける手紙を書き始めた。貴族社会では、縁故が重要視される。アリシアは、パラボン侯爵夫人との細い糸をたぐって、自分の道を開こうとしていた。医学への興味は、いつの間にか医学への道を進むことをアリシアに決意させていた。

アマンダは、まだ、アリシアの決意に気がついていなかった。そ

れは、自身の身の振り方をチェンバース公爵夫人のフェリシアに相談していたからである。侯爵の地位を継いだのが自分の息子ならば、当然のこととしてライトン侯爵家に残るだろう。だが、侯爵を継いだのが義理の弟となると、アマンドの身の上は、微妙な立場になる。実家のサリンジャー侯爵家に戻ることも考慮していた。だが、娘のアリシアの将来を考えるとどちらがいいのかアマンドにはなかなか決断が下せないでいた。

そのようにジークフリード・ライトン侯爵の若すぎる死は、ブライトン侯爵家の人々の運命を変えようとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1843q/>

癒しの手

2011年10月12日15時40分発行